

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集

長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

〈第一分冊〉



(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

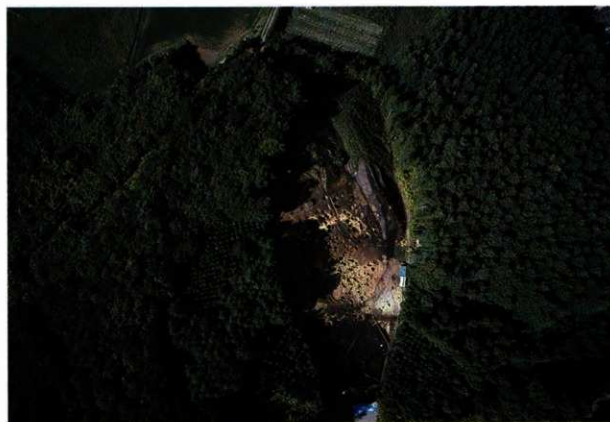
ながくら
長倉 I 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

〈第一分冊〉



遺跡全景（東側上空から）



遺跡全景（上空から、上方が西）



K11住居跡（晩期の大形住居、14～16m）



大形の柱穴状土坑（底面に変色した部分が見られる）



東部捨て場作業風景



噴砂（東部捨て場内、G26～F26グリッド附近）



彩色注口土器



注口土器（後期）



単孔土器（後期）



香炉形土器（後期）



土偶の顔



土偶（後期）



大形の土偶（後期、全長29.8cm、幅14.8cm、厚さ4.7cm）



耳飾り・飾り玉



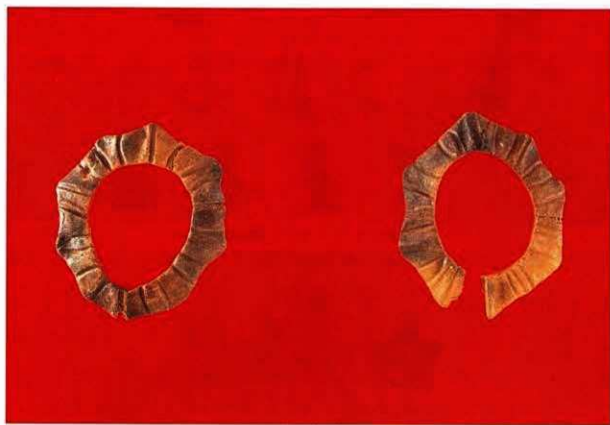
鐺形・スプーン・スタンプ形土製品



腕飾り？



内面溝状土製品 (イモ貝形土製品)



鐙形土製品

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,278箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

本調査の原因となりました広域農道整備事業を例に挙げるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という、相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財の保護の立場にたって、その記録を残す措置を取ってまいりました。

本書は、平成6年度から3年間にわたって発掘調査が行われた、長倉I遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は、北上高地の北端にある南北に長い尾根頂部に立地している縄文時代後期から晩期の集落跡であることがあきらかとなりました。約1000年間に及ぶ長い間に集落が営まれてきたことが明らかとなっております。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました岩手県土木部二戸土木事務所（現岩手県二戸地方振興局土木部）、軽米町教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成12年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例 言

- 1 本書は岩手県九戸郡軽米町大字長倉字一本木10-1ほかに所在する長倉I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、広域農道整備事業関連施設に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会文化課の指導と調整のもとに、岩手県二戸土地改良事業所の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はI F 63-2309、当センターの調査略号はNK I-94、95、96である。
- 4 野外調査の期間、調査面積、担当者は以下の通りである。
平成6年7月1日～11月10日 1000㎡ 中川重紀・酒井宗孝・稲垣雅宏・鎌田精造
平成7年4月11日～9月5日 1004㎡ 中川重紀・工藤利幸・星 雅之・高木 晃・村上 拓・千葉貴子
平成8年4月16日～11月8日 1342㎡ 中川重紀・星 雅之・平澤里香・高橋実央
- 5 室内整理期間、担当者は以下の通りである。
平成6年11月1日～平成7年3月31日 中川重紀・稲垣雅宏
平成7年11月18日～平成8年3月31日 中川重紀・千葉貴子
平成8年11月9日～平成9年3月31日 中川重紀・平澤里香
平成9年4月1日～平成10年3月31日 中川重紀
平成10年4月1日～平成11年3月31日 星 雅之
- 6 出上品の鑑定は次の方々、機関に依頼した。
石器・石製品の石材鑑定 佐藤二郎（長内水源工業）
獣骨類の鑑定 佐々木務
- 7 本報告書の執筆・編集は星 雅之が行った。表は中川が作成したものを星が引き継ぎ加筆・構成した。
- 8 調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）
熊谷常正（盛岡大学）、鈴木恵治（久慈水産高校）、日下和寿（岩手県立博物館）、末光正卓・阿部明義（北海道埋蔵文化財センター）、鎌田裕二（宮古市教委）、原川雄二・山口慶一・山本孝司（東京都埋蔵文化財センター）、稲野裕介（北上市埋蔵文化財センター）、安斎正人・佐藤宏之（東京大学）、大塚達朗（南山大学）、鈴木克彦（青森県立郷土館）、福田友之・木村謙次郎・中村哲也・茅野嘉雄（青森県埋蔵文化財センター）、堀江格（福島市振興公社）、川向聖子（山田町教委）、中村明央（一戸町教委）、松本達速（筑波大学）
- 9 野外調査は軽米町教育委員会をはじめ地元の方々のご協力をいただいた。
- 10 室内整理作業は、下記の方々の協力を得た。
浅沼啓子、浅沼八下代、高橋妙子、吉田美香、菊池貴子、熊谷静江、川原悦子、阿部桂子、佐々木麻巳、阿部敏子、高橋葉子、上關知子、山崎さなえ、内藤佐知子、吉田里和、水口要、藤村憲子、横井内シミ子、白崎理家、吉田加代子、高倉京子、筒井律子、佐々木宏子、岩館富上子、橋本順子、浅沼則子、浅沼光子、滝村テツ子、川村美智子、泉谷久美子、佐々木薫、田村菊代、三上美智、菅原厚子、福土夕紀枝、浅沼美紀、熊谷知恵子、佐藤由美子、桐田欄子、勝政房江、西村美智子、菅原ゆかり、照井歩美、高橋道代、小笠原邦子、本館京子、小笠原千春、吉田育子、高橋実佳、須藤千賀子
- 11 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 12 調査成果は現地公開資料、調査略報、岩手考古学会発表資料ほかに掲載したが、内容は本書が優先する。

目 次

序

例言

<本文>

第I章 調査に至る経過	1	第V章 出土遺物について	185
第II章 遺跡の立地と環境	1	1 土器	185
1 遺跡の位置	1	2 土製品	209
2 地質・地形	2	3 石器	215
3 基本層序	4	4 石製品	218
4 周辺の遺跡	6	5 岩石類	219
第III章 調査方法と整理方法	15	第VI章 遺物の出土分布と接合関係について	489
1 野外調査	15	1 土器	489
2 室内整理	16	2 土製品	498
3 遺物の掲載について	17	3 石器	505
4 トータルステーションについて	19	4 石製品	508
第IV章 検出された遺構	29	第VII章 縄文時代後期～晩期土器の器形について	513
1 住居跡・住居跡状	30		
2 竪立柱建物跡	65	1 深鉢	513
3 炉跡	89	2 鉢	519
4 焼土遺構	90	3 壺	527
5 土坑	94	4 注口土器	538
6 柱穴状土坑	95	5 まとめ	546
7 柱穴列	96	第VIII章 まとめと考察	547
8 集石・立石遺構	161	1 遺構	547
9 溝跡遺構	161	2 遺物	568
10 旧沢跡	162	3 総括	597
11 古地痕跡	167	第IX章 長倉I遺跡出土動物遺存体	601
12 捨て場	168		

◀ 図版 ▶

第 1 図	岩手県内に見る遺跡の位置	7	第 64 図	土坑・柱穴状土坑 (16)	112
第 2 図	周辺地形図	8	第 65 図	土坑・柱穴状土坑 (17)	113
第 3 図	地形分類図	9	第 66 図	土坑・柱穴状土坑 (18)	114
第 4 図	基本基準	10	第 67 図	土坑・柱穴状土坑 (19)	115
第 5 図	調査区各地点の順序	11	第 68 図	土坑・柱穴状土坑 (20)	116
第 6 図	周辺の遺跡位置図	12	第 69 図	土坑・柱穴状土坑 (21)	117
第 7 図	グリッド配置図	21	第 70 図	土坑・柱穴状土坑 (22)	118
第 8 図	凡例	22	第 71 図	土坑・柱穴状土坑 (23)	119
第 9 図	遺構配置図 1	23	第 72 図	土坑・柱穴状土坑 (24)	120
第 10 図	遺構配置図 2	24	第 73 図	土坑・柱穴状土坑 (25)	121
第 11 図	遺構配置図 3	25	第 74 図	土坑・柱穴状土坑 (26)	122
第 12 図	遺構配置図 4	26	第 75 図	土坑・柱穴状土坑 (27)	123
第 13 図	遺構配置図 5	27	第 76 図	土坑・柱穴状土坑 (28)	124
第 14 図	遺構配置図 6	28	第 77 図	土坑・柱穴状土坑 (29)	125
第 15 図	Q12住居跡	29	第 78 図	土坑・柱穴状土坑 (30)	126
第 16 図	K11住居跡 (1)、J12住居跡	31	第 79 図	土坑・柱穴状土坑 (31)	127
第 17 図	K11住居跡 (2)	32	第 80 図	土坑・柱穴状土坑 (32)	128
第 18 図	G11住居跡	36	第 81 図	土坑・柱穴状土坑 (33)	129
第 19 図	G12・I3・H4住居跡	39	第 82 図	土坑・柱穴状土坑 (34)	130
第 20 図	G15住居跡 (1)	40	第 83 図	土坑・柱穴状土坑 (35)	131
第 21 図	G15住居跡 (2)	41	第 84 図	土坑・柱穴状土坑 (36)	132
第 22 図	F10住居跡、F12・J3住居跡	44	第 85 図	土坑・柱穴状土坑 (37)	133
第 23 図	F18住居跡 1号・2号、F19住居跡	47	第 86 図	土坑・柱穴状土坑 (38)	134
第 24 図	E15住居跡 1号・2号	48	第 87 図	土坑・柱穴状土坑 (39)	135
第 25 図	E19住居跡	53	第 88 図	土坑・柱穴状土坑 (40)	136
第 26 図	C16住居跡 1号	54	第 89 図	土坑・柱穴状土坑 (41)	137
第 27 図	C16住居跡 2号	55	第 90 図	土坑・柱穴状土坑 (42)	138
第 28 図	D19住居跡、C22住居跡 1号・2号	56	第 91 図	土坑・柱穴状土坑 (43)	139
第 29 図	C23住居跡 1号・2号、C34住居跡	59	第 92 図	土坑・柱穴状土坑 (44)	140
第 30 図	B21住居跡 1号・2号・3号	60	第 93 図	土坑・柱穴状土坑 (45)	141
第 31 図	B22住居跡 1号・2号	63	第 94 図	土坑・柱穴状土坑 (46)	142
第 32 図	C21竪立柱建物跡	66	第 95 図	土坑・柱穴状土坑 (47)	143
第 33 図	D16竪立柱建物跡 1号	69	第 96 図	土坑・柱穴状土坑 (48)	144
第 34 図	D16竪立柱建物跡 2号	70	第 97 図	土坑・柱穴状土坑 (49)	145
第 35 図	E15竪立柱建物跡	71	第 98 図	土坑・柱穴状土坑 (50)	146
第 36 図	E20竪立柱建物跡	72	第 99 図	土坑・柱穴状土坑 (51)	147
第 37 図	E21竪立柱建物跡	75	第 100 図	土坑・柱穴状土坑 (52)	148
第 38 図	F14竪立柱建物跡	76	第 101 図	土坑・柱穴状土坑 (53)	149
第 39 図	C16竪立柱建物跡	77	第 102 図	土坑・柱穴状土坑 (54)	150
第 40 図	G18竪立柱建物跡	78	第 103 図	土坑・柱穴状土坑 (55)	151
第 41 図	G19竪立柱建物跡	81	第 104 図	土坑・柱穴状土坑 (56)	152
第 42 図	H13竪立柱建物跡	82	第 105 図	土坑・柱穴状土坑 (57)	153
第 43 図	I11竪立柱建物跡	83	第 106 図	土坑・柱穴状土坑 (58)	154
第 44 図	K12竪立柱建物跡 1号	84	第 107 図	土坑・柱穴状土坑 (59)	155
第 45 図	K12竪立柱建物跡 2号	87	第 108 図	土坑・柱穴状土坑 (60)	156
第 46 図	N15竪立柱建物跡	88	第 109 図	土坑・柱穴状土坑 (61)	157
第 47 図	B23絆跡、B24阿跡 1号・2号	91	第 110 図	G23柱穴跡	158
第 48 図	D25絆跡、B19礎土、C19礎土、C23礎土、C25礎土、 C26礎土 1号・2号	92	第 111 図	E19基石	159
第 49 図	土坑・柱穴状土坑 (1)	97	第 112 図	M17石	160
第 50 図	土坑・柱穴状土坑 (2)	98	第 113 図	M13溝状遺構	163
第 51 図	土坑・柱穴状土坑 (3)	99	第 114 図	瓦葺跡	164
第 52 図	土坑・柱穴状土坑 (4)	100	第 115 図	穴地跡	165
第 53 図	土坑・柱穴状土坑 (5)	101	第 116 図	捨て場範囲	166
第 54 図	土坑・柱穴状土坑 (6)	102	第 117 図	東部捨て場土層断面	175
第 55 図	土坑・柱穴状土坑 (7)	103	第 118 図	東部・西部捨て場七層断面	176
第 56 図	土坑・柱穴状土坑 (8)	104	第 119 図	西部捨て場土層断面	179
第 57 図	土坑・柱穴状土坑 (9)	105	第 120 図	土層断面①-1	180
第 58 図	土坑・柱穴状土坑 (10)	106	第 121 図	土層断面②-2	181
第 59 図	土坑・柱穴状土坑 (11)	107	第 122 図	土層断面③	182
第 60 図	土坑・柱穴状土坑 (12)	108	第 123 図	土層断面④	183
第 61 図	土坑・柱穴状土坑 (13)	109	第 124 図	土層断面⑤	184
第 62 図	土坑・柱穴状土坑 (14)	110	第 125 図	土層分層例①	201
第 63 図	土坑・柱穴状土坑 (15)	111	第 126 図	深斜器形分類①	202
			第 127 図	深斜器形分類②	203

第128段	深鉢形分銅器 3	204
第129段	鉢形分銅器	205
第130段	浅鉢形分銅器 1	206
第131段	浅鉢形分銅器 2	207
第132段	注口上蓋形分銅器	208
第133段	上蓋形分銅器	214
第134段	石部分銅器 1 (銅片石部)	220
第135段	石部分銅器 2 (銅製石部)	221
第136段	遺構内出土土器 1	222
第137段	遺構内出土土器 2	224
第138段	遺構内出土土器 3	225
第139段	遺構内出土土器 4	226
第140段	遺構内出土土器 5	227
第141段	遺構内出土土器 6	228
第142段	遺構内出土土器 7	229
第143段	遺構内出土土器 8	230
第144段	遺構内出土土器 9	231
第145段	遺構内出土土器10	232
第146段	遺構内出土土器11	233
第147段	遺構内出土土器12	234
第148段	遺構内出土土器13	235
第149段	遺構内出土土器14	236
第150段	遺構内出土土器15	237
第151段	遺構内出土土器16	238
第152段	遺構内出土土器17	239
第153段	遺構内出土土器18	240
第154段	遺構内出土土器19	241
第155段	遺構内出土土器20	242
第156段	遺構内出土土器21	243
第157段	遺構内出土土器22	244
第158段	遺構内出土土器23	245
第159段	遺構内出土土器24	246
第160段	遺構内出土土器25	247
第161段	遺構内出土土器26	248
第162段	遺構内出土土器27	249
第163段	遺構内出土土器28	250
第164段	遺構内出土土器29	251
第165段	遺構内出土土器30	252
第166段	遺構内出土土器31	253
第167段	遺構内出土土器32	254
第168段	遺構内出土土器品 1	255
第169段	遺構内出土土器品 2	256
第170段	遺構内出土土器品 3	257
第171段	遺構内出土土器品 4	258
第172段	遺構内出土土器品 5	259
第173段	遺構内出土土器品 6	260
第174段	遺構内出土土器品 7	261
第175段	遺構内出土土器品 8	262
第176段	遺構内出土土器品 9	263
第177段	遺構内出土土器品 10	264
第178段	遺構内出土土器品 11	265
第179段	遺構内出土土器品 12	266
第180段	遺構内出土土器品 13	267
第181段	遺構内出土土器品 14	268
第182段	遺構内出土土器品 15	269
第183段	遺構内出土土器品 16	270
第184段	遺構内出土土器品 17	271
第185段	遺構内出土土器品 18	272
第186段	遺構内出土土器品 19	273
第187段	遺構内出土土器品 20	274
第188段	遺構内出土土器品 21	275
第189段	遺構内出土土器品 22	276
第190段	遺構内出土土器品 23	277
第191段	遺構内出土土器品 24	278
第192段	遺構内出土土器品 25	279
第193段	遺構内出土土器品 26	280

第194段	遺構内出土土器27	281
第195段	遺構内出土土器28	282
第196段	遺構外土器 1 (東部捨て場)	283
第197段	遺構外土器 2 (東部捨て場)	284
第198段	遺構外土器 3 (東部捨て場)	285
第199段	遺構外土器 4 (東部捨て場)	286
第200段	遺構外土器 5 (東部捨て場)	287
第201段	遺構外土器 6 (東部捨て場)	288
第202段	遺構外土器 7 (東部捨て場)	289
第203段	遺構外土器 8 (東部捨て場)	290
第204段	遺構外土器 9 (東部捨て場)	291
第205段	遺構外土器10 (東部捨て場)	292
第206段	遺構外土器11 (東部捨て場)	293
第207段	遺構外土器12 (東部捨て場)	294
第208段	遺構外土器13 (東部捨て場)	295
第209段	遺構外土器14 (東部捨て場)	296
第210段	遺構外土器15 (東部捨て場)	297
第211段	遺構外土器16 (東部捨て場)	298
第212段	遺構外土器17 (東部捨て場)	299
第213段	遺構外土器18 (東部捨て場)	300
第214段	遺構外土器19 (東部捨て場)	301
第215段	遺構外土器20 (東部捨て場)	302
第216段	遺構外土器21 (東部捨て場)	303
第217段	遺構外土器22 (東部捨て場)	304
第218段	遺構外土器23 (東部捨て場)	305
第219段	遺構外土器24 (東部捨て場)	306
第220段	遺構外土器25 (東部捨て場)	307
第221段	遺構外土器26 (東部捨て場)	308
第222段	遺構外土器27 (東部捨て場)	309
第223段	遺構外土器28 (東部捨て場)	310
第224段	遺構外土器29 (東部捨て場)	311
第225段	遺構外土器30 (東部捨て場)	312
第226段	遺構外土器31 (東部捨て場)	313
第227段	遺構外土器32 (東部捨て場)	314
第228段	遺構外土器33 (東部捨て場)	315
第229段	遺構外土器34 (東部捨て場)	316
第230段	遺構外土器35 (東部捨て場)	317
第231段	遺構外土器36 (東部捨て場)	318
第232段	遺構外土器37 (東部捨て場)	319
第233段	遺構外土器38 (東部捨て場)	320
第234段	遺構外土器39 (東部捨て場)	321
第235段	遺構外土器40 (東部捨て場)	322
第236段	遺構外土器41 (西側捨て場)	323
第237段	遺構外土器42 (東部捨て場)	324
第238段	遺構外土器43 (東部捨て場)	325
第239段	遺構外土器44 (東部捨て場)	326
第240段	遺構外土器45 (東部捨て場)	327
第241段	遺構外土器46 (東部捨て場)	328
第242段	遺構外土器47 (西側捨て場)	329
第243段	遺構外土器48 (西側捨て場)	330
第244段	遺構外土器49 (西側捨て場)	331
第245段	遺構外土器50 (西側捨て場)	332
第246段	遺構外土器51 (西側捨て場)	333
第247段	遺構外土器52 (西側捨て場)	334
第248段	遺構外土器53 (西側捨て場)	335
第249段	遺構外土器54 (西側捨て場)	336
第250段	遺構外土器55 (西側捨て場)	337
第251段	遺構外土器56 (西側捨て場)	338
第252段	遺構外土器57 (西側捨て場)	339
第253段	遺構外土器58 (西側捨て場)	340
第254段	遺構外土器59 (西側捨て場)	341
第255段	遺構外土器60 (西側捨て場)	342
第256段	遺構外土器61 (西側捨て場)	343
第257段	遺構外土器62 (西側捨て場)	344
第258段	遺構外土器63 (西側捨て場)	345
第259段	遺構外土器64 (西側捨て場)	346

第260図	透橋外土製65 (西部捨て場)	347
第261図	透橋外土製66 (西部捨て場)	348
第262図	透橋外土製67 (西部捨て場)	349
第263図	透橋外土製68 (西部捨て場)	350
第264図	透橋外土製69 (西部捨て場)	351
第265図	透橋外土製70 (西部捨て場)	352
第266図	透橋外土製71 (西部捨て場)	353
第267図	透橋外土製72 (西部捨て場)	354
第268図	透橋外土製73 (西部捨て場)	355
第269図	透橋外土製74 (西部捨て場)	356
第270図	透橋外土製75 (西部捨て場)	357
第271図	透橋外土製76 (西部捨て場)	358
第272図	透橋外土製77 (西部捨て場)	359
第273図	透橋外土製78 (西部捨て場)	360
第274図	透橋外土製79 (西部捨て場)	361
第275図	透橋外土製80 (西部捨て場)	362
第276図	透橋外土製81 (西部捨て場)	363
第277図	透橋外土製82 (西部捨て場)	364
第278図	透橋外土製83 (西部捨て場)	365
第279図	透橋外土製84 (西部捨て場)	366
第280図	透橋外土製85 (西部捨て場)	367
第281図	透橋外土製86 (西部捨て場)	368
第282図	透橋外土製87 (西部捨て場)	369
第283図	透橋外土製88 (西部捨て場)	370
第284図	透橋外土製89 (西部捨て場)	371
第285図	透橋外土製90 (西部捨て場)	372
第286図	透橋外土製91 (西部捨て場)	373
第287図	透橋外土製92 (西部捨て場)	374
第288図	透橋外土製93 (西部捨て場)	375
第289図	透橋外土製94 (西部捨て場)	376
第290図	透橋外土製95 (西部捨て場)	377
第291図	透橋外土製96 (西部捨て場)	378
第292図	透橋外土製97 (西部捨て場)	379
第293図	透橋外土製98 (西部捨て場)	380
第294図	透橋外土製99 (西部捨て場)	381
第295図	透橋外土製100 (西部捨て場)	382
第296図	透橋外土製101 (表探)	383
第297図	透橋外土製1 (東部捨て場) ミニチュア土製	384
第298図	透橋外土製2 (東部・西部捨て場) ミニチュア土製	385
第299図	透橋外土製3 (西部捨て場) ミニチュア土製	386
第300図	透橋外土製4 (西部捨て場・表探) ミニチュア土製	387
第301図	透橋外土製5 (東部捨て場) 土製	388
第302図	透橋外土製6 (東部捨て場) 土製	389
第303図	透橋外土製7 (東部捨て場) 土製	390
第304図	透橋外土製8 (東部捨て場) 土製	391
第305図	透橋外土製9 (東部捨て場) 土製	392
第306図	透橋外土製10 (東部捨て場) 土製	393
第307図	透橋外土製11 (東部捨て場) 土製	394
第308図	透橋外土製12 (東部・西部捨て場) 土製	395
第309図	透橋外土製13 (西部捨て場) 土製	396
第310図	透橋外土製14 (西部捨て場) 土製	397
第311図	透橋外土製15 (西部捨て場) 土製	398
第312図	透橋外土製16 (西部捨て場) 土製	399
第313図	透橋外土製17 (西部捨て場) 土製	400
第314図	透橋外土製18 (西部捨て場) 土製	401
第315図	透橋外土製19 (西部捨て場) 土製	402
第316図	透橋外土製20 (西部捨て場) 土製	403
第317図	透橋外土製21 (西部捨て場・表探) 土製	404
第318図	透橋外土製22 (東部・西部捨て場・表探)	405
第319図	透橋外土製23 (東部・西部捨て場・表探) 飾り玉、ペンダント、彫形土製品	406
第320図	透橋外土製24 (東部捨て場) 彫形土製品	407
第321図	透橋外土製25 (東部・西部捨て場) 彫形土製品、分形彫 土製品、土輪、キノコ形土製品	408
第322図	透橋外土製26 (東部・西部捨て場) キノコ形土製品	409

	スタンプ形土製品、内面凸状土製品、 スプーン形土製品	409
第323図	透橋外土製品27 (東部・西部捨て場) スプーン形土製品、 彫形土製品、土輪、円盤状土製品	410
第324図	透橋外土製品28 (東部・西部捨て場) 円盤状土製品	411
第325図	透橋外土製品29 (東部・西部捨て場・表探) 円盤状土製品、 三角形土製品、その他土製品	412
第326図	透橋外土製品30 (東部・西部捨て場) キノコ土製品	413
第327図	透橋外土製品1 (東部捨て場) 石輪	414
第328図	透橋外土製品2 (東部捨て場) 石輪	415
第329図	透橋外土製品3 (東部捨て場) 石輪	416
第330図	透橋外土製品4 (東部・西部捨て場) 石輪	417
第331図	透橋外土製品5 (西部捨て場) 石輪	418
第332図	透橋外土製品6 (西部捨て場) 石輪	419
第333図	透橋外土製品7 (西部捨て場・表探) 石輪	420
第334図	透橋外土製品8 (東部捨て場) 尖頭器	421
第335図	透橋外土製品9 (東部・西部捨て場) 尖頭器	422
第336図	透橋外土製品10 (西部捨て場・表探) 尖頭器	423
第337図	透橋外土製品11 (東部捨て場) 石輪	424
第338図	透橋外土製品12 (東部・西部捨て場) 石輪	425
第339図	透橋外土製品13 (西部捨て場・表探) 石輪	426
第340図	透橋外土製品14 (東部捨て場) 石輪	427
第341図	透橋外土製品15 (東部捨て場) 石輪	428
第342図	透橋外土製品16 (東部捨て場) 石輪	429
第343図	透橋外土製品17 (西部捨て場) 石輪	430
第344図	透橋外土製品18 (西部捨て場) 石輪	431
第345図	透橋外土製品19 (東部捨て場・表探) 石輪	432
第346図	透橋外土製品20 (東部・西部捨て場・表探) 彫形石輪	433
第347図	透橋外土製品21 (東部・西部捨て場・表探) 彫形石輪	434
第348図	透橋外土製品22 (東部・西部捨て場・表探) 彫形石輪	435
第349図	透橋外土製品23 (東部捨て場) 削器	436
第350図	透橋外土製品24 (東部捨て場) 削器	437
第351図	透橋外土製品25 (東部捨て場) 削器	438
第352図	透橋外土製品26 (東部捨て場) 削器	439
第353図	透橋外土製品27 (東部捨て場) 削器	440
第354図	透橋外土製品28 (東部・西部捨て場) 削器	441
第355図	透橋外土製品29 (西部捨て場) 削器	442
第356図	透橋外土製品30 (西部捨て場) 削器	443
第357図	透橋外土製品31 (西部捨て場) 削器	444
第358図	透橋外土製品32 (西部捨て場) 削器	445
第359図	透橋外土製品33 (西部捨て場) 削器	446
第360図	透橋外土製品34 (東部・西部捨て場) 削器	447
第361図	透橋外土製品35 (西部捨て場・表探) 削器	448
第362図	透橋外土製品36 (東部・西部捨て場) 円形石輪	449
第363図	透橋外土製品37 (東部・西部捨て場) 投入石輪	450
第364図	透橋外土製品38 (東部捨て場) 石弁	451
第365図	透橋外土製品39 (東部捨て場) 石弁	452
第366図	透橋外土製品40 (東部捨て場) 石弁	453
第367図	透橋外土製品41 (東部捨て場) 石弁	454
第368図	透橋外土製品42 (東部捨て場) 石弁	455
第369図	透橋外土製品43 (東部・西部捨て場) 石弁	456
第370図	透橋外土製品44 (西部捨て場) 石弁	457
第371図	透橋外土製品45 (西部捨て場) 石弁	458
第372図	透橋外土製品46 (表探) 石弁	459
第373図	透橋外土製品47 (表探) 石弁	460
第374図	透橋外土製品48 (東部捨て場) 石輪	461
第375図	透橋外土製品49 (東部・西部捨て場・表探) 石輪	462
第376図	透橋外土製品50 (東部捨て場) 石輪	463
第377図	透橋外土製品51 (東部捨て場) 石皿	464
第378図	透橋外土製品52 (東部・西部捨て場) 石皿	465
第379図	透橋外土製品53 (西部捨て場・表探) 石皿	466
第380図	透橋外土製品54 (東部・西部捨て場) 釧石	467
第381図	透橋外土製品55 (西部捨て場・表探) 釧石 (東部捨て場) 磁石	468
第382図	透橋外土製品56 (東部・西部捨て場) 磁石	469

	(東部捨て場) 磨石	469
第383段	遺構外石製品57 (東部・西部捨て場) 磨石	470
第384段	遺構外石製品58 (西部捨て場・表採) 磨石	471
第385段	遺構外石製品59 (表採) 磨石・(東部捨て場) 凹石	472
第386段	遺構外石製品60 (西部捨て場) 凹石	473
第387段	遺構外石製品61 (表採) 凹石・(東部・西部捨て場) 舟石	474
第388段	遺構外石製品62 (東部・西部捨て場・表採) 礮器	475
第389段	遺構外石製品63 (東部・西部捨て場) 岩塊	476
第390段	遺構外石製品64 (西部捨て場) 三角柱状石製品	477
第391段	遺構外石製品65 (東部・西部捨て場) 石剣・石刀	478
第392段	遺構外石製品66 (西部捨て場) 石剣・石刀	479
第393段	遺構外石製品67 (東部・西部捨て場) 石棒	480
第394段	遺構外石製品68 (東部捨て場) 円盤状石器	481
第395段	遺構外石製品69 (西部捨て場・表採) 円盤状石器	482
第396段	遺構外石製品70 (東部捨て場) 棒石製品	483
第397段	遺構外石製品71 (東部・西部捨て場) 棒石製品	484
第398段	遺構外石製品72 (東部・西部捨て場) 棒石製品	485
第399段	遺構外石製品73 (西部捨て場・表採) 棒石製品	486
第400段	遺構外石製品74 (東部・西部捨て場) ベンダント	487
	(西部捨て場) 銅線	488
	(西部捨て場) プラック状石製品	489
	(西部捨て場・表採) 石製未製品	490
第401段	土器出土分布図1	491
第402段	土器出土分布図2	492
第403段	土器出土分布図3	493
第404段	土器出土分布図4	494
第405段	土器出土分布図5	495
第406段	土器出土分布図6	496
第407段	土器出土分布図7	497
第408段	土器出土分布図8	498
第409段	土器出土分布図9	499
第410段	土器出土分布図10	500
第411段	土器出土分布図11	501
第412段	土器出土分布図12	502
第413段	土器出土分布図13	503
第414段	土器出土分布図14	504
第415段	土器出土分布図15	505
第416段	土器出土分布図16	506
第417段	土器出土分布図17	507
第418段	土器出土分布図18	508
第419段	土器出土分布図19	509
第420段	土器出土分布図20	510
第421段	土器出土分布図21	511
第422段	土器出土分布図22	512
第423段	土器出土分布図23	513
第424段	土器出土分布図24	514
第425段	土器出土分布図25	515
第426段	土器出土分布図26	516
第427段	土器出土分布図27	517
第428段	土器出土分布図28	518
第429段	土器出土分布図29	519
第430段	土器出土分布図30	520
第431段	土器出土分布図31	521
第432段	土器出土分布図32	522
第433段	土器出土分布図33	523
第434段	土器出土分布図34	524
第435段	土器出土分布図35	525
第436段	土器出土分布図36	526
第437段	土器出土分布図37	527
第438段	土器出土分布図38	528
第439段	土器出土分布図39	529
第440段	土器出土分布図40	530
第441段	土器出土分布図41	531
第442段	土器出土分布図42	532
第443段	土器出土分布図43	533
第444段	土器出土分布図44	534
第445段	土器出土分布図45	535
第446段	土器出土分布図46	536
第447段	土器出土分布図47	537
第448段	土器出土分布図48	538
第449段	土器出土分布図49	539
第450段	土器出土分布図50	540
第451段	土器出土分布図51	541
第452段	土器出土分布図52	542
第453段	土器出土分布図53	543
第454段	土器出土分布図54	544
第455段	土器出土分布図55	545
第456段	土器出土分布図56	546
第457段	土器出土分布図57	547
第458段	土器出土分布図58	548
第459段	土器出土分布図59	549
第460段	土器出土分布図60	550
第461段	土器出土分布図61	551
第462段	土器出土分布図62	552
第463段	土器出土分布図63	553
第464段	土器出土分布図64	554
第465段	土器出土分布図65	555
第466段	土器出土分布図66	556
第467段	土器出土分布図67	557
第468段	土器出土分布図68	558
第469段	土器出土分布図69	559
第470段	土器出土分布図70	560
第471段	土器出土分布図71	561
第472段	土器出土分布図72	562
第473段	土器出土分布図73	563
第474段	土器出土分布図74	564
第475段	土器出土分布図75	565
第476段	土器出土分布図76	566
第477段	土器出土分布図77	567
第478段	土器出土分布図78	568
第479段	土器出土分布図79	569
第480段	土器出土分布図80	570
第481段	土器出土分布図81	571
第482段	土器出土分布図82	572
第483段	土器出土分布図83	573
第484段	土器出土分布図84	574
第485段	土器出土分布図85	575

第440段	馬場野II遺跡出土土器	576
第441段	小井田IV遺跡出土土器	577
第442段	I 18土坑4号・E 26土坑出土土器	579
第443段	I 17土坑8号・F 12住居跡出土土器	580
第444段	B 21住居跡3号・D 19住居跡出土土器	582
第445段	F 18住居跡1号出土土器	583
第446段	北東北3県に見る縄文時代後期の主な遺跡	588
第447段	早川土器出土の主な遺跡	590
第448段	いも貝土器出土土器	591
第449段	第1・II群土器集成図	605
第450段	第III群1類・I土器集成図	606
第451段	第III群1類-1・I土器集成図	607
第452段	第III群1類-2土器集成図	608
第453段	第III群1類-2・I土器集成図	609
第454段	第III群1類-第II群2類-I土器集成図	610
第455段	第III群2類-I土器集成図	611
第456段	第III群2類-2土器集成図	612
第457段	第III群2類-2・第III群3類土器集成図	613
第458段	第III群3類土器集成図	614
第459段	第III群3類土器集成図	615
第460段	第III群4類土器集成図	616
第461段	第III群4類土器集成図	617
第462段	第III群4類土器集成図	618
第463段	第III群4類土器集成図	619
第464段	第III群5類土器集成図	620
第465段	第III群5類土器集成図	621
第466段	第III群5類土器集成図	622
第467段	第III群5類土器集成図	623
第468段	第III群5類土器集成図	624
第469段	第III群5類土器集成図	625
第470段	第III群5類土器集成図	626
第471段	第III群5類土器集成図	627
第472段	第III群6類-I土器集成図	628
第473段	第III群6類-I土器集成図	629
第474段	第III群6類-I土器集成図	630
第475段	第III群6類-2・I土器集成図	631
第476段	第III群6類-2・I土器集成図	632
第477段	第III群6類-4土器集成図	633
第478段	第III群6類-4土器集成図	634
第479段	第III群6類-第IV群1類-I土器集成図	635
第480段	第IV群1類-2・第IV群2類土器集成図	636
第481段	第IV群2類-2土器集成図	637
第482段	第IV群5類土器集成図	638
第483段	第IV群5類・第IV群6類土器集成図	639
第484段	第IV群5類・第IV群6類土器集成図	640
第485段	第V群土器集成図	641
第486段	土器集成図1	642
第487段	土器集成図2	643
第488段	土器集成図3	644
第489段	土器集成図4	645
第490段	土器集成図5	646
第491段	土器集成図6	647
第492段	土器集成図7	648
第493段	土器集成図8	649
第494段	土器集成図9	650
第495段	動物形・耳飾り・飾り玉・輝石製土製品	651
第496段	分銅形・キノコ形・内面溝状土製品	652
第497段	スプーン形・網形・人面模倣土製品	653
第498段	腕飾り・土輪・円盤状・三角形状土製品	654
第499段	卑土器集成図	655
第500段	釣り下げ形土器集成図	656
第501段	特殊文様土器集成図1	657
第502段	特殊文様土器集成図2	658
第503段	文字状・格子状・網目状の沈澱を施す土器	659

< 表 >

表1	周辺の遺跡	13	表65	土製品(7) 埴り土・耳飾り	721
表2	周辺の遺跡	14	表66	土製品(8) 罎形土製品・分銅形土製品・土鈴・ キノコ形土製品・スクンブ形土製品	722
表3	縄文後期半葉・車孔土器出土・いも貝形土製品山土遺跡	589	表67	土製品(9) スプーン形土製品・鏡形土製品・土鏃・ 三角形土製品	723
表4	作地跡・住居跡状	680	表68	土製品(10) 円盤状土製品	724
表5	土坑・柱穴(1)	681	表69	石器(1) 石鏃	725
表6	土坑・柱穴(2)	682	表70	石器(2) 石鏃	726
表7	土坑・柱穴(3)	683	表71	石器(3) 石鏃	727
表8	土坑・柱穴(4)	684	表72	石器(4) 石鏃	728
表9	土坑・柱穴(5)	685	表73	石器(5) 実器器	729
表10	土坑・柱穴(6)	686	表74	石器(6) 石鏃	730
表11	土坑・柱穴(7)	687	表75	石器(7) 石鏃	731
表12	土坑・柱穴(8)	688	表76	石器(8) 石鏃・異形石器・鏡形石器・鹿角状石器	732
表13	土坑・柱穴(9)	689	表77	石器(9) 削器・鎌器	733
表14	土坑・柱穴(10)	670	表78	石器(10) 削器・鎌器	734
表15	土坑・柱穴(11)	671	表79	石器(11) 削器・鎌器	735
表16	土坑・柱穴(12)	672	表80	石器(12) 削器・鎌器・円形石器・石鏃	736
表17	土坑・柱穴(13)	673	表81	石器(13) 磨製石斧	737
表18	土坑・柱穴(14)	674	表82	石器(14) 磨製石斧	738
表19	土坑・柱穴(15)	675	表83	石器(15) 磨製石斧	739
表20	遺構内土器(1)	676	表84	石器(16) 块人石器・石鏃	740
表21	遺構内土器(2)	677	表85	石器(17) 印石・砥石	741
表22	遺構内土器(3)	678	表86	石器(18) 磨石	742
表23	遺構内土器(4)	679	表87	石器(19) 磨石・円盤状土製品	743
表24	遺構内土器(5)	680	表88	石器(20) 石鏃	744
表25	遺構内土器(6)	681	表89	石器(21) ベンダント・石製土製品・石刀・石剣	745
表26	遺構内土器(7)	682	表90	石器(22) 石鏃・磨器・三角状土製品・刺線器・磨石	746
表27	遺構内土器(8)	683	表91	石器(23) 磨石製品	747
表28	遺構内土器(9)	684			
表29	遺構内土器(10)	685			
表30	遺構内土器(11)	686			
表31	遺構内土器(12)	687			
表32	遺構内土器(13)	688			
表33	遺構内土器(14)	689			
表34	遺構外土器(1)	690			
表35	遺構外土器(2)	691			
表36	遺構外土器(3)	692			
表37	遺構外土器(4)	693			
表38	遺構外土器(5)	694			
表39	遺構外土器(6)	695			
表40	遺構外土器(7)	696			
表41	遺構外土器(8)	697			
表42	遺構外土器(9)	698			
表43	遺構外土器(10)	699			
表44	遺構外土器(11)	700			
表45	遺構外土器(12)	701			
表46	遺構外土器(13)	702			
表47	遺構外土器(14)	703			
表48	遺構外土器(15)	704			
表49	遺構外土器(16)	705			
表50	遺構外土器(17)	706			
表51	遺構外土器(18)	707			
表52	遺構外土器(19)	708			
表53	遺構外土器(20)	709			
表54	遺構外土器(21)	710			
表55	遺構外土器(22)	711			
表56	遺構外土器(23)	712			
表57	遺構外土器(24)	713			
表58	遺構外土器(25)	714			
表59	土製品(1) ミニチュア土器	715			
表60	土製品(2) ミニチュア土器	716			
表61	土製品(3) 土偶	717			
表62	土製品(4) 土偶	718			
表63	土製品(5) 土偶	719			
表64	土製品(6) 土偶・内面溝状土製品・動物形土製品・その他	720			

第Ⅰ章 調査に至る経過

広域農道整備事業軽米九戸地区は、軽米広域営農団地内に設置された農業近代化施設の利用と農畜産物の効率的集出荷を行うため、基幹的農道を東北自動車道まで整備し高速交通体系を確立するものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県二戸地方振興局二戸土地改良事務所（平成10年度改め二戸農村整備事務所）から平成5年4月11日付け第17号「埋蔵文化財発掘の通知について」の文書によって岩手県教育委員会に対して調査依頼（長倉Ⅰ）を実施したのが最初である。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成5年5月26日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」により確認調査（試掘）を行う事となった。

回答を受けた二戸土地改良事務所では、平成5年9月20日付け二十地第188号「平成5年度試掘調査実施予定遺跡に係る現地調査立ち会いについて」の文書で岩手県教育委員会に依頼し、依頼を受けた教育委員会では平成5年9月30日試掘調査を行った。

試掘調査の結果は、平成5年11月16日付け教文第692号により回答があり、発掘調査の必要ありと判断された。

発掘調査については、平成6年2月21日付け教文第944号「平成6年度埋蔵文化財調査事業の実施について」で（財）岩手県文化振興事業団が行う旨通知があった。

発掘調査は岩手県教育委員会の調整により、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成6年度委託事業となった。埋蔵文化財センターと二戸土地改良事務所との間では、平成6年4月10日付けで2,450㎡について委託契約を締結し、平成6年7月1日～同年11月10日まで現地調査を実施した。しかし当初調査対象面積の2,450㎡全域について調査を終了できず、残る1,450㎡と今年度範囲に入っていない部分と合わせて次年度改めて調査することにした。

平成7年度の調査については、平成7年4月1日付けで委託契約を締結し、前年度の残り1,450㎡と新規に調査範囲に含まれた850㎡の合計2,300㎡について、平成7年4月11日～同年9月5日まで現地調査を実施した。今年度も調査範囲全域についての調査を終了できず、1,296㎡が次年度に残ることとなった。

平成8年度の調査については、平成8年4月1日付けで委託契約を締結し、前年度の残り1,296㎡と新規に調査範囲に含まれた46㎡の合計1,342㎡について、平成8年4月10日～同年11月8日まで現地調査を実施し、調査範囲全域の調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

長倉Ⅰ遺跡の所在する軽米町は岩手県北部、北上山系の北端部に位置し、雪谷川の河岸低地に発達した町である。国土地理院発行の5万分の1地形図によると、本遺跡は北緯40°21'28"、東経141°29'33"付近となり、軽米町役場の北東約4.4km、瀬月内川と雪谷川の合流地点から東に約2.2kmの地点に位置する。遺跡は南北方向に舌状に延びる尾根の丘陵平州部から中腹の斜面部にかけて立地し、標高は285～297mである。遺跡の西側には長倉の集落が見渡せ、遠方には名久井岳や八甲田山が眺望される。遺跡の現況は山林、原野で、以前には畑地として利用されていた時代もあり、地形が改変を受け段上になっている場所もある。

本遺跡の周辺では当里蔵文化財センターにより、昭和54年に「長倉NO14遺跡」、昭和55年に「長倉遺跡」の調査が行われているが、遺構・遺物ともに少量の出上であった。また調査地点は不明であるが、鈴木孝志氏により昭和39年5月に「明神下遺跡」(註1)が調査されている。「明神下遺跡」は、『腰内遺跡調査報告書』中にもふれられている縄文時代後期初頭～晩期初頭にかけての遺物が出土した遺跡であるが、岩手県遺跡台帳にも登録がなく、その所在地は未だ不明である。『長倉遺跡発掘調査報告書』を参照すると、「明神下遺跡」調査参加者からの聞き取りなどから推測して本遺跡調査区外の南側斜面部あたりが該当する可能性が高いらしい。

その他としては、本遺跡の西500mに位置する長倉小学校から、過去に晩期の遮光器土偶などが出土しており、その一帯には縄文時代後～晩期の遺跡(集落跡)が存在する可能性が極めて高い。

2 地形・地質

(1) 地形

軽米町の所在する北上山地は、南北に延びる紡錘形を呈する高原状の山塊で、北端は青森県八戸市、南端は宮城県牡鹿半島で、岩手県の東側に広がり県面積のおよそ3分の2を占める。この山地は中央部の標高が最も高く、北方と南方は次第に低くなる。軽米町は上記した北上山地の北部に位置し、東に久慈平岳(706m)、南に鷹岳(567m)、西に折爪岳(852m)などに囲まれた丘陵地で、この丘陵地を開折しているのが、瀬月内川と雪谷川である。この2つの河川について若干説明すると、瀬月内川は、葛巻町北部の多々良山と山形村の平庭岳・明神岳の間付近が水源で、九戸村を縦貫し、軽米町の山内・晴山・高家を通る。全長は約49kmである。対して雪谷川は、九戸村雪屋と山形村日野沢の境にある丘陵付近が水源で、軽米町に入り円子・小軽米・増子内を通り、町中心を抜ける。全長約31kmである。この2つの河川は、軽米町北部の火島地内で合流し、更に水吉を過ぎて青森県に入り新井田川となって、更に北流して八戸湾に注ぐ。

この2つの河川とその支流によって開折された沖積地に現在の集落は広がっている。

(2) 地質

軽米町の地質については、佐々木嘉直氏が『吠屋敷I b遺跡発掘調査報告書』中で詳しく触れており、同報告書を参照して記述する。

瀬月内川及び雪谷川沿いには、北上山地北部型古生層が、北西から南東方向の走向で垂直に近い地層傾斜で分布する。粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩を主体としている。古生層分布地域より西部には第三紀砂岩を主体とする北西に緩く傾斜する下斗米層及び末の松山層が広く分布している。上位は新期火山岩類によって被覆されている。軽米町の丘陵地の大部分は、十和田・八甲田系と推定される新期火山砕屑物に被覆されている。十和田火山を中心とする火山灰層年については大池昭二氏(1972年、1973年など)の研究があり、更新世(洪積世)の火山灰には、古い方から天狗平火山灰(模式地 八戸市天狗平)、高館火山灰(模式地 八戸市高館)、八戸火山灰(模式地 八戸市根城)がある。完新世(沖積世)の火山灰には、古い方から二ノ倉火山灰(模式地 青森県新郷村)、南部浮石(模式地 青森県南部町)、中振浮石(模式地 青森県十和田市中振)、十和田b降下火山灰(模式地 新郷村迷ヶ平)、十和田a降下火山灰(模式地 新郷村二ノ倉ダム付近)がある。

『吠屋敷I b遺跡発掘調査報告書』の記述にある完新世火山灰の中で、本遺跡から検出された火山灰は、

古い順に南部浮石、中振浮石、十和田b降下火山灰、十和田a降下火山灰の4種である。それらの火山灰の噴出年代については、最近の火山灰研究の成果が述べられている『火山灰アトラス』を参照して記述する。

南部浮石（地元ではゴロタと呼ばれている）は、縄文時代早期中葉期の降下と推定される。

中振浮石（地元ではアズナと呼ばれている）は、縄文時代前期前葉期の降下と推定されているが、大木式及び円筒下層式のどの型式と前後関係になるのか明確な解決をみていない（註2）。今後に究明を求められる研究課題の一つと思われ、今後の調査成果に期待したい。

十和田b降下火山灰は、弥生時代後期に降下したものと捉えられている。若手県北部の遺跡発掘では、頻繁に見られる火山灰の一つであるが、詳細な噴出年代がはっきりとはわかっていないように思われ、併せて土器型式との前後関係についても研究が進んでいない部分である。その原因として、十和田a降下火山灰や中振浮石と比較すると分布範囲も狭く、純層的な堆積が少ない（若手県内ではほとんど見られない）ことがあげられよう。また該期の遺跡が、東北地方北部に少ないこともあり、年代測定を行った事例が少ないことも併せてあげられよう。

十和田a降下火山灰は、AD915年前後に降下したものと捉えられている。古代の遺構検出のキーとなる場合が多い。なお、本遺跡からは検出されていないが、十和田a降下火山灰より上位にのる朝鮮半島を起源とする白頭山火山灰が、本遺跡の1km程北に位置する「長倉V遺跡」や3km程西に位置する「大島I遺跡」、「大島II遺跡」から検出されている。

更新世のテフラについては、本遺跡から旧石器時代の遺物が出土していないことから、詳細な観察や同定は行わなかった。本遺跡に見られる八戸火山灰は、地点によっては上位と下位の2区分される様相を示す。推測の域を越えるものではないが八戸火山灰上位として捉えた内には、二ノ倉火山灰であった部分が含まれていた可能性がある。また、八戸火山灰下位の大不動浮石流凝灰岩や高館火山灰については、注記に記述（大不動は「TO-of」、高館は「TO-t」と記載している）したが、その区分や同定は明確ではない。

〈註〉

（註1） 「明神下遺跡」について『軽米町史』を参照して記述する。昭和39年5月2日～5日まで軽米町大字長倉第四地割92併称「明神下」を、鈴木孝志氏が調査を行った遺跡である。同遺跡からは、十層内IV～V式の良好な資料や、加曾利B式研行の土器とその下から大湯式土器が出土したほか、大洞B-C式土器や石器が出土している。鈴木孝志氏については、医学院大学史学科を卒業した考古学研究者で、昭和36年に軽米高校に教諭として赴任し、当時軽米高校郷土研究会を指導しながら同町内の遺跡を精力的に回られていた方で有られる。鈴木孝志氏は若くしてお亡くなりになっているため、その調査地点は不明（曖昧）のままである。長倉I遺跡の発掘調査を主に担当した中川は、「出土遺物の状況やそのあり方からみて、今回の調査区域の南側調査区外（「長倉遺跡調査報告書」の記述）ではなく、調査区北西側付近（本稿で西部掘場と呼称した空間内あるいはその続き）がそれに該当する可能性がある」と推測している。なお、「明神下遺跡」の出土遺物は、昭和48年軽米高校に赴任した鈴木恵治教諭（『軽米町史』編集委員で現久慈水産高校教頭）が同校郷土クラブの顧問となり、その遺物整理を試みながら、作業途中で転出したため未整理のままとなっている。その一部の遺物は、若手県立博物館に保管されている。

（註2） 土器型式（大木式土器）と中振テフラの関係について、問題提起もかねて記述しておきたい。筆者は山田町「沢田I遺跡」の第4次調査（1997年）を行った際に、中振テフラが埋土上位～下位に堆積する（テフラの厚層は10～30cm程の住居跡が多く、良好な堆積様相であった）住居跡を多数検出し、精査する機会に恵まれた。同テフラがブライマリーかどうかの問題は、住居跡の床面から出土した土器の主体は、現在の考古学的見地からは大木1～2a式に相当する土器で、大木2b式に比定される土器が含まれているかどうかについては筆者の眼力からは同定できなかった（所見としては、S字状通鎖沈

文を施す土器が出土した住居跡は、埋土中に同テフラが層を成して堆積していると言うより、ブロック状に埋土上部に混入する場合が多かったように思う。「沢田Ⅰ遺跡」の現地説明会の際に、最近の発掘成果から中腹テフラが大木Ⅰ式より新しく、大木Ⅲ式より古く、大木Ⅱ式との新旧（遺跡によって異なった出土状況を示すらしい）が不明であると熊谷常正盛岡大学助教授からお聞きした。また、最近同テフラを埋土中に含む住居跡が、遠野市の「新田Ⅱ遺跡」と北上市の南部工業団地関連の遺跡発掘調査から相次いで検出されている。中腹テフラと大木式土器との上下関係解明の資料となる可能性がある。上述した3遺跡に見られる中腹火山灰は、いわゆる県北で「アズナ」と呼ばれるような砂状を呈する浮石粒ではなく、肌色～黄色の粉状あるいは粘土化したテフラで、比較的堅密である場合が多いようである。

円筒下層式土器と中腹テフラの関係については、中腹テフラとの上下関係を示す最新の発掘成果に筆者が乏しいため、言及が難しい。参考までに二戸市の「中腹遺跡」から円筒下層a式を出土した下位から中腹テフラを検出した遺構の報告例がある。

〈参考引用文献〉

岩手県農政部北上山系開発室（1979年）『土地分類基本調査「三戸・勝上岳」』

（株）長谷川地質事務所（1981年）『北上川流域地質図（二十万分の一）説明図』

大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米合伸之（1966年）『馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰』『第四紀研究第5巻第1号』

町田洋、新井房雄（1992年）『火山灰アトラス』東京大学出版会

佐々木高直（1983年）『臥室敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業庁埋蔵文化財調査報告書第63集

木戸川俊子（1998年）『大島Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業庁埋蔵文化財調査報告書第270集

3 基本層序

長倉Ⅰ遺跡の立地する地形は、尾根の丘陵平坦部から中腹の斜面地で、調査区の現況は山林であるがその以前は畑地として利用されていた土地である。

発掘調査初期の段階で、第5図に示した17カ所にトレンチを入れ標準層序の確認を行った。調査区中央部に広がる平土地と調査区の東西にある斜面地では堆積土層に若干の違いが見られるが、概ね第4図のような堆積順を示す。基本的に十和田を起源とする各時期のテフラを指標とした。

基本層序と遺構との関係について、大部分の遺構は黒色土中で検出し、精査についても柱穴状土坑などのように特出して深い遺構を除き、壁・床が南部浮石粒層や八戸火山灰層まで掘り込まれていない場合が多い。検出・精査の作業は、移植ベラの感覚といった抽象的な手掛かり以外に黒色土中に含まれる南部浮石粒の含有率の違いを見極める必要があった。黒色土中の南部浮石粒の含有率の違いについては、わずかな違いであり、地山に相当する黒土についても多い場合と少ない場合の両者があった。例として、東部捨て場で検出されたB21住居跡3号の場合は、検出面・壁・床面とも黒色土であったが、基本層序的には検出面がⅢ層、壁はⅢ～Ⅴ層、床面はⅤ層と言うように違いがある。ただし、実際の精査時は平面的に違いを見極めるのは非常に難しく、埋土の部分が地山の部分より南部浮石粒の含有率が若干少ないといった様相で、小形の堅穴であったがかなりの時間を費やした。南部浮石粒の含有率の違いから遺構を同定して発掘調査を行った遺跡は、過去に同じ軽米町内で調査を行った大日向Ⅱ遺跡なども同じ様相であったように記憶しているし、南部浮石粒の分布が確認される地域（主に県北地方）には比較的多いのではないだろうか。地形の傾斜角度による作用や人為層か自然層かの違いによるものと思われるが、要因（メカニズム）ははっきりわからなかった。県

北地方で行う発掘調査に際しては、今後も上記のような内容検討も含めて観察を行っていきたいと思っている。

- I層 黒色土シルト層 表土・盛土・耕作土を一括する。層厚は、所々で1mを越える盛土が見られるが、平均すると20～50cm程である。平坦地付近からは遺物の出土が少なかったが、捨て場の上部付近は遺物包含層(III層)が耕作などにより二次堆積を示し、遺物も相当量含まれる。
- II層 黒褐色土シルト層 層厚は10～30cm程である。局所的に十和田a火山灰・十和田b火山灰が含まれる。十和田a火山灰は、主に斜面下位部分などに粉あるいは粘土化したブロック状に堆積が見られる。十和田b火山灰は、主に住居跡や柱穴状土坑などの埋土中や緩斜面地の窪地部分などに白色の粒状のものが確認される。両火山灰ともプライマリーな堆積様相ではなく、また両者の上下関係を示す堆積状態の地点もほとんどない。本層の遺物の混入量は比較的少ない。
- III層 黒褐色土シルト層 層厚は30～250cmである。南部浮石粒が3～5%程含まれる。縄文時代後～晩期の遺物包含層で東西の斜面地を中心に分布する。
- IV層 黒褐色土シルト層 層厚は20～40cmである。中礫浮石粒の二次堆積が確認される層で、南部浮石粒が5～7%含まれる。主に傾斜の緩い斜面部分や斜下方に分布が見られ、平坦地や傾斜の急な斜面部分には見られない。同層上位で縄文時代前期の遺物を少量含む。
- V層 黒褐色土シルト層 層厚は50～150cm程である。全般に堅く締まる。南部浮石粒が15%程含まれる。遺物は皆無である。
- VI層 暗褐色～黒褐色土シルト層 層厚は10～50cm程である。南部浮石粒が20%以上含まれる。V層とVII層の漸移層的な層に相当する。
- VII層 明黄褐色～黄褐色南部浮石粒層 層厚10～80cm程である。調査区中央平坦地や一部調査区南側斜面地においては、人為(縄文人による)の削平を受けたと判断され、分布が確認できない。東西の斜面地においては、黒褐色土を剥がした段階では比較的良好に見られる。
- VIII層 褐色～暗褐色十八戸火山灰層 調査区中央平坦地では、本層を削り込んで遺構が構築されている。上層と下層の様相が異なって検出される部分があるが、遺物の出土に関わらなかったことから明確な区分は行っていない。上層は黒色を呈し、浮石粒が少量混入するロームで、混入されている浮石粒は本層上位に堆積する南部浮石粒が混在したものである。下層は明褐色～褐色土を呈するローム層で、層厚も厚い部分が多い。なお、厳密には同定できなかったが、上層は二ノ倉火山灰である可能性がある。
- IX層 明黄褐色～灰白色 砂質土～ローム 十和田起源の火山灰と思われる。調査区中央平坦地で検出された柱穴状土坑の中で、際立って深く掘り込まれているものは、上位砂質土、下位白色土(大不動浮石流凝灰岩?)まで達しているものがある。
- X層 浅黄褐色 ローム 高館火山灰相当と推定される。遺構の精査に関わりが少なかったことから、本層下位の火山灰の観察を軽視したが、さらに古期の火山灰(天狗平火山灰相当?)が数枚(紫っぽい火山灰や炭の混入される火山灰などが、深い柱穴状土坑の側面や底面で観察された)見られた。
- XI層 岩盤 褐色の粘土質土で非常に堅く、小角礫が含まれる。調査区北側のL21～L22グリッド付近で顕著に見られることから、斜面上方など火山灰が流入しやすい部分に見られると判断される。集石遺構に使用された礫は、本層に見られる礫と思われる。

4 周辺の遺跡

軽米町内の遺跡は、若手県教育委員会文化課遺跡台帳によると、402カ所余りが登録されており、遺跡の宝庫として古くから知られている。

本稿では、『大島Ⅱ遺跡発掘調査報告書』の中で木戸口俊子氏がまとめた「周辺の遺跡」を参照とした。また、第6図の周辺の遺跡図及び第1～2表の周辺遺跡分布表には、軽米町に隣接する青森県南郷村の遺跡の中で本遺跡の主体である縄文時代後期の主な遺跡を併せて挙げた。

軽米町での発掘調査は昭和39年に鈴木孝志氏他により板橋遺跡、下野場遺跡、明神下遺跡の調査が始められるが、本格的な調査は東北自動車道開通から始まる。

縄文時代草創期・早期の遺跡について、唯一馬場野Ⅱ遺跡から草創期と見られる土器と土坑が早期の堅穴状遺構とともに検出されている。また、十弓Ⅰ遺跡からは早期後半の土器とともに土坑5基が検出されている。他の遺跡においても早期の上器片が出土する事例はあるが、遺構が検出されることは稀である。

縄文時代前期に入ると、遺跡数が増え始め、叭屋敷Ⅰa遺跡では堅穴住居跡、叭屋敷Ⅰb遺跡では大形のフラスコ状土坑が、大日向Ⅱ遺跡(第2～5次調査)では長軸が14m前後と考えられる大形住居跡が検出されている。

縄文時代中期以降の遺跡の増加は顕著であり、特に中期末～後期にかけては大規模な集落遺跡が増えてくる。馬場野Ⅱ遺跡や君成田Ⅳ遺跡、叭屋敷Ⅰa遺跡、大日向Ⅱ遺跡などが有名である。中期終末期の住居跡が30棟以上検出されている叭屋敷Ⅰa遺跡は住居に伴う青龍刀形石器も出土している。君成田Ⅳ遺跡では、縄文時代後期の住居跡が44棟、駒板遺跡では34棟検出している。

縄文時代晩期に入ると前述の駒板遺跡で晩期の住居跡8棟、君成田Ⅳ遺跡で5棟が検出されたのを始め、馬場野Ⅱ遺跡、大日向Ⅱ遺跡などがあり、板橋沢遺跡では大形の土版が出土している。

弥生時代の遺跡では、11棟の住居跡が検出された馬場野Ⅱ遺跡や和当地遺跡がある。

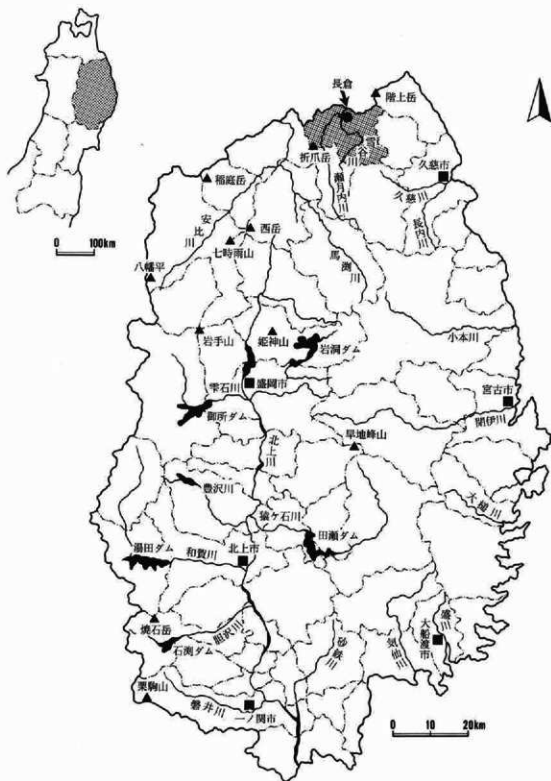
その後の時代においては徐々に遺構数は減少していくが、叭屋敷Ⅰa遺跡、君成田Ⅳ遺跡、駒板遺跡などについては古代～平安時代にかけての遺構、遺物を出土している。徳楽寺では平安時代後期の薬師如来坐像、脇侍日光菩薩立像などが収められている。

軽米町の遺跡は大規模な集落跡であることが多く、また長い間にかけて生活が営まれたと見られる複合遺跡がほとんどである。

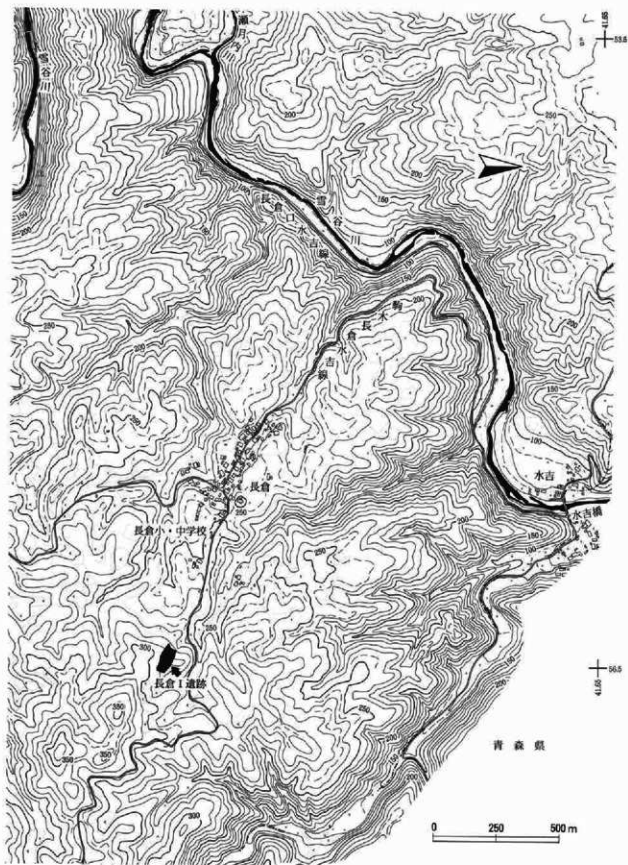
本遺跡の主体となる後～晩期の遺跡の分布については、第Ⅷ章で若干述べることとする。

〈参考文献〉

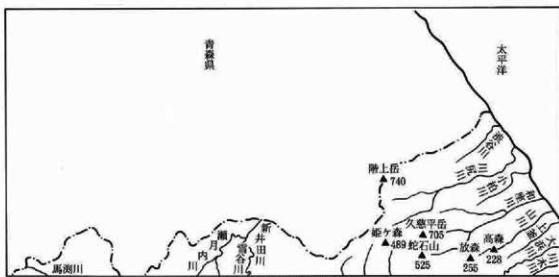
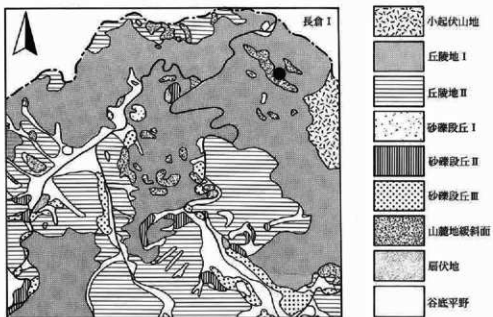
木戸口俊了(1998年)『大島Ⅱ遺跡発掘調査報告書』若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第270集



第1図 岩手県内に見る遺跡の位置

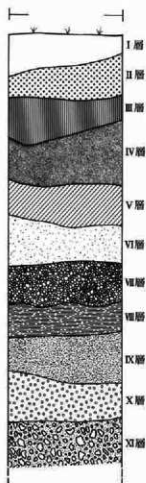


第2図 周辺地形図



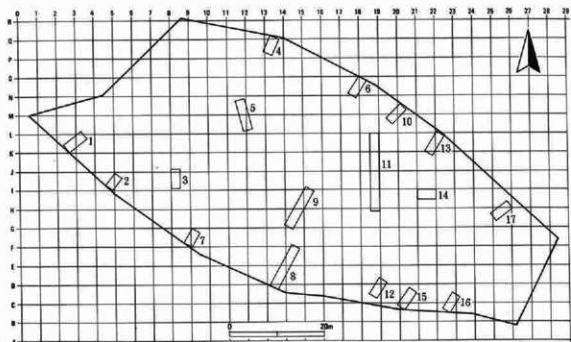
「主要河川並びに主要山岳図」

第 3 図 地形分類図



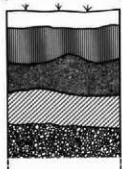
第4図 基本層序

- I層 黒色シルト 表土・盛土・耕作土、層厚20~100cm
- II層 黒褐色土シルト 十和田a火山灰・十和田b火山灰混入層、層厚10~30cm
- III層 黒褐色土シルト 縄文時代後~晩期の遺物包含層、層厚30~250cm、南部浮石粒3~5%含有
- IV層 黒褐色土シルト 中振浮石粒混入層、層厚20~40cm、南部浮石粒5~7%含有、III層との漸移層~本層上位で円筒下層d式出土
- V層 黒褐色土シルト 層厚は150~150cm、南部浮石粒約15%含有、遺物皆無
- VI層 暗褐色~黒褐色土シルト V層とVII層の漸移層、層厚は10~50cm、南部浮石粒は20%以上含有、無遺物層
- VII層 明黄褐色~黄褐色南部浮石粒層（ゴロタ層）層厚10~80cm
- VIII層 褐色~暗褐色土ローム（八戸火山灰層）上位と下位に二分される、局所的に浮石混入
- IX層 大不動浮石流凝灰岩
- X層 高館火山灰~天狗平火山灰相当
- XI層 岩盤 褐色の粘土質土に小角礫が混入、非常に堅密



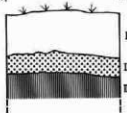
第2トレンチ

東— L=291.900 m —西



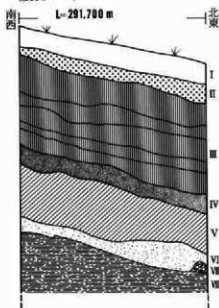
第8トレンチ

東— L=297.500 m —西



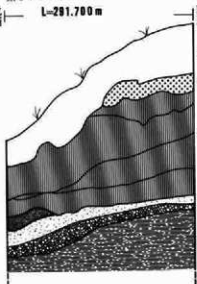
第16トレンチ

南— L=291.700 m —北



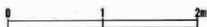
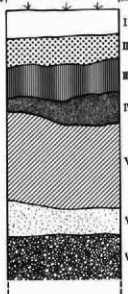
第5トレンチ

北— L=291.700 m —南

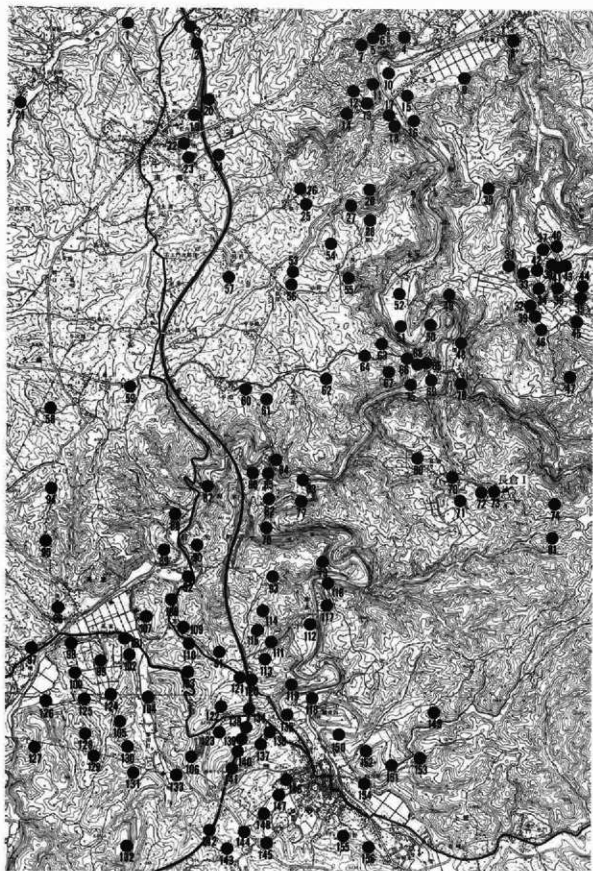


第15トレンチ

東— L=293.900 m —西



第5図 調査区各地点の層序



第6図 周辺の遺跡位置図

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代	文献
1	下流	散布地	縄文土器	縄文(前)	
2	馬場(遺跡)	遺構跡	縄文土器	縄文(前・後・晩)	青森県文書70集
3	馬場(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)	青森県文書70集
4	馬場(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
5	赤坂(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
6	赤坂(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(晩)	
7	赤坂(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後)	
8	赤山	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
9	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)	
10	赤倉	散布地	土器・土師器・人骨	縄文(前・後・晩)、平安	青森県文書第8集
11	赤山	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)	
12	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
13	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)、平安	
14	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
15	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)、弥生	青森県文書第10集
16	野原	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
17	二代(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
18	二代(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
19	石ノ原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)、平安	青森県文書第9・10集
20	石ノ原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・晩)	青森県文書第9集
21	八幡(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
22	下市野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
23	下市野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
24	二倉山	散布地	縄文土器(後・晩)、土器	縄文(後・晩)	青森県文書第9集
25	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
26	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
27	野原(遺跡)	散布地	縄文土器、石皿、磨石、土師器	縄文(後・晩)、古墳	
28	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・晩)	
29	高田(遺跡)	散布地	縄文土器(前)	縄文(前)	
30	野原(遺跡)	散布地	縄文土器(後・晩)	縄文(後・晩)	
31	田ノ上	散布地	縄文土器、石斧	縄文(前・晩)	青森県文書第5集
32	田ノ上(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(中・後・晩)	
33	堀下(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(中・後・晩)	
34	堀下(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・晩)	
35	堀下(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(後・晩)	
36	堀下(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・中)	
37	外山(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後)、平安	
38	外山(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	
39	外長根	散布地	縄文土器、土師器	縄文(後・晩)	
40	外長根(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	青森県文書第4集
41	外長根(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(中・後・晩)	青森県文書第4集
42	外長根(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(中・後・晩)	青森県文書第4集
43	野原	散布地	縄文土器	縄文(前)	
44	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前)	青森県文書第4集
45	沖水	散布地	縄文土器	縄文(後・晩)	
46	野原(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(後・晩)	
47	野原(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧、土師器	縄文(後・晩)	
48	野原(遺跡)	散布地	縄文土器(前・後)、石斧、石皿	縄文(前・後)、弥生、奈良、平安	青森県文書第161・178・187・211集(共)
49	野原	散布地	縄文土器(中・後)、土師器	縄文(中・後)、古墳	青森県文書第138集
50	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(前・後)	青森県文書第151集
51	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文、平安	
52	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文、平安	
53	野原(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(後・晩)	
54	野原(遺跡)	散布地	縄文土器、石斧	縄文(後・晩)	
55	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	
56	野原(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	
57	野原(遺跡)	散布地	土師器	縄文(後・晩)	
58	大森(遺跡)	散布地	縄文土器(後・晩)	縄文(後・晩)	
59	大森(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文(中・後・晩)	
60	大森(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	
61	大森(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	
62	大森(遺跡)	散布地	縄文土器	縄文	
63	木立	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器	縄文、弥生、平安、近代	青森県文書第45集
64	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
65	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
66	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
67	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器、土師器	縄文(前・後)、弥生	青森県文書第119集
68	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文(前)	
69	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
70	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器(後)	縄文(後)	
71	木立(遺跡)	集落跡	土師器、土器	弥生	
72	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文(前)	青森県文書第25集
73	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器、土器	縄文(後・晩)	青森県文書第25集
74	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
75	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器(後)	縄文	青森県文書第21集
76	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器(前・後)、弥生土器	縄文(前・後)、弥生	青森県文書第21集
77	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文・平安	
78	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
79	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
80	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文(後・晩)	
81	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	
82	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器(後)、土師器	縄文(前・後)、平安、古墳	青森県文書第200集
83	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器、石斧	縄文(前・後)、弥生	青森県文書第270集
84	木立(遺跡)	集落跡	縄文土器	縄文	

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代	文献
85	大島IV	散布地	縄文土器	縄文	
86	大島V	散布地	縄文土器	縄文	
87	下尾田I	散布地	縄文土器(後・晩)	縄文	
88	下尾田II	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
89	尾田、小松原	散布地	縄文土器	縄文	
90	尾田IV	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
91	尾田III	散布地	縄文土器	縄文	
92	下尾田I	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
93	下尾田II	散布地	縄文土器	縄文	
94	湯沢I	散布地	縄文土器	縄文	
95	湯沢IV	散布地	縄文土器	縄文	
96	湯沢東V中II	散布地	縄文土器	縄文	
97	上瀬山V	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
98	新木田I	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
99	新木田II	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
100	新木田IV	散布地	土器類	平安	
101	西家原	竊跡跡	鉄、手環	中世	
102	外川I	散布地	縄文土器	縄文	
103	外川II	散布地	縄文土器、土器類	縄文	
104	外川III	散布地	縄文土器	縄文	
105	外川IV	散布地	縄文土器	縄文	
106	外川V	散布地	縄文土器	縄文、平安	
107	外川VI	散布地	縄文土器	縄文	
107	西家中山山I	散布地	縄文土器	縄文	
108	西家中山山II	散布地	土器類	平安	
109	西家II	散布地	縄文土器	縄文、平安	
110	新堀田II	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
111	坂ノ上	土器類	縄文土器(後・晩)	縄文	
112	駒木	散布地	縄文土器(前・中)	縄文	
113	駒木I	散布地	縄文土器(晩)	縄文	
114	駒木V	散布地	縄文土器	縄文	
115	駒木III	散布地	縄文土器	縄文	
116	駒木II	散布地	縄文土器(前・晩)	縄文	
117	駒木IV	散布地	縄文土器	縄文	
118	鎌井内II	散布地	縄文土器	縄文	
119	吉原(上尾の跡)	竊跡跡	鉄、手環	中世	
120	土守I	散布地	縄文土器	縄文(前・後・晩)	古手紙文調50巻
121	土守II	散布地	縄文土器(晩)	縄文	
122	土守V	散布地	縄文土器	縄文	
123	土守VI	散布地	縄文土器	縄文	
124	赤子原教員I	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
125	赤子II	散布地	縄文土器、土器類	縄文、平安	
126	長巻橋I	散布地	縄文土器	縄文	
127	川河	散布地	縄文土器	縄文、平安	
128	下山原I	散布地	土器類、須恵器	平安	
129	下山原II	散布地	縄文土器	縄文	
130	泉丘I	散布地	縄文土器、石器	縄文	
131	泉丘II	散布地	縄文土器	縄文	
132	駒森	竊跡跡	手環	中世	
133	駒森清水	散布地	縄文土器	縄文	
134	人口岡I	散布地	縄文土器、磨製石器、須恵器	縄文	
135	大口内I	瓦葺遺構	縄文土器(前・晩)、土器、石器	縄文(前・後)、弥生、奈良、平安、近世	古手紙文調100・225・225巻
136	伏見教員A	竊跡跡	縄文土器	縄文(前・後)、奈良、平安	古手紙文調61巻
137	伏見教員B	竊跡跡	縄文土器	縄文(前・後)、平安	古手紙文調62巻
138	伏見教員C	竊跡跡	縄文土器	縄文(前・後)	古手紙文調67巻
139	伏見教員D	竊跡跡	縄文土器	縄文(前・後)	古手紙文調68巻
140	馬場野I	竊跡跡	縄文土器	縄文(中～後)、近世	古手紙文調84巻
141	馬場野II	竊跡跡	縄文土器	縄文(中～後)、奈良	古手紙文調89巻
142	新堀田IV	竊跡跡	縄文土器(後・晩)	縄文(中～後)、奈良、奈良、近世	古手紙文調91巻
143	新堀田V	竊跡跡	縄文土器(晩)	縄文、平安	
144	新成田II	散布地	縄文土器(晩)	縄文	
145	新成田III	散布地	縄文土器	縄文	
146	中山II	散布地	縄文土器	縄文	
147	中山III	散布地	縄文土器(後)	縄文	
148	中山IV	散布地	縄文土器(後)	縄文	
149	原野I	散布地	縄文土器(後)	縄文	
150	原野II	散布地	縄文土器	縄文	
151	沼田I	散布地	縄文土器(晩)	縄文	
152	沼田II	散布地	縄文土器、土器類	縄文、奈良	
153	沼田III	散布地	縄文土器	縄文	
154	高川原	散布地	縄文土器	縄文	
155	地ノ平	散布地	縄文土器(後・晩)、石器	縄文	
156	湯助の森	散布地	縄文土器(晩)	縄文	

第2表 周辺の遺跡

第三章 調査方法と整理方法

1 野外調査

(1) 調査運営の経過について

延べ3カ年の調査を行い、調査の大部分（西部捨て場付近や調査区中央部分の遺構精査など）は中川が主に担当し、平成8年度9月中旬以降の調査（主に東部捨て場付近の調査）に関しては星が主に担当した。

(2) 調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡の調査区域は、東西約110m、南北約65m、北西～南東方向に最大長をもつ。調査区の設定は、基準点測量を委託し、平面直角座標系第X系を利用して調査区域を網羅できるように設定した。設定した基準点1・2の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=39,930.000 Y=56,000.000 H=292.065m

基準点2 X=39,930.000 Y=55,964.000 H=294.422m

調査区は基準点を基点に、4m毎に小区画し、南側～北側に向かってA～Rの名称を付け、西側～東側に向かって1～28の名称を付けた。すなわちA1、R27などのグリッド名を付ける方法を取り、南西を起点として遺物の取り上げを行った。遺構名は調査区名と遺構の種類を組み合わせてB21住居跡1号、F17土坑1号などと呼称した。遺構・遺物ともに遺構が二つ以上のグリッドにかかる場合は、検出時のプランで北端が含まれるグリッドで遺構名を命名した。基準点やグリッドについては、第7図を参照いただきたい。

(3) 掘り・遺構精査

当初約4×2mのトレンチを17カ所に入れ、遺跡の状況把握に努めた。第5区はトレンチを入れた地点を示す。その結果、調査区の東西に位置する斜面部からは遺物包含層（捨て場）の存在が確認され、平坦部は遺構の密集が予想された。排土場の確保の関係から、調査区西側から精査を開始した。

遺構の精査は、住居跡を4分法、土坑等その他の遺構は原則として2分法を採用した。窰穴住居跡を例に取り上げその手順を説明する。

まず、4分と十層観察用のベルトを設定し、各分割区は北東を起点にQ1～Q4と時計回りに呼び、遺物の取り上げの際の単位とした。各区ごとに埋土を掘り下げて床面を検出した。次に土層の写真撮影を行い、断面図を作成した後に除去した。

床まで掘り下げた後の作業は、柱穴・ピット等の精査を行い、写真撮影・平面実測を終えた後に炉の精査を行った。上記した床面の定かでないものと見出をもつものについては、柱穴の検出のため写真撮影・平面実測終了後に、だめ押し的に掘り下げ確認に努めた。

遺物包含層の精査については、調査開始初期に試掘トレンチを入れ、遺物包含層の形成されている分布範囲の把握に努めた。その結果、東西の斜面地は層厚1～2mで、調査区中央部分は層厚が薄いあるいは分布がみられないことがわかった。

遺物包含層が厚く堆積する斜面地の遺物の取り上げ方については、斜面の傾斜方向に直交する土層ベルトとそれに垂直になるベルトを設定して、遺物取り上げの際に層位の目安とした上で、グリッド単位で取り上げた。また、遺物取り上げ時には、トータルステーションを使用し、可能な限りの遺物点を計測した。

遺物包含層の精査に関わる詳細は、第IV章12の捨て場の項で述べる。

2 室内整理

室内整理については、検出遺構及び出土遺物が多いことから、冬期間の5カ月間のみでは整理が終了できず、平成9・10年度も引き続き通年24カ月の室内整理を実施した。

(1) 整理経過

平成6～9年度の室内整理は、野外調査時の主担当である中川が担当し、遺構図の点検・合成・修正、遺物水洗、土器の接合・復元、遺物の仕分・選別、登録作業、不掲載遺物の収納、各種の表作成、遺構トレース、遺物の実測を行った。

平成10年度の室内整理は、尾が担当し、各種の表作成、遺構トレース、掲載遺物の選択、遺物の実測・トレース及び図版作成作業、原稿執筆、報告書の編集、遺物収納を行った。

野外調査と同様に整理作業においても担当調査員の途中変更を行ったことにより、調査成果や報告書掲載上の不備が存在する可能性はあるが、最終的に総括した平成10年度整理担当者の尾の責任のもとに原稿を執筆し、編集した。

(2) 遺構図面

遺構図面は、野外調査時は平面図、断面図ともに縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/5、1/10で作成を行い、補足的にトータルステーションで遺構の輪郭(上端線)を測量した。特に遺構の密集が激しかった調査区中央部分は、野外時に実測した平面図と断面図が合わない等の問題が多くあった。本稿に掲載している遺構図の中で、特に重複の激しい土坑類の大部分は、写真等を参照して修正した第2原因を作成した上で、トレースを行ったものであることをお断りしておく。

(3) 遺物

遺物は、洗浄(遺物水洗)と出土地点ごとの仕分けを現場で野外調査と並行して進めたが、大部分の遺物の洗浄は室内整理の段階で行った。注記・接合・復元を行った後に、登録・選別の作業を行った。報告書に掲載した遺物は、中川が選別し一次登録した中から尾が2～3回ほどのセレクトを重ねた上で抽出したもので、特殊性を強く感じる遺物などを除き、原則としては各種類とも総点数の15～20パーセントを掲載した。

(4) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドアルバムに、ボラロイドはインスタントフォトアルバムに整理した。

(5) 報告書について

〈遺構の記載〉 遺構の事実記載は、住居跡と掘立柱建物跡は原則として調査区西側から順に行い、その他の遺構はグリッド順に行った。ただし、検出数も多く重複も激しい土坑や柱穴状土坑については、遺構配置図(第9～14図)に記した遺構番号順に表記載のみで割愛した。

〈遺物の掲載〉 掲載遺物は、掲載順に1から連番を付けている。遺物掲載番号は、図版・写真とも同一の番号である。時間の関係で写真のみを掲載する遺物もある。個々の遺物の観察内容は、できるだけ観察表中に記載し、本文では最小限度の記載を行う。なお、土製品や石器の観察表は、器種毎に掲載順に作成したが、時間及び紙面の幅の関係で図版・写真番号とも記載していない。

〈遺構図版〉 遺構図版は、1/60を基本とするが、遺構の性格に応じて縮尺を変えている。但し、三角スケールで計測できる定型縮尺とし、挿図の右下にスケールを付けている。また、土坑類は、重複が激しい部分については集合図的なスタイルで掲載した。

〈遺物図版〉 遺物図版は、石器を1/3を基本として大きさにより1/2・1/4・1/5、土製品を1/2、石器類を2/3～1/3で掲載し、挿図の右下にスケールを付けた。集成図については、不定型縮尺であることをお断りしておく（土器は基本的に1/6や2/9などが多い）。

〈集成図〉 第Ⅶ章に掲載した集成図は、基本的に住居跡は1/80、土器は2/9、土製品は1/2で作成したが、大形の住居跡及び土器は不定型縮尺で作成したものが含まれる。

〈遺構写真図版〉 遺構写真図版は、全て任意である。遺構図版と同様に重複の激しい土坑類は、集合写真を採用した。

〈遺物写真図版〉 遺物写真図版は、石器類1/3・石器類2/3 or 1/2を基本とし、大きさにより1/4・1/5など定型縮尺で掲載に努めたが、台紙の関係で一部の遺物は2/9といった縮尺になったものもある。遺物の掲載スケールについては、図版の右下にS≒1/3（≒は若干の誤差）と言った具合に添付している。

3 遺物の掲載について

はじめに

本稿作成にあたっては、遺物出土の主体を占める遺物包含層の分布する範囲を捨て場として扱い、一つの空間（遺構的）として捉え、図版作成を進めた。図版作成途中で時間との関係で土製品や石器類を遺構外的に扱うことに変更した経緯がある。

上記に起因して、遺構外遺物の掲載方法は、本稿の遺物を見る（調べる）時分に不親切であり、混乱を招く恐れがある。それと本稿に掲載できなかった遺物量も相当数存在する。

よって、本報告書の内容を理解しやすくするため本項を設定し、遺物に関する掲載方法や基準・分類基準を述べておく。

(1) 遺物の掲載スタイル

述べ3年間の調査で出土した遺物の総量は、大コンテナ約600箱分に達する量であった。

出土遺物の時期は、縄文時代後期初頭～晩期前葉に比定されるものが大部分（土器について言及すれば98%以上が後～晩期のものである）である。

整理期間の問題から、これらの遺物全てを報告書に掲載することは不可能であり、選択を行った。報告書に掲載する遺物をどのような基準のもとに選択し、どのようなスタイルで掲載するかについては、かなり苦慮した経緯がある。特に、遺物包含層出土遺物を遺構内遺物として扱うか遺構外遺物として扱うかは難しい問題と考える。

本稿では遺物包含層出土遺物を、遺構外遺物として扱うこととするが、遺物包含層の分布する空間である

東西の斜面地を、それぞれ「東部捨て場」、「西部捨て場」と呼称し、遺物包含層の分布が見られない調査区中央部の表採・表土（耕作土や盛土などを含めて一括する）出土の遺物とは分けて捉えることとした。

遺物の掲載は、「出土地域」と言う項目を設定し、下記のように大別した上で、観察表にはコード化したものを記入する。以下のようになる。

＜N＝遺構内出土遺物＞ 住居跡、土坑、柱穴状土坑、焼土遺構などの遺構から出土した遺物には、出土地域の項にNと記入する。

＜GE＝東部捨て場出土地域・GW＝西部捨て場出土地域＞ 東西の斜面地に堆積する遺物包含層部分を、それぞれ東部捨て場と西部捨て場と呼称し、東部捨て場の出土地域の項にはGE（Gは遺構外の呼称で、Eはイースト）、西部捨て場の出土地域の項にはGW（Gは遺構外の呼称で、Wはウエスト）と記入する。

＜GC＝調査区中央部表土出土遺物＞ 基本的にⅢ層（遺物包含層）の堆積が見られない調査区中央部（平坦部や南側の丘陵部）のⅠ層（表採、表土、盛土、耕作土、攪乱層）出土遺物には、出土地域の項にGC（Gは遺構外の呼称で、Cはセンター）と記入する。ほとんどのものが粗掘り時や遺構の検出作業中に出土している。

（2）図版の掲載順について

土器類は、上記したN、GE、GW、GC毎に大別した後に出土地点毎に掲載する。

土製品と石器類は、NとGE・GW・GCに大別した後、器種毎に掲載する。遺構外遺物について、土製品を例に説明すると、以下のような順になる。

GE出土ミニチュア土器→GW出土ミニチュア土器→GC出土ミニチュア土器→GE出土土偶→GW出土土偶→GC出土土偶→GE出土動物形土製品…

（3）掲載遺物の抽出方法

掲載遺物の抽出にあたっては、上述したとおり2～3回のセレクトを行ったことから、整理担当者の恣意的な部分も介在し、大なり小なり客観性に欠ける内容となった可能性がある。各種遺物の抽出方法と内容を下記に記述しておく。

＜土器＞ 基本的には、以下のような基準で掲載遺物を採用した。

a 住居跡、土坑、柱穴状土坑などの遺構内出土土器については、遺構の構築や廃棄の時期推定に関わるため、小片においてもできるだけ掲載を行ったつもりである。遺構内出土土器は、大コンテナ30箱分以上の出土量で、立体・小片含めて約2000点を抽出し、第一次登録した。その中から時期同定の困難な地文のみを施文する粗製深鉢の小片などを除き（非優先として）、約1400点を第二次登録した後に、再度選択を行い809点を第三次登録し掲載土器とした。

b 遺構外出土土器は、約500箱分の出土量で、内訳は東部捨て場250箱分以上、西部捨て場250箱弱、調査区中央部などの表採から約10箱分が出土した。

全般的な傾向として東西の捨て場からは、完形品・半完形品が多く、土器の接合率も概ね良好であった。遺構外出土の中で残存率50%以上の基準を満たす土器は、接合作業によるものを含めて約2306個体となった。報告書掲載にあたっては、それらの立体土器に分析対象となりそうな約900点の破片を加えた約3201点を一次登録した。一次登録した約3201点は、器種区分と時期区分などの観察まで行った。整理期間を加味して、その中から1264点を掲載予定土器として二次登録し、観察表を作成した。しかし、時間の都合上、器種構成

率を加味した上で、更にセレクトを行い979点を第三次登録し、掲載土器とした。よって、残存率50パーセントを超えるものや文様から時期の推定の可能なものであっても、不掲載あるいは写真掲載に留めざるを得なかったものも多数存在する。ただし、突起資料及び孔が穿たれているなど特殊な土器については、小破片であってもできるだけ掲載を行ったつもりである。

＜土製品＞ 原則として、全て掲載する予定で整理作業を進めたが、ミニチュア土器、円盤状土製品、三角形土製品など出土点数の多いものは各器種とも15～20パーセントの掲載に留め、その他のものは80パーセント以上の掲載数とした。遺物個々の出土点数や掲載点数については、第V章を参照して載きたい。

＜石器・石製品＞ 石器・石製品の掲載基準は、出土数の極端に少ないものを除き、各器種とも出土点数の20%を原則としたが、15%程度しか掲載できなかったものもある。詳細は第V章を参照して載きたい。

4 トータルステーションについて

先にトータルステーションの導入から活用について若干説明する。

当センターにおいては、平成4年度の調査からトータルステーションを導入し、主に旧石器出土遺跡の調査において活用してきた経緯がある。トータルステーションを使用して調査を行った遺跡としては、「大波Ⅱ遺跡」、「峠山牧場Ⅰ遺跡A・B地区」、「耳取Ⅰ遺跡B地区」など主に東北横断自動車道秋田線建設に関連した遺跡で、旧石器の出土地点の測点に効力を発揮した（ユニット・ブロック及び文化層の把握）。その他の種別遺跡に関しても、調査区の輪郭線や遺構の実測に使用したケースも若干ある。しかし、遺物包含層を捉えた縄文の集落遺跡にトータルステーションを本格的に活用したのは本遺跡が初めてのケースであった。

本遺跡の調査は、トータルステーションを使用し、一部の遺構と遺物の測量を行ったが、そのデータは本稿には充分生かしきれず掲載しきれなかったデータが多い。

(1) 測量内容

a 遺構について

基本的には従来通りの人力による実測図作成をおこなっている。トータルステーションによる実測は、主に重複の激しい地点（特に調査区中央部）の把握と実測漏れ防止のため、遺構の上端線やセクションポイントなどの実測を行った。

b 遺物について

当初遺物の全点ドットを予定していたが、予想された以上の遺物が出たため、調査途中から使用方針を変更し、現場作業中に認識した土製品・石製品、人部分の完形土器、出土石器の6割以上の各測点データを測点した。測点数は合計で約6500点である。

(2) 報告書への掲載データ

a 遺構の計測データ

遺構の計測データは、上述のとおり第二原図作成時の補足資料として用いた。

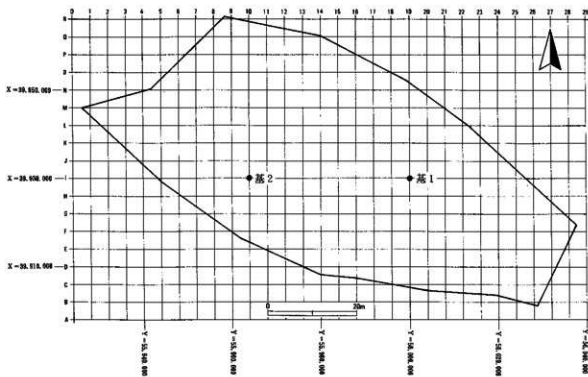
b 遺物の計測データ

遺物の計測データは、一部の遺物点を下記のように図示した。

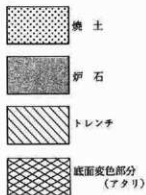
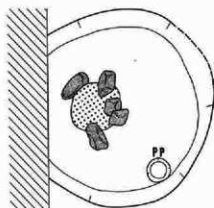
平面分布データは、第401～419図に掲載した遺物の出土分布図や土製品（土偶など）や石器（磨製石斧

など)の接合関係図作成の資料に用いた。

垂直分布のデーターは、土器の層位的出土状況を示す資料として用いた。第120～124図は、捨て場内で観察用に設定した土層断面の細分層位に対比(ただし、大部分の土器は土層断面内出土)させて作成した。土器とその他の遺物の共伴性などについても、データーをまとめ図化を行う予定であったが、データー整理に膨大な時間を費やし、作成は途中で中断した。第VI章で、整理できた分のデーターの内容を文章で記載することで代用とする。

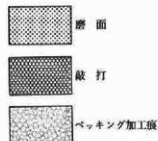


第7図 グリッド配置図



PP 柱 穴

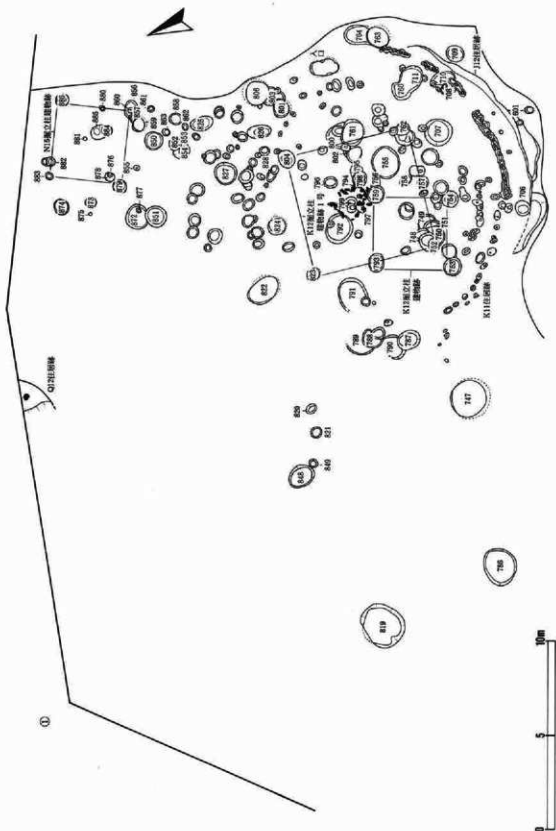
----- 住居跡輪郭
推定線



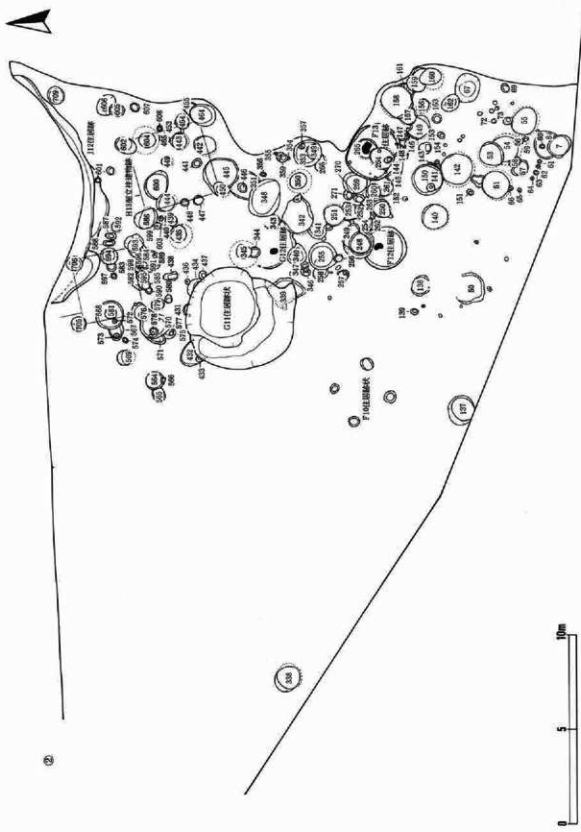
第 8 図 凡例



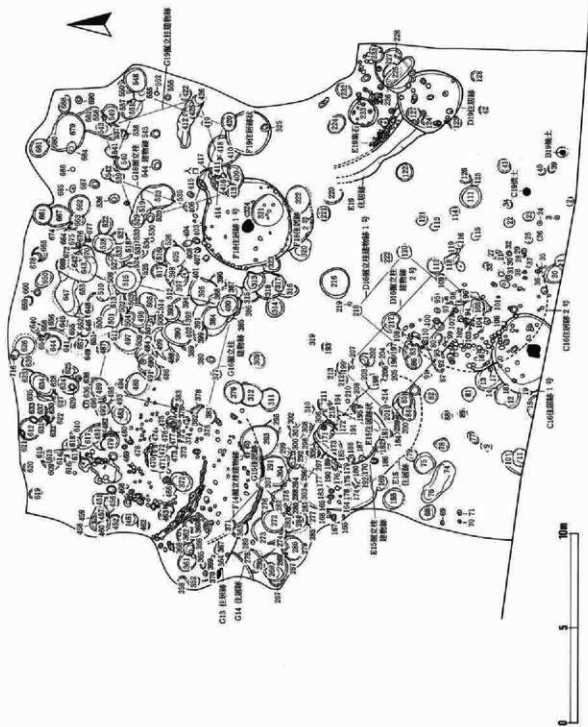
第9図 遺構配置図1



第10図 遺構配置図2



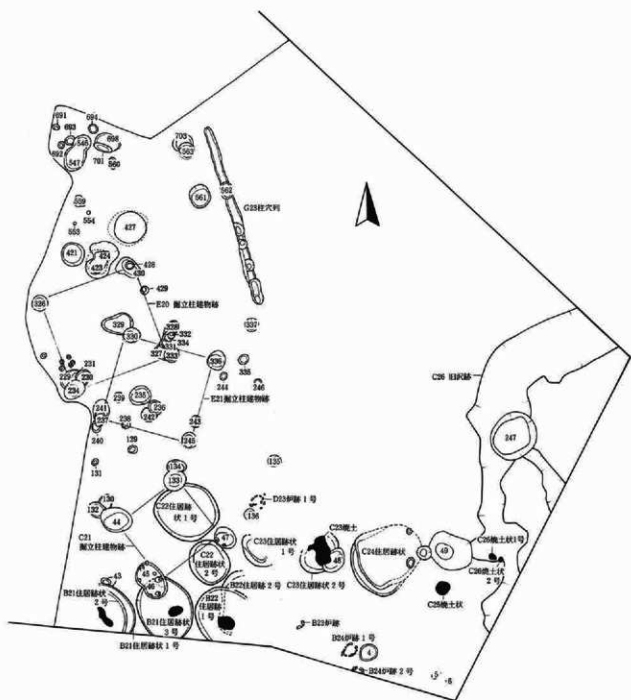
第11圖 遺構配置圖 3



第12図 遺構配置図4



第13図 遺構配置図5



第14圖 遺構配置圖 6

第IV章 検出された遺構

検出された遺構は、住居跡・住居跡状30棟、独立柱建物跡15棟、炉跡4基、焼土遺構6基、土坑452基、柱穴状土坑436基、柱穴列1条、集石1基、立石1基、溝状遺構1基、旧沢跡1条、古地盤跡1カ所、捨て場2カ所である。

遺構の時期同定は、困難なものも多いが、概ね縄文時代後期から晩期と推定(判断)される。

第9図に全体の遺構配置図(縮尺1/500)を、第10~14図に部分アップの遺構配置図(縮尺1/200)を掲載している。なお、第10~14図の遺構配置図には、土坑及び柱穴状土坑については遺構名ではなく遺構番号で記した。それらの遺構番号は、第5~19表の遺構表と対照する。

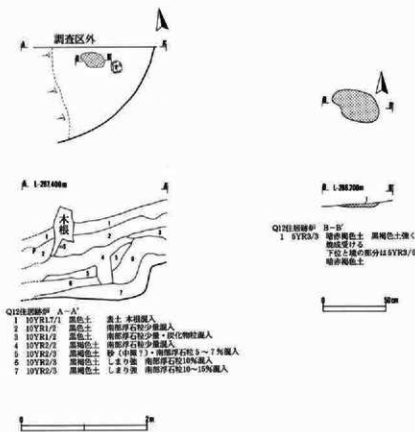
個々の遺構の記載の前に、若干の説明をしておく。

遺構埋土の記載について、自然堆積層か人為堆積層かの判断は、八戸火山灰のブロックが入る明らかな土層は判断が容易であるが、大半は南部浮石粒の顔付きで判断するようなものが多かった。南部浮石粒の顔付きについて説明すると、汚れた様相のものや潰れたもの(粒径が若干小さい)といった状態である南部浮石粒で、これらは人為によるなんらかの作用を受けていると判断した。

出土遺物について、時間と紙面の都合もあり各遺構の出土遺物の項では、遺物個々の記載は割愛したので、観察表と実測図を参照いただきたい。

遺構の時期について、土器の時期をとりあえず概ね以下のように捉え記述する。

十腰内I式=後期初頭~前葉、十腰内II~III式=後期中葉、十腰内IV式=後期後葉、十腰内V式=後期末葉、大洞B1式=晩期初頭、大洞B2~BC式=晩期前葉



第15図 Q12住居跡

1 住居跡・住居跡状

住居跡を16棟、住居跡状を14棟検出した。尚、本遺跡においては、炉か柱穴の何れか一方でも検出した堅穴を住居跡とし、それ以外の堅穴を住居跡状と定義した。

住居跡・住居跡状の時期は、後期と推定されるのが5棟、後期末葉～晩期前葉と推定されるのが25棟である。

Q12住居跡（第15図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉 調査区北端部のQ12グリッド付近においてⅡ層を除去した段階で検出した。本遺構が検出された付近の現況地形は、南東から北西にかけて傾斜する緩斜面地である。西部捨て場内に位置し、遺構は遺物包含層中に構築されている。

〈平面形・規模〉 斜面下方側である西側プランは、土砂の自然流出により消失したと思われる、堅穴の一部が残存するのみであるため、平面形、規模ともに詳細は不明である。確認された東側プランより平面形は円形と推定される。

〈埋土〉 第15図の1層は耕作土、2層は基本層序のⅡ層（十和田b火山灰混入層）に相当し、3～7層が本住居跡の埋土と判断される。4・5層は自然流入されてきた堆積層と思われる。

〈壁・床〉 黒土中であつたこともあり、壁は把握できなかった。第15図の断面図A-A'ではとりあえず壁と思われる立ち上がりを図示したが、確かなものではない。床面は地床炉の検出面を参考として判断した。

〈柱穴〉 未検出である。

〈炉〉 床面上で焼土化した部分が地床炉と判断される。平面形は楕円形で、40×25cm程に広がる。

〈出土遺物〉（第136図、写真図版177） 縄文時代後期の土器が少量出土している。

土器（第136図1、写真図版177） 床面に近い層（埋土下位）から出土した1の鉢は、十腰内Ⅲ～Ⅳ式に相当する。

〈時期〉 十腰内Ⅲ式期の土器は、流入されたと判断される土中からの出土であり、本遺構が後期中葉とは思われない。検出面は遺物包含層の上位であることから晩期初期と推定される。

K11住居跡（第16・17図、写真図版6～10）

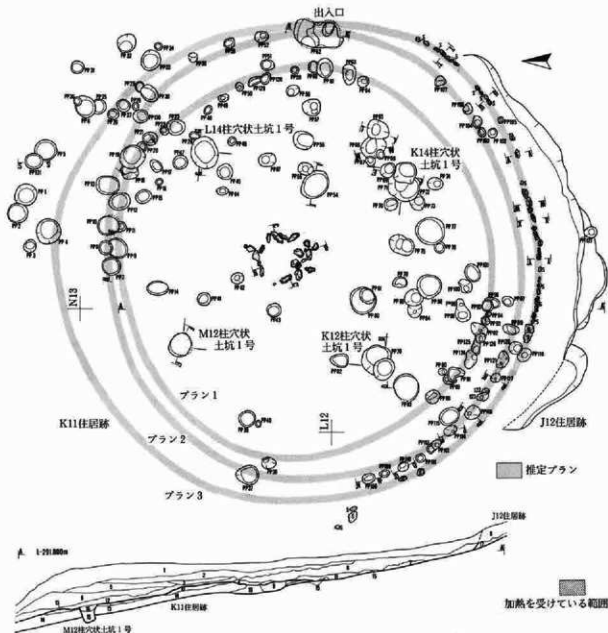
〈位置・検出状況〉 調査区中央部のK13・L13グリッドを中心とし、直径14～16mの範囲に広がると想定される大形の住居跡である。

本遺構が検出された付近の現況地形は、南から北に向かって緩く傾斜した後に平坦化する。住居プランの大部分が西部捨て場内に所在し、遺構は遺物包含層中に構築されている。

本遺構は、石附炉が特出して大きいこと、南側に弧状の石列を配するなどの状況から、調査当初は配石の性格の遺構として捉え精査を進めた経緯があり、出入口と推定される施設の検出から住居跡と認知した。

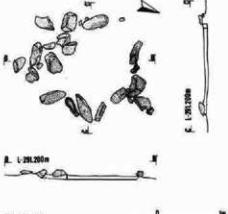
よって、本来の遺構構築面はさらに上位であつたと判断されよう。堅穴自体は把握できず、また床面は住居の大部分が遺物包含層中に構築されていることもあって、把握が困難な状況であつた。全般に不明な点が多く、内容は推定的な記述が多いことをお断りしておく。

〈建て替え〉 小柱穴の配列具合から、少なくとも3時期（2回の建て替え）が推定される。第16図には小柱穴の配列から推定されるプランを明示した。古い方からプラン1・2・3の順となる。

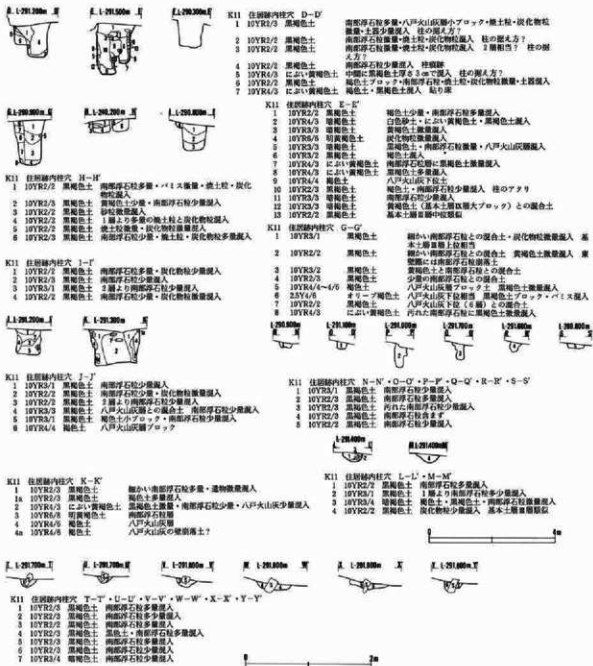


K11 住居跡 J12住居跡 A-A'

1	10YR2/1	黒褐色土	十和田礫層・南部浮石粒少量・光沢強の長石?少量混入
2	10YR2/1	黒褐色土	下に砂土ブロック・十和田礫・南部浮石粒少量混入
3	10YR2/3	黒褐色土	十和田礫少量混入。この層を何層と重ねられている
4	10YR2/1	黒褐色土	遺物密集層 上に後期第一層土層混入・中～下段に後期土器少量混入(灰濁層)
5	10YR3/1	黒褐色土	南部浮石粒少量混入
6	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒多量・遺物(主に後期土器・陶器)・骨片少量混入
7	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石粒多量・焼土粒多量・炭化物粒・遺物多量(後期中～末期土器・後期陶器)下に砂土(少量)・骨片少量混入
8	10YR5/1	黒褐色土	7層より若干粘り強 南部浮石粒多量・焼土粒多量・炭化物粒・土器混入 J12住居跡埋土
9	10YR3/1	黒褐色土	7層より若干粘り強 南部浮石粒多量・焼土粒多量・炭化物粒・土器混入 8層埋土
10	10YR3/1~2/2	黒褐色土	6層より南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒少量混入・後期中～末期土器混入
11	10YR3/1	黒褐色土	細かい南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒多量・土器混入
12	10YR2/1	黒褐色土	南部浮石粒多量・上に後期前葉土器少量混入
13	10YR2/2	黒褐色土	褐色～黄褐色土の砂土ブロック・南部浮石粒少量混入
14	10YR2/2~10YR2/2	黒褐色土	南部浮石粒多量 南部浮石粒埋土層
15	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石粒に褐色土混入
16	10YR2/1	黒褐色土	南部浮石粒多量・上に後期前葉土器少量混入 J12住居跡埋土
17	10YR3/1	黒褐色土	南部浮石粒多量・焼土粒多量・炭化物粒混入



第16図 K11住居跡(1)、J12住居跡



第17図 K11住居跡(2)

〈重複遺構〉 本住居跡がJ12住居跡を載る。K11掘立柱建物跡1号とK11掘立柱建物跡2号との新旧関係は、検出状況から推定して本遺構が新しいと判断された。現段階での筆者の見解は、野外時に単独の掘立柱建物跡と捉えられたK11掘立柱建物跡2号は本住居跡の主柱穴であろうと思っている。

〈平面形・規模〉 ほぼ円形を呈すると推定される。規模は直径14～16m程であろう。

〈埋土〉 黒色～黒褐色土を主体とする。第16図の土層断面図A-A'は、1～17層に区分しているが、12層までが本住居跡の覆上と捉えられる。上位に堆積する1・2・3層は、十和田b火山灰を含む層で、基本層序のⅡ層に相当する。中位～下位は遺物包含層の再堆積で構成される。また、床面自体も遺物包含層である部分もあり、埋土下位と床面の区分が明確でない部分がほとんどであった。

〈壁・床〉 壁は上述のとおり把握できなかった。よって、厳密には堅穴状に掘り窪めていたものかわからない。

第16図の平面図に付随させた南側の高い段は、図上では南壁であるような位置関係にあり、誤解をまねく恐れがあるので説明しておく。本住居跡精査時は、壁を探して中央である北側から南側に向かって掘り進んだ経緯があり、いかにも堅らしく掘ってしまった可能性が高い。本住居跡が拡張され、その一部あるいは別の住居跡である可能性も全く否定はできないが、傾斜変換点と思われる自然地形的な立ち上がりである可能性が有力と考えられる。記載上は、本住居跡とは無関係としておく。

床面は黒褐色土中であるため明瞭ではない。石囲炉の検出面レベルと部分的に堆積する十和田b火山灰を指標にして精査を行い、12層下位付近が床面と判断した。床面と想定した12層のダメ押しを行った結果、下位の13層から中城火山灰（基本土層のIV層相当）が検出され、人為的作用を受けていない層であることがわかった。よって、12層下位付近かしくは13層の上面が床面と相違ないと思われる。想定したレベルが床面であれば、平坦ではなく若干凹凸がある。

〈柱穴〉 検出された柱穴は、壁柱穴と思われる小形のものを含め131基である。大形の柱穴を主柱と捉えると、柱穴配列は4本ないし6本による方形に配置されると思われる。柱穴の規模は大小様々であるが、開口部径60～110cm、深さ20～150cmの範囲のものである。

柱穴の配列や間隔から、柱穴状土坑として登録したK14柱穴状土坑、K12柱穴状土坑1号、M12柱穴状土坑、L14柱穴状土坑は、本遺構のプラン3に伴う主柱穴の可能性が高いと思われる。4本とも大形の柱穴で、開口部径60cm以上、深さ150cm以上のもので、柱穴間の距離は5.3～6.4m程である。柱穴同士の重複関係が見られることから、山側（南側）は柱の建て替えを行っているかと推定される。

なお、プラン3より外となるPP1・PP2・PP3・PP5・PP6・PP25・PP31・PP32・PP36・PP131などは、堅穴の屋外に存在した柱穴の可能性を示唆して採用した。

〈壁柱穴〉 プラン2に伴い、南側（山側）の壁際に径20cm程の壁柱穴が部分的に巡るようである。北側（谷側）が、煙の耕作や自然流失によって消失した可能性もあるため、住居を全周するかどうかは不明である。また、小形の柱穴については、本来壁溝が存在し、その壁溝内の柱穴であった可能性がある。

〈石列〉 壁柱穴の外側に、20～50cm程の角礫が連続して巡る。状況から判断して、この石列は一番新しいプラン3に伴うものと思われる。個々の石は、それぞれ約20cmの掘り方を持つ。石が設置されている状況は、第17図の断面図や写真図版を参照いただきたい。この石列が全周するかについては、谷側が煙の耕作や自然流失などの作用によって消失した可能性もあり、調査では判明できなかった。

〈炉〉 角礫を環状気味に配列する石囲炉で、住居中央に位置する。規模は210×170cm程である。個々の炉石は、掘り方等は持たず、床面上に直接置かれ、縁辺を黒土のシルトで固めて構築されている。炉石は加熱

を受けた部分が確認されるが、炉内及び周辺からは明瞭な焼土は検出されず、焼土粒を微量検出したにとどまる。

〈出入り口施設〉 PP62としたものが出入り口施設と推定される。住居の東側に位置する。長方形に近い形で土坑状の掘り込みを早する。土坑の規模は、長軸約140cm、短軸約80cm、深さ約100cmである。第17図の断面図K-K'は、南北に割った状況を示し、1層の部分に石かあるいは木柱が埋め込んであったと想定されるが、断面の様相から抜き取られている可能性がある。おそらくは、4箇所に石か木柱が設置されていたと想定されるが、詳細は不明である。

〈出土遺物〉 (第136・137図、第168図、第173図、写真図版177・199・202・203) 縄文時代後～晩期を主体に、弥生時代の上器が2点が出土している。土器片は柱穴からの出土が多い。

土器 (第136・137図2～58、写真図版177) 2が床面からで、3～7が埋土中からの出土、8～58が柱穴からの出土である。柱穴からの出土土器は、後期前葉～弥生までと時期幅が広い。弥生土器は2点の出土で、PP1から天王山式、PP8から砂沢式?が出土している。PP1は推定プランより外に位置するため、本住居跡に伴う柱穴かどうか定かではない。PP8については、出土している19は小さな土器片であるが、とりあえず砂沢式と同定した。

土製品 (第168図810～814、写真図版199) ミニチュア土器1点(814)と円盤状土製品4点(810～813)が出土している。814のミニチュア土器はPP93より出土した。また812の円盤状土製品は、出入り口施設と思われるPP62とL15土坑1号より出土したものが接合して完形となった。ただし、状況から推定して、両者は重複関係にあるため、特殊性を考えるより精査時の混乱と思われる。

石器 (第173図907～921、写真図版202・203) 第173図に掲載した石器が出土している。908の磨製石斧は出入り口施設と思われるPP62から出土した。

〈時期〉 十和田火山灰の降下年代より古く、遺物包含層の形成時期より新しいことがわかった。出土遺物や他の遺構との切り合い関係などから縄文時代晩期前葉と推定した。PP1とPP8から弥生土器と思われる土器が出土していることについて、上述したとおりの理由で時期判断の材料としては考え難いことから、全く否定はできないが本住居を弥生時代とは考えていない。

J12住居跡状 (第16図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のJ11グリッド付近に位置する。本遺構が検出された付近の現況地形は、K11人形住居跡などが立地する調査区中央部平坦地部分より面的に高い段(山側)との変換点に位置する。

〈重複遺構〉 K11住居跡に載られる。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈埋土〉 全般に南部浮石粒を含む黒褐色土を主体とする。自然堆積である。

〈壁・床〉 南壁は外傾気味に立ち上がる。床面はK11住居跡の構築時に削平を受けたと考えられる。

〈柱穴〉 開口部径12cm程の小形の柱穴を1基検出した。

〈出土遺物〉 (第137図、写真図版177) 縄文時代後期中葉～晩期初頭の遺物が出土している。

土器 (第137図59～64、写真図版177) 全て埋土中からの出土である。

〈時期〉 他遺構との切り合い関係としては、K11住居跡(晩期前葉)よりは古い。ただし、状況からK11住居跡とは大差ない時期と思われることから、縄文時代晩期と推定される。

G11住居跡状 (第18図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のG11グリッド付近に位置する。現況地形は、K11人形住居跡などが立地する調査区中央部平坦地部分より面的に高い段に位置する。

本遺構やG12住居跡状などが立地する付近は、本来の旧地形は南から北に向かって緩く傾斜する緩斜面地であったと推定される。現況の標高295～296m(調査前)付近の等高線の間隔が不自然に広いことと、南部浮石粒層が削られた様相であることから判断して、かなり大規模な造成工事を行い平坦面を作り出したと思われる。この作り出したと思われる平坦面上に本遺構など複数の住居跡が点在する。

〈重複遺構〉 本住居跡状が、G11土坑1号、H11土坑1・2号、H12土坑1号、H11柱穴状土坑を截る。

〈平面形・規模〉 平面形は円～楕円形状を呈する。規模は6×5.3m、深さは1～1.2mである。山側である南西は、自然的作用で崩落したものである。

〈埋土〉 全般に南部浮石粒を含む黒褐色土を主体とする。埋土上位の2～3層は、十和田b火山灰が見られることからII層に相当する。4～29層は、遺物包含層(III層)に相当する土壌である。第18図土層断面A-A'の堆積様相からは、自然堆積とも捉えられるが、調査記録に従えば1・2・2a・3層以外は人為堆積層である。出土遺物の有り方からは、付近に所在した遺物包含層を使って埋め戻し(整地化)を行ったと思われる。

〈壁・床〉 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 開口部径12cm程の小形の柱穴を竪穴中央部付近で検出した。

〈炉〉 検出されなかった。

〈出土遺物〉 (第137・138図、第168図、第174図、写真図版178・199・203) 縄文時代後期末葉～晩期前葉、及び弥生時代(土器小片1点)の遺物が出土している。

土器(第137・138図65～83、写真図版178) 埋土上位を中心に比較的多くの土器が出た。出土土器は大洞BC式の破片が多い。

土製品(第168図815、写真図版199) 後期末葉と思われる土偶が1点出土している。

石器(第174図922～931、写真図版203) 石鏃1点、石錐1点、削器1点、楔形石器2点、円盤状石器1点、敲石1点が出上している。

〈時期〉 出土遺物などから判断して縄文時代晩期前葉と推定される。

G12住居跡 (第19図、写真図版13)

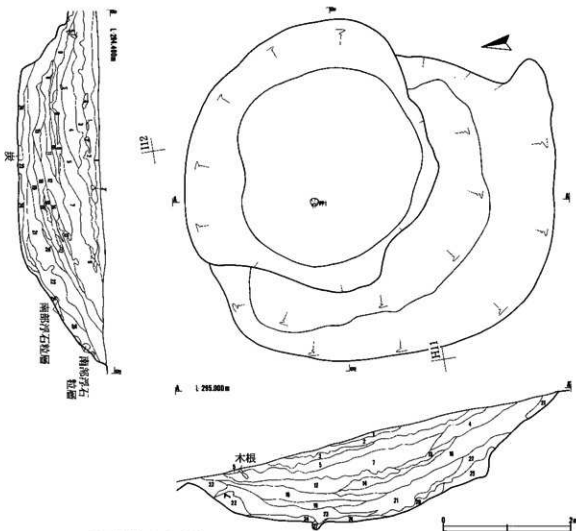
〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のG12グリッド付近に位置する。現況地形は、K11大形住居跡などが立地する調査区中央部平坦地部分より面的に高い段に位置する。

本遺構やG11住居跡状などが立地する付近は、本来の旧地形は南から北に向かって緩く傾斜する緩斜面地であったと推定されるが、現況地形の標高295～296m付近の等高線の間隔が不自然に広いことと南部浮石層が削られた痕跡があることから判断して、かなり大規模な造成工事を行い平坦面を作り出し、居住域とした可能性が高い。

〈重複遺構〉 本住居跡が、G12土坑1・2・3号に截られる。

〈平面形・規模〉 明確には不明であるが、残存する南壁から、円形で3m程と推定される。

〈埋土〉 本住居跡の埋土と認定できるのは、わずかに残存する南西側の一部分のみである。南部浮石粒が混じる黒褐色土による単層で、黒褐色土中に含有されている南部浮石粒の様相から、人為により動かされた



- K11 住居跡状 A-A'・B-B'
- 1 10YR2/1 黒色土
 - 2 10YR1.7/1 黒色土
 - 2a 5Y4/2~2.5Y4/3 灰オリーブ
 - 3 10YR1.7/1 黒色土
 - 4 10YR2/1 黒褐色土
 - 5 7.5YR2/1 紫色土
 - 6 本居成土
 - 7 10YR2/1 黒褐色土
 - 8 10YR2/1 黒褐色土
 - 9 10YR2/1 黒褐色土
 - 10 10YR2/1 黒褐色土
 - 11 10YR2/1 黒褐色土
 - 12 7.5YR3/1 黒褐色土
 - 13 10YR2/3 黒褐色土
 - 14 10YR2/3 黒褐色土
 - 15 7.5YR3/1 黒褐色土
 - 16 10YR3/1 黒褐色土
 - 17 7.5YR3/1 黒褐色土
 - 18 10YR3/1 黒褐色土
 - 19 10YR3/1 黒褐色土
 - 20 10YR3/1 黒褐色土
 - 21 10YR2/1 黒褐色土
 - 22 10YR2/3 黒褐色土
 - 23 10YR2/3 黒褐色土
 - 24 10YR3/3 暗褐色土
 - 25 10YR3/3 暗褐色土
 - 26 10YR3/2 暗褐色土
 - 27 10YR2/3 黒褐色土
 - 28 10YR2/3 黒褐色土
 - 29 10YR3/3 暗褐色土

- 旧土 基本土層 1層相当
 十粒より・南加浮石粒少量混入 基本土層 1層相当
 粒子の細かい土・径1~2mm程の砂土ブロック混入 2層の下位に
 見られる
 2a層の一帯、灰オリーブ小ブロック・南加浮石粒少量混入
 砂・南加浮石粒少量混入
 黒褐色土・砂・南加浮石粒多量 (径5mmのものが多い) 混入
 砂・南加浮石粒少量混入
 砂主体 南加浮石粒混入
 砂・径5mmの南加浮石多量混入
 砂・南加浮石粒少量混入
 砂層混入
 砂・南加浮石粒多量混入
 褐色土・砂混入
 13層に黒褐色土多量混入
 砂少量・南加浮石粒多量混入
 砂主体
 15層暗褐色土
 褐色土・黄土・砂少量・南加浮石粒少量混入
 砂少量・南加浮石粒多量混入
 16層相当
 砂少量・南加浮石粒混入
 暗褐色土との混在性 南加浮石粒多量混入
 16層より南加浮石粒少許・下位に炭化物混入
 南加浮石粒少量混入 上面が本家の粘土?
 粘土の細かい土層
 22層より黒褐色土少量混入
 南加浮石粒少量混入 基本土層並層中位相当?
 暗褐色土に南加浮石粒多量・土塊混入
 23層に黒褐色土混入

第18図 G11住居跡状

土と判断できる。よって、本住居跡は廃絶後に埋め戻され、その後人為により削平されていることが推定される。

〈壁・床〉 残存する南側壁は、外傾気味に立ち上がる。壁高は30cm程である。床面は北東方向に向かって穏やかに傾斜する。

〈炉〉 壁穴中央部やや南壁よりの床面上で、地床炉と思われる焼土を検出した。40×25cm程の楕円形に広がる。焼土の発達は悪い。

〈出土遺物〉 (第138図、写真図版178) 土器小片が出土している。

土器 (第138図84～87、写真図版178) 大洞B C式と十腰内Ⅱ式に相当する土器が埋土中より出土している。

〈時期〉 埋土中から出土した土器から、縄文時代晩期前葉と推定されるが、明確には不明である。

G13住居跡 (第19図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のG13～14グリッド付近に位置する。現況地形は、K11人形住居跡などが立地する調査区中央部平州地部分より面的に高い段に位置する。北～東側はG14住居跡を破壊している。

本遺構やG11住居跡状などが立地する付近は、本来の旧地形は南から北に向かって緩く傾斜する緩斜面地であったと推定されるが、現況地形の標高295～296m付近の等高線の間隔が不自然に広いことと南部浮石層が削られた痕跡があることから判断して、かなり大規模な造成工事を行い平坦面を作り出し、住居域とした可能性が高い。

〈重複遺構〉 本住居跡がG14住居跡を載り、G14十坑4号・G14柱穴状上坑1号に載られている。

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明である。残存する南壁から円形で4m程と推定される。

〈埋土〉 本住居跡の埋土と認定できるのは南西側の一部のみで、南部浮石粒が混じる黒褐色土による単層である。黒褐色土中に含有されている南部浮石粒の様相から、人為により動かされた土と判断できる。よって、本住居跡は廃絶後に埋め戻され、その後人為により削平されていることが推定される。

〈壁・床〉 残存する南壁は、外傾気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 南壁際で1基検出した。

〈炉〉 未検出。

〈出土遺物〉 (第138図、写真図版178) 後～晩期の土器片が出土している。

土器 (第138図88～91、写真図版178) 十腰内Ⅳ式及び大洞B式に相当する土器片が、埋土中から出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期初頭と推定される。

G14住居跡 (第19図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のG14グリッド付近に位置する。現況地形は、K11大形住居跡などが立地する調査区中央部平州地部分より面的に高い段に位置する。北～東側はG13住居跡構築時に破壊を受け消失している。

本遺構やG11住居跡状などが立地する付近は、本来の旧地形は南から北に向かって緩く傾斜する緩斜面地であったと推定されるが、現況地形の標高295～296m付近の等高線の間隔が不自然に広いことと南部浮石層が削られた痕跡があることから判断して、かなり大規模な造成工事を行い平坦面を作り出し、住居域とした

可能性が高い。

＜重複遺構＞ 本住居跡がF14土坑4号を載り、G13住居跡・G13土坑2号に載られている。

＜平面形・規模＞ 平面形、規模ともに不明である。残存する南西壁より、円形で3m程と推定される。

＜埋土＞ 本住居跡の埋土と認定できるのは南西側のわずかな部分のみである。南部浮石粒が混じる黒褐色土による単層である。黒褐色土中に含有されている南部浮石粒の様相から、人為により動かされた土と判断できる。よって、本住居跡は廃絶後に埋め戻され、その後人為により削平されていることが推定される。

＜壁・床＞ 残存する南西壁は、外傾気味に立ち上がる。

＜炉＞ 床面で地床炉と思われる焼土を検出した。残存する南壁から竪穴の輪郭を推定すると、ほぼ中央部に位置する可能性が高い。焼土の発達は悪い。

＜出土遺物＞（第138図、写真図版178） 十器片数点が出土している。

土器（第138図92、写真図版178） I腰内IV式に相当する壺の胴部片が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から縄文時代後期後葉以降でG13住居跡（晩期初頭と推定される）より古い時期と思われる。

G15住居跡（第20・21図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部のG15グリッド付近に位置する。現況地形は南から北に向かう斜面部と平出地との傾斜変換点付近に相当する。検出面はⅦ（南部浮石粒層）～Ⅷ層（八戸火山灰層）であるが、本来は更に上位であろう。

野外調査時は、建て替えの回数や新旧関係の把握はできなかったが、壁溝が2条検出され、また壁溝の底面かあるいは壁柱穴と思われる小柱穴の配列が5条想定されることから、少なくとも6回以上の建て替えが行われていることが推定される。

記載上、内側の壁溝に伴うプランを1、外側の壁溝に伴うプランを7とし、その他の柱穴配列をインコースからプラン2～6とし、第20図の平面図にスクリーントーンで図示した。

内側の壁溝に伴う住居（プラン1）の壁の残存がないことと、壁溝内自体がプラン2に伴うと推定される柱穴に載られていることなどから判断して南側に向かうにつれ新しいと推定される。推定が止しければ、プラン1から拡張あるいは南側に徐々に住居空間が変遷して行き、最終的にプラン7となったと推定され、精査担当者の所見もそれに一致する。

＜重複遺構＞ 本住居跡がF13土坑3号を載り、F15柱穴状土坑9号・G14柱穴状土坑8号に載られている。

G15住居跡-1（プラン1）

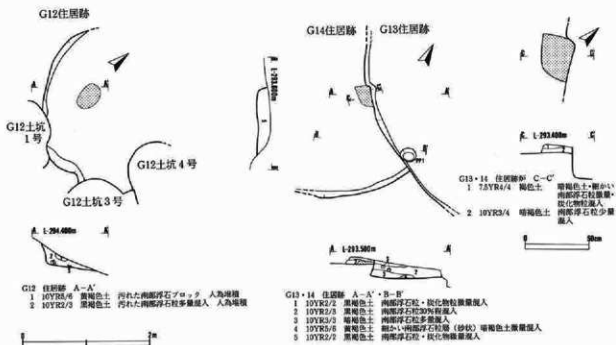
＜平面形・規模＞ 明確には不明である。南側～西側に巡る壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は6m前後と推定される。

＜埋土＞ 表上層による単層である。

＜壁・床＞ 壁の残存はない。床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局部的に南部浮石層が見られる。

＜柱穴＞ プラン1～7まで合わせて132基の柱穴を検出した。内側の壁溝より内側からは98個の柱穴を検出した。径20cm前後の小形のものが多く、

＜炉＞ 住居中央付近から地床炉を検出している。直径40cm程の円形に広がり、床面上で火を炊いたと思わ



第19図 G12・13・14住居跡

れる現地性の焼土で、掘り込みなどは伴っていない。焼土の発達はやや良好である。

〈壁溝〉 レベル的に若干高い南側～西側に巡る部分のみ検出した。壁溝の開口部径は、20cm程の場所や50cmを越える場所まであり、深さについても浅い部分と深い部分があり、一定ではない。壁溝内には小形の柱穴が伴い、特に開口部の広い部分に密に見られる。壁溝自体が住居を全周していたかどうかは不明であるが、壁溝が東側に続くとすれば、PP79やPP82などが壁溝底面に伴う柱穴である可能性がある。

〈出入り口施設〉 住居の北端にあたと推定される付近から、出入り口と思われる不整形の浅い土坑を検出した。PP1とPP2はこの土坑に伴う柱穴と考えられる。内側・外側どちらのプランに伴うのかは不明である。

〈出土遺物〉 壁溝内から後期中葉の土器が出土している。

G15住居跡-2 (プラン2)

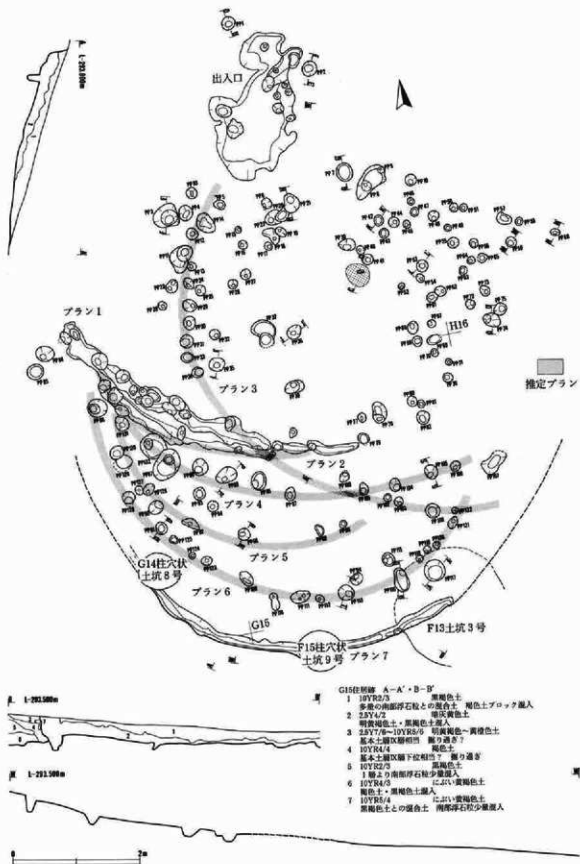
〈平面形・規模〉 明確には不明である。壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は8m前後と推定される。

〈床〉 床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局所的に南部浮石層が見られる。

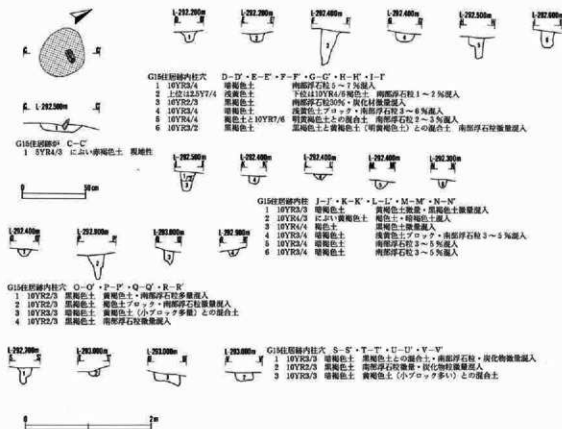
〈柱穴〉 開口部径が15～20cm前後の柱穴で構成される。本来は壁溝であった可能性がある。

G15住居跡-3 (プラン3)

〈平面形・規模〉 明確には不明である。南側～西側に巡る壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は6m前後と推定される。



第20図 G15住居跡(1)



第21図 G15住居跡(2)

〈床〉 床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局所的に南部浮石層が見られる。

〈柱穴〉 径20cm前後の小形のものが多く、本来壁溝であった可能性がある。

G15住居跡-4 (プラン4)

〈平面形・規模〉 明確には不明である。南側~西側に廻る壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は6m前後と推定される。

〈床〉 床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局所的に南部浮石層が見られる。

〈柱穴〉 径20cm前後の小形のものが多く、本来壁溝であった可能性がある。

G15住居跡-5 (プラン5)

〈平面形・規模〉 平面形、規模とも一切不明である。南側~西側に廻る壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は6m前後と推定される。

〈床〉 床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局所的に南部浮石層が見られる。

〈柱穴〉 径20cm前後の小形のものが多く、本来壁溝であった可能性がある。

G15住居跡-6 (プラン6)

〈平面形・規模〉 平面形、規模とも一切不明である。南側~西側に廻る壁溝と柱穴の分布から平面形は円

形あるいは楕円形、規模は6m前後と推定される。

〈床〉 床面はほぼ平州で、大部分が八戸火山灰層を床とし、局所的に南部浮石層が見られる。

〈柱穴〉 径20cm前後の小形のものが多い。柱穴の中には平面形が楕円形のものがあり、柱の据え方あるいは柱の抜き取り痕跡の可能性はある。

G15住居跡-7 (プラン7)

〈平面形・規模〉 平面形、規模とも一切不明である。南側～西側に巡る壁溝と柱穴の分布から平面形は円形あるいは楕円形、規模は9m前後と推定され、大形の住居と思われる。

〈埋土〉 基本層序のI層による単層である。

〈壁・床〉 斜面上方側にあたる南側のみ壁が残存する。壁形は直立気味の部分と外傾気味の部分がある。壁高は検出前から約30cmである。床面はほぼ平坦で、大部分が八戸火山灰層を床面とし、局所的に南部浮石層が見られる。G15住居跡-1の床面より15cm程高位になる。

〈柱穴〉 柱穴の中には平面形が楕円形のものがあり、明瞭ではないが柱の据え方あるいは柱の抜き取り痕跡の可能性はある。

〈壁溝〉 山側に相当する南側部分からのみ検出された。開口部径20～30cm、底部径10cm前後、深さは床面から10～20cmほどである。

〈出土遺物〉 (第138・139図、第168図、第174・175図、写真図版178・179・199・203・204) 主に埋土上位から後～晩期の遺物が出土している。

土器 (第138・139図93～108、写真図版178・179) 十腰内I式～大洞BC式までの土器が出土している。内側の壁溝2号(プラン1)より十腰内Ⅲ式が、外側の壁溝1号(プラン7)より十腰内V式が出土している。

土製品 (第168図816～817、写真図版199) 円盤状土製品が2点出土している。

石器 (第174・175図932～934、写真図版204) 石鏃1点、石皿1点、石錘1点が埋土中より出土している。

〈時期〉 縄文時代後期末葉～晩期初頭と推定されるが、厳密には不明である。

F10住居跡状 (第22図、写真図版17)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや南側のF10グリッド付近に位置する。G11住居跡などが立地する人工的に作り出したと思われる面(縄文人により造成された居住空間)より、一段高い平坦気味の面に立地する。4本の柱穴の検出に留まるが、本遺跡で検出されている掘立柱建物跡と比較して柱穴間隔が狭いことと、積石担当者らの所見として調査時に堅穴を検出できなかった可能性が高いと判断されることから、掘立柱建物跡ではなく小形の堅穴住居と推定し、住居跡状として登録した。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈柱穴〉 柱穴4個は規模約60cmで、深さは20～48cmである。

〈出土遺物〉 (第139図、第175図、写真図版179・203) 柱穴より土器数点と削器1点が出土している。

土器 (第139図109～111、写真図版179) PP1から十腰内Ⅱ式の土器片、PP4から大洞BC式の上器片が出土している。

石器 (第175図935、写真図版203) PP4から削器1点が出土している。

〈時期〉 明確には不明であるが、縄文時代晩期と推定される。

F12住居跡（第22図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央やや南側のF12グリッド付近に位置する。検出面は、Ⅱ層を除去した段階である。G11住居跡などが立地する人工的に作り出したと思われる面（縄文人により作り出された居住空間）より、一段高い平坦面に立地する。

＜重複遺構＞ F12土坑1号と重複関係にある。本遺構と十坑の新旧関係について、野外調査時においては土坑を先に検出し精査に着手したため、図面上は本住居跡より十坑が新しく図示をしているが、現況地形としては傾斜変換点付近に相当するため検出状況からの新旧関係は明確ではない。尚、本遺構及び土坑何れも晩期の土器を出土している。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は2.4m程である。

＜埋土＞ 黒褐色土を主体とし、局所的に八戸火山灰ブロックが混在する。人為堆積と判断される。

＜壁・床＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は検出面から約50cmである。床面はほぼ平坦で、八戸火山灰層中であるが、一部分のみ南部浮石粒層である。

＜柱穴＞ 検出されなかった。

＜炉＞ 住居はほぼ中央部付近から地床炉を検出した。焼土は南部浮石粒層部分に、24cm程の円形気味に広がる。焼上の発達はない。

＜出土遺物＞（第139・140図、第168図、第175図、写真図版179・199・204） 土器、土製品、石製品が出土した。

土器（第139・140図112～119、写真図版179） 床面からの出土土器は、小片であり明確ではないが、後～晩期と思われるものである（不掲載）。埋土中～下位では後期末葉の出土が多く、一括性が強いと判断される。115や119は南東北的な特徴を持つ土器である。

土製品（第168図1818、写真図版199） 円盤状土製品が1点出土した。

石製品（第175図936、写真図版204） 円盤状石製品が1点出土している。

＜時期＞ 晩期初頭あるいはそれ以前の住居跡と推定される。本住居跡は埋め戻しを行っているが、床面から出土している土器と埋土中から出土している土器は、両者何れも後期末葉～晩期初頭の土器で時期差はほとんどない。住居として廃絶された時期と埋め戻しを行った時期に大差なく、床面出土土器についても住居廃絶後に廃棄された土器である可能性が考えられる。

また、異系統的な土器がまとまって出土している点も興味深い事象である。

F13住居跡（第22図、写真図版19）

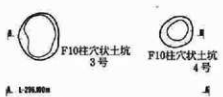
＜位置・検出状況＞ 調査区中央やや南側のF13グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層上面である。G11住居跡などが立地する人工的に作り出したと思われる面（縄文人により作り出された居住空間）より、一段高い平坦面に立地する。

本遺構の周辺は上坑が密集するエリアで、精査当初は土坑と想定していたが地床がの検出から住居跡と認知した。周辺で検出された土坑は、本住居跡の構築に伴い破壊を受けているものが多い。

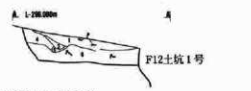
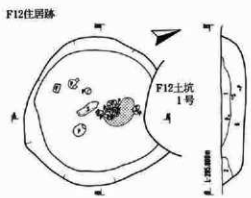
＜重複遺構＞ 本住居跡が、E13土坑4・7・8号・F13土坑1・2号を載り、F13上坑6・7号に載られている。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円～円形で、規模は301×260cmである。

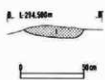
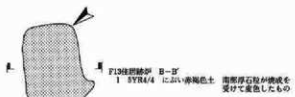
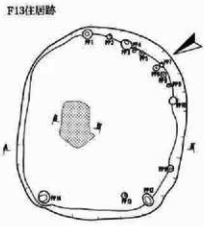
＜埋土＞ 黒褐色土シルトを主体とする。黒褐色土中には、南部浮石粒15%前後、炭化物、八戸火山灰少量



- F10住居跡状 A-A'・B-B'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石粒との混合土 炭化物粒混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土・南部浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/1 黒色土 南部浮石粒少量混入 腐植土
 - 4 10YR2/6 暗褐色土 褐色土少量混入
 - 5 10YR2/1 黒褐色土 1層埋当
 - 6 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量混入
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 褐色土・南部浮石粒混入 柱居跡?



- F12住居跡 A-A'・B-B'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石粒多数・八戸火山灰・炭化物粒・角礫混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 1層より下埋当 木炭埋込
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 1層より若干し埋当
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 1層より若干し埋当で南部浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/6 暗褐色土 南部浮石粒・八戸火山灰混入
 - 6 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- ※2 掘込外人为壊壁 F12土坑1号に穿られている



- F13住居跡 A-A'
- 1 10YR2/2-2/4 暗褐色土 黒褐色土との混合土 南部浮石粒10~15%混入
 - 2 10YR2/2-2/3 黒褐色土 南部浮石粒15~20%・炭化物粒少量混入
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石粒15~20%・八戸火山灰少量・炭化物粒少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 南部浮石粒7~10%・八戸火山灰・炭化物粒少量混入

第22図 F10住居跡状、F12・13住居跡

が含まれる。野外調査時は、上の堆積が自然か人為か判断できなかった。第22図の土層断面A-A'は自然堆積の様相であるが、埋土中に八戸火山灰が含まれることを考慮すると人為堆積の可能性が高い。

〈壁・床〉 斜面下方にあたる北壁側は、竅穴の上位～中位が自然流出したと思われ、明瞭ではなかった。斜面上方側にあたる南壁は残存状況が良好で、直立気味に立ち上がり、壁高は検出面から約90cmである。南壁を考慮すると、本遺跡の中ではかなり深い竅穴である。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 14個何れも小形で、壁際から検出されている。

〈炉〉 中央よりやや東側で地床炉と思われる70×40cm程に広がる焼土を検出した。現地性で、掘り込みは伴わない。焼土の発達は悪い。

〈出土遺物〉 (第140図、第168図、第175図、写真図版179・199・204) 晩期の遺物が多く出土している。

土器 (第140図120～127、写真図版179) 十腰内V式～大洞B式までの土器片が出土している。

土製品 (第168図819、820、写真図版199) 土偶1点(819)と円盤状土製品1点(820)が出土している。

石器 (第175図937・938、写真図版204) 砥石1点、敲石1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から縄文時代晩期前葉と思われる。

F18住居跡1号 (第23図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 調査区はほぼ中央のF18グリッド付近に位置する。現況地形は南側が幾分高位であるが、北東方向に向かうにつれ平坦化する。

〈重複遺構〉 本遺構の南側床面で検出されたF18土坑2号との新旧関係は、明確には不明である。土坑は、本住居跡床面の精査中に検出したが、土層断面を検討した結果、土坑が新しい可能性が高い。また、北東側の出入り口施設と思われる付近は、大形の柱穴状土坑や土坑と重複関係にあるが、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形は東側に張りだしを持つ柄杓状を呈する。規模は605×477cmである。

〈埋土〉 第23図土層断面A-A'の2～7層が本住居跡の埋土と判断される。八戸火山灰ブロックの混入具合から判断して人為堆積である。9～12層はF18土坑2号の埋土で、1層は表土層である。

〈壁・床〉 壁は直立気味の部分と外傾気味の部分がある。壁高は検出面から20～40cmである。床面はほぼ平坦で、八戸火山灰層を床面とする。床面には、人工的か自然的な要因かは不明であるが八戸火山灰が変色して白色を帯びる部分が見られる。

〈柱穴〉 本住居跡に伴うと思われる柱穴は29個である。土器埋設炉周辺に主柱穴と思われる25cm前後の柱穴が点在するが、柱穴配列を考慮すると不規則と言える。山側にあたる南壁～西壁際にのみ10～15cm程の小柱穴が配列される。出入口口と思われる張り出し部分から東壁にかけては、小柱穴が見られない。竅穴外で検出したPP25～PP27は、屋外柱穴の可能性が示唆されるため、本住居跡の柱穴として図示した。

〈炉〉 竅穴中央で土器埋設炉を検出した。炉の構築方法としては、胴口部径70cm、底部径20cmほどの穴を掘った後に正立で設置し、その周辺に土や土器片で囲めて作り、床面と同じ高さで平たく敷いた様相である。敷いたと思われる土器が散在するのは、埋設土器の西側付近のみである。土器片や土器を敷いた痕跡は、埋設土器の西側付近以外の場所からは検出されなかったが、本来は全面(全周)に敷いていた可能性も考えられる。焼土はみられない。

〈出入り口〉 住居北東側に、幅約120cm、奥行き約100cmの張り出し部分があり、出入り口施設と推定される。長楕円形の土坑状に掘り込まれ、住居に向かって若干傾斜する。楕円形の石あるいは木材が設置されていた可能性が考えられる。PP30についても出入り口に関係した柱穴と思われる。

〈出土遺物〉 (第140～142図、第175図、写真図版179・180・204) 晩期初頭～前葉の土器が出土している。

土器 (第140～142図128～138、写真図版179・180) 135が炉内から、128・129・134・137が床面から、他は埋土中からの出土である。炉内及び床面から出土している土器は、何れも晩期の粗製土器である。

石器 (第175図939～941、写真図版204) 削器1点、円形搔器1点、磨石1点が出土している。941の磨石の欠損品は、PP17から出土している。

〈時期〉 床面出土土器から縄文時代晩期初頭～前葉と思われる。

〈その他〉 出入り口施設と思われる張り出しを持つことで、関東地方中期に見られる柄鏡形住居跡に類似する形状を呈する。筆者は本住居跡を直接は見えていないが、精査を担当した調査員の所見を記述すると、「当初住居跡と重複する土坑類の存在も念頭に置きながら、特に念入りに観察し、精査を行った経過がある」との調査記録から形状に間違いはないと判断される。東北地方の当該期住居跡に、類例があるのかどうか本稿執筆中には探せなかった。今後の調査例の増加に期待したい。

F18住居跡2号 (第23図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区ほぼ中央平坦部のF18グリッド付近に位置する。竪穴の大部分がF18住居跡1号構築に伴い破壊を受けている。

〈重複遺構〉 本住居跡が、F18土坑1号を載り、F18住居跡1号・F18土坑3号に載られている。

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明である。残存する南壁から推定して円形である可能性が高い。

〈埋土〉 南部浮石粒を含有する暗褐色土を主体とする。

〈壁・床〉 壁は直立～僅かに外傾し、壁高は検出面から5～10cmである。床面は平坦である。

〈柱穴〉 4個を検出した。何れも壁際を巡る小柱穴である。

〈出土遺物〉 (第142図、第175図、写真図版180・204) 縄文時代晩期の土器が出土している。

土器 (第142図139～142、写真図版180) 大洞B～BC式の土器片と晩期の粗製土器片が出土している。何れも埋土中からの出土である。

石器 (第175図942、写真図版204) 削器1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から縄文時代晩期初頭～前葉と思われる。

F19住居跡状 (第23図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区ほぼ中央平坦部のF19・G19・G20グリッド付近に広がる。

〈重複遺構〉 なし。

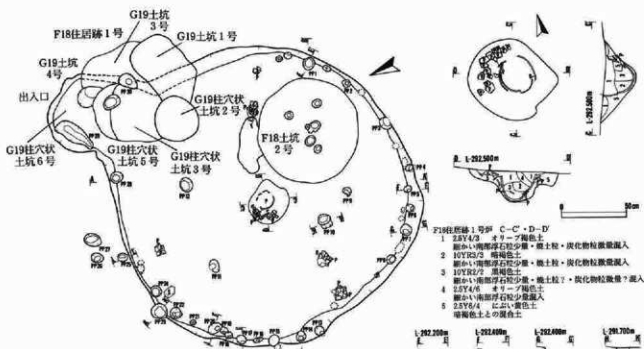
〈平面形・規模〉 平面形は円形で、規模は234×232cmである。

〈埋土〉 黒褐色上シルトを主体に、暗褐色土がブロック状に混じり、南部浮石粒が5%程度混入する。自然堆積と判断される。

〈壁・床〉 壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は検出面から15cmである。床面は平坦である。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 縄文時代晩期と推定される。



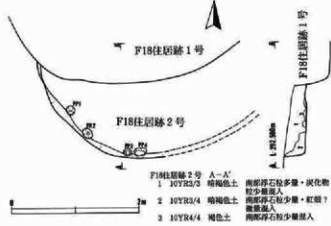
- F18住居跡1号内 C-C'・D-D'
- 28V4/2 オリーブ褐色土 細かい南面浮石粒少量・炭土粒・炭化物粒散見
 - 10YR2/3 暗褐色土 細かい南面浮石粒少量・炭土粒・炭化物粒散見
 - 10YR2/2 暗褐色土 細かい南面浮石粒少量・炭土粒?・炭化物粒散見?混入
 - 28V4/4 オリーブ褐色土 細かい南面浮石粒少量混入
 - 28V6/4 に近い黄色土 暗褐色土の混合土

- F18住居跡1号内柱穴 E-E'・F-F'・G-G'
- 10YR3/3 暗褐色土 炭褐色土・褐色土・南面浮石粒散見混入

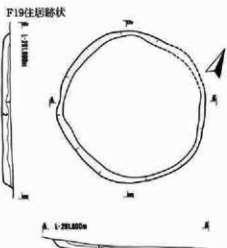
- F18住居跡2号 A-A'・B-B'
- 10YR2/2 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR4/3 に近い黄褐色土
 - 10YR3/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/2 暗褐色土

- F18住居跡2号内柱穴 E-E'・F-F'・G-G'・L-L'
- 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR4/4 褐色土
 - 10YR4/4 褐色土
 - 10YR2/4 に近い黄褐色土
 - 10YR3/4 暗褐色土
 - 10YR3/3 暗褐色土

- F19住居跡1号内柱穴 H-H'・I-I'・J-J'・K-K'・L-L'
- 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR4/4 褐色土
 - 10YR4/4 褐色土
 - 10YR2/4 に近い黄褐色土
 - 10YR3/4 暗褐色土
 - 10YR3/3 暗褐色土



- F18住居跡2号 A-A'
- 10YR2/3 暗褐色土
 - 10YR2/4 暗褐色土
 - 10YR4/4 褐色土



- F19住居跡1号 A-A'・B-B'
- 10YR2/1 暗褐色土
 - 10YR2/2 暗褐色土

第23図 F18住居跡1号・2号、F19住居跡状

E15住居跡1号(第24図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉 調査区南側のE15グリッド付近に位置する。E15住居跡2号の床面のため押し作業中に検出した。現況地形は、K11大形住居跡などが立地する調査区中央部平坦地部分より一段高い面である。

〈重複遺構〉 本住居跡がE15住居跡2号・E15柱穴状土坑10・19・22号・F15土坑1号に載られている。

〈平面形・規模〉 平面形は明瞭ではなく、野外調査では張り出しを持つ不整形とした。本来は円形であった可能性が高い。

〈埋土〉 褐色土シルトを主体とする。自然堆積と判断される。

〈壁・床〉 壁は外傾して立ち上がり、壁高は検出面から約25cmである。床面は平坦である。

〈出土遺物〉 (第168図、第176図、写真図版199・204)

土製品(第168図821・822、写真図版199) 耳飾り1点、円盤状土製品1点が出土した。

石製品(第176図948・949、写真図版204) 軽石製品2点が出土している。何れも孔が穿けられている。

〈時期〉 出土土器はないが、検出状況や位置から推定すると縄文時代晩期と思われる。

E15住居跡2号(第24図、写真図版24)

〈位置・検出状況〉 調査区南側のE15・E16・F15・F16グリッド付近に位置する。検出面はI層を除去した段階である。現況地形は、K11大形住居跡などが立地する調査区中央部平坦地部分より面的に高い段に位置する。

本遺構の精査当初は住居とは判断できず、遺物包含層分布域に所在する土坑群の集合体として捉えていた。精査の過程で斜面地がテラス状の平坦な面となったことから、竪や柱穴は検出されなかったが住居跡として認知した。

本遺構やG11住居跡などが立地する付近は、本来の旧地形は南から北に向かって緩く傾斜する緩斜面地であったと推定されるが、現況地形の標高295～296m付近の等高線の間隔が不自然に広いことと南部浮石層が削られた痕跡があることから判断して、かなり大規模な造成工事を行い平坦面を作り出し、住居域とした可能性が高い。

〈重複遺構〉 D15柱穴状土坑・D16柱穴状土坑1・7号・E15土坑4号・E15柱穴状土坑24号・E16柱穴状土坑3・11号に載られている。

〈平面形・規模〉 平面形は長楕円～楕円形と推定されるが明瞭ではない。規模についても推定の域は越えないが、長軸8m以上、短軸3m以上と思われる。

〈埋土〉 埋土上位に褐色土、中～下位にぶい黄褐色土の堆積が見られる。ハジ火山灰の混入の有り方から見て、人為堆積と思われる。

〈壁・床〉 検出された東壁は、直立気味に立ち上がり、壁高は検出面から35～50cmである。床面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉 (第142図、写真図版180) 晩期初頭～前葉の土器が出土している。

土器(第142図143～155、写真図版180) 大洞B C式を主体に大洞B式の土器が出土している。149は床面付近から出土した小形の壺形土器で、大洞B C式に相当する。

〈時期〉 床面出土土器から縄文時代晩期前葉と推定される。

〈その他〉 第24図の土層断面B-B'を観察すると、2層を主体とする住居跡と2a・2b層を主体とする住居の重複の可能性がある。床面レベルがほぼ同一であり、土色や土質も明瞭に区分できなかったため、

調査では認知しなかった。仮に2棟の住居跡であれば、形状は長楕円形ではなく、円形である可能性があらう。

E19住居跡(第25図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 調査区中央部やや東側のE19グリッドに位置する。竪穴本体としては南西壁が残存するのみである。現況地形は南から北に向かって穏やかに傾斜する。

〈立て替え〉 柱穴の配列から少なくとも1回の立て替えが推定される。

〈重複遺構〉 D19住居跡に載られている。

〈平面形・規模〉 平面形・規模ともに明確には不明である。残存する南西壁から推定して、円形あるいは楕円形の大形の住居跡であった可能性がある。

〈埋土〉 黒褐色土シルトを主体とする。

〈壁・床〉 残存する南西壁は、外傾気味に立ち上がり、壁高は検出面から約40cmである。床面は地形に沿って平坦である。

〈柱穴〉 39個の柱穴を検出した。柱穴同士の重複から推定して、数回の建て替えを行っていると思われる。

〈壁溝〉 本遺跡の中で最大規模の壁溝を検出した。残存するのは、山側となる南西部分だけである。開口部径90～110cm、底部径50～60cm、深さ5～10cmで、埋土は南部浮石ブロックを含む黒褐色土で構成される。

〈出土遺物〉(第143図、第168図、写真図版181・199) 埋土上位から、後～晩期の土器が少量出土している。

土器(第143図156、写真図版181) 埋土上位から156の台付浅鉢が出土している。

土製品(第168図823、写真図版199) 円盤状土製品1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物は縄文時代晩期の土器であるが、埋土上位のため時期推定材料としては弱いと判断する。

C16住居跡1号(第26図、写真図版26)

〈位置・検出状況〉 調査区南端部のC16～17グリッド付近に位置する。標高296～297m付近の比較的平坦面に構築されており、全体の3分の1程が調査区外に延びる。周辺から検出された土坑や住居跡を本遺構が載っている。

〈重複遺構〉 本住居跡の直下でC16住居跡2号を検出。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ円形で、規模は約420cmである。

〈埋土〉 調査区境で作成したのが、第26図の土層断面図A-A'である。3・4・10・11・12層が本住居(竪穴内)に伴う堆積土層である。全体に南部浮石粒を多量に包含する黒褐色土を主体とする。3層は中銀火山灰の2次堆積が確認されるが、下位に堆積する4層から晩期の土器が出土していることから考えて、斜面上方から流出した再堆積層と判断される。出土遺物はほとんどが4層からの出土である。12層は南部浮石粒を主体とする土壌で、壁の崩壊土と思われる。

〈壁・床〉 壁は外傾して立ち上がり、壁高は検出面から東側で約50cm、西側は約80cmで、Ⅶ(南部浮石粒層)～Ⅷ層(八戸火山灰層)で構成される。床面は南部浮石粒層の部分と八戸火山灰層の部分に分かれ、一部貼床が施されている。

〈柱穴〉 9個検出した。開口部径10～15cmの小形のものである。第26図の平面図には図示していないが、住居跡の北側で検出したC16柱穴状土坑1～3号は、規模や配列から推定して本住居跡の屋外柱穴の可能性

があろう。

〈**炉**〉 竪穴中央付近で地床炉と思われる75×65cm程に広がる焼上を検出した。現地性で焼土の発達は悪く、掘り込みは伴わない。焼土の発達は悪い。

〈**出土遺物**〉 (第143・144図、第168図、第176図、写真図版181・199・204) 後～晩期の土器片が出土しており、主体は晩期前葉である。

土器 (第143・144図157～175、写真図版181) 主に埋土下位の4層からの出土である。大河B～BC式に相当する土器が主体である。

石器 (第176図950～952、写真図版204) 石鏃1点、石匙1点、磨製石斧の欠損品1点が出土している。

土製品 (第168図824・825、写真図版199) 円盤状土製品2点が出土している。

〈**時期**〉 出土遺物から縄文時代晩期前葉と思われる。

C16住居跡2号 (第27図、写真図版27)

〈**位置・検出状況**〉 調査区南端部のC16・C17・C18・D16・D17・D18・E17・E18グリッドに広がる想定される。検出状況としては、C16住居跡1号のダメ押しを行った結果、柱穴群を検出したことから、本住居跡の存在を推定した。本住居跡は柱穴の検出に留まるが、柱穴の検出数及び配列から住居跡と認定した。柱穴が階層を運る様相であり、推定プランとしては比較的大形の住居跡の存在が認められる。また、数回の建て替え(拡張)が行われた可能性がある。北側は人的活動(縄文時代の土木工事?)により削平を受けている。

〈**重複遺構**〉 本住居跡の上にC16住居跡1号が構築されている。

〈**平面形・規模**〉 柱穴の分布や配列から推定して、平面形は円形で、規模は8m前後と思われる。

〈**埋土**〉 黒褐色土シルトを主体とする。

〈**壁・床**〉 壁は検出されていない。また床面についても明確ではない。住居の大部分は、他の遺構構築時に破壊されていたと推定される。ただし、斜面上方側に相当するC17～18グリッド付近については、C16住居跡1号などと重複しない部分である。同グリッド付近は黒色土中であるため、壁などの把握ができずに破壊した可能性も否めない。

〈**柱穴**〉 100個の柱穴を検出した。住居中央付近に所在するやや規模の大きい柱穴は、主柱穴になると思われるが、柱配置は明確ではない。

〈**出土遺物**〉 (第144図、第176図、写真図版181・204) 埋土中及び柱穴から後～晩期の土器が出土している。

土器 (第144図176～191、写真図版181) PP1から184・186、PP18から187、PP32から188、PP37から189、PP65から190、PP89から191が出土している。他は本遺構検出作業中に出土した土器で、埋土中出土と判断される。

石器 (第176図953～956、写真図版204) 石鏃2点、削器2点が出土している。

〈**時期**〉 縄文時代晩期前葉と推定する。ただし、壁柱穴の在り方から推定すれば、通例的に後期中葉～末葉に多い形態である。

〈**その他**〉 本遺跡で検出されている規模の大きな住居跡(大形住居跡)は、入り口と思われる施設を伴うが、本住居の北端から検出されたPP1・PP3及びPP2・PP4がそれに該当する可能性がある。

D19住居跡（第288図、写真図版28）

〈位置・検出状況〉 調査区中央部やや南東のD19～20グリッド付近に位置する。東部捨て場と接する部分に位置するため、検出プランは不明瞭であった。現況は傾斜変換点よりは西側であるため、比較的平坦である。

〈立て替え〉 精査では解明できなかったが、柱穴敷から推定して建て替えを行っている可能性がある。

〈重複遺構〉 本住居跡が、E19住居跡を截っている。また、本住居跡の北側に密集する土坑群及び柱穴状土坑群との新旧関係については、十和田a・b火山灰の混合土が埋土に含まれるE20土坑2号が本住居跡より新しく、それ以外の土坑類は本住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 平面形は門形で、規模は342×312cmである。

〈埋土〉 黒褐色上シルトを主体とする。南部浮石粒の混入量で区分すると2・6・7層が多量に含む層で、1・3・5層が微量に含む層である。土層観察から1・2・6層は自然堆積層で、3・4・5層は人為的に埋められた層と判断される。

〈壁・床〉 壁は直立～外傾して立ち上がる。壁高は検出面から20～50cmで平均すると40cm程の部分が多い。床面は八戸火山灰層で、若干硬い部分もあるが全体的には踏み締めた様相ではなく、ほぼ平坦である。

〈柱穴〉 17個の柱穴を検出した。壁穴の埋土に比べて、南部浮石粒の混入量の多い（7%以上含む）黒～黒褐色土を埋土とするものがほとんどである。

〈出土遺物〉（第144図、第168図、写真図版181・182・199・204・205） 晩期初頭～前葉の上器と晩期と推定される腕輪1点、石器4点が出土している。

土器（第144図192～199、写真図版181・182） 192・196が床面から出土した土器である。他は埋土中の3・5層からの出土である。

土製品（第168図826、写真図版199） 朱の塗布が見られる826の腕輪は、埋土上位の3層から出土している。3層は上記したとおり人為堆積層と判断される層であり、本住居跡を埋め戻した土中に混入されていたと判断される。3層からは大洞B式及び大洞BC式が出土していることから、本製品の所属時期は晩期前中期と推定される。

石器（第176図957～960、写真図版204・205） 尖頭器1点、削器1点、磨製石斧の欠損品1点、敲石1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から縄文時代晩期初頭～前葉と推定される。

〈その他〉 西壁際から土坑を1基検出した。検出状況から本遺構に伴う土坑と判断したが、土坑が新しい可能性もある。土坑の埋土と本住居の埋土が同じであることから廃絶時期は同じと推定される。

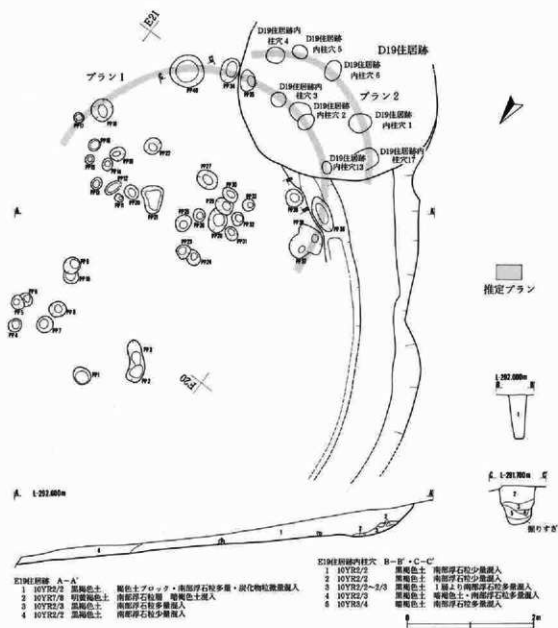
C22住居跡1号（第289図、写真図版29）

〈位置・検出状況〉 調査区東側のC22・D22グリッド付近に位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されており、II層を除去した段階で検出した。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。

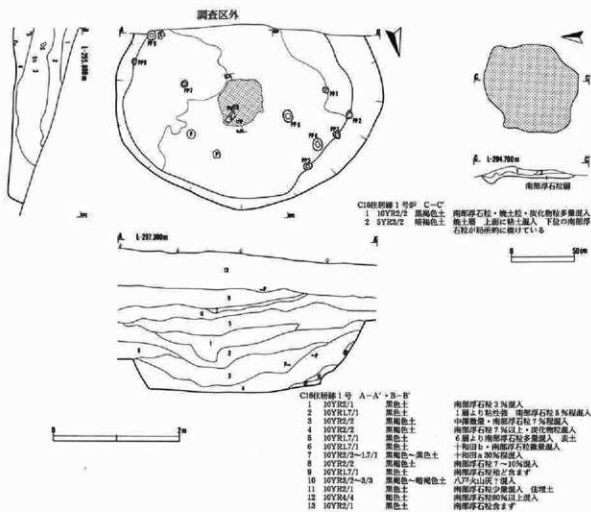
〈重複遺構〉 本住居跡が、D22柱穴状土坑1号に截られている。

〈平面形・規模〉 平面形は円形で、規模は310×284cmである。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土による自然堆積で2層に大別される。上部に堆積する1層には、十和田b火山灰が微量含まれる。2層は炭化物が微量混入し、晩期の土器が出土している。



第26図 E19住居跡



第26図 C16住居跡1号

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がり、壁高は検出面から20~30cmである。床面はやや凹凸があり、若干堅い。

<出土遺物> (第145図、第177図961、写真図版182・205) 埋土中からは晩期の土器片が微量出土している。

土器 (第145図200~203、写真図版182) 床面の直下から大河B 1~B 2式に相当する200~203の土器が出土している。

石器 (第177図961、写真図版205) 埋土中より磨石1点が出土している。

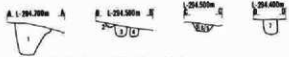
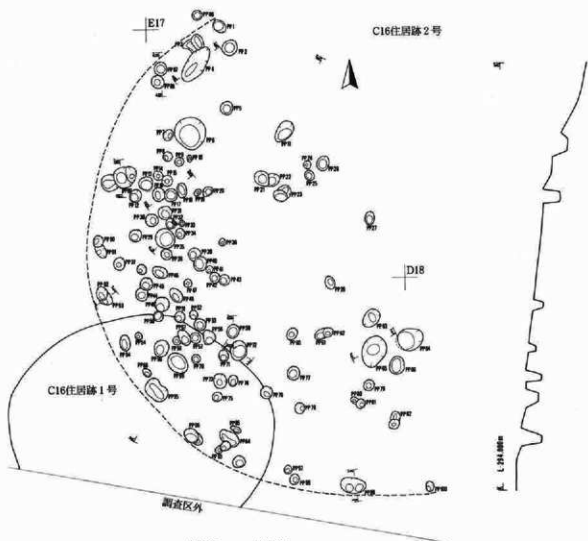
<時期> 床面の直下から縄文時代晩期初頭の土器が出土している。状況から推定して晩期初頭~前葉期と推定される。

C22住居跡状2号 (第28図、写真図版30)

<位置・検出状況> 調査区東側のC22グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されており、II層を除去した段階で検出した。現況地形は南西~北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。

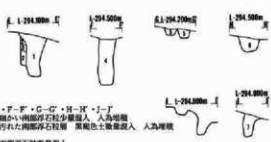
<重複遺構> 本住居跡が、C22柱穴状土坑に載られている。

<平面形・規模> 平面形は楕円形で、規模は237×198cmである。



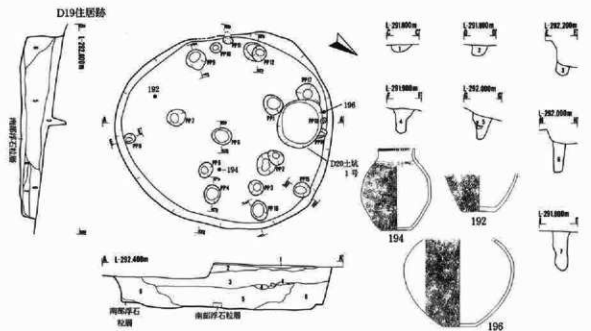
- C16住居跡2号内柱穴 A-A'・B-B'・C-C'・D-D'
- 1 10YR2/5 黒褐色土 陶器浮石粒多量混入
 - 2 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒50%混入
 - 3 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒50%混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 陶器浮石粒混入
 - 5 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒5%混入
 - 6 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒5%混入
 - 7 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒微量混入

※この地区は柱穴の陶器浮石粒類と見られているが、更に掘り下げると、10YR2/2の黒褐色土層にいきつく



- C16住居跡2号内柱穴 E-E'・F-F'・G-G'・H-H'・J-J'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 土中の陶器浮石粒少量混入 人為埋積
 - 2 10YR2/6 明黄色土 汚れた陶器浮石粒層 黒褐色土微量混入 人為埋積
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 陶器浮石粒微量混入
 - 4 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒30%混入
 - 5 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒微量混入
 - 6 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒微量混入
 - 7 10YR2/1 黒褐色土 陶器浮石粒30%混入

第27図 C16住居跡2号



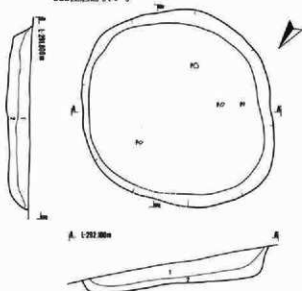
D19住居跡 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入 基本土層1層相当
- 2 10YR2/2 黒褐色土 褐色土層量 = 1層より南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入
- 3 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入
- 4 10YR2/1 黒褐色土 フロップ土 砂多量・炭化物粒微量混入
- 5 10YR2/2 黒褐色土 粒子の細かい土・南面浮石粒多量・炭化物粒微量・土塊混入
- 6 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入
- 7 10YR2/2 黒褐色土 粒子の細かい土 南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入
- 8 10YR2/3 黒褐色土 粒子の細かい土 南面浮石粒多量・炭化物粒微量混入

D19住居跡内柱穴 C-C'・D-D'・E-E'・F-F'・G-G'・H-H'・I-I'

- 1 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒2%以上混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒2%以上混入
- 3 10YR7/8 明褐色土 南面浮石粒 褐色土層入
- 4 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒混入 磁器片はしまり強
- 5 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土・南面浮石粒・焼土粒少量・炭化物少量・土塊混入
- 6 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒10%以上混入
- 7 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒10%以上混入

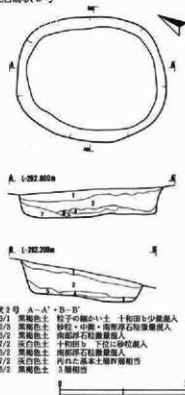
C22住居跡状1号



C22住居跡状1号 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒褐色土 上位に十和田b・南面浮石粒多量・木屑多量・土層微量混入 全体のc
- 2 10YR2/2 黒褐色土 細かい南面浮石粒・炭化物粒微量・晩期土層微量混入

C22住居跡状2号



C22住居跡状2号 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒褐色土 粒子の細かい土 十和田b少量混入
- 2 10YR2/3 黒褐色土 砂粒・c層・南面浮石粒微量混入
- 3 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒微量混入
- 4 10YR7/2 灰白色土 十和田b 下位に砂粒混入
- 5 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒微量混入
- 6 10YR7/2 灰白色土 内れに基本土層許り相当
- 7 10YR2/2 黒褐色土 3層相当

第28図 D19住居跡、C22住居跡状1号・2号

〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体とし、7層に大別される。上部に堆積する1層と下位～床面に堆積する4層に1和田b火山灰が微量含まれ、2・6層に中礫火山灰が微量含まれる。よって、1・4層は基本層序のⅡ層に、2・6層はⅣ層に相当する土壌である。十層の堆積様相からは自然堆積と判断される。それらの下位に堆積する7層はⅢ層（遺物包含層）に相当するが、あるいは掘り過ぎである可能性もある。調査では不明瞭であったが、5・6層は貼床かもしれない。1・2・4層については、4層はプライマリーの可能性が高く、1・2層は地滑りなどに起因する再堆積で上層が上下逆転現象を生じていると判断される。

〈壁・床〉 壁は外傾して立ち上がり、壁高は検出面から30～50cmである。床面はやや凹凸があり、若干堅い。

〈出土遺物〉（第145図、写真図版182） 埋土中からの出土土器はなく、床面の直下からの出土土器を掲載した。

土器（第145図204、205、写真図版182） 床面の直下から十腰内Ⅰ式に相当する204・205の土器が出土している。

〈時期〉 床面の直下から縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土していることから、後期前葉より新しい時期である。ただし、床面直下から出土した土器は、遺物包含層中に含まれていた土器と判断されることから、住居本来の時期は明確ではない。

C23住居跡状1号（第29図、写真図版31）

〈位置・検出状況〉 調査区東側のC23グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。

現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出状況は、包含層精査時に設定したB25～M20土層断面の観察から検出した。平面的に検出できなかったため、プランの半分程は破壊してしまった。

〈重複遺構〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明であるが、残存部から楕円形で2.2m程と推定される。

〈埋土〉 1層が本遺構の埋土で、基本層序のⅢ層（遺物包含層）に相当する。自然堆積の様相である。

〈壁・床〉 壁はⅢ～Ⅴ層中に相当し、外傾～外反気味に立ち上がり、壁高は45cm程である。床面はⅤ層中で、やや凹凸がある。

〈出土遺物〉（第145図、第177図、写真図版182・205） 埋土中より後期初頭の土器と礫石器1点が出土している。

土器（第145図206～210、写真図版182） 十腰内Ⅰ式に相当する土器が埋土中より出土している。

石器（第177図962、写真図版205） 962は石刀と推定される。

〈時期〉 遺物包含層の下位に近い部分で構築されていることと、出土遺物から判断して縄文時代後期初頭～前葉と推定される。

C23住居跡状2号（第29図、写真図版32）

〈位置・検出状況〉 調査区東側のC23～C24グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出状況は、包含層精査時に設定したB21～F27土層断面の観察から検出した。平面的に検出できなかったため、プランの半分程は破壊してしまった。

〈重複遺構〉 本住居跡が、C24十坑に截られている。

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明であるが、残存部から円～楕円形で2.5m程と推定される。

〈埋土〉 黒色～黒褐色土により構成される。全て基本層序のⅢ層に相当する土壌であり、自然堆積の様相であることから、遺物包含層の再堆積層と思われる。

〈壁・床〉 壁は外反気味に立ち上がり、壁高は45cm程である。床面は丸底気味である。

〈出土遺物〉 (第145図211～220、第177図963、写真図版182・205) 後期初頭～中葉の土器と石器1点が出土している。

土器(第145図211～220、写真図版182) Ⅰ腰内Ⅰ式相当を主体に、十腰内Ⅲ式相当の土器が微量出土している。なお、晩期の土器は出土していない。

石器(第177図963、写真図版205) 削器1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から縄文時代後期初頭～前葉と推定される。

C24住居跡状(第29図、写真図版33)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のC23・C24・D24グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出面は基本層序のⅢ層中位～下位で、V～Ⅶ層中に構築されている。斜面下方側に相当する東壁は、検出できずに破壊してしまった可能性が高い。

〈重複遺構〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明である。残存する西壁から推定して、楕円形で4m程の住居跡と思われる。

〈埋土〉 黒～黒褐色土シルトにより構成される。自然堆積物である。

〈壁・床〉 壁は外反し立ち上がり、壁高は検出面から60～70cmである。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 本住居跡遺構に伴う可能性の高い柱穴は図示した3基を認定したが、規模にばらつきが多く、精査時から明瞭に把握されたものではなく、特にPP3としたものは単独の土坑の可能性もある。

〈出土遺物〉 (第146図、第168図、第177図、写真図版182・183・199・205) 後期初頭～中葉の土器を主体とし、晩期の土器が微量出土している。埋土上位の1層からの出土が多い。

土器(第146図221～233、写真図版182・183) 掲載したのは、Ⅰ腰内Ⅰ～Ⅳ式に相当する土器主体である。

土製品(第168図827・828、写真図版199) 土偶1点と円盤状土製品1点が出土している。土偶は、後期の中空土偶の足部である。

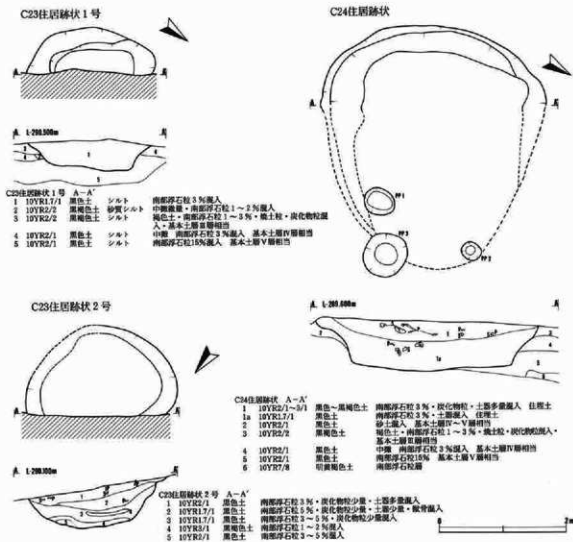
石器(第177図964～967、写真図版205) 石鏃1点、削器2点、抉入石器1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物は縄文時代後期前葉～晩期初頭までのものが出土しており、時期の断定が難しい。検出面から推定すれば、遺物包含層の中～下位であることから後期と思われる。

B21住居跡1号(第30図、写真図版34)

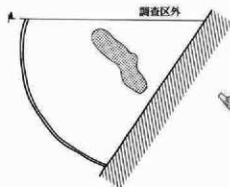
〈位置・検出状況〉 調査区東側のB21・C21グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。北側プランの大部分が調査区外に延びる。また、本住居跡状の北西側プランは、調査初年度に入れた試掘トレンチで破壊している。

〈重複遺構〉 本住居跡直下からB21住居跡状2号を検出している。

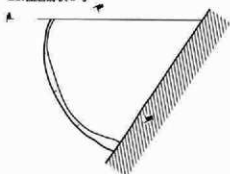


第29図 C23住居跡状1号・2号、C24住居跡状

B21住居跡状1号



B21住居跡状2号



1:1-292.800m



1:1-292.800m

1:1-292.700m



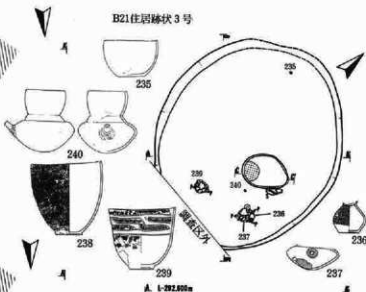
B21住居跡状2号

B21住居跡状1-2号 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1-2/2 黒色~黒褐色土
- 2 10YR2/1 黒色土
- 3 10YR2/2 黒褐色土
- 4 10YR2/3 黒褐色土
- 5 10YR2/2 黒褐色土
- 6 10YR2/1 黒色土
- 7 7.5YR4/4 褐色土
- 8 10YR2/2 黒褐色土
- 9 10YR2/3 黒褐色土
- 9a 10YR2/1-2/2 黒色土~黒褐色土
- 10 5YR4/6赤褐色土と7.5YR4/6褐色土との混合土
- 11 10YR2/2 黒褐色土
- 12 10YR3/1 黒褐色土
- 13 10YR3/1 黒褐色土

1:1-292.700m

B21住居跡状3号



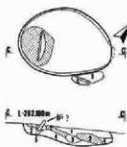
1:1-292.600m

1:1-292.600m

B21住居跡状3号 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒色土 南面浮石粒数多・炭化物粒数量混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒数多・炭化物粒数量混入
- 3 10YR2/1 黒色土 1層より南面浮石粒多量・炭化物粒数量混入
- 4 10YR2/2-2/3 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- 5 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭土粒・炭化物粒数量混入
- 6 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒数量混入
- 7 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒数量混入
- 8 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒数量混入
- 9 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭土粒数多・炭化物粒数量混入
- 10 10YR2/2 黒褐色土 細かい南面浮石粒少量混入

- 表土 耕作土・腐葉土等
 十和田b混入
 南面浮石粒少量・後~晩期の遺物多量混入
 4層・南面浮石粒少量・炭化物粒数量混入
 南面浮石粒少量混入
 南面浮石粒少量・炭土粒数多・炭化物粒数量混入
 黒褐色土・細かい南面浮石粒少量混入
 中絶多量・南面浮石粒少量混入
 南面浮石粒少量混入
 南面浮石粒少量・炭土粒数多・炭化物粒少量混入
 南面浮石粒少量・炭化物粒数量混入
 南面浮石粒少量・炭土粒数量混入
 南面浮石粒少量・炭土粒数多・炭化物粒数量混入
 南面浮石粒少量混入
 南面浮石粒少量混入



1:1-292.600m

B21住居跡状3号 C-C'

- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭土粒少量・炭化物粒数量混入
- 2 7.5YR4/6 明褐色土 焼土層 南面浮石粒数量混入
- 3 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒数多・炭土粒数多・炭化物粒数量混入
- 4 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒数多混入
- 5 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒数多混入
- 6 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒数多・炭土粒数量混入 9C'の裏の?)

第30図 B21住居跡状1号・2号・3号

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに不明であるが、残存部から円形で3m程と推定される。

〈埋土〉 黒褐色シルトを主体とする。第30図十層断面A-A'は、上位がB21住居跡1号で、下位がB21住居跡状2号に伴う埋土である。斜面上方からの流入による自然堆積で、Ⅲ・Ⅳ層の再堆積層で構成される。埋上下位に見られる8層には中礫火山灰を含む。本遺跡に見られる中礫火山灰は所謂アフズナと呼ばれるような粉状(砂っぽい)のもので、遺跡全面に見られるものではなく、緩斜面部において遺物包含層(Ⅲ層)より下位の黒褐色土中(Ⅳ層)に二次堆積で混入する。本住居跡付近の周辺は、他に比べ特にⅣ層中の中礫火山灰の含有率が高い。

〈壁・床〉 壁は外傾して立ち上がり、壁高は検出面から5~10cmである。床面は平坦を基調とするが、凹凸がある部分がある。

〈柱穴〉 床面及び壁穴外周辺からは、柱穴の検出はない。

〈炉〉 壁穴中央部分で、地床炉と思われる椀門形に広がる現地性の焼土を検出している。焼土の発達は悪い。

〈出土遺物〉 (第146図、写真図版183) 埋土中からは晩期初頭~前葉の土器の小片が少量出土している。土器(第146図234、写真図版183) 文様が明確なものは、234のみである。

〈時期〉 検出面から縄文時代晩期初葉と推定される。

B21住居跡状2号(第30図、写真図版34)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB21・C21グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西~北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。北側プランの大部分が調査区外に延びる。本住居跡状の北西側は、調査初年度に入れた試掘トレンチで破壊している。

〈重複遺構〉 本住居跡直上からB21住居跡状1号を検出している。

〈平面形・規模〉 残存部から円形で3m程と推定される。

〈埋土〉 黒褐色シルトを主体とする。自然堆積である。

〈壁・床〉 壁は直立気味に立ち上がる。床面は平坦である。

〈出土遺物〉 遺物の出土はない。

〈時期〉 縄文時代晩期初頭~前葉と推定される。

B21住居跡状3号(第30図、写真図版35)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB21・B22・C21・C22グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西~北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出面はⅢ層で、検出作業中には後~晩期の土器が混在して出土している。

〈重複遺構〉 重複関係にあるC21柱穴状土坑3・4号との新旧関係について、C21柱穴状土坑は本住居跡の床面で検出したが、本遺構の土層断面を再観察した結果、本遺構が古いと判断された。

〈平面形・規模〉 平面形は円形で、規模は3.2m程である。

〈埋土〉 黒褐色土シルトを主体とする。自然堆積の様相である。

〈壁・床〉 壁はⅢ層中で、外傾気味に立ち上がり、壁高は検出面から15~25cmである。床はⅢ層に相当し、平坦である。床面は特に硬くはないことから、踏み締めは行っていないと思われる。

〈柱穴〉 柱穴は検出されていない。

〈炉〉 床面から石囲炉の存在を示唆させる石1個と焼土を検出した。ただし、周辺に石の抜き取り跡は検出していないことから、石囲炉であったかどうか明確ではない。焼土は楕円形に広がり、規模は70×50cm程で、床面から10cm程の掘り込みを持つ。焼土は明瞭に把握できるわけではなく、不明瞭であった。

〈出土遺物〉 (第146～148図、第169図、第177図、写真図版183・184・199・205) 埋土上位～床面にかけて多量の土器が出土している。土器については、埋土中～床面まで比較的単時期に近い様相である。

土器 (第146～148図235～254、写真図版183・184) 235～239は床面、240が床面直上、その他は埋土中からの出土である。240の注1土器は、床面より5cmほど上で、横倒しの状態で出土した。

土製品 (第169図829～832、写真図版199) ミニチュア土器1点、耳飾り1点、鐸形土製品1点、人面付き土製品1点が出土している。

石器 (第177図968～970、写真図版205) 石鎌2点、削器1点が出土している。

〈時期〉 床面出土遺物から縄文時代晩期初頭の大洞B1式古期と思われる。ただし、床面出土土器についても家防道具ではなく、住居廃絶後に投げ込まれた様相である。住居として機能していたのは大洞B1式古期より若干古い可能性が考えられる。

B22住居跡1号 (第31図、写真図版36)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB22・B23・C22・C23グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出面はⅠ層下位～Ⅲ層上位である。本遺構の下位よりB22住居跡状2号を検出している。東側は調査初年度に入れた試掘トレンチで破壊している。

〈重複遺構〉 本住居跡の下位よりB22住居跡状2号を検出している。東側は調査初年度に入れた試掘トレンチで破壊している。

〈平面形・規模〉 平面形は円形で、規模は3m程である。

〈埋土〉 黒褐色シルトを主体とする自然堆積層である。

〈壁・床〉 壁は直立～外傾して立ち上がり、壁高は35cm程である。床面は平州である。

〈柱穴〉 未検出である。

〈炉〉 床面から10～15cmの掘り込みを持つ地床炉を検出した。平面形は楕円形で、規模は短軸で60cm程で、長軸は調査区外に延びることから不明である。焼土の発達は良好であった。

〈出土遺物〉 (第149図、第178図、写真図版184・205・206) 後期初頭の土器片が多いが、全て流れ込み的な自然流入によると思われる。

土器 (第149図255～266、写真図版184) 十腰内Ⅰ式～大洞BC式まで時期幅が広く出土している。

石器 (第178図971～980、写真図版205・206) 石錐1点、削器8点、円形撻器1点が出土している。

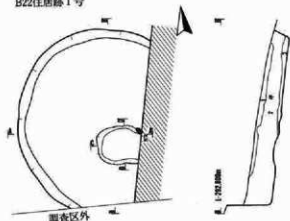
〈時期〉 縄文時代晩期と推定される。出土遺物の中で最も新しいのは大洞BC式である。

B22住居跡2号 (第31図、写真図版37)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB22・C22グリッドに位置する。本住居跡は東部捨て場内に構築されている。現況地形は南西～北東方向に傾斜し、遺物包含層が厚く堆積する付近である。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層上位である。本遺構の東側は、調査初年度に入れた試掘トレンチで破壊している。

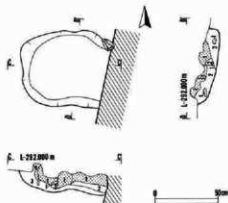
〈重複遺構〉 本住居跡状の直上からB22住居跡1号を検出している。

B22住居跡 1号



B22住居跡 1号 A-A'・B-D'

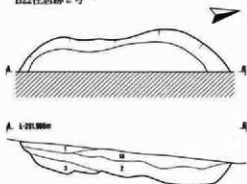
- 1 10YR2/1 黒褐色土 土層面・南部浮石粒散見混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒混入
- 3 10YR2/1 黒褐色土 炭化物粒混入



B22住居跡 1号 C-C'・D-D'

- 1 7.5YR5/6 褐色土 焼土層 黒褐色土が強く浸透受ける
焼土が厚いところはこの厚さ上下2層に分けて観察された結果?
- 2 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒との混合土 南部浮石粒少量
焼土ブロック少量混入 基本土層面埋没人物
- 3 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒少量混入 基本土層面埋没人物

B22住居跡 2号



B22住居跡 2号 A-A'

- 1 10YR2/1 黒褐色土
南部浮石粒 3 ~ 7 個混入
- 1a 10YR2/1 黒褐色土
南部浮石粒 3 個混入
- 2 10YR2/1 黒褐色土
中層・南部浮石粒 1 個混入
- 3 10YR2/1 黒褐色土
中層・南部浮石粒 1 個混入

第31図 B22住居跡 1号・2号

<平面形・規模> 平面形は不明であるが、残存する西壁から円形あるいは楕円形と推定される。規模は310cmである。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする自然堆積である。

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がり、壁高は30～40cm程である。床面は平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 出土遺物がないことから明確には不明である。検出面などの状況から後期前半期と思われる。

2 掘立柱建物跡

15軒を検出(認知)した。4本の柱穴と6本の柱穴から構成されるものがあり、平面形は正方形及び長方形を呈する。柱穴の埋土を観察した結果、埋土に柱材が存在した可能性を示すアタリが確認できるものや柱の重量により底面が変色したと思われる柱穴が見受けられることから、当時柱材が柱穴内に設置されていた可能性は高いと言えよう。また、人為堆積と自然堆積の有無については、上層堆積の状況と南部浮石粒の様相から判断している。南部浮石粒の様相について調査記録では以下の基準で自然・人為に区分している。

プライマリーな南部浮石粒と比較して人為により埋め戻されたと思われる土層に混入する南部浮石粒は、黒色土で汚れたりあるいは潰れた(粒径が細かい)様相を示す。ただし、黒色シルトなどの埋め土に意図的に南部浮石粒を混入したものは捉えていない(黒色シルト中における南部浮石粒の含有率の多少は、斜面の傾斜角度などの違いによる地形的な影響と捉えている)。

個々の掘立柱建物跡については、本稿ではアタリの在り方などから柱材が設置されていたと想定して記述することとするため、検測的な記載も多々あることをお断りするとともにお許し願いたい。

時期については、晩期初頭以降でI和田b火山灰降下以前と捉えられる。本遺跡から弥生時代の土器が微量(総量で10片以下)しか出土していないこと、掘立柱建物跡の分布が晩期の住居跡の分布と重なることから考えて、概ね晩期前葉と推定される。

C21掘立柱建物跡(第32図、写真図版なし)

<位置・検出状況> 調査区南東のC21・C22・D22グリッドに位置する。本遺構の所在する付近は平坦部と斜面部との傾斜変換点に位置する。遺構は遺物包含層(Ⅲ層)を掘り込んで構築している。

<構成する遺構名> C21柱穴状土坑2号(PP1)、D22柱穴状土坑1号(PP2)、C22柱穴状土坑1号(PP3)、C21柱穴状土坑3号(PP4)

<主軸方向> N24° W

<柱穴配置> 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

<壁・底面> 柱穴の壁・底面ともⅢ層中である。柱穴の検出面が当時の構築面かどうか不明であり、上層構造の存在が不明なことから推測の域を越えないが、柱穴の検出面を床面と想定すると地形に沿いかなり外傾することになる。上層構造があったと仮定するならば、斜面下方側に丈の長い柱材を使用した可能性も考えられる。

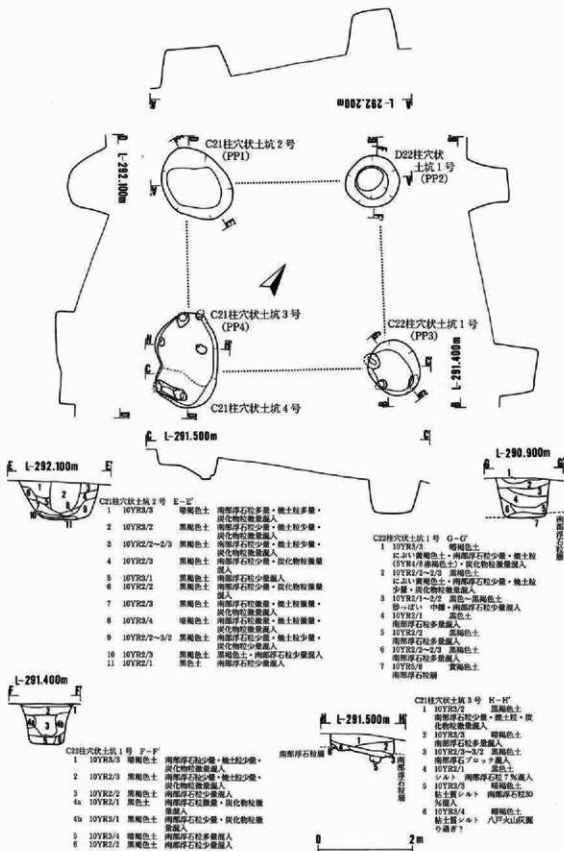
<埋土> 柱穴の埋土は、暗褐色土と黒褐色土で構成される。

PP1とPP2の土層断面には、中央にアタリと思われる層があり、柱材の太さが推定できる。PP1は約65cm、PP2は約40cmである。アタリの形状から柱は直立気味であった可能性が高い。またPP2は、柱を途中から切断し、埋め戻した(2層)可能性が土層観察から推定される。

PP3は自然堆積の様相で、アタリが見られない。小形土坑状の痕跡が見られることから、柱材を支えた根固め石のものが設置してあったことが考えられる。

PP4の堆積の様相からは、自然堆積なのか人為堆積なのか判断できなかった。重複関係にあるC21柱穴状土坑4号とは新山関係が明確ではないが、柱材を抜き取った時の痕跡かあるいは構築時に柱材を柱穴にはめ込むまでのスロープ的な施設(痕跡)と言う2つの可能性が推定される。

<柱穴の規模> PP1(135~165cm)・PP2(108cm)・PP3(102~110cm)・PP4(132~200cm)



第32图 C21型立柱建物跡

<柱穴深度> PP1 (80cm)・PP2 (84cm)・PP3 (82cm)・PP4 (40cm)

<柱穴間隔> PP1-PP2 (4m)・PP2-PP3 (4.2m)・PP3-PP4 (4.3m)・PP4-PP1 (4m)

<出土遺物> (第164図、第172図、第191図、写真図版196・202・212)

土器 (第164図690~692、写真図版196) D22柱穴状土坑1号 (PP2) より691と692の土器が出土している。
土製品 (第172図894、写真図版202) D22柱穴状土坑1号 (PP2) より円盤状土製品が1点出土している。
石器 (第191図1121~1123、写真図版212) C21柱穴状土坑2号 (PP1) より1121の石鏃、C22柱穴状土坑1号 (PP3) より1122・1123の石鏃が出土している。

D16獨立柱建物跡1号 (第33図、写真図版38)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のD16・D17・D18・E16・E17グリッドに位置する。遺構は八戸火山灰層を掘り込んで構築されている。

<構成する遺構名> E16柱穴状土坑6号 (PP1)、E16柱穴状土坑4号 (PP2)、E17柱穴状土坑1号 (PP3)、D18柱穴状土坑1号 (PP4)、D17柱穴状土坑11号 (PP5)、D16柱穴状土坑9号 (PP6)

<主軸方向> N55° W

<柱穴配置> 6本柱で構成され、平面形は長方形を呈する。

<底面> 八戸火山灰層に相当する。

<煙土> 柱穴状土坑の埋土は、黒褐色土を主体とする。

PP1はE16柱穴状土坑14・19号と重複関係にあり、PP1が古いことがわかる。アタリは明確ではない。

PP2は2層がアタリと思われる層で、柱の太さは約40cmと推定される。

PP3・PP4・PP5は黒褐色土による単層で、アタリは存在しない。

PP6はD16柱穴状土坑4号やD16柱穴状土坑10号を破壊して構築されている。6・7・9層がアタリと推定される土層で、南部浮石粒の含有率が他より高い。また、10層は人為堆積の様相を示す土層なことから、柱の据え方に使用された土と思われる。土層観察を総括すると、柱は抜き取られている可能性がある。

<柱穴の規模> PP1 (64~82cm)・PP2 (74cm)・PP3 (80~94cm)・PP4 (60cm)・PP5 (64cm)・PP6 (65~80cm)

<柱穴深度> PP1 (60cm)・PP2 (84cm)・PP3 (52cm)・PP4 (66cm)・PP5 (24cm)・PP6 (110cm)である。

<柱穴間隔> PP1-PP2 (3.3m)・PP2-PP3 (3.6m)・PP3-PP4 (3.6m)・PP4-PP5 (3.0m)・PP5-PP6 (3.4cm)・PP6-PP1 (3.9cm)

<出土遺物> (第164図、第191図、写真図版196・213) ※1125は写真掲載のみ

土器 (第164図685・703・704、写真図版196) E16柱穴状土坑4号 (PP2) より703・704、D16柱穴状土坑9号 (PP6) より685の土器が出土している。

石器 (第191図1125・1134、写真図版213) D17柱穴状土坑1号 (PP3) より1125、E16柱穴状土坑4号 (PP2) より1134が出土している。

D16獨立柱建物跡2号 (第34図、写真図版38)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のD16・D17・D18・E17グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 E17柱穴状土坑2号 (PP1)、D18柱穴状土坑9号 (PP2)、D17柱穴状土坑2号 (PP3)、D16柱穴状土坑3号 (PP4)

〈主軸方向〉 N35° E

〈壁・底面〉 何れも八戸火山灰を掘り込んで構築されている。

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈埋土〉 柱穴の埋土は、南部浮石粒が少量混入する黒褐色土・シルトを主体とする。

PP1・PP2は検出面の関係で、柱穴の下半を検出したに過ぎない。黒褐色土を主体とする。

PP3・PP4は当時の構築面に近い検出面で検出したと思われるものである。柱材を柱穴に入れる際のスロープと思われる浅い掘り込みが伴う。PP3は北東方向に傾斜することから柱の出し入れ?の作業は、北東方向から行ったと考えられる。

PP1、PP2、PP3、PP4ともアタリは確認されていない。

〈柱穴の規模〉 PP1 (50cm) ・PP2 (66cm) ・PP3 (88~110cm) ・PP4 (80cm)

〈柱穴深度〉 PP1 (10cm) ・PP2 (42cm) ・PP3 (110cm) ・PP4 (100cm) である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2 (4.0m) ・PP2-PP3 (4.0m) ・PP3-PP4 (4.1m) ・PP4-PP1 (4.0m)

〈出土遺物〉 (第164図、第172図、写真図版196・202)

土器 (第164図686・687、写真図版196) D17柱穴状土坑2号 (PP3) より686・687の土器が出土している。
土製品 (第172図893、写真図版202) D16柱穴状土坑3号 (PP4) より勾玉 (飾り玉に分類) が1点出土している。

E15竪立柱建物跡 (第35図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 調査区南側のE15・E16・F15グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 F15柱穴状土坑2号 (PP1)、E16柱穴状土坑16号 (PP2)、E15柱穴状土坑19号 (PP3)、E15柱穴状土坑2号 (PP4)

〈主軸方向〉 N25° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 八戸火山灰層を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で構成される。

PP1は1・3層がアタリと思われる層で、柱の太さは40cm前後と推定される。

PP2はアタリが明確ではない。開口部付近の土層堆積から考えて、柱が抜き取られている可能性がある。

PP3は八戸火山灰に南部浮石粒が少量混入する。

PP4は黒褐色土による単層で、南部浮石粒を多量に包含する。

〈柱穴の規模〉 PP1 (84cm) ・PP2 (60~108cm) ・PP3 (44cm) ・PP4 (48cm)

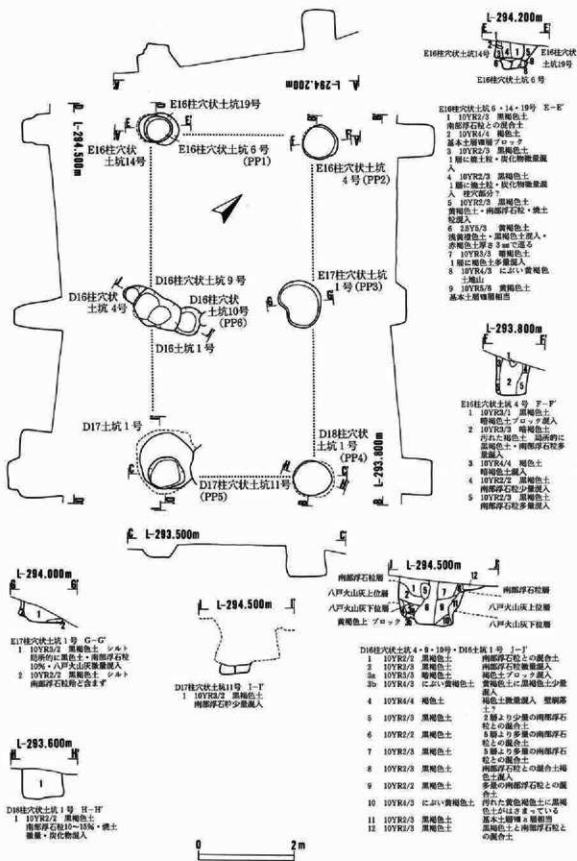
〈柱穴深度〉 PP1 (98cm) ・PP2 (74~104cm) ・PP3 (24~30cm) ・PP4 (26cm) である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2 (3.64m) ・PP2-PP3 (3.64m) ・PP3-PP4 (3.64m) ・PP4-PP1 (3.58m)

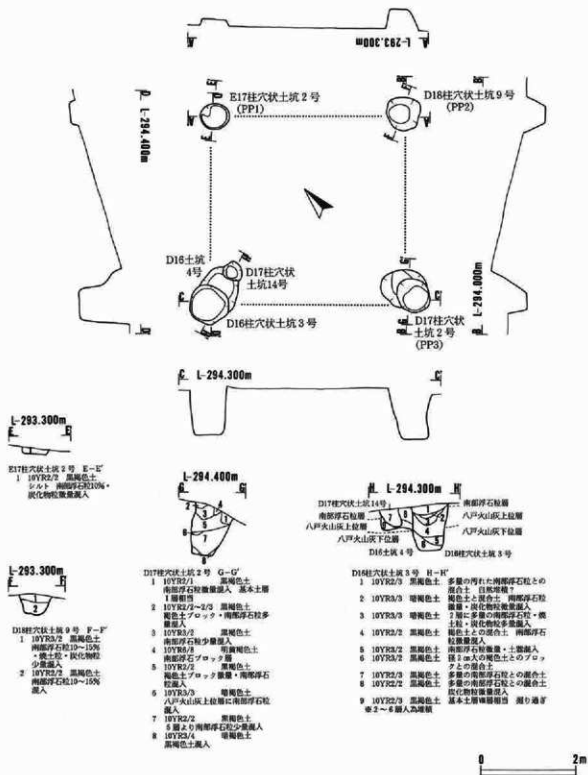
〈出土遺物〉 (第164図、第165図、写真図版196・197)

土器 (第164・165図693・694・720、写真図版196・197) E15柱穴状土坑2号 (PP4) より693・694、F15柱穴状土坑2号 (PP1) より720の土器が出土している。

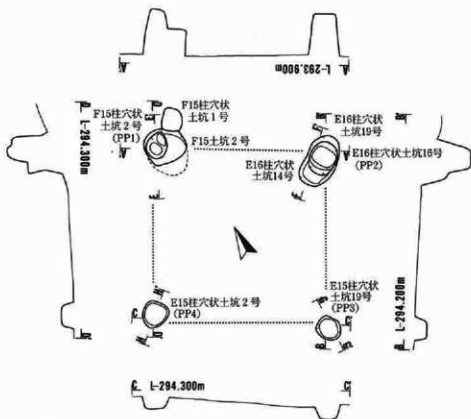
〈その他〉 斜而下方向に位置するPP3・PP4は、PP1・PP2と比較して深さが非常に浅い。本遺構は、整



第33図 D16獨立柱建物跡1号



第34図 D16独立柱建物跡2号



F L-294.300m E



- F15柱穴状土坑2号 E-F
 1 10YR2/2 暗褐色土
 陶器碎片少量混入 柱状
 腐土
 2 10YR4/4 褐色土
 基本土層以下で褐色
 土ブロック土
 3 10YR2/2 暗褐色土
 1層より陶器碎片少量混
 入 柱状腐土
 4 10YR4/2-4/2 灰黄褐色土
 明黄褐色土を含む黄褐色土
 との混合土
 5 10YR4/2 灰黄褐色土
 明黄褐色土を含む黄褐色土
 との混合土 本柱穴の再利
 用した柱状腐土部分?
 ※本柱穴はF15土坑1号より新
 しい

L-294.000m E



L-294.300m E



- E16柱穴状土坑19号 G-G'
 1 10YR2/4 暗褐色土
 陶器碎片少量・炭化
 物少量混入
 2 10YR4/6 褐色土
 陶器碎片少量混入

L-294.400m E



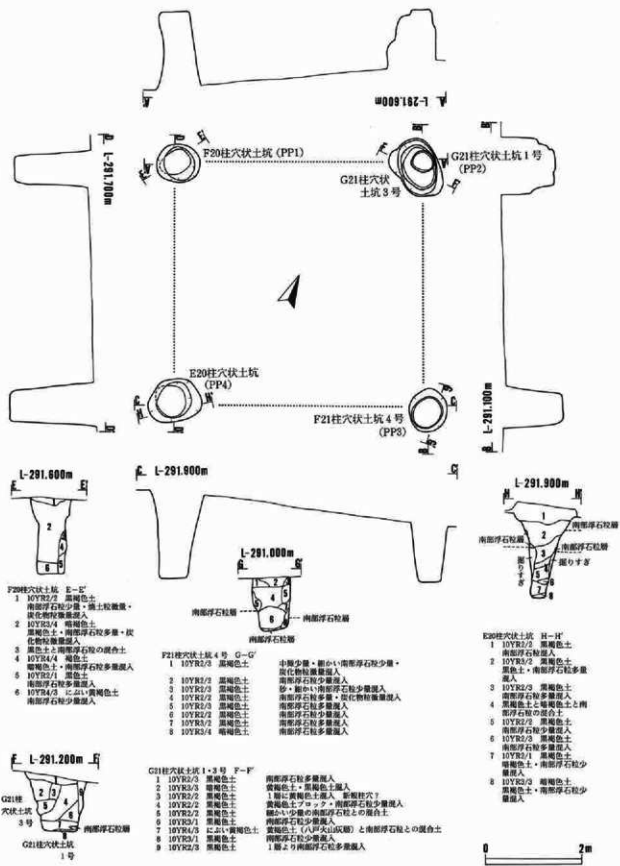
- E15柱穴状土坑2号 H-H'
 1 10YR2/2 暗褐色土
 多数の陶器碎片との混合土

E16柱穴状土坑16号 F-F'

- 1 10YR2/2 暗褐色土
 褐色土・陶器碎片少量混入
 上位にある遺構の埋土?
 2a 10YR2/2 暗褐色土
 褐色土・陶器碎片少量混入
 2b 10YR2/2 暗褐色土
 褐色土多量・陶器碎片少量混
 入
 3 10YR4/6 褐色土
 八河穴山灰層に黄褐色土混入
 ・陶器碎片少量混入
 4 10YR2/4 暗褐色土
 黄褐色土少量混入
 5 10YR4/6 褐色土
 黄褐色土少量混入
 6 10YR4/6 褐色土
 明黄褐色土(基本土層上部)
 粒微細・陶器碎片少量混入
 7 10YR4/3 濃い黄褐色土
 褐色土との混合土 明黄褐色
 土ブロック混入

0 2m

第35図 E15掘立柱建物跡



第36図 E20獨立柱建物跡

理作業において柱間隔から独立柱建物跡に認定したものである。よってPP1・PP2は北側（削平を受けた地形と推定される地域）に対応する別グループの独立柱建物跡であった可能性もある。

E20独立柱建物跡（第36図、写真図版39）

〈位置・検出状況〉 調査区南東のE20・E21・F20・F21・F22・G21グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 F20柱穴状土坑（PP1）、G21柱穴状土坑1号（PP2）、F21柱穴状土坑4号（PP3）、E20柱穴状土坑（PP4）

〈主軸方向〉 N25° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 VI～VIII層にかけて構築されている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で構成される。

PP1は2・6層がアタリと思われる層で、柱の太さは45～50cmと推定される。

PP2は4層がアタリと思われる、開口部付近の痕跡から考えて柱が抜き取られている可能性がある。

PP3は土層断面からは人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

PP4は4・7層がアタリの可能性があるが、明確ではない。

〈柱穴の規模〉 PP1（88cm）・PP2（80～128cm）・PP3（82cm）・PP4（80～112cm）

〈柱穴深度〉 PP1（164cm）・PP2（130cm）・PP3（116cm）・PP4（206cm）である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2（5.2m）・PP2-PP3（5.2m）・PP3-PP4（5.2m）・PP4-PP1（5.2m）

〈出土遺物〉（第164図、第165図、第172図、写真図版196・197・202）

土器（第164図706、第165図723・736、写真図版196・197）E20柱穴状土坑3号（PP4）より706、F20柱穴状土坑（PP1）より723、G21柱穴状土坑1号（PP2）より736の土器が出土している。

土製品（第172図899、写真図版202） G21柱穴状土坑1号（PP2）より899の円盤状土製品が出土している。

E21独立柱建物跡（第37図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉 調査区南東のE21・E22・F21・F22グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 F21柱穴状土坑1号（PP1）、F22柱穴状土坑（PP2）、E22柱穴状土坑（PP3）、E21柱穴状土坑1号（PP4）

〈主軸方向〉 N18° E

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 壁はIII（遺物包含層）～VII（南部浮石層）層で、底面はVIII（八戸火山灰層）層に相当する。

〈埋土〉 柱穴の埋土は、南部浮石粒を含む黒褐色土シルトを主体とする。

PP1は土層断面を観察した結果、人為的に埋め戻された可能性がある。

PP2は堆積様相からは、人為堆積か自然堆積か判断をできかねる。

PP3は自然堆積の様相である。7層（南部浮石粒）は掘り過ぎの可能性がある。

PP4は自然堆積の様相である。

〈柱穴の規模〉 PP1（80～90cm）・PP2（96～100cm）・PP3（76cm）・PP4（80～110cm）

〈柱穴深度〉 PP1（114～120cm）・PP2（90cm）・PP3（128cm）・PP4（170cm）

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2（4.7m）・PP2-PP3（4.65m）・PP3-PP4（4.7m）・PP4-PP1（4.7m）

<出土遺物> (第165図、第172図、写真図版197・202)

土器 (第165図707・708・711～714・725、写真図版197) E21柱穴状土坑1号 (PP4) より707・708、E22柱穴状土坑 (PP3) より711～714、F22柱穴状土坑 (PP2) より725の土器が出土している。

土製品 (第172図897・898、写真図版202) F22柱穴状土坑 (PP2) より897のミニチュア土器と898の三角形土製品が出土している。

F14掘立柱建物跡 (第38図、写真図版40)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のF14・F15・G14グリッドに位置する。

<構成する遺構名> F14柱穴状土坑7号 (PP1)、G14柱穴状土坑8号 (PP2)、F15柱穴状土坑9号 (PP3)、F14柱穴状土坑1号 (PP4)

<主軸方向> N40° W

<柱穴配置> 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

<壁・底面> 南部浮石層から八戸火山灰層にかけて構築されている。

<埋土> 埋土は南部浮石粒を少量含む黒褐色シルトを主体とする。

PP1は自然堆積の様相で、8層に細分される。

PP2・PP3は黒褐色上による単層である。深さから推定して上部は削平を受けている可能性が高い。

PP4は自然堆積の様相で、4層に細分される。

<柱穴の規模> PP1 (60cm) ・PP2 (60cm) ・PP3 (60cm) ・PP4 (64cm)

<柱穴深度> PP1 (104cm) ・PP2 (20cm) ・PP3 (15cm) ・PP4 (114cm) である。

<柱穴間隔> PP1-PP2 (2.6m) ・PP2-PP3 (2.9m) ・PP3-PP4 (2.7m) ・PP4-PP1 (3.0m)

<出土遺物> (第165図、写真図版197)

土器 (第165図716・718・719、写真図版197) F14柱穴状土坑1号 (PP4) より716、F14柱穴状土坑7号 (PP1) より718・719の土器が出土している。

G16掘立柱建物跡 (第39図、写真図版41)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のG16・G17・H16・H17グリッドに位置する。

<構成する遺構名> H16柱穴状土坑1号 (PP1)、H17柱穴状土坑5号 (PP2)、G17柱穴状土坑1号 (PP3)、G16柱穴状土坑2号 (PP4)

<主軸方向> N15° W

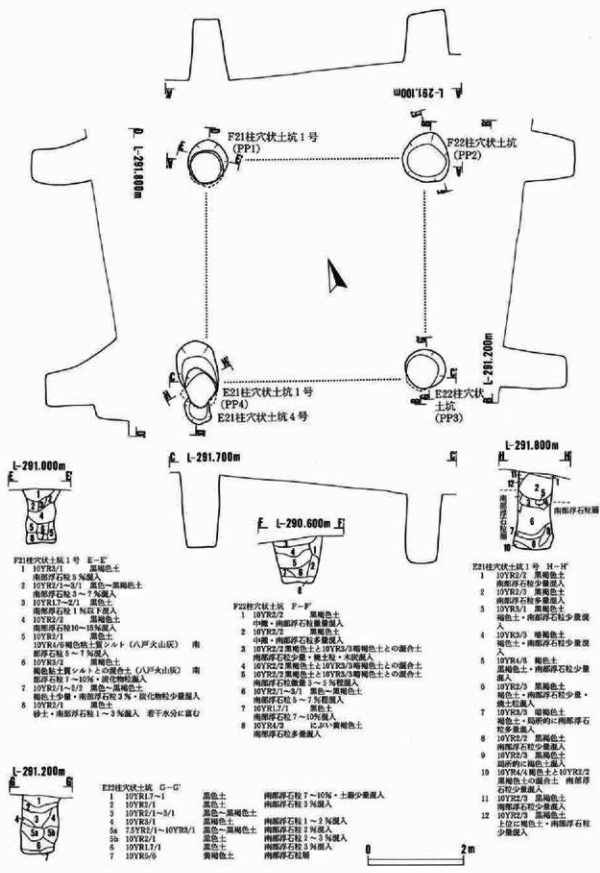
<柱穴配置> 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

<壁・底面> 八戸火山灰層、及び大不動浮石流凝灰岩層を壁とする。底面は大不動浮石流凝灰岩の下位に堆積する火山灰層 (高館火山灰相当?) である。PP1・PP2・PP3の底面には土が酸化により、変色した部分がみられる。ほぼアタリの大きさと同様の範囲に広がることから、柱の重量により土が酸化したものと思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土を主体とする。

PP1は、1・2・3層がアタリで柱の太さは約60cmと推定される。4・5・6層が据え方の土層と推定される。

PP2は、2・3層がアタリで柱の太さは約60cmと推定される。4・5・6・7・8層が据え方の土層と推



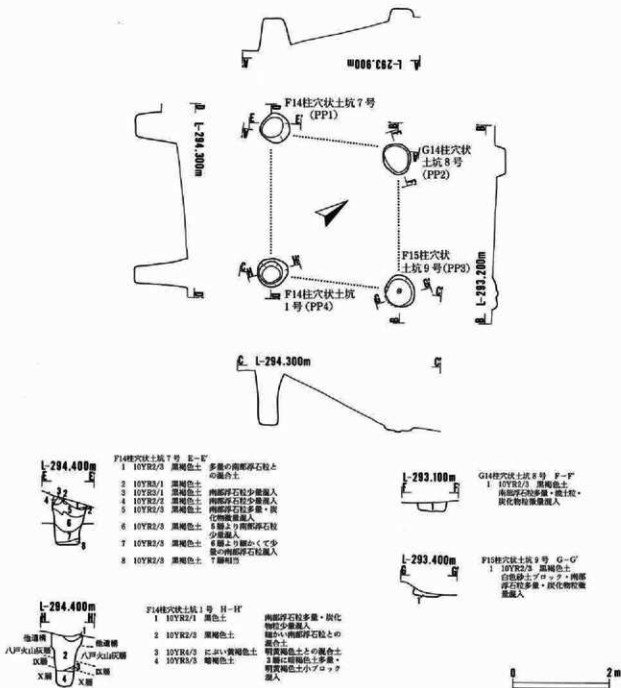
- F21柱穴状土坑 1号 E-E'**
- 1 10YR3/1 黒褐色土
南面浮石粒5%混入
 - 2 10YR2/1~2/1 黒色~黒褐色土
南面浮石粒5~7%混入
 - 3 10YR1.7~2/1 黒色土
南面浮石粒1%以下混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土
南面浮石粒10~15%混入
 - 5 10YR1/1 黒色土
10YR4/0暗褐色土質シット (八戸火山灰) 南
面浮石粒5~7%混入
 - 6 10YR3/2 黒褐色土
暗褐色土質少々との混合土 (八戸火山灰) 南
面浮石粒7~10%・炭化物混入
 - 7 10YR2/1~1/2 黒色~黒褐色土
暗色土少量・南面浮石粒3%・炭化物粒少量混入
 - 8 10YR3/1 黒色土
砂土・南面浮石粒1~3%混入。若干水分に直付

- F22柱穴状土坑 F-#F'**
- 1 10YR2/2 黒褐色土
中層・南面浮石粒少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
中層・南面浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/2黒褐色土と10YR3/3暗褐色土との混合土
南面浮石粒少量・炭化物・水混入
 - 4 10YR2/2黒褐色土と10YR3/3暗褐色土との混合土
南面浮石粒少量3~5%混入
 - 5 10YR2/1~2/1 黒色~黒褐色土
南面浮石粒5~7%混入
 - 6 10YR1.7/1 黒色土
南面浮石粒7~10%混入
 - 7 10YR4/2 暗褐色土
南面浮石粒少量混入

- E21柱穴状土坑 1号 H-H'**
- 1 10YR2/2 黒褐色土
南面浮石粒少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
南面浮石粒少量混入
 - 3 10YR3/3 黒褐色土
褐色土・南面浮石粒少量混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土
褐色土・南面浮石粒少量混入
 - 5 10YR4/0 黒色土
暗褐色土・南面浮石粒少量混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
褐色土・南面浮石粒少量・炭化物混入
 - 7 10YR3/3 暗褐色土
褐色土・粘り状に南面浮石粒少量混入
 - 8 10YR2/2 黒褐色土
南面浮石粒少量混入
 - 9 10YR2/3 暗褐色土
粘り状に褐色土混入
 - 10 10YR4/4 暗褐色土と10YR2/2
暗褐色土との混合土・南面浮石粒少量混入
 - 11 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石粒少量混入
 - 12 10YR2/3 暗褐色土
上位に褐色土・南面浮石粒少量混入

- E21柱穴状土坑 G-G'**
- 1 10YR1.7~1 黒色土
南面浮石粒7~10%・土量少量混入
 - 2 10YR2/1 黒色土
南面浮石粒3%混入
 - 3 10YR2/1~3/1 黒色~黒褐色土
南面浮石粒1~2%混入
 - 4 10YR3/1 暗褐色土
南面浮石粒2%混入
 - 5 10YR2/1 暗褐色土
南面浮石粒3~5%混入
 - 6 10YR1.7/1 黒色土
南面浮石粒3%混入
 - 7 10YR5/6 黄褐色土
南面浮石粒層

第37図 E21掘立柱建物跡



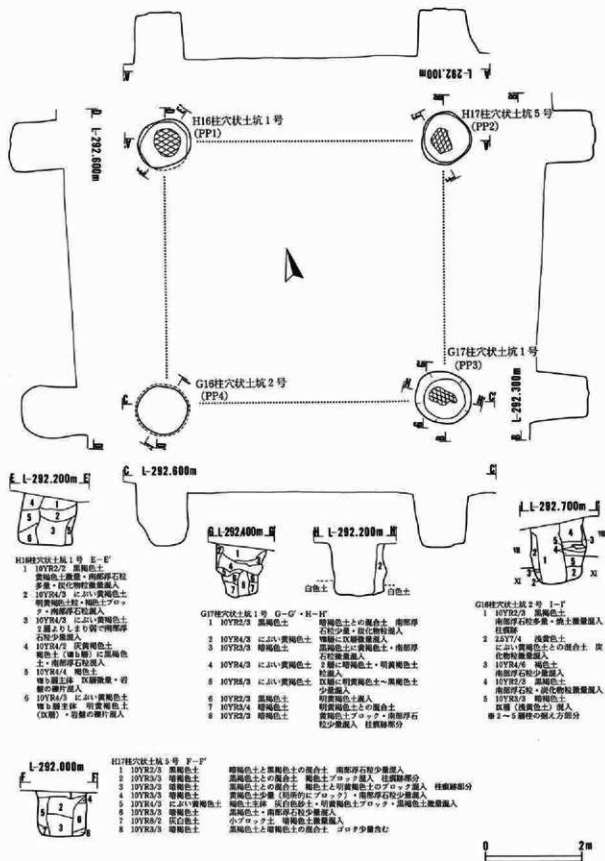
- F14柱穴状土坑7号 E-E'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 多数の南礫浮石粒との混合土
 - 2 10YR3/1 黒褐色土 南礫浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/1 黒褐色土 南礫浮石粒少量混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 南礫浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 南礫浮石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土 6層より南礫浮石粒少量混入
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 6層より細かくて少量の南礫浮石粒混入
 - 8 10YR2/3 黒褐色土 7層相当

- G14柱穴状土坑8号 F-F'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南礫浮石粒少量・炭土粒・炭化物粒少量混入

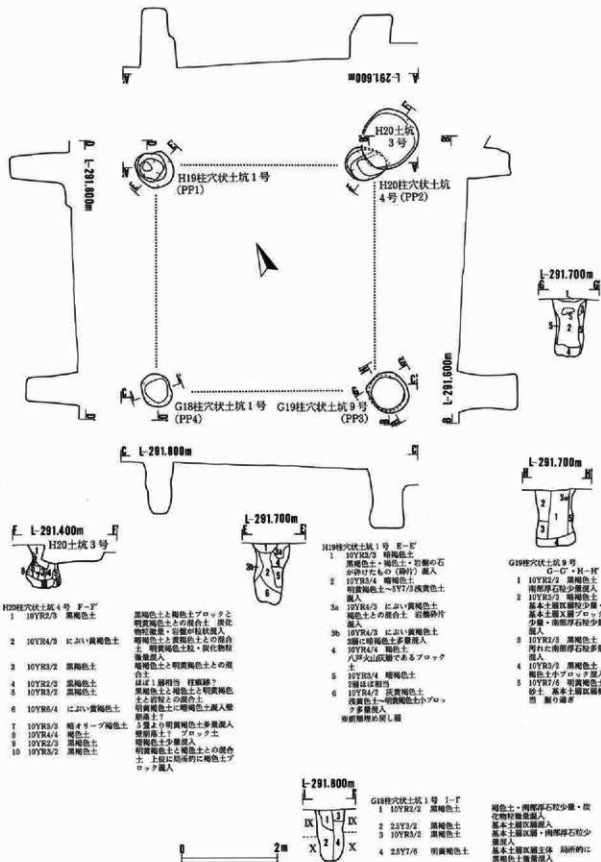
- F15柱穴状土坑9号 G-G'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 白色砂土ブロック・南礫浮石粒少量・炭化物粒少量混入

- F14柱穴状土坑1号 H-H'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 南礫浮石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 細かい南礫浮石粒との混合土
 - 3 10YR4/3 濃い黄褐色土 明黄褐色土との混合土
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 3層に暗褐色土少量・明黄褐色土小ブロック混入

第38図 F14掘立柱建物跡



第39図 G16獨立柱建物跡



第40図 G18掘立柱建物跡

定される。

PP3は、8層がアタリと思われ、柱の太さは50cmと推定される。

PP4は、1層がアタリと思われる層で、柱の太さは約50cmと推定される。

<柱穴の規模> PP1 (98~108cm)・PP2 (96~106cm)・PP3 (100~108cm)・PP4 (100cm)

<柱穴深度> PP1 (112cm)・PP2 (100cm)・PP3 (120cm)・PP4 (140cm)である。

<柱穴間隔> PP1-PP2 (5.9m)・PP2-PP3 (5.5m)・PP3-PP4 (5.9m)・PP4-PP1 (5.6m)

<出土遺物> (第165図、第192図、写真図版197・213)

土器 (第165図728~731・748、写真図版197) G16柱穴状土坑2号 (PP4) より728・729、G17柱穴状土坑1号 (PP3) より730・731、H16柱穴状土坑1号 (PP1) より748の土器が出土している。

石器 (第192図1135、写真図版213) G17柱穴状土坑1号 (PP3) より1135が出土している。

G18独立柱建物跡 (第40図、写真図版43)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のG18・G19・H19・H20グリッドに位置する。

<構成する遺構名> H19柱穴状土坑1号 (PP1)、H20柱穴状土坑4号 (PP2)、G19柱穴状土坑9号 (PP3)、G18柱穴状土坑1号 (PP4)

<主軸方向> N24° W

<柱穴配置> 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

<壁・底面> 八戸火山灰層、大不動浮石流凝灰岩層を壁とし、底面は大不動浮石流凝灰岩層及び下位の火山灰層 (高館火山灰?) である。

<埋土> 埋土は黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土を主体とする。

PP1は、人為堆積の様相である。

PP2は、自然堆積の様相である。H20土坑3号と重複し、本柱穴が古い。本柱穴に対してスロープ状に盛り合うわけではないが、本柱穴の1層とH20土坑3号の埋土が類似することから柱の抜き取り跡の可能性も考えられる。

PP3は、1層がアタリで、2・3・5層が据え方時に埋めた土層と思われる。4層は区層 (大不動浮石流凝灰岩) 相当で掘り過ぎであろう。

PP4は、八戸火山灰土を使用して埋められている。

<柱穴の規模> PP1 (78~82cm)・PP2 (71~80cm)・PP3 (78~82cm)・PP4 (69cm)

<柱穴深度> PP1 (130cm)・PP2 (92cm)・PP3 (124cm)・PP4 (108cm)である。

<柱穴間隔> PP1-PP2 (4.6m)・PP2-PP3 (4.8m)・PP3-PP4 (4.8m)・PP4-PP1 (4.7m)

<出土遺物> (第165図、第166図、写真図版197)

土器 (第165図732、第166図753・755、写真図版197) G18柱穴状土坑1号 (PP4) より732、H19柱穴状土坑1号 (PP1) より753、H20柱穴状土坑4号 (PP2) より755の土器が出土している。

G19独立柱建物跡 (第41図、写真図版43)

<位置・検出状況> 調査区中央平坦部のG19・G20・H18・H19グリッドに位置する。

<構成する遺構名> H18柱穴状土坑1号 (PP1)、H19柱穴状土坑2号 (PP2)、G20柱穴状土坑2号 (PP3)、G19柱穴状土坑2号 (PP4)

〈主軸方向〉 N17° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 八戸火山灰下位のIX層（大不動浮石流凝灰岩？）・X層（高館火山灰？）中まで掘り込まれている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土で構成される。4基とも人為により埋め戻されたと思われる堆積様相である。

PP1は南部浮石層と八戸火山灰層の混土で構成され、人為堆積の様相である。

PP2・PP3は埋土の様相からは自然・人為の明確な判別ができなかった。全体に黒褐色土、黄褐色土、褐色土が混在して見られることから人為により埋め戻された可能性が高い。

PP4は人為堆積である。

〈柱穴の規模〉 PP1（56～64cm）・PP2（58～80cm）・PP3（52～60cm）・PP4（64～70cm）

〈柱穴の深度〉 PP1（120cm）・PP2（140cm）・PP3（142cm）・PP4（148cm）である。

〈柱穴の間隔〉 PP1-PP2（5.2m）・PP2-PP3（5.4m）・PP3-PP4（5.3m）・PP4-PP1（5.4m）

〈出土遺物〉（第166図、第192図、写真図版197・213）

土器（第166図754、写真図版197） H19柱穴状上坑2号（PP2）より754の土器が出土している。

石器（第192図1136、写真図版213） G20柱穴状上坑2号（PP3）より1136が出土している。

H13掘立柱建物跡（第42図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉 調査区中央平坦部のH13・H14・I12・I13グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 I12柱穴状土坑2号（PP1）、I13柱穴状土坑2号（PP2）、H14柱穴状上坑10号（PP3）、H13柱穴状土坑5号（PP4）

〈主軸方向〉 N15° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 八戸火山灰層中に掘り込まれている。

〈埋土〉 埋土は黒褐～暗褐色土を主体とし、南部浮石粒や八戸火山灰を混入する。

PP1は土質の調査記録（注記）からは人為堆積と判断されるが、底面に残る変色した部分の範囲と7層が対応するため、7層がアタリで、6層が掘え方の埋土と推定される。柱材の上方を切断したものか？

PP2は5層がアタリ、1層が埋め戻された土（貼床？）と判断される。

PP3は6層がアタリと推定される（調査記録から）が、2・3層の様相（自然・人為堆積の有無）は解釈しかねる。

PP4は2層がアタリ、7層が掘え方の埋土と推定される。

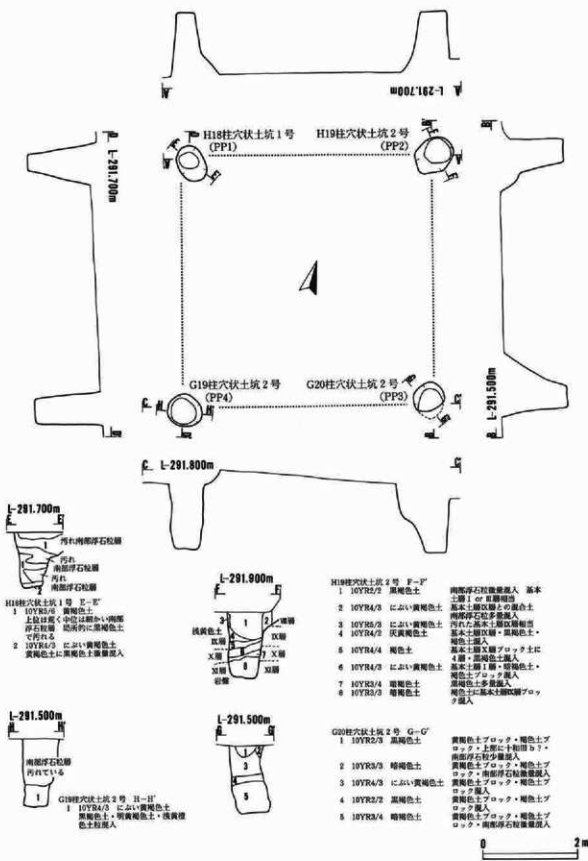
〈柱穴の規模〉 PP1（98～120cm）・PP2（88～120cm）・PP3（110～121cm）・PP4（65～80cm）

〈柱穴の深度〉 PP1（178cm）・PP2（140cm）・PP3（144cm）・PP4（172cm）である。

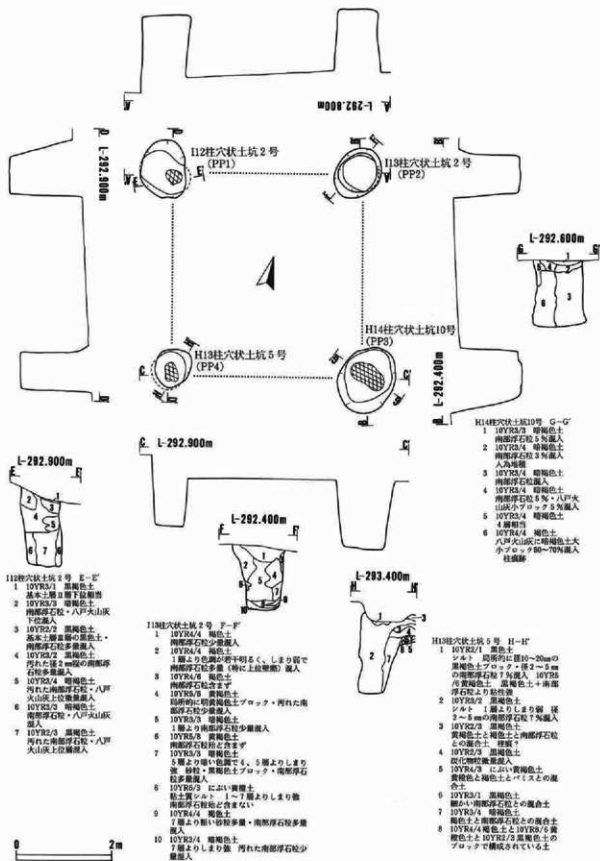
〈柱穴の間隔〉 PP1-PP2（4.1m）・PP2-PP3（4.3m）・PP3-PP4（4.2m）・PP4-PP1（4.3m）

〈出土遺物〉（第165図、第166図、写真図版197・198）

土器（第165図743・744、第166図764、写真図版197・198） H14柱穴状上坑10号（PP3）より743・744、I13柱穴状上坑2号（PP2）より764の土器が出土している。



第41図 G19獨立柱建物跡



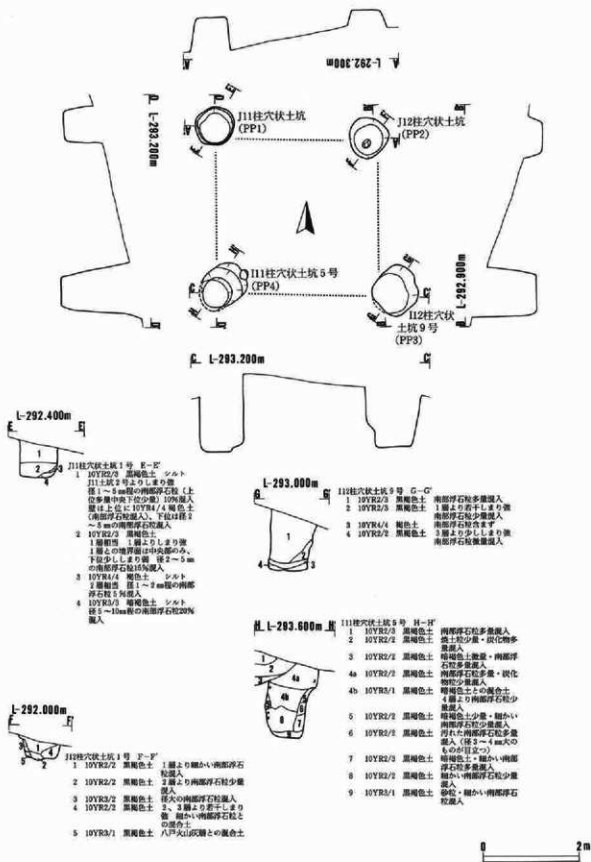
- I12柱穴状土坑2号 E-E'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
基本土層より下位層まで
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
南部浮石粒・八戸火山灰
下位層入
 - 3 10YR2/2 暗褐色土
基本土層直下の褐色土・
南部浮石粒多量混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土
汚れた径2mm級の南部浮
石粒少量混入
 - 5 10YR3/4 暗褐色土
汚れた南部浮石粒・八戸
火山灰上位層混入
 - 6 10YR2/3 暗褐色土
南部浮石粒・八戸火山灰
混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土
汚れた南部浮石粒・八戸
火山灰上位層混入

- I13柱穴状土坑2号 F-F'
- 1 10YR4/4 褐色土
南部浮石粒少量混入
 - 2 10YR4/4 褐色土
1層より色調が若干明るく、しまり弱で
南部浮石粒多量（特に上段層部）混入
 - 3 10YR4/6 褐色土
南部浮石粒多量
 - 4 10YR5/6 黄褐色土
局所的に切妻褐色土ブロック・汚れた南
部浮石粒少量混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・砂粒・黄褐色土ブロック・南部浮石
粒多量混入
 - 6 10YR2/3 暗褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・砂粒・黄褐色土ブロック・南部浮石
粒多量混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・砂粒・黄褐色土ブロック・南部浮石
粒多量混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・砂粒・黄褐色土ブロック・南部浮石
粒多量混入
 - 9 10YR4/4 褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・砂粒・黄褐色土ブロック・南部浮石
粒多量混入
 - 10 10YR2/4 暗褐色土
1層より暗い色調で、5層よりしまり
強・汚れた南部浮石粒少
量混入

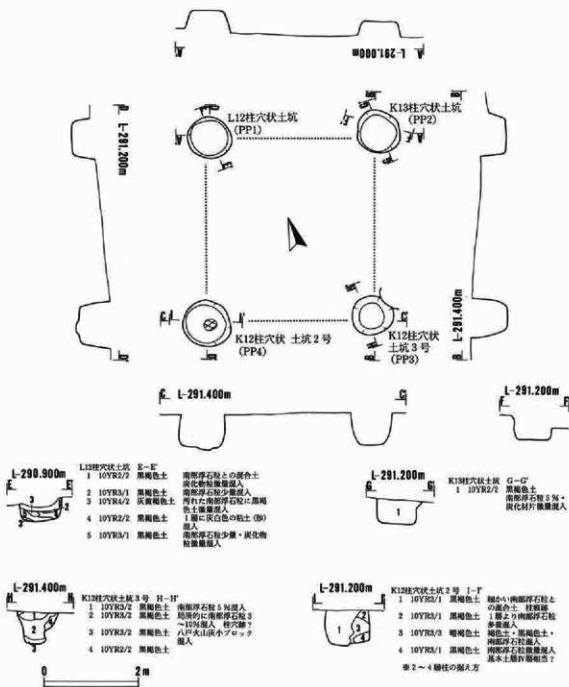
- H14柱穴状土坑10号 G-G'
- 1 10YR2/2 暗褐色土
南部浮石粒5%混入
 - 2 10YR2/4 暗褐色土
南部浮石粒3%混入
人為堆積
 - 3 10YR3/4 暗褐色土
南部浮石粒混入
 - 4 10YR2/4 暗褐色土
南部浮石粒5%・八戸火
山灰上位層少量混入
 - 5 10YR2/4 暗褐色土
4層相当
 - 6 10YR4/4 褐色土
八戸火山灰に暗褐色土大
ブロック60~70%混入
柱基礎

- H13柱穴状土坑5号 H-H'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
局所的に径10~20mmの
黄褐色土ブロック・径2~3mm
の南部浮石粒少量混入。10YR3
/6黄褐色土・黄褐色土・南部
浮石粒より粘性強
 - 2 10YR2/1 黒褐色土
シルト・1層よりしまり強・径
2~5mmの南部浮石粒少量混入
との混合土・硬質?
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土と褐色土との南部浮石粒
との混合土・硬質?
 - 4 10YR2/3 暗褐色土
径10mm以上混入
 - 5 10YR4/3 褐色土
黄褐色土と褐色土との混合土
の混合土
 - 6 10YR2/3 暗褐色土
細かい南部浮石粒との混合土
 - 7 10YR2/4 暗褐色土
褐色土と南部浮石粒との混合土
 - 8 10YR4/4 褐色土と10YR3/6黄
褐色土と10YR2/3暗褐色土の
ブロックで構成されている土

第42図 H13組立柱建物跡



第43図 | 11掘立柱建物跡



第44図 K12独立柱建物跡1号

I11独立柱建物跡（第43図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉 調査区中央平坦部のI11・I12・J11・J12グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 J11柱穴状土坑（PP1）、J12柱穴状土坑（PP2）、I12柱穴状土坑9号（PP3）、I11柱穴状土坑5号（PP4）

〈主軸方向〉 N3° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 八戸火山灰層中に掘り込まれている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体に、暗褐色土、褐色土、南部浮石粒が混入する。

PP1・PP3は自然堆積の様相である。

PP2・PP4は土層注記からは人為堆積の様相である。人為堆積とする根拠資料として、含有する南部浮石粒の粒径が他に比べて細く、埋め戻す際に潰れた状態になったことを示すからである。

〈柱穴の規模〉 PP1（80cm）・PP2（80cm）・PP3（92～100cm）・PP4（82～112cm）

〈柱穴深度〉 PP1（80cm）・PP2（54cm）・PP3（130cm）・PP4（192cm）である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2（3.4m）・PP2-PP3（3.3m）・PP3-PP4（3.6m）・PP4-PP1（3.6m）

〈出土遺物〉（第166図、第192図、写真図版197・198・213）

土器（第166図757～759・774・775、写真図版197・198） I11柱穴状土坑5号（PP4）より757～759、J11柱穴状土坑（PP1）より774・775の上器が出土している。

石器（第192図1140、写真図版213） J11柱穴状土坑（PP1）より1140が出土している。

K12独立柱建物跡1号（第44図、写真図版43）

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや西寄りのK12・K13・L12グリッドに位置する。配置関係から考えてK11住居跡の主柱の可能性が高い。

〈構成する遺構名〉 L12柱穴状土坑（PP1）、K13柱穴状土坑（PP2）、K12柱穴状土坑3号（PP3）、K12柱穴状土坑2号（PP4）

〈主軸方向〉 N20° E

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 遺物包含層（Ⅲ層）中に構築されている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体とする。

PP1は南部浮石粒を微量含む（3%前後）黒褐色土で構成される。調査記録から人為堆積と推定される。

PP2は黒褐色土による単層である。

PP3は2層があたりと思われる。

PP4は1層があたりで、2～4層が掘え方と思われる。

〈柱穴の規模〉 PP1（84cm）・PP2（84～98cm）・PP3（78cm）・PP4（100cm）

〈柱穴深度〉 PP1（52cm）・PP2（58cm）・PP3（74cm）・PP4（78cm）である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2（3.5m）・PP2-PP3（3.9m）・PP3-PP4（3.5m）・PP4-PP1（4m）

〈出土遺物〉（第166図、第167図、第172図、写真図版198・202）

土器（第166図782、第167図786～788、写真図版198） K12柱穴状土坑3号（PP3）より782、L12柱穴状土坑1号（PP1）より786～788の土器が出土している。

土製品 (第172図904・905、写真図版202) L12柱穴状土坑 (PP1) より三角形土製品が2点出土している。

K12獨立柱建物跡2号 (第45図、写真図版43)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや西寄りのK12・K13・L12グリッドに位置する。

〈構成する遺構名〉 M12柱穴状土坑 (PP1)、L14柱穴状土坑 (PP2)、K14柱穴状土坑 (PP3)、K12柱穴状土坑1号 (PP4)

〈主軸方向〉 N88° W

〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 III層から掘り込まれ、IX層中を底面とする。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体とし、暗褐色土、明黄褐色土、にぶい黄褐色土で構成される。

PP1は1層が人為堆積であることはわかる。

PP2は1～4層がアタリで、6～8層 (人為堆積) が掘え方と推定される。

PP3は9・12層がアタリと推定される。アタリが1～4層の人為堆積層で覆われていることから、柱の上部は切断されている可能性がある。

PP4は人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

〈柱穴の規模〉 PP1 (62～66cm) ・PP2 (62～78cm) ・PP3 (80～96cm) ・PP4 (74cm)

〈柱穴深度〉 PP1 (56cm) ・PP2 (146cm) ・PP3 (60～84cm) ・PP4 (48～112cm) である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2 (6.38m) ・PP2-PP3 (6.4m) ・PP3-PP4 (6.32m) ・PP4-PP1 (6.53m)

〈出土遺物〉 (第166図、第167図、第193図、写真図版198・214)

土器 (第166図778～781・783、第167図789・790～793、写真図版198) K12柱穴状土坑1号 (PP4) より778～781、K14柱穴状土坑 (PP3) より783、L14柱穴状土坑 (PP2) より789・790、M12柱穴状土坑 (PP1) より791～793の土器が出土している。

石器 (第193図1143・1145、写真図版214) K12柱穴状土坑1号 (PP4) より1143、M12柱穴状土坑 (PP1) より1145が出土している。

N15獨立柱建物跡 (第46図、写真図版なし)

〈位置・検出状況〉 調査区中央やや西側のN15・O14・O15グリッドに位置する。ほぼ西部遺物包含 (西部捨て場) 中に構築している。

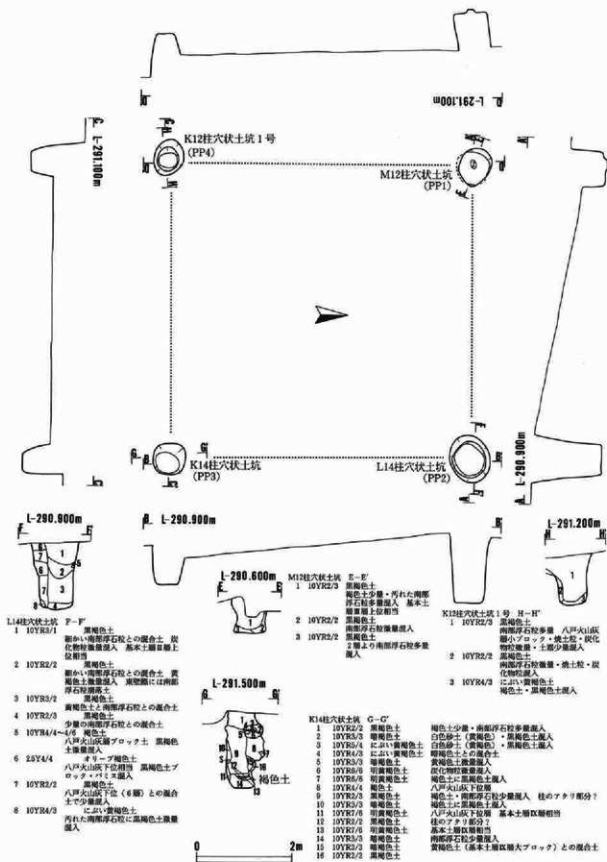
〈構成する遺構名〉 O15柱穴状土坑4号 (PP1)、O15柱穴状土坑7号 (PP2)、N15柱穴状土坑2号 (PP3)、O14柱穴状土坑5号 (PP4)

〈主軸方向〉 N22° E

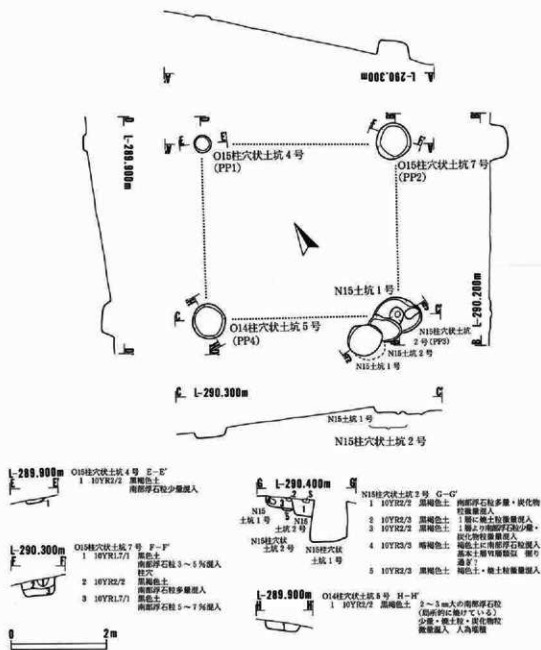
〈柱穴配置〉 4本柱で構成され、平面形は正方形である。

〈壁・底面〉 検出面の関係も考慮しなければならないが、4基全て浅い柱穴である。調査時は八戸火山灰層が検出面であるため、本来は黒色土中から構築されていたために浅い可能性もあろうが、削平 (縄文時代の造成?) されていた可能性もあることを追記する。

〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体とし、黒色土、暗褐色土で構成される。堆積様相としては、4基とも自然堆積と思われる。



第45図 K12掘立柱建物跡 2号



第46図 N15獨立柱建物跡

〈柱穴の規模〉 PP1 (38cm)・PP2 (78cm)・PP3 (80cm)・PP4 (72cm)

〈柱穴深度〉 PP1 (4~8cm)・PP2 (36cm)・PP3 (12cm)・PP4 (16~24cm) である。

〈柱穴間隔〉 PP1-PP2 (4.2m)・PP2-PP3 (3.6m)・PP3-PP4 (4.0m)・PP4-PP1 (3.7m)

〈出土遺物〉 (第167図、写真図版198)

土器 (第167図808、写真図版198) O15柱穴状土坑7号 (PP2) より808の土器が出土している。

3 炉跡 (第47図、写真図版44)

合計で4基検出した。何れも東部捨て場(東側遺物包含層分布地)の七層付近で検出されている。単独の炉跡遺構(屋外炉)ではなく、本来は竪穴住居跡に伴う炉であったと思われるが、壁・床面とも黒色土の中のため検出できなかったものと捉えられる。遺物包含層中においてかなり上位で検出されていることから、本遺跡の中では比較的新しい時期に構築されていると推定される。本遺跡は大洞C1式以降の土器が皆無に等しいことから、推測の域を越えないが積極的に言えば縄文時代晩期前葉の大洞B2~BC式期と思われる。

B23炉跡 (第47図、写真図版44)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB23グリッドに位置する。検出面はⅢ層上位で遺物包含層中に構築されている。

〈平面形・規模〉 炉石2個を検出したのみで、他の石は試掘トレンチ時に破壊してしまったと思われる。

〈埋土〉 炉石は角礫(不整形気味)で、炉の周辺には焼土の発達は見られない。また、掘り方も明瞭ではないが、周辺に比べて若干褐色の砂が混じり乾きが良いことから区分を試みた。本来は黒土中に炉石を突き刺して構築した可能性もある。

〈出土遺物〉 山上遺物はない。

〈時期〉 この周辺において、炉の下位層からは後期の土器が出土していることと、炉の形態から判断して晩期と推定される。

B24炉跡1号 (第47図、写真図版44)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB24グリッドに位置する。検出面はⅢ層上位で、遺物包含層中に構築されている。検出状況から本来は住居内に構築されていた炉であろう。

〈平面形・規模〉 72×65cmの円形に礎が配置される。

〈埋土〉 焼土は石囲炉内に見られるが、発達は悪い。

〈出土遺物〉 (第149図、第169図、写真図版185・200) 石囲炉内焼土層の下から晩期の土器が出土している。土器(第149図267、写真図版185) 粗製の壺形土器が出土している。

土製品(第169図833、写真図版200) 円盤状土製品1点が出土している。

〈時期〉 炉の形態からは晩期と推定される。また、この周辺において炉の下位層からは後期の土器が出土している。

B24炉跡2号 (第47図、写真図版44)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のB24グリッドに位置する。南側調査区境の十層断面沿いで検出した。

〈平面形・規模〉 平面形、規模共に不明であるが、円形に礎が配置されると推定される。

〈埋土〉 1層が表土、2~4層が遺物包含層系であるが2層(別住居埋土?)・2a層が再堆積層、3層・3a層が竪穴内埋土、4層が地山である。焼土層である3b層は、炉石の検出面付近から炉石の下位に発達する。調査時は明確には把握できなかったが、炉は作り替えが行われていて古い段階の炉に伴った焼土が3b層でないかと捉えた。また、土質や土色には明瞭な違いは確認できないが、3層・3a層についても南部浮石粒の含有率と焼土粒・炭化物混入の有無で区分される。単純に堆積時間の差によるものか、あるいは把

掘できなかった別遺構が存在したのか不明である。

〈出土遺物〉 石囲炉内焼土層の下から晩期の注I土器小片が出土している。

〈時期〉 炉の形態からは晩期と推定される。周辺において炉の下位層からは後期の土器が出土している。

D23炉跡（第47図、写真図版44）

〈位置・検出状況〉 調査区東側のD23グリッドに位置する。検出面は、レベル的には他の3基より低位になるが、秩序的には同じⅢ層上位に相当する。周辺に壁の立ち上がりが確認できなかったこと、柱穴の検出がなかったことから、屋外炉の可能性が考えられるが詳細は不明である。

〈平面形・規模〉 80×65cmの円形に礎が配置される。炉の真ん中付近に、炉を仕切っているかのような石が設置されている。

〈埋土〉 石囲炉内に焼土が発達する。炉石は明確な掘り方をもたないことから、床面に直接刺して構築したと思われる。

〈出土遺物〉（第149図、第169図、写真図版185・200） 炉石の検出面付近とその直下より後～晩期の遺物が出土した。

土器（第149図268～271、写真図版185） 268は大洞B C式、271は十腰内V式？、その他は後～晩期の粗製土器である。

土製品（第169図834・835、写真図版200） 三角形土製品2点が、木遺構の直下から出土した。

〈時期〉 炉の形態から晩期と推定される。

4 焼十遺構（第48図、写真図版45）

6基何れも東部捨て場中から検出した。東西の遺物包含層中からは多数の焼十を検出しているが、現地性と判断されるもののみ焼十遺構とし、投げ込みによるものについては焼十遺構として登録していない。

B19焼土遺構（第48図、写真図版45）

〈位置・検出状況〉 調査区南端部やや東側のB19グリッドに位置する。調査区域に入れた試掘トレンチの北側で検出した。現地性の焼土と判断される。

〈平面形・規模〉 明瞭部分は30×26cm程の円形に発達するが、周囲約55cmの範囲に焼十粒が分布する。

〈埋土〉 厚さは5cm程で、焼十の発達は悪く明瞭には判断できない。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 後～晩期と思われるが、詳細な時期は不明である。

C19焼土遺構（第48図、写真図版45）

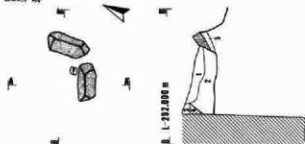
〈位置・検出状況〉 調査区南端部やや東側のC19グリッドに位置する。検出面はⅢ層上位である。現地性の焼土と判断される。

〈平面形・規模〉 40×35cmの円形に発達する。

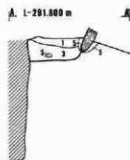
〈埋土〉 厚さは14cmで、焼土は粒状に見られる。焼土層内からは、土器片や礎が出土している。

〈出土遺物〉 地文のみの土器小片が数点出土した。

B23伊跡



- B23伊跡 A-A'・B-B'
- 1 10YR2/1 黒色土
 - 2 10YR2/2 黒色土
 - 3 10YR2/2 黒色土
 - 4 7.5YR5/6 明褐色土
 - 5 10YR2/1 黒色土



B24伊跡1号

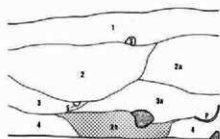


- B24伊跡1号 A-A'・B-B'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
 - 3 10YR2/2 黒褐色土
 - 4 10YR4/6 褐色土
 - 5 10YR2/2 黒褐色土
 - 6 5YR2/4 赤褐色土
 - 7 10YR2/2 黒褐色土
- 注1 層相当 南面浮石
 短距離侵入
 注1 層相当
 壁土 砂状土に黒褐色土
 混入
 注1 層相当
 砂状土
 褐色土混入

B24伊跡2号



- B24伊跡2号 A-A'
- 1 10YR2/1 黒色土
 - 2 10YR2/1-2/2 黒褐色土
 - 2a 10YR2/1-3/3 黒褐色土
 - 3 10YR2/1-5/1 黒色土
 - 3a 10YR2/2-3/1 黒褐色土
 - 3b 10YR2/1-3/1 黒色土
 - 4 10YR1/1 黒色土
- 木炭多量混入 基本土層1層相当
 南面浮石5%混入 基本土層
 黒部浮石混入
 南面浮石5%混入 基本土層
 黒部浮石混入
 南面浮石5%・黒土粒層混入
 南面浮石粒7%~10%・炭化物
 混入
 砂層 10YR5/6~7.5YR5/6
 黒褐色土明褐色土7%・南
 面浮石5%・黒土30%混入
 南面浮石5~7%混入 基本土
 層層相当



第47図 B23伊跡、B24伊跡1号・2号

<時期> 検出面から後期後葉~晩期初頭と推定される。

D23炉跡



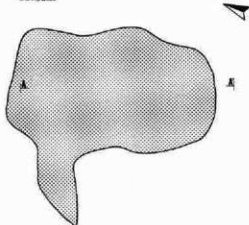
A L-291.200 m



D23炉跡 A-A'・B-B'

- | | | |
|---|---------------------------------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR2/1 黒色土 | 5YR4/8赤褐色土(焼土)少量・5YR4/8赤褐色の角形浮石粒数層混入 |
| 2 | 5YR4/8 赤褐色土 | 1 磁器片混入 |
| 3 | 10YR2/1 黒色土 | 1 磁器片 |
| 4 | 10YR2/1 黒色土 | 赤褐色土・角形浮石粒数層混入 |
| 5 | 10YR2/3 黒褐色土と5YR4/8赤褐色土との混合土 | 角形浮石粒数層混入 |
| 6 | 10YR2/3 黒褐色土と少量の5YR4/8赤褐色土との混合土 | |
| 7 | 10YR2/1 黒色土 | 4 磁器片 |

C23焼土



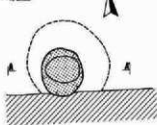
A L-299.000 m



C23焼土 A-A'

- | | | |
|---|------------------------|------------|
| 1 | 10YR4/6-5/4 褐色~に濃い黄褐色土 | 焼土質土(焼土) |
| 2 | 10YR2/1 黒色土 | 炭化物粒・土器片混入 |

B19焼土



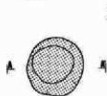
A L-292.600 m



B19焼土 A-A'

- | | | |
|---|--------------|-------------|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色土 | 角形浮石粒少量・炭土粒 |
|---|--------------|-------------|

C19焼土



A L-292.700 m



C19焼土 A-A'

- | | | |
|---|--------------|-------------------|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色土 | 角形浮石粒・焼土粒・炭化物少量混入 |
|---|--------------|-------------------|

C25焼土



C25焼土1号



C25焼土2号



第48図 D23炉跡、B19焼土、C19焼土、C23焼土、C25焼土、C26焼土1号・2号

C23焼土遺構（第48図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側のC23グリッドに位置する。検出面はⅢ層中～下位に相当する。現地性の焼土と判断される。

＜平面形・規模＞ 第48図には、焼上の発達は悪いものの炭化物粒が多量に見られる範囲までをトーンで示した。290×160cmのほぼ楕円形に分布する。

＜埋土＞ 第48図1層が発達の良好な焼上で、粘性が強く（焼けて粘土化？）局所的に見られる。2層は炭化物粒の混入は多いが、周辺の土との区分は不明確である。

＜出土遺物＞（第149図、写真図版185） 後期初頭～中葉の土器で、全て2層から出土している。

土器（第149図272～276、写真図版185） 十腰内Ⅰ～Ⅲ式までの土器片である。

＜時期＞ 後期で間違いないと思われるが、詳細な時期判断はできない。

C25焼土遺構（第48図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側のC25グリッドに位置する。検出面はⅢ層中～下位に相当する。現地性の焼土と判断したが、明確ではない。

＜平面形・規模＞ 150cm程の円形に広がる。

＜埋土＞ 焼土の発達は悪い。断面の図化は行っていない。

＜出土遺物＞（第149図、写真図版185） 焼土内から土器片が1点出土した。

土器（第149図277、写真図版185） 十腰内Ⅴ式と思われる土器片である。

＜時期＞ 後期末葉と推定される。

C26焼土遺構1号（第48図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側のC26グリッドに位置する。検出面はⅢ層中～下位に相当する。現地性の焼土と判断される。C26焼土2号と隣接するが、本来同一の遺構であった可能性がある。

＜平面形・規模＞ 80×75cm程の不整に広がる。断面の図化は行っていない。

＜埋土＞ 焼土の発達は悪い。断面の図化は行っていない。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 後期と思われる。

C26焼土遺構2号（第48図、写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側のC26グリッドに位置する。検出面はⅢ層中～下位に相当する。現地性の焼土と判断される。

＜平面形・規模＞ 60×40cm程の台形状に広がる。断面の図化は行っていない。

＜埋土＞ 焼土の発達は悪い。断面の図化は行っていない。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 後期と思われる。

5 土坑 (第49～109図、写真図版46～150、遺構番号1～888)

ほぼ調査区全域から大小合せて452基を検出した。個々の土坑の内容については、第5～19表に記載しているので参照したい。また、土坑及び柱穴状土坑には1～888番まで遺構番号を添付しており、第10～14図の遺構配置図とも対照する。本遺跡で検出された土坑の様相は、他の遺構や土坑同士の重複により削平を受けている場合が多い。必然的に平面形や規模が不明なのが大半であるが、平面形を把握できたかあるいは推定できるものには円形のものも多く、規模は大小様々であるが開口部径が1mを越えるものが目立つ。断面形の違いから大別するなら、フラスコ状、ピーカー状、鍋底状、浅皿状を呈するものに分かれる。

土坑の時期について、他の遺構との重複関係から時期の推定を試みると、最も密に検出されている調査区中央部の平坦地付近は、ほとんどの土坑が埋め戻されており(整地化)、土坑群を埋め戻し整地した後に、住居や竪立柱建物跡や柱穴状土坑が構築されている。住居跡や竪立柱建物跡や柱穴状土坑については、大半が晩期初頭～前葉に構築されたことと推定されることから、土坑の大半(約400基)は後期に構築されたものと捉えられる。

晩期の可能性が高い土坑としては、C17土坑、D15土坑2号、E13土坑9号、E19土坑2号、E20土坑1号、E15土坑4号、F12土坑1号、F12土坑5号、F12土坑6号、F13土坑6号、F13土坑7号、F14土坑1号、F14土坑2号、F15土坑1号、F18土坑3号、G12土坑1号、G12土坑2号、G12土坑3号、G13土坑2号、G14土坑4号、H12土坑2号、H13土坑2号、H13土坑4号、H14土坑1号、H15土坑1号、H15土坑2号、H16土坑1号、H16土坑2号、H17土坑1号、H17土坑2号、H18土坑13号、H20土坑2号、H20土坑4号、I11土坑5号、I14土坑1号、J15土坑2号、M7土坑、L16土坑1号、M15土坑1号、M15土坑2号、N15土坑3号の41基である。上記した土坑は、出土遺物(主に土器片)や住居跡・柱穴状土坑などとの重複関係から推定されるものである。晩期の土器片を出土した土坑については、必ずしも晩期に構築したとは断言できないが、とりあえずの位置付けとして晩期とした。全般に時期の同定が困難な土坑が多く、上記した以外にも存在する可能性を否定はできないが、晩期の土坑が非常に希少であることは確かである。なお、土坑の構築時期に関わる竪立柱建物跡や柱穴状土坑の時期については、後期初頭～晩期前葉に形成された遺物包含層内に構築されているものもあるため、時期の下限は晩期初頭より新しいことは言えるが、上限については晩期前葉ととりあえず位置付けて置くが明確ではない。詳細は第Ⅷ章のまとめで述べることとするが、参考までに記述すると、本遺跡からは弥生時代の遺物は極微量である。

次に、土坑から出土している遺物について、上記のとおり整地する際に使用した土中に含まれていたと判断される遺物が多いことから、出土遺物の時期が本来の構築や廃棄の時期と推定するのは危険であろう。

<出土遺物> (第150～164図、第169～172図、第179～190図、写真図版185～196、200～202、207～212)

土器 (第150～164図278～673、写真図版185～196) 遺物の出土状況から、一括廃棄された可能性がある土坑を列記すると、C17土坑(晩期初頭)、E26土坑(後期末葉)、F12土坑1号(晩期初頭～前葉)、I14土坑1号(晩期前葉)、I17土坑8号(後期後葉)、I18土坑4号(後期末葉)、L16土坑1号(晩期前葉)、H12土坑1号(晩期)などが挙げられる。中でもI18土坑4号については、完形の壺が3個体出土するなど特殊性が窺える。

土製品 (第169～172図836～891、写真図版200～202) 埋土から土偶などの土製品が出土している土坑は約50基あるが、野外時に出土状態の詳細な記録を残さず取り上げを行った。特殊性の有無などは不明である。

石器類 (第179～190図991～1119、写真図版207～212) 石器類についても土製品同様で、詳細な記録を残

さず取り上げを行った。

6 柱穴状土坑（第49～109図、写真図版46～150、遺構番号1～888）

大小合わせて436基を検出した。個々の柱穴状土坑の内容については、個々の柱穴状土坑に土坑と通しとなる遺構番号を添付して第5～19表に記載しているので参照願いたい。併せて添付した遺構番号は、第10～14図の遺構配置図とも対照する。

柱穴状土坑は、重複が激しく、平面形の定かでないものが多いが、円形を基調とする。若干数不整形を呈するものも見られるが、おそらく柱の設置時あるいは柱を抜き取った時分の土坑状の痕跡が伴随するものと判断される。規模は重複が激しく明確ではないものも多いが、傾向としては開口部径が100cm以上のものが多い。深さについては、検出面から50～150cmのものが多く、全般に土坑としたものよりも深い。

分布から見た占拠としては、調査区中央部の平坦地に密集し、重複する柱穴同上も多く、また晩期の住居跡とも占拠を共有する傾向が窺える。柱穴配列を検討した結果、平面形的に見て配列が正方形か長方形に並ぶ群は、掘立柱建物跡と認定し、柱穴配列を想定できない単独のものを柱穴状土坑として登録した。

柱穴状土坑の時期については、土坑の項でも述べたとおり、後期と推定する土坑群を整理した後に、構築されていることは明瞭である。占拠を共有する傾向が窺える晩期の住居跡群との新旧関係については、掘立柱建物跡や柱穴状土坑が新しい場合が多い。出土遺物は後～晩期の土器小片が多いが、時期推定資料としては認知できない出土状態である。

<柱材の有無について>

柱材が残存する柱穴はなかったが、柱穴内に柱材を設置した可能性を示唆する資料として下記の事項が上げられる。

- アタリ 全てではないが、埋土にアタリが確認された柱穴がある。
- 付属土坑 開口部付近に浅い土坑状の掘り込み（スロープ）を伴うものが多く、柱を据えたかあるいは抜いた時の痕跡と推定される。
- 柱穴底面の痕跡について 柱穴底面に酸化や変色が確認された柱穴がある。検出される例としては、八戸火山灰層より深く掘り込まれている柱穴に多く、底面が白色の火山灰（大不動浮石流凝灰岩？）に相当する場合である。黒色土（遺物包含層）や褐色～暗褐色土（八戸火山灰）を底面とする柱穴では酸化や変色が明瞭に確認されなかった（把握できなかった？）。柱穴底面の酸化や変色化については、分析や鑑定は行っていないため推測の域を越えるものではないが、柱や上屋？の重量に起因すると思われる。

<柱穴状土坑に付随する土坑（スロープ）について>

柱の設置があるいは抜き取り痕と思われる痕跡が確認された柱穴状土坑は、相当数見られた。おそらくは、柱穴状土坑同上の重複として処置した中にも該当するものが含まれていると思われる。

<出土遺物>（第164～167図、第172図、第191～193図、写真図版196～198、202、212～214） 特殊性が窺える出土状態を示した遺物はない。

土器（第164～167図674～808、写真図版196～198） 全て後～晩期で小片が多い。完形品の資料としては、D15柱穴状土坑出土の683とI12柱穴状土坑11号出土の763がある。

土製品（第172図892～905、写真図版202） 土偶、土器片再利用土製品などが出土している。

石器類（第191～193図1120～1147、写真図版212～214） 捨て場出土と同種の石器類が出土している。

7 柱穴列

溝状に細長く延び、溝内に柱穴を伴う遺構である。検出状況が、他の遺構に比べて明瞭であったことから検出当初は現代に構築された遺構と推定されたものである。1条検出された。

G23柱穴列（第110図、写真図版151）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側斜面上位のG23～I22グリッドにかけてⅢ層上面で検出された。検出面及び埋土共に黒色土であるが、比較的明瞭に検出できた。ほぼ南北方向に斜面を切るように延びる。溝内からは6個の柱穴を検出した。

＜主軸方向＞ N16° W

＜重複関係＞ H22土坑2号と重複し、本遺構が新しい。

＜平面形・規模＞ 平面形は溝状、断面形は逆台形状あるいはU字状を呈する。規模は開口部径40～60cm、底部径30～45cm、深さは7～61cmで平均すると12cm程である。南側に穏やかに傾斜する。

＜埋土＞ 上位（1層）に粘性がやや強く締まりが弱い黒色シルトが堆積し、中～下位（2～4層）に締まりが堅密で南部浮石粒を多量に混入する黒褐色シルトが堆積する。土の様相から1層は基本層序のⅢ層相当に、2～4層は南部浮石粒の含有率から基本層序のⅣ～Ⅴ層に相当する。明確な判断はできなかったが、自然堆積と推定される。土質の様相からは、現代の遺構とは思われない。

＜柱穴＞ 6基検出した。柱穴の埋土は、溝の埋土と同じ上なことから同時期に埋没したものとと思われる。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 捨て場内に構築されており、遺物包含層を掘り込んでいることから時期の上限は晩期前葉であろう。時期の下限については、上述した通り検出当初は現代のものと推定して精査を行った経緯はあるが、はっきりしない。埋土の様相からの判断としては、現代の遺構とは考えられない土質であった。



北 L-291400m 南



B04柱穴状土坑 A-A'
1 10YR2/1 黒褐色土
基本土層1層より黒色塊
でしり弱 南側浮石粒
少量混入



B05土坑



B05柱穴状土坑



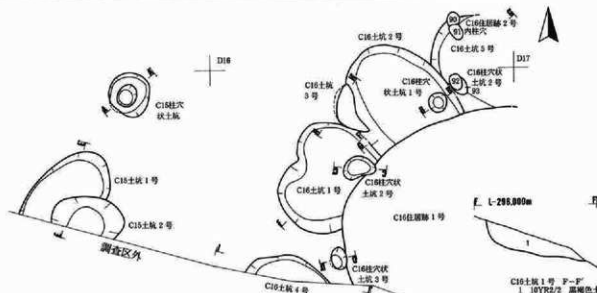
北 L-291800m 南

B04土坑 B-B'
1 10YR2/2 黒褐色土
南側浮石粒少量・炭化物粒少量混入
2 10YR2/1 黒褐色土
南側浮石粒少量・炭化物粒少量混入
3 10YR2/2 黒褐色土
細かい南側浮石粒少量混入

北 L-291300m 南



B05土坑 C-C'
1 10YR2/1 黒褐色土
基本土層1層より黒色
塊 薄 礫土粒・炭化物粒
少量混入



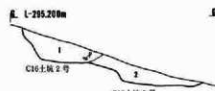
北 L-291300m 南

C16柱穴状土坑 A-A'
1 10YR2/1 黒褐色土
南側浮石粒少量混入



北 L-294000m 南

C16柱穴状土坑 B-B'
1 10YR3/1 黒褐色土
南側浮石粒少量混入



北 L-291200m 南

C16土坑 2号 G-G'
1 10YR3/1 黒褐色土
2 10YR2/2 黒褐色土
南側浮石粒少量混入



北 L-291500m 南

C16土坑 3号 H-H'
1 10YR2/2 黒褐色土
南側浮石粒少量混入
2 10YR4/4 褐色土
3 下位土層南側浮石粒少量混入
10YR2/2 黒褐色土上
多量の南側浮石粒の混合土



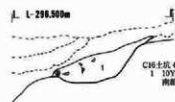
北 L-291400m 南

C16柱穴状土坑 2号 C-C'
1 10YR2/2 黒褐色土
南側浮石粒少量混入



北 L-291500m 南

C16柱穴状土坑 3号 D-D'
1 10YR2/3 黒褐色土
南側浮石粒少量混入



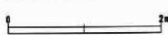
北 L-291500m 南

C16土坑 4号 I-I'
1 10YR2/2 黒褐色土
南側浮石粒7%以上・炭化物混入

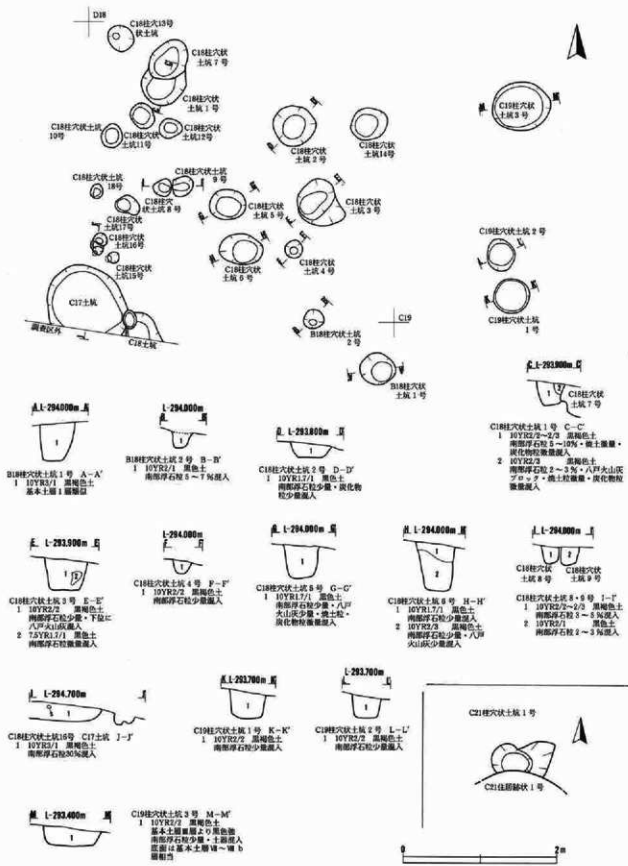


北 L-291600m 南

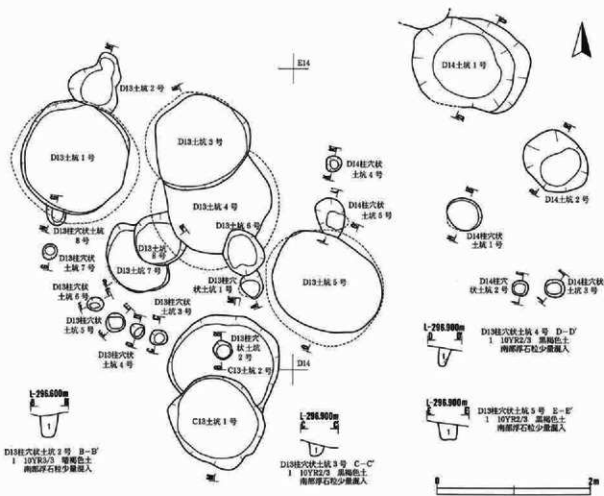
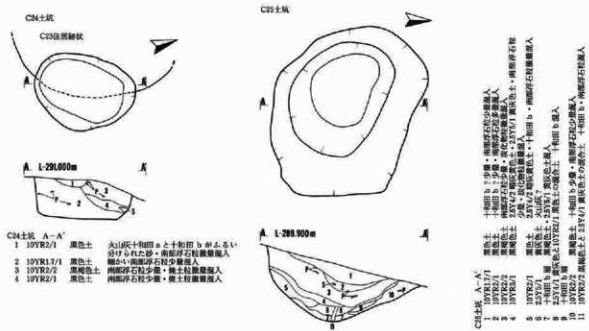
C16土坑 1・2号 E-E'
1 10YR2/1 黒褐色土
南側浮石粒混入
2 10YR3/4 暗褐色土
南側浮石粒多量混入
3 10YR2/3 黒褐色土
南側浮石粒多量混入



第49図 土坑・柱穴状土坑 (1)



第50图 土坑·柱穴状土坑 (2)



第51図 土坑・柱穴状土坑 (3)



- D13土坑3・4・6号 D13柱穴状土坑1号 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層より5mmの南部浮石1層混入
 - 2 10YR4/4 褐色土 シルト 1層より若干しりまひ 南部浮石2層混入
 - 3 10YR4/6 褐色土 シルト 1層より若干しりまひ 南部浮石3層混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層より若干しりまひ 南部浮石1層混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層より若干しりまひ 南部浮石2層混入
 - 6 10YR3/4 暗褐色土 シルト 一部1層より20mmの黄褐色土ブロック・南部浮石2層混入
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 シルト 8層より若干しりまひ 南部浮石2層混入
 - 8 10YR4/6 褐色土 シルト 8層より若干しりまひ 色暗く 2、10層よりしりまひ 南部浮石1層混入
 - 9 10YR4/6 褐色土 シルト 8層よりしりまひ 南部浮石3層混入
 - 10 10YR2/3 黒褐色土 シルト 8層よりしりまひ 南部浮石3層混入
 - 11 10YR2/3 黒褐色土 シルト 10層より若干しりまひ 8層よりしりまひ 南部浮石15層混入
 - 12 10YR2/3 黒褐色土 シルト 11層より若干しりまひ 11層と同じしりまひ 南部浮石7層混入



L-298.900m
D13柱穴状土坑6号 F-F'



L-298.400m
D14柱穴状土坑1号 H-H'



- L-298.000m
D13柱穴状土坑7号
D13土坑1号
D13柱穴状土坑7・8号 G-G'
- 1 10YR4/4 褐色土 南部浮石2層多量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 南部浮石多量混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 径2~5mmの南部浮石3層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 径2~5mmの南部浮石1層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 10層より若干しりまひ 南部浮石2層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 10層より若干しりまひ 2、10層よりしりまひ 南部浮石1層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 8層よりしりまひ 南部浮石3層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 8層よりしりまひ 南部浮石3層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 10層より若干しりまひ 8層よりしりまひ 南部浮石15層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 11層より若干しりまひ 11層と同じしりまひ 南部浮石7層混入
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 3層よりしりまひ 径3~12mmの南部浮石1層混入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 シルト 南部浮石2層混入 基本土層濃褐色人為産物?
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層より褐色土 1層と同じしりまひ 南部浮石5%・炭付石に炭化物粒少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層よりしりまひ 南部浮石10層混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 シルト 4層よりしりまひ 南部浮石含まず 壁面凹?
 - 6 5層に南部浮石50%混入 壁面凹土?
 - 1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土・南部浮石・炭土粒多量・炭化物等多量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土・南部浮石・炭化物粒混入
 - 3 10YR2/1 黒褐色土 1、2層より南部浮石少量混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 南部浮石少量混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 4層よりしりまひ 南部浮石少量混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石少量混入
 - 7 10YR3/4 暗褐色土 上部2層く南部浮石混入 八戸火尻
 - 8 10YR2/2 黒褐色土 4層より南部浮石多量混入
 - 9 7層凹面
 - 10 基本土層暗褐色
 - 11 10YR3/3 暗褐色土 南部浮石少量混入



L-298.400m
D14柱穴状土坑2号 1-I'



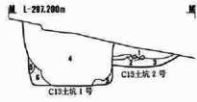
L-298.400m
D14柱穴状土坑3号 J-J'



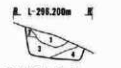
L-298.500m
D13土坑5号



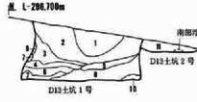
L-298.400m
D14柱穴状土坑4号 K-K'



- C13土坑1・2号 M-M'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 シルト 3層よりしりまひ 径3~12mmの南部浮石1層混入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 シルト 南部浮石2層混入 基本土層濃褐色人為産物?
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層より褐色土 1層と同じしりまひ 南部浮石5%・炭付石に炭化物粒少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 シルト 1層よりしりまひ 南部浮石10層混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 シルト 4層よりしりまひ 南部浮石含まず 壁面凹?
 - 6 5層に南部浮石50%混入 壁面凹土?



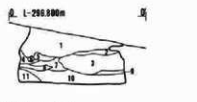
- L-298.200m
D14土坑2号 R-R'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石少量混入
 - 2 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭化物粒混入
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色土 3層より南部浮石少量・炭化物粒混入
 - 4 黄褐色土中に南部浮石粒多量混入
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 3層より南部浮石粒多量・炭化物粒混入
 - 6 黄褐色土中に炭付石・炭化物粒多量混入



- L-298.700m
D13土坑1号
D13土坑2号
- D13土坑1-2号 N-N'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土・南部浮石・炭土粒多量・炭化物等多量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土・南部浮石・炭化物粒混入
 - 3 10YR2/1 黒褐色土 1、2層より南部浮石少量混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 南部浮石少量混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 4層よりしりまひ 南部浮石少量混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石少量混入
 - 7 10YR3/4 暗褐色土 上部2層く南部浮石混入 八戸火尻
 - 8 10YR2/2 黒褐色土 4層より南部浮石多量混入
 - 9 7層凹面
 - 10 基本土層暗褐色
 - 11 10YR3/3 暗褐色土 南部浮石少量混入



- L-298.800m
D13土坑7号
D13土坑6号
D13土坑4号
- D13土坑7・8号 P-P'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南部浮石粒多量混入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 南部浮石粒含まず
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石粒含まず
 - 4 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石粒多量混入



- L-298.900m
D13土坑5号 O-O'
- 1 10YR3/2 黒褐色土 シルト 径10mm以下の南部浮石15層混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 シルト 1層よりしりまひ 径10mm以下の南部浮石7層混入
 - 3 10YR2/1 黒褐色土 シルト 2層よりしりまひ 径10mm以下の南部浮石14層混入
 - 4 10YR2/1 黒褐色土 シルト 径10mm以下の南部浮石20% (壁の南部浮石粒含む?) 混入
 - 5 10YR2/1 黒褐色土 (2層凹面) 径10mm以下の南部浮石3層混入
 - 6 10YR3/4 暗褐色土 シルト 径10mm以下の南部浮石8層混入
 - 7 10YR3/2 暗褐色土 シルト 1層より褐色土 10層よりしりまひ 径10mm以下の南部浮石14層混入
 - 8 10YR2/2 黒褐色土 シルト 8層より褐色土 10層よりしりまひ 径10mm以下の南部浮石3層混入
 - 9 10YR2/2 黒褐色土 シルト 8層より褐色土 10層よりしりまひ 径10mm以下の南部浮石2層混入
 - 10 8層凹面
 - 11 8層と同じしりまひ 径10mm以下の南部浮石15層混入
 - 12 10層よりしりまひ 8層凹面



- L-298.200m
D14土坑1号 Q-Q'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 多数の南部浮石・褐色土のブロックの混合土 炭化物粒混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 褐色土との混合土 南部浮石少量混入



第52図 土坑・柱穴状土坑(4)

D11土坑



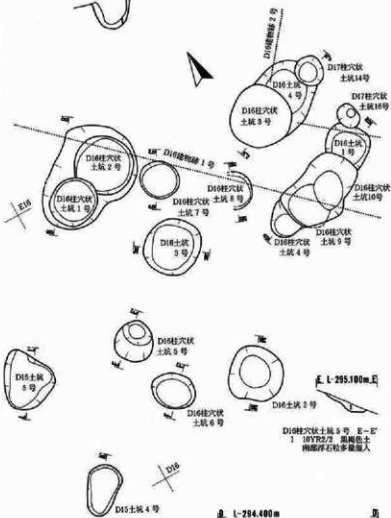
A L-295.000m

D11土坑 A-A'
1 10YR2/3 黒褐色土 シルト
厚1~5mmの南洲浮石粒5粒混入

A L-295.100m



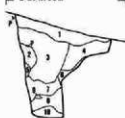
D16柱穴状土坑 A-A'
1 10YR2/2 黒褐色土
南洲浮石粒少量混入



A L-295.100m

D19柱穴状土坑 5号 E-E'
1 10YR2/2 黒褐色土
南洲浮石粒多量混入

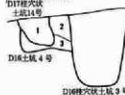
A L-294.700m



D16柱穴状土坑 1号 B-B'

- | | | | |
|----|-------------|------|------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 南洲浮石粒19~20粒混入 |
| 2 | 10YR3/2~3/4 | 暗褐色土 | 南洲浮石粒・八戸火山灰混入 |
| 3 | 10YR2/2~2/3 | 黒褐色土 | 南洲浮石粒10~15粒・炭土・炭化植物体混入 |
| 4 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 南洲浮石粒・八戸火山灰混入 |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色土 | 八戸火山灰混入 |
| 6 | 5層相当 | | |
| 7 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 南洲浮石粒微量・八戸火山灰多量混入 |
| 8 | 10YR4/4 | 褐色土 | 南洲浮石粒少量・八戸火山灰多量混入 |
| 9 | 8層相当 | 木屑埋乱 | |
| 10 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 南洲浮石粒・八戸火山灰混入 |

A L-294.300m



D16土坑 4号 D16柱穴状土坑 3号 D17柱穴状土坑 4号 C-C'

- | | | | |
|---|---------|------|---|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 多量の南洲浮石粒との混合土
1層より若干黒色土 自然堆積? |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 多量の南洲浮石粒との混合土
炭化物粒微量混入。人為堆積
柱の跡による影に彫られた穴?
基本土層薄。層相当 張り過ぎ?
人為堆積 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | |

※土坑No.4柱穴 南洲浮石土坑No.4柱穴No.3に切られていて

A L-294.400m



D16土坑 1号

- | | | | |
|----|---------|---------|-------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 南洲浮石粒との混合土 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 南洲浮石粒微量混入 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 褐色土・ツツノ混入 |
| 3a | 10YR6/3 | にがい黄褐色土 | 黄褐色土に暗褐色土少量混入 |
| 4 | 10YR6/4 | 褐色土 | 黒褐色土に微量混入 炭質堆積? |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 微量の南洲浮石粒との混合土 |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 黒褐色土・南洲浮石粒混入 |
| 7 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 少量の南洲浮石粒との混合土 |
| 8 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 南洲浮石粒との混合土 褐色土混入 |
| 9 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 多量の南洲浮石粒との混合土 |
| 10 | 10YR6/3 | にがい黄褐色土 | 黄褐色土と黒褐色土の互層 人為堆積 |
| 11 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 基本土層薄 層相当 |



第53図 土坑・柱穴状土坑 (5)

図 L-292.200m 層



- D20柱穴状土坑 D-D'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 2 10YR2/2~3/2 黒褐色土 両側浮石粒数濃混入

図 L-291.800m 層



- D21柱穴状土坑 1号 C-C'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒多量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 1層より両側浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量混入
 - 4 10YR2/1 黒褐色土 両側浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量混入 割り通す?

図 L-292.900m 層



- D18土坑 2号 E-E'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒 炭土粒少量・炭化物粒混入

図 L-291.900m 層



- D19土坑 3号 F-F'
- 1 10YR2/3 黒褐色土と両側浮石粒の混合土

図 L-291.800m 層



- D20土坑 G-G'
- 1 10YR2/2 黒褐色土と両側浮石粒の混合土 炭化物粒少量・土量混入

図 L-291.900m 層



- D21柱穴状土坑 2号 D11土坑 2号 D-D'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 中層・両側浮石粒少量・炭化物粒数濃混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量・炭化物粒数濃混入
 - 7 10YR2/1 黒褐色土 細かい両側浮石粒数多・炭土粒少量・炭化物粒数濃混入
 - 8 10YR2/2 黒褐色土 細かい両側浮石粒少量・炭化物粒数濃混入
 - 9 両側浮石粒層
 - 10 八戸火山灰
 - 11 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量混入
 - 12 両側浮石粒層 10YR2/3 黒褐色土混入
 - 13 10YR2/3 黒褐色土 両側浮石粒少量混入
 - 14 10YR2/4 暗褐色土 両側浮石粒少量混入

図 L-291.900m 層

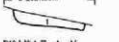


- D21土坑 1号 H-H'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 細かい土 細かい両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入 基本土層より2層相当?

D18土坑 1号



図 L-292.900m 層

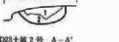


- D18土坑 1号 A-A'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量混入

D23土坑 2号



図 L-291.800m 層



- D23土坑 2号 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 7.5YR5/4 暗褐色土 (黒褐色土が剥けて変化) 混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 炭土粒少量混入

D22柱穴状土坑 2号



図 L-291.200m 層



- D22柱穴状土坑 2号 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 少量・炭化物粒数濃混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量・炭化物粒数濃混入
 - 3 10YR3/1 黒褐色土 砂・両側浮石粒数多・炭化物粒数濃混入
 - 3a 10YR3/1-2/1 黒褐色~黒色土 砂・両側浮石粒数濃混入
 - 4 10YR2/2-2/2 黒褐色土 両側浮石粒少量・炭土粒少量・炭化物粒少量混入
 - 5 10YR2/1 黒褐色土 両側浮石粒多量・炭化物粒数濃混入

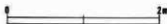
D23土坑 1号



図 L-291.800m 層



- D23土坑 1号 A-A'
- 1 7.5YR2/2~10YR2/2 黒褐色土 炭土粒・炭化物粒混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 両側浮石粒数多・1層より少量の炭土粒と炭化物粒混入
 - 3 10YR3/1 黒褐色土 両側浮石粒少量混入 割り通す?



第55図 土坑・柱穴状土坑 (7)

横 L-293.600m 南



- D19柱状土坑 7号 M-M'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒15~20%・
炭土粒少量・炭化物粒
少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒10~15%・
炭土粒少量・炭化物粒
少量混入
 - 3 10YR2/4 暗褐色土
南部浮石粒多量・八戸
火山灰7・炭化物粒数
量混入
 - 4 10YR2/4 暗褐色土
南部浮石ブロック・八
戸火山灰混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
八戸火山灰上被層

横 L-293.200m



- D19柱状土坑 1号 O-O'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒少量混入

横 L-293.300m 南



- D19柱状土坑 2号 P-P'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒20%混入

横 L-293.500m



- D18土坑 Q-Q'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
南部浮石粒1~2%混入

横 L-296.400m 南



- E13柱状土坑 1号 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
シルト 径1~5mmの
南部浮石粒10%混入



E13土坑 2号

F13土坑 3号

E13土坑 5号

E13土坑 4号

横 L-295.900m



- E14柱状土坑 2号 B-B'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
シルト 径1~5mmの南
部浮石粒3%混入

横 L-296.000m 南



- E13柱状土坑 3号 C-C'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
シルト 径1~5mmの南
部浮石粒7%混入

横 L-295.900m 南



- E13柱状土坑 4号 D-D'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒多量混入

横 L-295.800m 南



- E14柱状土坑 1号 E-E'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
シルト 径1~5mmの南
部浮石粒7%混入

横 L-295.700m 南



- E13土坑 4・5号 H-H'
- 1 10YR2/3-3/4 暗褐色土
黒褐色土との混合土
南部浮石粒10~15%
混入
 - 2 10YR2/2-2/3 黒褐色土
南部浮石粒5~10%・
炭化物少量混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒15~20%・
八戸火山灰少量・炭
化物少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒7~10%・
八戸火山灰少量・炭
化物少量混入
 - 5 10YR2/2-2/3 黒褐色土
南部浮石粒10~20%
混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒多量混入

横 L-293.500m



- D18土坑 Q-Q'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
南部浮石粒1~2%混入

横 L-295.700m 南



- E13土坑 4・5号 H-H'
- 1 10YR2/3-3/4 暗褐色土
黒褐色土との混合土
南部浮石粒10~15%
混入
 - 2 10YR2/2-2/3 黒褐色土
南部浮石粒5~10%・
炭化物少量混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒15~20%・
八戸火山灰少量・炭
化物少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒7~10%・
八戸火山灰少量・炭
化物少量混入
 - 5 10YR2/2-2/3 黒褐色土
南部浮石粒10~20%
混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒多量混入

横 L-296.000m



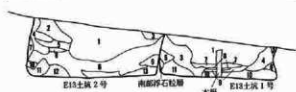
- E13土坑 3号 G-G'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
河内たふま川部南部浮石
粒多量混入

E14土坑 1号



第57図 土坑・柱状土坑 (9)

F L-295.500m



- E13土坑 1-2号 F-F'
- 1 10YR5/0 黄褐色土
 - 2 10YR7/0 引黄褐色土
 - 3 10YR5/0 黄褐色土
 - 4 10YR2/2 黑褐色土
 - 5 10YR2/3 黑褐色土
 - 6 10YR2/3 黑褐色土
 - 7 10YR2/4 暗褐色土
 - 8 10YR7/8 明黄褐色土
 - 9 10YR2/3 黑褐色土
 - 10 10YR4/4 暗褐色土
 - 11 10YR4/6 暗褐色土
 - 12 10YR3/4 暗褐色土
 - 13 10YR2/2 黑褐色土

シルト 南原浮石堆混入
 南原浮石アロック層
 シルト 南原浮石堆混入
 南原浮石少量混入
 南原浮石堆混入
 南原浮石少量混入
 南原浮石堆と含まず
 南原浮石アロック層
 南原浮石堆混入、5、6層間?
 南原浮石堆混入
 南原浮石堆混入

L-295.700m



- E13土坑 0-7号 I-I'
- 1 10YR3/2 黄褐色土
 - 2 八戸火山灰上段層 腐り過ぎ

L-295.800m



- E13土坑 9号 J-J'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
基本土層1層?、細かい南原浮石混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
基本土層 (八戸火山灰層上)-南原浮石粒・粒少量の土層混入
 - 3 10YR4/3 におい黄褐色土
八戸火山灰下段に南原浮石粒少量混入

L-296.100m 馬



- E13土坑10号 K-K'
- 1 10YR2/3 黄褐色土
南原浮石粒少量 (細かいもの多い) 混入

L-295.800m



- E14土坑 2号 L-L'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
南原浮石粒との混合土
基本土層層数不明
 - 2 10YR2/2 黄褐色土
南原浮石粒との混合土
基本土層層数不明
 - 3 10YR3/4 暗褐色土
八戸火山灰下段に南原浮石粒少量混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土・南原浮石粒・八戸火山灰混入
 - 5 10YR4/3 におい黄褐色土
八戸火山灰層に南原浮石粒少量混入

E14土坑 4号 M-M'

- 1 10YR2/3 黄褐色土
- 2 10YR2/2-2/3 黄褐色土
- 3 10YR3/4 暗褐色土
- 4 10YR2/3 黄褐色土シルトと10YR3/8 黄褐色土による混合土
- 5 10YR2/2 黄褐色土
- 6 10YR3/3 暗褐色土と10YR3/2 黄褐色土の混合土
- 7 10YR2/2-2/3 黄褐色土
- 8 10YR3/4-4/4 黄褐色土~暗褐色土
- 9 10YR2/3-3/3 黄褐色~暗褐色土

シルト 南原浮石粒10%混入
 シルト 南原浮石粒7%・炭化物粒少量混入
 シルチローム 南原浮石粒2%以下混入、八戸火山灰の再堆積層
 シルト 南原浮石粒7%・炭化物粒少量混入
 シルト 南原浮石粒30%以下・八戸火山灰30%混入
 シルチローム 八戸火山灰主構成
 シルチローム 2層より若干明るい色調、南原浮石粒1%以下混入、八戸火山灰の再堆積層?
 シルチローム 八戸火山灰による再堆積層、質の可能性あり

L-294.500m



L-295.400m



- E14土坑 5-6号 N-N'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
 - 2 10YR3/3 暗褐色土
 - 3 10YR3/3 暗褐色土
 - 4 10YR2/3 暗褐色土

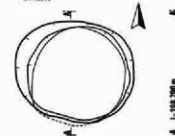
砂質シルト 南原浮石粒15%混入
 シルト 八戸火山灰上段層相当
 砂質シルト 南原浮石粒10-15%・八戸火山灰の小アロック混入
 シルト 八戸火山灰上段層相当
 腐り過ぎ

L-295.900m 馬



- E14土坑 6号 O-O'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
南原浮石粒時に下段に多量混入

E10土坑



- E10土坑 A-A'
- 1 10YR2/3 黄褐色土
南原浮石粒少量・基本土層混入
 - 10YR3/4 暗褐色土
黄褐色土層・南原浮石粒・八戸火山灰混入
 - 10YR2/3 黄褐色土
南原浮石粒・八戸火山灰混入
 - 10YR2/2 黄褐色土
南原浮石粒少量混入

E11柱穴状土坑



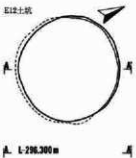
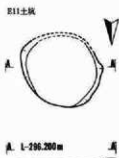
L-296.200m 馬



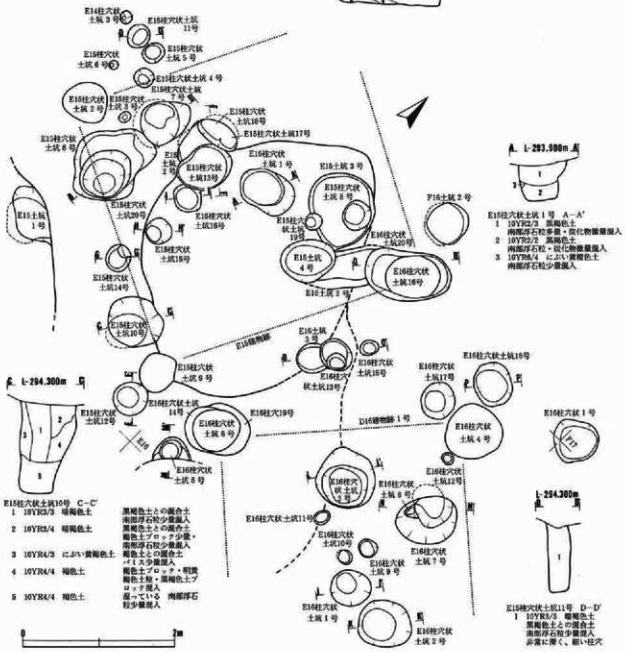
- E11柱穴状土坑 A-A'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
シルト 径2-3cmの南原浮石粒2%混入



第58図 土坑・柱穴状土坑 (10)



- E11土坑**
- 黒褐色土、硬質粘土質土質の
褐色土、灰褐色土
人骨遺骸
1 黒土・南陽浮石粒少量混入
2 黒土・南陽浮石粒少量混入
3 黒土・南陽浮石粒少量混入
4 黒土・南陽浮石粒少量混入
5 黒土・南陽浮石粒少量混入
6 黒土・南陽浮石粒少量混入
- E12土坑**
- 黒褐色土
1 10YR2/7 黒褐色土
2 10YR2/3 黒褐色土
3 10YR2/7 黒褐色土
4 10YR3/7 黒褐色土
5 10YR2/8 黒褐色土
6 10YR2/7 黒褐色土



- E15柱穴状土坑10号 C-C'**
- 1 10YR3/3 暗褐色土
2 10YR2/4 暗褐色土
3 10YR4/3 に強い黄褐色土
4 10YR4/4 褐色土
5 10YR4/4 褐色土
- 黒褐色土との混合土
南陽浮石粒少量混入
黒褐色土との混合土
褐色土ブロック少量・
南陽浮石粒少量混入
褐色土との混合土
ブロック少量混入
褐色土ブロック・暗褐色土
褐色土ブロック混入
混ざっている
巨砂少量混入

- E16柱穴状土坑1号 A-A'**
- 1 10YR2/3 暗褐色土
2 10YR2/2 黒褐色土
3 10YR8/4 に強い黄褐色土
南陽浮石粒多量・炭化物微量混入
南陽浮石粒少量混入

- E16柱穴状土坑11号 D-D'**
- 1 10YR3/3 暗褐色土
黒褐色土との混合土
南陽浮石粒少量混入
赤褐色土・黒い柱穴

第59図 土坑・柱穴状土坑 (11)

図 L-294.300m



E15柱状土坑
土坑20号

図 L-294.300m



E15柱状土坑20号

E18柱状土坑12号 E-E'
1 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石少量混入
基本土層1層E層崩壊
2 10YR1/3 黒褐色土
多量の南面浮石との混
合土 黄褐色土ブロック
混入

図 L-294.300m



E15柱状土坑14号 G-G'
1 10YR2/3 暗褐色土
下に褐色土、南面浮
石少量、炭化物微量
混入
2 10YR4/4 褐色土
南面浮石少量、炭化
物微量混入

図 L-294.100m



E15柱状土坑15号 H-H'
1 10YR2/3 暗褐色土
細かい南面浮石多量、
炭化物微量混入

図 L-294.000m



E15柱状土坑18号
土坑13号

図 L-294.000m



E16柱状土坑18号 F-F'
1 10YR2/3 暗褐色土

図 L-294.000m



E16柱状土坑18号 F-F'
1 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石少量、炭化物
微量混入
2 10YR4/3 におい黄褐色土
におい黄褐色土ブロック、
南面浮石少量、炭化物
微量混入
3 10YR2/4 暗褐色土
南面浮石少量、炭化物
微量混入
4 10YR4/3 におい黄褐色土
南面浮石少量、炭化物
微量混入
5 10YR4/6 褐色土
南面浮石少量、炭化物
微量混入
6 10YR6/4 におい黄褐色土
南面浮石少量混入
7 10YR7/4 におい黄褐色土
南面浮石微量混入

図 L-293.500m



E16柱状土坑18号 F-F'
1 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石少量、炭化
物微量混入

図 L-294.100m



E18柱状土坑2号 K-K'
1 10YR2/3-2/3 黒褐色土
南面浮石少量、炭化物微量、
紅腐土少量混入
2 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石多量、炭化物微量、
紅腐土少量混入
3 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石少量混入

図 L-294.300m



E16柱状土坑8号 M-M'
1 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石微量混入
2 10YR2/3 暗褐色土 汚れた八戸火山灰層ブロック土
3 10YR2/2 暗褐色土 南面浮石少量且炭化物多量混入

図 L-294.200m



E16柱状土坑3号 L-L'
1 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石10-15%、八戸
火山灰、焼土微量、炭化物
混入
2 10YR2/3 暗褐色土
上に南面浮石ブロック、
八戸火山灰、土層との境に
焼土微量混入
3 10YR4/4-4/3 褐色土
八戸火山灰層

図 L-293.900m



E16柱状土坑7号 N-N'
1 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土ブロックと
の混合土 南面浮石
少量混入
2 10YR2/3 暗褐色土 細かい南面浮石微量
混入
3 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石多量混入

図 L-294.000m



E16柱状土坑13-15号 E16土坑3号 O-O'
1 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石少量、焼土微量、炭化物少量混入
2 10YR2/4 暗褐色土
南面浮石少量、炭化物少量混入
3 10YR2/4-4/4 暗褐色土
南面浮石少量、炭化物微量混入
4 10YR2/3 暗褐色土
南面浮石少量、炭化物微量混入

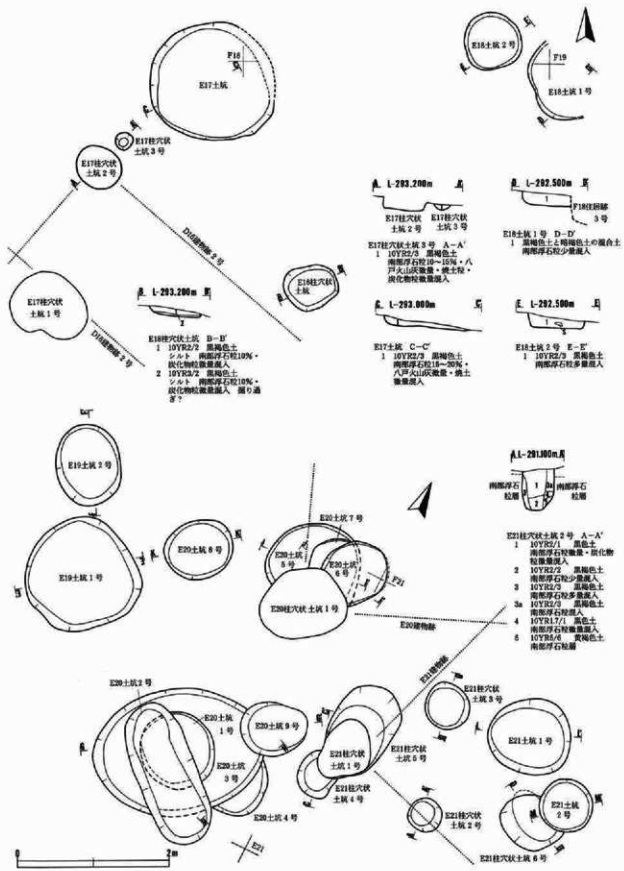
図 L-294.000m



E16柱状土坑16-20号 Q-Q'
1 10YR2/3 暗褐色土
褐色土・南面浮石多量混入
上位にある遺構の残土？
2 10YR2/3 暗褐色土
褐色土多量、南面浮石少量
混入
3 10YR4/6 褐色土
八戸火山灰層に埋没土層、
南面浮石少量混入
4 10YR2/4 暗褐色土
暗褐色土微量混入
5 10YR4/6 褐色土
暗褐色土微量混入
6 10YR4/6 褐色土
暗褐色土微量混入
7 10YR4/3 におい黄褐色土
黄褐色土・南面浮石少量混入
褐色土との混合土 黄褐色
土ブロック混入



第60図 土坑・柱状土坑 (12)



第61図 土坑・柱穴状土坑 (13)



E21柱穴状土坑 3号 B-B'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 2 10YR3/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 3 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒少量混入



E21柱穴状土坑 4号 C-C'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 3 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 4 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 5 10YR2/4 黒褐色土 南面浮石粒少量混入

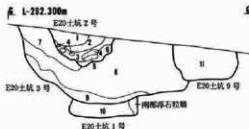


E21柱穴状土坑 6号



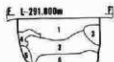
E19土坑 1号 E-E'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 3 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入



E10土坑 1・2・3・9号 G-G'

- 1 10YR3/1 黒褐色土 十和田ト火山灰混入 黒褐色土・十和田ト火山灰 雜質・南面浮石粒混入 十和田ト火山灰混入 黒褐色土下汚れた十和田a フロック土 25YR/2 灰白土の砂粒状のもの雜質混入 フロック土 中層より大きく 十和田bよりしまり筋 十和田bのふるい分けされたもの
- 2 10YR2/3 黒褐色土 十和田ト火山灰混入 南面浮石粒多量・炭化物粒 雜質混入 基本土層目録相当? 層よりしまり筋 黒褐色土・南面浮石混入 褐色土層・細かい南面浮石 粒雜質混入 基本土 層目録相当
- 3 25Y2/1 灰黒色土
- 4 25Y2/2 灰黒色土
- 5 25YR/2 灰白土
- 6 10YR2/2 黒褐色土
- 7 10YR2/3 黒褐色土
- 8 10YR2/3 黒褐色土
- 9 10YR2/4 暗褐色土
- 10 10YR2/2 黒褐色土
- 11 10YR2/3 黒褐色土



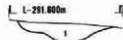
E18土坑 2号 F-F'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入
- 3 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
- 4 10YR3/2 暗褐色土 細かい南面浮石粒雜質混入
- 5 10YR2/2~3/4 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
- 6 10YR4/0 褐色土 上位に黒褐色土・南面浮石粒少量混入



E20土坑 4号 H-H'

- 1 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石粒多量混入
- 2 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 3 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 4 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入



E20土坑 5号 I-I'

- 1 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土・南面浮石粒 3~5%混入



E20土坑 6・7号 J-J'

- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- 2 10YR2/3 黒褐色土 下に暗褐色土・南面浮石粒多量混入
- 3 10YR3/2 黒褐色土と10YR2/3 暗褐色土との混色土 南面浮石粒多量混入
- 4 10YR3/2 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
- 5 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石粒多量混入
- 6 10YR4/4 褐色土 南面浮石粒多量混入
- 7 10YR2/3 黒褐色土 褐色土・暗褐色土・南面浮石粒多量混入



E20土坑 8号 K-K'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 粒層相当が十和田a・b 火山灰含まず 南面浮石粒少量混入



E21土坑 1号 L-L'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量混入



E21土坑 2号 M-M'

- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒少量混入



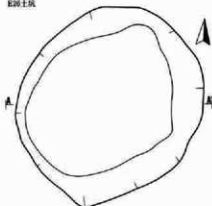
L-291.200m

E22土坑 1号 A-A'

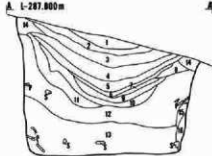
- 1 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入

第62図 土坑・柱穴状土坑 (14)

E20土坑



A L-287.800m



L-285.100m

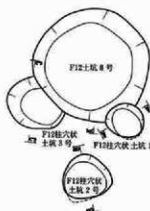


L-285.400m 具

F12柱穴状土坑2号 B-B'
1 10YR2/3 暗褐色土
内側の南面浮石粒多量混入

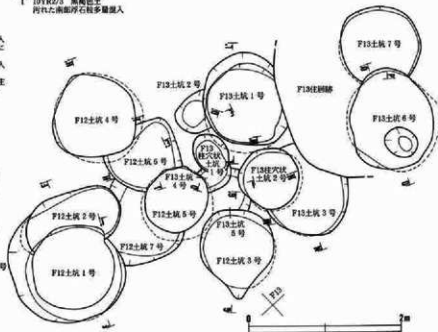
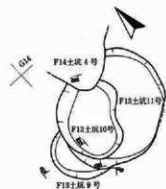
F12柱穴状土坑1号 A-A'

- 1 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒多量混入
- 2 10YR2/9 暗褐色土 八甲火山灰下位層に南面浮石粒混入
- 3 10YR2/4 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
- 4 10YR2/3 暗褐色土 内側の南面浮石粒主体 暗褐色土混入



E20土坑 A-A'

- 1 10YR2/1 暗褐色土 十和田a混入
- 2 10YR2/1 暗褐色土 十和田a多量混入
- 3 10YR2/1 暗褐色土 十和田a全体に混入
- 4 10YR1/1 暗褐色土 一部暗褐色土・十和田a少量混入
- 5 10YR2/1 暗褐色土 径1-3mmの十和田a多量混入
- 6 10YR2/1 暗褐色土と炭化物a混 細かい南面浮石粒混入・炭化物混入
- 7 10YR2/3 暗褐色土 細かい南面浮石粒多量混入
- 8 10YR2/1 暗褐色土 細かい南面浮石粒少量混入
- 9 10YR2/1 暗褐色土 細かい南面浮石粒・炭化物粒多量混入
- 10 10YR1.7/1 黒色土 上位に南面浮石粒少量・下位に炭化物粒混入
- 11 10YR2/2 暗褐色土 上位に南面浮石粒少量・一部炭化物粒混入
- 12 10YR2/3 暗褐色土 11層よりしりぞき 暗褐色土・南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- 13 10YR2/2 暗褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- 14 10YR2/2 暗褐色土 細かい南面浮石粒混入
- 15 10YR2/1 暗褐色土 細かい南面浮石粒少量・炭化物粒少量混入
- 16 10YR2/2 暗褐色土 15層よりしりぞき 15層より南面浮石粒多量・炭化物粒混入



第63図 土坑・柱穴状土坑(15)

Ⅲ L-295.200 m



- F12柱穴状土坑3号
F12土坑3号 C-C'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
内れた南面浮石少量・炭化物粒
散見混入 基本土層層相混同
 - 2 10YR2/3 黒褐色土
内れた南面浮石との混合土
炭化物粒散見混入
 - 3 10YR3/1 黒褐色土
少量の南面浮石少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石粒少量・八戸火山灰
層上位・炭化物粒少量混入

Ⅲ L-295.400 m



- F12柱穴状土坑1号 D-D'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
内れた南面浮石少量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石粒下位の八戸火山灰層 層り混同

Ⅲ L-295.300 m



- F12柱穴状土坑2号 E-E'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
内れた南面浮石少量混入

Ⅲ L-295.700 m



- F12土坑1-3号 F-F'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒散見混入
 - 2 10YR3/1 黒褐色土 1層より細かい南面浮石粒混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土と黒褐色土との混合土 南面浮石粒少量・炭化物少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土と黒褐色土との混合土 南面浮石粒少量・炭化物少量混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 1層相当
 - 6 10YR2/3 暗褐色土 基本土層層相下位の黒褐色土との混合土 南面浮石粒少量混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土 2層相当
 - 8 10YR6/6 明黄褐色土 南面浮石粒層 燻硝土
 - 9 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰層 燻硝土
 - 10 10YR2/3 暗褐色土 付いた南面浮石少量混入
 - 11 10YR2/3 暗褐色土 10層より黄褐色土多量下・内れた南面浮石粒多量混入

Ⅲ L-295.700 m



- F12土坑3号 G-G'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量混入 基本土層層相混同
 - 2 10YR6/6 明黄褐色土 南面浮石粒層 黒褐色土ラ1層に炭化物粒に紛う
 - 3 10YR3/1 黒褐色土 1層相当 褐色土多量・1層より南面浮石粒少量混入
 - 5 10YR6/6 明黄褐色土 南面浮石粒層
 - 6 10YR6/6 明黄褐色土 南面浮石粒層 黒褐色土多量混入
- 専らすべて人為堆積 7, 8, 9, 10 自然堆積 (壁の割れ等)
壁は掘り込んだ壁土の結核

Ⅲ L-295.300 m



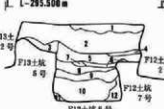
- F12土坑6号 J-J'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
 - 2 10YR6/4 褐色土 南面浮石粒・八戸火山灰下位混入
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土・南面浮石粒・八戸火山灰下位混入
 - 4 10YR3/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・八戸火山灰下位ラフタ・炭化物少量混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 4層より南面浮石粒少量混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土 3層より黒色土多量・南面浮石粒混入
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒・炭化物粒散見混入
 - 8 10YR3/3 暗褐色土 八戸火山灰上位に南面浮石粒多量混入

Ⅲ L-295.300 m



- F12土坑4号 H-H'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒多量混入
 - 2 10YR4/3 濃い黄褐色土 黒褐色土・八戸火山灰混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰上位混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土多量混入 2層相当
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒多量混入
 - 6 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
 - 7 10YR2/1-3/1 黒褐色土 砂質ラフタ・南面浮石粒混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒多量混入
 - 9 10YR2/3 暗褐色土 1層より黒色土多量・南面浮石粒混入
 - 10 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰上位との混合土 南面浮石粒多量混入
 - 11 10YR6/6 明黄褐色土 南面浮石粒少量・炭化物粒散見混入
 - 12 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒多量混入 7層相当

Ⅲ L-295.500 m



- F12土坑5-7号 F12土坑4-5号 I-I'
- 1 10YR4/3 濃い黄褐色土 黒褐色土ブロック・南面浮石粒少量混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒少量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 内れた南面浮石粒に黒褐色土混入
 - 4 南面浮石粒層 黄褐色土多量混入
 - 5 10YR2/3 暗褐色土 2層より南面浮石粒少量混入
 - 6 10YR4/3 濃い黄褐色土 南面浮石粒・細かい南面浮石粒層で構成
 - 7 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土と黄褐色土との混合土に南面浮石粒混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 褐色土と少量の南面浮石粒との混合土
 - 9 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒少量混入 基本土層層 b 層相混入
 - 10 10YR2/3 暗褐色土 9層に黄褐色土・南面浮石粒混入
 - 11 10YR9/4 褐色土 八戸火山灰層ラフタ
 - 12 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量・八戸火山灰上位混入

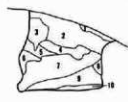
Ⅲ L-295.200 m



- F12土坑8号 K-K'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量混入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 褐色土との混合土
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 内面浮石粒少量混入 1層より黒色土 南面浮石粒多量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 内面浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石粒多量混入 内面浮石粒多量混入
 - 6 10YR2/3 黒褐色土 基本的には層相当 南面浮石粒多量混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土 基本的には層相当 南面浮石粒多量混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰上位混入
 - 9 10YR4/3 濃い黄褐色土 八戸火山灰下位層 褐色土との混合土

第64図 土坑・柱穴状土坑 (16)

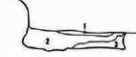
点 L-295.500 m



- F13土坑1号 L-L'
- 1 10YR12/1 黒褐色土
 - 2 10YR2/3 黒褐色土
 - 3 10YR3/2 黒褐色土
 - 4 10YR3/2 暗褐色土
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
 - 6 10YR2/2 黒褐色土
 - 7 10YR2/3 濃い黄褐色土
 - 8 10YR2/2 黒褐色土
 - 9 10YR2/3 黒褐色土
 - 10 10YR7/3 明黄褐色土

内面浮石粒少量、腐食土層多量混入
内面浮石粒、炭化物粒多量混入
暗褐色土多量、内面浮石粒混入
内面浮石粒多量混入
基本土層明確な下位へ明確に上向き、内面浮石粒少量混入
内面浮石粒混入
基本土層明確な下位、内面浮石粒、炭化物少量混入
5層ほど腐食層多量、土層多量混入
内面浮石層

点 L-295.100 m



- F13土坑8号 O-O'
- 1 10YR3/2 暗褐色土 砂質シルト 二次中層、内面浮石粒10~20%混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 砂質シルト 二次中層、内面浮石ブロック、八戸火山灰小ブロック混入
 - 3 10YR2/2 暗褐色土 砂質シルト 二次中層、内面浮石粒5~10%、焼土粒、炭化物混入

点 L-295.500 m



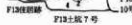
- F13土坑2号 M-M'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 シルト 径2~5mmの内面浮石粒10%混入
 - 2 10YR2/2 暗褐色土 シルト 1層より上層の 径2~5mmの内面浮石粒7%混入

点 L-295.700 m



- F13土坑3号 N-N'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 河れた内面浮石粒多量混入
 - 2 10YR2/2 暗褐色土 河れた内面浮石粒多量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 河れた内面浮石粒多量混入

点 L-294.800 m



- F13土坑7号 P-P'
- 1 5YR5/5 暗赤褐色土 焼土、内面浮石粒焼成を受ける
 - 2 5YR4/6 赤褐色土 焼土、4層が焼成を受けた部分
 - 3 10YR3/2 暗褐色土 内面浮石粒多量混入
 - 4 10YR2/2 暗褐色土 内面浮石粒多量混入 基本土層明確

点 L-294.400 m

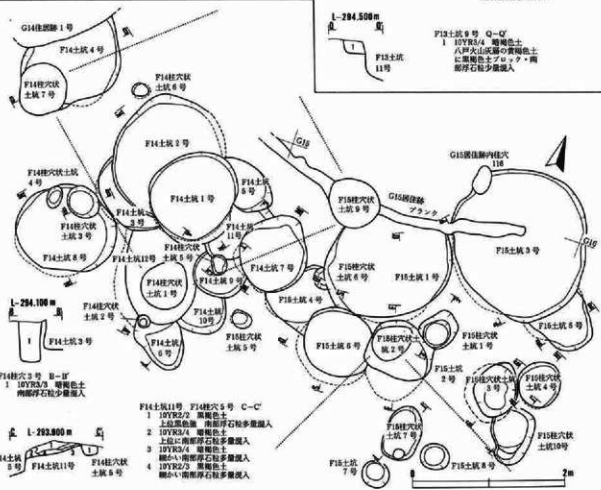


- F13土坑10号 R-R'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 多量の内面浮石粒との混入、基本土層1層
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 内面浮石粒多量混入、内面浮石粒層の中に暗褐色土混入
 - 3 10YR2/2 暗褐色土 内面浮石粒少量混入

点 L-294.500 m



- F13土坑9号 Q-Q'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 八戸火山灰層の黄褐色土に黄褐色土ブロック、内面浮石粒少量混入

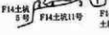


点 L-294.100 m



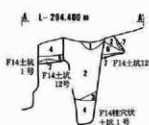
- F14柱状土坑3号 B-B'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 内面浮石粒少量混入

点 L-293.800 m

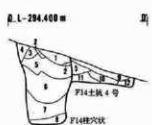


- F14土坑11号 F14柱状土坑5号 C-C'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 土粒混色、内面浮石粒多量混入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 上記へ内面浮石粒多量混入
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 焼土へ内面浮石粒多量混入
 - 4 10YR2/2 暗褐色土 焼土へ内面浮石粒多量混入

第66図 土坑・柱状土坑 (17)



- F14土坑 1・12号 F14柱穴状土坑 1号 A-A'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 黒褐色土少量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 3 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 1. 2層よりしりぞいた上に両面浮石粒少量混入 |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 八戸山灰土位 両面浮石粒混入 |



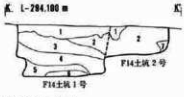
- F14柱穴状土坑 7号 F14土坑 4号 D-D'
- | | | | |
|----|---------|------|-------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 多量の両面浮石粒との混合土 |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 本層部分 |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 5 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 両面浮石粒多量・炭化物少量混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 5層より両面浮石粒少量混入 |
| 7 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 6層より細かい両面浮石粒少量混入 |
| 8 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 11層より細かい両面浮石粒少量混入 |
| 9 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 1層より両面浮石粒少量混入 |
| 10 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 炭化物少量混入 |
| 11 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 12 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 褐色土ブロック混入 |



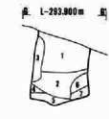
- F15柱穴状土坑 1号 E-E'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 褐色土に両面浮石粒多量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土に両面浮石粒多量混入 |
| 3 | 10YR7/6 | 明黄褐色土 | 基本土層厚ブロックで構成ブロック中に褐色土混入 |
| 4 | 10YR4/2 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土と黄褐色土との混合土 細かい浮石混入 |



- F15柱穴状土坑 2号 F-F'
- | | | | |
|---|---------|---------|----------------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 両面浮石粒多量混入 |
| 2 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土少量・両面浮石粒多量混入 |
| 3 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 黄褐色土ブロック・両面浮石粒多量混入 |
| 4 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 未検 |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色土 | 基本土層厚ブロック混入 |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 基本土層暗褐色土との混合土 両面浮石粒少量・粘土粒少量混入 |
| 7 | 2.5Y5/6 | 黄褐色土 | 基本土層暗褐色土との混合土 両面浮石粒少量混入の汚れたブロック土 |



- F14土坑 1号 K-K'
- | | | | |
|---|---------|------|----------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 暗褐色土 | 汚れた両面浮石粒多量・炭化物少量混入 |
| 2 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 1層より汚れた両面浮石粒少量・炭化物少量混入 |
| 3 | 10YR3/2 | 暗褐色土 | 1層より褐色土多量・炭化物少量混入 |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 一部褐色土ブロック・汚れた両面浮石粒・炭化物少量混入 |
| 5 | 2.5Y5/6 | 黄褐色土 | 白色砂土・褐色土・両面浮石粒混入 |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 色相は4層相当だが炭化物粒含まず |
| 7 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 褐色土ブロック・両面浮石粒少量混入 |



- F15柱穴状土坑 3号 G-G'
- | | | | |
|---|---------|---------|---------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 両面浮石粒多量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 3 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土・両面浮石粒多量・炭化物少量混入 |
| 4 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 5 | 10YR4/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量・炭化物少量混入 |
| 6 | 10YR3/4 | にがい黄褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 7 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 両面浮石粒多量混入 |



- F15柱穴状土坑 4号 H-H'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土と褐色土との混合土 両面浮石粒多量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 1層相当の細かい両面浮石粒多量混入 |
| 3 | 10YR6/4 | にがい黄褐色土 | 濃れた両面浮石粒混入 張り通す |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 両面浮石粒少量混入 |



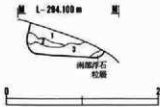
- F15柱穴状土坑 7号 I-I'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR4/4 | 褐色土 | 両面浮石粒少量・炭化物少量混入 |
| 2 | 10YR2/4 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量・炭化物少量混入 |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色土 | 下位に暗褐色土・両面浮石粒少量・炭化物少量混入 |
| 4 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 上位に両面浮石粒多量・炭化物少量混入 |
| 5 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 両面浮石粒多量・炭化物少量混入 |



- F14土坑 6号 L-L'
- | | | | |
|---|---------|------|--------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒多量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒混入 |
| 3 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 両面浮石粒混入 |
| 4 | 10YR4/4 | 褐色土 | 細かい両面浮石粒少量混入 |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 7 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 8 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | 両面浮石粒多量混入 |



- F15柱穴状土坑 7号 J-J'
- | | | | |
|---|--------------|------|-----------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 2 | 褐色土と暗褐色土の混合土 | | |



- F15土坑 7号 M-M'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 多量の両面浮石粒との混合土 炭化物少量混入 両面浮石粒の混との混合土? |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色土 | 後部の両面浮石粒との混合土 一部暗褐色土混入 |
| 3 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 1層と褐色土と暗褐色土との混合土 1層より細かい両面浮石粒混入 |



- F14土坑 8号 N-N'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 両面浮石粒少量混入 |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 1層より両面浮石粒少量混入 |
| 3 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 1. 2層よりしりぞいた上に両面浮石粒少量混入 |

第66図 土坑・柱穴状土坑 (18)



- F15土坑1号 O-O'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 基本土層堆b層・黒褐色土・南部浮石粒少量混入
 - 2 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土に小ブロック・南部浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/1 暗褐色土 盛りた南部浮石粒・炭化物粒少量混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土 暗色土と最層の南部浮石粒との混合土
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 明黄褐色土ブロック・黒褐色土混入



- F15土坑4号 O-O'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
 - 2 10YR3/2 暗褐色土
 - 3 10YR3/3 暗褐色土
 - 4 10YR2/2 暗褐色土
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- F15往次土坑6号
- 暗褐色土ブロック・南部浮石粒少量混入
暗褐色土と最層の南部浮石粒との混合土
黒褐色土・南部浮石粒少量混入
明黄褐色土に暗褐色土少量・南部浮石粒少量混入



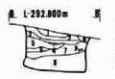
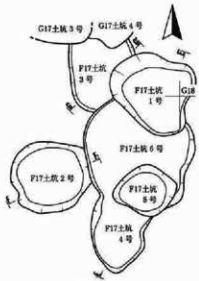
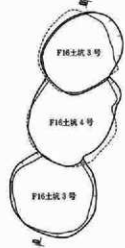
- F16土坑3号 P-P'
- 1 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石粒3%混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒2%混入
 - 3 10YR3/2 暗褐色土 南部浮石粒5%混入
 - 4 10YR4/4 暗色土と10YR2/2 暗褐色土の混合土 南部浮石粒5%・八戸大山灰少量・炭化物混入
 - 5 10YR2/1 暗褐色土と10YR2/3 暗褐色土の混合土 南部浮石ブロック10%混入
 - 6 10YR2/2 暗褐色土 中層堆積・南部浮石粒1%・八戸大山灰1%混入
 - 7 10YR2/1 黒褐色土 南部浮石粒1%混入
- F16土坑3号
G16土層群
プランク



- F16土坑6号 S-S'
- 1 10YR3/1 暗褐色土 南部浮石粒少量混入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土と最層土との混合土 南部浮石粒少量混入 炭化物粒少量混入
 - 3 10YR2/2 暗褐色土 南部浮石粒少量・最層土粒少量混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土に黒褐色土・南部浮石粒少量混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 基本土層堆b層・黒褐色土・南部浮石粒少量混入
- 黄褐色土ブロック



- F16土坑5号 R-R'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 白色砂土少量・南部浮石粒少量混入



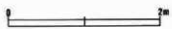
- F16土坑1号 R-R'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土と多量の南部浮石粒との混合土 炭化物粒少量混入
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 明黄褐色土と暗褐色土と南部浮石粒との混合土 南部浮石粒少量混入
 - 3 10YR3/4 にぶい黄褐色土 基本土層堆b層暗褐色土
 - 4 10YR3/4 暗褐色土 細かい南部浮石粒・1層より炭化物粒少量混入
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土と最層の南部浮石粒との混合土
 - 6 10YR4/4 暗褐色土と10YR7/4 にぶい黄褐色土 (明黄褐色土) との混合土
 - 7 10YR2/4 次黄褐色土 明黄褐色土粒と細かい南部浮石粒との混合土
 - 8 10YR4/4 暗褐色土と10YR7/4 にぶい黄褐色土 (明黄褐色土) との混合土 暗褐色土混入
 - 9 10YR3/2 暗褐色土 1層より炭化物粒少量混入



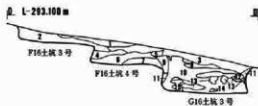
- F16土坑2号 C-C'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 と10YR4/6 暗褐色土との混合土 南部浮石粒少量混入



- F16土坑2号 Z-Z'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土ブロック少量・南部浮石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 明黄褐色土ブロック・暗褐色土混入



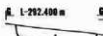
第67図 土坑・柱穴状土坑 (19)



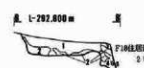
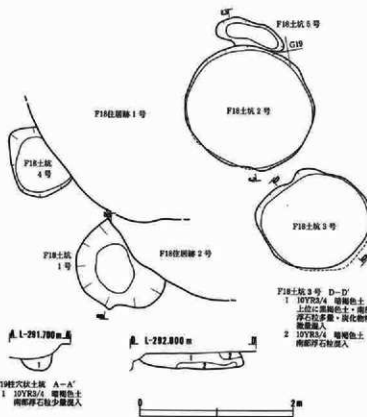
- F16土坑3-4号 G16土坑3号 D-D'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒多量・炭化物微量混入 人為浮石
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 付いた南部浮石・炭化物多量・炭化物付少量混入 人為浮石
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 4層相用
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 付いた南部浮石粒多量・炭土粒微量混入
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 10層相用
 - 6 5YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量・炭土プロット多量混入 人為海相
 - 7 10YR2/2 暗褐色土 南部浮石粒多量・炭土微量混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 白色砂土少量・南部浮石粒多量混入
 - 9 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土に白色砂土・褐色土・八戸火山灰微量混入
 - 10 10YR4/3 に近い黄褐色土 八戸火山灰層・火山礫浮石層混入
 - 11 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰層 薄り多量?
 - 12 10YR2/3 暗褐色土 炭土粒・炭化物微量混入
 - 13 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰層プロット土
 - 14 10YR2/4 暗褐色土 南部浮石粒多量・炭化物微量混入
 - 15 10YR5/4 に近い黄褐色土 細かい南部浮石粒・八戸火山灰混入



- F17土坑1-4-5-6号 E-E'
- 1 17YR3/1 黒褐色土 南部浮石粒少量・炭化物微量混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量・八戸火山灰微量混入
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色土 八戸火山灰層 暗褐色土少量・南部浮石粒微量混入
 - 4 10YR4/4 に近い黄褐色土 暗褐色土少量・南部浮石粒・八戸火山灰微量混入
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 暗褐色土多量混入・八戸火山灰層
 - 6 10YR2/4 暗褐色土 八戸火山灰層 暗褐色土多量・南部浮石粒混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量混入
 - 8 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰層に暗褐色土微量混入
 - 9 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土・南部浮石粒・八戸火山灰微量混入
 - 10 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰プロットに南部浮石粒少量混入
 - 11 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土・細かい南部浮石粒・八戸火山灰微量混入
 - 12 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰下位の褐色土部分 薄り多量
 - 13 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量・炭化物微量混入
 - 14 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土・南部浮石粒少量・八戸火山灰微量混入
 - 15 10YR2/4 に近い黄褐色土 付いた基本土層炭化物層(炭酸カルシウム) 人為海相
 - 16 10YR5/4 に近い黄褐色土 15層よりプロット状になっている 黒褐色土微量混入
 - 17 10YR1/4 に近い黄褐色土 砂層 基本土層炭化物の付いた部分? 本層下位に基本土層又層



- F17土坑3号 G-G'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 明褐色土(砂土)・褐色土プロット・南部浮石粒多量混入

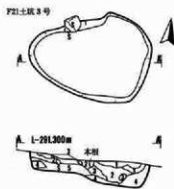
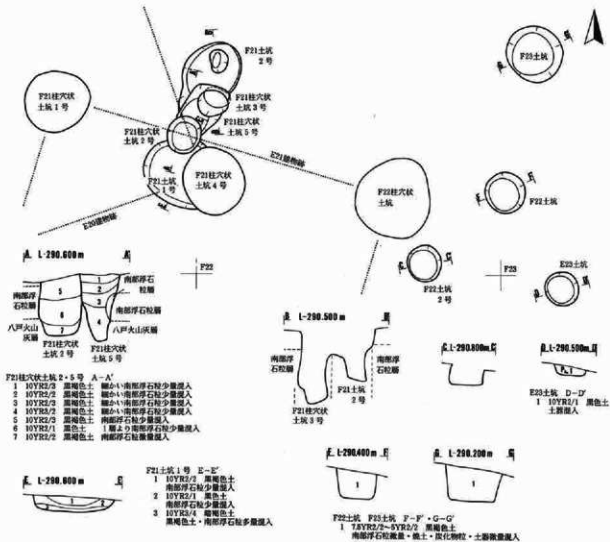


- F17土坑1号 B-B'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒多量・炭化物微量混入
 - 2 10YR4/3 褐色土 暗褐色土・南部浮石粒少量混入
 - 3 10YR4/4-5/4 褐色-暗褐色土 南部浮石粒少量混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量混入

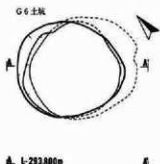


- F17土坑2-5号 C-C'
- 1 10YR5/4 に近い黄褐色土 明褐色土・褐色土混入 F17土坑1号の掘り戻り部分?
 - 2 10YR2/4 暗褐色土 八戸火山灰層プロット土
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土 南部浮石粒混入

第68図 土坑・柱穴状土坑 (20)



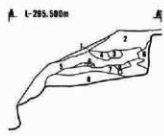
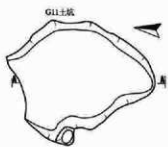
- F21 土坑 3号 A-A'**
- 1 10YR2/1 黒色土 黄土粒少量混入
 - 2 10YR2/3 黄褐色土 南原浮石粒・黄土粒混入
 - 3 7.5YR4/4 黄褐色土 黄土(焼け止黄褐色土?) 焼けた南原浮石粒混入
 - 4 10YR2/3 黄褐色土 南原浮石粒少量混入 基本土層厚約10m
 - 5 10YR2/1 黒色土 南原浮石粒少量混入



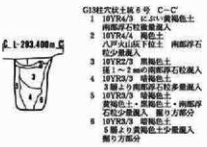
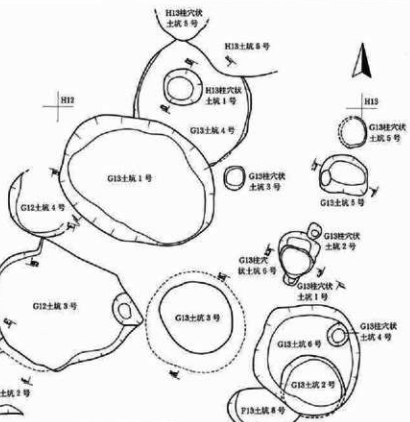
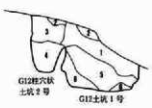
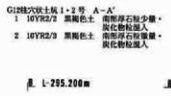
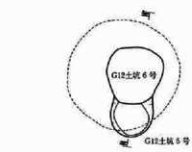
- G6 土坑 A-A'**
- 1 10YR2/1 黒色土 南原浮石粒少量混入 基本土層 1層相当
 - 2 10YR2/2 黄褐色土 南原浮石粒約40%混入 基本土層厚約10m
 - 3 10YR2/3 黄褐色土 南原浮石粒約40%・下位に高麗火山灰層混入 南原浮石粒約20%混入
 - 4 10YR2/1 黒色土 黄褐色土との混合土 南原浮石粒約10%混入
 - 5 10YR2/4 黄褐色土 南原浮石粒少量混入 高麗火山灰層
 - 6 10YR2/6 黄褐色土 基本層自然堆積



第09图 土坑・柱穴状土坑 (21)



- G11土坑 A-A'
- 1 10YR3/7 黄褐色土
基本土層 1層砂質
 - 2 10YR2/3 黄褐色土
南部厚石粒多量混入
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色土
混れ土南部厚石粒少量混入
 - 4 10YR2/3 黄褐色土
南部厚石粒多量混入
 - 5 10YR2/2 黄褐色土
南部厚石粒多量混入
 - 6 10YR0/8 可黄褐色土
南部厚石粒混
 - 7 10YR2/3 黄褐色土
内れ土南部厚石粒多量混入
 - 8 10YR3/3 黄褐色土
混れ南部厚石粒多量混入



- G13柱穴状土坑 8号 C-C'
- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土
南部厚石粒少量混入
 - 2 10YR4/4 黄褐色土
八戸丸山丘下段土 南部厚石粒少量混入
 - 3 10YR2/3 黄褐色土
径1~2mmの南部厚石粒混入
 - 4 10YR2/3 黄褐色土
3層より南部厚石粒多量混入
 - 5 10YR3/3 黄褐色土
黄褐色土・黄褐色土・南部厚石粒少量混入 層中下方分
 - 6 10YR3/3 黄褐色土
5層より黄褐色土少量混入 層中下方分

- G12柱穴状土坑 2号 G12土坑 1号 B-B'
- 1 10YR3/7 黄褐色土
南部厚石粒若干少量混入 混風?
 - 2 10YR3/7 黄褐色土
基本土層 1層 or 2層砂質
 - 3 10YR2/2 黄褐色土
南部厚石粒若干少量混入
 - 4 10YR2/2 黄褐色土
南部厚石粒少量混入
 - 5 10YR3/3 黄褐色土
黄褐色土
黄褐色土
八戸丸山丘段上段の黄褐色土層
南部厚石粒少量混入
 - 6 10YR2/2 黄褐色土
南部厚石粒少量混入

- H13柱穴状土坑 1号 D-D'
- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土
混風土・南部厚石粒少量混入
八戸丸山丘段上段土 G13土坑
4号層より砂質分
 - 2 10YR3/2 黄褐色土
南部厚石粒少量混入
 - 3 10YR2/2 黄褐色土
南部厚石粒少量混入
 - 4 10YR2/3 黄褐色土
南部厚石粒少量混入



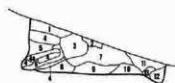
第70図 土坑・柱穴状土坑 (22)

長 L-295.200m



G12土坑 3号 F-F'
1 10YR2/3 黒褐色土
南面浮石粒多量混入

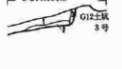
長 L-294.700m



G12土坑 4号 G-G'

1 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石粒多量・礫混入
2 10YR2/2 黒褐色土 南面浮石粒少量・礫混入
3 10YR3/3 暗褐色土 八戸火山灰上位層 礫入り過ぎ

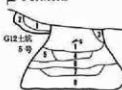
長 L-293.800m



G12土坑 5号 H-H'

1 10YR2/3 黒褐色土 汚れた南面浮石粒多量混入
2 10YR3/3 暗褐色土 八戸火山灰上位層 南面浮石粒少量混入
3 10YR3/3 暗褐色土 八戸火山灰上位層 南面浮石粒少量混入
4 10YR4/4 褐色土 黒褐色土・南面浮石粒少量・八戸火山灰少量混入
5 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土少量・南面浮石粒少量混入
6 10YR3/3 暗褐色土 汚れた南面浮石粒多量混入
7 10YR3/3 暗褐色土 八戸火山灰上位層 黒褐色土少量混入
8 10YR4/4 褐色土 本層下に厚さ1cm程度の暗褐色土層

長 L-293.600m



G12土坑 6号 I-I'

1 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
2 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
3 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
4 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土に炭化物微塵混入
5 10YR2/1 黒褐色土 炭化物少量混入

長 L-293.000m



G13土坑 1号 J-J'

1 10YR3/1 黒褐色土 南面浮石粒多量混入。基本土層B層相当
2 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒多量・炭化物粒少量混入
3 10YR3/3 暗褐色土 礫・炭化物土。汚れた南面浮石粒混入
4 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土との混合土。南面浮石粒多量・炭化物微塵混入
5 10YR2/3 暗褐色土 4層+黄褐色土多量混入
6 10YR7/8 黄褐色土 八戸火山灰下に引ける土層(高嶺火山灰?)
7 10YR2/4 暗褐色土 5層より黄褐色土多量混入
8 10YR2/3 暗褐色土 細かい南面浮石粒多量混入
9 10YR2/4 暗褐色土 7層より黄褐色土多量混入
10 10YR4/3 に引く黄褐色土 八戸火山灰の礫層混入
11 10YR2/2 暗褐色土 南面浮石粒少量・礫・炭化物に炭化物粒少量混入
12 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土・フロック・細かい南面浮石粒・炭化物少量混入
13 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
14 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
15 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰上位との混合土。南面浮石粒少量混入
16 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
17 10YR2/3 暗褐色土 5層より黒褐色土多量混入。別土坑出土

長 L-294.500m



G13土坑 2号 K-K'

1 10YR2/1 黒褐色土 南面浮石粒少量混入(上層の土)
2 10YR4/8 褐色土 八戸火山灰下位層+黒褐色土少量・南面浮石粒少量混入
3 10YR3/3 暗褐色土 南面浮石粒と含まず
4 10YR3/3 暗褐色土 南面浮石粒多量・炭化物微塵混入
5 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石粒少量・炭化物微塵混入
6 10YR4/3 に引く黄褐色土 八戸火山灰層に引ける土層混入
7 10YR3/4 暗褐色土 汚れた南面浮石粒少量混入
8 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土粒少量混入

長 L-294.100m



G12土坑 7号 L-L'

1 10YR2/2 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
2 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
3 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
4 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
5 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土に炭化物微塵混入
6 10YR2/1 黒褐色土 炭化物少量混入
7 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
8 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土粒少量混入

長 L-293.100m

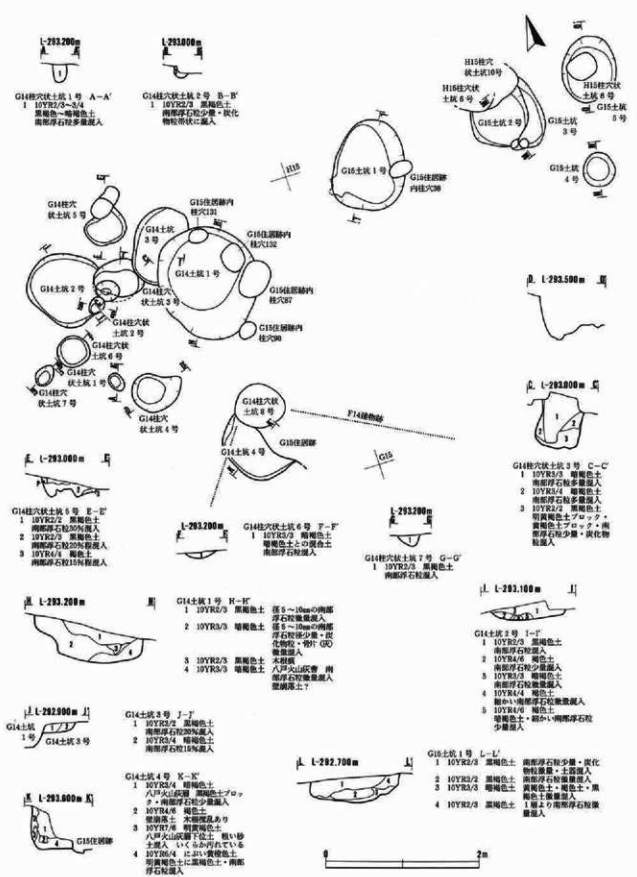


G13土坑 5号

1 10YR2/2 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
2 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
3 10YR2/3 暗褐色土 南面浮石粒少量混入
4 10YR2/2 暗褐色土 暗褐色土に炭化物微塵混入
5 10YR2/1 黒褐色土 炭化物少量混入



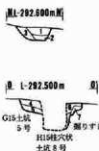
第71図 土坑・柱穴状土坑(23)



第72図 土坑・柱穴状土坑 (24)



- G15土坑 2・3号 M-M'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 褐色土・南面浮石粒少量混入
 - 2 10YR4/4 赤褐色土 黄褐色土・暗褐色土・南面浮石粒少量混入
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土・暗褐色土・南面浮石粒少量混入



- G15土坑 4・5号 H18柱穴状土坑 8号 N-N'・O-O'
- 1 2.5Y3/4 黄褐色土 雑物の暗褐色土との混合土・ベテ混入・柱穴部分
 - 2 10YR4/4 褐色土 基本土層又層ブロック混入
 - 3 10YR4/4 褐色土 層り過ぎの可能性あり
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 褐色土との混合土・南面浮石粒少量混入
 - 5 10YR3/4 暗褐色土 褐色土との混合土・南面浮石粒少量混入
 - 6 2.5Y4/2 暗灰黄色土 明黄褐色土との混合土
 - 7 10YR7/4 赤い黄褐色土 基本土層又層ブロック土・高純土少量混入



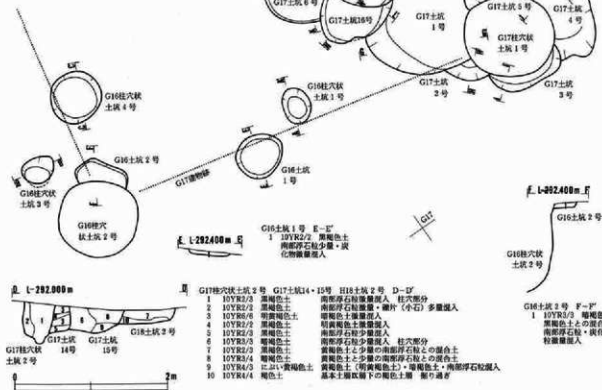
- G16柱穴状土坑 1号 A-A'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・南面浮石粒・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR4/4 褐色土 基本土層又層に黒褐色土混入・南面浮石粒少量混入
 - 3 10YR4/4 褐色土 基本土層又層に黒褐色土混入・南面浮石粒少量混入



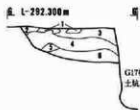
- G16柱穴状土坑 3号 B-B'
- 1 10YR4/3 赤い黄褐色土 黒褐色土との混合土・南面浮石粒少量混入



- G16柱穴状土坑 4号 C-C'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・南面浮石粒・炭化物粒
 - 2 10YR4/4 褐色土 南面浮石粒・八戸火山灰粒の混入・ベテ混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰混入



第73図 土坑・柱穴状土坑 (25)



- G17土坑1号 G-C'
- 1 10YR6/0 明黄褐色土 基本土層X層プロック土 黄褐色土小プロック混入
 - 2 10YR4/4 褐色土 汚れた基本土層X層プロック土 黄褐色土少量混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 南部厚石粒少量・炭化物粒混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土に黄褐色土粒少量・南部厚石粒少量・炭化物粒混入
 - 5 10YR2/3 暗褐色土 炭化物粒混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土との混合土 明い南部厚石粒・堆土粒少量・炭化物粒少量混入



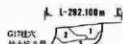
- G17土坑2号 H-H'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土・南部厚石粒少量混入



- G17土坑3号 1-D'
- 1 10YR2/3 黄褐色土 黄褐色土との混合土 南部厚石粒少量混入
 - 2 10YR4/3 におい黄褐色土 汚れた黄褐色土 汚れた基本土層X層プロック土に黄褐色土・南部厚石粒少量混入
 - 3 10YR3/1 暗褐色土 褐色土(基本土層X層)プロック土に黄褐色土・南部厚石粒少量混入
 - 4 2.5Y/3 黄褐色土 基本土層X層とX層の混合土に黄褐色土混入
 - 5 10YR4/1 褐色土 基本土層X層プロック土層の過渡
 - 6 10YR2/2 暗褐色土 基本土層X層プロック土



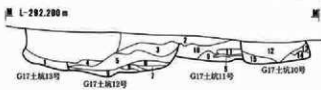
- G17土坑4号 J-J'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土・南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土との混合土 南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 3 5YR4/3 におい黄褐色土 黄褐色土少量・炭土・炭化物粒少量混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土・褐色土・下段に褐色土基本土層X層・炭化物粒少量混入
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土プロック混入
 - 6 2.5Y/4 黄褐色土 基本土層X層に黄褐色土プロック少量・炭化物粒少量混入



- J17土坑8号 L-L'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土・南部厚石粒・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土・南部厚石粒・炭化物粒少量混入
 - 3 10YR3/2 暗褐色土 基本土層X層に黄褐色土・南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入



- G17土坑6・7号 K-K'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土プロック・南部厚石粒少量混入 基本土層1層に黄褐色土・南部厚石粒少量混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 褐色土との混合土 南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土・褐色土・下段に褐色土基本土層X層・炭化物粒少量混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土・褐色土・南部厚石粒少量混入
 - 5 10YR7/4 におい黄褐色土 4層より黄褐色土少量混入



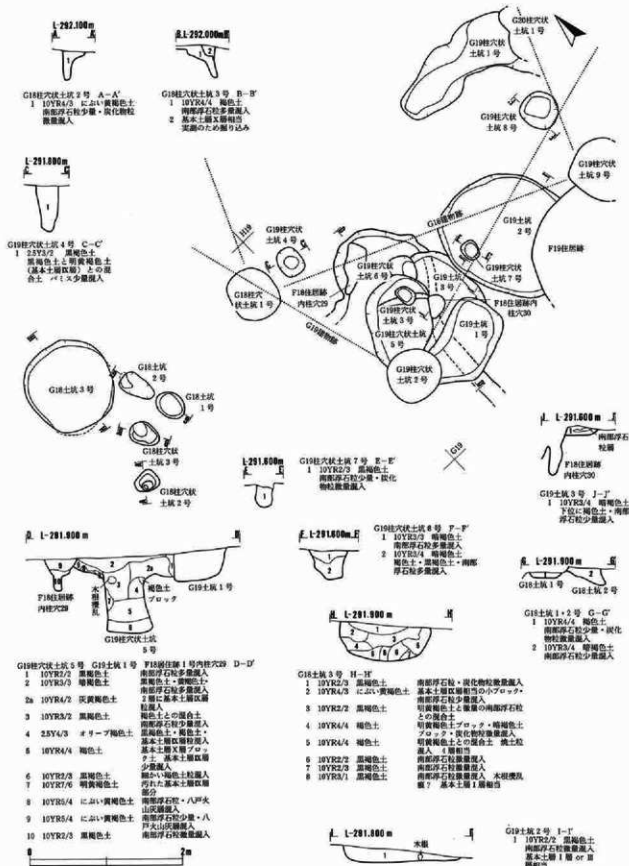
- G17土坑10-11-12-13号 M-M'
- 1 10YR4/4 褐色土 八戸水山灰層プロック土?
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土と明黄褐色土との混合土 南部厚石粒少量混入
 - 3 2.5Y/3 オリーブ褐色土 明黄褐色土・黄褐色土・黒褐色土・南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 4 10YR4/4 褐色土 1層相当
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土と褐色土との混合土 南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 6 10YR4/4 褐色土 1層相当
 - 7 10Y7/6 明黄褐色土 砂土 基本土層X層相当
 - 8 10YR4/4-5/3 褐色土 黄褐色土・南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 9 10YR7/6 明黄褐色土(砂土) 基本土層X層プロックと10YR4/4褐色土プロックとの混合土
 - 10 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土・黄褐色土・南部厚石粒少量・12層より黄褐色土多少混入
 - 11 10YR7/6 明黄褐色土 砂土 基本土層X層相当
 - 12 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土・黄褐色土・南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 13 10YR3/4 におい黄褐色土 基本土層X層とX層の混合土
 - 14 10YR3/3 におい黄褐色土 13層に黄褐色土混入
 - 15 10YR2/2 黒褐色土 南部厚石粒少量混入



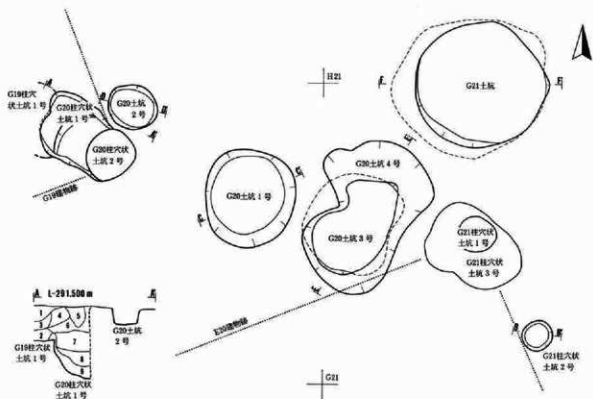
- G17土坑16号 N-N'
- 1 10YR2/6 黄褐色土 南部厚石粒少量混入
 - 2 10YR4/6 褐色土 南部厚石粒少量混入
 - 3 10YR3/6 黄褐色土 南部厚石粒少量混入
 - 4 10YR4/4 褐色土 南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 5 10YR2/1 褐色土 南部厚石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 6 10YR5/4 におい黄褐色土 南部厚石粒少量混入



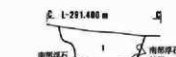
第74図 土坑・柱状土坑 (26)



第76図 土坑・柱穴状土坑 (27)



- G19柱穴状土坑 1号 G20柱穴 1号 A-A'
- 1 10YR2/1 黒色土 土相混々ト土・南面浮石散入
 - 2 10YR2/5 黄褐色土 基本土層取層付 裏り遺存
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石少量混入 1層取層
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土との混合土 南面浮石散入
 - 5 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石散入・底に焼土層混入
 - 6 10YR4/3 に近い黄褐色土 暗褐色土・明黄褐色土・南面浮石少量混入
 - 7 10YR3/4 暗褐色土 明黄褐色土・浅黄褐色土混入
 - 8 10YR4/3 に近い黄褐色土 明黄褐色土・浅黄褐色土・黒色土少量混入
 - 9 2.5Y6/4 に近い黄褐色土 基本土層取層の土 密付層? (砂質土)

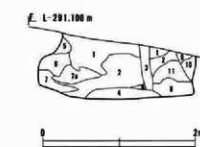


- G21柱穴 2号 B-B'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 南面浮石少量混入

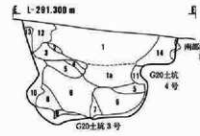
- G20土坑 1号 C-C'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 褐色土・南面浮石散入 人為堆積



- G20土坑 2号 D-D'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土と多数の南面浮石との混合土 黄褐色土ブロック混入



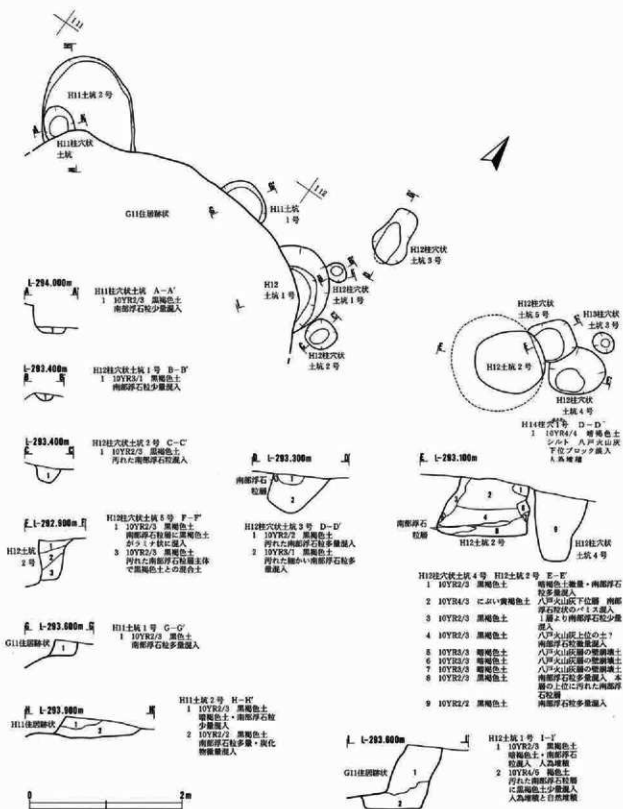
- G21土坑 F-F'
- 1 10YR2/1 黒色土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
 - 3 10YR2/1 黒色土
 - 4 10YR4/3 に近い黄褐色土と
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
 - 6 10YR2/1 黒色土
 - 7 10YR2/5 黄褐色土
 - 7a 10YR1/8 黄褐色土
 - 8 10YR2/1 黒色土
 - 9 10YR2/1 黒色土
 - 10 10YR2/1 黒褐色土と10YR6/6 明黄褐色土との混合土
 - 11 10YR4/3 に近い黄褐色土 赤褐色は基本土層付ト層相混



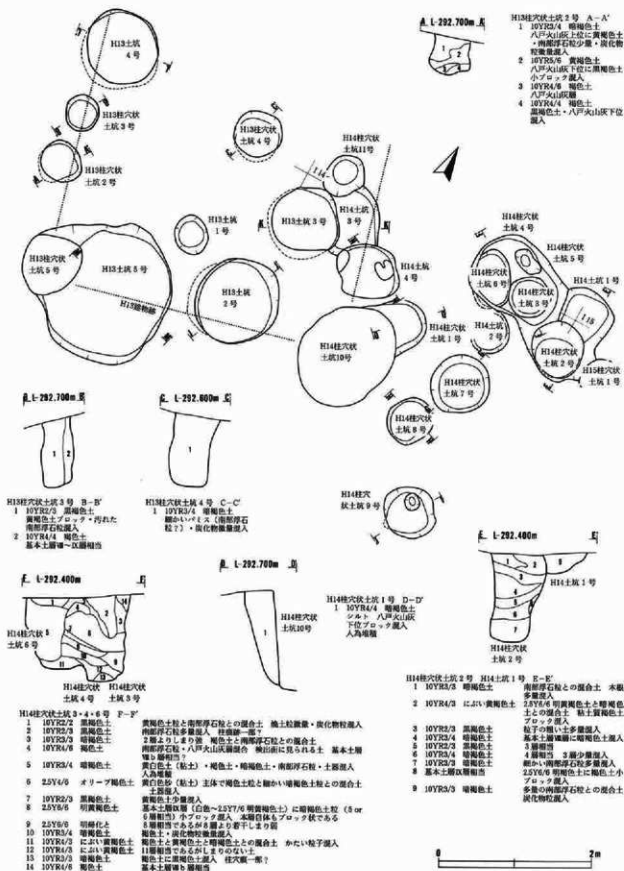
- G20土坑 3-4号 E-E'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 細かい南面浮石・下に焼土粒と炭化物散入
 - 1a 細かい南面浮石少量混入土層
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 褐色土ブロック土
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土少量混入
 - 4 10YR4/2 浅黄褐色土 黄褐色土ブロック少量混入
 - 5 10YR2/2 黄褐色土 1・2層より南面浮石少量混入
 - 6 10YR3/3 黒褐色土 1・3・5層より南面浮石少量混入
 - 7 10YR2/3 暗褐色土 穴さい南面浮石少量混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 1層より南面浮石少量混入
 - 9 10YR2/3 暗褐色土 8層より南面浮石少量混入
 - 10 10YR4/4 に近い黄褐色土 黄褐色土・黒褐色土混入 大きい南面浮石少量混入 炭屑混入
 - 11 10YR6/4 に近い黄褐色土 炭屑混入
 - 12 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・褐色土混入
 - 13 10YR4/3 に近い黄褐色土 13層より黒褐色土少量混入
 - 14 10YR2/3 黒褐色土 1層より南面浮石少量混入

- シルト 南面浮石3%以下混入
シルト 砂土・南面浮石3%以下混入
粘土質シルト 南面浮石20%混入
シルト 南面浮石8-7%混入
シルト 南面浮石7-10%混入
粘土質土 基本土層付ト層の再堆積
7層相混
シルト 南面浮石10-15%混入
シルト 南面浮石10-15%混入
シルト 南面浮石増殖層
シルト・アモルム 基本土層相混の再堆積

第76図 土坑・柱穴状土坑 (28)



第77図 土坑・柱穴状土坑 (29)



第78図 土坑・柱穴状土坑 (30)



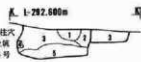
H14柱状土坑7号 G-G'
 1 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量・八戸火山灰上位プロック・炭化物微量混入
 2 10YR2/4 暗褐色土 南部浮石粒と八戸火山灰との混合土
 3 10YR2/4 暗褐色土 1層より南部浮石粒多量混入



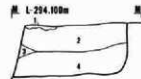
H14柱状土坑8号 H-H'
 1 10YR2/4 暗褐色土 砂質シルト・南部浮石粒20%混入



H14柱状土坑9号 I-I'
 1 10YR2/3 暗褐色土 粘質的に砂・南部浮石粒・炭化物微量混入
 2 5YR2/2 黒褐色土 礫土
 3 10YR2/3 暗褐色土 1層より褐色土多量で南部浮石粒少量混入
 4 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰下位の白色土層と暗褐色土との混合土
 5 10YR2/3 暗褐色土 3層と4層の混合土



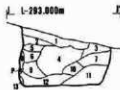
H13土坑5号 H14土坑5号 K-K'
 1 10YR2/1 黒褐色土 少量の南部浮石粒との混合土
 2 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土と八戸火山灰との混合土 南部浮石粒少量混入
 3 10YR2/2 暗褐色土 暗褐色土と八戸火山灰下位プロックとの混合土
 4 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土・南部浮石粒・八戸火山灰上段混入人為堆積
 5 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土と八戸火山灰との混合土



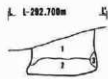
H13土坑5号 M-M'
 1 10YR2/2 暗褐色土 細かい南部浮石粒多量混入 基本土層1層相当
 2 10YR2/3 暗褐色土 細かい南部浮石粒多量・炭化物微量混入
 3 10YR2/6 暗褐色土 大木能浮石層承接層
 4 10YR2/3 暗褐色土 2層より再いた南部浮石粒多量混入



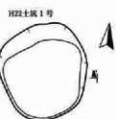
H14土坑4号 N-N'
 1 10YR2/3 暗褐色土 少量の南部浮石粒との混合土 自然堆積
 2 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土と南部浮石粒との混合土 未堆積



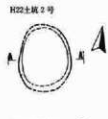
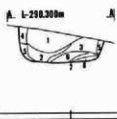
H13土坑2号 J-J'
 1 10YR2/2 暗褐色土 シルト 一部深10~15cmの黒褐色土プロック5%・深3m以下の南部浮石粒7%混入
 2 10YR2/3 暗褐色土 シルト 深1~3cmの南部浮石粒10%混入 粘質土
 3 10YR2/3 暗褐色土 シルト 2層より若干しまり層
 4 10YR2/3 暗褐色土 シルト 1層相当
 5 10YR2/3 暗褐色土 シルト 1、4層よりしまり層
 6 10YR2/3 暗褐色土 シルト 深1~2cmの南部浮石粒5%混入
 7 10YR2/3 暗褐色土 シルト 4層よりしまり層 深1~2cmの南部浮石粒2%混入
 8 10YR2/3 暗褐色土 シルト 深1~3cmの南部浮石粒5%混入
 9 10YR2/3 暗褐色土 シルト 深1~2cmの南部浮石粒2%混入
 10 10YR2/3 暗褐色土 シルト 粘質土
 11 10YR2/3 暗褐色土 シルト 粘質土
 12 10YR2/3 暗褐色土 シルト 南部浮石粒混入
 13 10YR2/6 暗褐色土 シルト 深1~2cmの南部浮石粒3%混入 粘質土



H13土坑4号 L-L'
 1 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒多量・炭化物微量混入
 2 10YR2/3 暗褐色土 1層より南部浮石粒少量・炭化物微量混入
 3 10YR2/3 暗褐色土 八戸火山灰上段粘質土



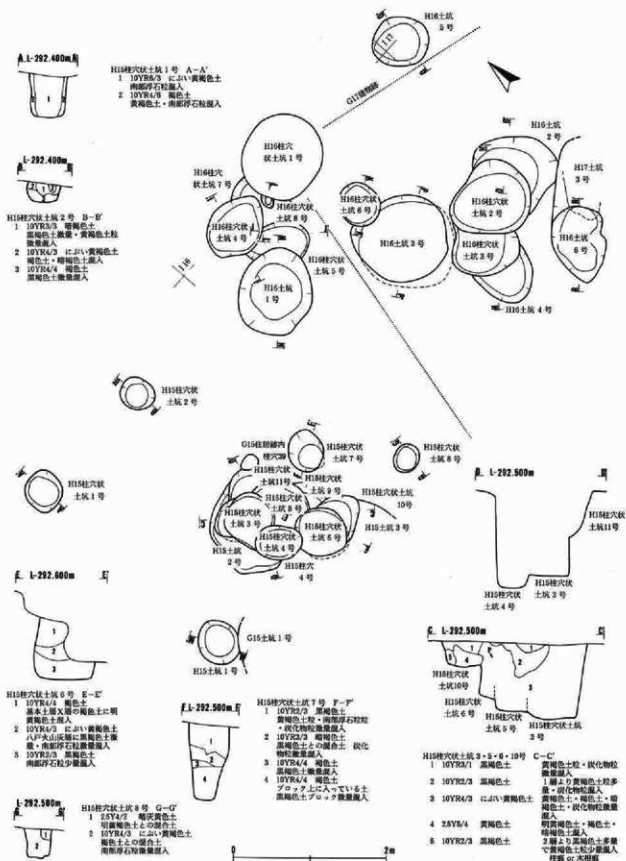
H22土坑1号 A-A'
 1 10YR2/1 暗褐色土 炭化物微量混入
 2 10YR2/2 暗褐色土 暗褐色土
 3 10YR2/2 暗褐色土 暗褐色土少量・炭化物微量混入
 4 10YR2/2 暗褐色土 暗褐色土粒層混入
 5 10YR2/3 暗褐色土 褐色土層・細かい南部浮石粒混入
 6 10YR2/2 暗褐色土 南部浮石粒微量混入
 7 10YR2/1 暗褐色土 細かい暗褐色土
 8 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土



H22土坑2号 A-A'
 1 10YR2/1 暗褐色土 粒子の細かい土 基本土層1層相当
 2 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土プロックと南部浮石粒との混合土
 3 10YR2/1 暗褐色土 南部浮石粒多量混入



第79図 土坑・柱状土坑 (31)



第80图 土坑・柱状土坑 (32)

図 L-292.100m



- H16土坑 4号 H16柱状土坑 2・3号
- 1 10YR3/4-4/4 暗褐色～褐色土
 - 2 2.5Y3/5 黄褐色土
 - 3 2.5Y2/4 暗褐色土
 - 4 10YR4/3 褐色土
に多い黄褐色土
 - 5 10YR4/3 褐色土
に多い黄褐色土
 - 6 10YR2/2 黒褐色土
 - 7 10YR4/3 褐色土
に多い黄褐色土
 - 8 10YR4/4 褐色土

図 L-292.200m Ⅱ



- H16柱状土坑 6号 K-K'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
 - 2 10YR4/3 褐色土
に多い黄褐色土

図 L-292.200m

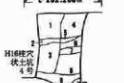


- H16柱状土坑 4号 I-I'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
 - 2 10YR2/3 黒褐色土
 - 3 10YR2/3 黒褐色土
 - 4 10YR4/3 に多い黄褐色土
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
 - 6 10YR4/2 に多い黄褐色土
 - 7 10YR4/4 褐色土

H16柱状土坑 5号 J-J'

- 1 10YR4/4-4/6 褐色土
- 2 10YR4/3 に多い黄褐色土
- 3 10YR5/4 に多い黄褐色土
- 4 10YR5/6 黄褐色土
- 5 10YR4/6 褐色土
- 6 10YR5/6 明黄褐色土
- 7 10YR5/6 黄褐色土
- 8 10YR5/6 黄褐色土
- 9 10YR5/6 黄褐色土
- 10 10YR4/6 褐色土

図 L-292.200m



H16土坑 1号 M-M'

- 1 10YR2/3 黒褐色土
- 2 10YR7/6 明黄褐色土
- 3 10YR4/3 に多い黄褐色土
- 4 10YR4/3 明黄褐色土
- 5 2.5Y2/4 に多い黄褐色土
- 6 10YR4/3 に多い黄褐色土

H16土坑 1号 N-N'

- 1 10YR2/2 黒褐色土
- 2 10YR4/3 に多い黄褐色土
- 3 10YR3/3 暗褐色土
- 4 10YR4/4 褐色土

図 L-292.400m



図 L-292.200m



H16土坑 3号 P-P'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
- 2 10YR4/3 暗褐色土
- 3 10YR2/3 暗褐色土
- 4 10YR4/4 褐色土
- 5 10YR4/4 褐色土

図 L-292.000m



H16土坑 5号 Q-Q'

- 1 10YR2/3 暗褐色土

図 L-292.000m



図 L-292.200m



H16土坑 8号 H17土坑 3号 R-R'

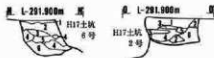
- 1 10YR3/1 黒褐色土
- 2 10YR4/4 褐色土
- 3 10YR4/4 褐色土
- 4 10YR3/0-2.5Y4/5 暗褐色土



第81図 土坑・柱状土坑 (33)



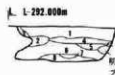
- H17土坑3号 J-J'
- 1 10YR4/8 におい黄褐色土
明黄褐色土と褐色土との混合土
 - 2 10YR3/3 暗褐色土
褐色土と暗褐色土との混合土 厚5mmの可
黄褐色土粒多量混入
 - 3 10YR7/5-6/3 明黄褐色土-黄褐色土
基本土層以降本層の褐色土ブロック混入
 - 4 10YR4/4 暗褐色土
基本土層以降本層の褐色土ブロック混入



- H17土坑8号 N-N'・O-O'
- 1 10YR2/9 暗褐色土
黄褐色土・黄褐色土・南厚浮石
粒少量混入
 - 2 10YR4/4 褐色土
基本土層X層ブロック土
 - 3 10YR7/6 明黄褐色土
汚れた基本土層1層相当
 - 4 10YR2/9 暗褐色土
炭化物粒少量混入
 - 5 2.0Y3/4 黄褐色土
基本土層以降本層の黄褐色土混入
 - 6 10YR5/4 におい黄褐色土
汚れた基本土層以降本層の黄褐色土



- H17土坑4号 K-K'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・黄褐色土・
南厚浮石粒多量混入
 - 2 10YR3/3 におい黄褐色土
黄褐色土・1層より
黄褐色土若干多量・南
厚浮石粒多量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土・南厚浮石粒
少量混入
 - 4 10YR4/4 暗褐色土
黄褐色土・黄褐色土・
南厚浮石粒少量混入



- H17土坑5号 L-L'
- 1 10YR4/3 におい黄褐色土
明黄褐色土・黄褐色土・
南厚浮石粒少量混入
 - 2 10YR7/4 におい黄褐色土
基本土層以降本層
基本土層以降本層
 - 3 10YR4/4 褐色土
黄褐色土・黄褐色土
黄褐色土多量・南厚浮石粒
混入
 - 4 10YR2/3 暗褐色土
南厚浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/3 黄褐色土
黄褐色土と褐色土との
混合土の黄褐色土ブロック
・南厚浮石粒少量混入
 - 6 10YR4/4 暗褐色土
黄褐色土と褐色土との
混合土
 - 7 10YR7/6 明黄褐色土
基本土層以降本層
 - 8 10YR3/3 暗褐色土
明黄褐色土との混合土



- H17土坑12号 Q-Q'
- 1 10YR4/4 褐色土
暗褐色土
 - 2 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・黄褐色土ブロック・
南厚浮石粒少量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土との混合土 炭化物粒
少量混入
 - 4 10YR4/3 におい黄褐色土
得1層の明黄褐色土ブロック
・灰白色砂土・黄褐色土混入



- H17土坑7号 M-M'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
 - 2 2.0Y3/5 オリーブ褐色土
基本土層以降本層との混合土



- H18土坑1号 R-R'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
多量の南厚浮石粒との混合土
黄褐色土との混合土 明黄褐
色土粒少量・南厚浮石粒
少量混入
 - 2 10YR4/3 におい黄褐色土
黄褐色土との混合土 南厚浮
石粒少量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土との混合土 南厚浮
石粒少量混入
 - 4 10YR4/3 におい黄褐色土
黄褐色土との混合土



- H18土坑3号 S-S'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色土
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
 - 4 10YR4/4 褐色土
 - 5 10YR8/4 におい黄褐色土
 - 6 10Y2/6 明黄褐色土
 - 7 10YR2/3 暗褐色土
 - 8 10YR2/3 暗褐色土
 - 9 10YR2/3 暗褐色土
 - 10 10YR2/3 暗褐色土
 - 11 10YR6/6 明黄褐色土
 - 12 10YR6/6 明黄褐色土
 - 13 10YR4/4 褐色土
 - 14 10YR3/3 暗褐色土
 - 15 未整理
 - 16 10YR4/4 褐色土
 - 17 10YR3/4 暗褐色土
 - 18 未整理
 - 19 未整理
- 全層入為母堆で本層厚多量

- H18土坑10号
- 黄褐色土と南厚浮石粒との混合土 炭化物粒少量混入
褐色土と暗褐色土との混合土 南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
黄褐色土と暗褐色土との混合土
明黄褐色土若干混入の褐色土ブロック
明黄褐色土・黄褐色土との混合土 黄褐色土少量混入
2層より1層相当
褐色土ブロック・1層より南厚浮石粒多量・炭化物粒少量混入
7層より若干黄褐色土多量・南厚浮石粒少量混入
褐色土が汚れたブロック土
1層相当
基本土層以降本層
1層相当
明黄褐色土少量混入
明黄褐色土・褐色土・黄褐色土混入
1層相当
18層に褐色土多量混入



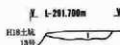
- H17土坑11号 P-P'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
におい黄褐色土ブロック・
南厚浮石粒1層混入
 - 2 10YR4/6 褐色土
におい黄褐色土ブロック・
褐色土(黄褐色土?)混入



- H18土坑4号 T-T'
- 1 10YR2/2 黄褐色土
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
南厚浮石粒少量混入
 - 3 10YR4/4 褐色土
地山基本土層以降本層下
位相当
 - 4 10YR4/3 におい黄褐色土
明黄褐色土と・南厚
浮石粒少量混入 厚
り足りない?



- H18土坑6号 U-U'
- 1 10YR6/6 黄褐色土
褐色土と黄褐色土との混合土
地山に1.0YR4/3 黄褐色土質
・南厚浮石粒1層未満混入



- H18土坑7号 V-V'
- 1 10YR4/4 褐色土
黄褐色土・明黄褐
色土ブロック・南
厚浮石粒少量混入



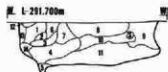
- H18土坑10号 X-X'
- 1 10YR3/3-4/4 暗褐色土
黄褐色土と褐色土との
混合土



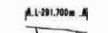
- H18土坑12号 Y-Y'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・黄褐色土・炭化物
粒少量混入
 - 2 10YR2/4 暗褐色土
黄褐色土少量・黄褐色土少量
混入
 - 3 10YR4/2 におい黄褐色土
黄褐色土少量混入
 - 4 10YR2/2 暗褐色土
1層相当



第83図 土坑・柱穴状土坑 (35)



- H16土坑6号 W-W'
- 1 10YR4/3 に近い赤土 黄褐色土・黒褐色土混入
 - 2 10YR4/4 褐色土 汚れた黄褐色土ブロック土 黒褐色土層混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 可成褐色土粒混入
 - 4 10YR4/3 に近い黄褐色土 黒褐色土と明黄褐色土との混合土・パリス混入
 - 5 10YR4/4 褐色土 基本土層X層下の褐色土層 層り遺存?
 - 6 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土との混合土 両部厚石粒混入
 - 7 10YR4/3 に近い黄褐色土 黄褐色土と暗褐色土との混合土 両部厚石粒少量混入
 - 8 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土と暗褐色土との混合土 炭化物粒少量混入
 - 9 10YR4/2 灰黄褐色土 黄褐色土と黄褐色土との混合土
 - 10 10YR2/3 暗褐色土 8層より炭化物粒多量混入
 - 11 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土との混合土 褐色土粒・炭化物粒少量混入
 - 12 10YR2/2 暗褐色土 6層相当
 - 13 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック土
 - 14 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土・暗褐色土・パリス (八戸山灰層?) 少量混入



- H19柱穴状土坑3号 A-A'
- 1 22Y5/4 黄褐色土 暗褐色土・明黄褐色土 (基本土層以外) 混入



- H19柱穴状土坑4号 B-B'
- 1 10YR2/3 黄褐色土 明黄褐色土少量・炭化物粒少量混入



- H20柱穴状土坑1号 C-C'
- 1 10YR2/2 暗褐色土 両部厚石粒少量混入



- H20柱穴状土坑5号 D-D'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 両部厚石粒少量混入



- H20柱穴状土坑3号 E-E'
- 1 10YR2/1 黒褐色土



- H20柱穴状土坑5号 F-F'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土・黄褐色土・両部厚石粒少量混入

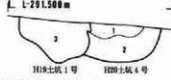


- H19柱穴状土坑3号

- H20柱穴状土坑8号 G-G'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 褐色土・黒褐色土・両部厚石粒混入



- H21柱穴状土坑 H-H'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 多量の両部厚石粒と褐色土との混合土 炭化物粒少量混入
 - 2 10YR4/4 褐色土 基本土層X層が汚れたブロック土 褐色土の層? 少量混入



- H19土坑1号 H20土坑4号 I-I'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土少量混入 両部厚石粒少量混入
 - 2 10YR4/6 褐色土 明黄褐色土ブロック土との混合土 黒褐色土少量混入
 - 3 10YR2/6 黄褐色土 汚れた両部厚石粒混入 黒褐色土混入



- H19土坑2号 J-J'
- 1 10YR2/6 暗褐色土 両部厚石粒混入 黄褐色土・炭化物粒少量混入



- H19柱穴状土坑1号 H19土坑5号 K-K'
- 1 10YR2/1 暗褐色土 両部厚石粒少量混入



- H19土坑4号 L-L'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 褐色土・炭化物粒少量混入



- H19土坑5号 M-M'
- 1 10YR2/3 暗褐色土 両部厚石粒少量混入



第84図 土坑・柱穴状土坑 (36)



- 層 H20土坑 1・2号 N-N'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
炭質土・炭化物散見
混入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土
1層に褐色土ブロック
多量混入



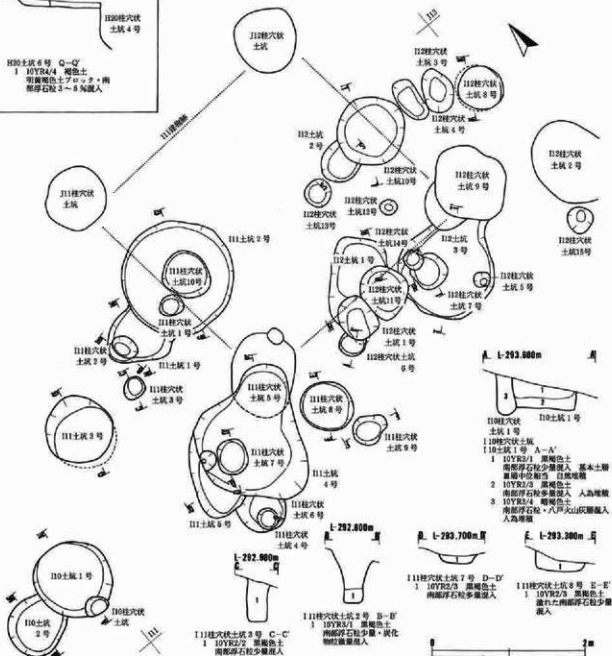
- H20土坑 5号 P-P'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
炭質土・褐色土との混合土
八戸火山灰・黄土粒・炭化
物粒少量混入
 - 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
暗褐色土・炭質土との混合土
上部に微細黄土混入
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色土
2層より若干不明な色調のブ
ロック土
 - 4 10YR2/3 黒褐色土
褐色土・1層より八戸火山灰
粒少量混入



- H20土坑 3号 O-O'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
粒散見・少量多量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色土
明褐色土少量・南部浮石粒散見
混入
 - 3 10YR3/3 暗褐色土
高部浮石粒多量混入
 - 4 10YR3/4 暗褐色土
明褐色土ブロック・黄褐色土・
南部浮石粒・炭化物散見混入
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土
褐色土・暗褐色土との混合土
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
炭質土・炭化物散見混入
 - 7 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・褐色土混入
 - 8 10YR2/3 黒褐色土
褐色土散見・南部浮石粒少量混入



- H20土坑 6号 Q-Q'
- 1 10YR4/4 褐色土
明黄褐色土ブロック・南
部浮石粒 3~5 混入



- H18土坑 1号 A-A'
- 1 10YR2/1 黄褐色土
南部浮石粒少量混入 基本土層
最層中位相当 自然堆積
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
南部浮石粒多量混入 人為堆積
 - 3 10YR3/4 暗褐色土
南部浮石粒・八戸火山灰混入
人為堆積

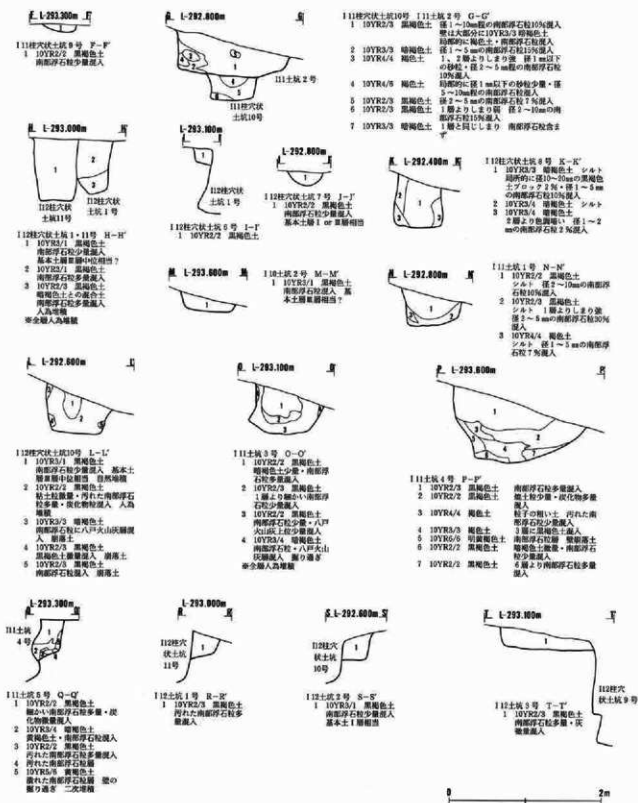


- H11柱穴状土坑 7号 D-D'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
南部浮石粒多量混入

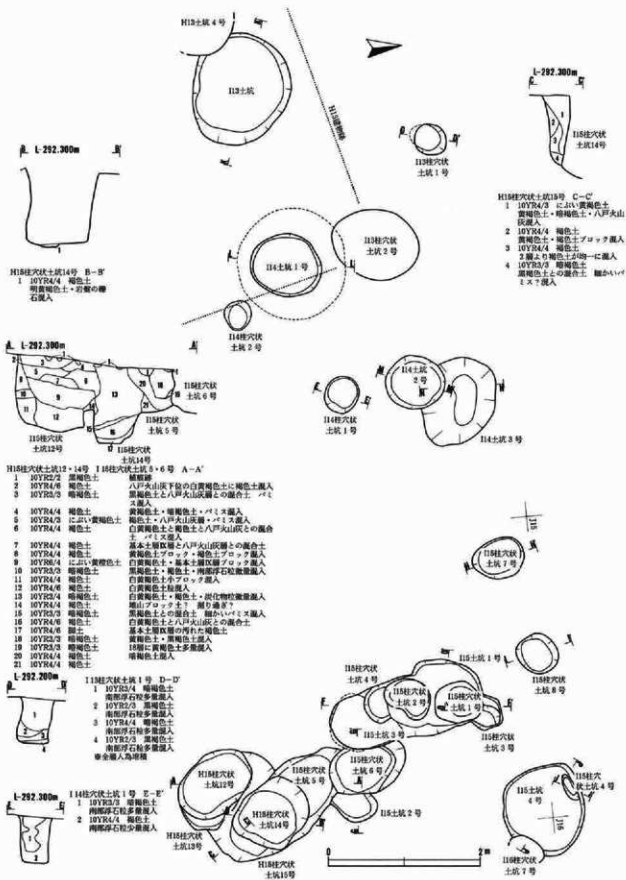


- H11柱穴状土坑 8号 E-E'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
炭化した南部浮石粒少量
混入

第85図 土坑・柱穴状土坑 (37)



第86図 土坑・柱穴状土坑 (38)



第87図 土坑・柱穴状土坑 (39)



115柱穴状土坑 1・2・3・4号 115土坑3号 F-D'

- | | | | |
|-----|-------------|---------|-------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 赤土層残存 |
| 2 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 3層より厚大の褐色浮石多量混入 |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 5 | 10YR4/6 | 褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 6 | 10YR4/6 | 褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 8 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 9 | 10YR4/4 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 10 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 11 | 10YR3/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 12 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 13 | 10YR2/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 14 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 15 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 16 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 17 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 18 | 10YR4/4 | 褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 19 | 10YR4/4 | 褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 20 | 10YR2/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 21 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 22a | 10YR4/4 | 褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 22b | 10YR3/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |
| 23 | 10YR2/6-5/6 | 黄褐色土 | 褐色土・汚れた層の上部浮石多量混入 |



- 115土坑2号 115柱穴状土坑6号 G-G'
- | | | | |
|----|---------|---------|--------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 2 | 10YR3/6 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 3 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 4 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 6 | 10YR4/4 | 褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 7 | 10YR4/4 | 褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 8 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 9 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 10 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 11 | 10YR7/4 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |



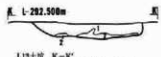
- 115柱穴状土坑7号 H-H'
- | | | | |
|---|---------|------|------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 褐色土プロット・南部浮石少量混入 |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |
| 5 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |



- 115柱穴状土坑8号 I-I'
- | | | | |
|---|---------|------|------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 褐色土プロット・南部浮石少量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |
| 3 | 10YR4/6 | 褐色土 | 褐色土多量・南部浮石少量混入 |



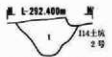
- 115柱穴状土坑9号 J-J'
- | | | | |
|----|---------|------|------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 3 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 4 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 5 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 7 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 8 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 9 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |
| 10 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石約30%以上混入 |



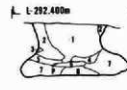
- 120土坑 K-K'
- | | | | |
|---|---------|------|---|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | シット 径2~5mmの南部浮石約15%混入 |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | シット 1層より1層厚 径1~2mmの南部浮石約3%混入 (2層付近は殆ど含まず) |



- 121土坑2号 M-M'
- | | | | |
|---|---------|------|----------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 南部浮石多量混入 |
|---|---------|------|----------|



- 122土坑3号 N-N'
- | | | | |
|---|---------|------|----------|
| 1 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 南部浮石少量混入 |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 南部浮石少量混入 |



- 123土坑1号 L-L'
- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------|
| 1 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 褐色土との混合土 南部浮石少量・炭化物少量混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 3 | 10YR4/6 | 褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 4 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 5 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 6 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 7 | 10YR4/3 | にがい黄褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 8 | 10YR4/6 | 褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |



- 124土坑1号 O-O'
- | | | | |
|---|---------|------|--------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |
| 2 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 暗褐色土との混合土 南部浮石少量混入 |



- 125土坑4号 P-P'
- | | | | |
|---|---------|------|---------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 暗褐色土 | 褐色土との混合土 南部浮石約10%混入 |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色土 | 褐色土との混合土 南部浮石約10%混入 |



第88図 土坑・柱穴状土坑 (40)

Ⅰ L-292.700 m



Ⅰ L-291.700 m



- 116柱穴状土坑 1号 1-17
- 1 10YR4/6 褐色土
 - 2 10YR4/4 褐色土
 - 3 10YR3/3 暗褐色土
 - 4 10YR2/3 黒褐色土
 - 5 10YR2/4 暗褐色土
 - 6 10YR5/6 黄褐色土
 - 7 10YR4/6 褐色土
 - 8 基本的に 6 層相当
 - 9 基本的的に 4 層相当
 - 10 10YR5/4 に近い黄褐色土
 - 11 10YR4/3 に近い黄褐色土
 - 12 10YR4/4 褐色土
 - 13 10YR2/2 黒褐色土

南面厚石粒少量混入
基本土層厚さ不明
基本的に 2層相当
散在物混入
南面厚石粒少量混入
南面厚石粒少量混入
散在物混入
南面厚石粒少量混入
南面厚石粒混入
南面厚石粒少量混入
暗褐色土との混合土
南面厚石粒少量混入

Ⅰ16柱穴状土坑 6号 Ⅰ16柱 2号 F-17

- 1 10YR2/3-2/4 暗褐色土
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 5 10YR2/3 暗褐色土
- 6 10YR4/4 褐色土
- 7 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 8 10YR4/3 に近い黄褐色土

Ⅰ L-291.700 m



- 117柱穴状土坑 1号 J-17
- 1 10YR4/3-2/4 に近い黄褐色土
～褐色土 南面厚石粒少量混入
裸の炭
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
南面厚石粒少量混入
 - 4 10YR4/3 褐色土
靴土粒との混合土 1層に褐色土
ブロック混入

Ⅰ L-292.000 m



Ⅰ L-291.700 m



Ⅰ17柱穴状土坑 7号 O-O'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
- 2 10YR4/3 褐色土

Ⅰ17柱穴状土坑 4号 L-L'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
- 2 10YR7/2 に近い黄褐色土
- 3 10YR4/4 褐色土
- 4 10YR2/3 暗褐色土
- 5 10YR4/4 褐色土
- 6 10YR3/3 暗褐色土
- 7 10YR4/3 に近い黄褐色土

Ⅰ L-291.800 m



Ⅰ16柱穴状土坑 9号 G-G'

- 1 10YR4/4 褐色土
- 2 10YR4/4 に近い黄褐色土
褐色土に黄褐色土混入
- 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土、褐色土ブロック混入
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色土
基本土層以下に褐色土
ブロック、黄褐色土少量混入
- 5 10YR4/3 に近い黄褐色土
基本土層に暗褐色土・
褐色土少量混入

Ⅰ L-291.800 m



Ⅰ17柱穴状土坑 2号 K-K'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
暗褐色土との混合土
炭化物混入、基本的
土層厚さ不明、赤
土混入
- 2 10YR4/4 褐色土
明黄褐色土混入
- 3 10YR4/4 褐色土
2層に明黄褐色土ブ
ロック、黄褐色土混
入
- 4 10YR4/4 褐色土
2層が主

Ⅰ L-291.800 m



Ⅰ17柱穴状土坑 5号 H-H'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
明黄褐色土との混合土
石粒との混合土
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
暗褐色土・黄褐色土との混合土
石粒との混合土
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色土
明黄褐色土・2層より南面厚
石粒多量・炭化物粒混入

Ⅰ L-291.800 m



Ⅰ17柱穴状土坑 8号 M-M'

- 1 10YR3/4 暗褐色土
明黄褐色土・土層厚
石粒との混合土
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
暗褐色土・黄褐色土との混合土
石粒との混合土
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色土
明黄褐色土・2層より南面厚
石粒多量・炭化物粒混入

Ⅰ L-291.800 m



Ⅰ17柱穴状土坑 3号 R-R'

- 1 10YR2/2 暗褐色土
- 2 10YR4/4 褐色土
- 3 10YR3/3 暗褐色土
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 5 10YR4/4 褐色土

Ⅰ L-291.700 m



Ⅰ17柱穴状土坑 6号 N-N'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土・炭化物粒
混入
- 2 10YR4/4 褐色土
地山部分 層り過ぎ

Ⅰ L-291.500 m



Ⅰ17柱穴状土坑 1号

Ⅰ L-291.800 m



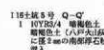
Ⅰ16柱穴状土坑 4号 P-P'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
土層厚 (基本土層1層)、
小石等混入
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
明黄褐色土・暗褐色土混入
- 3 10YR2/3 暗褐色土
暗褐色土・炭化物粒混入

Ⅰ16柱穴状土坑 7号 Q-Q'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
- 2 10YR4/4 褐色土
- 3 10YR2/3 暗褐色土
- 4 10YR4/4 褐色土
- 5 10YR4/4 褐色土
- 6 10YR4/4 褐色土
- 7 10YR4/4 褐色土

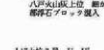
Ⅰ16柱穴状土坑 5号 Q-Q'



Ⅰ16柱穴状土坑 6号 R-R'

- 1 10YR2/3 暗褐色土
- 2 10YR4/4 褐色土
- 3 10YR2/3 暗褐色土
- 4 10YR4/4 褐色土
- 5 10YR4/4 褐色土
- 6 10YR4/4 褐色土
- 7 10YR4/4 褐色土

Ⅰ16柱穴状土坑 8号 S-S'



Ⅰ16柱穴状土坑 2号 U-U'

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土粒多量、黒褐色土
混入
- 2 10YR2/3 暗褐色土
オックス (南面厚石粒?) 少
量混入
- 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土、暗褐色土・炭化
物混入

Ⅰ17柱穴状土坑 2号



Ⅰ17柱穴状土坑 2号

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土・暗褐色土・炭化
物混入
- 2 10YR2/3 暗褐色土
オックス (南面厚石粒?) 少
量混入
- 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土、暗褐色土・炭化
物混入

第90図 土坑・柱穴状土坑 (42)



- 119柱状土坑1号 D-D'
- 1 10YR2/3 黒褐色土
暗褐色土との混合土
南部浮石少量混入
 - 2 10YR2/4 暗褐色土
暗褐色土少量混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黒褐色土との混合土
南部浮石少量混入
 - 4 10YR4/4 褐色土
基本土層X層フロッツ
 - 5 10YR3/3 暗褐色土
少量の黒褐色土との
混合土 南部浮石混
入



- 119柱状土坑2号 E-E'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
暗褐色土・南部浮石
粒少量混入



- 119柱状土坑3号 F-F'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
黒褐色土・褐色土・
南部浮石粒少量・炭
化物粒少量混入



- 119柱状土坑4号 G-G'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
上段に十和田b・南
部浮石少量混入



- 117土坑4号 117土坑3号 118土坑9号
- 117土坑3・4号 118土坑9号 H-H'
- 1 10YR2/2 暗褐色土
暗褐色土・褐色土・
南部浮石粒少量・炭
化物粒混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
暗褐色土との混合土
南部浮石粒少量混
入
 - 3 10YR7/4 に近い褐色土
基本土層収収相当
 - 4 10YR4/4 褐色土
基本土層X層相当
 - 5 10YR2/3 暗褐色土
暗褐色土との混合土
南部浮石粒少量
 - 6 10YR3/3 暗褐色土
暗褐色土・暗褐色土
混入
 - 7 10YR3/3 暗褐色土
1層より暗褐色土層・
南部浮石粒混入



- 118土坑4号 K-K'
- 1 10YR2/2 暗褐色土
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
 - 3 10YR4/4 暗褐色土
 - 4 10YR3/4 暗褐色土
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土
 - 6 10YR4/3 に近い黄褐色土
 - 7 10YR2/3 暗褐色土
 - 8 10YR3/3 暗褐色土

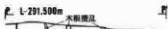
- 基本土層相当に南部浮石
粒少量・炭土粒少量混入
黒褐色土・褐色土・南部
浮石粒少量・土層混入
八戸山火坑(基本土層)
・南部浮石粒・炭化物粒
少量混入
- 3 黒褐色土との混合土
南部浮石粒少量混入
 - 4 黄褐色土に南部浮石粒
少量混入 水混濁?
 - 5 暗褐色土多量・炭化物粒
少量混入
 - 6 1層より暗褐色土多量混
入
 - 7 黄褐色土少量混入



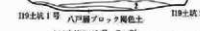
- 118土坑5号 L-L'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
褐色土・炭化物粒多量
混入
 - 2 10YR2/3 に近い黄褐色土
暗褐色土・褐色土・暗褐
色土・炭化物粒少量混入



- 118土坑1号 I-I'
- 1 10YR2/3-2/3 暗褐色土
黄褐色土小フロッツ・南部浮石粒少
量・炭土粒・炭化物粒少量混入



- 118土坑13号
- 118土坑12号 119土坑5号 P-P'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
褐色土・黒褐色土・南
部浮石粒少量混入
炭化物粒少量混入
 - 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土・八戸山火坑
上位置(基本土層混入)
炭化物粒少量混入
 - 3 10YR2/2 黒褐色土
黄褐色土少量・汚れた
南部浮石粒少量混入
八戸山火坑(基本土層
混入)フロッツ・暗褐
色土・炭化物粒少量混入 腐
り過ぎ?
 - 4 10YR2/2 黒褐色土
 - 5 10YR4/4 褐色土
 - 6 10YR4/5 褐色土
 - 7 10YR3/4 暗褐色土

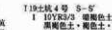
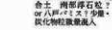
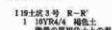
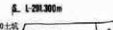
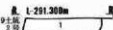


- 118土坑6号 M-M'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
暗褐色土との混合土 南部
浮石少量混入
 - 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
暗褐色土と黄褐色土との混
合土
 - 3 10YR4/4 褐色土
汚れた基本土層b層相当
腐り過ぎ?

- 118土坑7号 N-N'
- 1 10YR2/3 暗褐色土
細かい黄褐色土粒混入
 - 2 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土と暗褐色土との混合土
炭化物粒少量混入
 - 3 10YR3/3 暗褐色土
炭化物粒少量混入 土穴部分?
腐り過ぎ?

- 118土坑12号 O-O'
- 1 10YR2/2 暗褐色土
黄褐色土との混合土 南部
浮石少量混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土との混合土 南部
浮石混入
 - 3 10YR2/3 暗褐色土
黄褐色土・黒褐色土混入
 - 4 10YR4/4 褐色土とフロッツ
と10YR2/3 暗褐色土フロッツ
入り混じった層

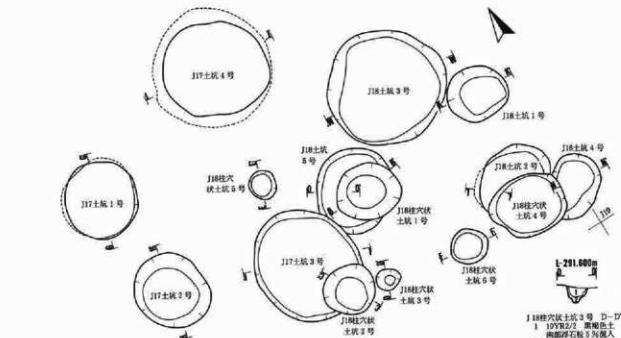
- 119土坑1号 八戸山フロッツ褐色土
- 119土坑1・2号 Q-Q'
- 1 10YR2/2 暗褐色土
上段に十和田b火山
灰少量含む南部浮石
粒少量との混合土
炭化物粒少量混入
炭褐色土少量・南部
浮石粒少量混入
 - 2 10YR2/4 暗褐色土



- 119土坑3号 R-R'
- 1 10YR4/4 褐色土
黄褐色土との混合土
炭化物粒少量混入
腐り過ぎ?
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
褐色土・南部浮石粒少
量・炭化物粒少量混入

- 119土坑4号 S-S'
- 1 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・褐色土・南
部浮石少量・炭化
物少量混入
 - 2 10YR2/3 暗褐色土
褐色土・南部浮石粒少
量・炭化物粒少量混入

第92図 土坑・柱状土坑 (44)



- J18柱状土坑 3号 D-I' 1 10YR2/2 黄褐色土 南部浮石粒 5%混入 2 10YR3/4 暗褐色土
- J18柱状土坑 5号 E-E' 1 10YR2/2 黄褐色土 南部浮石粒 10%以上混入 2 10YR3/4 暗褐色土 南部浮石粒 2~5%混入



- J18柱状土坑 2号 C-C' 1 10YR2/3 暗褐色土 2 10YR4/4 褐色土 3 10YR4/3 におい黄褐色土 4 10YR2/3 暗褐色土 5 10YR2/4 暗褐色土 6 10YR3/3 暗褐色土 7 10YR3/4 暗褐色土

- 黄褐色土・黒褐色土・バリス層 暗褐色土ブロック混入 炭化物粒少量混入 黄褐色土との混合土 4層より黄褐色土多量混入 5層粘質



- J18柱状土坑 1号 B-B' 1 10YR2/3 黄褐色土 2 10YR2/3 黄褐色土 3 10YR4/3 におい黄褐色土 4 10YR3/4 暗褐色土 5 10YR4/4 褐色土 6 10YR4/3 におい黄褐色土

- 黄褐色土が明確に層まったもので産状 南部浮石粒少量混入 1層粘質土のもの 南部浮石粒多量混入 本柱状周囲埋り 南部浮石粒少量混入 八戸火山灰産層の厚石層? 汚れた八戸火山灰埋り 基本土層産層下・是褐色土・黄褐色土混入



- J18柱状土坑 8号 F-F' 1 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒 1%混入



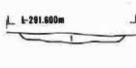
- J17土坑 1号 G-G' 1 10YR2/2 黄褐色土 暗褐色土との混合土 南部浮石粒少量混入 2 10YR3/3 暗褐色土 褐色土との混合土 3 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石粒少量混入 4 10YR3/3 暗褐色土 褐色土との混合土 5 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土・黒褐色土混入



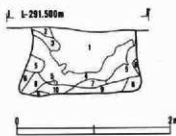
- J16柱状土坑 A-A' 1 10YR4/4 におい黄褐色土 黄褐色土・暗褐色土・細かい 南部浮石粒多量混入



- J17土坑 2号 B-B' 1 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰層に暗褐色土・ 南部浮石粒 7%混入 2 10YR4/3 におい黄褐色土 1層土・黄褐色土との混合土 南部浮石粒少量混入 3 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・粘土粒少量・炭化物粒混入 4 10YR4/4 褐色土 暗褐色土少量混入



- J17土坑 3号 I-I' 1 10YR3/3 暗褐色土 汚れた褐色土 南部浮石 7%混入



- J17土坑 4号 J-J' 1 10YR3/3 暗褐色土 2 10YR4/6 褐色土 3 10YR3/6 黄褐色土 4 10YR4/4 におい黄褐色土 5 10YR3/4 黄褐色土 6 10YR3/4 黄褐色土 7 10YR3/4 黄褐色土 8 10YR3/4 黄褐色土 9 10YR3/3 暗褐色土 10 10YR3/3 暗褐色土

- 褐色土ブロック・南部浮石粒少量・八戸火山灰少量・炭化物粒少量混入 八戸火山灰下位層ブロック土 3層に炭化物粒少量混入 埋り通ぎ? 八戸火山灰下位層 埋り通ぎ? 八戸火山灰下位層 埋り通ぎ? 八戸火山灰下位層 埋り通ぎ? 黄褐色土・褐色土混入 黄褐色土・褐色土混入 黄褐色土・褐色土混入

第96図 土坑・柱状土坑 (47)



- J18土坑1号 K-K'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・径3m大の南面浮石層侵入
 - 2 10YR4/3 濃い黄褐色土 八戸火山灰層に南面浮石層少量侵入
 - 3 10YR4/6 褐色土 南面浮石層・八戸火山灰下位層
 - 4 10YR4/4 褐色土 南面浮石層少量侵入



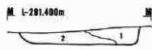
- J18土坑4号 N-N'
- 1 10YR3/4 暗褐色土との混合土・南面浮石層3~5%混入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土
 - 3 10YR2/1 黒色土 暗褐色土・南面浮石層1~2%混入 腐植土? 木屑?



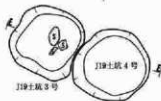
- J18土坑5号 O-O'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・黒褐色土・バミス層



- J18土坑2号 L-L'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土・黄褐色土・バミス層
 - 2 10YR4/4 褐色土 褐色土の混合土層少量混入



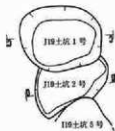
- J18土坑3号 M-M'
- 1 10YR4/4 褐色土 黄褐色土・八戸火山灰層(基本土層層b)・南面浮石層ではないバミス層
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 汚れた黄色土 南面浮石?バミス層



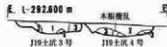
- J19柱穴状土坑2号 A-A'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石層少量侵入



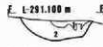
- J19柱穴状土坑3号 B-B'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 南面浮石層1~2%混入



- J19土坑1号 C-C'
- 1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土・黄褐色土・南面浮石層少量侵入
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 1層厚 白色 (5Y4/1) ~4/2長~反オリーブ) 火山灰?混入
 - 3 10YR4/6 褐色土 八戸火山灰層下位層物層の遺跡



- J19土坑3+4号 E-E'
- 1 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・褐色土・炭化物粒層層侵入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 1層より暗褐色土多量?・褐色土・炭化物粒層層侵入
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 汚れた褐色土主体 腐り過ぎ?



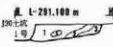
- J20土坑1号 F-F'
- 1 10YR3/1 黄褐色土 炭化物粒層層侵入 木屑による腐敗 基本土層1層混入
 - 2 10YR2/3 黄褐色土 暗褐色土との混合土 黄褐色土層侵入



- J20土坑2号 G-G'
- 1 10YR2/2 黄褐色土 暗褐色土との混合土 炭化物粒層層侵入



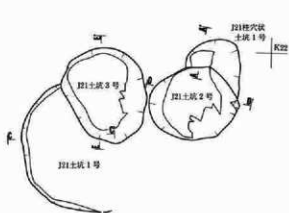
- J19土坑2号 D-D'
- 1 10YR4/4 褐色土と10YR3/4 暗褐色土との混合土 南面浮石層3%混入



- J20土坑1号



第96図 土坑・柱穴状土坑 (48)



J21柱穴状土坑1号 A-A'
1 10YR2/3 黒褐色土
褐色土・黒膠厚石粒 5
~7%・焼土粒・炭化
物粒・粘質片混入



J21土坑1号 C-C'
1 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土・暗褐色土・焼土
粒微量混入



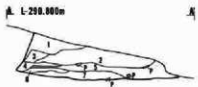
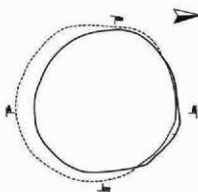
J21土坑3号 E-E'
1 10YR2/3 暗褐色土
褐色土・黒膠厚石粒 5~7%・焼
土粒・炭化物粒・粘質片混入
2 10YR2/3 暗褐色土・土3/9 黄褐色
土の混合物・黒膠厚石粒 5~7%・
炭化物粒・灰白色粘質片
3 7.5YR4/4 に近い褐色の粘質片及
び粘粒を含む褐色土



J21柱穴状土坑3号 B-B'
1 10YR4/3 に近い黄褐色土
黄褐色土・暗褐色土・焼土
粒微量混入



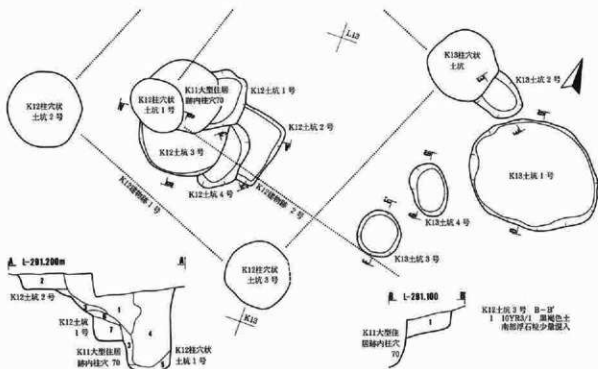
J21土坑2号 D-D'
1 10YR2/3 暗褐色土
基本土層区隔・黄褐色土・
焼土粒・炭化物粒混入
2 10YR4/3 に近い黄褐色土
1層に炭化物粒多量混入
3 10YR4/4 褐色土
八戸火山灰層プロット土



K10土坑 A-A'・B-B'
1 10YR2/3 黒褐色土
白色に色落ちしている(焼けて
いる) 赤膠厚石粒・焼土粒微量・
炭化物粒混入
2 10YR2/3 黒褐色土
1層より白化していない南部
厚石粒・炭化物粒多量混入
基本土層区隔中位~下部相当
褐色土・
3 10YR2/2 黒褐色土
焼土粒・炭化物粒微量混入
4 10YR2/3 黒褐色土
焼土粒多量・炭化物粒少量混入
5 10YR2/1 黄褐色土
2層相当
6 10YR2/1 黄褐色土
焼土粒微量・炭化物粒少量混入
7 10YR2/3 黒褐色土
焼土粒微量・炭化物粒少量混入
炭化物粒微量混入 基本的に3
層相当



第97図 土坑・柱穴状土坑 (40)



K12土坑1・2号 K12柱穴状土坑1号 K11大型住居跡内柱穴70 A-A'

- 1 10YR2/3 黒褐色土
南部浮石粒少量、八戸火山灰層小フロップ・焼土粒・炭化物粒少量・土器少量混入
- 2 10YR2/3-2/3 黒褐色～暗褐色土
1層より細かくて少量の南部浮石粒混入 海漂物の可能性あり
ヒトで住はない?
- 3 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒微量・焼土粒・炭化物粒混入
- 4 10YR2/2 黒褐色土
南部浮石粒微量・焼土粒・炭化物粒混入 3層相当?
- 5 10YR6/3 濃い黄褐色土
褐色土・黒褐色土混入
- 6 10YR2/2 濃い黄褐色土
中間に黒褐色土層3.5cmで混入
- 7 10YR2/2 黒褐色土
褐色土フロップ・南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒微量・土器混入

※1、3、4、6層柱の混入方? 5層柱のみ

尺 L-291.300m 尺 K12土坑1号 D-D'

- 1 10YR2/2 黒褐色土
フロップ・二次中層
南部浮石粒5%混入

尺 L-291.100m 尺 K12柱穴状土坑1号

- 1 10YR2/1 黒褐色土
多数の南部浮石粒との混合土 基本土層
黒～IV層相当

尺 L-291.300m 尺 K12土坑3号 F-F'

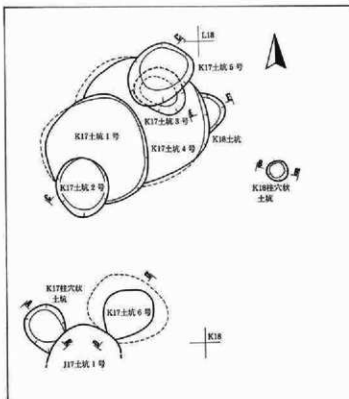
- 1 10YR5/1 黒褐色土
多数の南部浮石粒との混合土 基本土層
黒～IV層相当

尺 L-291.300m 尺 K12土坑4号 G-G'

- 1 10YR2/1 黒褐色土
多数の南部浮石粒との混合土 基本土層
黒層上位～IV層相当

尺 L-291.300m 尺 K12土坑3号

- 1 10YR2/3 黒褐色土
八戸火山灰層との混合土
南部浮石粒少量混入
炭化物粒少量混入
黒褐色土少量・南部浮石粒少量混入
- 2 10YR3/1 黒褐色土
- 3 10YR3/4 暗褐色土



第98図 土坑・柱穴状土坑 (50)



K18柱状土坑 B-B'
1 10YR2/2 黒褐色土
南厚浮石粒少量混入



- K17柱状土坑 A-A'
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
 - 3 10YR2/3 黒褐色土
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 5 10YR4/4 褐色土

- K17土坑 1号
- 1 10YR2/2 黒褐色土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
 - 3 10YR2/4 にぶい黄褐色土
 - 4 10YR4/4 褐色土
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
 - 7 10YR3/1 黒褐色土
 - 8 10YR2/2 黒褐色土

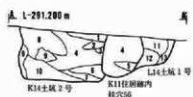
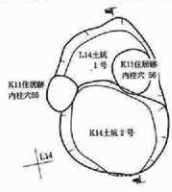
- K17土坑 1・2・3・4・5号 C-C'
- 1 10YR2/2 黒褐色土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
 - 3 10YR2/4 にぶい黄褐色土
 - 4 10YR4/4 褐色土
 - 5 10YR2/3 黒褐色土
 - 6 10YR2/3 黒褐色土
 - 7 10YR3/1 黒褐色土
 - 8 10YR2/2 黒褐色土
 - 9 10YR6/8 明黄褐色土
 - 10 10YR3/2 黒褐色土
 - 11 10YR3/1 黒褐色土
 - 12 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 13 10YR3/2-4/3 暗褐色～にぶい黄褐色土
 - 14 10YR3/2 黒褐色土
 - 15 10YR4/4 褐色土
 - 16 10YR4/4 褐色土
 - 17 10YR4/4 褐色土
 - 18 10YR3/2 黒褐色土

白色粘土・南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
内れた南厚浮石粒少量混入
八戸火山灰の下の褐色土ブロック
暗褐色土小ブロック少量混入 (八戸火山灰層+暗褐色土)
南厚浮石粒少量混入
褐色土・黒褐色土・南厚浮石粒少量混入
基本土層1層相型
高粘性に褐色土ブロック・南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
南厚浮石粒層 径2~3mmの炭化物粒少量混入
内れた2mm大の南厚浮石粒少量混入
褐色土ブロックと黒褐色土の厚1cmの層状に入っている 南厚浮石粒少量混入
10層より南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
八戸火山灰層 盛り過ぎ
暗褐色土少量混入 微細粘土?
八戸火山灰層 盛り過ぎ
褐色土小ブロックとの混合土

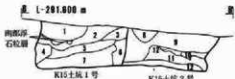


- K17土坑 4号
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
 - 3 基本土層1層相型に黒褐色土・炭化物粒少量混入
 - 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
 - 5 10YR2/4 暗褐色土
- K18土坑 E-E'
1 10YR4/4 褐色土
暗褐色土少量混入
微細粘土?

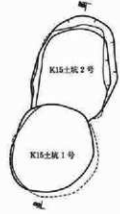
暗褐色土はすべて八戸火山灰層



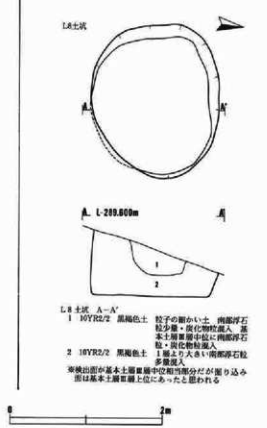
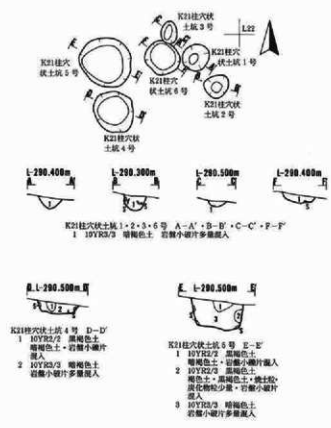
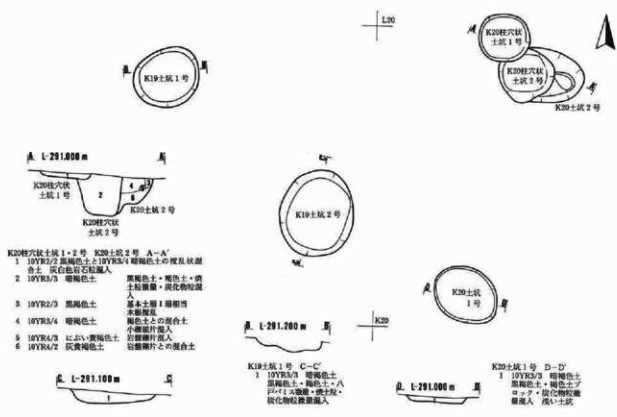
- K14土坑 2号 L14土坑 1号 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・南厚浮石粒混入
 - 3 10YR4/3 黒褐色土 基本土層1層相型中位混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色土 南厚浮石粒・炭化物粒少量混入
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 4層に白色粘土少量混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 径1mmの暗褐色浮石粒・赤土層・炭化物粒混入
 - 7 8層に南厚浮石粒少量混入
 - 8 10YR2/3 暗褐色土 褐色土・南厚浮石粒混入
 - 9 10YR3/4 暗褐色土 6層に褐色土層入
 - 10 10YR2/1 黒褐色土 南厚浮石粒少量混入 基本土層相型上位相型
 - 11 10YR2/1 黒褐色土 基本土層1層相型 本層の覆土?
 - 12 10YR2/1 黒褐色土 南厚浮石粒少量・炭化物粒少量混入
 - 13 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土・南厚浮石粒混入
- ※1~11層はK11大塚住居跡内柱穴30・K14土坑2号? 12~14層はL14土坑1号



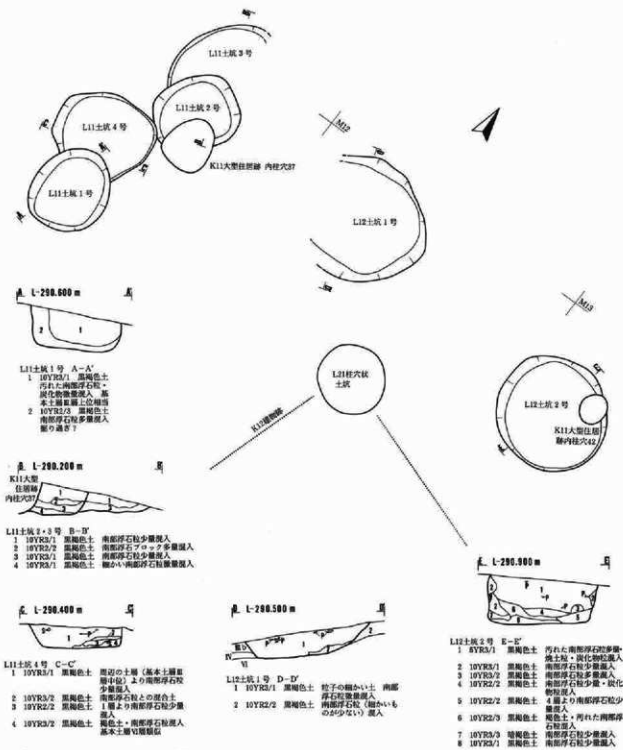
- K15土坑 1・2号 B-B'
- 1 10YR2/2 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒・八戸火山灰層混入
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒・八戸火山灰層混入
 - 4 10YR3/1 黒褐色土 南厚浮石粒少量混入
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 南厚浮石粒・八戸火山灰層混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色土 南厚浮石粒少量混入
 - 7 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・南厚浮石粒少量混入
 - 8 10YR2/3 黒褐色土 褐色土少量・南厚浮石粒少量・粘土粒少量混入
 - 9 10YR3/3 暗褐色土 南厚浮石粒・八戸火山灰層混入
 - 10 10YR4/4 褐色土 八戸火山灰層 (基本土層相型) 暗褐色土少量混入
 - 11 10YR2/1 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒混入
 - 12 10YR2/1 黒褐色土 径2mm大の南厚浮石粒混入
- ※1~7層の暗褐色土・赤土と八戸火山灰層 8~12層は9層の床面?



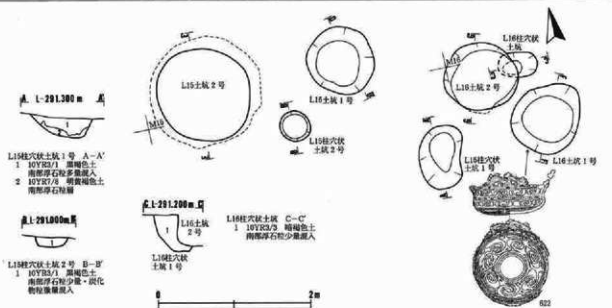
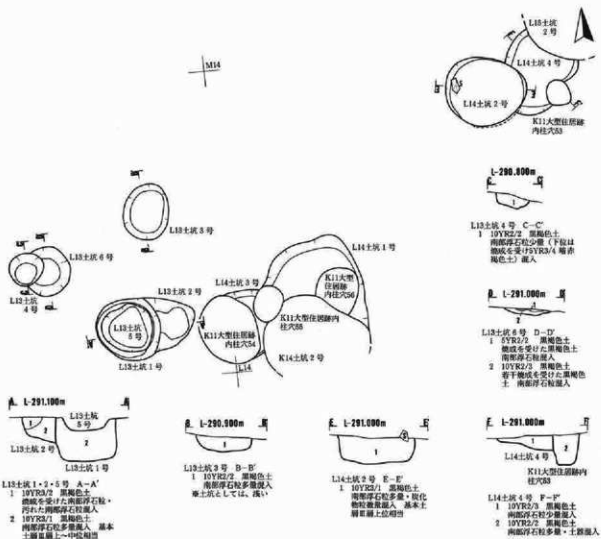
第99図 土坑・柱状土坑 (51)



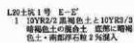
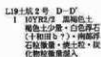
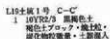
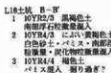
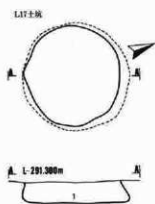
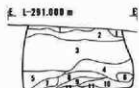
第100図 土坑・柱穴土坑 (52)



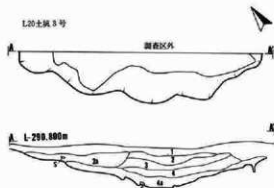
第101図 土坑・柱穴状土坑 (53)



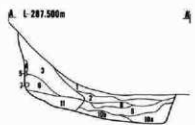
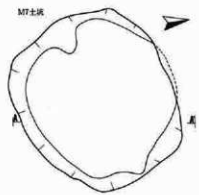
第102图 土坑・柱穴状土坑 (54)



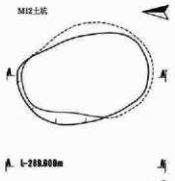
第103図 土坑・柱状土坑 (55)



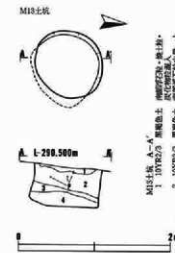
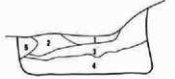
- L20土坑 3号 A-A'
- | | | | | |
|----|-----------------|------|-----|---------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 木能等少量混入 |
| 2 | 10YR2/1-10YR3/1 | 黒褐色土 | シルト | 十和田a・b混入 |
| 3a | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径1cm程度の角礫少量混入 |
| 4 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | |
| 4a | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 黄褐色土・小角礫少量混入 |



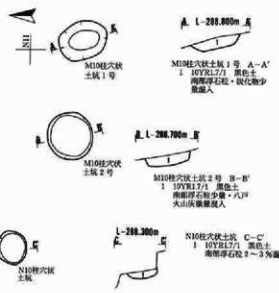
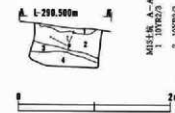
- M7土坑 A-A'
- | | | | | |
|-----|---------------|-------|-----|--|
| 1 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径2-10mmの角礫浮石粒少量混入
2層堆積 3層に踏みしめられた部分 |
| 2 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径2-10mmの角礫浮石粒少量・炭化物粒少量混入 |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径2-10mmの角礫浮石粒少量混入 |
| 4 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 4層相当 |
| 5 | 7層相当 | | | |
| 6 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径2-10mmの角礫浮石粒少量混入
(3層相当 角礫浮石粒多量 3層と6層は混入土も層の下の部分) |
| 7 | 角礫浮石ブロック状の混入部 | | | |
| 8 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径5-10mmの角礫浮石粒少量混入 |
| 9 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 10a層より角礫浮石粒少量混入 |
| 10a | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 径5-10mmの角礫浮石粒少量混入 |
| 10b | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 10a層より若干赤色土 径5-10mmの角礫浮石粒少量混入 |
| 11 | 10YR2/2 | 明黄褐色土 | | 角礫浮石粒混入 赤褐色土 |



- M12土坑
- 特色: 土ブロック・角礫浮石・角礫浮石・炭化物粒混入
混入 角礫浮石粒少量混入
基本土層上部角礫浮石混入部
角礫浮石粒混入部
- | | | | | |
|---|---------|-------|-----|---------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石・角礫浮石 |
| 2 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石・炭化物粒混入 |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石粒少量混入 |
| 4 | 10YR2/2 | 明黄褐色土 | シルト | 基本土層上部角礫浮石混入部 |
| 5 | 10YR2/2 | 明黄褐色土 | シルト | 角礫浮石混入部 |



- M18土坑
- 特色: 土ブロック・角礫浮石・炭化物粒混入
混入 角礫浮石粒少量混入
基本土層上部角礫浮石混入部
角礫浮石粒混入部
- | | | | | |
|---|---------|-------|-----|---------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石・角礫浮石 |
| 2 | 10YR2/2 | 明黄褐色土 | シルト | 角礫浮石・炭化物粒少量混入 |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石粒少量混入 |
| 4 | 10YR2/2 | 明黄褐色土 | シルト | 基本土層上部角礫浮石混入部 |



- M10柱穴状土坑 1号
- | | | | | |
|---|-----------|------|-----|-------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石粒少量混入・炭化物少量混入 |
|---|-----------|------|-----|-------------------|



- M10柱穴状土坑 2号
- | | | | | |
|---|-----------|------|-----|-------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石粒少量混入・炭化物少量混入 |
|---|-----------|------|-----|-------------------|



- N10柱穴状土坑
- | | | | | |
|---|-----------|------|-----|--------------|
| 1 | 10YR1.7/1 | 黒褐色土 | シルト | 角礫浮石粒 2-3層混入 |
|---|-----------|------|-----|--------------|

第104図 土坑・柱穴状土坑 (56)



- M14土坑 3号 B-B'
- 1 75YR2/1 黒色土
南照浮石粒1~3%混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
南照浮石粒1%混入



- M14土坑 2号 D-D'
- 1 10YR2/1 黒色土
二次中層・南照浮石粒5~10%炭化材料混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
南照浮石粒10%・八戸火山灰・炭化材料多量混入
 - 3 10YR2/1 黒色土
1層相当
 - 4 10YR2/2 黒褐色土
2層相当



- M18柱穴状土坑 2号

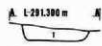
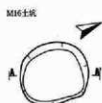
- M18柱穴状土坑 2号 M18土坑 2号 A-A'
- 1 10YR2/1 黒褐色土
南照浮石粒少量・炭化物粒少量混入 基本土層厚土位相当
 - 2 10YR2/4 暗褐色土
南照浮石粒多量混入
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色土
2層より南照浮石粒多量(約3mm大多い)混入
 - 4 10YR3/3 暗褐色土
褐色土・南照浮石粒(徑1mm大多い)混入
- 専断の下位土床中南照浮石粒層



- M14土坑 1号 C-C'
- 1 75YR3/2 黒褐色土
二次中層・南照浮石粒10%・鐵土粒・炭化材料混入
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
二次中層混入
 - 3 75YR3/2 黒褐色土
1層相当



- M16柱穴状土坑 B-B'
- 1 10YR3/2 黒褐色土
八戸火山灰に南照浮石粒・炭化物少量混入
人為堆積?
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
八戸火山灰層上位混入
柱層部の可能性あり
 - 3 10YR2/1 黒褐色土
南照浮石粒少量混入
基本土層層相当 柱層部の可能性あり
 - 4 10YR2/1 黒褐色土
3層より若干土より微
で南照浮石粒多量混入



- M18土坑 A-A'
- 1 10YR3/4 暗褐色土
坑1~2mmの南照浮石粒・八戸火山灰層混入



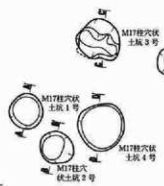
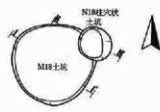
- M15土坑 1号 F-F'
- 1 10YR3/2 黒褐色土
二次中層・南照浮石粒・炭化材料混入 基本土層層上位相当
 - 2 10YR2/2 黒褐色土
中層・南照浮石粒混入 基本土層層上位相当 混り過ぎ?



第105図 土坑・柱穴状土坑 (57)

▲L-291200m Ⅳ

M17柱穴状土坑 1号 A-A'
1 10YR3/1 黄褐色土
十和田b火山灰少量混入



▲L-291300m Ⅴ

M17柱穴状土坑 6号 E-E'
1 10YR3/1 黄褐色土
黄褐色土少量・南部浮石少量混入

▲L-291100m Ⅲ

M18柱穴状土坑 4号 F-F'
1 10YR3/1 黄褐色土
十和田b火山灰少量混入
2 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・八戸火山灰少量混入

▲L-290900m Ⅱ

N18柱穴状土坑 Ⅱ-F
1 10YR3/1 黄褐色土
十和田b火山灰少量混入
2 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土・八戸火山灰少量混入
3 10YR2/2 黄褐色土
1層に黄褐色土混入

▲L-290900m Ⅰ

M18土坑 Ⅰ-T
1 10YR3/1 黄褐色土
基本土層2層下位の黄褐色土・褐色土・南部浮石少量混入
2 10YR2/4 暗褐色土
八戸火山灰層の黄褐色土に黄褐色土混入・南部浮石少量混入
3 10YR2/2 暗褐色土
黄褐色土多量混入・4層2層相当
4 10YR3/4 黄褐色土
南部浮石少量混入 2層相当
5 10YR2/1 黄褐色土
褐色土・南部浮石少量混入
6 10YR4/3 黄褐色土
褐色土・暗褐色土少量混入・1次混入

▲L-291300m Ⅳ

M17柱穴状土坑 2号 B-B'
1 10YR2/4 暗褐色土
暗褐色土・八戸火山灰少量混入

▲L-291300m Ⅲ

M17柱穴状土坑 3号 C-C'
1 10YR2/2 暗褐色土
2 10YR3/4 黄褐色土
黄褐色土・八戸火山灰下位混入

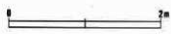
▲L-291200m Ⅱ

M17柱穴状土坑 4号 D-D'
1 10YR3/3 暗褐色土
南部浮石少量混入
2 10YR2/1 黄褐色土
木腐層
3 10YR4/4 褐色土
八戸火山灰下位層に黄褐色土少量混入
4 10YR4/3 黄褐色土
黄褐色土少量混入

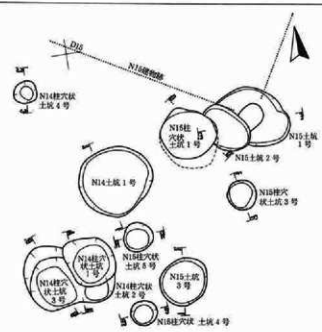
N10土坑 1号



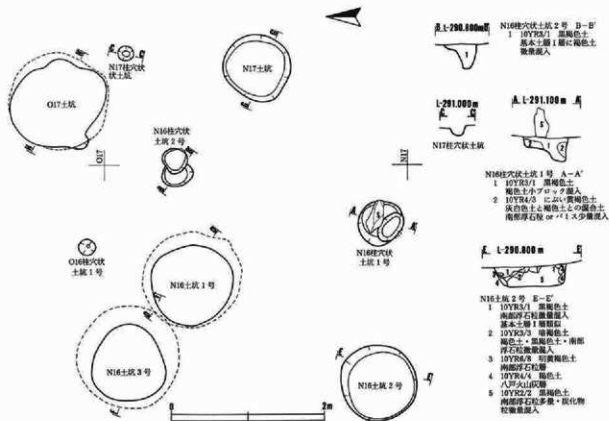
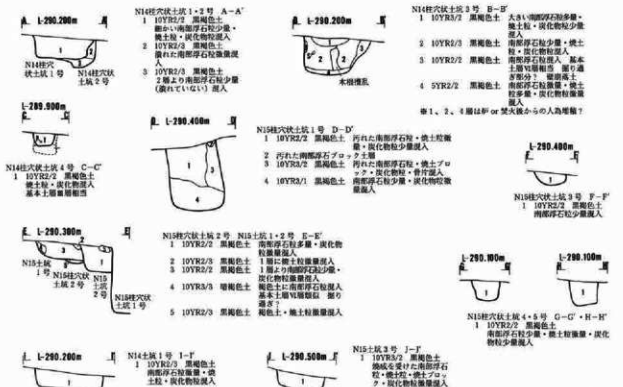
▲L-291300m



N10土坑 A-A' 暗褐色土・少
1 暗褐色土・少量混入
2 暗褐色土・少量混入
3 暗褐色土・少量混入
4 暗褐色土・少量混入
5 暗褐色土・少量混入
6 暗褐色土・少量混入
7 暗褐色土・少量混入
8 暗褐色土・少量混入
9 暗褐色土・少量混入
10 暗褐色土・少量混入
11 暗褐色土・少量混入
12 暗褐色土・少量混入
13 暗褐色土・少量混入
14 暗褐色土・少量混入
15 暗褐色土・少量混入
16 暗褐色土・少量混入
17 暗褐色土・少量混入
18 暗褐色土・少量混入
19 暗褐色土・少量混入
20 暗褐色土・少量混入



第106図 土坑・柱穴状土坑 (58)



第107図 土坑・柱穴状土坑 (59)

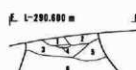


N17土坑 G-G'
1 10YR2/4 黒褐色土
腐植土・南洲浮石
粒混入

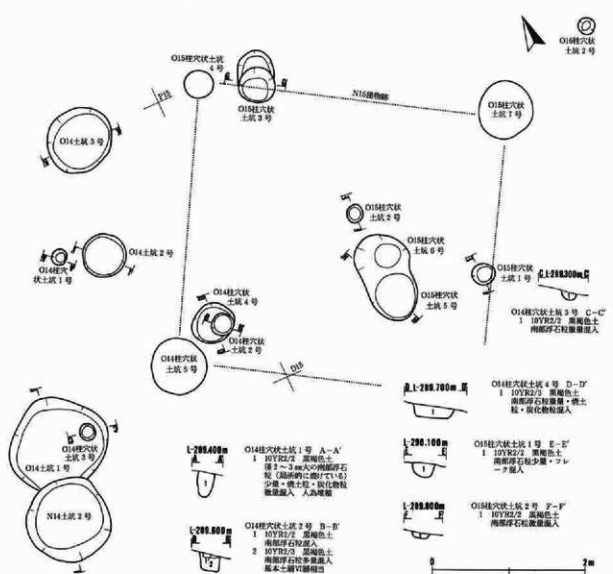


- N18土坑 1号 D-D'
- 10YR2/2 黒褐色土 基本土層1層に南洲浮石粒混入
 - 10YR2/3 黒褐色土 南洲浮石粒・焼土粒・炭化物粒混入
 - 10YR2/2~3/3 黒褐色~暗褐色土 南洲浮石粒・焼土粒多量・炭化物粒少量混入
 - 10YR6/8 明黄褐色土 細かい南洲浮石ブロック土層
 - 10YR3/2 黒褐色土 八戸火山灰ブロック土層
 - 10YR3/2 黒褐色土 5層相当
 - 10YR2/3 黒褐色土 内付た南洲浮石粒との褐色土
 - 10YR3/2 黒褐色土 南洲浮石粒混入
 - 10YR3/3 暗褐色土 南洲浮石粒・八戸火山灰粒混入

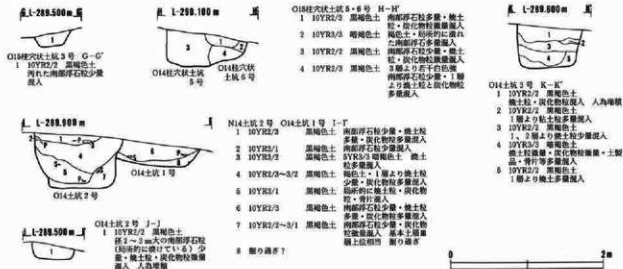
- O17土坑 H-H'
- 10YR3/3 暗褐色土 南洲浮石粒・八戸火山灰粒混入 人為堆積
 - 10YR4/3 に近い黄褐色土 1層より八戸火山灰多量・土層少量混入 人為堆積
 - 10YR3/3 暗褐色土 南洲浮石粒少量混入 自然堆積



- N16土坑 3号 F-F'
- 10YR2/2~2/3 黒褐色土 南洲浮石粒10~20%混入
 - 10YR2/3 黒褐色土 南洲浮石粒7~10%混入
 - 10YR2/2 黒褐色土 南洲浮石粒5~7%混入
 - 10YR1/1 黒色土 南洲浮石粒2~3%混入
 - 10YR2/3 黒褐色土 南洲浮石粒10~15%・焼土粒少量・炭化物混入
 - 10YR2/2 黒褐色土 南洲浮石粒7~10%・八戸火山灰少量・焼土粒少量・炭化物粒混入



第108図 土坑・柱穴状土坑 (60)



第109図 土坑・柱穴状土坑 (61)



▲ L-200700m ▲



G23柱穴内柱穴1号 A-A'

- 1 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒少量・炭化物粒
微量混入
- 2 10YR2/3 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 3 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒少量混入
- 4 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒微量混入
- 5 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒少量混入

▲ L-200800m ▲



G23柱穴内柱穴2号 B-B'

- 1 10YR2/2 黑褐色土と10YR2/3
黑褐色土の混合土・中鉄少量・
南部浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2 黑褐色土
中鉄少量・南部浮石粒少量混入
- 3 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒微量混入
- 4 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒微量混入
- 5 10YR2/2 黑褐色土
鐵5~4・南部浮石粒多量混入

▲ L-200800m ▲



G23柱穴内柱穴3号 C-C'

- 1 10YR2/1 黑褐色土
中鉄少量・鐵5~4・南部浮石
粒少量混入
- 2 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒微量・炭化物粒
微量混入
- 3 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒微量混入
- 4 10YR2/3 黑褐色土
南部浮石粒多量混入

▲ L-200800m ▲



G23柱穴内柱穴4号 D-D'

- 1 10YR2/2 黑褐色土
中鉄少量・鐵5~4・石粒少量・
炭化物粒微量混入
- 2 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 3 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 4 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒少量混入

▲ L-200900m ▲



南部浮石粒期

▲ L-200900m ▲



▲ L-200900m ▲



南部浮石粒期

▲ L-200200m ▲



G23柱穴内 G-C'

- 1 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒の混合土
- 3 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 4 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒多量混入

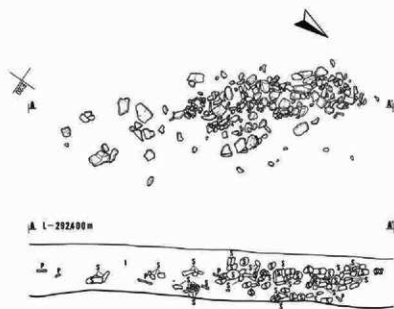
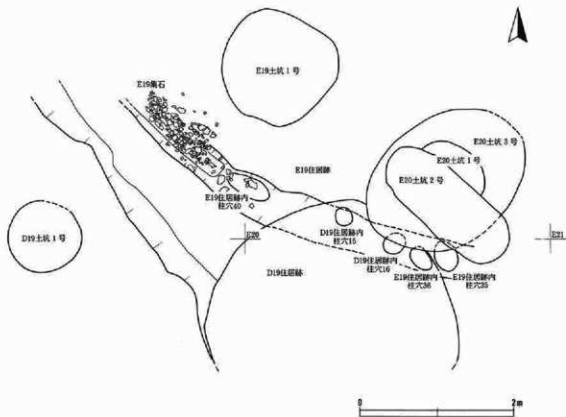
G23柱穴内柱穴5号 E-E'

- 1 10YR2/3 黑褐色土
黑色土・南部浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2~2/3 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 3 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 4 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入

G23柱穴内柱穴6号 F-F'

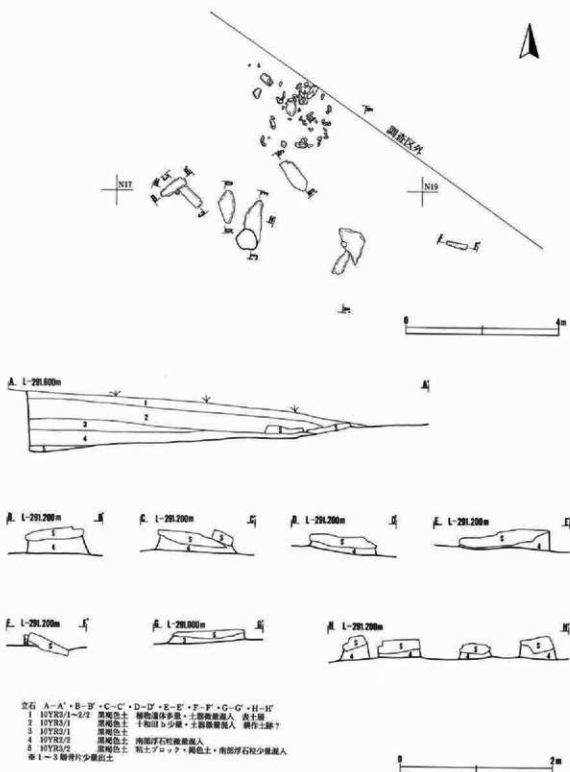
- 1 10YR2/2 黑褐色土
南部浮石粒多量混入
- 2 10YR2/2 黑褐色土
1層より南部浮石粒少量
混入
- 3 10YR2/1 黑褐色土
南部浮石粒多量混入

第110図 G23柱穴列



E10集石 A-A'
 1 10T02/2 黒褐色土
 雑土・フック・陶器片石
 粘土層・炭化物層混入
 基本土層直線相当?

第111図 E10集石



第112圖 M17立石

8 集石・立石遺構 (第111～112写真図版152～154)

集石1基と立石1基を検出している。

E19集石 (第111図、写真図版152)

〈位置・検出状況〉 調査区E19グリッドに位置する。検出状況は、E19住居跡の精査終了後に行ったダメ押し作業中に検出した。

〈平面形・規模〉 径3～20cm大の角礫が200×50cm程の範囲内で密に集められ、南から西へ溝状に延びる。少量ではあるが、後期の土器片が混在する。

〈埋土〉 黒褐色土に覆われていた。

〈出土遺物〉 (第193図1149～1150、写真図版214) 縄文時代後期の土器小片と石器2点が角礫と混在して少量出土している。

石器 (第193図1149～1150、写真図版214) 1149と1150は、角礫と混在して出土したものである。

〈時期〉 E19住居跡より古い時期であることがわかった。よって、晩期以前の可能性が高い。

M17立石 (第112図、写真図版153・154)

〈位置・検出状況〉 調査区東側のM17グリッドに位置する。基本層序II層の除去中に検出した。個々の礫はⅢ～Ⅳ層中に設置 (置かれる) されている。M17立石が所在するM17・18グリッド付近は、遺物包含層の分布範囲ではあるが、周辺からの出土土器量が極めて少ないエリアであった。

〈平面形・規模〉 細かい石片や石刀片が直径2m程の範囲に環状気味に集散し、その外側に径100cm程の角礫が配置される。外側に見られる礫は、配列に規則性などは窺えない。

角礫が配置される内側には、細かい石が環状気味に集散される施設?があるが、本遺構に伴うのかM15溝跡に伴うものかあるいは併せて一つの遺構として捉えられるのか明確な判断はできなかった。

〈礫の設置状態〉 角礫の設置状態は、黒土中なため事実確認が困難であったようであるが (調査記録がなく、図と写真から判断)、明確な掘り込みは見られないことから埋め込んだとは思われない。また、地面に石を突き刺したという様相でもないことから、地面に角礫を置いたといった様相で捉えられる。

〈出土遺物〉 本遺構の周辺からは、検出作業時を含めて遺物の出土が少なく、出土している土器も小片のみであった。

〈時期〉 明確には不明であるが、検出面や周辺出土の土器から晩期と推定される。

9 溝状遺構 (第113図、写真図版155)

調査では明確な性格付けができなかった遺構で、一カ所検出した。

M15溝状遺構 (第113図、写真図版155)

〈位置・検出状況〉 M15～M19・N16～N19グリッド付近において、Ⅲ層の精査中に検出した。周辺の黒土に比べて、明瞭に黒色の濃い土が溝状に広がる。現況地形はほぼ平坦で、本遺構の西端部分付近から西側に向かって穏やかに傾斜する。付近の土層堆積状況は、遺物包含層の層厚が薄い地点である。

当初は、堅穴住居跡を想定して精査を進めたが、堅穴住居跡と認知できる施設の検出がなく、明確な堅穴の掘り込みも確認されなかったことから、自然の落ち込みとして捉えていた。しかし、精査が進むにつれ、埋7中や床面(IV層)からフレーク・チップがまとまって出土したことから、石器製作工場的な施設である可能性も考え、遺構として登録した経緯がある。

〈規模〉 東西方向に長軸を取る様相であるが、東端と西端が途切れ、北側は調査区外なことから全貌は不明である。

〈埋土〉 第113図には表上からの断面図を掲載している。本遺構の埋土として捉えられるのは3層で、黒褐色シルトに粘土ブロックと南部浮石粒が少量混入する。また、局所的ではあるが十和田b火山灰が底面近くまで見られる。

〈出土遺物〉 (第193～195図1151～1159、写真図版214、215) 晩期の土器小片と礫石器が出土した。

石器類 (第193～195図1151～1159、写真図版214、215) 磨石、敲石、凹石がフレーク・チップに混在して出土した。

〈時期〉 晩期と推定される。

10 旧沢跡 (第114図、写真図版156)

旧沢跡は、東部捨て場より1条検出した。

C26旧沢跡 (第114図、写真図版156)

〈位置・検出状況〉 自然現象により地表に掘り込まれた急な側壁をもつ小規模な溝状である。形成原因は降水が地表を流れるとき、わずかなくぼみに集中して浅い溝(リル)が作られ、深さを増すことによるものと思われる。調査区東端部のB26～G27グリッドにかけて検出され、検出面はⅧ層中、標高は286～291mである。E26土坑1号及びC23土坑1号は本沢跡上に作られている。

〈規模〉 全長は調査区外に延びることから不明である。規模は、開口直径60～140cmで平均すると65cm程、底部径10～100cmで平均すると40cm程、深さ20～100cmで、平均すると40cm程である。

〈埋土〉 第114図に掲載した土層断面図は、現地表面までを図示したものである。1層が表土、2層系が十和田a・b火山灰混入層、3層系が遺物包含層、4・5層が中城火山灰混入層、6層が南部浮石層、7層系が沢跡を覆う主埋土で、一部4・5・6層が7層系に流れ込んでいる様相である。7層系は南部浮石粒及び八戸火山灰の二次堆積が確認される。

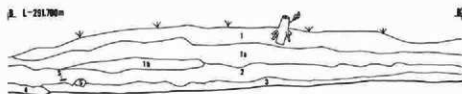
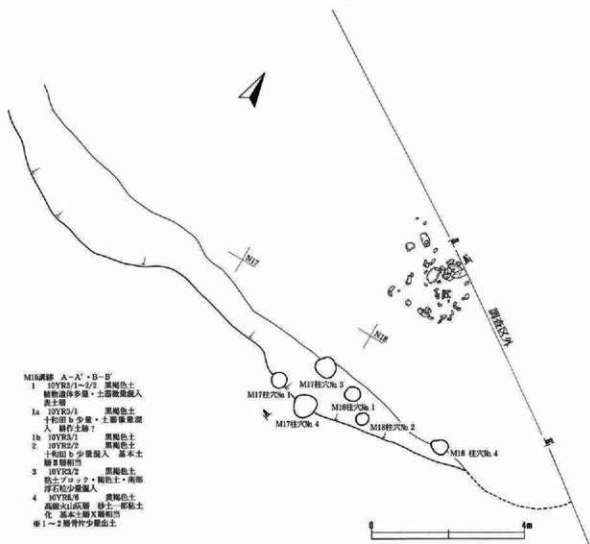
〈出土遺物〉 (第167図、第172図、第195図、写真図版198、202、215) 上方付近で遺物包含層が局所的に流れ込んでいることから、後～晩期の土器や石器は出土しているが、本沢跡の埋没時に伴うと思われる遺物はない。よって、捨て場中の出土と同種の遺物は不掲載とし、単孔土器と土・石製品の掲載にとどめた。

土器 (第167図809、写真図版198) 809は単孔土器で、C25グリッド付近で出土した。

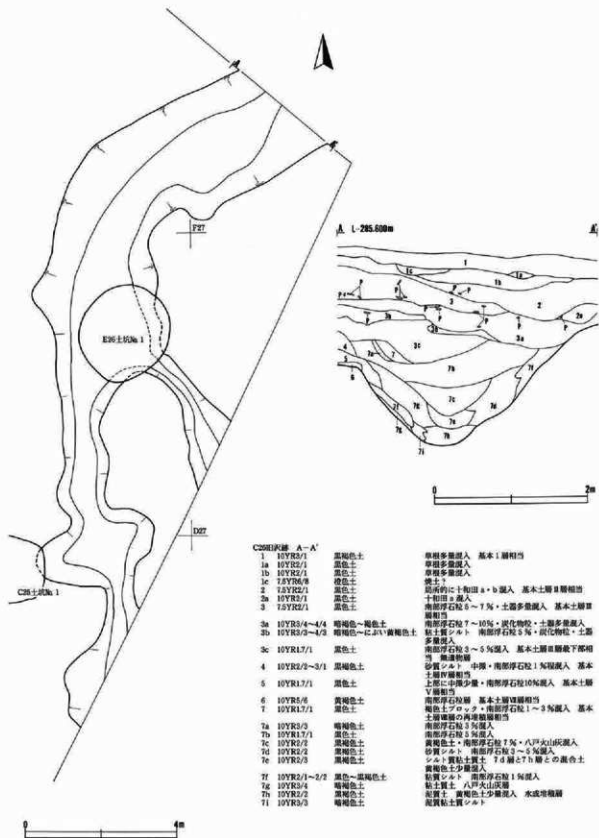
土製品 (第172図906、写真図版202) 下方より三角形土製品1点が出土している。

石器類 (第195図1160、写真図版215) 孔が穿たれた石製品が1点出土している。

〈時期〉 沢の形成された時期について、八戸火山灰層が削られて形成されていることから、八戸火山灰降下時期より新しいことがわかるが、南部浮石粒降下時期との新旧は不明である(※沢跡と南部浮石粒の載り合い関係が明確に把握できる場所がないため、形成時期の下限は明確ではない)。沢の埋没した時期につ



第113図 M15溝状遺構



C27土坑 A-A'

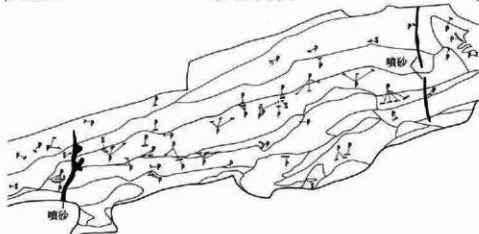
1	10YR3/1	黒褐色土	厚層多量混入 基本土層相当
1a	10YR2/1	黒色土	厚層多量混入
1b	10YR2/2	黒色土	厚層多量混入
1c	7.5YR6/8	褐色土	部分的に十和田 a・b 混入 基本土層B層相当
2	7.5YR2/1	黒色土	部分的に十和田 a 混入
2a	10YR2/1	黒色土	十和田 a 混入
3	7.5YR2/1	黒色土	南部厚石粒 4~7%・土器多量混入 基本土層B層相当
3a	10YR3/4~4/4	暗褐色~褐色土	南部厚石粒 7~10%・炭化物粒・土器多量混入
3b	10YR3/2~4/2	暗褐色~紅い黄褐色土	粘土シルト 南部厚石粒 8%・炭化物粒・土器多量混入
3c	10YR1/1	黒色土	南部厚石粒 3~5%混入 基本土層B層最下部相当 黄褐色層
4	10Y2/2~3/1	黒褐色土	砂質シルト 中層・南部厚石粒 1%混入 基本土層B層相当
5	10YR1/2/1	褐色土	上部に中層少量・南部厚石粒 10%混入 基本土層V層相当
6	10YR5/6	黄褐色土	南部厚石粒層 基本土層V層相当
7	10YR1/2/1	褐色土	褐色土プロット・南部厚石粒 1~3%混入 基本土層V層の再堆積層相当
7a	10YR3/3	暗褐色土	南部厚石粒 3%混入
7b	10YR1/2/1	褐色土	南部厚石粒 3%混入
7c	10YR2/2	黒褐色土	黄褐色土・南部厚石粒 7%・八戸北山(灰)混入
7d	10YR2/2	黒褐色土	砂質シルト 南部厚石粒 3~5%混入
7e	10YR2/3	黒褐色土	シルト質粘土質土 7d層と7b層との混合土
7f	10YR2/1~2/2	黒色~黒褐色土	黄褐色土少量混入
7g	10YR3/4	暗褐色土	砂質シルト 南部厚石粒 1%混入
7h	10YR2/2	黒褐色土	粘土質土 八戸大山(灰)混入
7i	10YR3/3	暗褐色土	黄褐色土少量混入 水成堆積層 黄褐色土質シルト

第114図 旧沢跡

北東 A L-200.00m

F26~F27グリッド

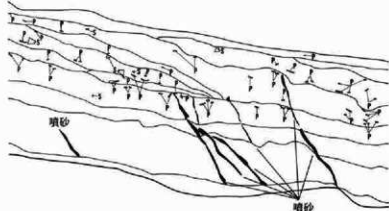
南西



北西 A L-200.500m

G25グリッド

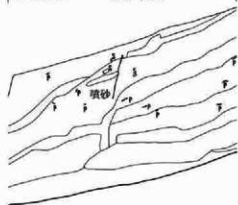
南東



北東 A L-200.900m

D25グリッド

南西

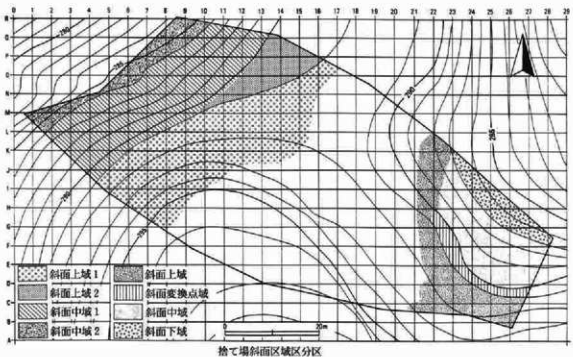
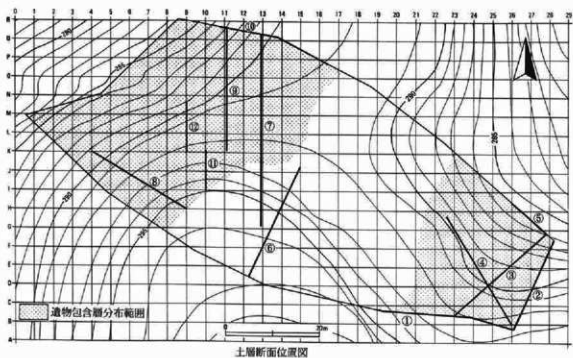


A-A'・B-B'・C-C'

噴砂 10YR6/6~6.5 褐色~黄褐色土
 粘土質土、火山灰の噴き上がった
 ものと考えられる。十和田市志
 は確認できるが、十和田市の新
 田地区は把握できない。調査所見と
 しては、十和田市よりは古く、地
 層より新しいと推定される。



第115図 古地震跡



第116図 捨て場範囲図

いては、第114図に掲載した土層断面の観察から中殿火山灰の二次堆積を含む4層の黒褐色土層（IV層相当）が沢の主覆土（7層）より上位に堆積すること、4～7層は出土遺物が皆無な状況を示すことから、中殿火山灰降下時期（縄文時代前期）よりは古い時期に埋没した可能性が高い。

11 古地震跡（第115図、写真図版157）※断面図のみ

＜位置・検出状況＞ 東部捨て場内のD24・D25グリッド付近及びF25～27・G25～26グリッド付近の上層断面で、液状化現象による噴砂を確認した。幅3cm前後の黄褐色土の筋が上に向かって細く延びる柱状構造を呈し、F25～G25グリッド付近においては平面での分布も確認された（調査終了間際の確認であったため平面の記録は行っていないが、噴砂は北東方向から延びるようである。ただし、震源地の方向が北東かどうかは不明である）。噴砂が確認されたのは東部捨て場の標高288m付近以下で、調査区中央平坦部より5m前後低く、他の地点では確認されない。上記のことから、東部捨て場の最下部付近が地下水の噴き上げられやすい地質的条件を持つことが推定される。

＜時期＞ 地震の発生時期について、基本層序Ⅲ層（後～晩期遺物包含層）を噴砂が載ることから縄文時代晩期より新しいことは断定できる。Ⅲ層より上位に局所的に見られる十和田a火山灰との新旧関係は、第115図の十層断面作成時は噴砂に載られているのかどうか微妙で判断ができた。東部捨て場の精査時の所見としては、平面的に捉えて噴砂が十和田a火山灰より古いと推定していた。ただし、十和田a火山灰まで噴砂が到達しなかった可能性や十和田a火山灰が最堆積層である疑いもあるため、地震発生時期が十和田a火山灰降下年代より新しいか否かは断定できない。北側調査区外（H26・G27グリッド付近）に噴砂が存在するのは明白であるため、将来この周辺に調査の機会があれば、地震発生時期は解明される可能性がある。

＜類別＞ 岩手県内において古地震跡が報告されている発掘調査例は、佐藤嘉広氏が「発掘された地震痕跡」（1996年埋文関係救援連絡会議埋蔵文化財研究会）の中で「久保遺跡」（二戸市福田）、「馬立I遺跡」（二戸市福田）、「馬場野II遺跡」（九戸郡軽米町）、「夏本遺跡」（上閉伊郡大槌町）の4遺跡を取り上げて概要を報告している。

「久保遺跡」では、フラスコビット型陥し穴と溝状陥し穴の一部に地滑り状の断層と地割れが確認されている。時期は縄文時代前期以前である。

「馬立I遺跡」では、溝状の陥し穴10基に断層が認められる。時期は明確ではないが、縄文時代後期以降発生時代中期の間に地滑りが起こった可能性が高い。

「馬場野II遺跡」は、断層と噴砂が確認されている。遺構との関係から少なくとも2時期の地震跡があり、縄文時代後期以降発生時代中期の間に発生したものと1968年5月の十勝沖地震に由来すると推定されるものがある。

「夏本遺跡」では、縄文時代中期の堅穴住居跡に地割れが生じている。時期は古代の遺構とのからみが不明なことから縄文時代中期以降に発生したものとしか同定できない。

最後に、古地震跡の報告例は、大槌町の「夏本遺跡」を除き、何れも県北地方の馬淵川流域の事例で、特筆すべきはこの3遺跡の調査を担当したのは工藤利幸氏である。同氏の微細な観察力と慧眼によって報告された類別と言える。地震跡などの自然現象の報告例が少ない現状は、時間の都合などから割愛される場合が多いことに起因されると思われるが、阪神大震災以降、古地震跡の研究が再認識されている現状もある。調査終了間際の検出であったこともあるが、問題意識の欠落から詳細な記録を残せなかった点は否めない。発

掘調査時に、平面図作成などの事実確認を行うべきではなかったかと筆者は再認識させられたので、調査時の反省も含めて紙面を割き記述した。

12 捨て場（第116～124図、写真図版158～172）

本遺跡に見られる遺物包含層は、縄文時代後期初頭～晩期前葉にかけて形成されたもので、調査区の東西に位置する斜面地に厚く堆積する。遺物を包含する層は、基本層序のⅠ～Ⅳ層で、主体となる遺物包含層はⅢ層に相当する土層である。今回の調査で確認された遺物包含層の分布する範囲は、第116図にスクリーンで示した部分である。

本稿では、調査区の東側斜面地（東部遺物包含層分布エリア）を東部捨て場、調査区の西側斜面地（西部遺物包含層分布エリア）を西部捨て場と呼称した。

先に捨て場の調査方法と整理方法を説明し、次いで東西の捨て場の内容を記述する。なお、遺物については第Ⅴ章で概略を説明することとするが、個々の内容は観察表と実測図・写真図版を参照いただきたい。

（1）捨て場の調査方法と遺物整理方法について

膨大な量の遺物が出土した捨て場は、当時の生産活動を考える上で、貴重な情報を提供する空間と判断される。捨て場からの出土量が出土して多い縄文時代後期初頭（十腰内Ⅰ式の古い段階）～晩期前葉（大洞B C式）までの各時期の土器は、断絶することなく変遷を辿ることが窺える資料である。

捨て場から出土した土器は、層位の上下関係（廃棄単位）が良好とは言い難いものの、完形品（接合による完形品も含め）やほぼ完形品といった残存率の高い土器が多く見られることから、型式学的に良好な資料を提供すると思われる。併せて当該期の多種多様な七製品、石器、石製品が出土したことから、当時の社会性を考える上で貴重な資料と捉えられる。

① 遺物包含層の概要について 3年間の調査で捨て場から出土した遺物の総量は、大コンテナに換算して500箱分以上（概算で550箱分程と思われるが正確な数字ではない）に上る。その大部分が縄文時代後～晩期にかけてのものである。他時期の出土遺物としては、主に東部捨て場より縄文時代前期の土器（出土層位はⅢ層下部～Ⅳ層上部）が大コンテナで約5箱分と西部捨て場から縄文時代早期及び弥生時代の土器が数点出している。

本遺跡の基本層序は、17カ所に入れた試掘トレンチの結果を踏まえて設定を行ったが、その中で南部浮石粒層（Ⅶ層）より上位に堆積するⅠ～Ⅵ層は土色にほとんど差のない黒色～黒褐色土である。黒色を呈する土同士を土色で平面的に区分するのは非常に困難な作業であった。層区分の略は、Ⅱ層中には十和田a・b火山灰の混入、Ⅳ層中には中興火山灰の混入、Ⅴ・Ⅵ層は他の層に比較して南部浮石粒の含有率が高い、というように現在の十和田湖を起源とする各時期のキーとなる火山灰の混入（Ⅰ～Ⅵ層中に含まれる火山灰は、プライマリーな堆積はなく二次堆積によるが、時期大別には有効である）の有無やその含有率により設定（区分）した。それらの層の中で、遺物の出土が確認されたのはⅠ～Ⅳ層である。

遺物の出土が確認されたⅠ～Ⅳ層の中で、本遺跡の主体となる後～晩期の遺物包含層は、Ⅲ層と呼称した層で、基本的には十和田a・b火山灰が混入する黒色土層（Ⅱ層）と中興火山灰が混入する黒褐色土（Ⅳ層）に挟まれる層である。ただし、上記したとおり肉眼で土色からの区分は非常に困難を極めることと、十和

田 a・b 火山灰や中振火山灰がかならずしも捨て場全域（全面）に分布しないため、上下の層と比較して南部浮石粒の含有率の違い（1～7パーセント程含有する）や上下層との遺物の出土量の違いで認識した。遺物包含層の層厚は、斜面の傾斜角度によっても若干の差が見られるが、およそ0.3～2.5m（平均すると1.2m程）の厚さで堆積する。

Ⅲ層は出土する土器の内容から、調査開始初期の段階で縄文時代後～晩期における各時期の文化層（所謂十腰内Ⅰ式土器から大洞B式土器への変遷）が、層位的上下関係（廃棄単位）を示す可能性があるかと判断された（斜面地であるため、全域と言うよりは局所的に）。遺物の取り上げについては、層の細分を試みた上で、できるだけ層位的な取り上げ方法を用いた。

② 遺物包含層の堆積様相について 東西の捨て場を調査（野外・整理）した結果、木遺跡に形成されていた遺物包含層は、良好な層位的上下関係を示さないと結論付けられる。

本来の廃棄単位が堆積土層に反映されていない原因としては、傾斜の急な斜面地であるため、上方の堆積層が流出や地滑り現象などを起こし、所謂再堆積を繰り返したことに起因する可能性が考えられよう。

また、捨て場全体が、黒色～黒褐色土層のため明確な立証はできなかったが、遺構構築に伴う攪乱層や再堆積層に混じり、新しい時代（近現代？）のものと思われる土坑状の攪乱（かき回された跡？）も複数箇所見られた。長倉という集落（地区）は、古今から土偶や土製品が多く見つかることで収集家の間では有名な土地であったと言う伝聞から推定するに、盗掘や宝探し（明治時代以降と思われる）がかなり頻繁に行われていた可能性も考えられよう。

筆者は厳密には西部捨て場の精査に携っていないため、西部捨て場については状況資料から判断して記述するものであるが、実際に精査に携った東部捨て場について所見を述べれば、東部捨て場の「標高290～291m（現況地形）付近」と「E25グリッド付近」は、十和田b火山灰が互層を示すことにより比較的明瞭に再堆積層を確認できた（遺物包含層であるⅢ層が、十和田b火山灰に挟まれている地点が局所的に見られる）。上記した「標高290～291m付近」は、斜面傾斜変換点付近に相当するため、第116図など現況地形段階での等高線を記した図をみるとおり、等高線の間隔が他より狭く、傾斜角度が急である。「E25グリッド付近」は、現況地形からは穏やかな傾斜地と読み取れるが、表土を除去すると急な落ち込みが確認されるなど当初竪穴住居跡と判断した経緯のある地点である。実際の旧地形は傾斜変換が顕著に確認される地点であった。東部捨て場の他の部分については、再堆積と明瞭には把握できなかったが、層の細分を行った上層ベルトを観察する限り、遺物の出土状況から軟堆積とは言えない地点が頻繁に確認された（例としては大洞B式が出土している同一層から十腰内Ⅰ式が出土し、その下位から十腰内Ⅱ式が出土するケースなど）。

ただ、後～晩期の遺物包含層（Ⅲ層）の下層に堆積するⅣ層（前期土器少量出土層）からは、後期・晩期の遺物の出土は皆無であり、Ⅲ層とⅣ層の混在が少ないことは野外調査時から把握できた経緯がある。Ⅳ層について若干説明すると、上色はⅢ層とほぼ同様の黒色～黒褐色土であるが、中振浮石粒（縄文前期に降下した十和田起源の火山灰）の二次堆積が局所的に確認される層である。少量ではあったが、縄文時代前期の円筒下層 d1～d2式に比定される上器群は、東部捨て場のⅢ層最下位～Ⅳ層上位で出土している。Ⅳ層の堆積は、緩斜面地～斜面地には確認されるが、平坦地部分では希薄であった。また、出土土器群のなかで前期に属する土器は、円筒下層 d1～d2式に相当するものが大半（註2）であり、現時点での考古学資料からは同型式土器は中振火山灰より新しいと同定されることから、本来Ⅳ層自体もかなり流出されている可能性が高い上層とも捉えられる。ただし、円筒下層 d式に相当する上器は、Ⅲ層下位より上位の層ではほとん

ど確認されていない（ただし、円筒下層式土器に伴うと思われる半円状偏平打製石器と思われる石器が、一部Ⅲ層上位で出土している）。出土する土器から判断して、Ⅲ層（後～晩期）とⅣ層（前期）の混在が少ないことは明確であるが、Ⅲ層内（後～晩期）のみ十層の破壊や移動が激しいことについては、理論的に説明できかねる。ただ、Ⅳ層の有り方から「生きていた廃棄単位」部分が、調査方法次第ではⅢ層において確認できた可能性は考えられよう。

③ 捨て場遺物の掲載方法について

出土遺物は平成9年度の整理作業の段階で、土器はグリッド毎に、土製品と石器類は器種毎に登録を行った。

層位的な上下関係が破壊されている以上、層位的には遺物の時期変遷をたどれる資料とは判断できない。

よって、層位的な遺物掲載は不採用とした。ただし、各時期の廃棄占地の傾向や遺物の伴関係が窺えるユニットがないのか確認する方法を模索した結果、土器については以下のような掲載方法を採用することとした。

先ず捨て場を東西に大別した上で（観察表上、東部捨て場をGE、西部捨て場GWと略称した）、それぞれの中で地形に沿った形（現況地形での等高線を基本的な目安とし、現場で実測を行った地形に直交する土層断面上でのⅢ層の層厚を検討要素とした）で区域を設定し、設定した同区域の中ではグリッド順に土器を掲載することとした。1つのグリッドが、複数区域に跨がる場合について、トータルステーションのデーターがある土器はデーターを参照し、データーのない土器については3つに大別した層位（Ⅲ層上位・中位・下位）を基準に判断した。なお、等高線の間隔に着眼したのは2点の理由からである。

- 上の流出が激しいエリアと比較的穏やかなエリアの存在を想定。
- 地形の傾斜方向と調査で設定したグリッド（平面直角座標系第X系）の直角方向にずれが生じる（註3）ことから、土の流出する方向を考慮してグリッドより等高線同士の範囲を優先。

＜東部捨て場について＞ 東部捨て場は、傾斜に応じて下記の4区域に区分し、その区域の中でグリッド順（例としてはB21、B22…）に掲載する。

「斜面上域」 標高291m以上の範囲を主体に遺物包含層の分布する境界付近までを同エリアとする。

「斜面変換点域」 標高290～291m付近において、等高線の間隔が特に狭くなる付近を同エリアとする。下位の南部浮石粒層あるいは八戸火山灰層まで掘り下げると、より顕著に急傾斜となる地点である。

「斜面中域」 傾斜変換点域の下方で、等高線の間隔が均等になるエリアである。標高287～289m付近に相当する。遺物の山土が最も多い区域である（ただし、下域は調査区外にも相当広がりそうなので、調査した範囲での見解となることを追記する）。

「斜面下域」 調査地においては、斜面の最も下方に位置するエリアで、標高285～287m付近に相当する。

＜西部捨て場について＞ 西部捨て場は、4区域に区分し、その区域の中でグリッド順（例としてはL1、L2…）に掲載する。斜面上方域は290～291mの等高線の間隔が特出して広い範囲を一つのエリアとして捉え、2区分した。その下方の標高282～290mにかけては、等高線の間隔が均一化を示すため、機械的に上方を中域1、下方を中域2とした。

「斜面上域1」 291m以上の範囲から遺物包含層の分布する境界付近までを同エリアとする。

「斜面上域2」 290～291m付近において、等高線の間隔が特出して広くなる付近を同エリアとする。

「斜面中城1」 標高282～290mにかけては、等高線の間隔が均一化を示すため機械的に2つに大別し、286m以上の範囲を同エリアとする。中城1・2と区分した段階では遺物の出土状況を意識した設定ではなかったが、結果として中城2からは遺物の出土が皆無に等しい結果となった。

「斜面中城2」 斜面中城の下方の無遺物地帯を斜面下方域とする。標高282～286m付近に相当する。

(2) 捨て場の層名について(報告書記載上)

捨て場の層名について、本遺跡の基本層序はローマ数字(I、II、III・)で標記してきたが、捨て場内に設定した土層ベルト出土遺物と上層ベルトに対比できる状態で取り上げた遺物については、個々の層名はアラビア数字(1、2、3・)で行い、細分したのものについてはアルファベットを付けて区分する。アルファベットは、東部捨て場が小文字(a、b、c・)、西部捨て場が大文字(A、B、C・)を採用し、遺物の観察表の層位の項もそれに準じている(例としては、II(2a)とかIII(3B)といった具合である)。遺物包含層であるIII層系を例に説明すると、東部捨て場は3、3a、3b、3c・、西部捨て場は3A、3B、3C・といった標記である。

遺物の掲載については、東西の捨て場毎とする。土器については、現況地形の等高線の分布から東西の捨て場とも上述した区域毎順に掲載する。第116図捨て場斜面区域区分図を参照願いたい。

補足資料として、第120図～124図は、第117～119図に示した12本の土層断面図の内、5本の土層断面を部分的に抽出して拡大した図である。それらの図に添付した土器は、細分層位で取り上げた中から再抽出またはトータルステーションで取り上げた土器の一部を細分層位に対比させ合成を試みたものである。

(3) 東部捨て場(第116～118図・第120～121図、写真図版158・159・161～168)

〈位置・概要〉 C21グリッドとK23グリッドを結んだラインより東側が、東部捨て場と呼称する範囲である。土坑や柱穴状土坑の密集する調査区中央部の平坦地との傾斜変換点で、上記したC21グリッドとK23グリッドを結んだライン付近に当たり、平坦部と比較してII～VI層(黒土)の堆積が急激に厚くなり、また、斜面下方に向かうほどIII層の堆積が厚くなる。傾斜方向は南西～北東方向に向かって傾斜し、標高は斜面上方付近が290～293m、斜面下方付近が285～287mである。

第117～118図の土層断面①～⑤が東部捨て場の土層断面である。斜面の傾斜角度は平均すると20～25度で、上記した「斜面変換点付近」が30～40度と急勾配になる。また東部捨て場内東端部分のC26～F27グリッド付近にかけて、III層(八戸火山灰)上面で旧沢跡を検出した。

〈面積〉 平面的な広がり約700㎡弱である。南西～北東方向に傾斜し、斜面下方に向かうにつれ遺物量が増加する傾向が窺えることと、等高線の配列から推測すると斜面下方にあたる調査区外の北東側には、かなりの密度の遺物包含層が広がっていることが予想される。また、斜面上方の南側についても、北東側ほどではないまでも遺物包含層が分布するのは確実である。今回調査した東部捨て場の面積は、全体の2/3以下と推定される。

〈土層の堆積〉 第117～118図に掲載する5本が、東部捨て場の土層断面である。III層系が縄文時代後～晩期の遺物包含層である。

基本層序I層系は、1～1h層に細分した。表土、攪乱層、盛土、耕作土、III層の再堆積上などである。III層の再堆積上については、II層系より上位に堆積するものはI層系に含めた。I層からの遺物出土量は、若干地点によっても相違があるが、基本的に少量である。

基本層序Ⅱ層系は、2～2c層に細分した。十和田a・b火山灰の混入（非ブライマリー）が認められる土層を基本的に2層系とした。十和田a火山灰と十和田b火山灰が整堆積を示す地点はなく、また大部分がブロック的に確認される場合がほとんどである。南部浮石粒の含有率は、3%以下である場合がほとんどで、Ⅲ層系より低い傾向を示す。出土遺物量はⅢ層系について多く、割合的にはⅢ層系に比べて晩期の土器が後期の土器より高い。

基本層序Ⅲ層系は、3～3w層に細分した。南部浮石粒を3～7%含有する黒褐色土層である。堆積様相は、等高線と水平気味に設定した土層断面（第117図④の図など）を観察すると、レンズ状を呈することから概ね自然堆積に取れるが、3r層をはじめ一目瞭然に再堆積層（土）と把握できる層が多く見られる。再堆積層として捉えられる層が、自然的要因か人為的要因かは判断できかねる場合が多かった。所見的になるが、捨て場として機能されていた時期は、遺構構築などに伴い遺物とともに上も頻りに捨てられていたと思われるが（人為層）、永年の時間の中で自然的な堆積様相になったと思われる。

基本層序Ⅳ層系は、4～4h層に細分した。上述したとおり中環火山灰（アズナと地元で呼ぶように砂状を呈する）を混入する黒褐色土層で、同層上位で円筒下層土器が出土している。

基本層序Ⅴ層系は、5～5o層に細分した。南部浮石粒を10～30%含有する黒褐色土層で、基本的には遺物は出土していない。早期の後半から前期前半に形成された土層と推定される。

基本層序Ⅵ層系は、6～6b層に細分した。Ⅴ層より南部浮石粒の含有率が高い黒褐色土層で、Ⅴ層とⅥ層（南部浮石粒層）の漸移的層と思われる。基本的には遺物は出土していない。

基本層序Ⅶ層系は、7～7a層に細分した。南部浮石粒層で縄文時代早期に降下したテフラで、本遺跡からはⅠ～Ⅲ層で同テフラより古いと推定される早期の土器が微量出土しているが、同層下位からの出土遺物はない。

基本層序Ⅷ層系は、8～8b層に細分した。八戸火山灰層である。

占地震に伴う噴砂は、9層と命名して一括する。

10層は、調査区境南側で作成した土層断面①において確認された調査区外に延びる堅穴住居の埋土と思われる土層である。今回の調査では平面的には把握できなかったため、遺構登録はしていない。

＜包含層中に構築されている遺構＞ 東部捨て場上方付近には、晩期と推定される住居跡（B21・22、C22・23・24グリッド付近）や掘立柱建物跡などが、包含層中に構築されている。

調査区外南側にはかなりの密度で住居跡が存在する可能性があり、また上述したとおり遺物包含層は調査区外の北東側に広がることは明確である。旧沢跡は、C26～F27グリッド付近にかけて、Ⅷ層上面で検出した。沢跡に堆積する埋土の様相から、縄文時代前期以前に埋没した可能性が高い。

＜その他＞ 斜下方付近のF26・27、G25・26グリッドから地震に起因すると思われる液状化現象（噴砂）がⅢ層中で確認された。包含層を載っていることから縄文時代晩期以降に大規模な地震が発生したと推定される。また、沢跡の東側付近で、数カ所の雨裂跡が確認された。土層断面②や③に見られる土坑状を呈する落ち込みが雨裂跡である。

＜出土遺物＞（第196～241図1201～1651、第297～307図2180～2424、写真図版216～247、282～305、307～360） 東部捨て場からは、大コンテナ250箱分以上の遺物が出土した。土器類や石器類に混じり炭化物、焼土ブロック、獣骨片が併せて出土している。個々の遺物の内容は観察表と実測図を参照いただきたい。

土器（第196～241図1201～1651、第297～307図2180～2424、写真図版216～247） 東部捨て場からは、コンテナ約250箱分の土器が出土した。その中から451点（第三次登録土器）を掲載する。完形及びほぼ完形のも

のが多く、残存率50パーセント以上のものだけで1150個体に及ぶ。それらに分類の資料となりそうな破片を含め一次登録し、分析対象とした。以下に同一グリッド・同一層位のまとまりを感じるものを抽出してみる。1203の切断蓋付き壺は、上位の3 a層と下位の3 e層から別々に出土した。3 a層と3 e層は、間に3 c層(約40cmの層厚)を挟む。1211と1221は同グリッドで3 b層から出土している。1229と1231は同グリッドで3 a層から出土している。1462の面付き注口土器?は、1458、1461と同一層で出土している。1467~1471、1482~1486、1611~1613はそれぞれ一括気味での出土である。

土製品 (第297~307図2180~2424、第318~326図、写真図版282~305)

石器・石製品 (第327~330図2834~2931、第334・335図3031~3050、第337・338図3080~3109、第340~342図3133~3156、第346図3181~3187、第347図3194~3209、第348図3210~3215、第349~354図3224~3272、第360図3320~3324、第362図3338~3347、第363図3352、第364~369図3359~3426、第373図3471、第374・375図3477~3510、第376~378図3539~3549、第380図3558~3370、第381~383図3592~3596・3599~3604、第385・386図3618~3626、第387図3640~3641、第388図3643~3645、第389図3651・3652、第390・391図3658~3670、第393図3685・3688・3689、第394~398図3700~3733、第400図3759・3760、写真図版307~360)

植物 (写真図版360)

(4) 西部捨て場 (第118~119図・122~124図、写真図版160・169~172)

<位置・概要> 西部捨て場は、概ねG 8グリッドとO18グリッドを結んだラインより西側の範囲である。

傾斜方向は南東から北西方向で、標高は斜面上方付近が290~294m、斜面下方付近が284~286mである。斜面の傾斜角度は平均すると15度程度で、東部捨て場より幾分勾配が穏やかである。

<面積> 平面的な面積は1100㎡強である。遺物は、真北方向に向かうにつれ出土量が増加し、斜面中城2とした調査区北西端付近からの出土は皆無となる。調査区外の北側付近(O12~P14付近より北側)からの遺物量や等高線の有り方から推定して、遺物包含層の主体は、北側調査区外に広く分布する可能性がある。

<土層の堆積> 第118~119図に掲載する6本が、西部捨て場の土層断面である。個々の層の土質や南部浮石粒の含有率などは、東部捨て場と様相がほとんど変わらないため、記述は割愛する。

基本層序I層系は、1~1 E層に細分した。

基本層序II層系は、2~2 A層に細分した。

基本層序III層系は、黒褐色シルトを主体とする遺物包含層である。南部浮石粒は概ね1~3%含有される。上位相当を3~3 J層に細分し、中位相当を3 Z層と呼称した。遺物は上位層からの出土が圧倒的に多い。炭化物や焼土粒、獣骨片を含む

基本層序IV層系は、4層と呼称する。中礫火山灰を含有する層である。4層の中で細分は行っていない。

基本層序V層系は、5層と呼称する。南部浮石粒を10~30%含有する黒褐色土層で、基本的には遺物は出土していない。早期の後半から前期前半に形成された土層と推定される。

基本層序VI層系は、6層と呼称する。V層より南部浮石粒の含有率が高い黒褐色土層で、V層とVI層(南部浮石粒層)の漸移的層と思われる。基本的には遺物は出土していない。

基本層序VII層系は、7層と呼称する。南部浮石粒の純層である。

基本層序VIII層系は、8層と呼称する。八戸火山灰層である。

基本層序IX層系は、9層と呼称する。八戸火山灰より下位に堆積する火山灰層である。

<包含層中に構築されている遺構> 西部捨て場内は、比較的傾斜角度の穏やかなL13・N14グリッド付近

に土坑や柱状土坑及びK11住居跡（直径約16mの大形の住居跡で、同住居跡プランの1/3程が包含層中である。）が構築されているものの、遺構構築が密ではなかった。

〈出土遺物〉（第242～295図1652～2170、写真図版247～280、284～306、308～360） 土器類・石器類などの遺物と炭化物、焼土ブロック、獣骨片が出土している。個々の遺物の内容は観察表と実測図を参照蔵きたい。

土器（第242～295図1652～2170、写真図版247～280） コンテナ230～250箱分が出土した。その中から519点を掲載する。完形及びほぼ完形のものも多く、残存率50パーセント以上のものだけで総数が約1156個体（註4）に及ぶ。東部捨て場と比較して、十腰内V式期の土器が多い傾向が窺える。以下に同一グリッド・同一層位のみをまとめるものを抽出してみる。1675～1677、1686～1689は一括気味での出土である。1769と1771は同一層出土。1779～1795については共伴気味での出土。L12グリッド出土の1819～1823・1826・1827は、後期中葉期がまとまって見られる。1831～1849はM10グリッドⅢ層上位出土で、一括気味の資料である。1850～1859はM11グリッド出土のまとまった資料と捉えられる。1862、1864、1866は、M13グリッド3A層出土一括である。1868の面人付き香炉形土器は表土からの出土である。1870、1871、1876はN13グリッド3A層出土一括であるが、個々の土器を見ると時期差があるようであり、混在している様相が窺える。1949～1953は一括気味の資料であろう。2038～2070はP14グリッドからのほぼ一括資料である。2080～2084はM9グリッド出土のまとまった資料である。

土製品（第308～317図2405～2544、第318～326図、写真図版284～306）

石器・石製品（第330～333図2932～3037、第335～336図3054～3077、第338～339図3110～3129、第343～345図3157～3179、第346図3188～3192、第347図3205～3208、第348図3216～322、第354～359図3273～3319、第360～361図3325～3335、第362図3348～3349、第363図3353、第369～371図3427～3455、第373図3472・3473、第375図3511～3536、第378・379図3552～3556、第380・381図3579～3588、第382図3597・3598、第383・384図3606～3614、第386図3627～3635、第387図3642、第388図3646～3648、第389・390図3653～3657、第391・392図3671～3684、第393図3686・3687、第394図3692～3695・3697・3698、第398・399図3734～3753、第400図3761～3776、写真図版308～360）

鉱物（写真図版360）

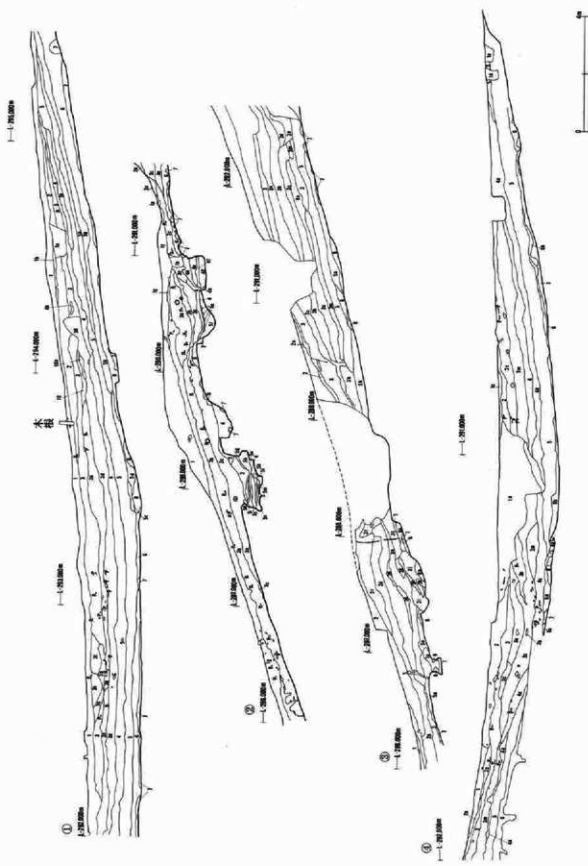
〈註〉

（註1） 遺物包含層内に構築されている住居跡や掘立柱建物跡も多く、また検出・精査の作業も黒色土中の為、難航極まりない状況であった

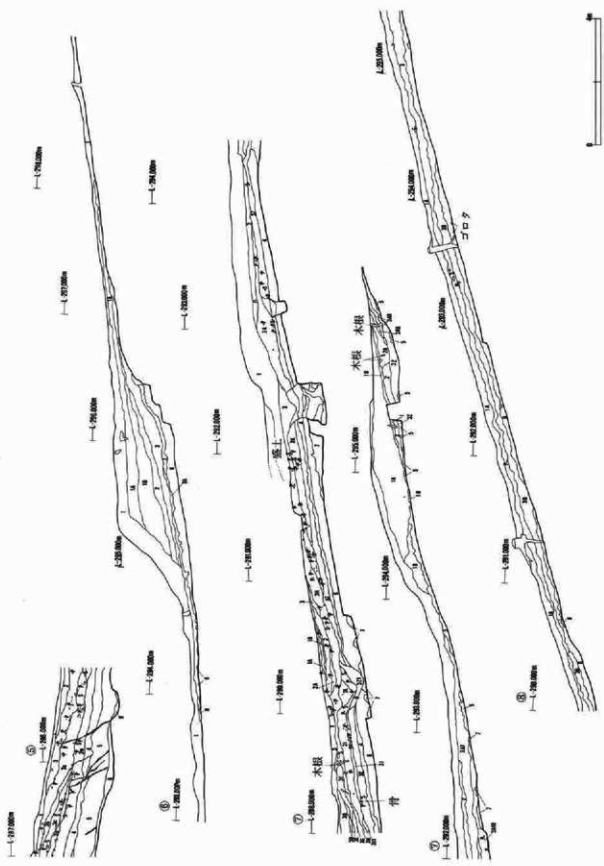
（註2） 西部捨て場から円筒下層式土器群より古い土器が数点出土しているが、東部捨て場からは出土していない。尚、中環火山灰は、科学的分析からは5300～5500年前に降下したと捉えられている。大日向Ⅱ遺跡第6～8次調査で検出されたQⅣ12住居跡などの事例から判断して、円筒下層a式が中環火山灰より新しい。

（註3） 東西の捨て場とも、傾斜方向とグリッドの直角方向は約45度のずれを生じる。

（註4） 東西の捨て場を比較すると、全般に西部捨て場の方が残存率の高い土器が多い。ただし、接合作業を指示・担当した中川によると、西部捨て場から接合作業に着手し、後に東部捨て場の接合を行った関係により、整理時間が切迫気味となった後半に着手した東部捨て場の方が、全般的に接合を関引かざるをえなかったことに起因する可能性が高い。



第117図 東部捨て場土層断面



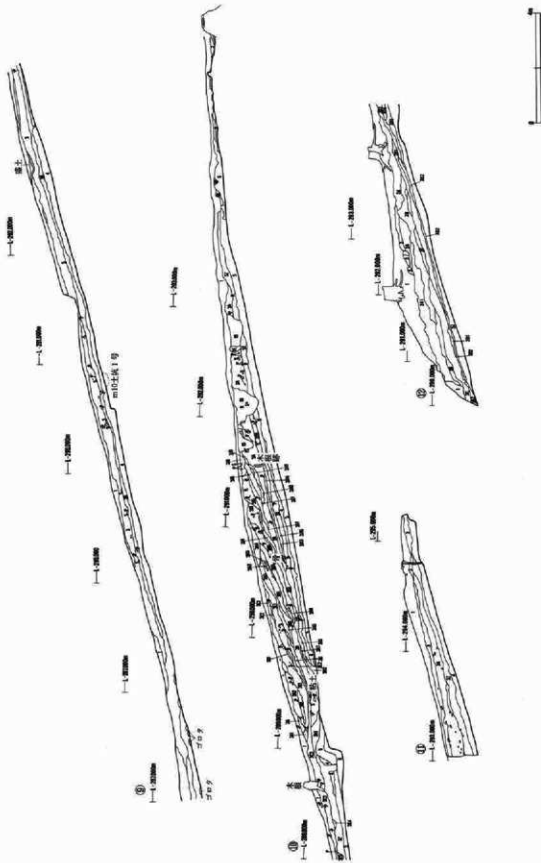
第116図 東部・西部捨て場土層断面

＜東部捨て場土層注記＞

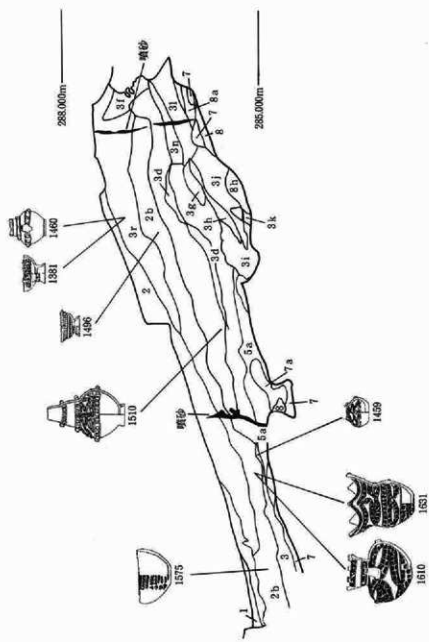
- 1 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性弱 しまり弱 腐植多量・南部浮石混入
- 1a 10YR17/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり中 黒褐色土・黒褐色土・南部浮石少量混入 混乱層
- 1b 10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 木屑多量混入
- 1c 10YR3/5 暗褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒7～10%混入
- 1d 10YR17/1 黒色土 シルト 粘性弱 しまり弱 耕作層による覆土?
- 1e 10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒3～5%混入 微孔or土坑
- 1f 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまりやや中 黄褐色土・南部浮石粒10%・八戸火山灰46%混入 礫土
- 1g 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 木屑多量混入 表土 耕作土
- 1h 10YR17/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり弱 南部浮石粒3%以下混入 粒穴?
- 2 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 シルト 粘性やや中 しまり弱 十和田a・b少量・南部浮石粒3～5%・土器混入
- 2a 10YR3/5 暗褐色土 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 十和田b混入
- 2b 10YR2/2～3/1 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 斜面下方に十和田a多量混入
- 2c 10YR3/1 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒15%粒・木屑粒混入
- 3 10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒3～5%・炭化物粒少量混入
- 3a 10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒7～10%・炭化物粒・土器多量混入
- 3b 10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性やや中 しまりやや中 南部浮石粒1～3%混入
- 3c 10YR3/5 暗褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒5～7%・炭化物粒・土器少量混入
- 3d 10YR17/1～2/1 黒色土 粘土質シルト 粘性強 しまりやや中 南部浮石粒3～5%混入
- 3e 10YR3/4 暗褐色土 シルト 粘性強 しまり中 南部浮石粒5%・炭化物粒・土器混入
- 3f 10YR3/5 暗褐色土 シルト 粘性中 しまり弱 黒腐層再堆積
- 3g 10YR2/5 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり弱 暗褐色土との混合土 南部浮石粒3%・炭化物粒・土器混入
- 3h 10YR3/4 暗褐色土 シルト 粘性強 しまり中 3e層の再堆積層 水分に富む
- 3i 10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性やや中 しまりやや中 3f層と3e層との混合土 水分に富む
- 3j 10YR3/4 暗褐色土 シルト 粘性強 しまり中 3e層と6a層との混合土
- 3k 10YR2/1 黒色土 泥炭土 粘性強 しまり弱
- 3l 10YR2/2～2/3 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり弱 3f層相当?
- 3m 10YR2/2 黒褐色土 砂質シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒3～7%・炭化物粒・骨片混入
- 3n 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒1～3%・土器混入
- 3o 10YR2/2～3/1 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒5%・粘土粒混入B層or住居埋土
- 3p 10YR2/2～2/1 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒7～10%・炭化物粒混入B層or住居埋土
- 3q 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒5%・黒褐色～暗褐色土ブロック・焼土30%混入 B層or住居埋土
- 3r 10YR3/1 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまりやや中 南部浮石粒7～10%・土器少量混入 B層再堆積層
- 3s 10YR3/1～2/2 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまりやや中 南部浮石粒5%混入 B層再堆積層
- 3t 10YR2/1～3/3 黒褐色～暗褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒5%混入 B層 再堆積層
- 3u 10YR2/2～3/5 黒褐色～暗褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 南部浮石粒3%・炭化物粒・土器多量(後熟期含む)混入
- 3v 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり弱 3d、3f(の新堆積 南部浮石粒3%・土器少量(後熟期含む)混入
- 3w 10YR17/1 黒色土 シルト 粘性やや中 しまりやや中 南部浮石粒5～5%・1段に土器(後熟期含む)混入中～7段に黒褐色土混入
- 3x 10YR3/5～6/2 暗褐色土～黒褐色土 粘土質シルト 粘性中 しまり弱 南部浮石粒5%・炭化物粒・土器多量(後熟期含む)混入
- 4 10YR2/2～3/1 黒褐色土 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 中層山灰・南部浮石少量混入
- 4a 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりほぼ弱 中層山灰多量・南部浮石粒3～7%混入
- 4b 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性弱 しまり弱 中層山灰少量・南部浮石粒3%混入
- 4c 10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒15%粒・炭化物粒混入
- 4d 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり中 黄褐色土・八戸火山灰30%混入 人為堆積層?
- 4e 75YR11/1 黒色土 泥質粘土質シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒殆ど含まず
- 4f 75YR17/1 黒色土 泥質粘土質シルト 粘性中 しまり弱 南部浮石ブロック・八戸火山灰ブロック混入
- 4g 10YR2/1 黒色土 粘土質シルト 粘性中 しまり弱 砂土混入
- 4h 10YR3/1 黒褐色土 粘土質シルト 粘性中 しまり弱 褐色土・砂土混入
- 5 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒10%混入
- 5a 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまりやや中 南部浮石粒15～20%混入
- 5b 10YR17/1～2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒20%混入
- 5c 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性やや中 しまりやや中 南部浮石粒10%混入
- 5d 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒15%混入
- 5e 10YR6/6 可塑性土 シルト質礫石層 粘性中 しまり中 南部浮石ブロック層 黒褐色土混入
- 5f 10YR3/1 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒10%混入
- 5g 75YR2/2 黒色土 シルト 粘性中 しまりやや中 南部浮石粒20%混入
- 5h 75YR17/1 黒色土 シルト質泥質砂質土 粘性やや中 しまりやや中 南部浮石粒3～5%混入
- 5j 75YR17/2 黒色土 シルト質礫石層 粘性やや中 しまり弱 南部浮石粒30%混入
- 5k 75YR17/1 黒色土 シルト質泥質砂質土 粘性やや中 しまりやや中 南部浮石粒3～5%混入
- 6 10YR2/1～2/3 黒色～黒褐色土 砂質シルトと泥質シルト質土の互層 粘性やや中 しまりやや中 砂土・南部浮石粒5～7%混入
- 6k 10YR2/2～3/1 黒色土 泥質シルト質土主体に砂質シルト混合 粘性中 しまり中 南部浮石粒3%以下混入
- 6m 10YR2/1～3/1 黒色～黒褐色土 泥質シルト質土 粘性中 しまり中
- 6n 10YR17/1～2/1 黒色土 シルト 粘性中 しまり弱 若干水分に富む 南部浮石粒5～7%混入
- 6o 10YR3/2 黒褐色土 粘土質シルト 粘性中 しまり中 南部浮石粒10～15%混入
- 6p 10YR2/5 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒30～40%混入
- 6a 10YR3/1 黒褐色土 シルト 粘性やや中 しまり強 南部浮石粒20～25%混入
- 6b 10YR3/1 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり強 南部浮石粒15%混入
- 7 10YR7/5 黄褐色土 南部浮石粒層
- 7a 10YR4/6 褐色土 礫石層 南部浮石粒成色層 埋積再堆積層
- 8 10YR3/5 暗褐色土 粘土質土 粘性強 しまり中 八戸火山灰層 南部浮石粒15%混入
- 8a 10YR2/2 黒褐色土 粘土質土 粘性中 しまり中 八戸火山灰再堆積層
- 8b 10YR3/5 暗褐色土と10YR5/6 暗褐色土との混合土 粘土質土 粘性中 しまりやや中 炭化物粒少量混入 埋積再堆積層
- 9 10YR4/6～5/8 黄褐色～褐色土 粘土質土 礫砂 八戸火山灰の噴き上がったものとの判定
- 10 10YR2/2～2/3 黒褐色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒10%・炭化物粒・土器 (本住居から大洞B1古戦層相)混入 B2住居縁状3号壁土
- 10a 10YR2/1 黒色土 シルト 粘性弱 しまり中 南部浮石粒5～7%・炭化物粒少量混入 B2住居縁状3号壁土

〈西部捨て場土層注記〉

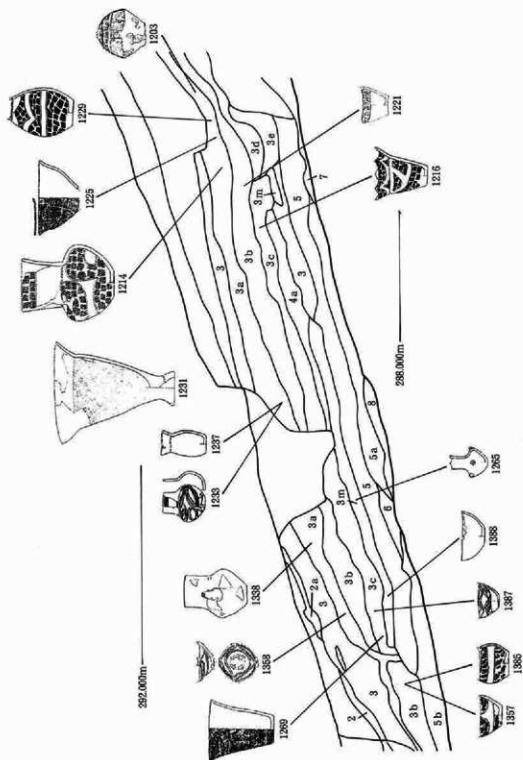
1	10YR2/1	黒色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量・遺物少量混入	表層の黒土層(腐植土)	局所的に耕作土層
1A	10YR2/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量・木根多量混入	南部浮石粒混入層	局所的に人為的攪乱層
1B	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	十和田市少量混入	耕作土層?	
1C	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱			
1D	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	遺物多量混入	3A層の覆土と再堆積した層	
1E	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり強	3A層のブロック	褐色土ブロック・焼土粒・炭化物粒混入	表層層
2	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	ウツリ土(少量)	十和田市・南部浮石粒混入層	下段に灰白出された砂七ブロックが見られる
2A	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	十和田市少量・南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒混入		
3	10YR2/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒・局所的に焼土・炭化物混入		
3A	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒多量・遺物・骨片微量混入		
3B	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	暗褐色土ブロック・南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒少量・遺物・骨片微量混入		
3C	7.5YR2/2	暗褐色土	シルト	粘性中	しまり中	南部浮石粒3%・焼土粒少量・炭化物混入		
3D	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱			
3E	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒微量混入		
3F	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒との混合土	焼土粒微量・炭化物粒・遺物混入	
3G	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	汚れた褐色土との混合土	焼土粒少量・炭化物粒・土器混入	
3H	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量(細かいもの多い)・焼土粒少量・炭化物粒・遺物多量(後期中～末)・骨片多量混入		
3I	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒との混合土	炭化物粒多量・土器(後期中～末)・骨片多量混入	
3J	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒微量・焼土粒少量・炭化物粒・遺物多量(後期中～末)・骨片多量混入		
3K	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性中	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒少量・土器混入	3I層より粘性ややあり	
3L	10YR2/2-3/3	黒褐色～暗褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒微量・遺物(後期中)混入	3A層より南部浮石粒少ない	
3A1	7.5YR2/2-10YR2/3	暗褐色～暗褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	細かい南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒多量・土器混入		
3A1	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	焼土粒少量混入	しまり中	南部浮石粒3%弱混入
3A2	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	焼土粒・炭化物粒多量・土器混入		
3A3	10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土中に黒褐色土混入	焼土粒・炭化物粒微量混入	
3A4	10YR2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱			
3A5	10YR2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	炭化物粒少量混入		
3A6	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	炭化物粒少量混入		
3A7	10YR2/2-3/3	黒褐色～暗褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	3-2層より南部浮石粒多量・斜面向下に遺物混入		
3A8	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土・暗褐色土・南部浮石粒混入		
3A9	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	3A8層より褐色土・土器少量混入		
3A10	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	暗褐色土との混合土	焼土粒・炭化物粒・土器混入	
3B1	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性中	しまり中	南部浮石粒3%混入	表層中位相当	
3C1	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土・焼土多量・炭化物粒多量・灰多量・土器(後期中～晩期初期)混入		
3C2	10YR2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土多量混入		
3C3	10YR2/2-2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土ブロック・炭化物粒少量混入	3C1層相当?	
3C4	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒3%混入		
3C5	10YR2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒3%混入		
3D1	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性中	しまり中	径3-10mmの南部浮石粒3%・焼土粒多量・炭化物粒・土器少量(後期中～末)混入		
3D2	5YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性中	しまり強	南部浮石粒3%・焼土粒多量・炭化物粒・土器少量(後期中～末)混入		
3D3	10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性やや中	しまり強	南部浮石粒3%以下混入	炭化物粒・土器少量混入	表層下位相当
3D4	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性やや中	しまり中	南部浮石粒3%以下混入	表層下位相当	
3D5	10YR2/4-4/6	暗褐色～褐色土	シルト	粘性中	しまり強	径3-10mmの南部浮石粒3%以下混入	表層下位位相当	
3E1	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土との混合土	焼土粒少量・炭化物粒少量混入	
3E2	10YR2/3	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	焼土粒・炭化物粒多量混入		
3E3	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	褐色土粒少量・炭化物粒少量・土器少量混入		
3E4	5YR4/5	赤い赤褐色土	粘性やや中	しまり強	焼土層	人為堆積		
3E5	5YR4/5	赤い赤褐色土	粘性やや中	しまり強	焼土層	人為堆積		
3E6	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	細かい南部浮石粒多量・焼土粒・炭化物粒微量混入	3E1層相当?	
3E7	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	炭化物粒多量・土器混入	3E1層相当	
3E8	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	汚れた細かい南部浮石粒多量混入		
3J1	10YR3/1	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒・土器混入	3I層より粘性ややあり	3J層相当
3J2	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒・土器少量(後期中～末)混入		
3J3	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒・土器少量(後期中～末)混入		
3J4	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒・土器少量(後期中～末)混入		
3J5	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量・炭化物粒微量混入		
3J6	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量混入	堆積?	
3J7	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒・炭化物粒多量・褐色土少量・土器混入		
3J8	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	3J7層より南部浮石粒少量・炭化物粒微量混入		
3J9	10YR3/3	暗褐色土	粘土質シルト	粘性やや中	しまりやや強	褐色土・黒褐色土・焼土粒混入		
3J10	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	3J7層より南部浮石粒少量・炭化物粒微量混入		
3J11	10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土・南部浮石粒・焼土粒・炭化物粒少量混入		
3J12	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	褐色土・南部浮石粒少量・焼土粒少量・炭化物粒・土器少量(後期中)・骨片多量混入		
3J13	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒少量・炭化物粒微量混入		
3J14	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒少量・焼土粒・炭化物粒微量・土器混入		
3J15	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒・炭化物粒微量混入		
3J16	10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒混入		
3J17	10YR2/2	黒褐色土	シルト	粘性弱	しまり弱	南部浮石粒混入		
3Z	10YR2/1	黒色土	シルト	粘性中	しまり中	局所的に中層火山灰・汚れていない南部浮石粒混入		
4	10YR2/2	黒褐色土	砂質シルト	粘性弱	しまりやや強	中層火山灰・南部浮石粒少量混入		
5	10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒混入		
6	7.5YR2/2-10YR2/3	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒多量混入		
7	7.5YR5/6	暗褐色土	シルト	粘性弱	しまりやや強	南部浮石粒多量混入		
8	7.5YR4/6	褐色土	ローム	粘性中	しまり強	南部浮石粒?混入	八戸火山灰?局所的に斜面の露出で自然移動?	
9	10YR5/6	黄褐色土	ローム	粘性中	しまり強	砂土層位?局所的に火山灰・高層火山灰?		



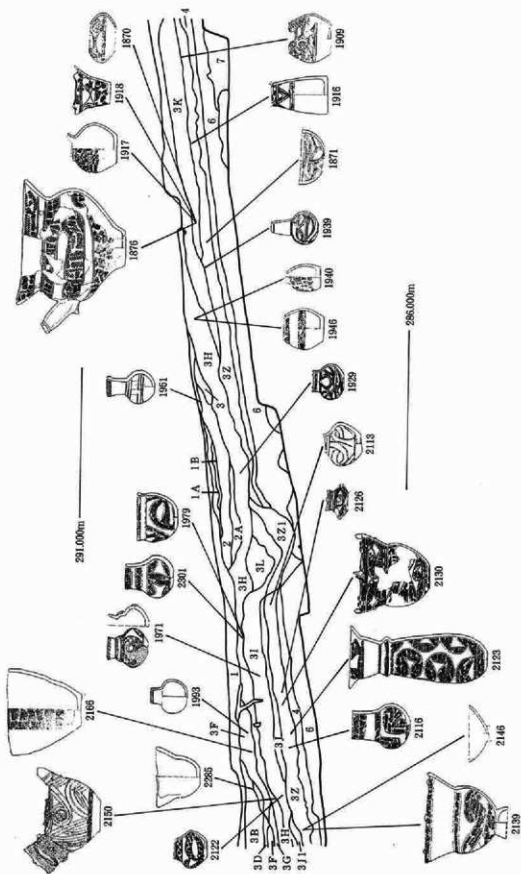
第119図 西部捨て場土層断面



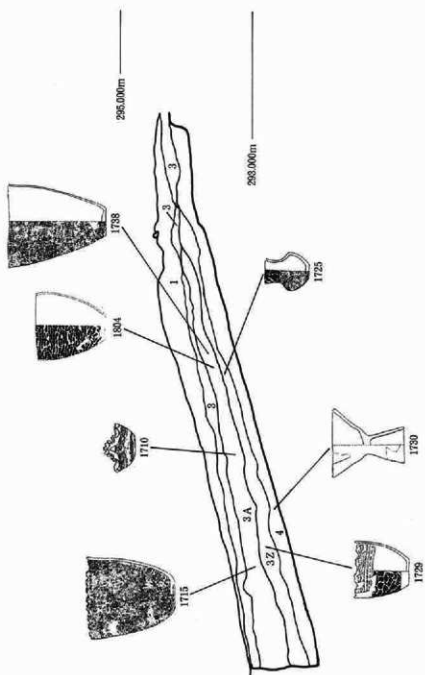
第120圖 土層断面③-1



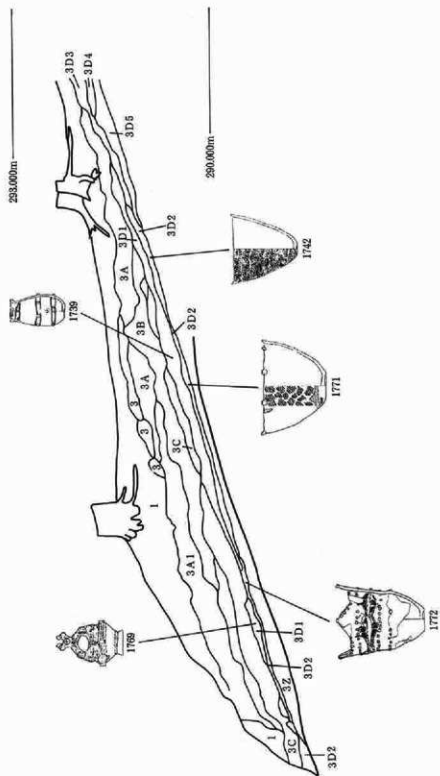
第121图 土层断面③-2



第122圖 土層断面⑦



第123圖 土層断面①



第124圖 土層断面②

第V章 出土遺物について

発掘調査で出土した遺物は、本章で一括して取り扱うこととする。すなわち遺構内出土分、遺構外出土分を合わせてである。

3年間の調査で出土した遺物の総量は、大コンテナに換算して土器類550箱強、土製品約2324点、石器・石製品5330点である。本稿に掲載した遺物は、遺構内外合わせた通し番号となっている。出土点数の多かった遺物については、個々の遺物の中で若干の分類を行った。第125～135図は、その概念図である。

個々の遺物の内容については、紙面の関係もあり代表的なもののみ文章記載を行うこととするので、遺物の詳細は、基本的に遺物観察表、実測図、写真図版を参照載きたい。

遺物の出土時の状況について、土中にどのような状態で埋まっていたかなどの出土記録が基本的にはないことから、「土器が横倒しである」とか、「注I部が欠損していた」とか、「土偶は地面に平坦気味に置かれていた」といった記載は行っていない。調査員の人数にも起因する問題であるが、土偶などの出土状況は本来重要な記録であったと反省している。捨て場出土の遺物については、できるだけ出土時の状況写真を写真図版161～172に掲載したので参照載くこととして、お許し願いたい。

1 土器

縄文時代早期、前期、後期、晩期、弥生時代初頭・中期の土器が出土している。主体は縄文時代後期初頭から晩期前葉である。観察表の項日順にその基準を説明する。

<器種> 器種は、深鉢、鉢、浅鉢、皿、片口鉢、壺、注口土器、筒形土器、単孔土器、香炉形土器、双口土器、異形土器に大別した。本稿において台(脚)が付く鉢類については、弥生時代と思われる土器を除き高杯と言う名称を用いず台付き鉢、台付き浅鉢、台付き皿と呼ぶこととした。土器の規模について、当初は個々の器種の中で平均的な大きさ以外のものを大形、中形、小形と付けて区分を試みたが、明確な基準値が見いだせなかったため除外した。鉢類の器種区分の概念図は第125図を参照して載きたい。また、主体となる後～晩期の土器については、残存率の高い土器を採用して深鉢、鉢、壺、注I土器の器種のみ器形分類を試みた(第126図～132図)。併せて記載する。

深鉢 器高が口径の2/3以上を深鉢とした。

鉢 器高が口径の2/3～1/2までを鉢とした。台が付くものも見られる。

浅鉢 器高が口径の1/2～1/3までを浅鉢とした。台が付くものも見られる。

皿 器高が口径の1/3以下を皿とした。台が付くものも見られる。

片口土器 口縁部の一カ所に注ぎ口が設けられる(付けられる)土器を片口土器とした。

壺 基本的には頸部と胴部との接する部分の長さが、最大径の2/3未満を壺とした。ただし、本稿では壺と言う名称を採用していないので、壺的な器形のものも壺に含めている。

注I土器 器体側面に注ぎIが付く土器を注口土器とした。台が付くものも見られる。

筒形土器 器形が筒状を早する土器を筒形土器とした。

単孔土器 器体側面に孔が穿たれている土器を単孔土器とした。

香炉形土器 仏具の香炉に形態が類似する土器を香炉形土器とした。透かしが入るものが多い。

双口土器 1個体の土器に2つの口縁部を付けた土器を双口土器とした。

異形土器 特殊な形態を呈する土器を異形土器とした。

〈残存部位〉 残存率の違いで、完形（完形品や極一部分を欠損する土器や接合により完形個体になった土器）、ほぼ完形（接合作業などにより全体の器形がわかるまで復元された土器、概ね残存率が80パーセント前後の土器に呼称する）、1/2完形（残存率50パーセント以上のもので口縁～底部までの器形推定が可能と判断される土器）に区分し、それ以下の残存率のものは部位の名称（例としては口縁部～胴部上半付近までの破片であれば「口～胴部上半」といった具合）で記載した。

〈口唇部形態〉 平縁、波状口縁、山形状口縁、突起、縄文施文の有無と口唇部の形態を明示した。口唇部の形態は断面形が丸いものを「丸み」、平坦に面取りが行われた角（かど）がつくようなものを「角状」、内側に内傾するものを「内削ぎ」と言う表現方法で明記した。第125図を参照いただきたい。

〈地文〉 施文原体の種類を表記する。施文原体の方向については、実測図を参照していただきたい。

〈内面調整〉 内面の調整が把握できる場合について記載する。残存率の良い土器は、部位によって調整方法が複数施されるものも少なくない。壺の内面を例に説明すると、口縁部はナデ、胴部はケズリなどといった具合であるが、観察表中には項目幅の関係で部位までの記載は割愛する。

〈底部形態・文様〉 底部形態は、大きくは平坦（平底）、丸底、台付、上げ底に区分した。底部文様は、沈線による文様を持つものがある。その他としては網代痕、木葉痕、笹痕？擦過痕などの圧痕が確認された。

〈内外面の状況〉 内面及び外面に付着物がある場合に、観察表の備考の項に記載する。煤、炭化物、朱（ベンガラ？）、黒色顔料（漆と思われる）などが主なものとなる。

〈胎土・焼成〉 胎土は、基本的に含有率が高いと感じた混入物のみを記載している。砂の粒を砂粒、砂粒よりも径の大きい小石を粗礫、透明なガラス質のものを石英や雲母などと備考に記載する。普通量以下は割愛し、記載していない。ただし、この場合の多量と普通量の基準は説明が困難であり、また見解に個人差がでると思われることから、観察を行った中川、星によっても若干の食い違いが生じている可能性がある。あくまで参考資料的に取っていただきたい。

焼成は、硬い、やや硬い、普通、やや脆い、脆いの5ランクで観察を行ったが、胎土同様に個人によって見解にバラツキが生じる場所である。紙面上の項目幅の関係もあり、観察表からは割愛した。本遺跡においては、晩期の精製土器や後期中葉の精製土器などに硬いものが多く、胎土に砂が多く入るような土器は脆い場合が多い。

〈分類〉 土器の分類は、施文文様や器形などから所属時期の推定が可能な精製土器などではできるだけ周知の土器型式名に比定させ、詳細な時期判断ができない無文土器や地文のみの粗製土器は基本的には型式名に比定させない分類を行った。それらの中には、プロポジションから時期推定が可能と思われるものもあるが、明確ではないため詳細な位置付けを避けたものもある。ただし、補足すると本遺跡から出土している精製土

器は、9割9分以上が後期初頭～晩期前葉期（前上腰内式～大洞B C式）であることから、粗製土器についてもその範疇に収まる可能性は高いと判断される。

（1）既知の土器型式との比定

土器の時期区分は概ね以下のような土器型式に比定させて捉え分類した。なお、本遺跡から縄文時代中期と思われる土器は出土していない。

- 第Ⅰ群 縄文早期中葉 吹切沢式、寺の沢式
- 第Ⅱ群 縄文前期初頭～末葉 長七谷地3群、円筒下層d 1～d 2式
- 第Ⅲ群 縄文後期初頭～末葉 十腰内Ⅰ～Ⅴ式
- 第Ⅳ群 縄文晩期初頭～中葉 大洞B 1～C 1式
- 第Ⅴ群 弥生時代前半～中頃 砂沢式・天王山式

第Ⅰ群 縄文時代早期土器

縄文時代早期中葉の貝殻沈線文土器が、微量出土している。

＜第Ⅰ群 1類＞ 貝殻沈線文施文後に爪？による刺突文が施文される土器で、吹切沢式と推定される。器種は、小片のため明確ではないが、深鉢と推定される。今回掲載したのは1658の1点であるが、他に2点吹切沢式の可能性がある小片が出土している。

＜第Ⅰ群 2類＞ 貝殻条痕文及び貝殻腹線文が観察される土器群で、寺の沢式に相当する。数点の出土である。器種は小片のため明確ではないが、全て平縁の深鉢と推定される。2071は胎土に蜜母の混入が多く見られるなど、他の時期の土器に見られない特徴がある。

第Ⅱ群 縄文時代前期土器

縄文時代前期初頭の長七谷地3群に比定するものと前期末葉の円筒下層d 1式～d 2式に相当する土器が、東西の捨て場で出土している。東部捨て場では、Ⅲ層下位（Ⅲ層は後～晩期の遺物包含層）～Ⅳ層上位（Ⅳ層は中環火山灰の二次堆積が確認される層）で出土している。長七谷地3群相当は数点、円筒下層d 1式～d 2式は大コンテナ5箱分出土している。

＜第Ⅱ群 1類＞ 胎土に繊維が多量に混入される土器群である。長七谷地3群に相当する土器群と思われる。器種は小片のため明確ではないが、深鉢と推定される。

＜第Ⅱ群 2類＞ 円筒下層d式に相当する土器群を本類とした。口縁部文様帯の幅や器形から円筒下層d 1式と円筒下層d 2式に細分される。

第Ⅱ群 2類-1 円筒下層d 1式に相当する土器群である。器種は全て深鉢である。口縁部文様帯の幅は3～5 cm程で、押圧縄文が施されるものが多い。胴部には、羽状縄文（第1種結束）や木目状摺糸文（単軸絡条体第1 A類第5種）を施文する。胎土には若干量繊維が混入される。内外面に煤が付着するものが多い。

第Ⅱ群 2類-2 円筒下層d 2式に相当する土器群である。器種は全て深鉢である。頸部に括れを持ち、口縁部文様帯の幅が先行する円筒下層d 1式より広めである。また、波状Ⅰ線も顕著に見られる。胎土には若干量繊維が混入する。

第Ⅲ群 縄文時代後期土器

本遺跡で最も出土量が多く、大コンテナに換算すると400箱分以上となり、その大半が東西の捨て場からの出土である。およそ形のわかる程度にまで復元できた個体数は2000点程で、接合率及び残存率は概ね良好である。

第Ⅲ群土器は、後期初頭～末葉に至るまでの後期全般に渡る資料と判断される。しかし、出土地の主体を占める捨て場からの出土状態は、上下関係の把握が可能な層位状態ではなかった。本遺跡出土の中で主体となる土器群であり、住居跡や土坑や捨て場の形成された時期を判断する上でも、時期的な大略を示すことは必要と考える。ただし、十腰内式編年は問題視される点が多い。

本稿では、鈴木克彦氏が最近発表した十腰内式編年案である「東北地方北部の編年学研究」を一部参考とし、本群土器の時期的位置付けを試みた。

本群土器の分類にあたっては、妥当性に欠く部分の存在も否めないと思うが、大略を示しておくことで、該期の土器編年の問題提起にはなると考える。なお、分類に際して感じた問題点などは、第Ⅷ章のまとめと考察で触れることとする。

追記として、ミニチュア土器については土製品に含めることとし、土器の分類からは削除した。

＜第Ⅲ群1類＞ 後期初頭から前葉に位置付けられる土器群で、十腰内Ⅰ式期に相当する土器群を一括する。

器種は深鉢、鉢、壺、浅鉢を主体に注口土器や片口鉢が少数見られる。本稿の分類は、鈴木克彦氏が行った上尾較2遺跡出土土器による「十腰内Ⅰ式の細分案」(註1)を参照して第Ⅲ群1類-1と第Ⅲ群1類-2に区分し、「十腰内Ⅱ式により近似する特徴のもの」を1類-3類とし、大きくは3時期に区分を試みた。おおよそ鈴木編年案1～3段階(十腰内Ⅰa式)が第Ⅲ群1類-1、4～5段階(十腰内Ⅰb式)が第Ⅲ群1類-2に比定する(註2)。十腰内Ⅰ式が大きくは4段階(4時期)に区分される型式であるのなら、第Ⅲ群1類-1に分類した土器群が、最も古い段階と古い段階に2分される可能性を含むものと捉えている。

第Ⅲ群1類-1 十腰内Ⅰ式の古い段階と思われる土器群を一括する。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺などが主体で、台の付く鉢や浅鉢も見られる。また壺の中には切斷蓋付き壺も含まれる。深鉢には完形品が少なく、鉢や大形の壺に完形品が多い。器形的特徴としては、口縁部の形態は波状・小波状口縁で5単位のものが多い。口唇部の形態は、「丸み」が主体で、折り返し口縁のものも多い。底部の形態は平皿がほとんどで、底面に沈線文を施文する土器も見られる。

文様は、渦巻き状文、木状文、弧線状入組み文、括弧文、三角状文、円文などのほか、平行沈線による幾何学文様、刺突文などが見られる。また、無文地に沈線文を施文するものも見られる。傾向としては、磨削縄文手法は少ない。完形品が多い壺などについて言えば、胴部下半～底部にかけて無文や地文のみのものが多い。

原形はL無節が主体のようであり、次いで無文のものが多い。単節を施文するものは極端に少ない。

第Ⅲ群1類-2 十腰内Ⅰ式の新しい段階と思われる土器群である。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、片口鉢、壺、注口土器で、鉢と浅鉢は台が付くものが多い。

器形的特徴としては、口縁部の形態は平縁、波状、小波状で、単位は4～6で4もしくは5単位が多い。口唇部の形態は丸みを主体に角状を呈し、口唇に縄文及び波状口縁のもの、頂部には刻み目が施されるものが目立つ。底部の形態は平坦がほとんどで、底面に箆や木葉痕などの痕跡が見られる土器も多い。

文様は平行沈線による渦巻き状文、帯状文によるクラック状、多条沈線による入組み状文など、非常に多彩である。また、稚拙な沈線による球根状やカニの鉋状や人面状の特殊文様を施文する土器も見られる。無

文地に沈線文を施文する十器や磨消縄文手法の割合も、第Ⅲ群1類-1より高くなる傾向が窺える。

原体は、L無節を主体とするが第Ⅲ群1類-1と比較して単節の割合が高くなる。

第Ⅲ群1類-3 十腹内Ⅱ式に限りなく近い様相を示す上器群である。

器種は、深鉢、鉢、浅鉢、壺で、小形の壺が多い。深鉢については、文様の施文される完形品がほとんど見られないが、あるいは地文のみを施文する粗製のもの（第Ⅲ群6類-1に分類したもの）が多いものかもしれない。

器形的特徴としては、口縁部の形態は平縁が主体となり波状や小波状の割合が低い。底部の形態はほとんどが平坦である。

文様は方形区画文を主体とする。

原体は、L無節と単節の割合が半々程で、無文は激減する。また、頸部に2条の原体押し文を施文する土器も見られる。

<第Ⅲ群2類> 後期中葉に位置付けられる土器群で、十腹内Ⅱ式期に相当する土器群を一括する。後期土器の中で、最も出土量が希少である。後続する十腹内Ⅲ式との区分が不明瞭（困難）な土器については、第Ⅲ群2類-2を設定し分類した。

第Ⅲ群2類-1 十腹内Ⅱ式相当の土器群である。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺、皿、筒形土器、単孔土器である。筒形土器や単孔土器が出現し始めるが、注口土器は確認されなかった。全体の器形が窺える資料としては、小形の壺類が多い。

器形のバリエーションが増加するようで、非常に多彩な器形が見られる。口縁部の形態は平縁・波状・小波状の他に山形状を呈するものもある。口唇部の形態は角状を呈する割合が高くなり、併せて口唇部に縄文を施文するものも多くなる。

文様は沈線による連続S字状文や、やや広めの磨消縄文による入組み文などを主要モチーフとする。

原体は無節が激減し、単節が主体となる。また、網目状燃承文を施文する土器も比較的見られる。

第Ⅲ群2類-2 十腹内Ⅱ～Ⅲ式相当の土器群である。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器、単孔土器で、台の付く深鉢も多く見られる。

器形的特徴としては、口縁部の形態としては平縁を主体とし、大形の突起や叉状突起（二股状の突起）が付くものが見られる。

文様は、磨消帯の幅が広めの曲線帯状文（J字やS字状のものが主体）や幾何学的な入組み文や羽状沈線などが見られる。また、曲線的磨消縄文を構成する沈線に沿って刺突文を連続して施文する土器も見られる。

原体は単節が主体で、無文のものも若干見られる他、非結束羽状縄文（1種の原体によるものと2種によるものがある）も見られる。また、節の細かい原体を用いる上器がある。

<第Ⅲ群3類> 後期中葉に位置付けられる土器群で、十腹内Ⅲ式期に相当する土器群を一括する。

器種は、深鉢、鉢、浅鉢、皿、壺、注口土器、双口土器、単孔土器などである。第Ⅲ群2類に比べて、注口土器の割合が高くなる。

器形的特徴は、口縁部の形態は平縁が主体で、器厚が肥厚気味のものも見られる。口唇部の形態は丸み、角状の他に内削ぎ（内側に内傾する形状）も多くなり、また突起の付く割合も高くなる。底部形態は平坦を基調とするが、本類土器から上げ底状の割合が増加する。

文様は、幅の広めの磨消帯による帯状文を基調とする。帯状文によるモチーフとしては、木の葉状、鉤状、C字状といった入組み文様が多い。加曾利B式に類似する特徴である刻日帯が見られる土器も多い。刻日帯

を有する土器は、口縁に1～3条の刻日帯(刻日が連続施文され全周する)を有し、口～頸部までを無文とし、頸部に再び刻日帯を持ち、胴部に曲線的磨消縄文が展開する1322や1345の上器などが基本形となろう。

原体は、ほとんどが単節であるが、0段多条のものが目立つようである。その他の特徴としては、羽状縄文を施文する割合が高くなり、口縁部上方や頸部に刻日帯が見られる。羽状縄文は、1種類の縄文原体を異方向に転がして施文するいわゆる異方向縄文より2種の原体によるものの方が高い割合であった。

第Ⅲ群3類土器群の最大の特徴と思われるのが、他の時期と比べて器面が光沢を強く感じる程に研磨手法が施されることである。この光沢は、研磨手法のみならずおそらく、製作に使われた粘土自体が精練されたものであろうことが推定される。この手法(調整)は、加曾利B式と共通する特徴である。また1345は又状貼瘤が付加されること、2167の注口土器は文様モチーフなどから、後続する十腰内IV式に限りなく近い様相を感じる土器である。

＜第Ⅲ群4類＞ 後期後葉に位置付けられる土器群であり、十腰内IV式期に相当する土器群を一括する。

器種は深鉢、鉢、浅鉢、片口鉢、皿、壺、注口土器、香炉形土器、単孔土器などである。第Ⅲ群3類までには見られなかった香炉形土器は、本類土器から見られる。

他の類に比べて、全体の器形が窺い知れる資料が多い。器形的特徴は、口縁部の形態は平縁と波状を主体として、山形状のものが見られ、器厚が肥厚する土器も多くなる。口唇部の形態は内削ぎの割合が高くなり、大形の突起及び又状貼瘤が2個一対や大形・小形を織り混ぜて付加するのが見られる。口唇部に付く貼瘤状の突起の単位は様々であるが、5単位が多いようである。底部の形態は、深鉢以外の器種は上げ底状や台が付くものが主体となる。

文様は、入組み文様を基調とし、襷掛け状、鉤状、木葉状のモチーフが描かれる。入組み状文を構成する帯縄文内はほとんどが羽状縄文で、磨消縄文と充填縄文の両者が見られる。また口縁～頸部が無文帯を構成する土器も多い。羽状縄文を施文する割合は高く、2種の原体によるものが主体のようである。また、0段多条のものも見られる。

前型式との大きな違いとして、本類の上器群から貼り瘤が顕著となる。また、襷掛け状の入組み文様の中には、本類土器と第Ⅲ群5類土器の何れに属するのか判断の困るものも多いが、それら文様からの区分が困難なものは、貼り瘤先端の具合に求め、瘤の先端が「丸い瘤」や「又状貼瘤」(二股状の瘤)を第Ⅲ群4類に、瘤先が鋭くとがる(先鋭貼瘤と表記)貼り瘤が付く土器を第Ⅲ群5類として、とりあえずの区分材料に用いた。よって、鈴木編年の位置付けと相違が生じたとすれば、入組み帯状文による襷掛け状のモチーフの文様において、第Ⅲ群4類と5類の何れに含めるか判断に苦慮する土器であり、瘤の形態を優先したことにある。

また、本稿では細分を試みなかったが、瘤の形態やその付き方から考えて、第Ⅲ群4類土器は少なくとも3細分(時期?)できる可能性があるように捉えている。

＜第Ⅲ群5類＞ 後期後葉～末葉に位置付けられる土器群であり、十腰内V式期に相当する土器群である。ただし、後期最終末期に相当するであろう上器群については、古い様相と感じたものを本類(第Ⅲ群5類)に、新しいと感じたものを第Ⅳ群1類-1に便宜的に振り分けた。よって、分類上支障がある場合は、訂正願いたい。

本遺跡で出土量の最も多いのが、当該期の土器である。

器種は、深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器、香炉形土器、単孔土器、皿などである。四足皿、双胴注口土器、人面付き注口土器、人面付き香炉形土器などの特殊性を強く感じる土器も見られる。

器形的特徴は、口縁部の形態は平縁を主体に山形状、波状が見られ、器厚は肥厚するもの割合が高くなる。口唇部の形態は、内削ぎを主体とし、丸みや角状も見られ、突起についても2個一對の叉状突起や山形状突起などバリエーションが多い。底部の形態は、平坦、上げ底、台付きが見られる。

文様は、入組み状文を基調とする。入組み状文を構成する帯状文は、その幅が狭いものが多くなり、充填縄文の割合が高くなる傾向が窺える。観察所見として、十腰内V式期に多く見られる幅の狭い帯状文内(言わば枠の中に)に、無理に羽状縄文を構成するように施文するには、必然的に充填縄文が多用されても不思議はないように思う。磨消縄文か充填縄文かの判別は、特に念入りに観察を行った結果から言及しているつもりであるが、その判別に苦慮する十器が多かったのも事実である。十腰内V式に充填縄文が多い可能性については、木道跡資料の特徴なのかあるいは全般的な傾向なのか今後の検討としたい。

施文文様から十腰内IV式との区分が難しい土器群については、付加される貼り瘤の種類でとりあえず区分を試みた。また、数条の微隆起線により入組み文様を構成する土器群については、福島県の新地式に類似する土器群であろう。ただし、該期の土器を出土している青森県の遺跡の発掘調査報告書などを散見しても、特別珍しい土器ではないようである。他地域からの搬入品的なものか、あるいは文様手法の一つのバリエーションなのか検討を要するが、時期的には後期末葉での位置付けで問題ないと思われるので、ここでは特別扱わない。

＜第Ⅲ群6類＞ 後期に比定されると思われる粗製土器及び無文土器を一括する。すなわち地文のみを施文する深鉢や無文の精製土器(鉢や注口土器)などが該当する。第Ⅲ群6類土器の時期的な位置付けについては、明確な同定方法とは言い難いが、器形や胎土の特徴及び精製土器に見られた諸特徴を考慮して、時期的な位置付けを試みた。無文土器は捨て場からの出土が多い傾向が窺える。

第Ⅲ群6類-1 後期初頭～前葉と推定される土器群である。器形的特徴としては胴部上半～口縁部にかけて外傾する1606や2022の深鉢が基調となる。網目状撫糸文を施文する土器や頸部に原体押圧縄文を施文する土器、及び口唇部に縄文を施文する土器などを主体とする。その他の特徴として、複合口縁のものや底部に笹、木葉痕、網代痕などの圧痕を持つ土器も多い。

第Ⅲ群6類-2 後期前～中葉と推定される土器群である。器形的特徴として、深鉢は頸部～口縁部にかけて外反する土器などを基調とする。刻目を持つものや1種の原体を使用した異方向による羽状縄文のものなども含めた。底部に笹、木葉痕、網代痕などの圧痕を持つ土器も本類まで見られるように思う。

第Ⅲ群6類-3 後期中～後葉と推定される土器群である。器形的特徴として、深鉢などは底部～口縁部まで外傾気味に立ち上がるものを基調とする。2種の原体による羽状縄文のものは、基本的に本類に含めた。上面観が楕円形を呈する土器なども多々見られる。

第Ⅲ群6類-4 後期後～末葉と推定される土器群である。無文土器の中には、全面を研磨した精製土器と言えるものと粗面のままのものがある。一部晩期と思われる土器を含んでいる可能性がある。

第Ⅳ群土器 縄文時代晩期土器

後期に次ぐ出土量である。大洞式諸型式に比定させ、分類を行った。後期の土器は捨て場出土が主体であったが、晩期の土器は住居跡からの出土を主体とする。全般に完形資料は少なく、破片が多い。

＜第Ⅳ群1類＞ 縄文時代晩期初頭～前葉に位置付けられる土器群で、大洞B式期に相当する土器群を一括する。新・古2時期に大別したものもある。1259・1870(安行3c式?)など他地域の影響を強く感じる土

器が、若干重見られる（搬入品あるいは異系統土器か）。

第IV群1類-1 晩期初頭の大洞B1式に比定して分類した土器群であるが、後期最終末の土器群が混在した可能性は否めない。須藤1a期、「小井田IV遺跡」第II群第6類、「田柄貝塚」第VII群に類似する後期と晩期の過渡期と思われる土器群についても、区分は明瞭ではない。

器種構成は、深鉢、台付深鉢、鉢、浅鉢、皿、壺、注口土器である。文様を施文する深鉢や鉢形土器が、本遺跡の資料には希少と言える。また地文はRLが主体で、羽状縄文や無文土器も相当数見られる。該期土器の資料が豊富な「山井遺跡発掘調査報告書」を参照した結果、「山井遺跡」下層出土土器と類似する資料が、本遺跡の中にも散見される。また「道地III遺跡」FⅡ-9号住居跡出土土器などにも、類似する。

文様は、入組み三叉文を主要文様とする。捨て場内出土より住居跡出土に良好な資料が見られる。239、243、247、1681、1889などの土器の時期は検討を要しよう。

第IV群1類-2 晩期前葉に位置付けられる土器群で、大洞B2式に相当する。三叉文を主要文様とする土器群で、入組み三叉文や玉抱き三叉文と呼ばれるモチーフの土器が多い。器種構成は深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、皿、壺、注口土器である。地文はLRを主体とする。

〈第IV群2類〉 縄文時代晩期前葉に位置付けられる土器群であり、羊歯状文を施文する土器群である。2時期に区分したものもある。

第IV群2類-1 大洞B2式と大洞BC式の漸移的と判断される土器群であり、大洞BC1式に位置付けられると判断される土器群を一括した。器種構成は鉢、台付浅鉢、台付皿、注口土器で、鉢を主体とする。地文はLRを主体とする。

第IV群2類-2 大洞BC2式に相当する土器群で、羊歯状文を主要文様とする。器種構成は深鉢、鉢、浅鉢、台付浅鉢、台付皿、壺、注口土器である。地文はLRを主体とする。

〈第IV群3類〉 縄文時代晩期中葉に位置付けられる土器群で、大洞C1式に相当する。出土量は数点で、先行する第IV群2類と比較して、極端に減少（消える）する。1246の雲形文を施文する注口土器は、丸底状を呈する。

〈第IV群4類〉 縄文時代晩期中葉に位置付けられる大洞C2式相当の土器群を意識して設定したが、該当する土器は見当たらなかった。

〈第IV群5類〉 縄文時代晩期初頭～前葉に属すると思われるが、詳細な時期の位置付けが困難な地文のみを施文する粗製の深鉢・鉢を一括する。

〈第IV群6類〉 縄文時代晩期初頭～前葉に属すると思われるが、詳細な位置付けが困難な無文土器を一括する。無文ではあるが、作り方や調整が丹念であり、精製土器に区分されると判断される土器群である。主に注口土器や壺形土器が該当する。

第V群 弥生土器

弥生時代に属する土器群を本群とする。微量の出七点数であり、何れも小破片である。初頭の砂沢式に相当するものと中～後葉の天王山式に相当するものが出土している。

〈第V群1類〉 変形丁字文の施文が見られることから、砂沢式に相当すると思われる。502と503は付き起こし状の刺突文を施文する。K11住居跡から1点、H18土坑13号埋土中から1点、I17土坑4号埋土中から1点、東部捨て場から1点出土している。

〈第V群2類〉 交互刺突文の施文が見られることから天王山式に相当すると思われる。K11住居跡PP1から1点、G11住居跡埋土中から1点出土している。

(2) 本遺跡に見られる縄文時代後期～晩期土器の器形について

本遺跡における縄文時代後～晩期にかけての土器は、捨て場を中心に膨大な量が出土した。出土状況は発掘調査時点から完形品・ほぼ完形品及び一括破損している個体での出土が多く、壊れたから土器を捨てたとは思われない出土状態のものが多く見られた。接合・復元作業を行った結果、接合した破片同士も多く、残存状況は良好と言える。型式学的に見れば良好な資料を提供するものと判断され、多種多様な器形の土器が見られた。

分類上の問題と検討も兼ねて、本遺跡から出土した完形土器をモデルとし、それぞれの器種の中で器形分類を試み文様帯を図示した。文様帯の名称については、第125図に示した山内清男博士に従う。設定した器形分類では位置付けの難しい器形の土器については、器形の部分一致、あるいは文様帯の類似性を優先として、とりあえず分類を行った。詳細については第Ⅶ章で記述することとする。

本章では、第126～132図に掲載した概念図の説明とモデル土器の明示を行い、第Ⅶ章において、本稿で行った分類の補足を兼ねて、検討を行うこととする。なお、完形資料が稀少な浅鉢と皿及び特殊な土器と思われる香炉形土器、筒形土器、双口土器、異形土器は除外した。

深鉢、鉢、注口土器、壺の器種とも以下の基準で細分する。鉢については、「口径と器高の割合」は割愛する。

<口径と器高の割合>

- I 器高に最大長を持つ
- II 口径と器高がほぼ同じ長さ
- III 口径が器高より長い

<口縁部形態>

- 1 平縁
- 2 波状口縁（単位はとりあず検索から削除する、個々の器形の中で傾向について触れることとする）
- 3 山形口縁（単位はとりあず検索から削除する、個々の器形の中で傾向について触れることとする）

<底部形態>

- a 平坦
- b 上げ底状（やや上げ底状のものも含む）
- c 丸底状（やや丸底状のものも含む）
- d 台付き（台の大小はとりあず検索から削除する、個々の器形の中で傾向について触れることとする）

深鉢

底部～口縁部までの器形で深鉢A～Hの8種類に区分した。

<深鉢A> 底部から頸部にかけて外傾気味に立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反あるいは外傾気味に立ち上がる。

深鉢A-I-1-a（モデル1649、2170）、深鉢A-I-1-b（モデル1219）、深鉢A-I-2-a（モデル1606、1920、2022）

深鉢A-II-2-a（モデル1216）

深鉢A-Ⅲ-2-a (モデル1386、1519、1921)

〈深鉢B〉 底部から胴部上半にかけて外傾気味に立ち上がり、胴部上半付近に膨らみを持ち、口縁部にかけて幾分内湾した後外反する。壺に近い器形と言える。

深鉢Bにおいて、全体の器形が分かり得る状態の十器は5種である。B-Ⅲ-2-aとして採用した土器群は、深鉢Aと深鉢Bの折衷的な器形と言えるが、今回は深鉢Bに含めることとする。

深鉢B-I-1-a (モデル1314、1406、1585)、深鉢B-I-2-a (モデル1319、1473、2159)

〈深鉢C〉 底部から口縁部まで外傾気味に立ち上がる。

深鉢Cにおいて、全体の器形が分かり得る状態の上器は、以下の4種である。

深鉢C-I-1-d (モデル1407)

深鉢C-II-1-a (モデル1294)

深鉢C-Ⅲ-1-a (モデル1288)、深鉢C-Ⅲ-2-d (モデル1436)

〈深鉢D〉 底部から胴部中位付近まで曲線的(膨らみ気味)に立ち上がり、胴部中位に括れを持ち(内湾気味)、口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。幾分口縁部上位付近で直立気味のものが多く。

深鉢Dにおいて、全体の器形が分かり得る状態の上器は8種である。

深鉢D-I-2-b (モデル2137)

深鉢D-Ⅲ-1-a (モデル1997)、深鉢D-Ⅲ-1-b (モデル2111)、深鉢D-Ⅲ-1-d (モデル1798、2139)、深鉢D-Ⅲ-2-b (モデル1818、2157、2164)、深鉢D-Ⅲ-2-なし (モデル2004)

〈深鉢E〉 底部から胴部中位付近まで曲線的に立ち上がり、胴部中位にやや括れを持ち、口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。胴部中位付近の括れは、深鉢Dより弱い。

深鉢E-I-2-b (モデル1776)

深鉢E-II-1-b (モデル304)、深鉢E-II-1-d (モデル1341)、深鉢E-II-2-b (モデル1855)

深鉢E-Ⅲ-1-b (モデル1347、2091、1266)、深鉢E-Ⅲ-1-a (モデル1857)、深鉢E-Ⅲ-3-b (モデル1772)

〈深鉢F〉 底部から胴部上半まで曲線的に立ち上がり、頸部が括れ、口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。

深鉢F-Ⅲ-1-a (モデル2143)、深鉢F-Ⅲ-1-b (モデル1795)

〈深鉢G〉 底部から口縁部にかけて屈曲を持たず、おだやかな曲線的に立ち上がる。

深鉢G-Ⅲ-1-a (モデル1502、2094、2156)、深鉢G-Ⅲ-1-b (モデル2032)、深鉢G-Ⅲ-1-d (モデル115、1743)

〈深鉢H〉 底部から口縁部にかけて緩く曲線的に立ち上がる。

深鉢H-I-1-a (モデル1762)、深鉢H-I-1-b (モデル157)、深鉢H-I-2-a (モデル1695)、

深鉢H-II-1-d (モデル238)、深鉢H-II-2-a (モデル1729)

深鉢H-III-1-a (モデル1661、1268)、深鉢H-III-1-b (モデル1620)、深鉢H-III-1-d (モデル239、253)

鉢

底部～口縁部までの器形の違いで10種類に区分した後、口縁部の形態(1～4)と底部の形態(a～d)を加味して区分した。

<鉢A> 底部から胴部中位まで曲線的に立ち上がり、胴部から頸部まで内湾した後、口縁部にかけて外反する。

鉢A-2-a (モデル2030)、鉢A-2-d (モデル1397)

<鉢B> 底部から胴部中位まで外傾気味に立ち上がり、胴部から頸部まで内湾した後、口縁部にかけて外反する。

鉢B-1-a (モデル1969、2035)、鉢B-1-d (モデル1326、1329)

鉢B-2-d (モデル1534)

<鉢C> 底部から胴部上位まで曲線的に立ち上がり、口縁部にかけて僅かに外反する。

鉢C-1-a (モデル2068)、鉢C-1-d (モデル1247)

<鉢D> 底部から頸部まで外傾気味に立ち上がり、頸部で僅かに括れ、口縁部にかけて外傾する。

鉢D-1-a (モデル1464、1404、1434、1464)

<鉢E> 底部から口縁部まで外傾気味に立ち上がる。

鉢E-1-a (モデル1417、1539、1950、2127)、鉢E-2-a (モデル1529、1897)

<鉢F> 底部から頸部まで曲線的に立ち上がり、頸部から内湾気味に立ち上がる。

鉢F-1-a (モデル2005)、鉢F-1-d (モデル1936)

<鉢G> 底部から胴部上半付近にかけて曲線的に立ち上がり、頸部を持ち、口縁部にかけて外反する。

鉢G-1-a (モデル1979)、鉢G-1-b (モデル1581、1687)

<鉢H> 底部から胴部中位付近にかけて曲線的に立ち上がり、口縁部にかけて穏やかに外傾した後、強く外傾する。

鉢H-1-d (モデル1560、1578、1611、2082)

<鉢I> 底部から口縁部にかけて曲線的に立ち上がる。

鉢I-1-a (モデル1448、1794、2101)、鉢I-1-b (モデル1360、450)、鉢I-1-c (モデル1888、

1958)、鉢 J-1-d (モデル1494)

〈鉢 J〉 底部から胴部まで曲線的に立ち上がり、括れを持った後、口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。
鉢 J-1-b (モデル1750、1693)、鉢 J-1-d (モデル156)

壺

底部～口縁部までの器形の違いで20種類に区分した後、口径と器高の割合 (Ⅰ～Ⅲ) と口縁部の形態 (1～4) と底部の形態 (a～d) を加味して区分した。

〈壺 A〉 底部から胴部中位まで曲線的に外傾し、胴部中位から頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて外反する。広口形の壺で、胴部中位が張り出す。

壺 A-I-2-a (モデル2168)、壺 A-I-2-なし (モデル2018)

〈壺 B〉 底部から胴部下半にかけて外傾気味に立ち上がり、頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて外反する。口が狭い形状を呈する。

壺 B-I-2-a (モデル1408、2024)

〈壺 C〉 底部から胴部中位にかけて外傾気味に立ち上がり、頸部にかけて内傾し、頸部から口縁部にかけて外反する。壺 B に比べて口縁の開きがより強い。

壺 C-I-1-a (モデル1389、1471)、壺 C-2-a (モデル2008)

〈壺 D〉 底部から胴部中位にかけて穏やかに外傾し、胴部中位から頸部にかけて内傾し、頸部から口縁部にかけて外反する。壺 C に比べて胴部中位の張り出しが弱く、幾分類部が長い形状を呈する。

壺 D-I-1-a (モデル1232、1482、1968)

〈壺 E〉 底部から胴部中位にかけて穏やかな曲線的に立ち上がり、胴部中位から頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて強く外傾する。頸部が長めで胴部中位の張り出しが弱いものが多い。

壺 E-I-1-a (1248、1300、1469、1701)、壺 E-I-1-b (モデル1403)

〈壺 F〉 底部から胴部中位にかけて外傾気味に立ち上がり、頸部にかけて強く内湾し、頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。頸部が長めで口径が広めの形状を呈する広口壺が該当する。

壺 F-I-1-a (モデル1213、1214)

〈壺 G〉 底部から胴部中位にかけて曲線的に立ち上がり、頸部にかけてやや内湾し、頸部から口縁部にかけて内傾した後に穏やかに外反する。壺 F に類似した形状であるが、胴部中位から頸部にかけて内湾が穏やかである。広口壺が多い。

壺 G-I-1-a (モデル1744)、壺 G-I-1-b (モデル1677)、壺 G-I-1-c (モデル2116、1894)

＜壺H＞ 底部から胸部上半にかけて外傾気味に立ち上がり、頸部にかけてやや内湾し（肩がやや張り気味に）、頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。

壺H-I-1-a（モデル1337、1716）

＜壺I＞ 頸部に明瞭な括れを持たず、細身（スマート）で長日の頸に特徴を持つ壺である。頸部から口縁にかけてほぼ直立気味に立ち上がる。

壺I-I-1-a（モデル1265）、壺I-I-1-b（モデル1939）、壺I-I-1-d（モデル1689、1854）

＜壺J＞ 頸部に段を持つ壺で、壺Iに比べて頸が短めな器形を呈する。

壺J-I-1-b（モデル1602）、壺J-I-1-d（モデル1252）

＜壺K＞ 頸部に段を持つ壺で、壺Kに比べて口径が広めな器形を呈する。

壺K-I-1-c（モデル223）

＜壺L＞ 胸部中位が強く膨らみ、頸部から口縁にかけて内傾する。

壺L-I-1-a（モデル2160）、壺L-I-1-d（モデル1510、2079）

＜壺M＞ 胸部中位が膨らみ、頸部に若干の段を持ち、口縁にかけて内傾する。壺Lに比べて全体の器形はスマートである。

壺M-I-1-b（モデル1764）、壺M-I-1-d（モデル1572）

＜壺N＞ 最大長を胸部上半付近に持ち、肩が張り、頸部から口縁にかけて直立する。

壺N-I-1-b（モデル1782）

＜壺O＞ 頸部に段を持つ広口壺。

壺O-I-1-b（モデル532）

＜壺P＞ 明瞭な頸部を持たない壺型形状を呈する。

壺P-I-1-a（モデル194）

＜壺Q＞ 底部が小さめで、胸部上半に幾分の張り出しを持つ。全体の形状は壺型を呈する。

壺Q-I-1-b（モデル763）

＜壺R＞ 胸部に明瞭な張り出しを持たず、頸も短めの形状を呈する。

壺R-I-1-なし（モデル286）

＜壺S＞ 胸部の形状が球形を呈し、頸部から口縁にかけてやや外傾気味に立ち上がる。

壺S-I-1-a（モデル1296）

〈蓋T〉 胴部の形状が球形を呈し、頸部から口縁にかけて直立気味に立ち上がる。

表T-I-1-a (モデル1297)

注口土器

底部～口縁部までの器形の違いで7種類に区分した後、口径と器高の割合（Ⅰ～Ⅲ）と口縁部の形態（1～4）と底部の形態（a～d）を加味して区分した。

〈注口土器A〉 底部から胴部中位にかけて曲線的に立ち上がり内湾した後、頸部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり口縁部の上位で直立若しくは内傾する。胴部は楕円形気味で口径の幅が広めの広口壺形を呈する。

注口土器A-I-1-d (モデル1262)

注口土器A-Ⅲ-1-a (モデル1876、1322)

〈注口土器B〉 底部から胴部中位にかけて曲線的に立ち上がり内湾した後、頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。口径の幅が広めの広口壺形を呈し、注口土器Aよりやや頸部が長日である。

注口土器B-I-1-b (モデル1705、1724、1775、1929)

〈注口土器C〉 底部から胴部にかけて曲線的に立ち上がり、口縁部にかけて直立もしくはやや外反気味に立ち上がる。明瞭な頸部は伴わない。

注口土器C-I-1-b (モデル1745)

〈注口土器D〉 底部から胴部中位にかけて曲線的に立ち上がり内湾した後、頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。

注口土器D-I-1-a (モデル1858)、注口土器D-I-1-b (モデル1610)

〈注口土器E〉 底部から胴部にかけて曲線的に立ち上がり、頸部から口縁部にかけて僅かに段を持った後、外傾気味に立ち上がる。胴部は球形に近い器形で、頸～口縁部は注口土器A～Dに比べてスリムである。

注口土器E-I-1-b (モデル1302、1779、1442)、注口土器E-I-1-d (モデル1786)

〈注口土器F〉 底部が丸底状で、胴部が算盤の玉状を呈し、口径はやや広めの器形である。

注口土器F-I-1-c (モデル240)

〈注口土器G〉 底部から胴部にかけて強く外傾し、胴部は張り出しを持ち、頸部から口縁部にかけて内傾気味に立ち上がる。

注口土器G-I-c (モデル1282)

〈註〉

(註1) 『國文時代第9号』に著した「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4」を参照している。

(註2) 鈴木氏は、十腰内式を述べる場合に十腰内1式、2式、3式、4式、5式と言うようにアラビア数字を用いているので、鈴木氏の論文の内容を参照する場合は、アラビア数字で標記する。



深鉢



鉢



浅鉢



皿



丸み



角状



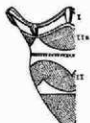
内側ぎ



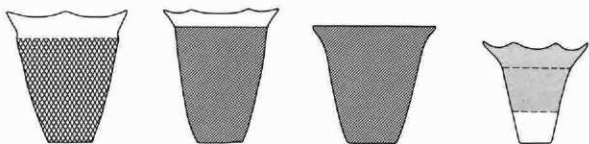
肥厚



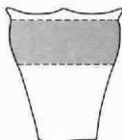
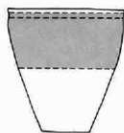
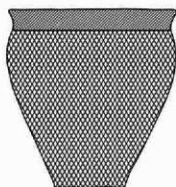
折り返し口縁



第126図 土器分類例図



深鉢A

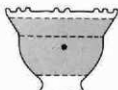
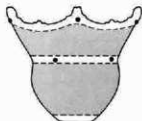
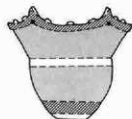
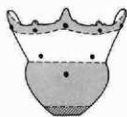
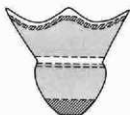
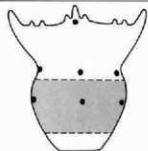


深鉢B

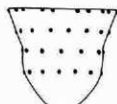
第126図 深鉢器形分類図1



深鉢C

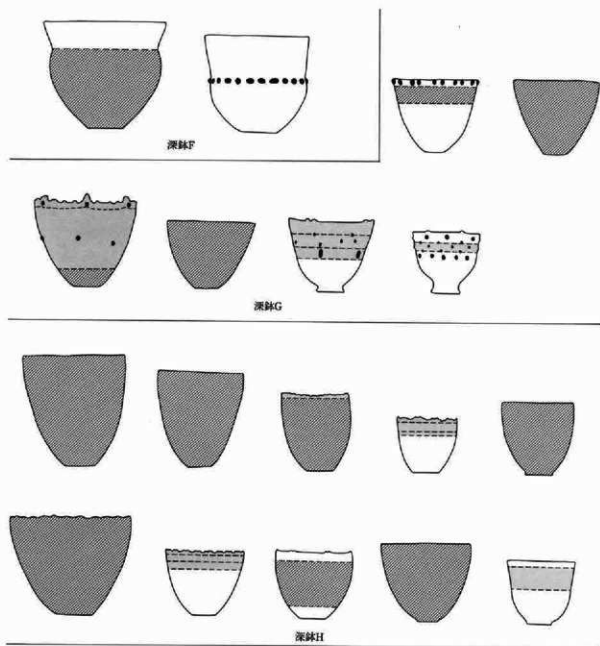


深鉢D

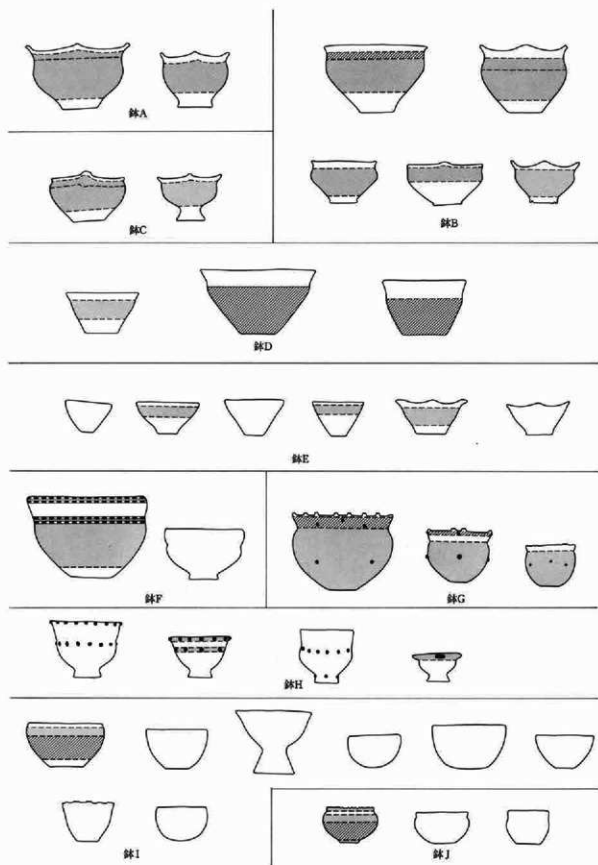


深鉢E

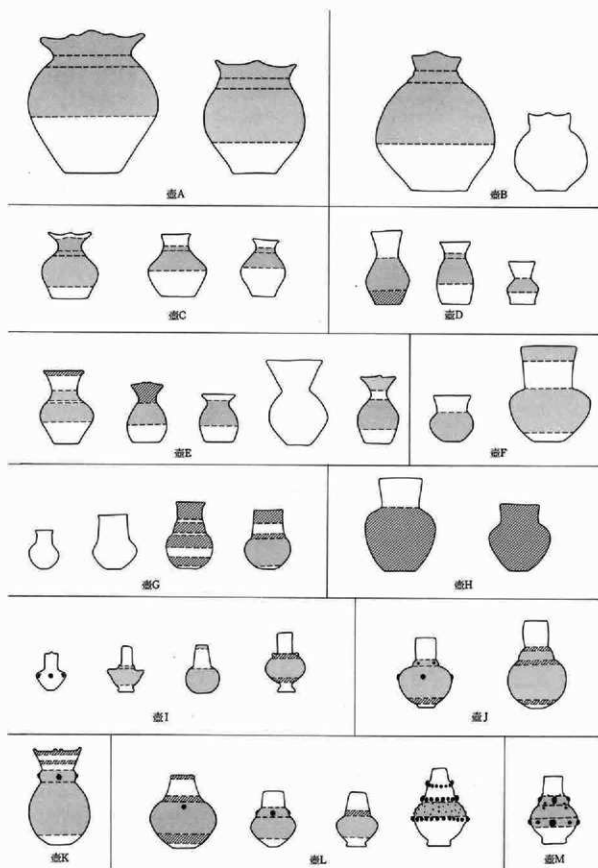
第127圖 深鉢器形分類圖 2



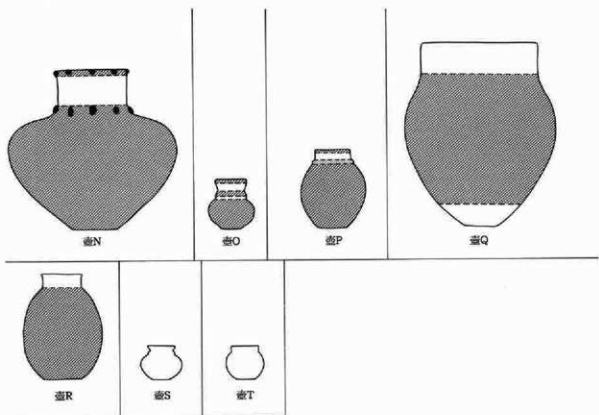
第128图 深鉢器形分類图 3



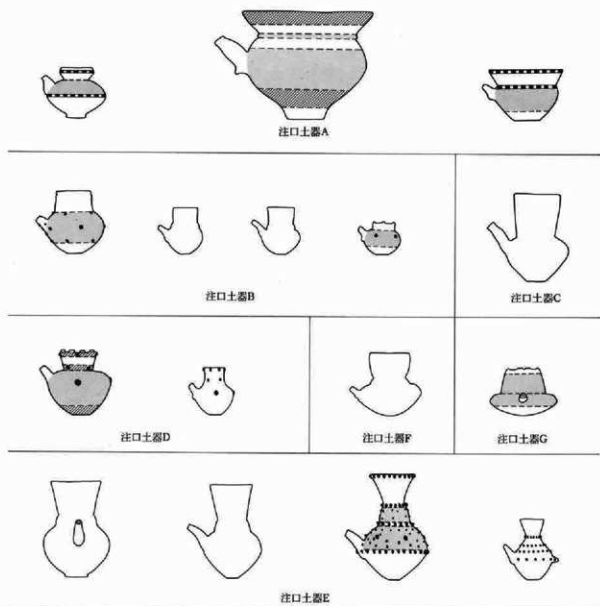
第129圖 鉢器形分類圖



第 130 图 瓷器形分类图 1



第131圖 壺器形分類圖2



第132图 注口土器器形分類图

2 土製品

本稿においては、当時の人間が粘土で製作したもので、七器を除くものを土製品と定義した。現在の物との比較から製品と呼称されるものと、なにかしらの要因で偶然できあがった可能性のあるもの、用途が不明で名称の付け難いものなど様々である。また、本稿においては、土器の小形模造品の可能性があるとと思われるミニチュア土器も土製品類に含めた。

器種構成は、ミニチュア土器、土偶、動物形土製品、土製装身具、鐔形土製品、分銅形土製品、土鈴、きのこ形土製品、スタンプ形土製品、内面渦状土製品（イモ貝形土製品）、スプーン形土製品、銅形土製品、土鏝、土器片再利用土製品（円盤状土製品・三角形土製品）、用途不明土製品に区分した。

土製品はミニチュア土器及び性格不明の粘土塊を含め総数で2324点出土し、その内748点を掲載する。

掲載基準は、特出して点数の多い種類のものはセレクトを行い代表的なものの掲載に留めたが、点数の少ないものについては原形が良く握めない残存率の悪いものを除き全て掲載遺物として抽出している。基本的に1/2スケールで掲載を行った。

土製品の中で、ある程度まとまった点数が出土している鐔形土製品と土器片再利用土製品については、「大石平遺跡Ⅲ報告書」（1986年 青森県教育委員会）中で行っている分類を参照し、同様の試みを行った。

(1) ミニチュア土器

673点出土し、143点を掲載する。ミニチュア土器は、袖珍土器あるいは手捏土器などと称されている小形の土器群で、普通サイズの土器を模倣したと思われる作りであるが、煤などの付着がないことから日用品（煮沸具など）とは捉え難い。分類する上で土器類に位置付けるか土製品類に含めるか問題のある遺物であるが、本稿では土製品として掲載することとする。また、土器類の中にも大きさ的にミニチュア土器と思われるものもあるが、基本的には全長7cm以下のもので、普通サイズの土器を模倣したと判断されるものをミニチュア土器とした。追記として、全長7cm以下と言う値については、本遺跡出土の完形土器を全て観察した結果から筆者が分類基準に採用した数値であるが、特別な根拠のある数値ではないことをお断りしておく。

出土地点は、遺構内出土18点、東部捨て場396点、西部捨て場250点、表探9点である。時期は全て後～晩期で、後期が圧倒的に多い。器種は鉢と壺を主体とする。

本遺跡で出土したミニチュア土器は、普通サイズの土器と同様の文様特徴やプロポーションを持つものがほとんどであり、他遺跡の資料を見ても概ね同様の特徴が窺える。

製作技法としては、手捏ねで製作されるものと粘土帯を積み上げて製作されるものの2種類あり、手捏ねで製作（成形）されるものが多い。

器種は鉢、壺、台付鉢、注口土器、浅鉢、皿などで、鉢と壺が主体である。

(2) 土偶

人間の形態を模倣、もしくは抽象化して製作されたと思われる土製品である。部位同士が接合したものを1点として計算した総点数は313点で、255点を掲載した。残存率が逸脱して悪いもの、例えば何処の部位か不明な小片などは掲載しなかった。

土偶の各部位については、鈴木克彦氏が作成した「土偶の部位分類図」（鈴木1980年）に習い分類を行っ

た。第133図を参照載きたい。完形品での出土がなく、接合・復元作業により土偶全体の容姿を窺い知れるものとしては、2416と2442の2点のみである。頸部、胴部（腹部）、足部（脚部）などにアスファルトの付着が確認されるものも相当数見られる。

時期は全て後～晩期のもので、後期（中実）と晩期（中空）に大別され、後期に比定されるものが圧倒的に多い。出土状況としては特殊性は認められず、また土器型式との比定を揺るぐ出土状態ではない。大略としての時期的な位置付けは第486～494図の集成図に示したが、細部の検討は行っていない。

後期中実土偶において、頭部と頸部が接合するものは、全般に顔がやや上向き状態であるものが多い。全体の傾向としては胴長短足が主体で、足は内側方向にカーブするものが多い。例外として2392などの足は、直線的に外側方向に若干開く。足部の膝頭や足首を表現した物も見られる（後期の中期でも後半期と思われる）。

以下に代表的なものを取り上げ文章記載するが、個々の内容は観察表を参照載きたい。

2416は全長約29.8cm、幅14.8cm、厚さ4.7cmの大型の土偶で、左足の一部分を除きほぼ完全な姿をとどめている。結髪が2つ（兎の耳状）付き、耳と後頭部に貫通孔がある。胴部（腹部）は、一度切断した後、アスファルトで補修したものとと思われる。2465の破損の状態を見ると、意図的に壊されている可能性が窺える。2486などのように腹部が膨らんだ妊婦を表現したと思われる土偶もある。2401や2329に代表される頸が元々存在しないと思われる土偶（頸なし土偶）も数点見られる。2402は胡座あるいは蹲踞的なポーズをとるものと思われる（他遺跡の事例には子供を抱く姿を描写した例などもあるため、安易な推測は謹むべきかもしれないが、「考える人」的な描写である可能性もあろう）。後期初頭期と思われる板状土偶は、869の1点のみで、全体の形状が逆三角形を呈する。後期末葉期と思われる259と312は中空土偶として登録したが、土器の口縁などに付く装飾部かあるいは特殊な器形の上器（異形土器など）の一部である可能性もある。

（3）動物形土製品

5点出土し、全て掲載する。四足動物の形態を抽象化して製作されたと判断される土製品である。猪、熊、ムササビなどの描写と推定されるが、はっきりとは判断できなかった。

（4）土製装身具

134点出土し、96点を掲載する。3種に大別した。

a 耳飾り 60点出土し、36点を掲載する。耳たぶに穴をあけて装着するタイプと捉えられる土製品である。耳栓型、輪型、滑車型に区分し、観察表に記載した。

b 飾り玉 72点出土し、58点を掲載する。形状で平玉、角玉、丸玉、子玉、管玉、勾玉、ペンダント状（ネックレス）の7種（第133図参照）に細分した。

c ペンダント 2点出土し、全て掲載する。「飾り玉」に分類したペンダントとは、とりあえず区分する。

（5）鐸形土製品

77点出土し、32点を掲載する。全体の形状が鐘や鈴に類似した中空の土製品である。

これまでに本製品を扱った報告書類を参照すると、付けられてきた名称が様々で、「鐸形土製品」のほか「鐸形土製品」、「鈴形土製品」、「土製垂飾」などがある（註1）。本稿においては今日一般的に使われている「鐸形土製品」と言う名称を用いる。

本遺跡の出上状況では、土器型式との伴関係が捉えられなかったが、事例などから推定すれば縄文時代後期前葉の可能性が高い。

大きさは4 cm前後のものが多く、沈線による渦巻き文様や弧線状文が主要文様である。文様のモチーフは、十腰内1式に施文されるものに類似する。本製品については、『大石平遺跡Ⅲ報告書』に習い、上部にある突起（『大石平遺跡Ⅲ報告書』中では「鈕」という名称で呼んでいる。本稿では土器など他の遺物の突起と混在しないよう以後「摘まり」の名称で記述する）の貫通孔の穿つ方向の違いでA～D類に区分した。なお、本遺跡にはD類は確認されていない。

A類 開口面と平行で、摘まみの短軸方向に平行に穿孔するもの

B類 開口面と平行で、摘まみの長軸方向に平行に穿孔するもの

C類 開口面と平行で、摘まみが円形であるため、A・Bの区分のつかない方向で穿孔するもの

D類 開口面と垂直で、摘まみ上面から中空部に向かって垂直に穿孔するもの

(6) 分銅形土製品

13点出土し、12点を掲載する。細部をみるとバラエティーに富み、特に先端の摘まみには丸みを帯びるもの、リング状、二股状がある。全般に縄文の施文が見られる。2682は摘まみ部にアスファルトが付着する。全般に胎土が良く、特に2677は光沢が強い。

(7) 土鈴

1点出土し、掲載した。本遺跡からは、1点の出土であり、他の土製品の出土点数と比較しても稀な一品であると言える。

(8) キノコ形土製品

葺を模したと思われ、実物に限りなく近い形状を呈する土製品である。19点出土し、残存部が傘の部分1/3程のもの1点を除いた18点を掲載する。全て東西の捨て場からの出土である。所属時期の特定や用途推定になり得る出土状態ではない。

キノコ形土製品についての最近の研究としては、工藤伸一・鈴木克彦両氏が『青森県文化財調査センター研究紀要第3号』に発表した論文がある。同論文を参照すると、キノコ形土製品は十腰内1式に伴うことが多く、最大の時間幅を考慮しても中期末葉から後期前葉に存在し、若干の類例が平安時代の遺跡からも出土しているようである。本遺跡からも十腰内1式に比定される土器は、相当量出土していることから、時期的には矛盾はない。用途については同論文を参照すると、「貴重な体験から食用と判明した葺を模倣し、人々が葺を採取する際などの指針としたのではないだろうか」と結論されている。

本稿においては、スタンプ形土製品と区分したが、類似する遺物であり、比較検討は行っていないが共通する属性が存在する可能性がある。

(9) スタンプ形土製品

3点出土し、全て掲載する。印面にあたる部分が平坦で、沈線による文様施文が見られる。2702はキノコ形を呈し、数条の沈線が渦巻き状に巡る。2703は平面形が斧状を呈し、沈線による右巻き渦巻き文様が施文される。渦巻き文様は一見すると内面渦状土製品（イモ貝形土製品）に類似する。2704は葦の直線的

なキノコ形状を呈し、沈線による花卉状文様が描かれ、中央に円形の刺突文が施される。

(10) 内面渦状土製品（イモ貝形土製品）

出土地は全て東部捨て場からで、8点出土した。直径6～7cm前後で内面が螺旋状の構造を持つ。イモ貝を輪切りにした状態に似ていることから、イモ貝形土製品（註2）とも呼ばれる。全て東部捨て場からの出土で、本遺跡からは石製のものは確認されていない。本遺跡から出土したものは、内面の螺旋状を呈する渦の方向が、右回りのものだけである。ただし、渦の方向が左回りを呈する出土例が、確認された遺跡もある。完全な完形品での出土はないが、2705と2709はほぼ完形の状態で出土した。その他は接合によりある程度まで復元された欠損品である。外面調整はやや粗く、内面調整は比較的丹念である。

本製品の所属時期については、晩期前半に伴う可能性が高いことは指摘されることであるが、本遺跡の出土状況からは土器型式との対比が難しい。県内の事例としては「蒔前遺跡」（一戸町）、「山井遺跡」（一戸町）、「人野I遺跡」（久慈市）などから出土している。

名称については、イモ貝を模しているのかどうか賛否両論あり、近年三内丸山遺跡（青森県）から出土した前期の上製品の中にもイモ貝を模した可能性がある土製品があるなど、本製品が「イモ貝形土製品」の名称を独占してよいのか問題がある土製品と言える（註3）。

(11) スプーン形土製品

10点出土し、全て掲載する。スプーン若しくは匙に似た上製品で、小形の皿ないし椀に柄が付いたような形態を呈する。

837は完形品でD13十坑3号から出土した。全長14.9cm、皿の長さ9.3cm、幅5.3cm、高さ3.2cmである。全体にかすかにミガキが施され、文様は皿部分にはなく、柄の先端と付け根部分に隆帯が巡り、先端の上側と付け根部分の下側に三角形の窪みが付られる。時期は明確ではないが、調整の具合などから晩期と推定する。

(12) 釧形土製品

7点出土し、全て掲載する。土製装身具と捉えられる環状の土製品である。完形品1点、ほぼ完形品1点で、その他5点は欠損品である。2726は、片面（表？）に浅い沈線が連続して引かれ、内外面とも丁重なミガキを施し、片面（裏？）には所々に指頭上痕が見られる。穿孔途中と思われる円形の凹が1箇所確認される。当初は2個1セットで身につける腕輪と推定していたが、本遺跡で出土している製品の輪の大きさでは、手首のかなり細い女性でも身につけることができない。耳飾りであろうか。

(13) 土罐

12点出土し、10点を掲載する。漁網の罫に用いられたと推定される土製品である。楕円形や長楕円形を呈し、紐を懸ける溝や孔が施される。

(14) 土器片再利用土製品

土器の破片を利用し、その周囲を打ち欠いたり、擦るなどの加工を施しているものである。835点出土し、128点を掲載する。本稿では全体の形状で、円形を呈するものを「円盤状土製品」に、三角形を呈するものを「三角形土製品」と言う名称を用いることとする。なお、厳密には2種以外の形状を呈するものも若干

数見られるが、それらについては観察表中にて記載している。

ア 円盤状土製品 612点出土し、89点を掲載する。

イ 三角形土製品 223点出土し、39点を掲載する。

円盤状土製品と三角形土製品は、無文、沈線文、縄文、沈線+磨消・充填縄文の4種が見られる。

(15) その他土製品

34点出土し、23点を掲載する。人面文様や動植物意匠と思われる形状のものなども散見される。細分すると、手作り(人為的作用が加えられているもの)1点、長楕円形1点、土版2点、冠状(腕飾)?1点、角状1点、三角状1点、棒状1点、くり形1点、くるみ形2点、貝形1点、皿状4点、不明器種(見当がつかないもの)4点の12種に区部した。腕飾として考えられるのが、D19住居跡から出土した用途不明の土製品826である。児玉大成氏が『北方の考古学』の中で「玉象嵌土製品」と呼び集成を行った製品と同類のものである。側面から見た形状が、弓状を呈するもので、紐などを巻き付けて腕に装着した腕飾の用途が推測される。朱の塗布が局所的に確認できるが、おそらく当時は全面に塗布されていたと推定される。

(16) 粘土塊

179点出土した。成形されていない直径5cmほどの粘土の塊で、性格・用途等は不明である。実測は行っていない。10点を写真掲載した。

<註>

(註1) 遠藤政夫ほか(1986年)『大石平遺跡Ⅲ報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集 青森県教育委員会

(註2) 外形がさといもに類似するところからイモ貝と命名された貝で、イモ貝形製品全般を扱った論文としては、福田友之氏の「津軽海峡域と南海産貝類—津軽海峡域におけるイモガイ形製品をめぐる—」で詳細な分析をしている。また、芋貝の記述については、『貝』(1996年波部忠重、小菅貞男)が詳しい。下記に引用する。「イモガイ科(芋貝)の日本産は120種で、普通は、殻はら塔が低く、体唇は大きく、下端でつぼまり、肩で最も幅広になる。殻口も多くはせまく長い。ふたは非常に小さく、葉状。」

(註3) イモ貝形土製品についての研究は、稲野裕介氏が『史学第52巻2号』で発表した「亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布」が詳しい。また、同氏は本製品に対する「イモ貝形土製品」と言う名称が不適切であることを『岩手考古学第10号』の中で指摘されている。

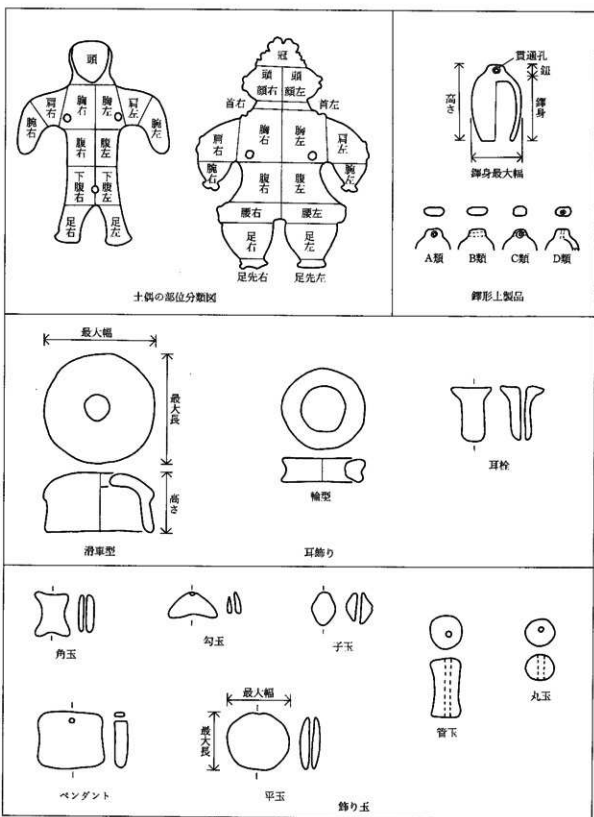
<参考文献>

鈴木克彦(1980年)「土偶の研究序説」『青森県土館調査研究年報第6号』

稲野裕介氏(1982年)「亀ヶ岡文化における内面渦状土(石)製品とその分布」『史学第52巻2号』

児玉大成(1998年)「玉象嵌土製品」『北方の考古学』

福田友之氏(1998年)「津軽海峡域と南海産貝類—津軽海峡域におけるイモガイ形製品をめぐる—」『時の絆—石附喜三男先生を偲ぶ—』



土偶の部位分類図

埴形土製品

第133図 土製品分類図

3 石器

石器・石製品は、チップ・フレック類及び原石を除き5330点出土し、その内1120点（写真掲載のみが64点）を掲載する。内訳は、写真掲載のみを除き石器988点、石製品73点である。

母材の違いで剥片石器と礫石器に大別されるが、抉入石器のように一部両母材を使う器種もある。

石器と石製品の区分を行うにあたっては、その定義に多少曖昧なところもある。本稿においては直接の生産活動にかかわったと思われるものを石器とする。器種構成は以下に行った。

石鏃、石槍・尖頭器、石錐、石匙、異形石器、ピエス・エスキュー、刮搔器類、鋸歯状石器、抉入石器、コア、石斧、石斲状、石皿、台石、凹石、磨石、敲石、砥石、石錘、円盤状石器、球状形石器、刻み入り石器

(1) 剥片石器

剥片石器は、基本的に全て2/3スケールで掲載する。

石鏃 1148点出土し、235点を掲載した。第134図に示した15種に形態分類した。大きくは有茎と無茎に大別される。形態別には有茎平基2、有茎平基1、有茎尖基1、有茎凹基の順で多い。第416図を参照載きたい。石材はチャートやチャート質粘板岩を主体とする。基部にアスファルトの付着が見られるものは、全体的には少ない。

- <有茎平基1> 全体の形状が概ね正三角形を呈する。
- <有茎平基2> 全体の形状が概ね二等辺三角形を呈する。
- <有茎平基3> 全体の形状が身巾が狭い二等辺三角形を呈する。
- <有茎平基4> 形状が石槍状を呈する。
- <有茎平基5> 形状が十字形を呈する。
- <有茎尖基1> 基部が尖り、全体の形状が二等辺三角形を呈する。
- <有茎尖基2> 基部が尖り、全体の形状が棒状の二等辺三角形を呈する。
- <有茎凹基> 基部が丸みを呈するもの。
- <有茎凹基> 基部に抉入のあるもの。
- <無茎平基> 基部が平坦を呈するもの。
- <無茎凹基> 基部に抉入のあるもの。
- <無茎円基> 基部が丸みを帯びるもの。
- <尖茎尖基> 基部が尖るもの。
- <尖茎平基> 基部が直線的なもの。
- <棒状> 全体の形状が棒状を呈するもの。

石槍・尖頭器 53点出土し、38点を掲載した。形状は、三角形状、木葉形状に大別される。石材はチャートが主体である。先端部が欠損したものが多い。

石錐 300点出土し、55点を掲載した。第134図に示した8種に形態分類した。摘み付き1と棒状に分類したものが多い。錐部について、錐部の幅は0.3cm、錐部の厚さは0.2cmが平均的な規模である。身部を欠損するものが多い。石材はチャートが主体である。

- <摘み付き1> 錐部の長いもの。

〈握み付き2〉 握まり部と錐部が不明瞭で、全体の形状が細長い二等辺三角形を呈するもの。

〈握み付き3〉 錐部が短い小形のもの。

〈握み付き4〉 錐部が太くて短いもの。

〈握み付き5〉 破片の一部を錐とするもの。

〈握み付き6〉 握まり太く、錐太く平ら

〈刺突状〉 不整な形状を呈するもの。

〈棒状〉 全体の形状が棒状を呈するもの。

石匙 248点出土し、53点を掲載した。握まり状の小突起を持つ石器で、握まり部を上にした場合、主要な刃部が縦にくるものと横にくるものに大別される。石材はチャートが主体である。縦長1、縦長2、縦長3、縦長4、縦長5、縦長6、縦長7、横長1、横長2、横長小形、横長太い柄付きの11種類に形態分類した。第134図を参照載きたい。形態別では、横長1、縦長1、横長2の順で多い。

異形石器 13点出土し、全て掲載した。石材はチャート及び粘板岩が主体である。片面に自然面を残すものが4点確認される。927と3209は両極打法が用いられている。

楔形石器（ピエス・エスキュー） 91点出土し、19点を掲載した。石材はチャート及び粘板岩が主体である。平面形の形態は、主に四辺形状を呈する。剥離痕の連続する縁辺を上下に置いた場合、上下両端いずれも打面のような平坦部を残さないのが普通のようなものである。

素材は礫核と剥片を利用したものと2種類に細分され、剥片を使用したものが多い。製作工程としては、上下両縁辺または両尖端からはほぼ平行に剥離痕が入り、両端には細かい碎屑の剥落した痕跡が連続して残され、多くは階段状剥離（ステップ・フラクチャー）を残すことから、両極打法（バイポーラーテクニック）によって作られている。ワーキングエッジ（作業縁）は両端と考えられる。

鋸歯状石器 14点出土し、全て掲載した。剥片の一部に調整が加えられているものがほとんどである。石材は粘板岩が主体である。

削器 925点出土し、174点を掲載した。石材はチャートが主体である。捨て場出土が主体ではあるが、住居跡や土坑からの出土数も相当数に上る。本遺跡に見られる削器は、剥片の形状に依存して縁辺に刃を設けるものと、刃潰し（ブランディング）加工を施したものと、剥片の形状を変えて一定の形に仕上げているものの3つに大別される。主体は剥片の形状に依存するものであり、剥片自体を変えて一定の形態にしているものは少ない。また、小形の剥片を利用したものもあり、石鎌や石匙を製作する途上で断念した可能性のあるものや、石鎌状に仕上げたものなどもある。

搔器 54点出土し、20点を掲載した。石材はチャートが主体である。本遺跡で搔器としたものは、縦長剥片や横長剥片の端部に調整剥離を加えて急角度の刃部を作り出しているものを基本とし、剥片割縁にも同じ状況で刃部を構成しているものも含めている。

円形搔器 115点出土し、17点を掲載した。石材はチャートが主体である。基本的には円盤状を呈する石器である。剥片の周囲に調整剥離を加えて片側が口状に突き出ているものと、円盤状になるものがある。周縁については、片刃状になるものと両刃状になるものがあり、縁辺が潰れているかもしくは潰されているものがある。

挟入石器 56点出土し、4点を掲載した。石材はチャート及び粘板岩が主体である。剥片の割縁に調整剥離が施される。

石核 247点が出土している。実測図は作成していない。

(2) 礫石器

石斧類 出土している石斧は磨製石斧、あるいは磨製石斧の欠損品・未製品・敲石などへの転用品で、打製石斧と思われるものは出土していない。755点が出土し、121点を掲載した。礫片全体をベッキング整形を施した後に研磨されたと思われるものが多い。また、一部擦り切り手法が確認できるものもある。長さは8～14cm程が普通サイズのように、5cm以下のミニチュアと捉えられる製品も相当数見られる。刃部は、未加工、刃が潰れたもの、再加工したもの、再加工途中と思われるものなども見られる。ソケットに装着したと思われる痕跡を基部に確認できるものもある。

石斧の観察表中の「種別」について、以下のように略称して記述する。完形品=完、未製品=未、欠損品=欠、転用品=転、接合=接

石斧の「分類」については、横断面形態、刃部平面形態、刃部断面形態、頭部形態の属性を設定し、観察を行った。第135図を参照載きたい。

<横断面形態> 大きくは3形態に区分される。

I 隅丸方形

II 断面形

III 円形

<刃部平面形態> 大きくは3形態に区分される。

a 台形

b 丸形を基調とする形態で、2つに大別する。

b1 丸形

b2 三角形を呈する。

c 角形

<刃部断面形態> 大きくは3形態に区分される。

イ 尚刃

ロ 片刃

<頭部形態> 大きくは3形態に区分される。

1 円錐形

2 台形

3 丸形

石錘状石斧 7点出土し、全て掲載した。石材は粘板岩が主体である。

石錘 396点出土し、78(39)点を掲載する。全体の形状は分銅型を呈するものが多く、短軸の両端中央部を打ち欠き製作されている。石材は硬砂岩を主体とする。礫石器の中では、磨製石斧に次ぐ出土点数である。高地に所在する本遺跡から多量に出土している点について、石錘の用途を考えた時に、はたして投網の錘などの漁労具とするには疑問が残る。

石皿 135点出土し、23点を掲載する。完形品での出土は表探から出土した3557のみで、その他は全て欠損品である。石材は砂岩、デイサイトを主体とする。

敲石 244点出土し、50(36)点を掲載する。全体の形状や大きさは様々である。石材は玄武岩、粘板岩、デイサイトなどである。断面がサッカーボールに近似した形状を呈する3565・3566・3583・3584・3587～3589などは、石斧の加工具の可能性が考えられる(ベッキング用?)。

砥石 41点出土し、9点を掲載する。断面形U字状を呈する細い溝状が複数見られるものもある。石材はデイサイトを主体とする。石材の産地は軽米町内以外の周辺山町村と同定されたものがほとんどである。

磨石 146点出土し、27(24)点を掲載する。形状が円形体、楕円体、直立方体の川原石が利用されている。円形体、楕円体の石は全面が磨かれているものが多い。直立方体の石は一邊ないし数辺の角部分を利用している。凹石への兼用品あるいは転用品と思われるものも見られる。石材は安山岩、硬砂岩などである。

磨石は、石質の関係から風化の進み具合が早いため、野外調査時点で脆弱なものなどは処分した経緯があり、実際の数量とは合わないものである。

凹石 117点出土し、23点を掲載する。磨石からの転用品と思われるものが多い。石材は砂岩や安山岩が主体である。

台石 15点出土し、4点を掲載する。完形品での出土はなく、全て欠損品である。石材は硬砂岩を主体とする。

礫器 10点出土し、9点を掲載する(3650は写真掲載のみ)。前期の円筒下層式上器に伴う半円状偏平打製石器と思われるものも見られる。石材は硬砂岩を主体とする。

母岩と思われる礫 捨て場精査時に相当数の出土が確認された。おそらくは、土器類や石器類と同様に廃棄されたものであろう。今回の調査では、その出土量や石材の種類を始め、それら一切の資料については記録できなかった。

4 石製品

本稿においては、実用品とは考え難いものや土製品との関連から石器として扱わないこととしたものなどを一括して、石製品に採用する。器種構成は以下に行った。

岩偶、三角柱状石製品、石剣・石刀、石棒、円盤状石器、有孔石製品(環状石製品)、礫石製石製品、ペンダント、刻線礫、ブリッジ状石製品、その他未製品

基本的に全て、1/2スケールで掲載する。

岩偶 4点出土し、全て掲載する。石材は凝灰岩系である。

三角柱状石製品 3点出土し、全て掲載する。石材は凝灰岩及びアルコースである。

石剣・石刀 155点出土し、30点を掲載する。全て欠損品である。石材は粘板岩を主体にホルンフェルスなどが見られる。

石棒 4点出土し、3点を掲載する。石材は安山岩、流紋岩、粘板岩である。

円盤状石器 63点出土し、9点を掲載する。礫片の縁辺を打ち欠き円形状に製作されている。石材は流紋岩、砂岩、粘板岩などである。

三角形石製品 3点出土し、全て掲載する。石材は砂岩、流紋岩、凝灰岩である。

有孔石製品(環状石製品) 6点出土し、5点を掲載する。接合して完形となったものがある。

礫石製品 131点出土し、48点を掲載する。礫石を整形して製品に仕上げたものである。形状はほぼ楕円形、方形、卵形状、石斧状、皿状などが見られる。その中で、一端に一個の穴が穿たれているものと2個の穴が穿たれているもの、及び穴が穿たれていないものが見られる。方形や楕円形状のものでは、擦り減って中央部が窪んでいるものなどがある。

用途について、本遺跡で出土している製品?を、浮きとするには無理があると思われる。また、首飾り、

腰飾り、耳飾りなどの装身具にするには疑問を感じる。磨石的な用途の可能性は考えられると思う。呪術具など特殊な製品なのかもしれないが、現段階では不明である。

母材の産出地は不明である。軽石製の製品は、「根井貝塚」(野田村)、「上村貝塚」(宮古市)、「山井遺跡」(一戸町)「駒板遺跡」(軽米町)、「大日向Ⅱ遺跡」(軽米町)など比較的事例は多いようである。

ペンダント(飾り) 8点出土し、全て掲載した。石材は、硬砂岩、粘板岩、流紋岩などである。

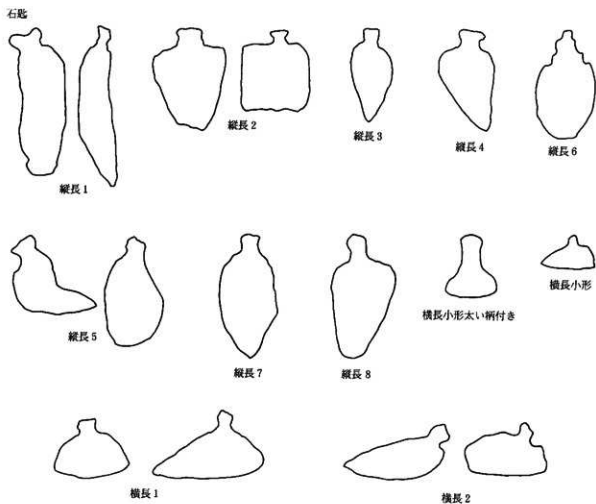
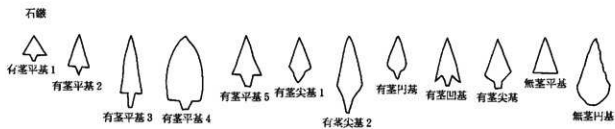
刻線礫 9点出土し、2点を掲載する。石材は粘板岩、安山岩、凝灰岩などである。

ブリッジ状石製品 1点出土し、掲載する。石材は不明である。

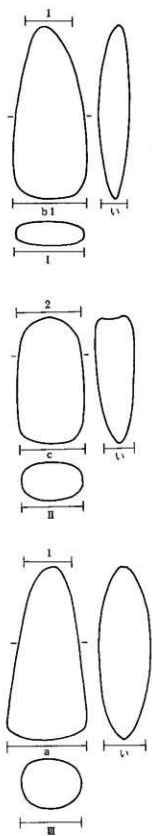
その他未製品 63点出土し、4点を掲載する。形状などから、その性格を窺い知れないものを一括する。

5 岩石類

水晶74点、琥珀6点、琥珀と思われる鉱物6点、黒曜石6点、珪化木25点が東西の捨て場から出土している。図化は行っていない。写真で代表的なものを掲載するに留める。



第134図 石器分類図1 (剝片石器)



頭部形態



1 (門籠)



2 (台形)



3 (丸)

刃部平面形態



a (台形)



b1 (丸形)



b2



c (角形)

刃部断面形態

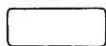


い (両刃)



ろ (片刃)

横断面形態



I (隅丸方形)

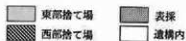
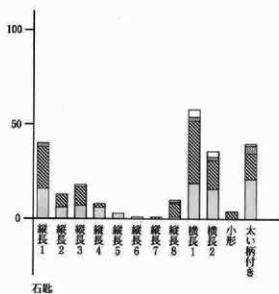
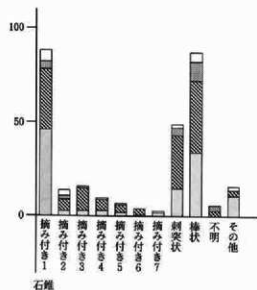
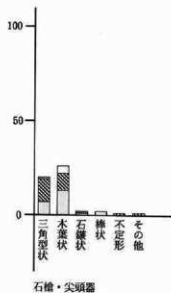
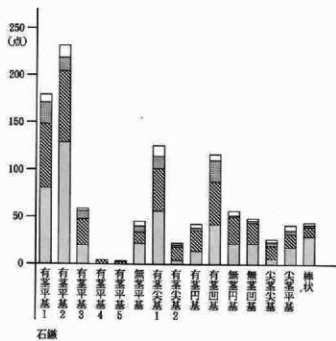


II (楕円形)

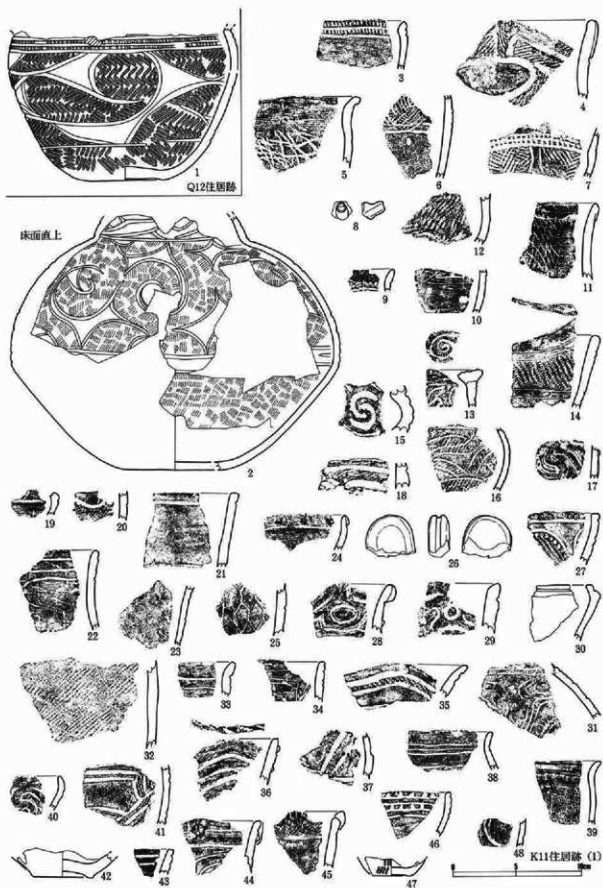


III (円形)

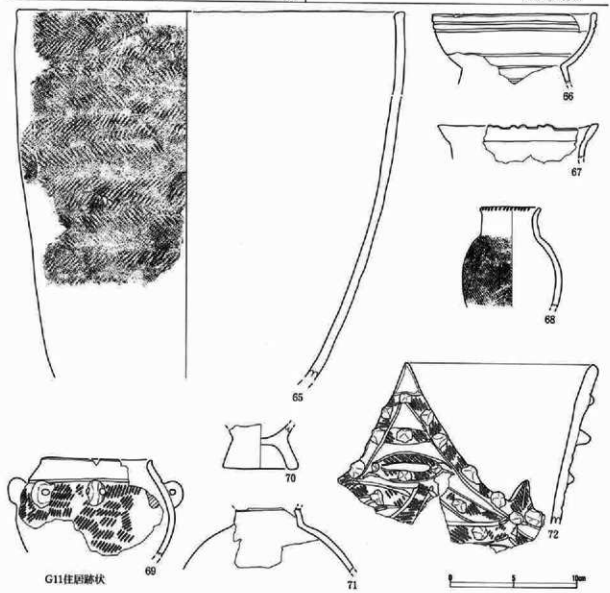
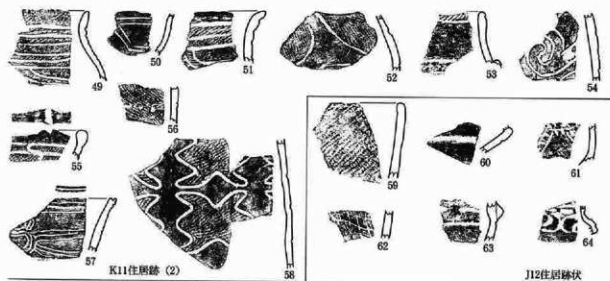
第135図 石斧分類図2 (磨製石斧)



石器形態分類グラフ



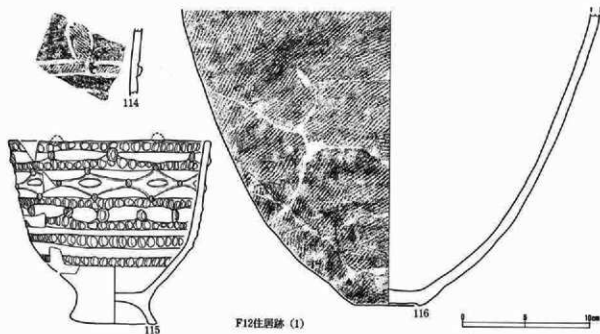
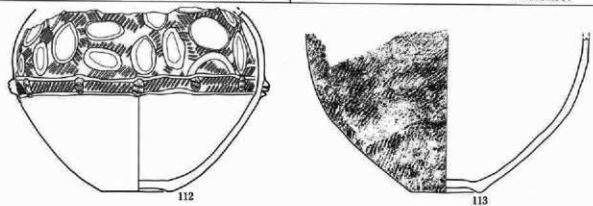
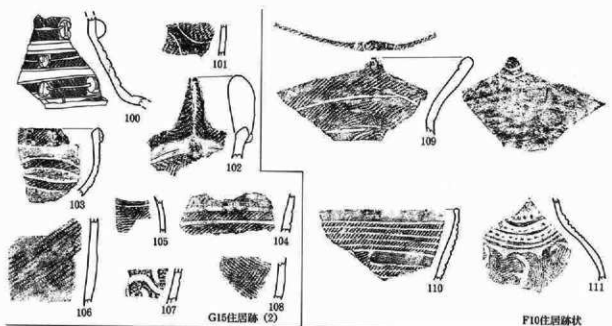
第136圖 遺構内出土土器 1



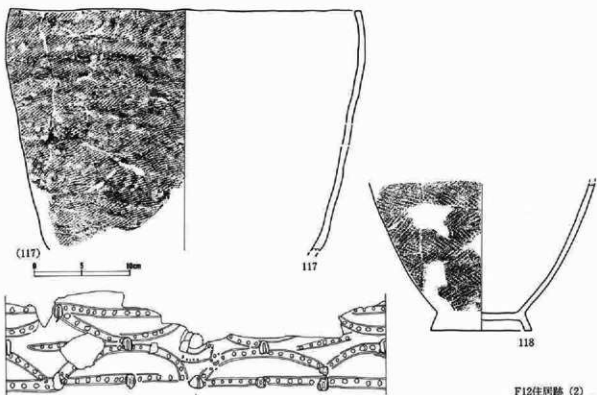
第137図 遺構内出土土器 2



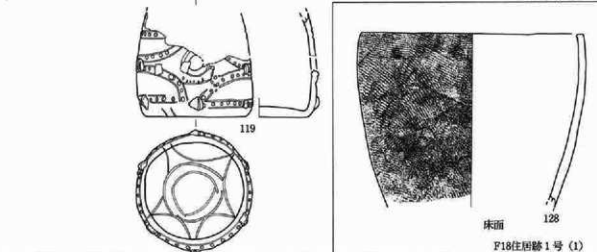
第138圖 遺構内出土土器 3



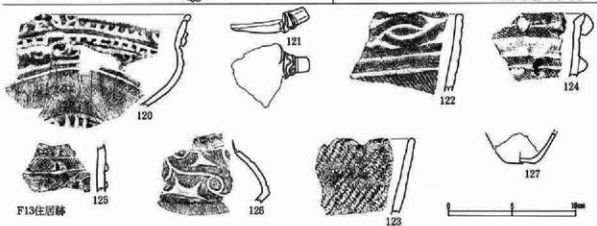
第139圖 遺構内出土土器 4



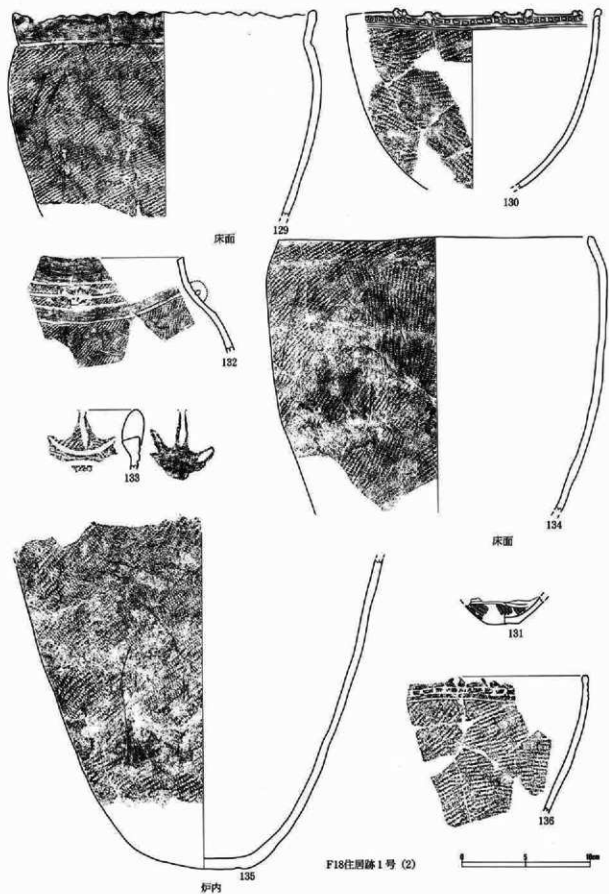
F12住居跡 (2)



F18住居跡1号 (1)

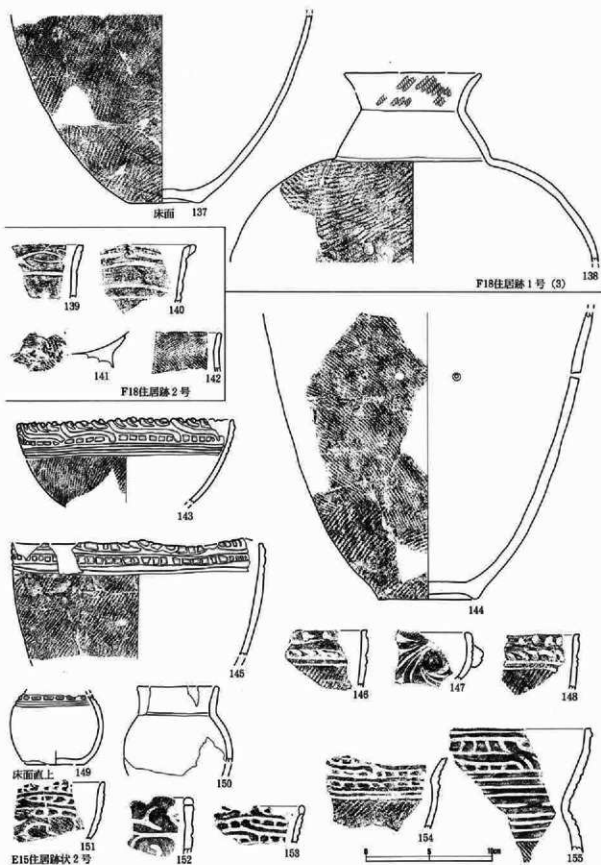


第140圖 遺構内出土土器 5

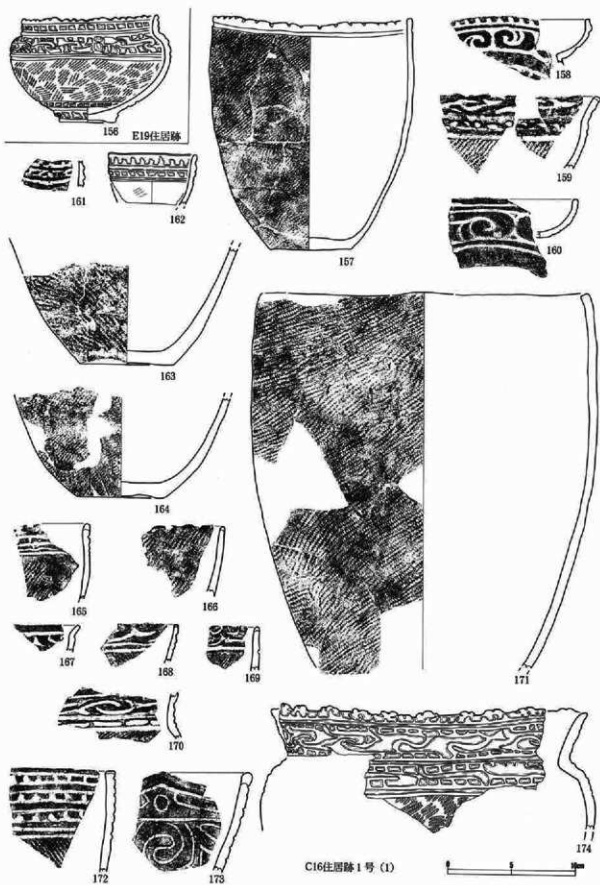


F18住居跡1号(2)

第141图 遺構内出土土器6



第142图 遺構内出土土器 7

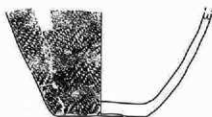


第143图 遺構内出土土器 8

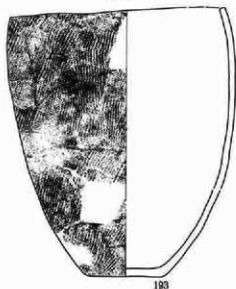


175

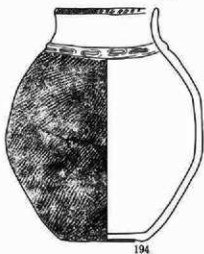
C16住居跡1号(2)



床面 192



193



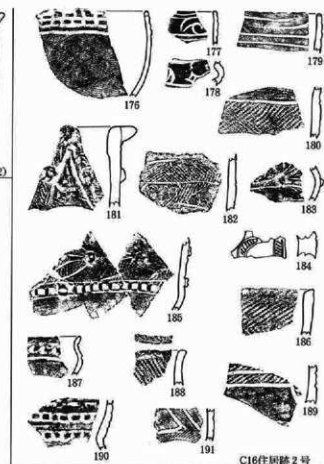
194



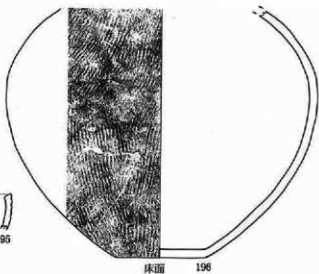
195



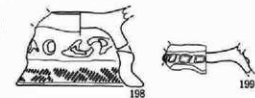
197



C16住居跡2号



床面 196



198

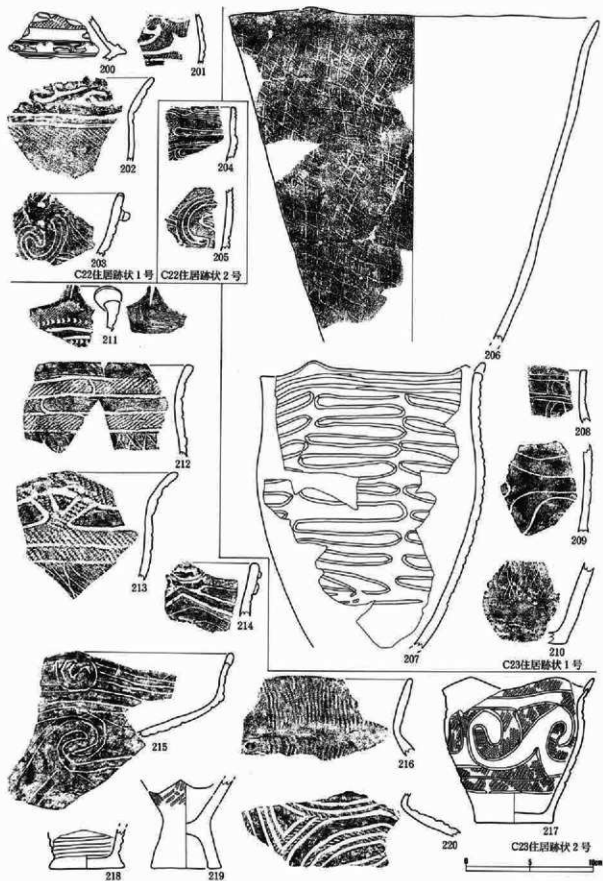


199

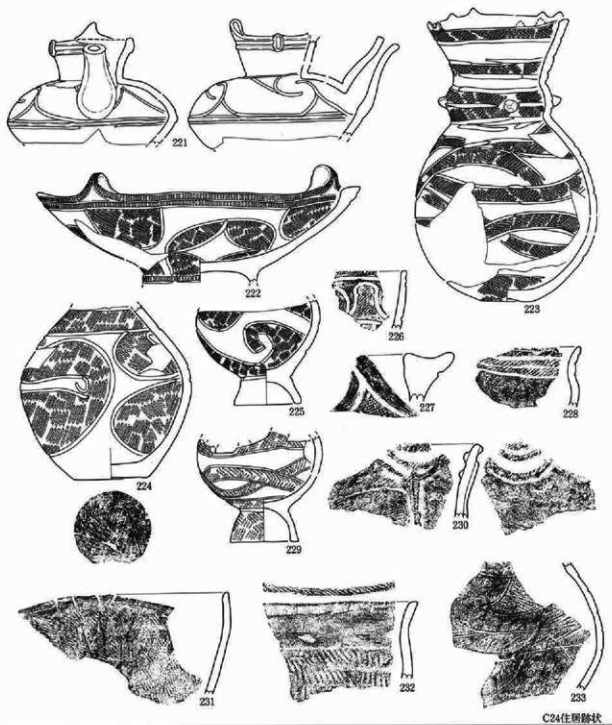
D19住居跡



第144图 遺構内出土土器 9



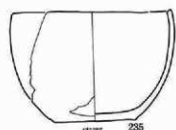
第145图 遺構内出土土器10



C24住居跡状



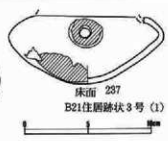
B21住居跡状 1号



床面 235

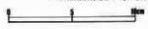


床面 236

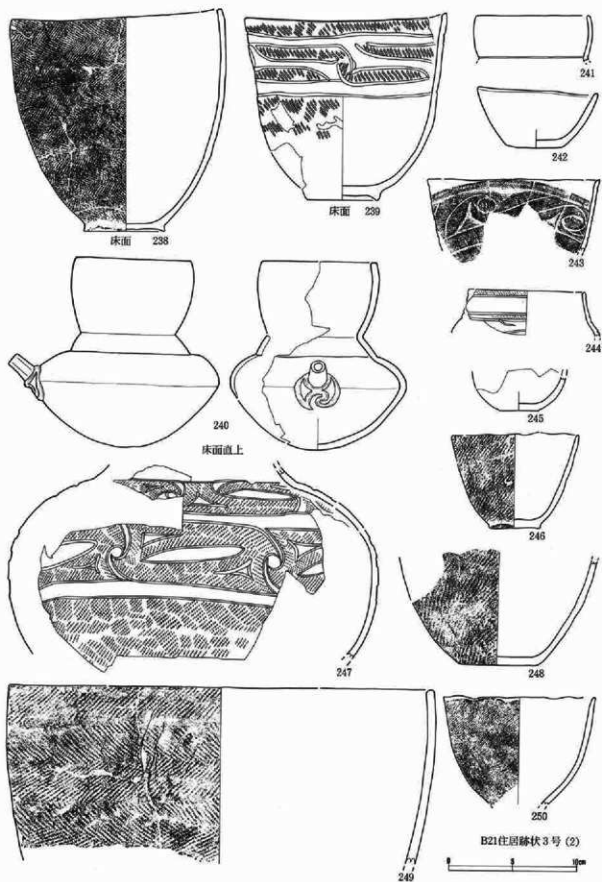


床面 237

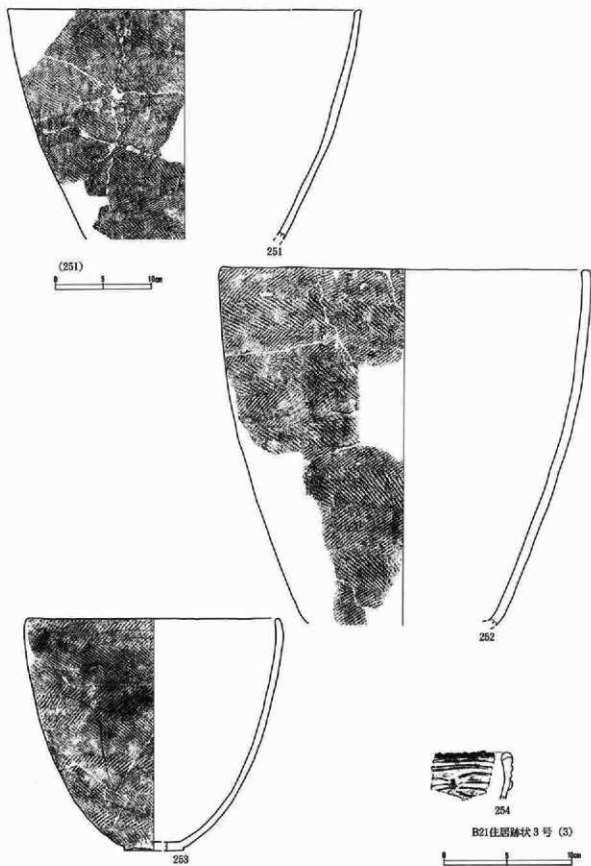
B21住居跡状 3号 (1)



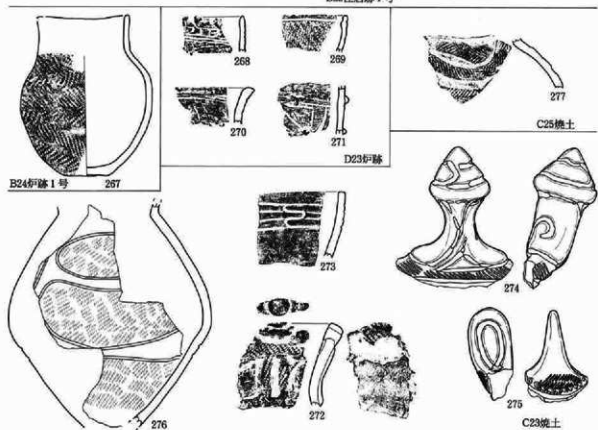
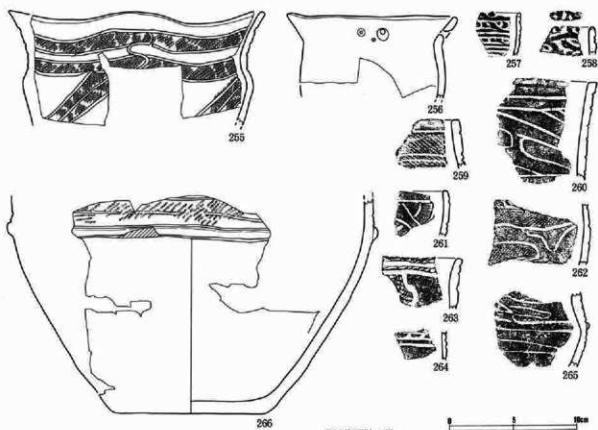
第146図 遺構内出土土器11



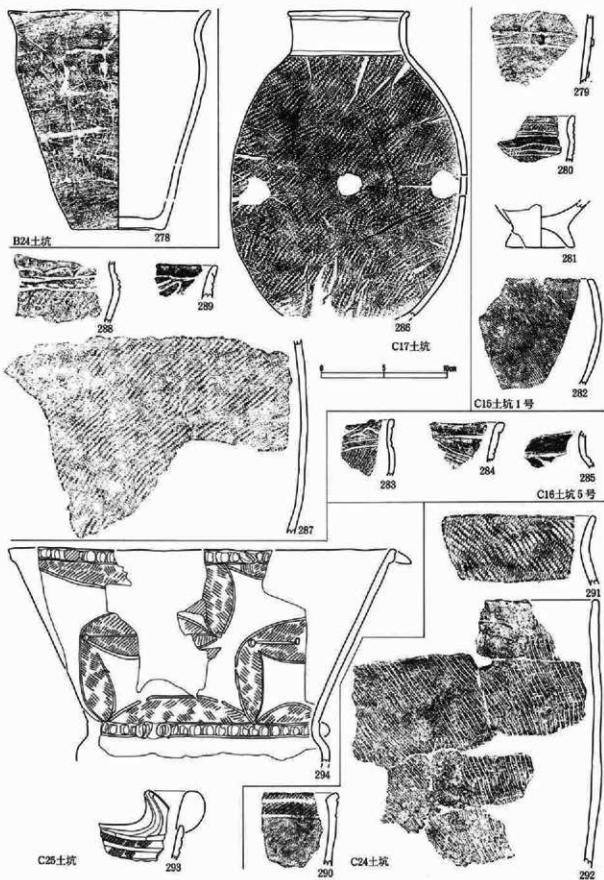
第147图 遺構内出土土器12



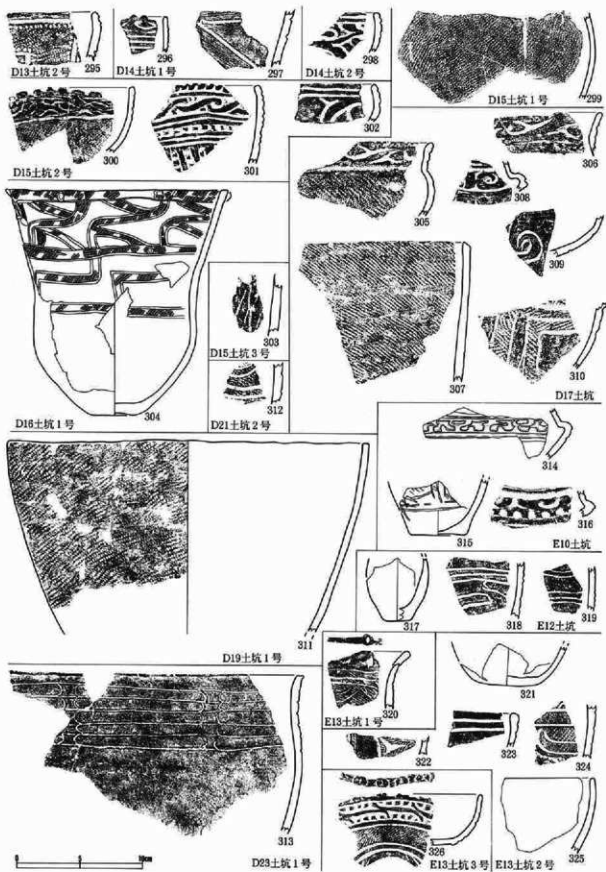
第148图 遺構内出土土器13



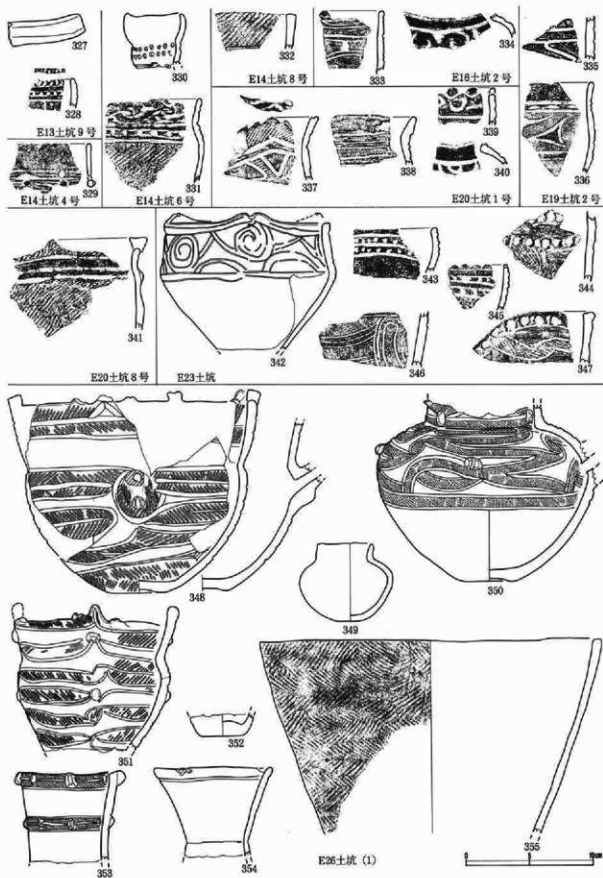
第149図 遺構内出土土器14



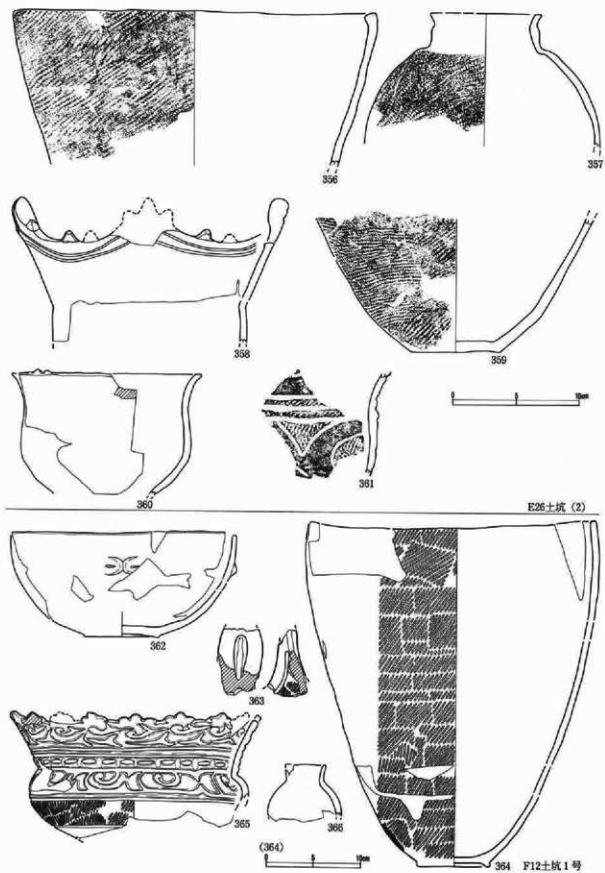
第150图 遗址内出土土器15



第151圖 遺構内出土土器16



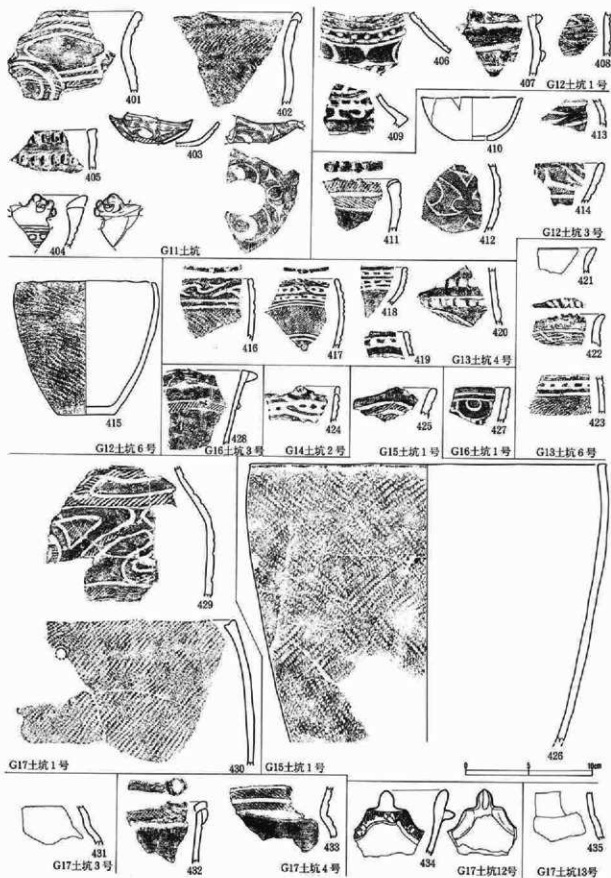
第152圖 遺構內出土土器17



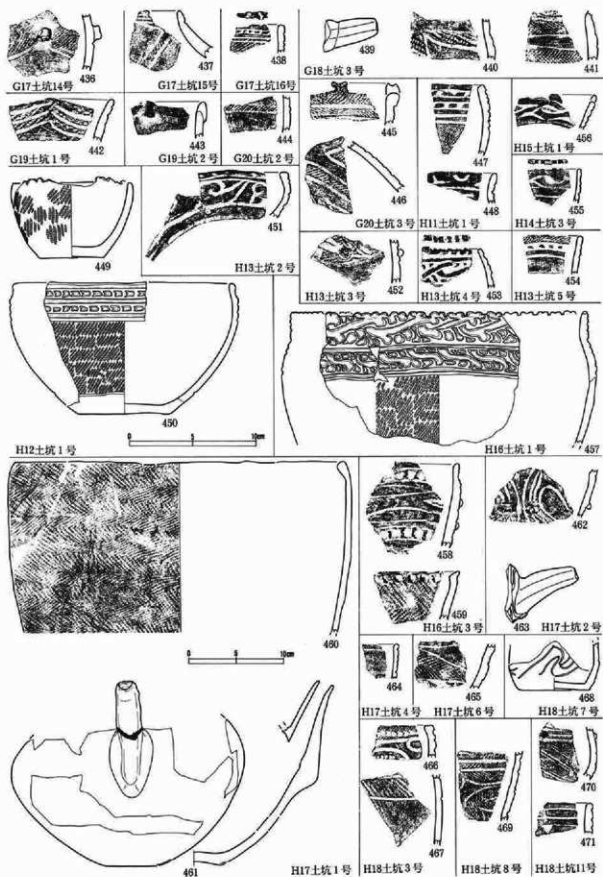
第153图 遺構内出土土器18



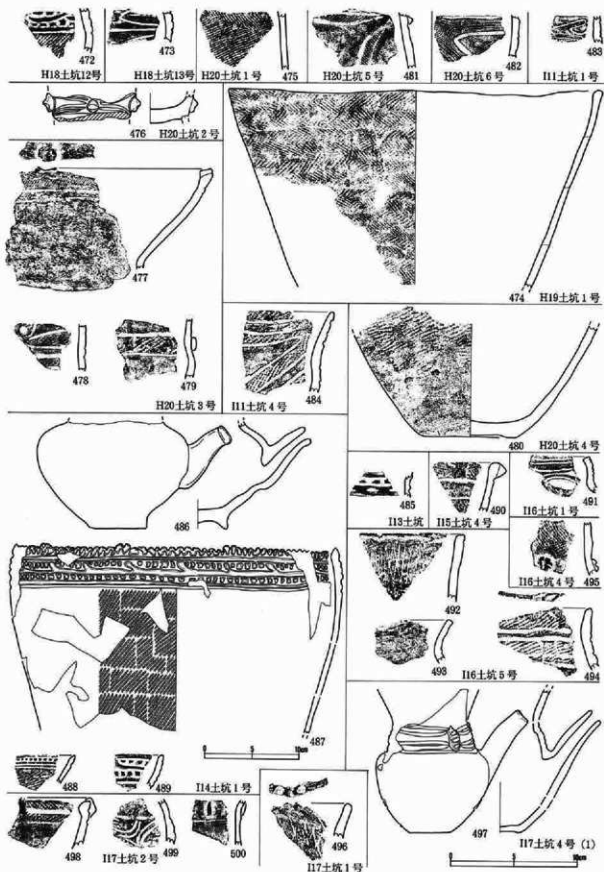
第154图 遺構内出土土器19



第155图 遺構内出土土器20



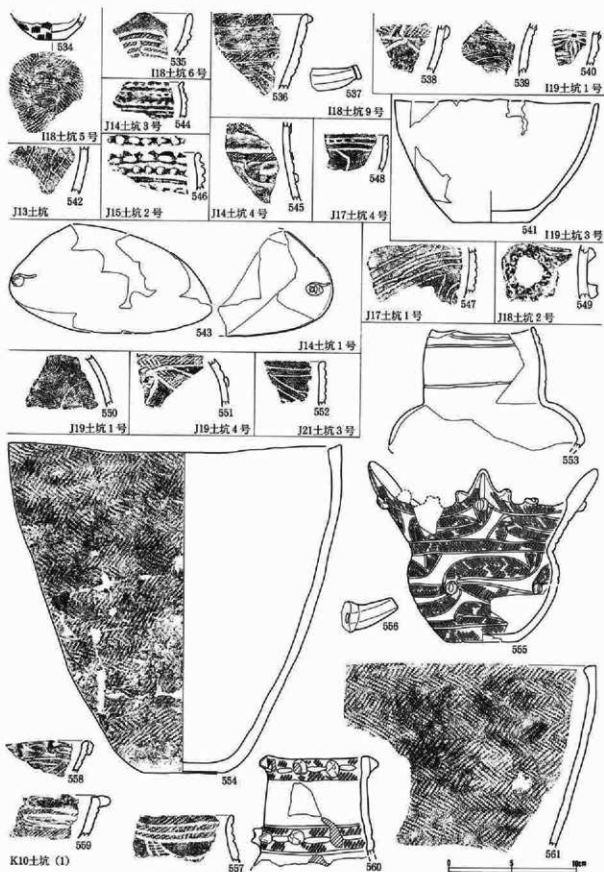
第156图 濠内出土器21



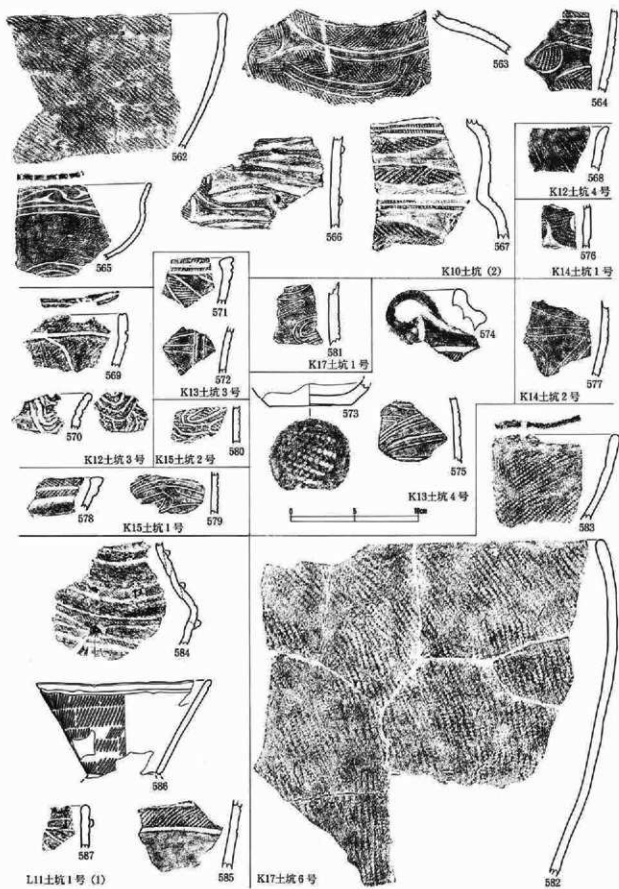
第157图 遺構内出土土器22



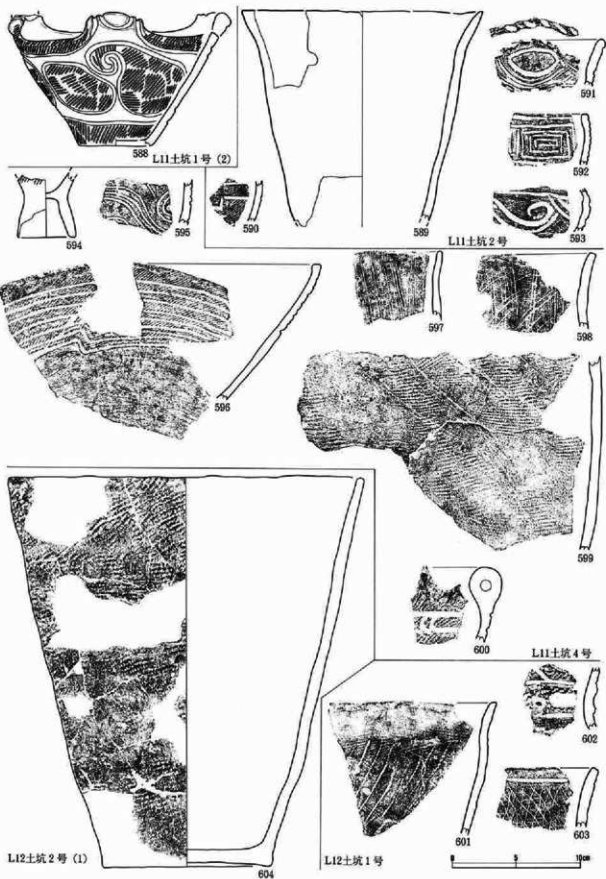
第158图 遗址内出土土器23



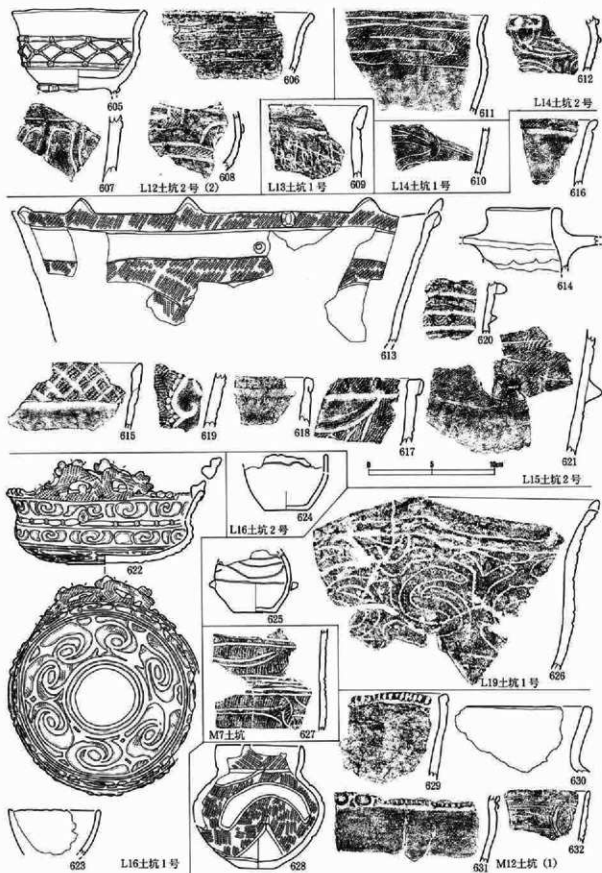
第159图 濠沟内出土土器24



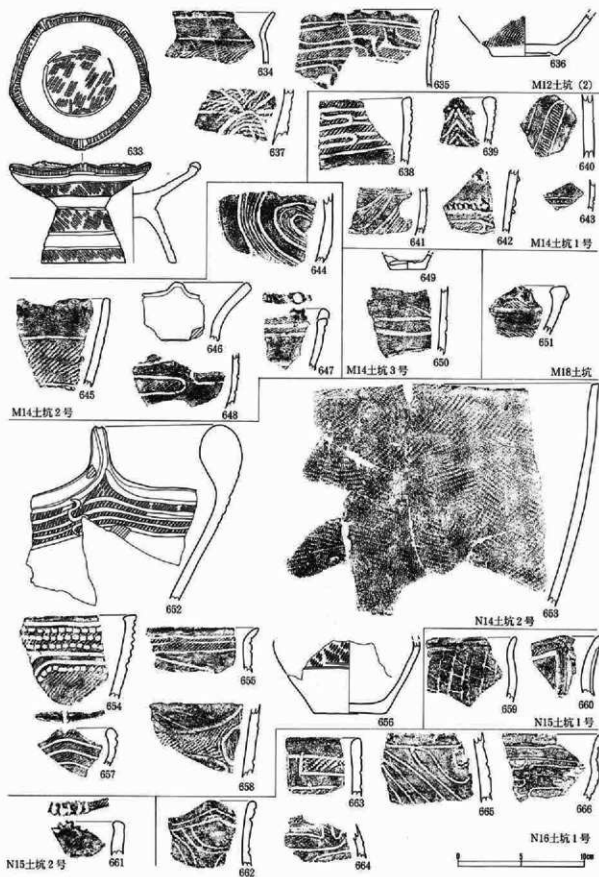
第160图 遺構内出土土器25



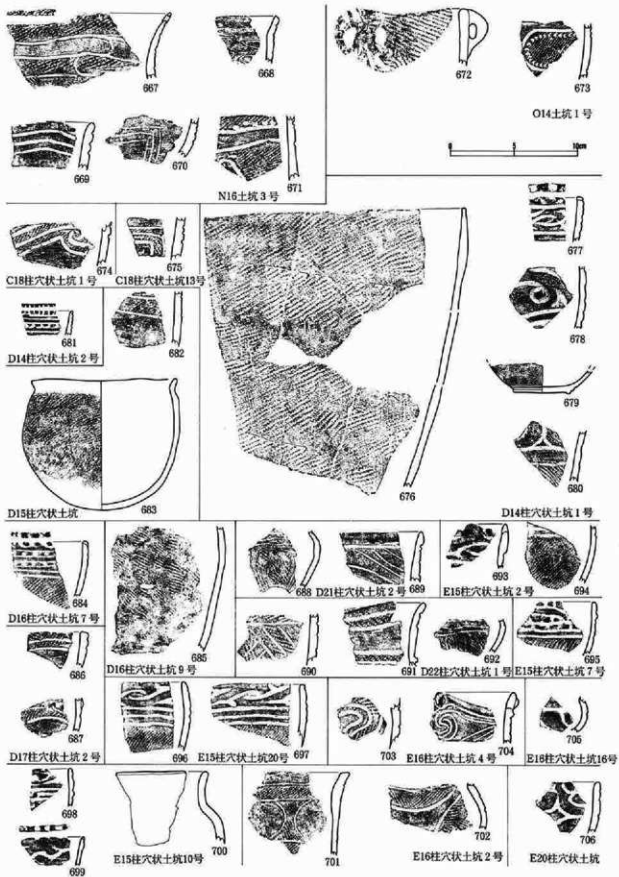
第161图 濠内出土土器26



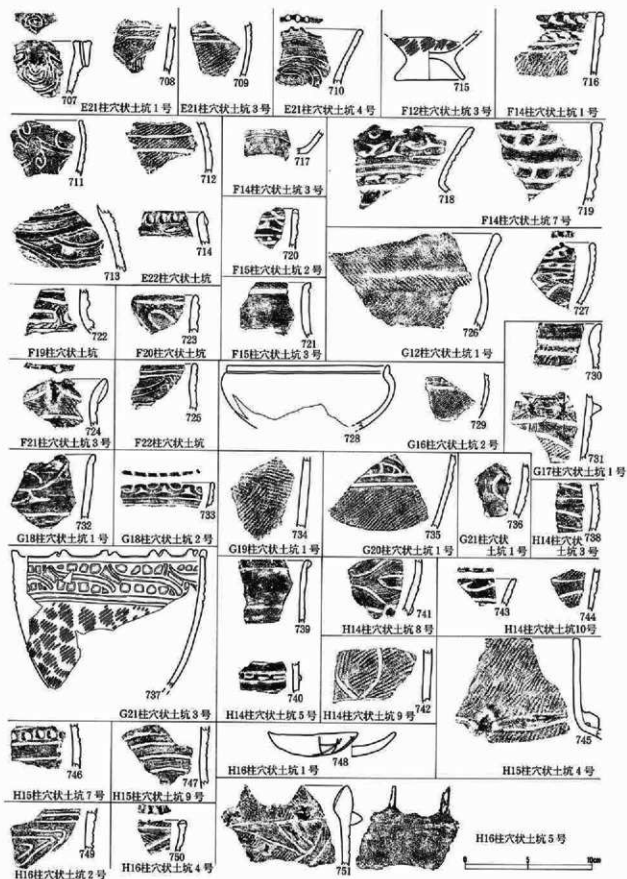
第162图 濠内出土土器27



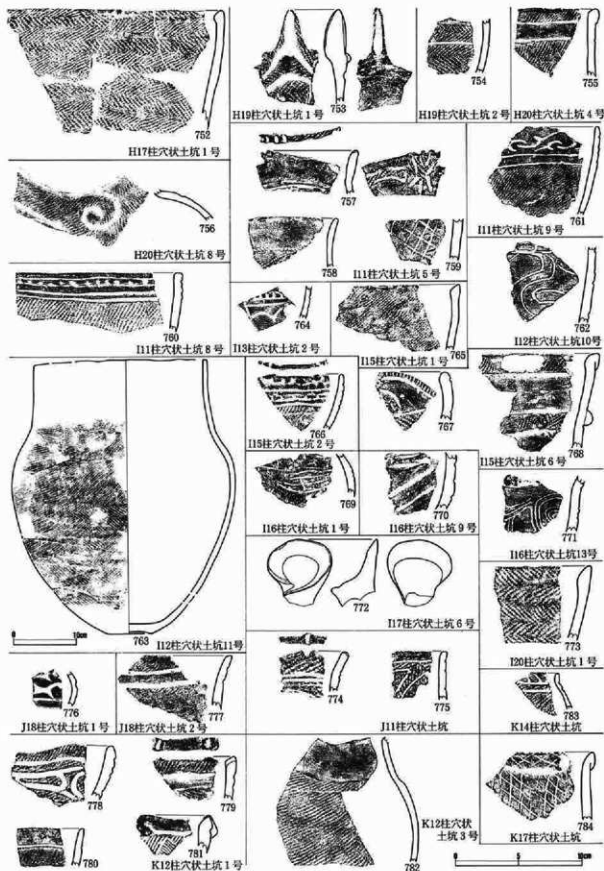
第163图 濠内出土器物28



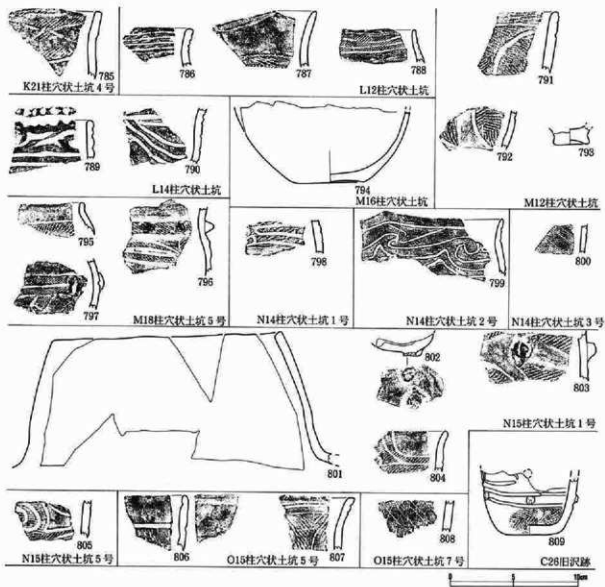
第164图 遺構内出土土器29



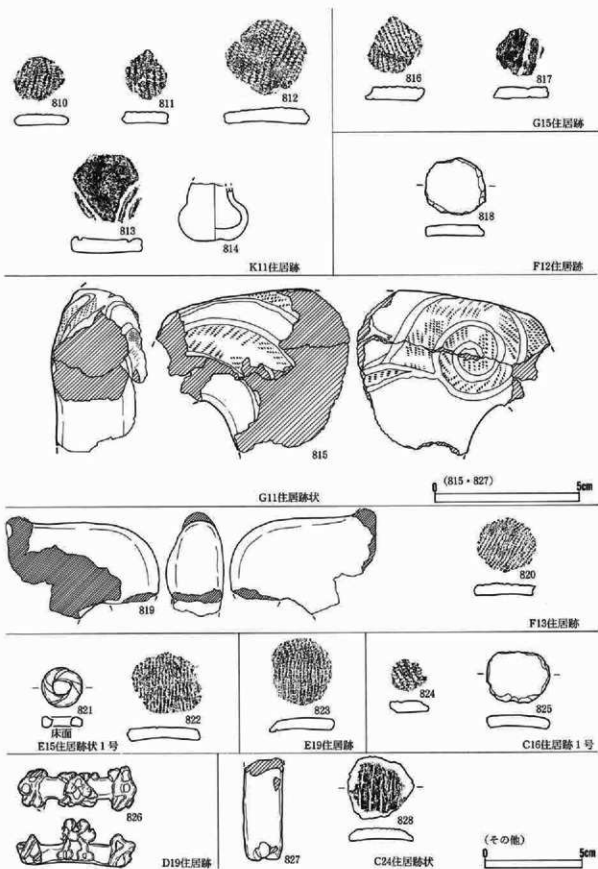
第165图 遺構内出土土器30



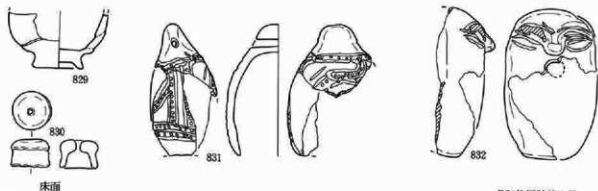
第166图 遺構内出土土器31



第167图 遺構内出土土器32



第168図 遺構内出土製品1



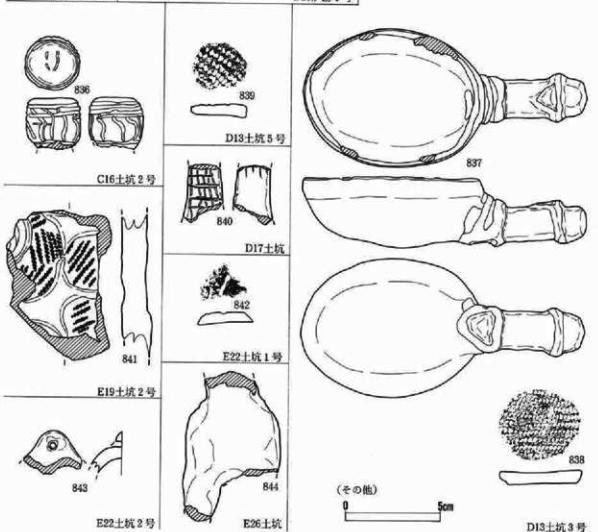
珠面

B21住居跡状 3号



B24伊跡 1号

D23伊跡 1号



C16土坑 2号

E19土坑 2号

E22土坑 2号

D13土坑 5号

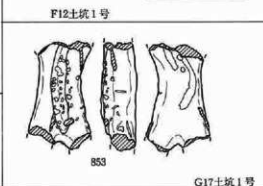
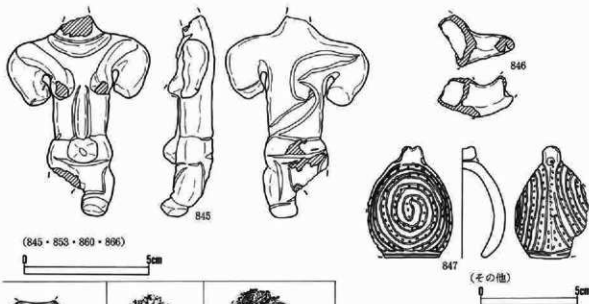
D17土坑

E22土坑 1号

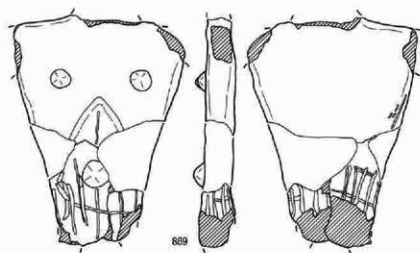
E26土坑

D13土坑 3号

第169図 遺構内出土土製品 2



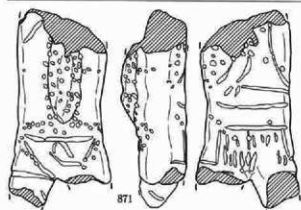
第170図 遺構内出土土製品 3



J17土坑4号



K10土坑



K20土坑2号

L11土坑4号

(869・871・884)
0 5cm

J21土坑3号

L11土坑3号

L12土坑2号



L12土坑1号



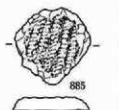
L13土坑1号



L14土坑4号



L20土坑2号



M14土坑3号



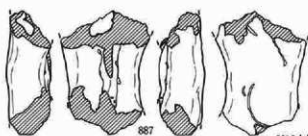
M15土坑1号



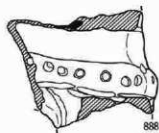
M14土坑1号

(その他)
0 5cm

第171图 遺構内出土土製品4



N16土坑1号



N16土坑3号



O14土坑1号



O14土坑3号

(その他)
0 5cm



D14柱穴状土坑1号



D16柱穴状土坑3号



D22柱穴状土坑1号



F12柱穴状土坑3号



F15柱穴状土坑1号



897



F22柱穴状土坑



G21柱穴状土坑2号



H16柱穴状土坑10号



H16柱穴状土坑4号



902

H14柱穴状土坑8号



903

I17柱穴状土坑2号



904



905

L12柱穴状土坑

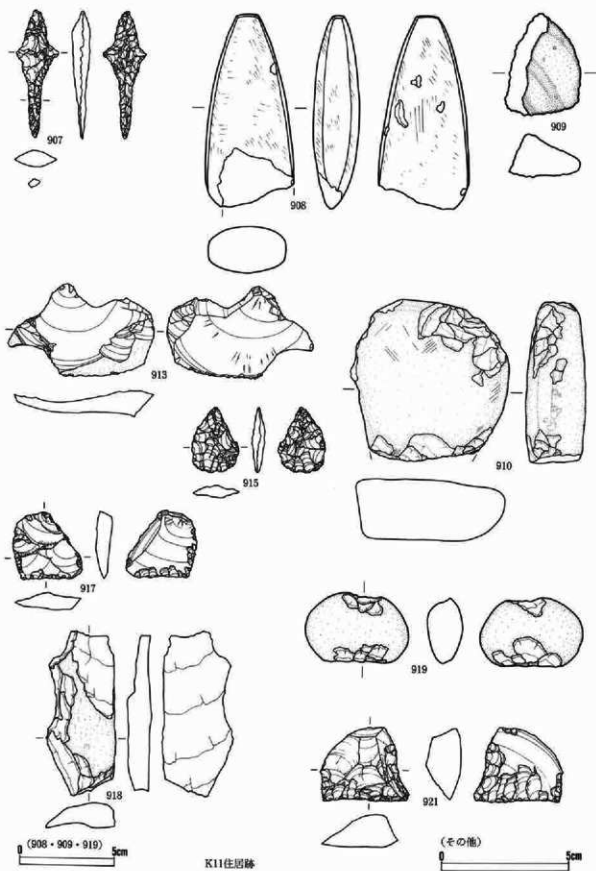


906

C26旧沢跡

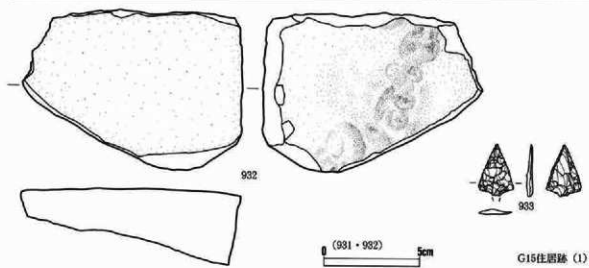
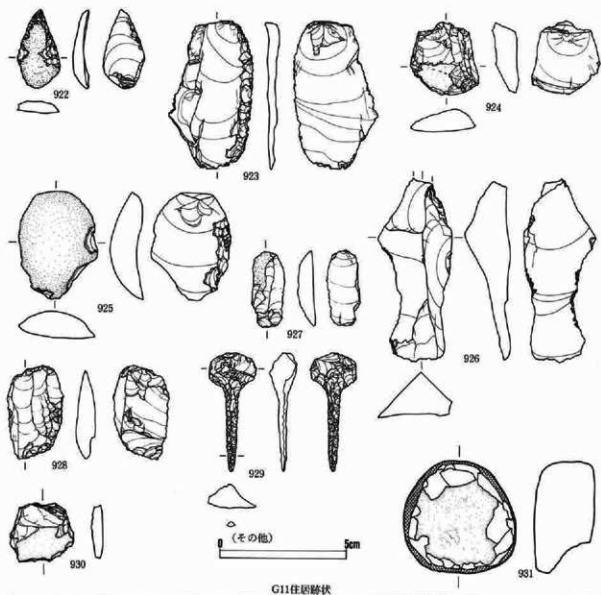
(887・888・900)
0 5cm

第172図 遺構内出土土製品5

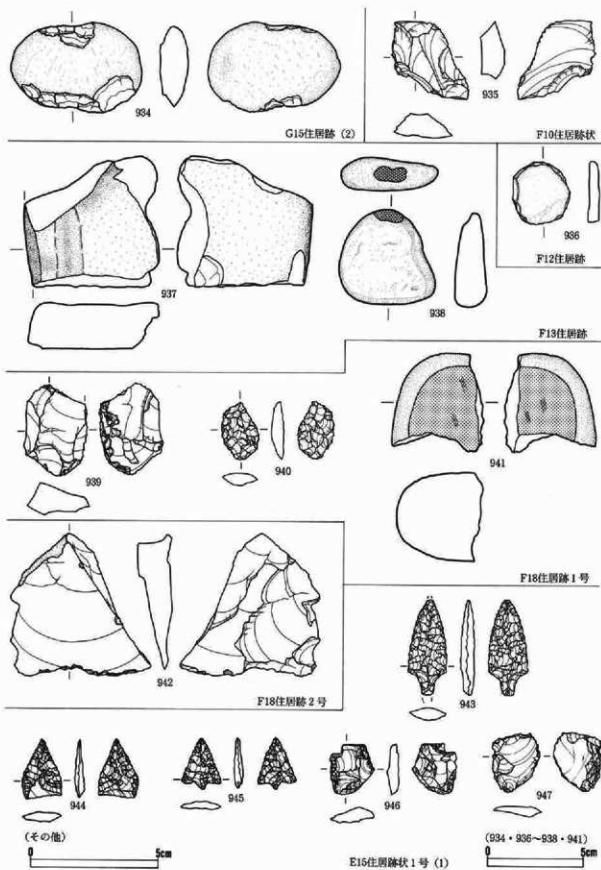


K11住居跡

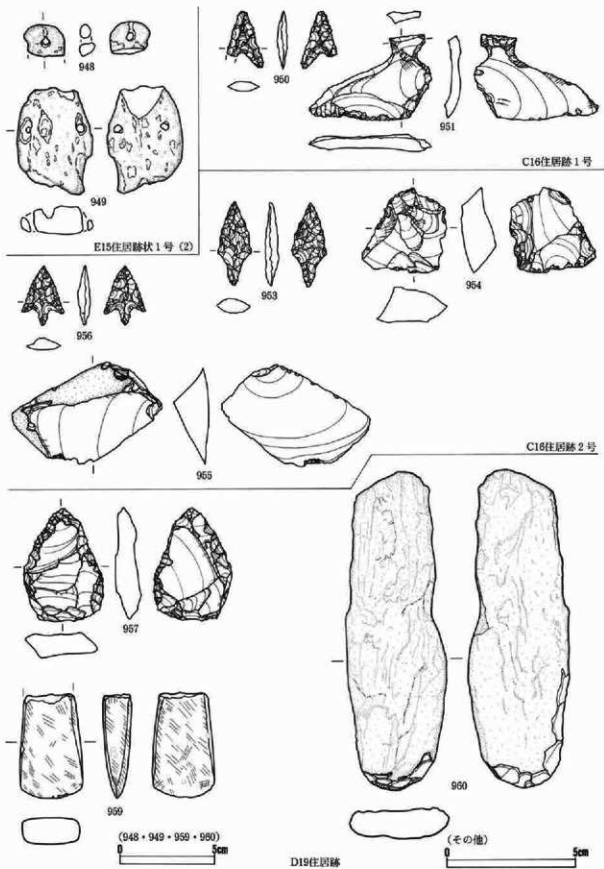
第173図 遺構内出土石器 1



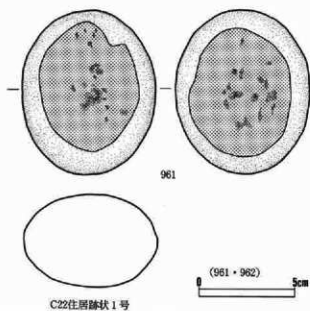
第174図 遺構内出土石器 2



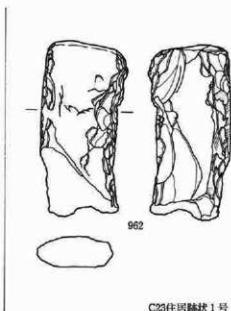
第175図 遺構内出土石器 3



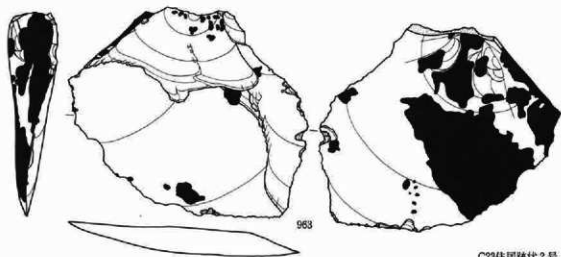
第176図 遺構内出土石器 4



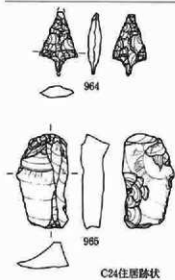
C22住居跡状 1号



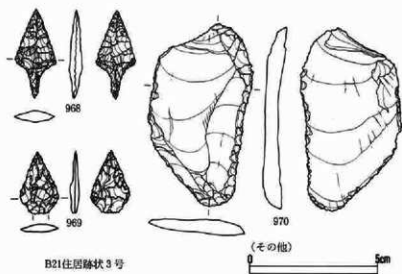
C23住居跡状 1号



C23住居跡状 2号

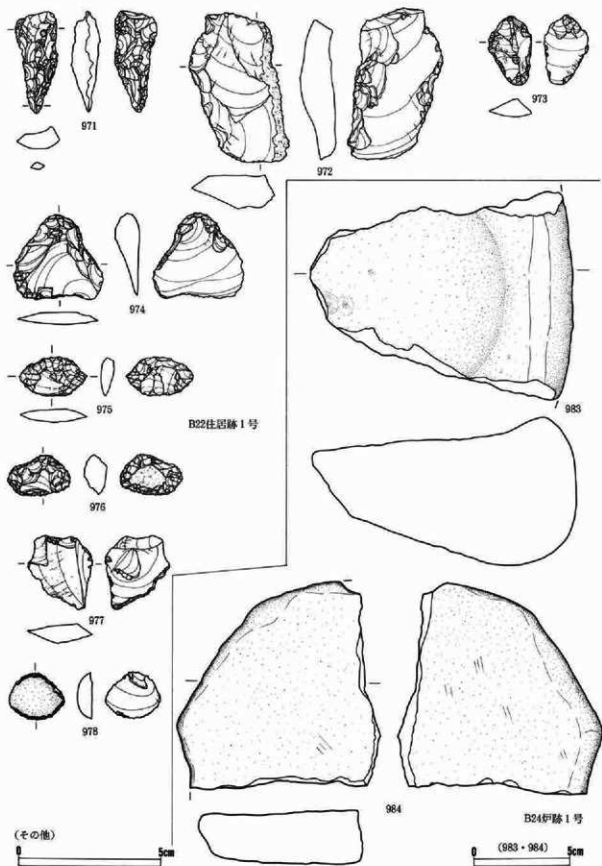


C24住居跡状



B21住居跡状 3号

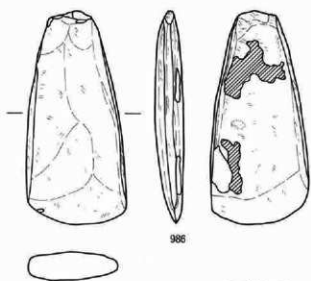
第177図 遺構内出土石器 5



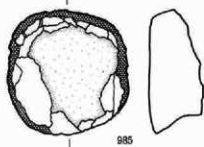
第178図 遺構内出土石器6



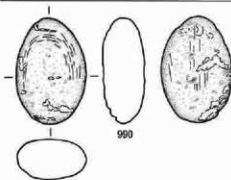
B23跡跡



D23跡跡 1号



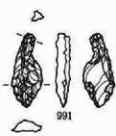
985



990

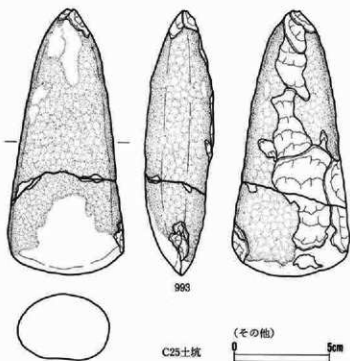
(981・824・991) 5cm

C23機土



991

C15土坑 1号

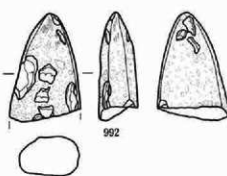


993

C25土坑

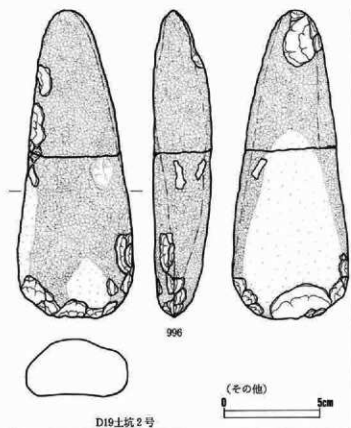
(その他)

0 5cm



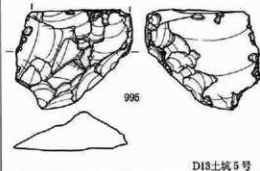
992

第176図 遺構内出土石器 7

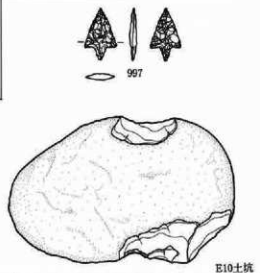


D19土坑2号

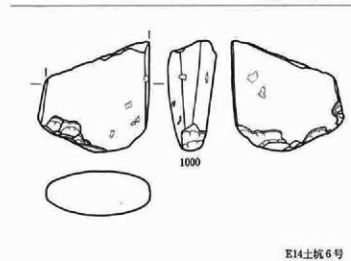
D13土坑4号



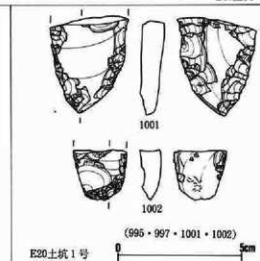
D13土坑5号



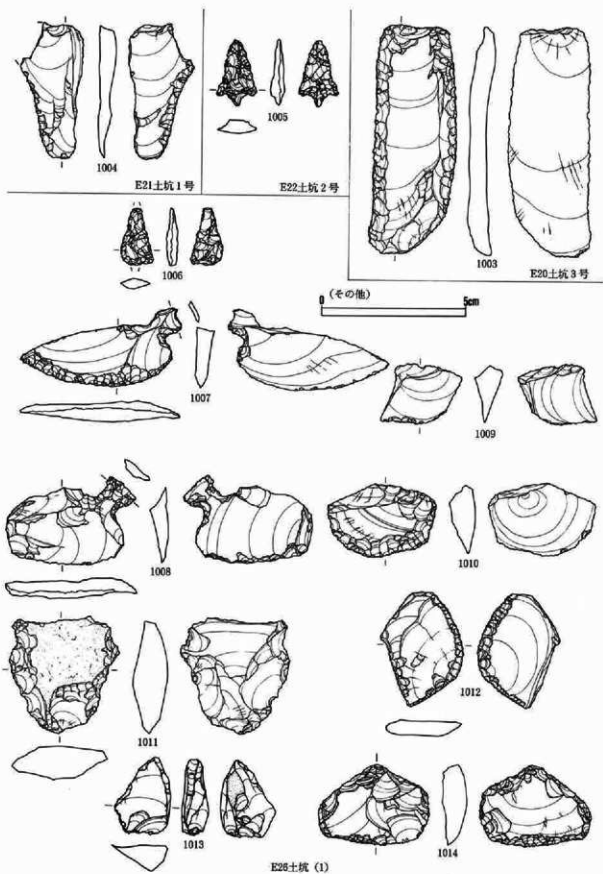
E10土坑



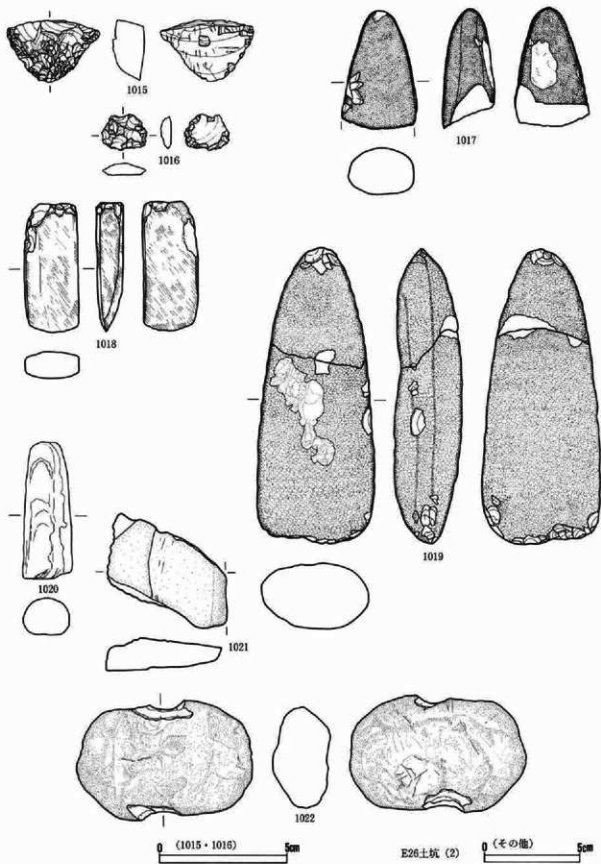
E14土坑6号



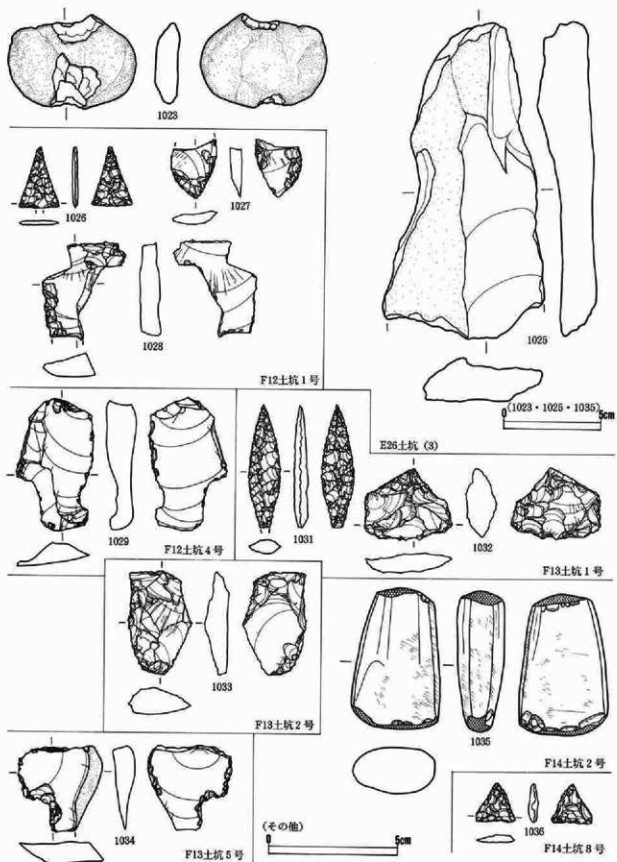
E20土坑1号



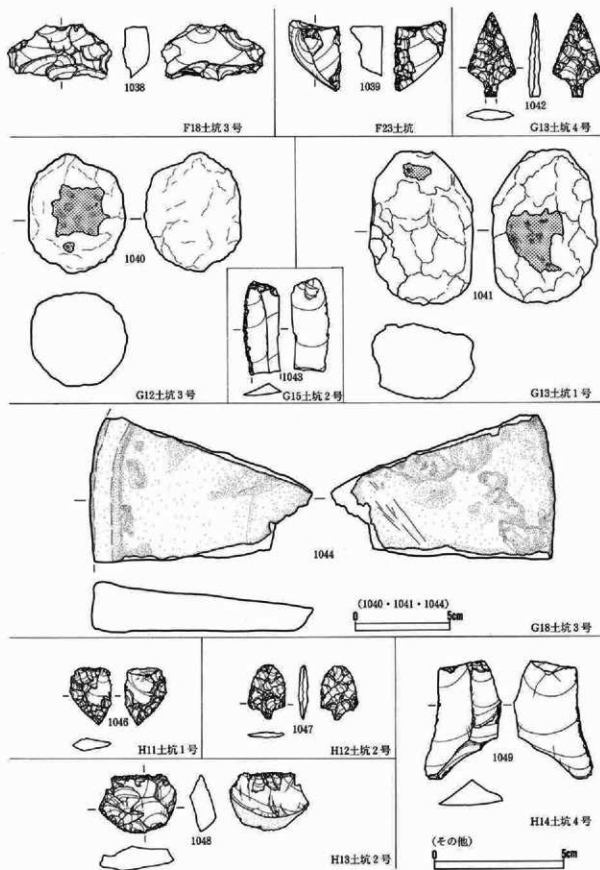
第181圖 遺構内出土石器9



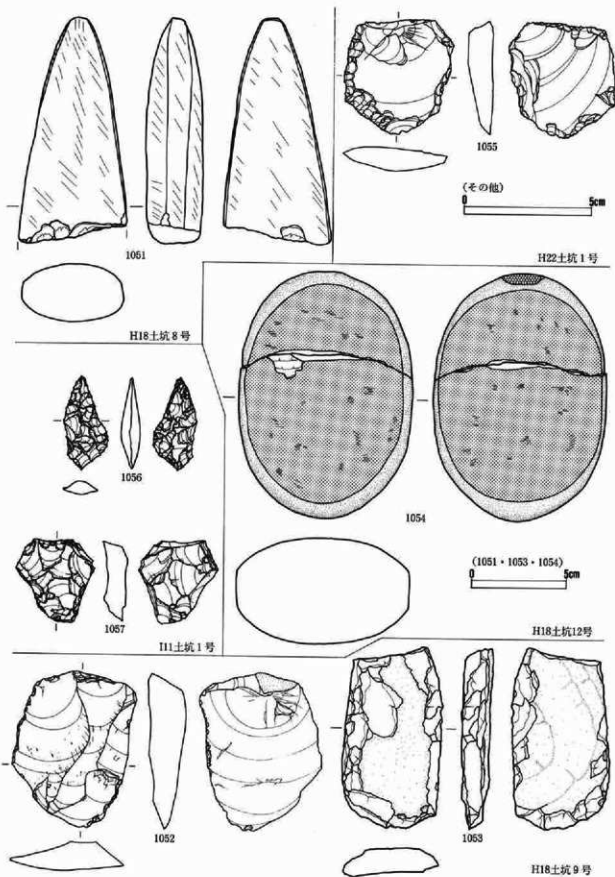
第182図 遠構内出土石器10



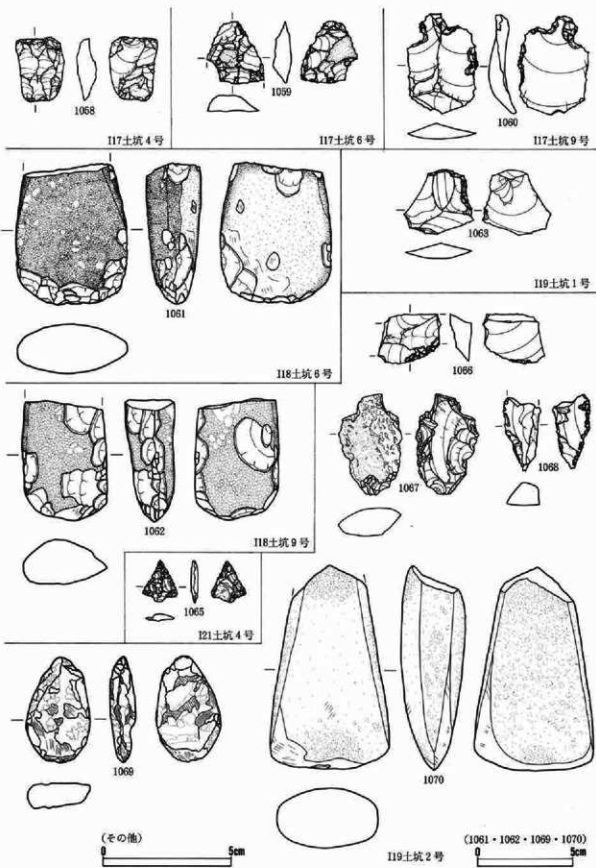
第183図 遺構内出土石器11



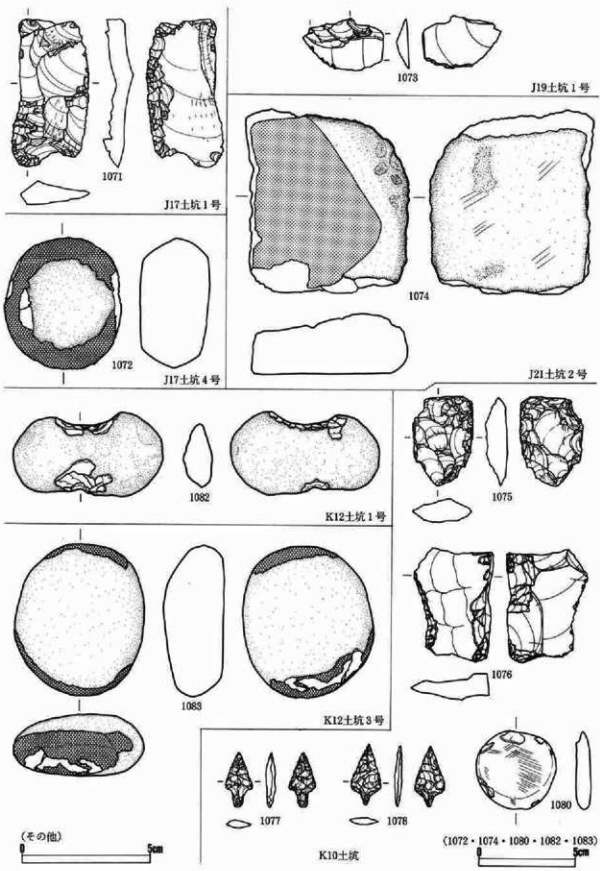
第184図 遺構内出土石器12



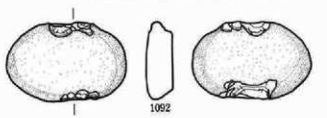
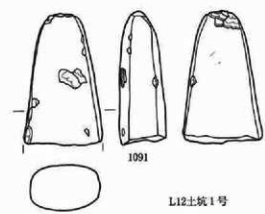
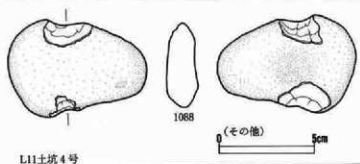
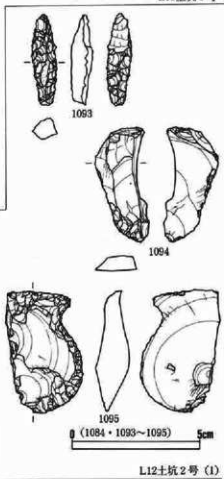
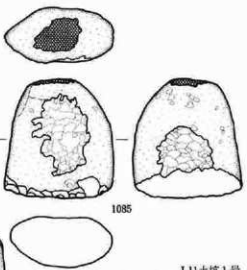
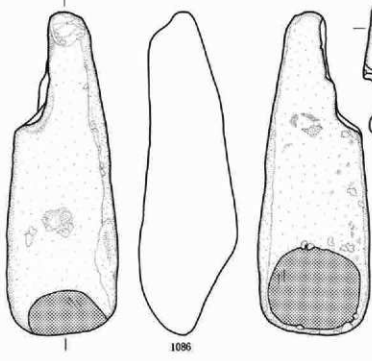
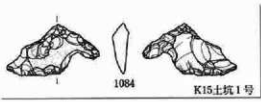
第185図 遺構内出土石器13



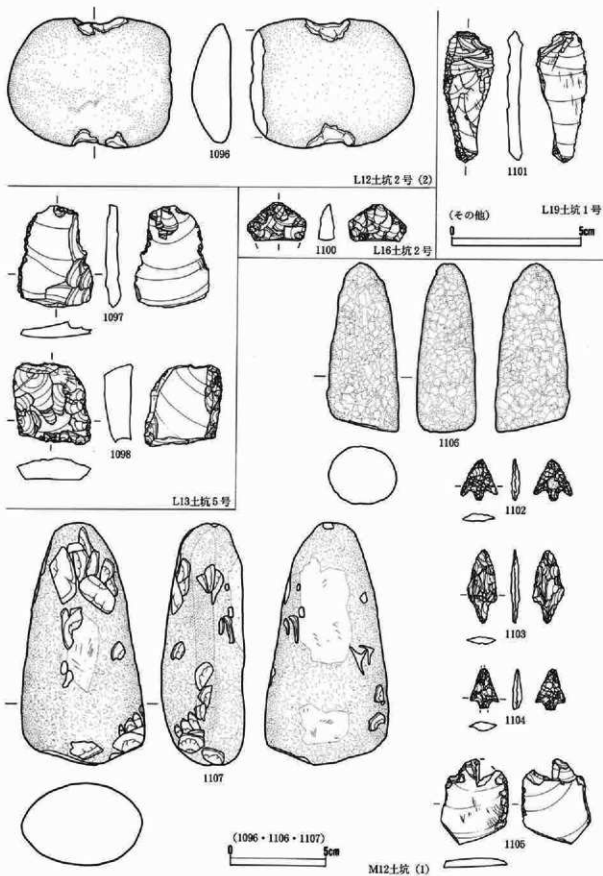
第186図 遺構内出土石器14



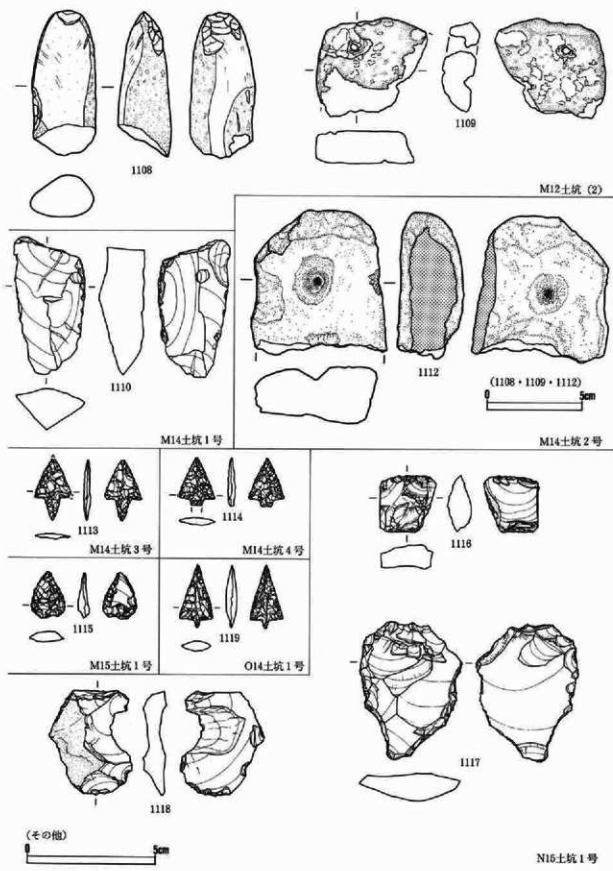
第187図 遺構内出土石器15



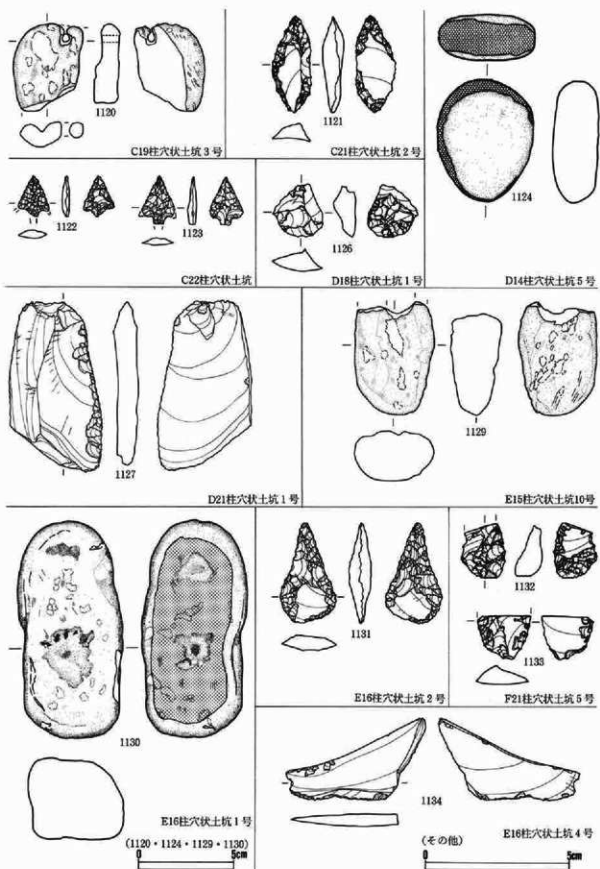
第188図 遺構内出土石器16



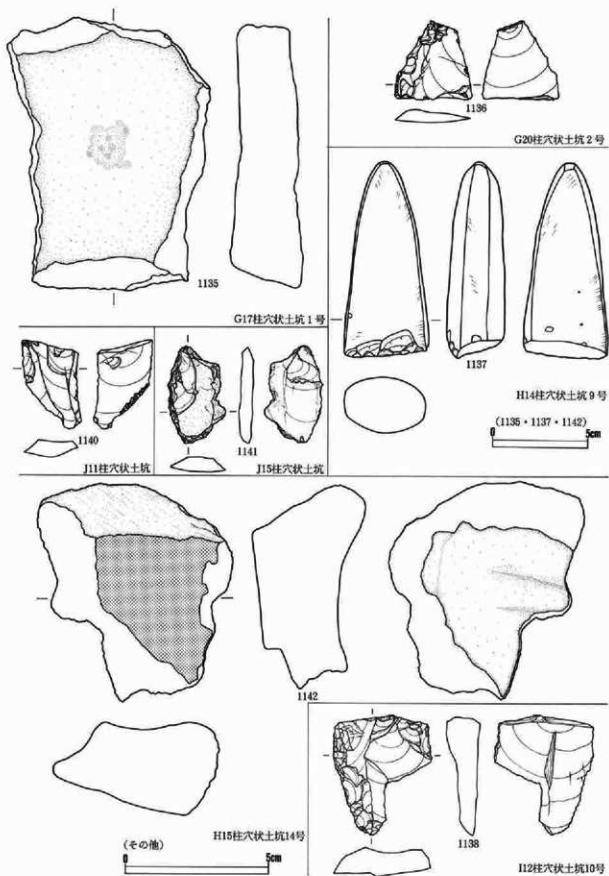
第189図 遺構内出土石器17



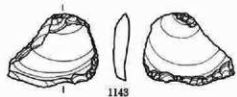
第190図 遺構内出土石器18



第191図 遺構内出土石器19

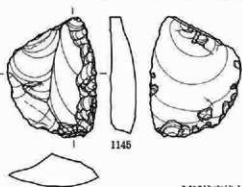


第192図 遺構内出土石器20



1143

K12柱穴状土坑1号



1145

M12柱穴状土坑

0 (1143・1145~1147・1149) 5cm



1144

K13柱穴状土坑

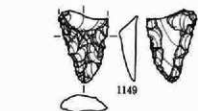


1146

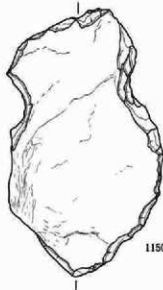


1147

N16柱穴状土坑1号



1149



1150

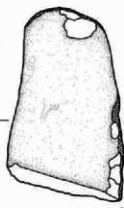
E16集石



1151



1152



1153

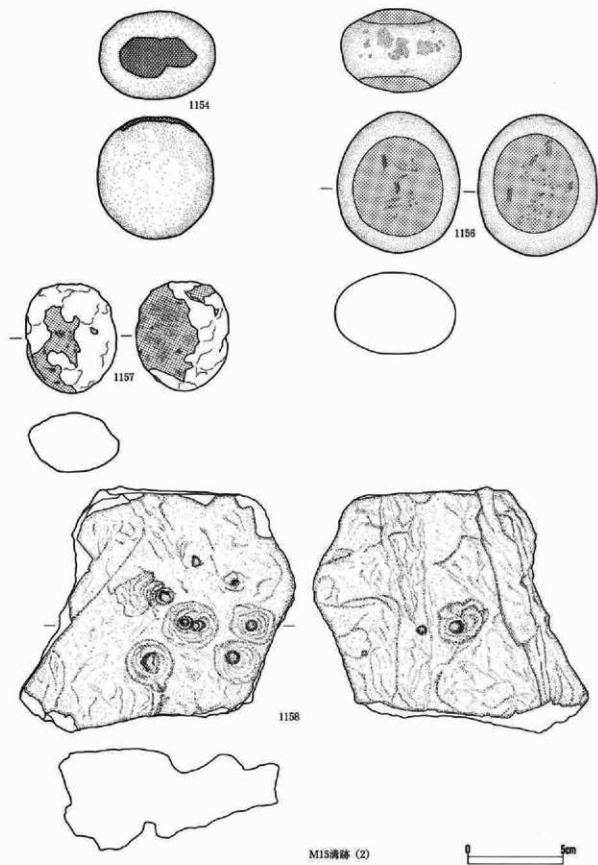


M15溝跡 (1)

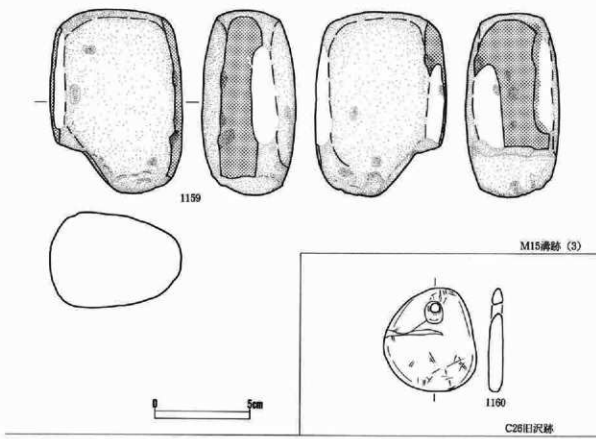
(その他)

0 5cm

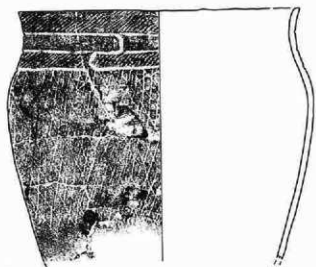
第193図 遺構内出土石器21



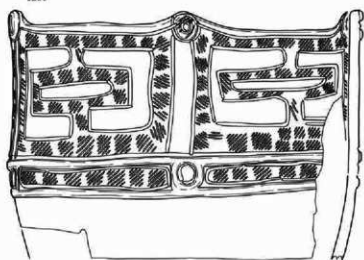
第194図 遺構内出土石器22



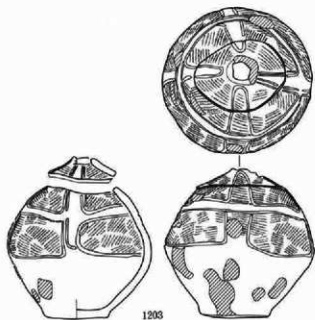
第195図 遺構内出土石器23



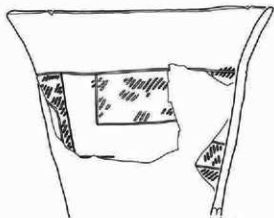
1201



1202

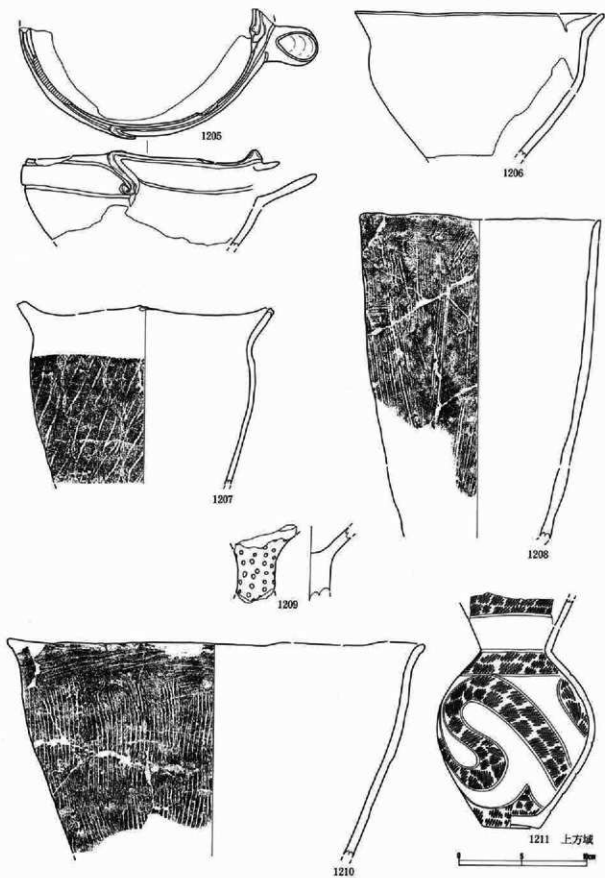


1203

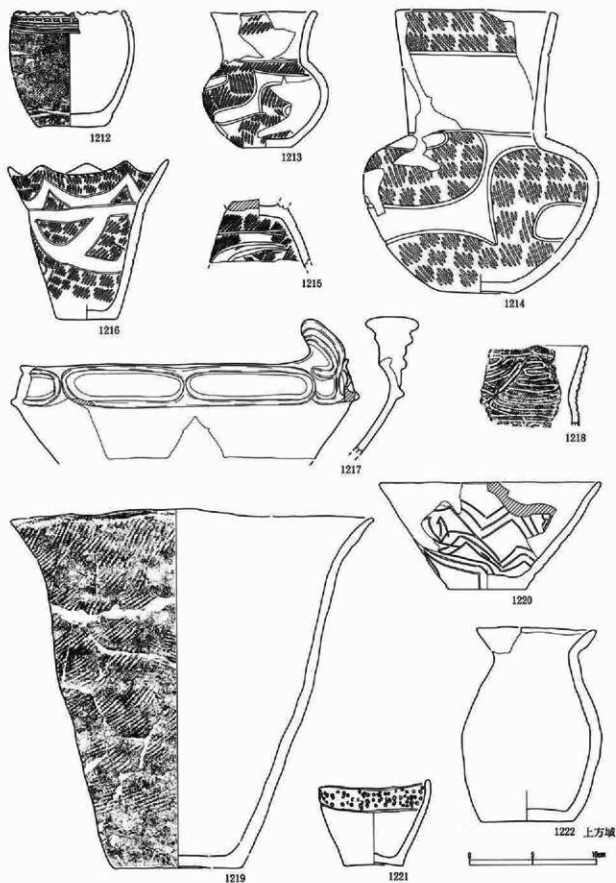


1204 上方城

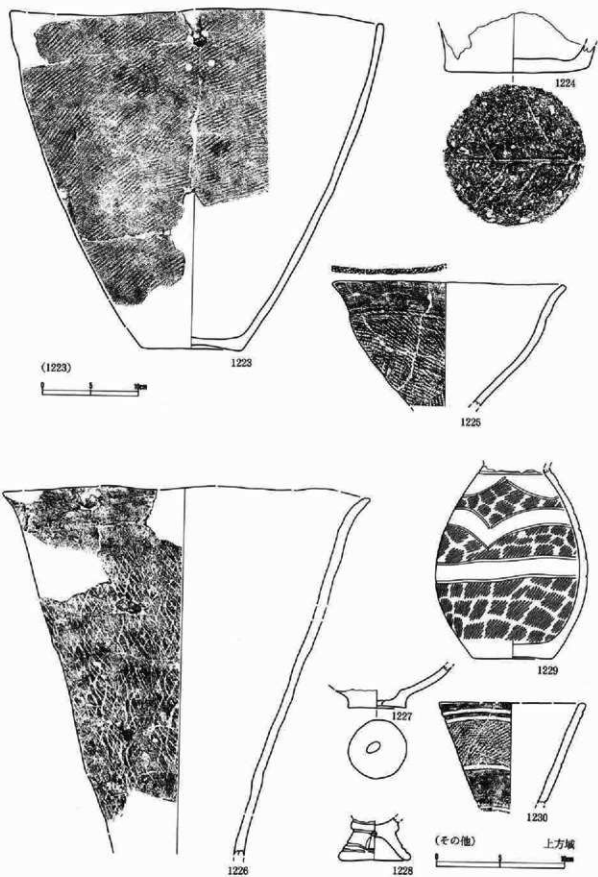
第196図 遺構外土器1 (東部捨て場)



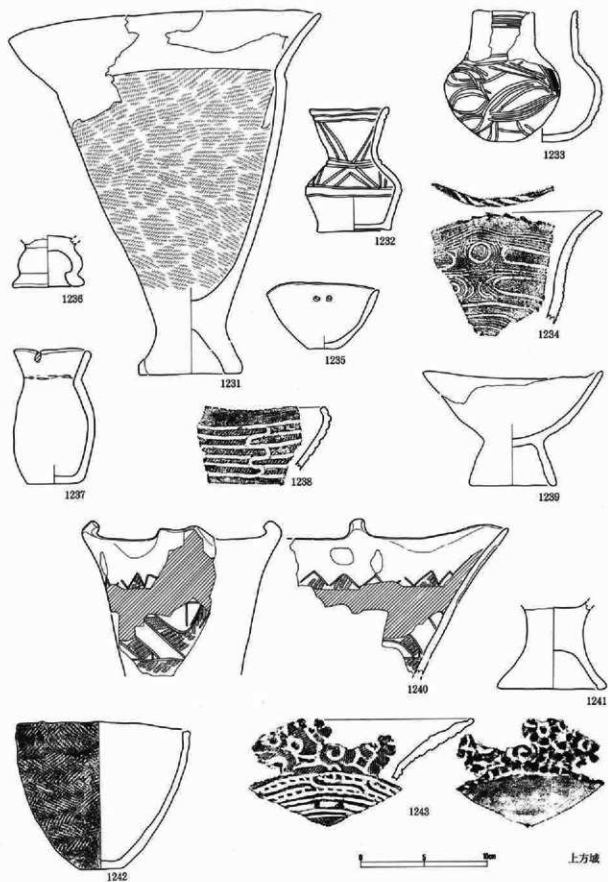
第197図 遺構外土器2 (東部捨て場)



第198図 遺構外土器 3 (東部捨て場)



第199図 遺構外土器4 (東部捨て場)



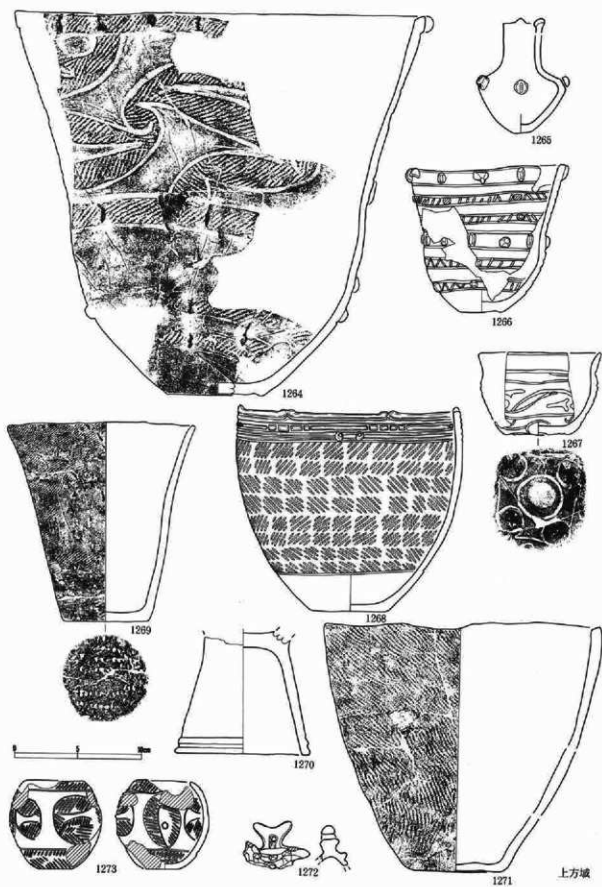
第200図 遺構外土器5（東部捨て場）



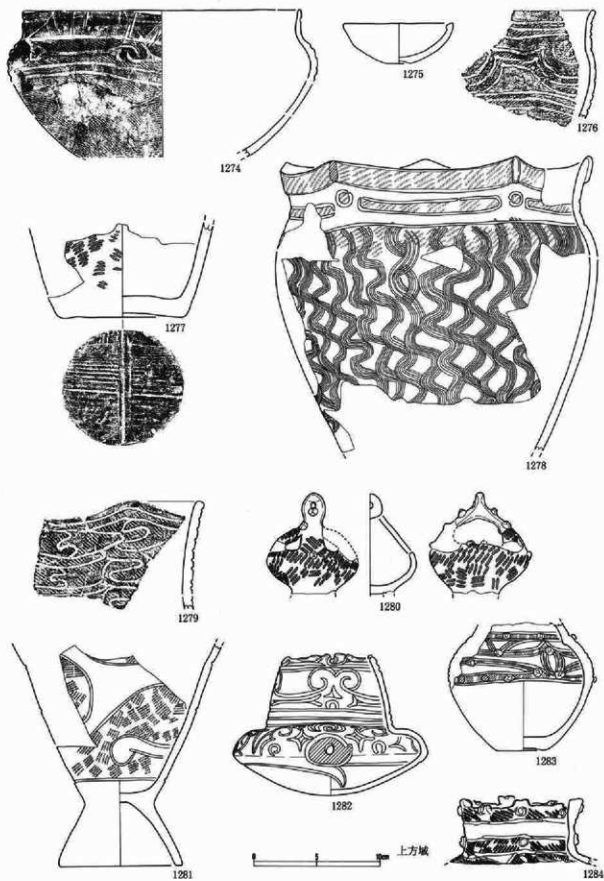
第201図 遺構外土器 6 (東部捨て場)



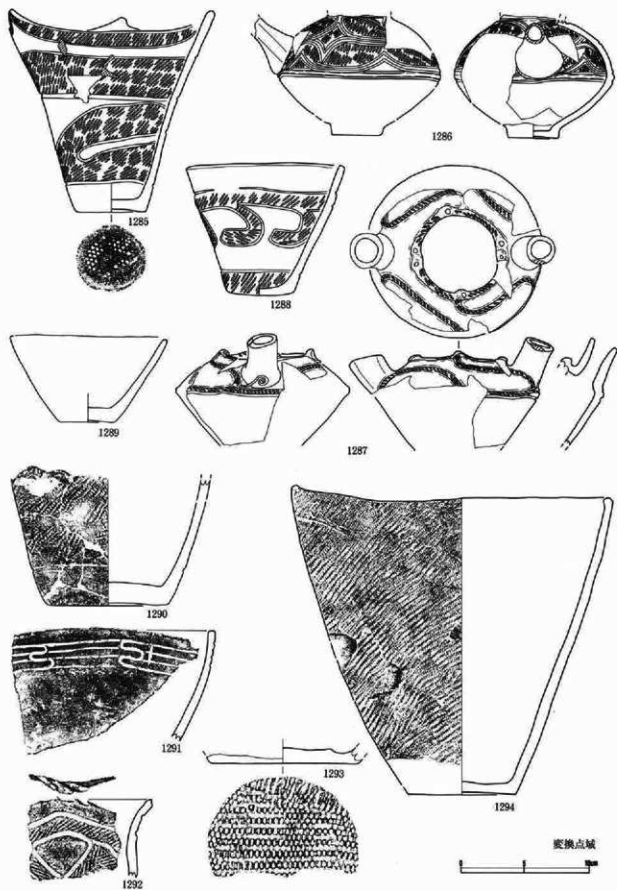
第202図 遺構外土器7（東部捨て場）



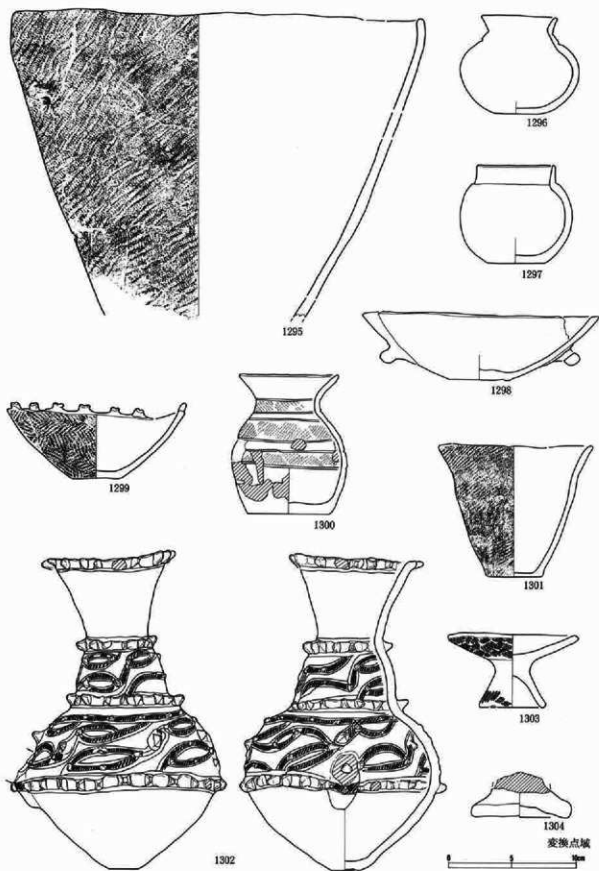
第203図 遺構外土器 8 (東部捨て場)



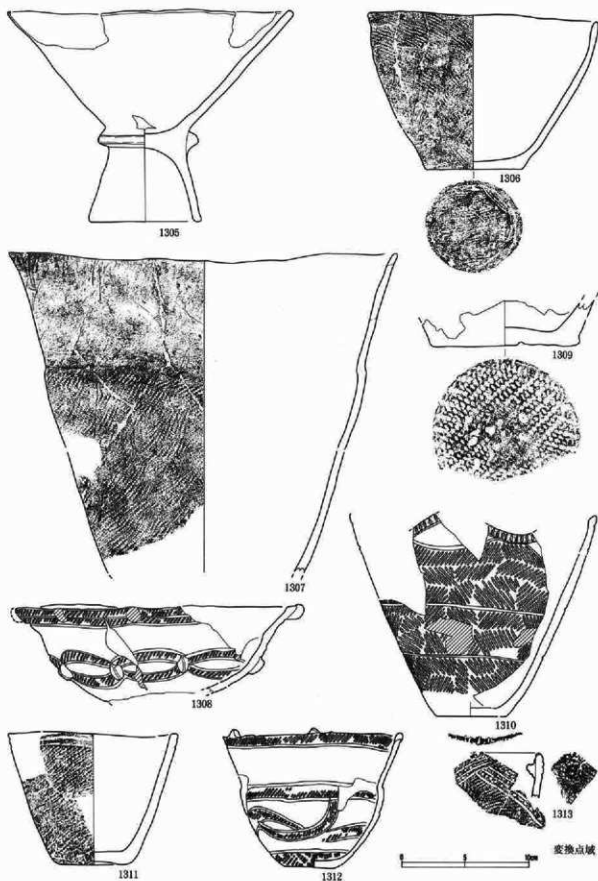
第204図 遺構外土器9（東部捨て場）



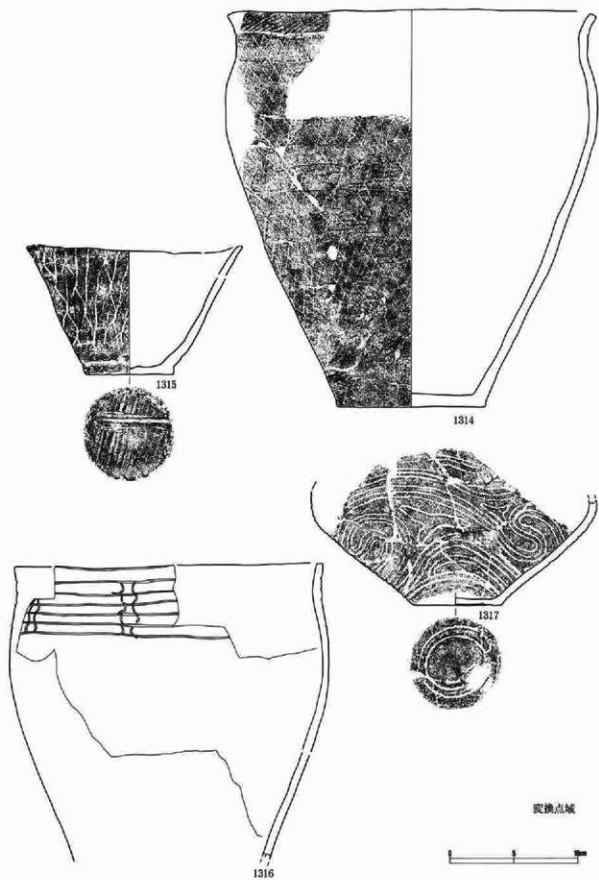
第205図 遺構外土器10 (東部掘り場)



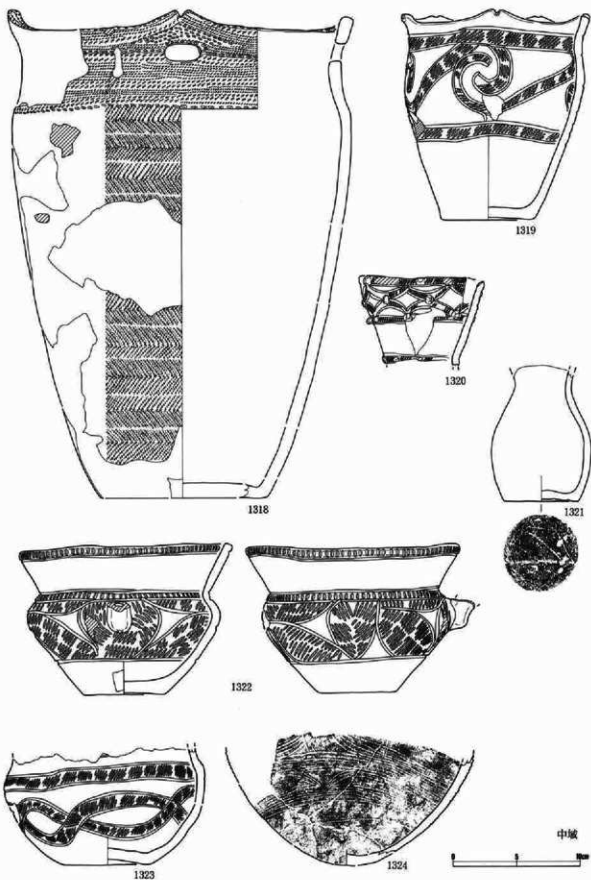
第206図 遺構外土器11（東部捨て場）



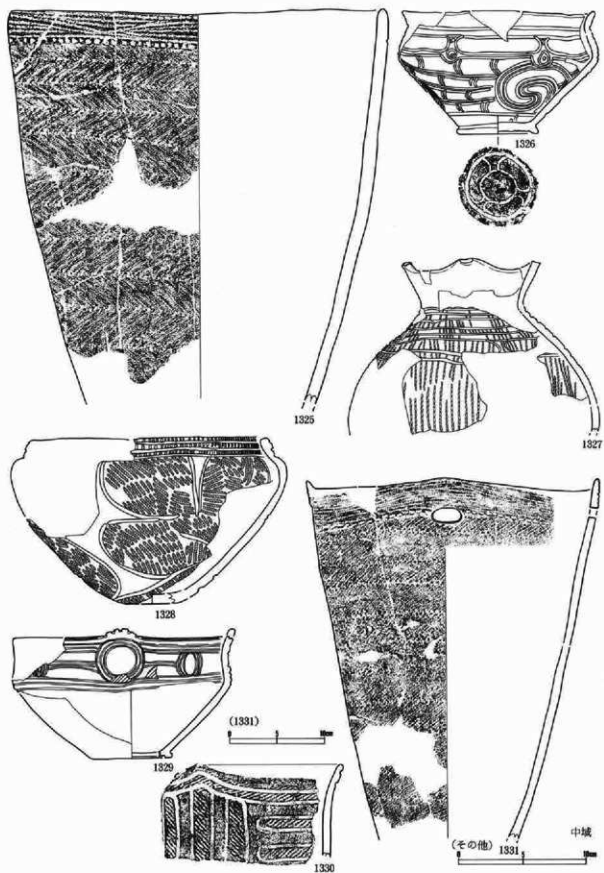
第207図 遺構外土器12 (東部捨て場)



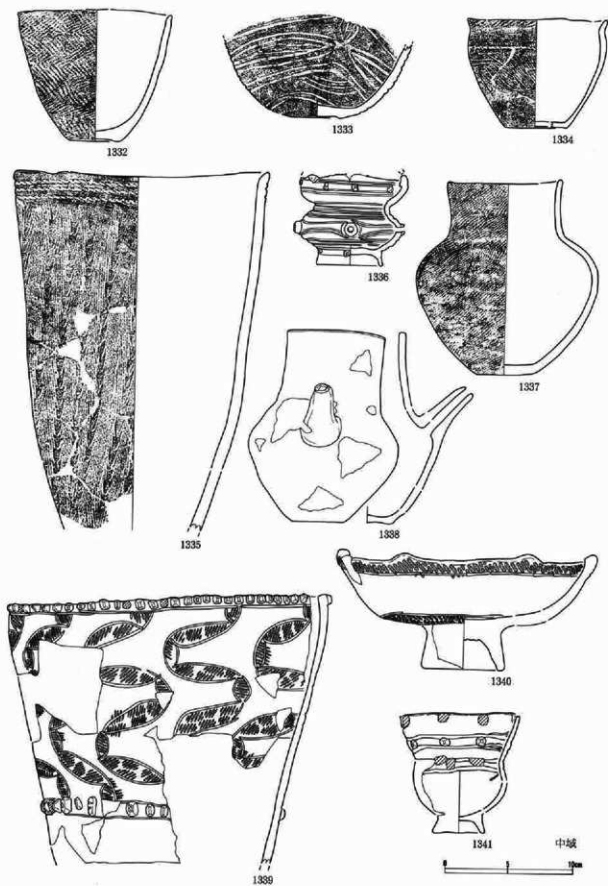
第208図 遺構外土器13 (東部捨て場)



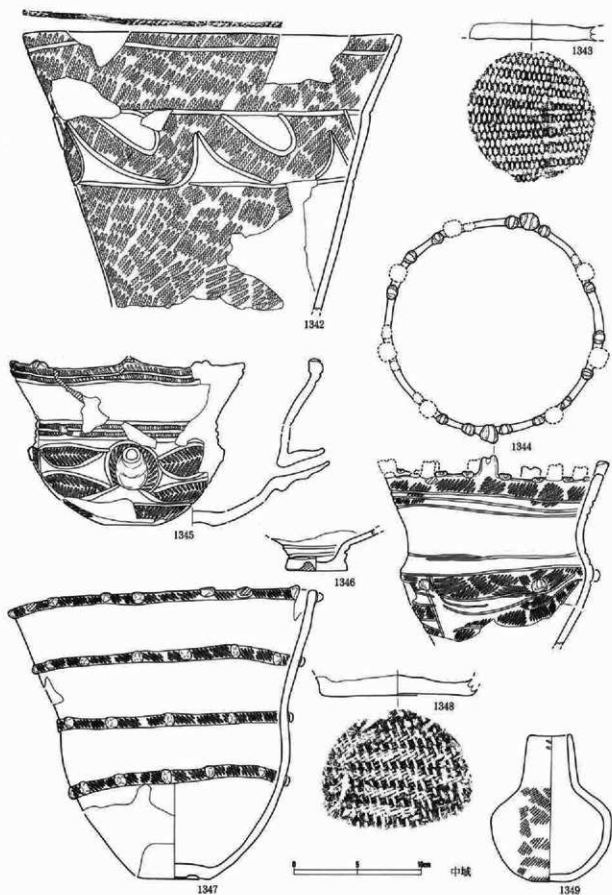
第209図 遺構外土器14 (東部捨て場)



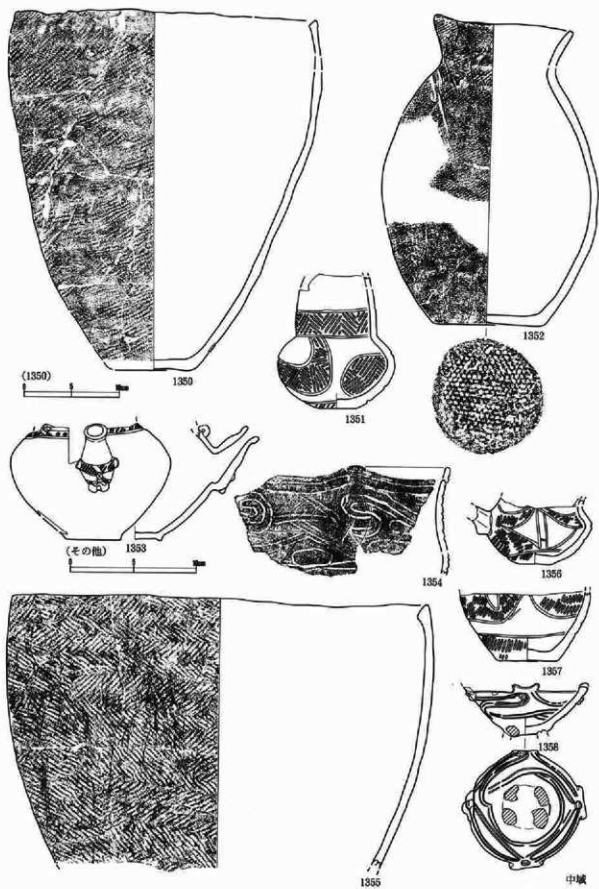
第210図 遺構外土器15（東部捨て場）



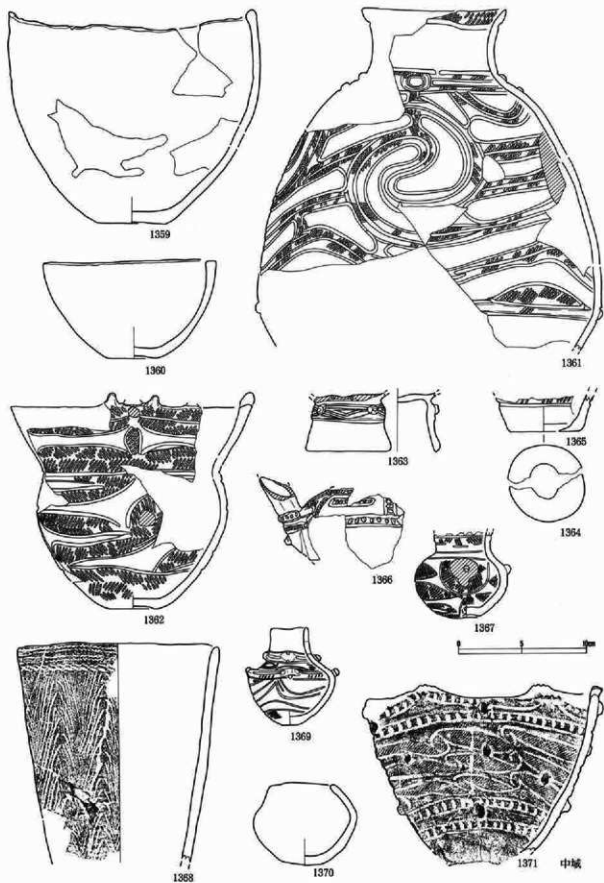
第211回 遠構外土器16 (東部捨て場)



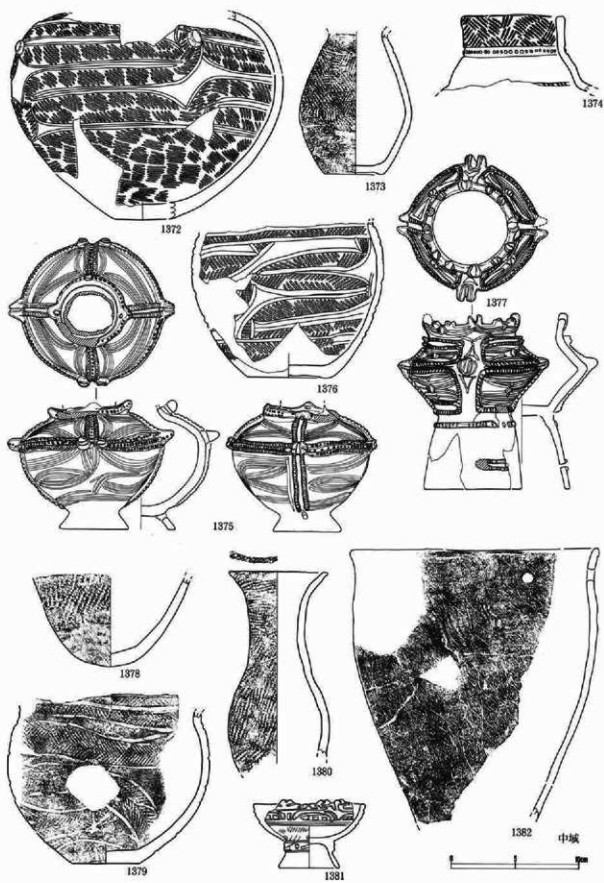
第212図 遺構外土器17 (東部捨て場)



第213図 遺構外土器18 (東部捨て場)



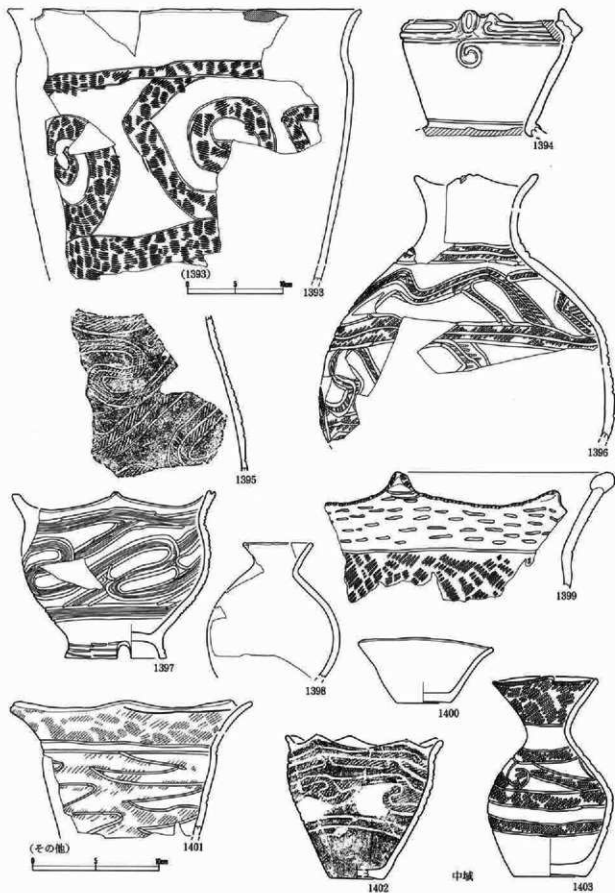
第214図 遺構外土器19 (東部捨て場)



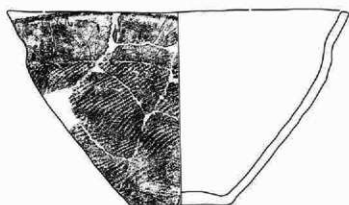
第215図 遺構外土器20 (東部捨て場)



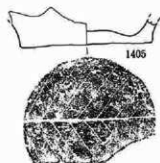
第216図 遺構外土器21 (東部捨て場)



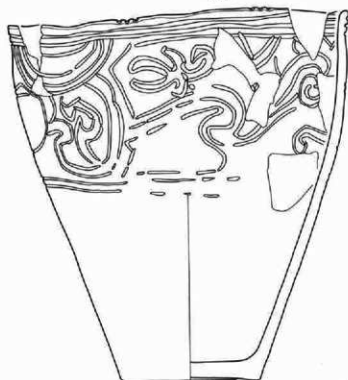
第217回 遠構外土器22 (東部捨て場)



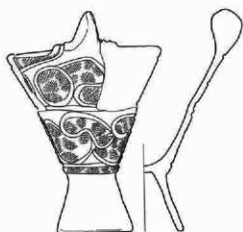
1404



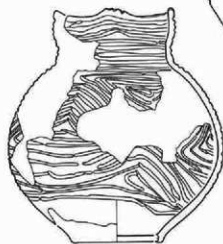
1405



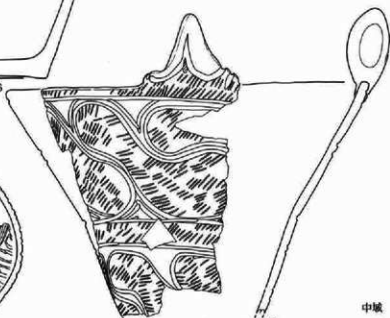
1406



1407



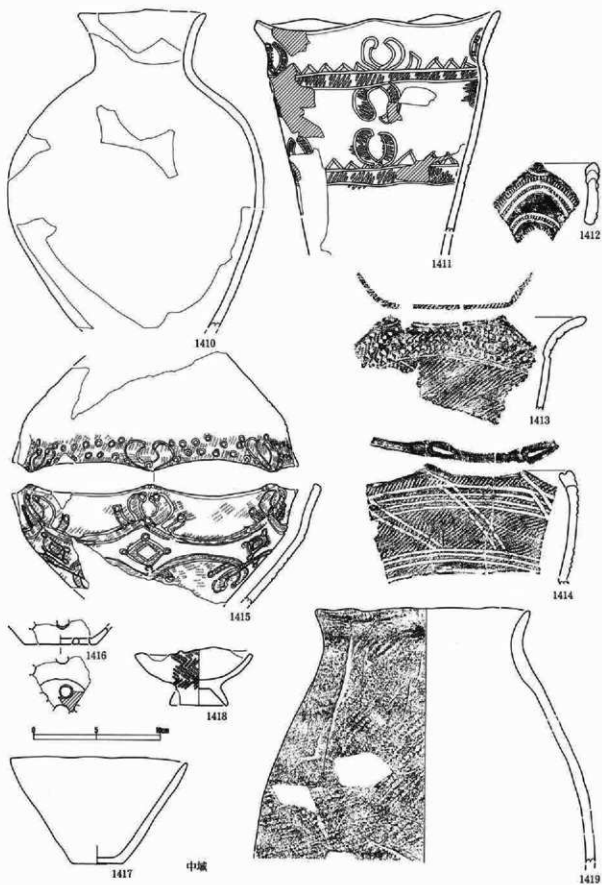
1408



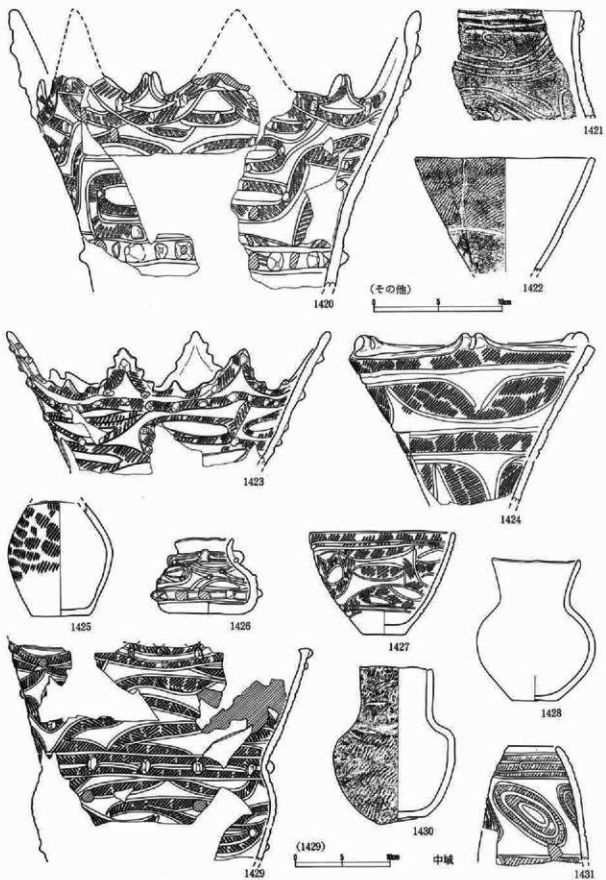
1409

中城

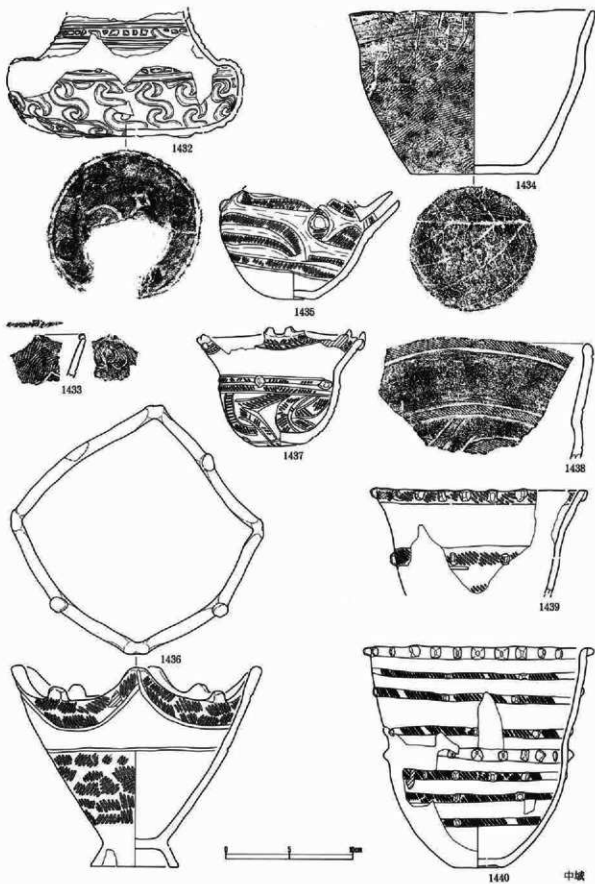
第218図 遺構外土器23 (東部捨て場)



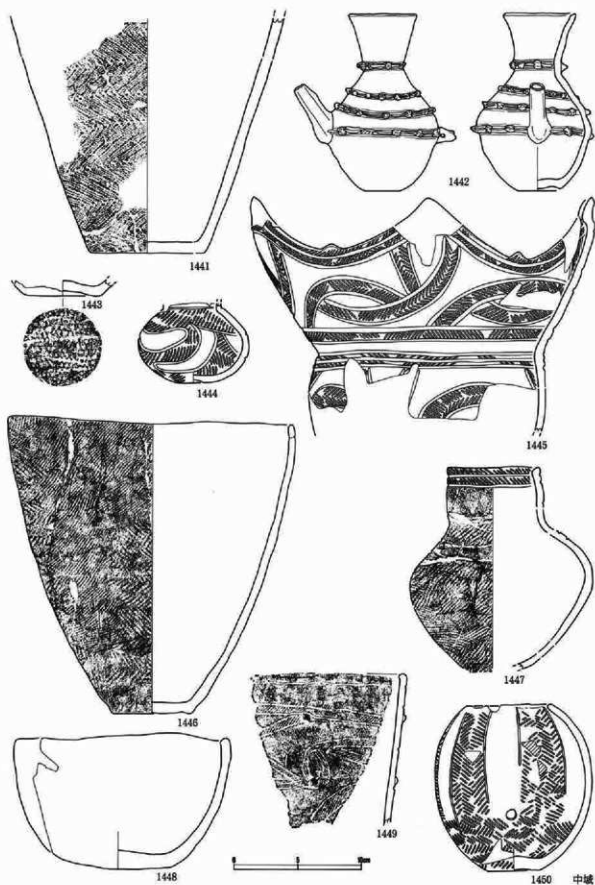
第219図 遺構外土器24 (東部捨て場)



第220図 遺構外土器25 (東部捨て場)



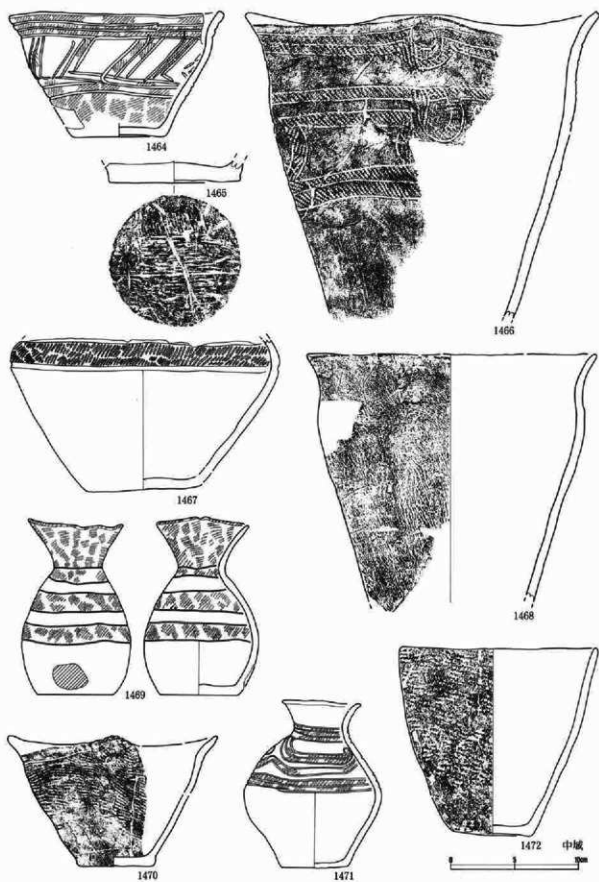
第221図 遺構外土器26 (東部捨て場)



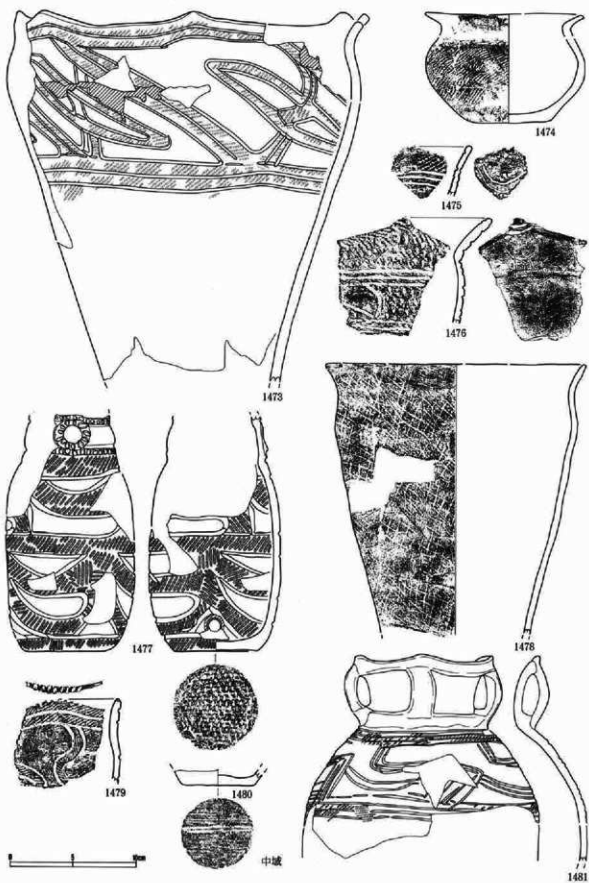
第222図 遺構外土器27 (東部捨て場)



第223図 遺構外土器28 (東部捨て場)



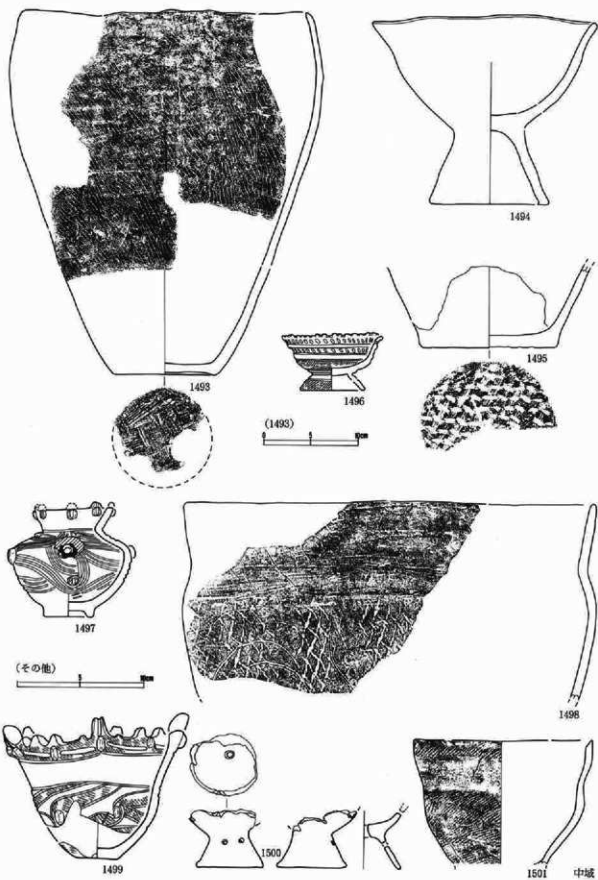
第224図 遺構外土器29 (東部捨て場)



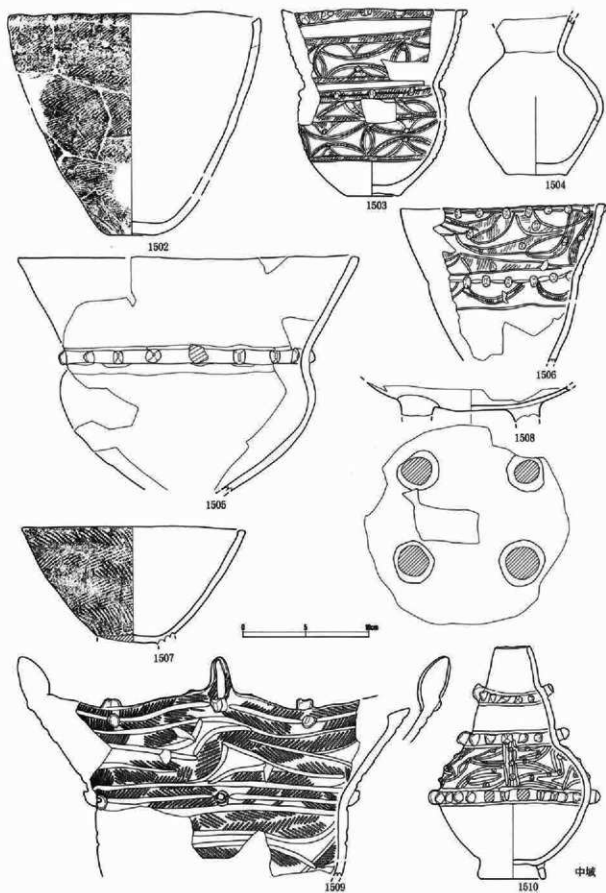
第225図 遺構外土器30 (東部捨て場)



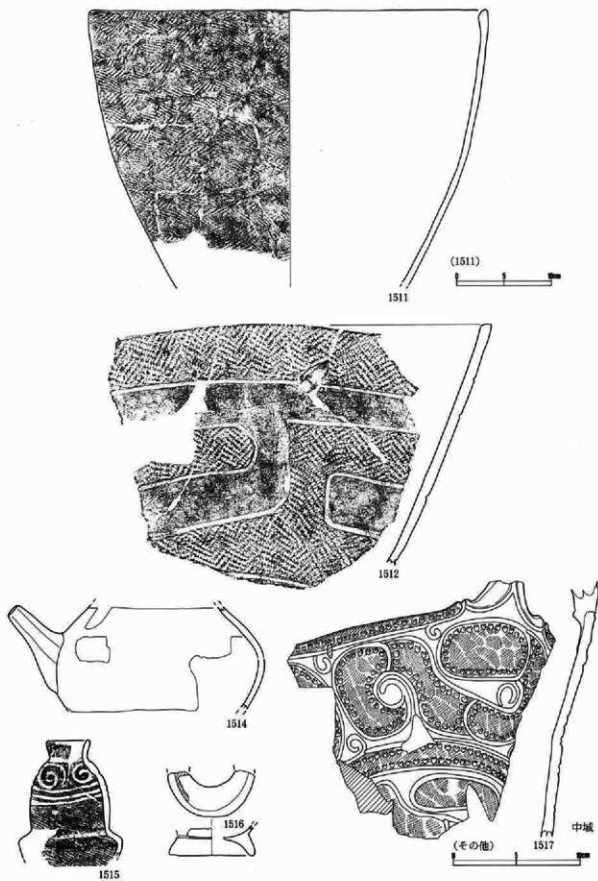
第226図 遺構外土器31（東部捨て場）



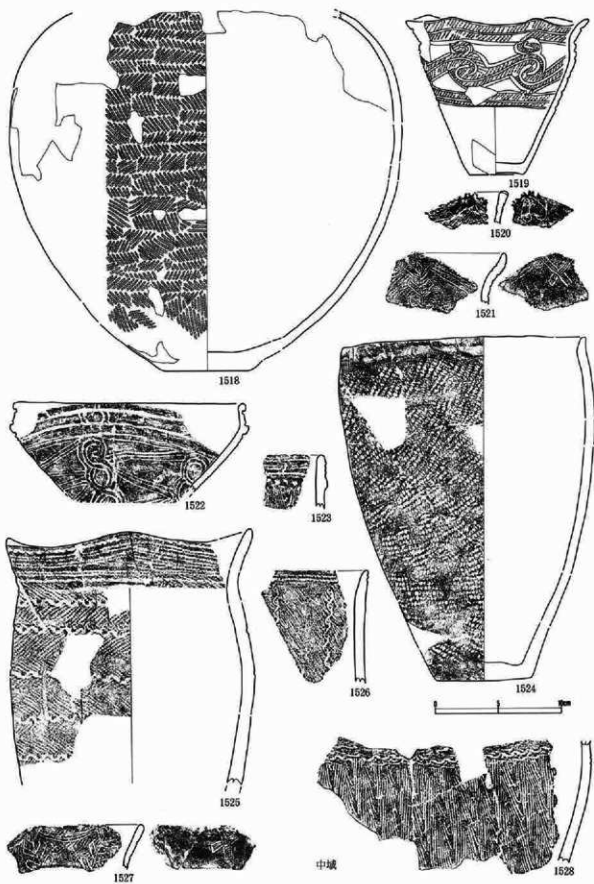
第227図 遺構外土器32 (東部捨て場)



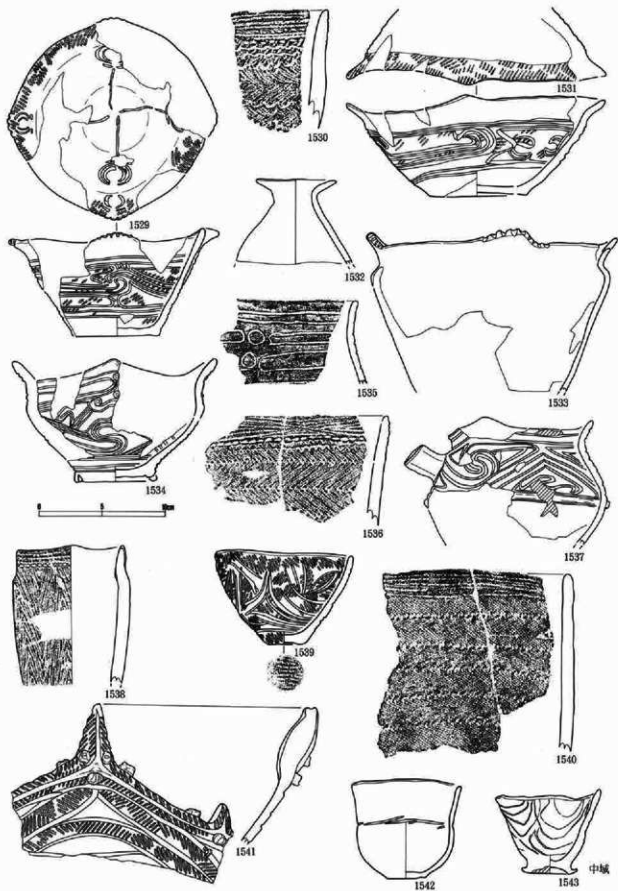
第228図 遺構外土器33（東部捨て場）



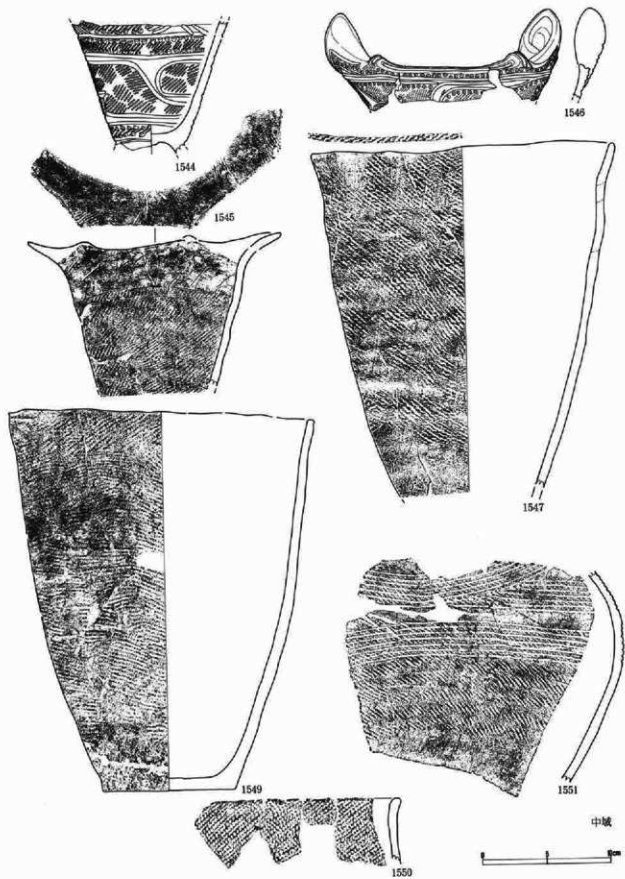
第229図 遺構外土器34 (東部捨て場)



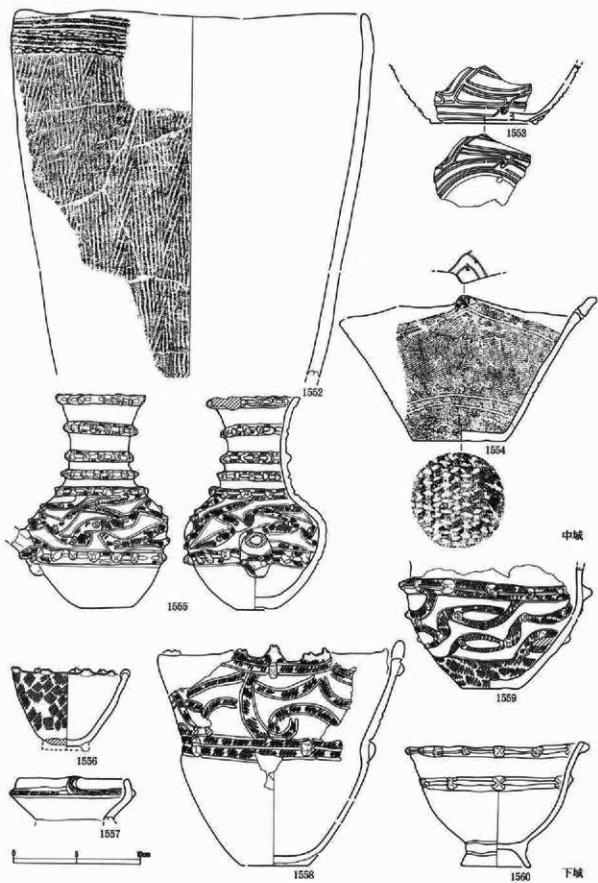
第230図 遺構外土器35 (東部捨て場)



第231図 遺構外土器36 (東部捨て場)



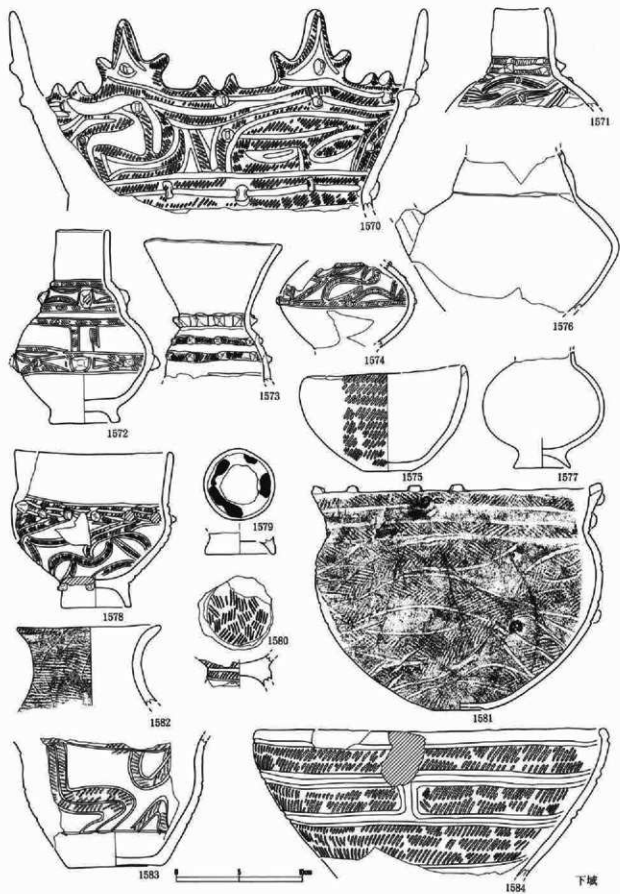
第232図 遺構外土器37（東部捨て場）



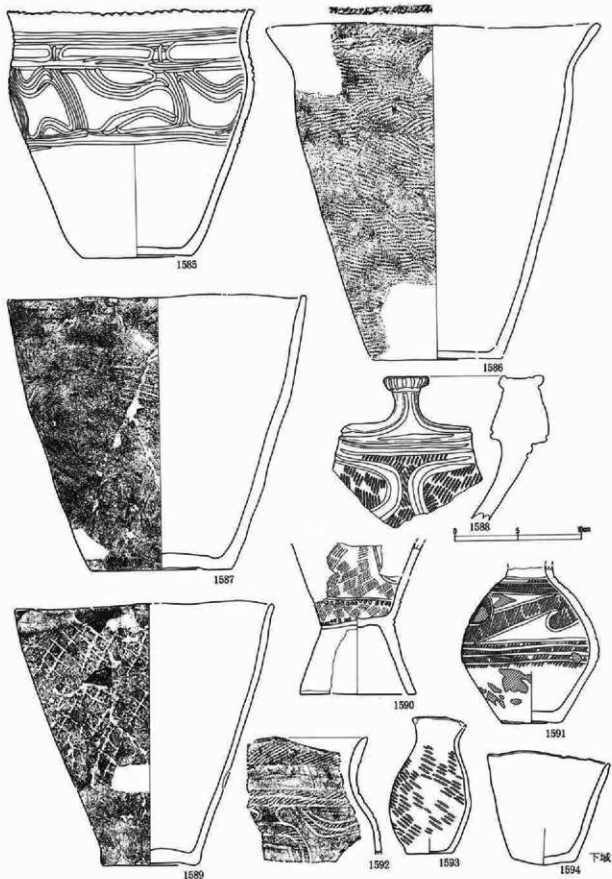
第233図 遺構外土器38 (東部捨て場)



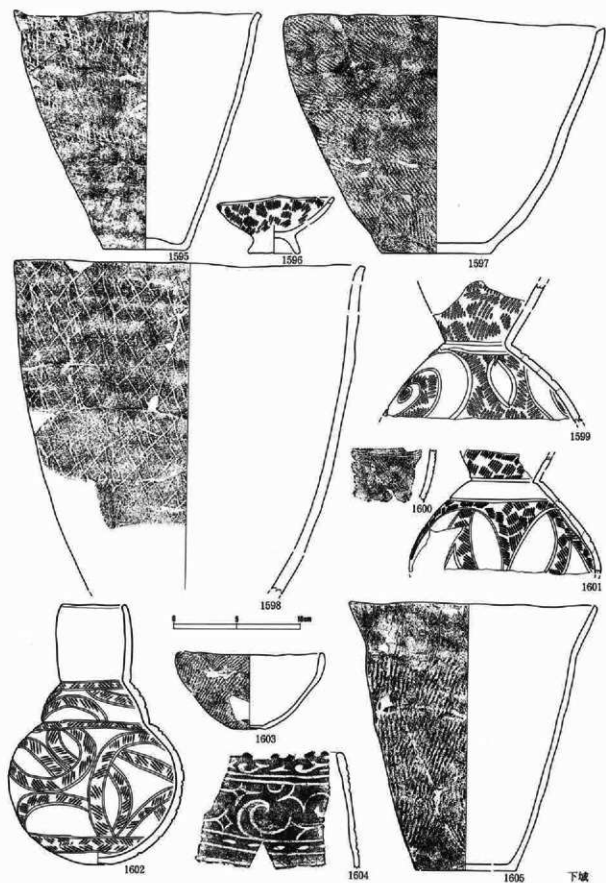
第234図 遺構外土器39（東部捨て場）



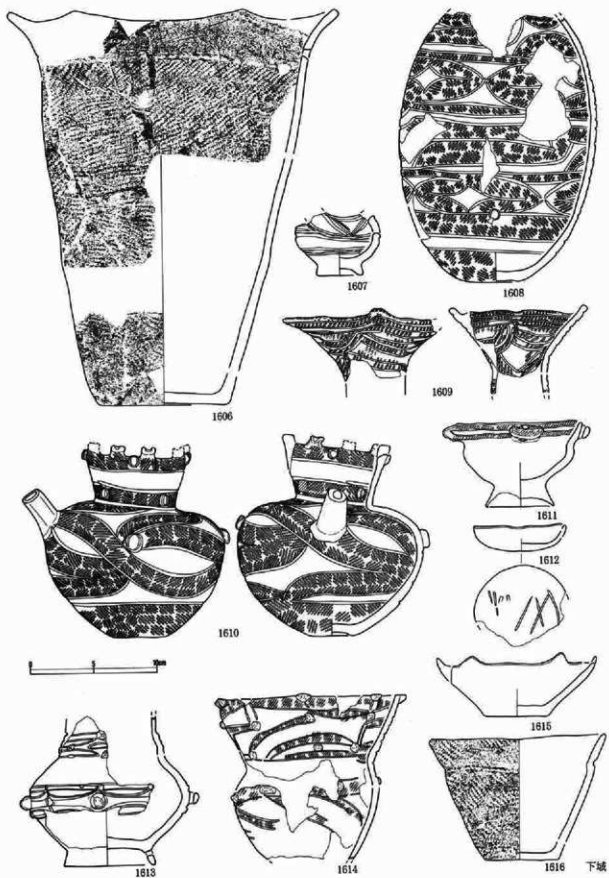
第235図 遺構外土器40 (東部捨て場)



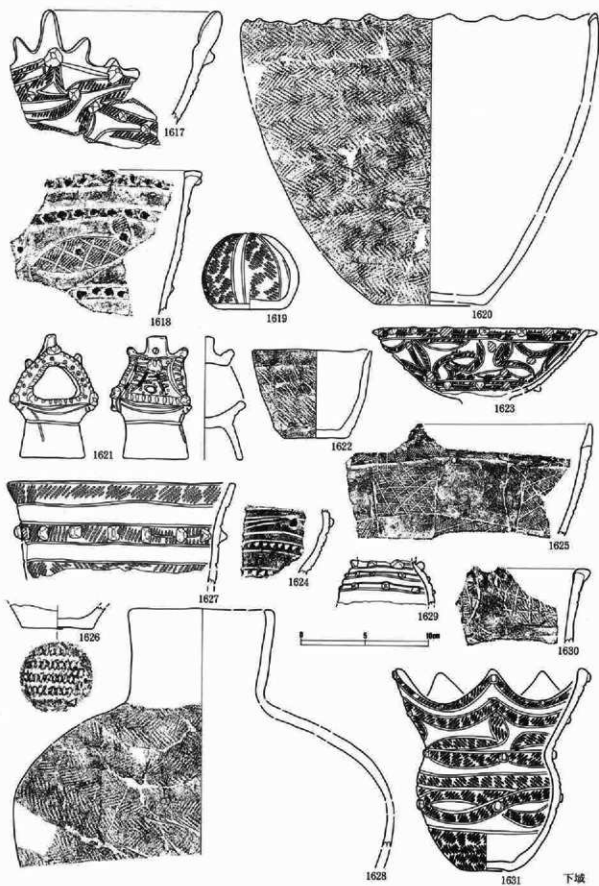
第236図 遺構外土器41（東部捨て場）



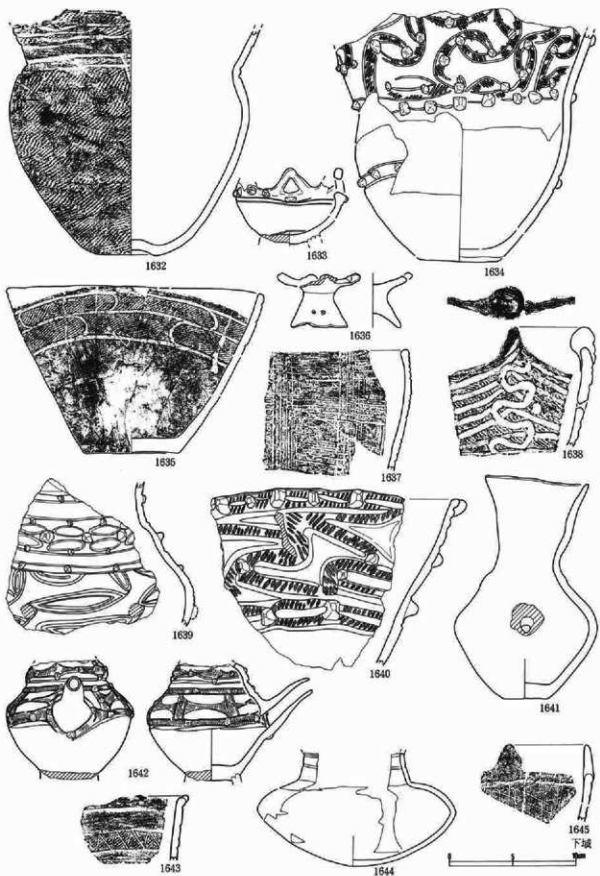
第237図 遺構外土器42 (東部捨て場)



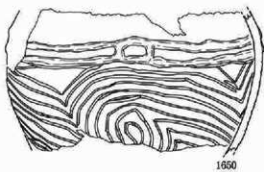
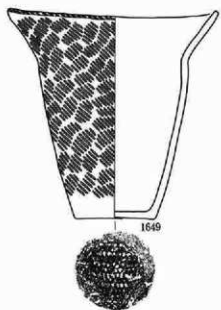
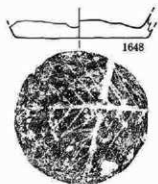
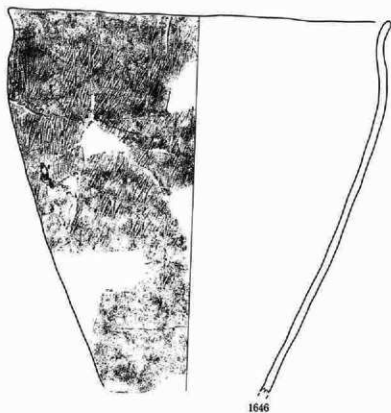
第238図 遺構外土器43 (東部捨て場)



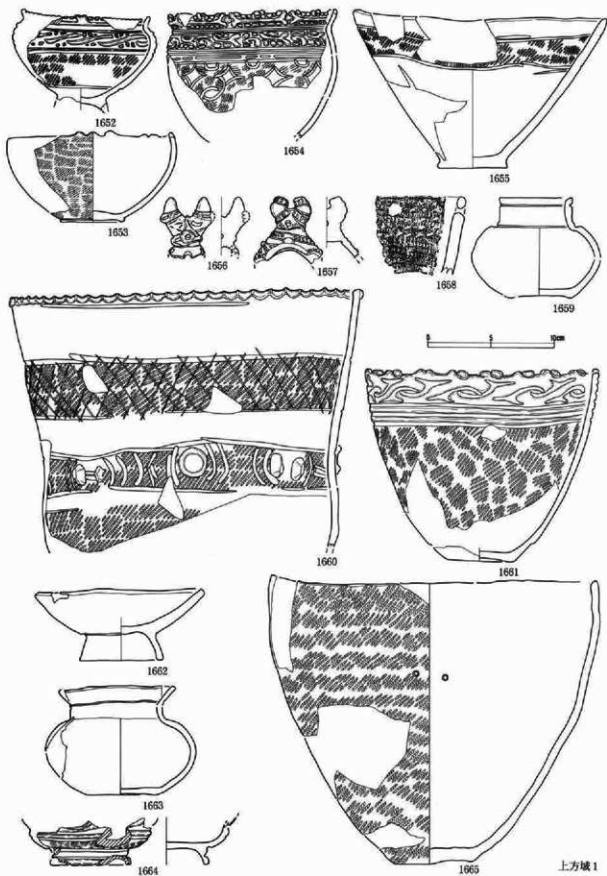
第239図 遺構外土器44 (東部捨て場)



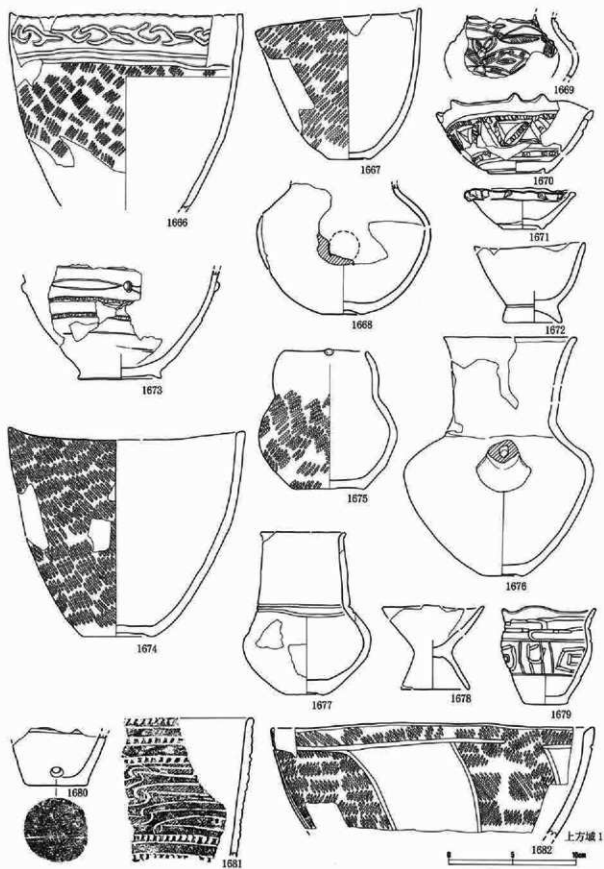
第240図 遺構外土器45 (東部捨て場)



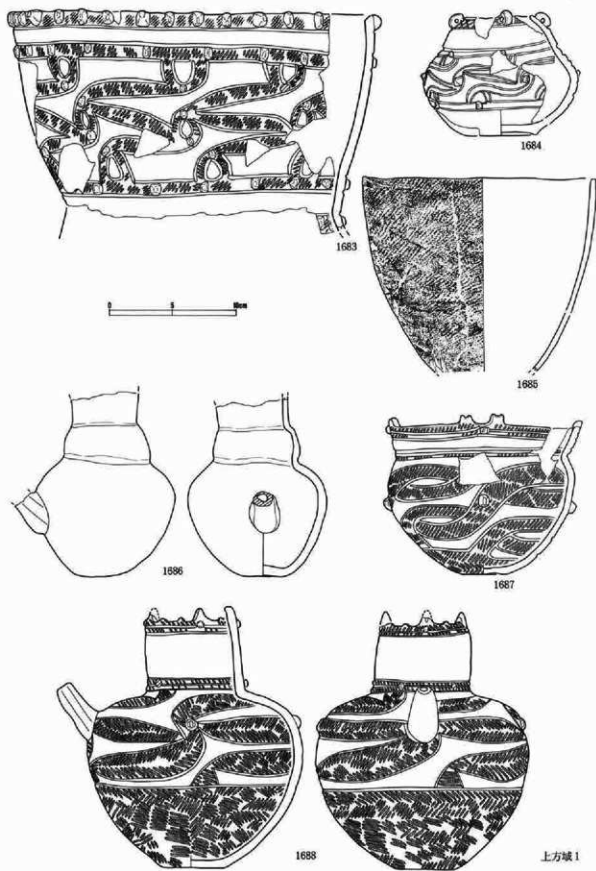
第241回 遺構外土器46 (東部捨て場)



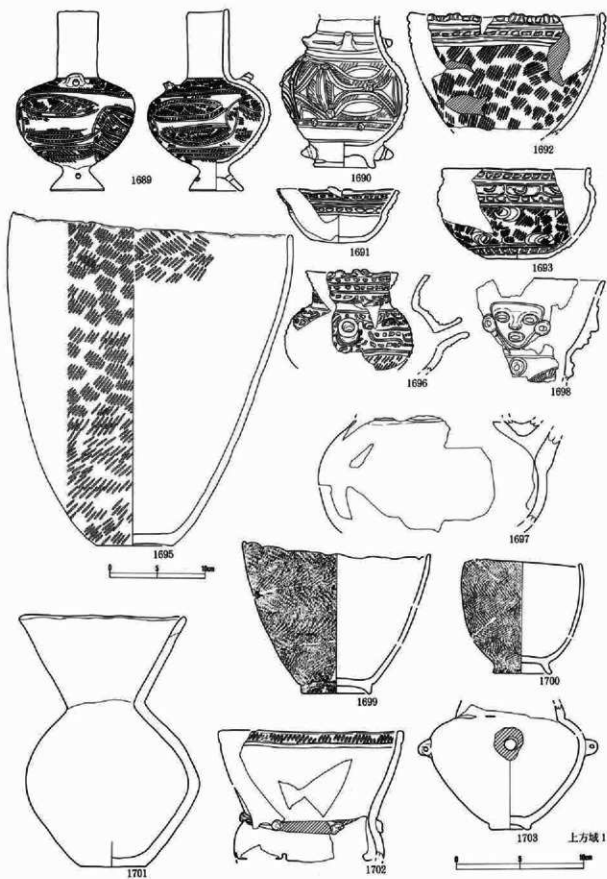
第242図 遺構外土器47（西部捨て場）



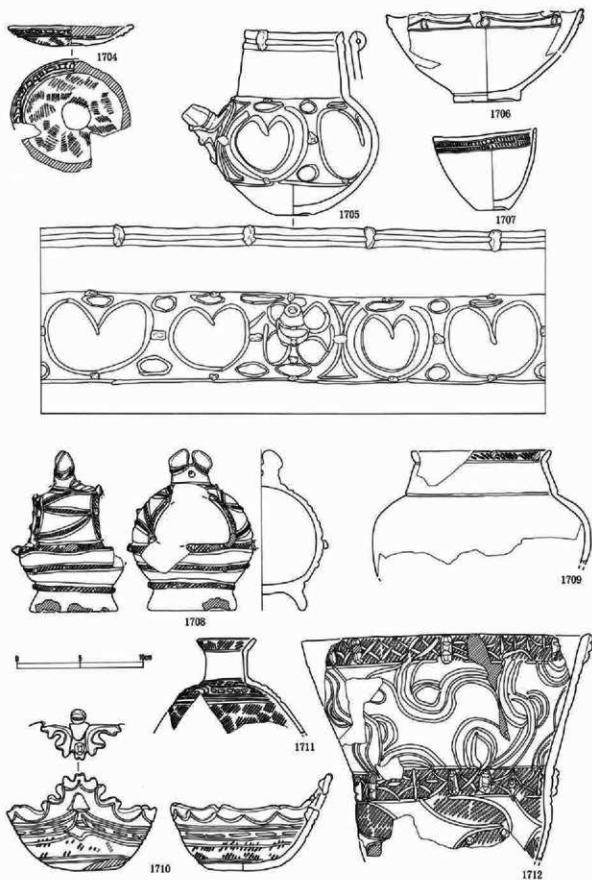
第243図 遺構外土器48 (西部捨て場)



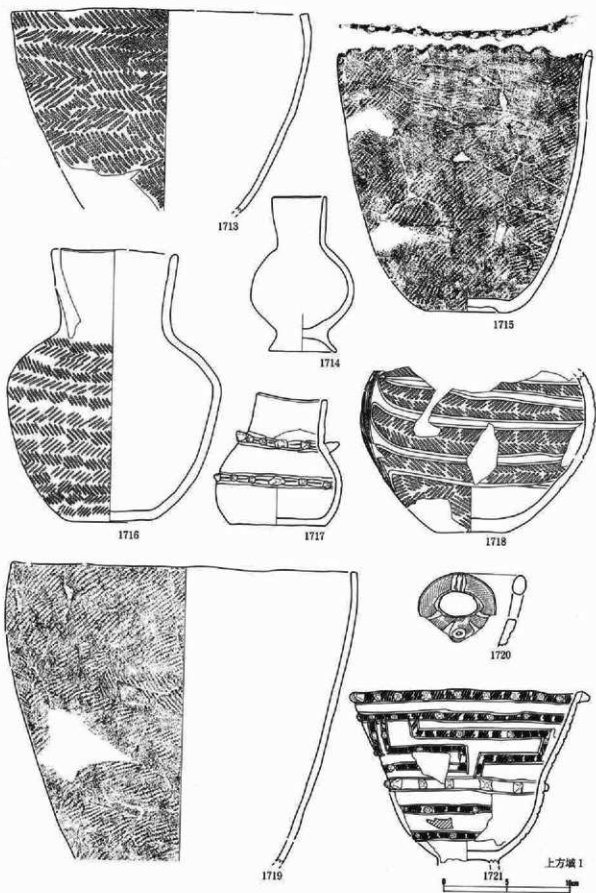
第244図 遺構外土器49 (西部捨て場)



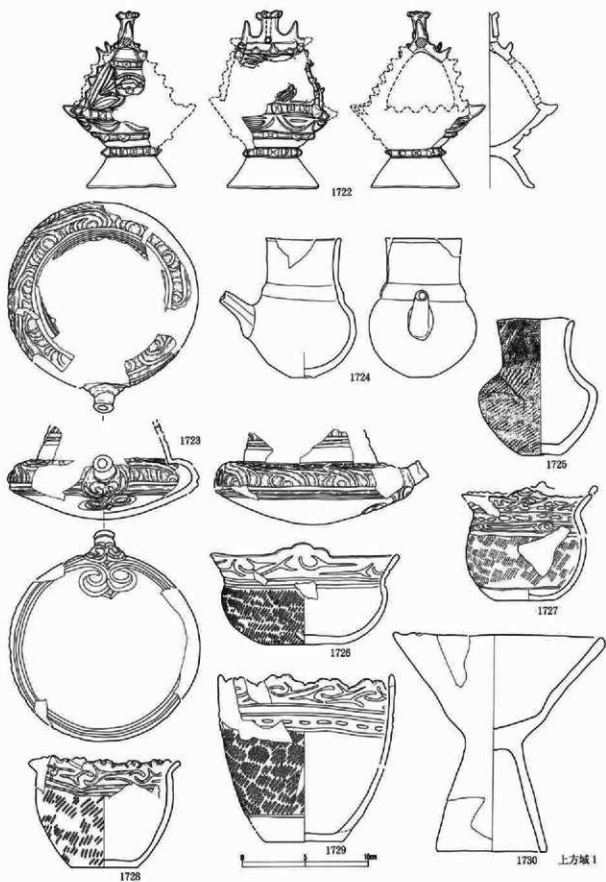
第245図 遺構外土器50 (西部捨て場)



第246図 遺構外土器51 (西部捨て場)



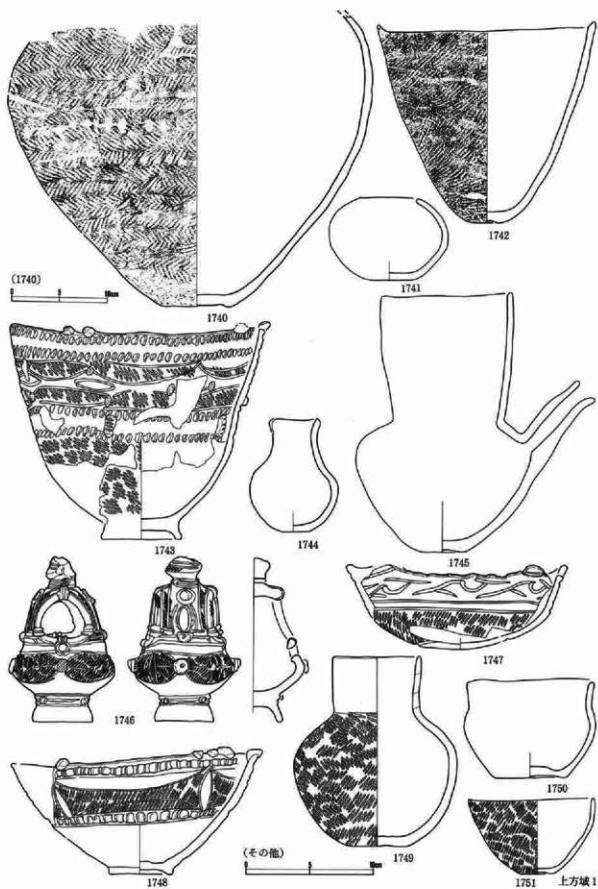
第247図 遺構外土器52（西部捨て場）



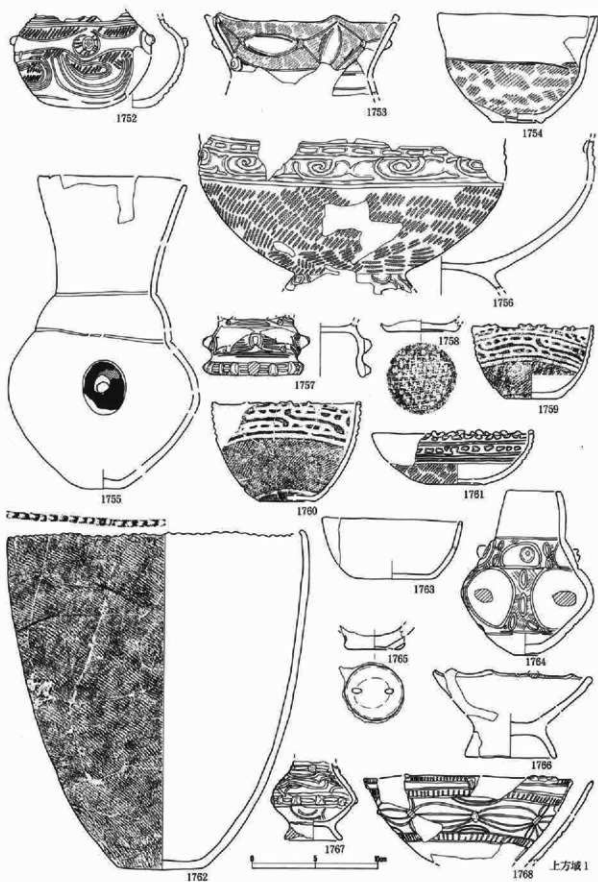
第248図 遺構外土器53 (西部捨て場)



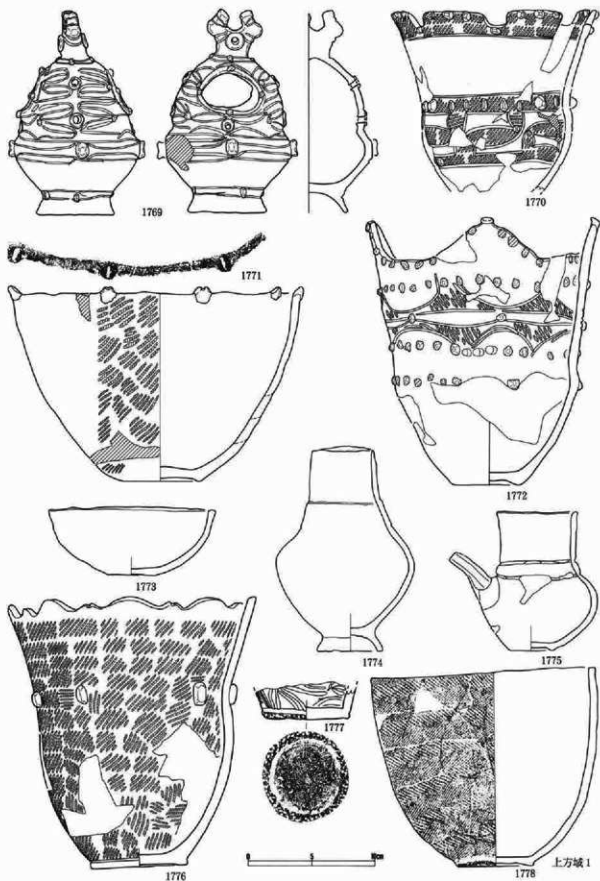
第249回 遠構外土器54 (西部捨て場)



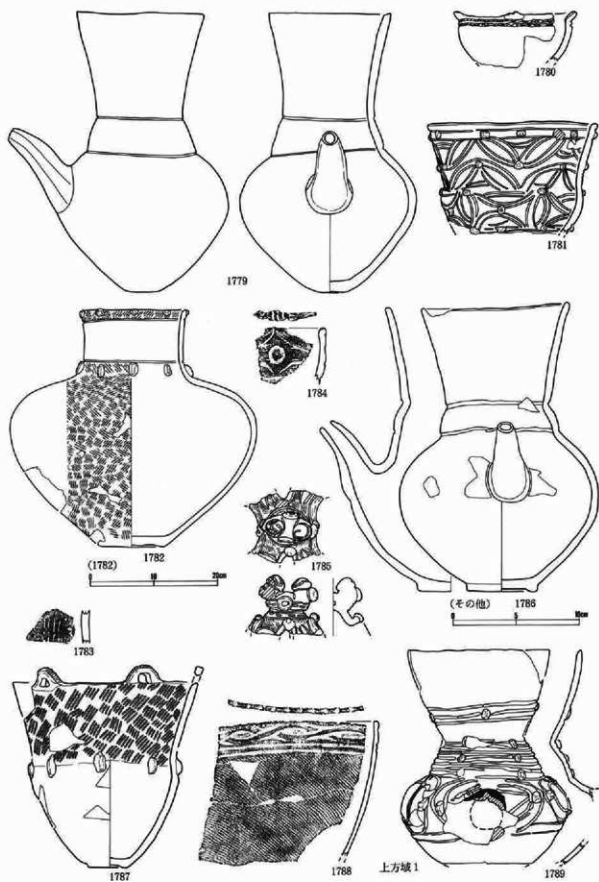
第260図 遺構外土器55 (西部捨て場)



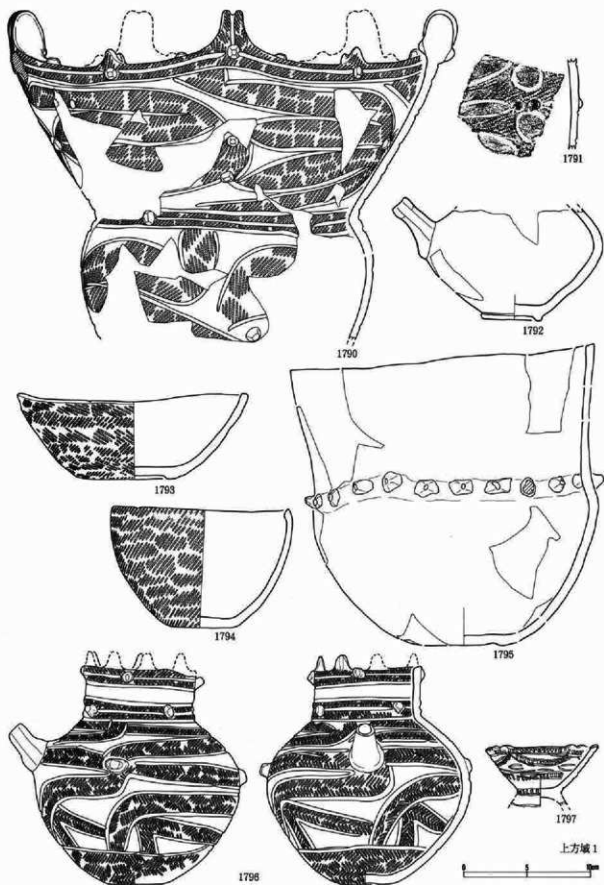
第251図 遺構外土器56 (西部捨て場)



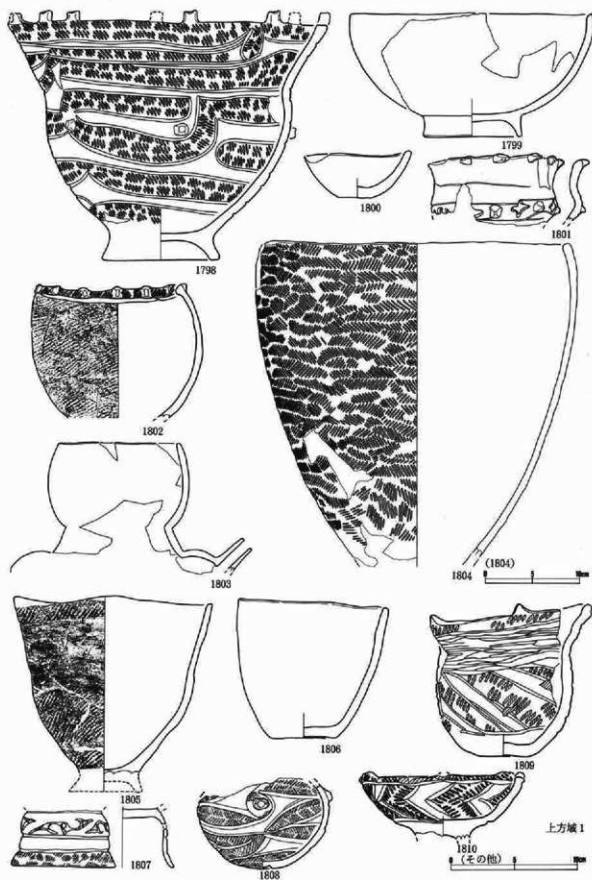
第262図 遺構外土器57 (西部捨て場)



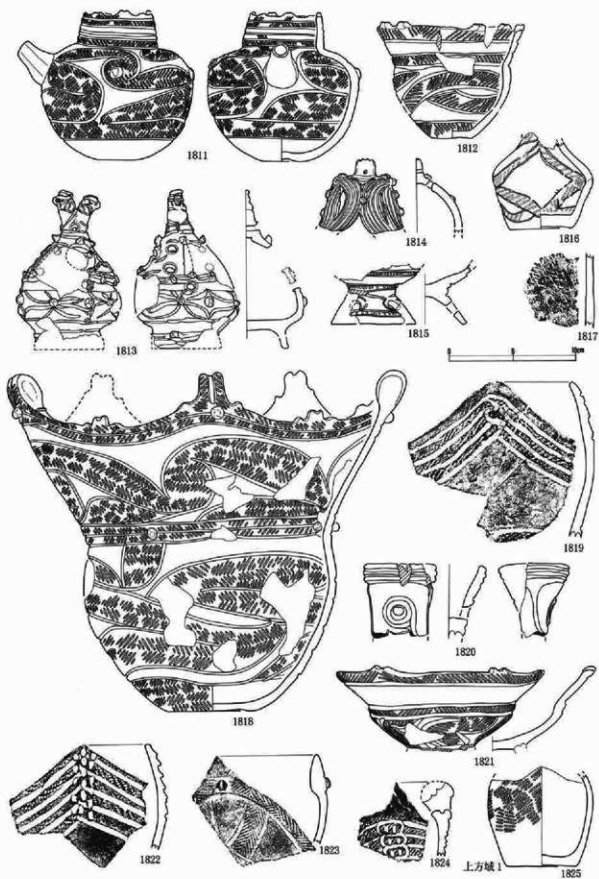
第253図 遺構外土器58 (西部捨て場)



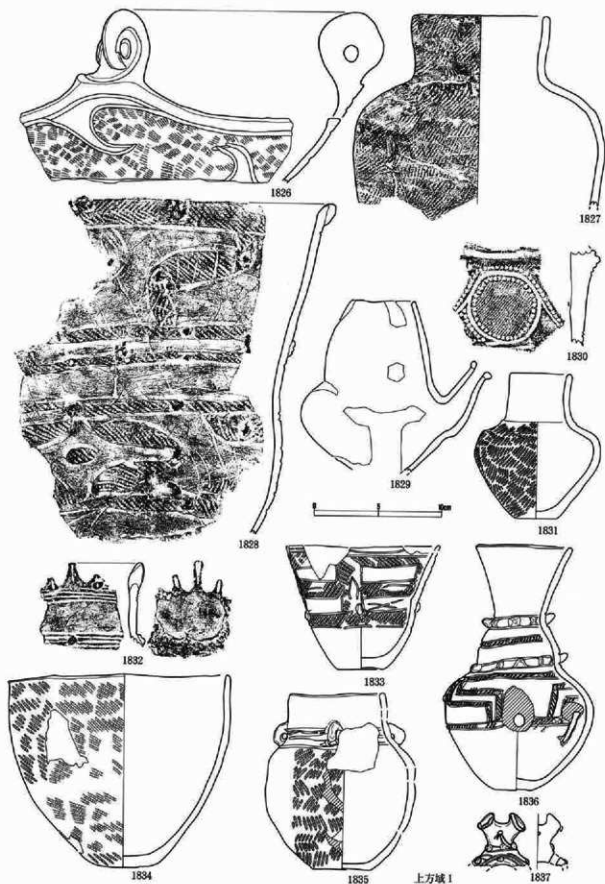
第254図 遺構外土器59 (西部捨て場)



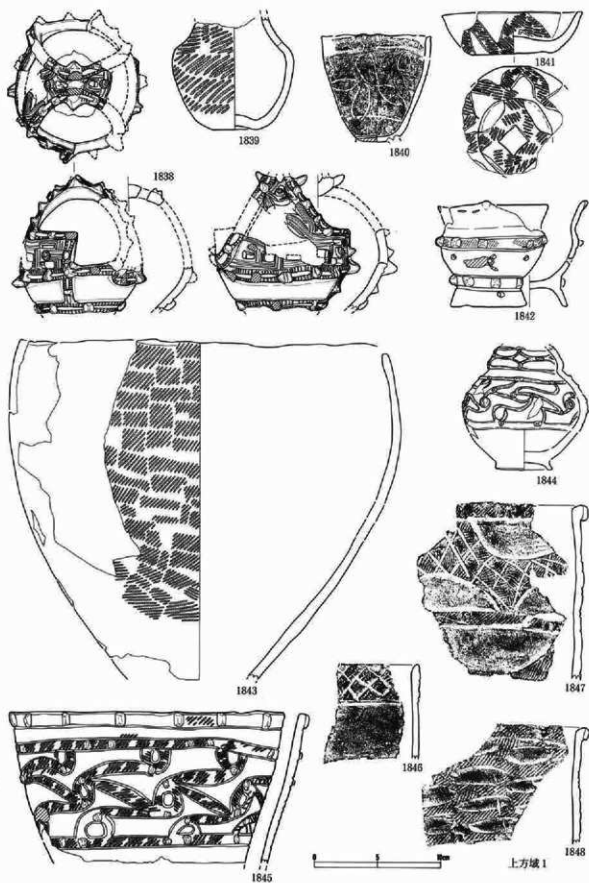
第255図 遺構外土器60 (西部捨て場)



第256図 遺構外土器01 (西部捨て場)



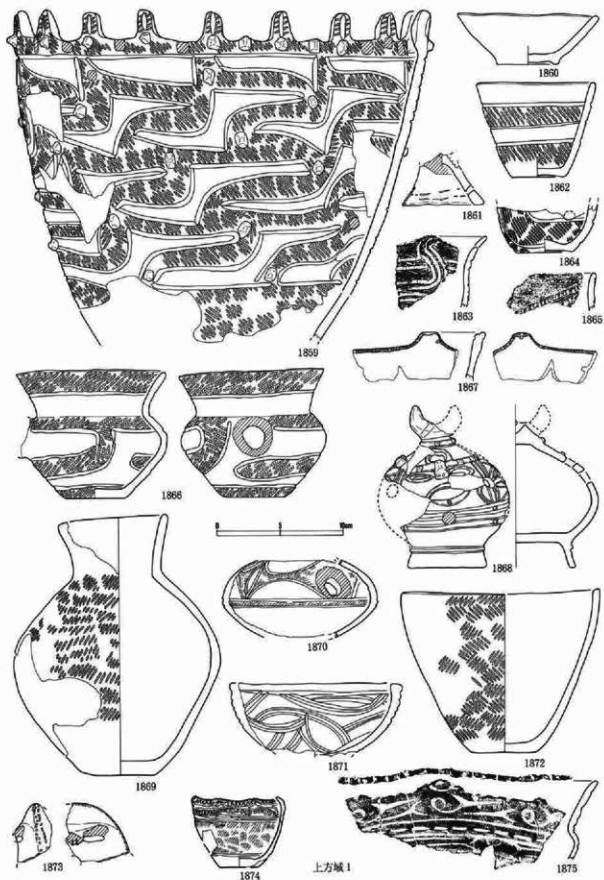
第267図 遺構外土器02 (西部捨て場)



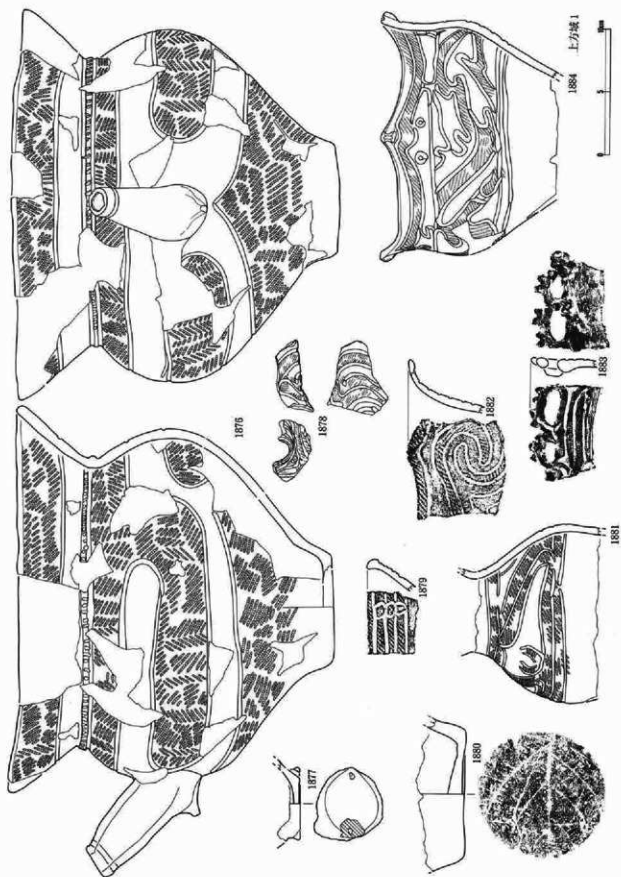
第258図 遺構外土器63 (西部捨て場)



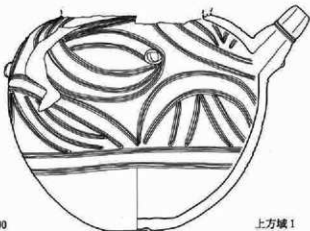
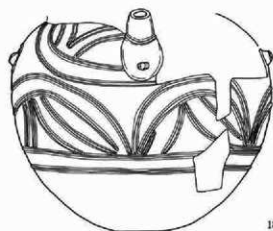
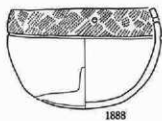
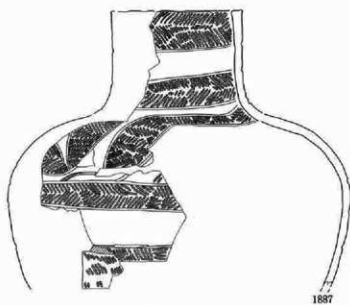
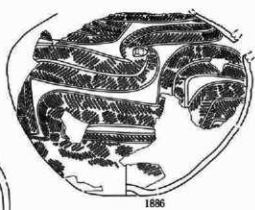
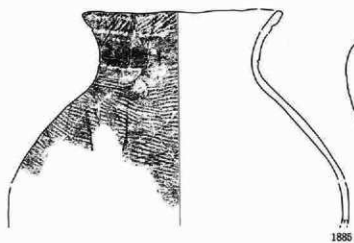
第259図 遺構外土器64 (西部捨て場)



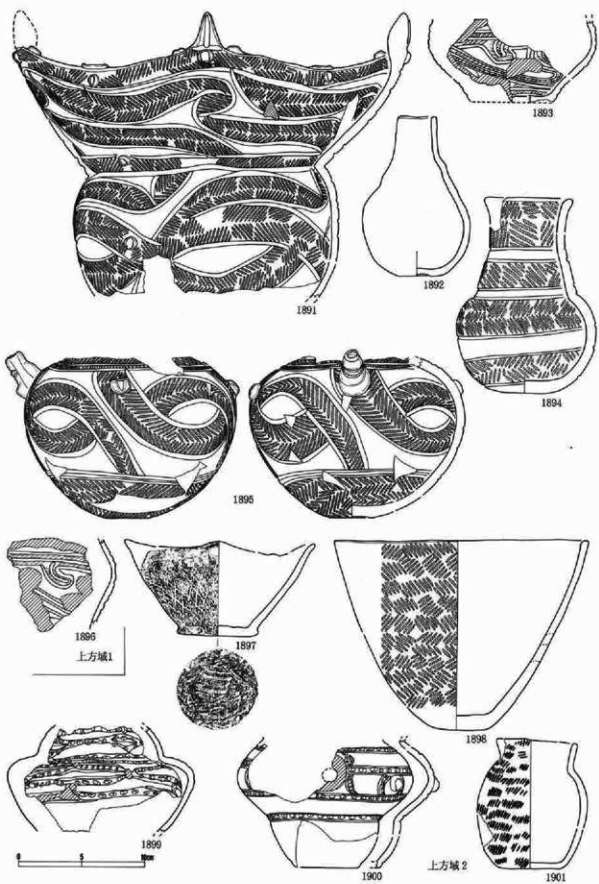
第200図 遺構外土器05 (西部捨て場)



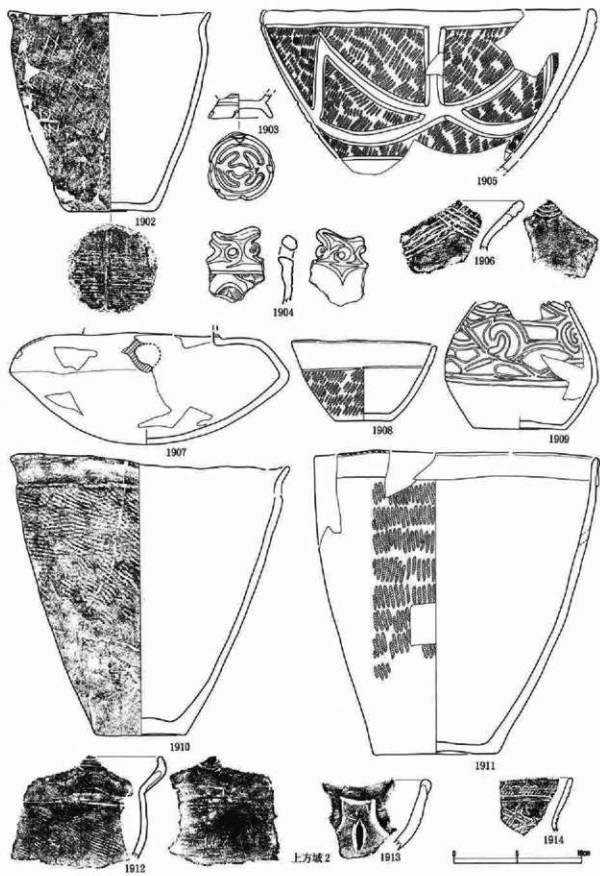
第261図 遺構外土器06 (西部捨て場)



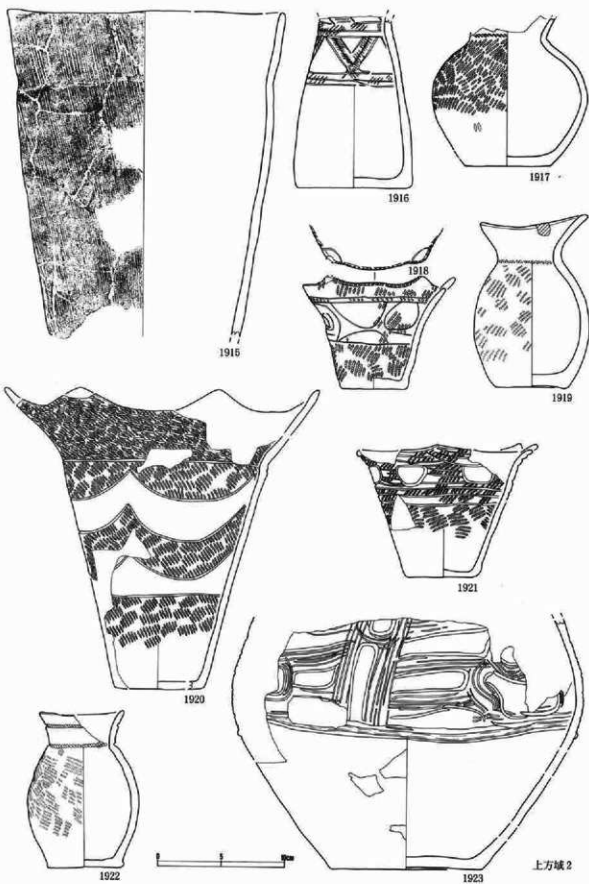
第262図 遺構外土器67 (西部捨て場)



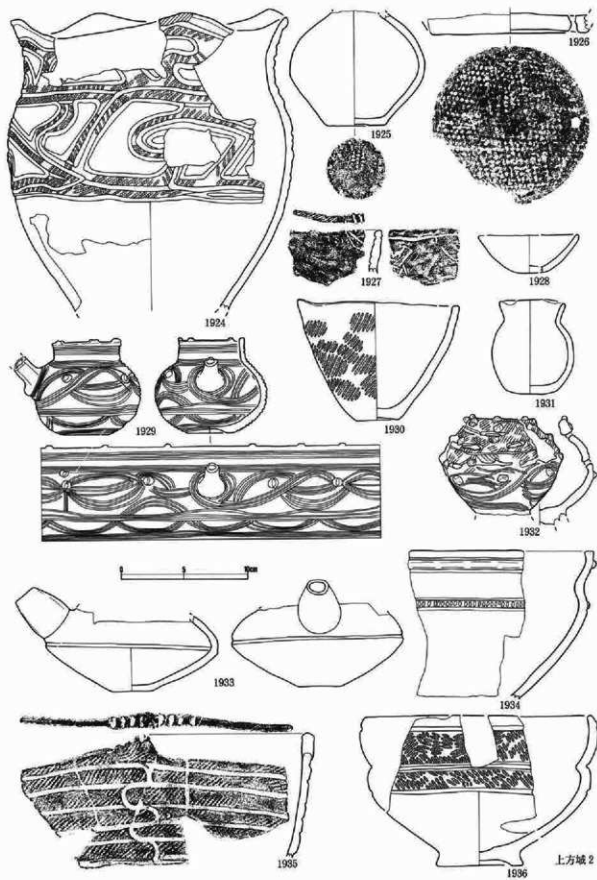
第263図 遺構外土器68 (西邸捨て場)



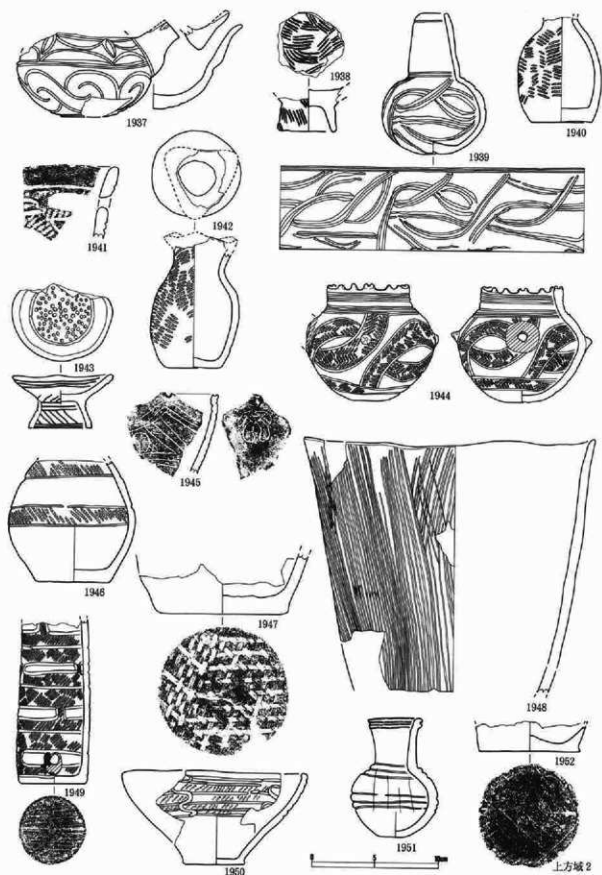
第264図 遺構外土器69 (西部捨て場)



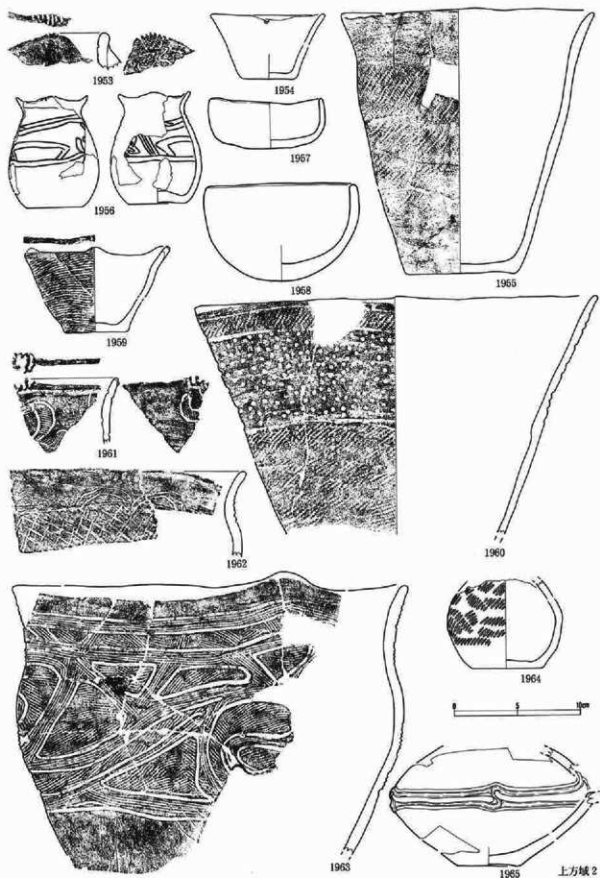
第265図 遺構外土器70 (西部捨て場)



第266図 遺構外土器71 (西部捨て場)



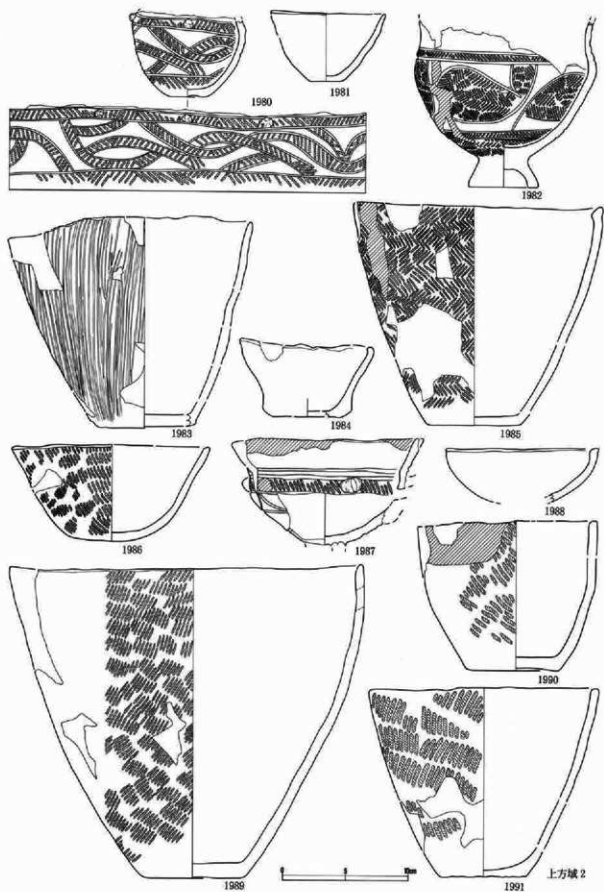
第267図 遺構外土器72 (西部捨て場)



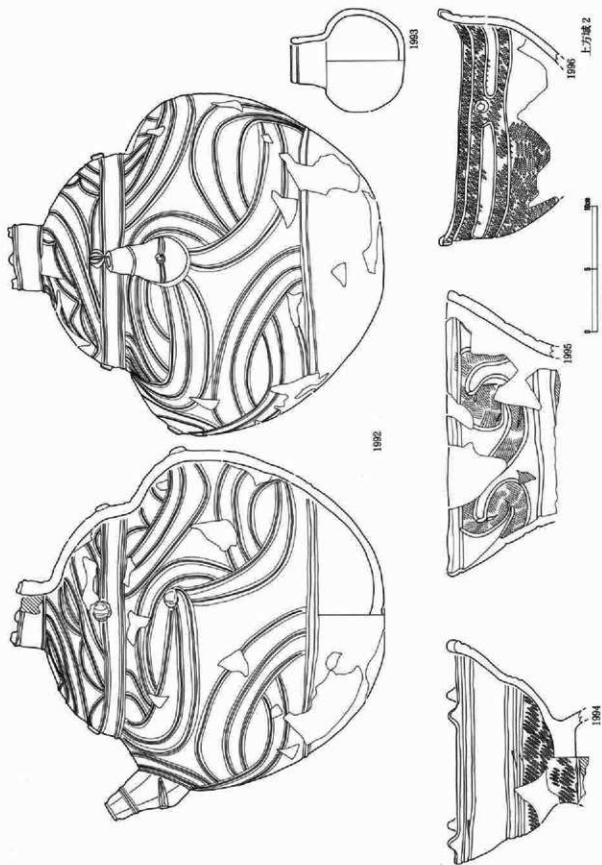
第268図 遺構外土器73 (西部捨て場)



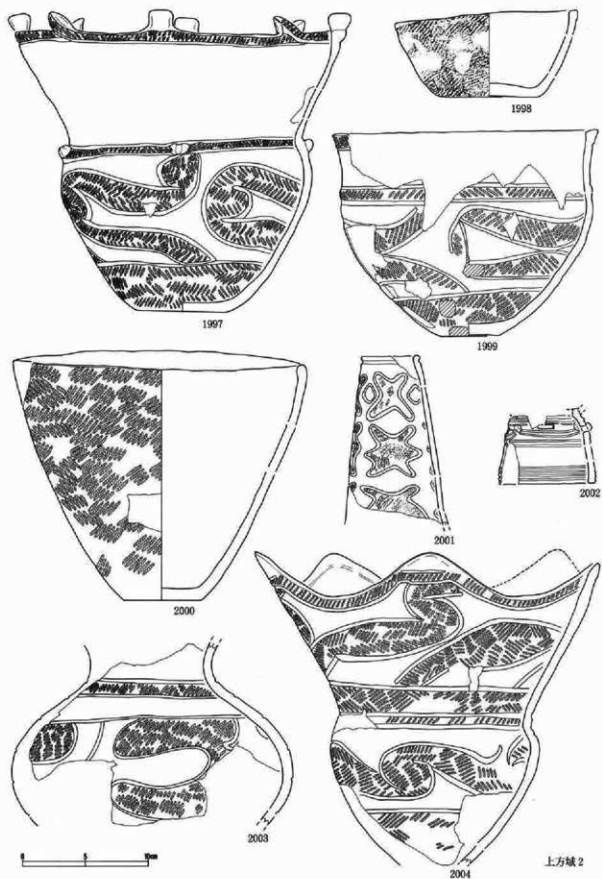
第260図 遺構外土器74 (西部捨て場)



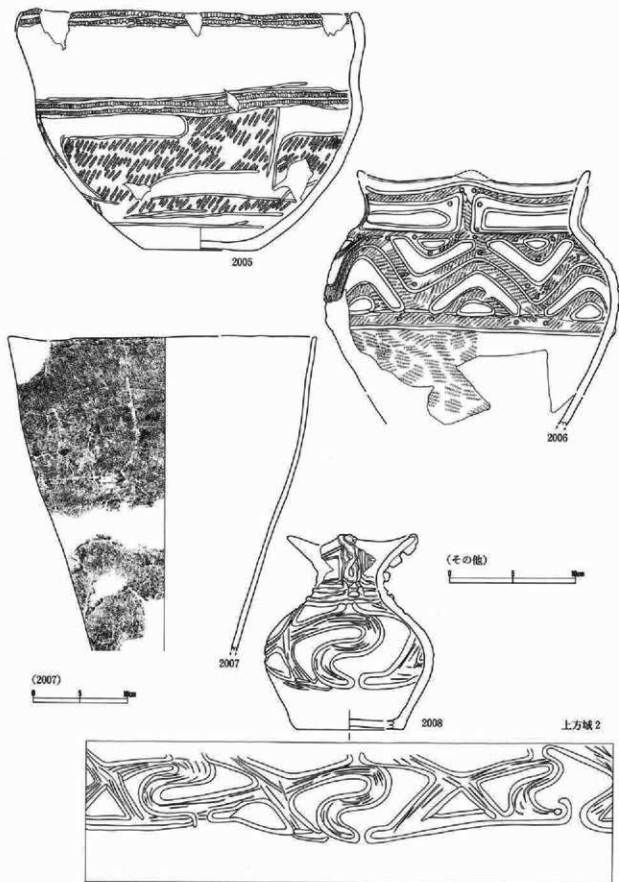
第270図 遺構外土器76 (西部捨て場)



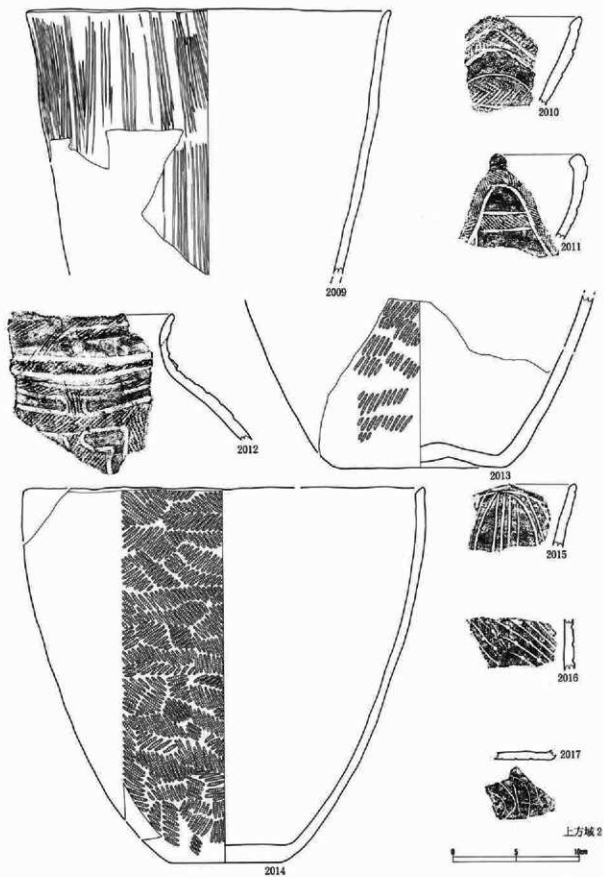
第271図 遺構外土器76 (西部捨て場)



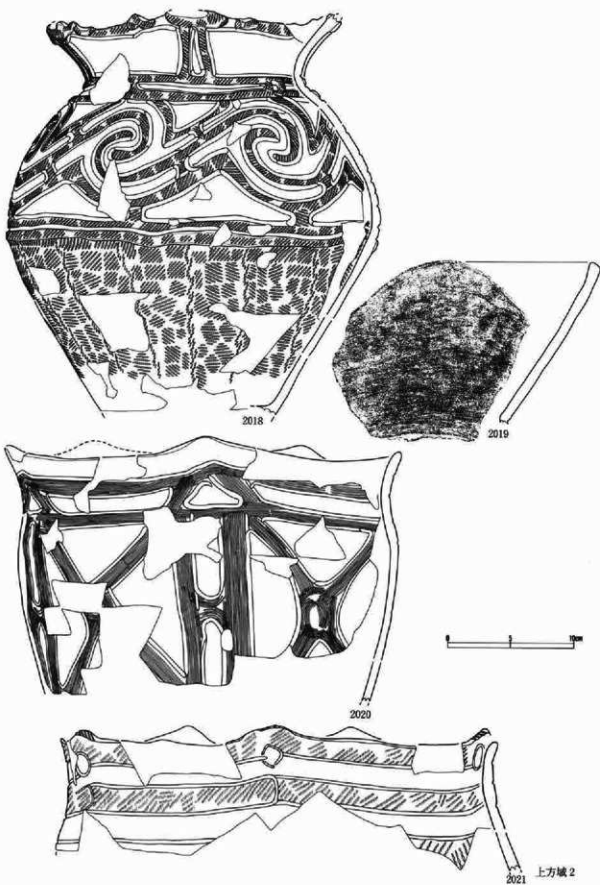
第272図 遺構外土器77（西部捨て場）



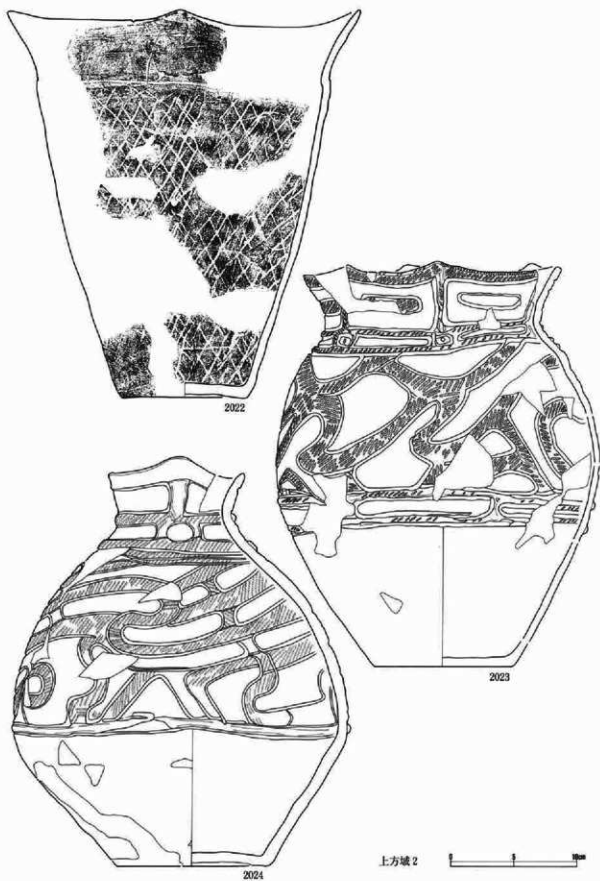
第273図 遺構外土器78 (西部捨て場)



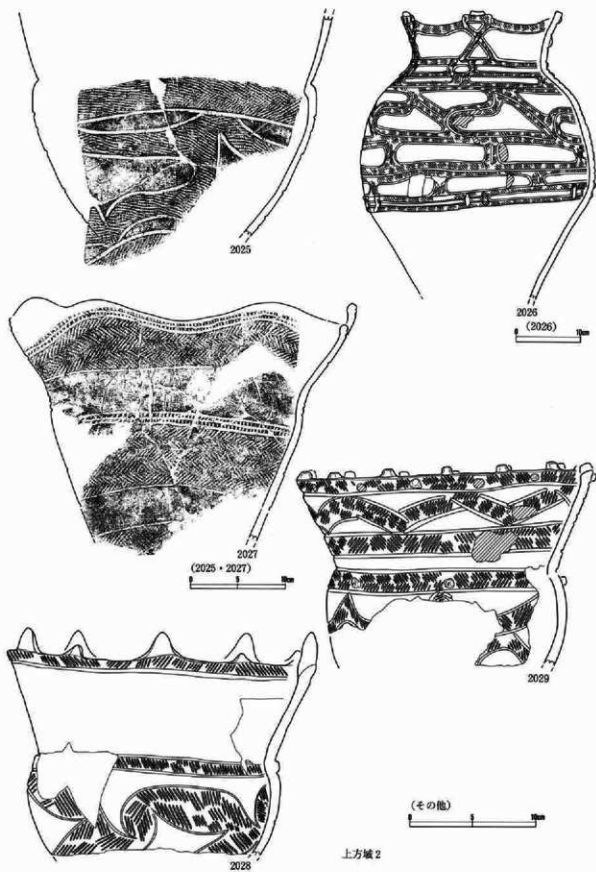
第274図 遺構外土器79 (西部捨て場)



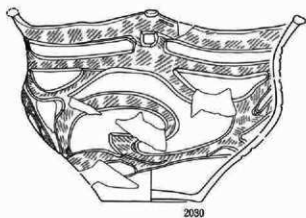
第275図 遺構外土器80 (西部捨て場)



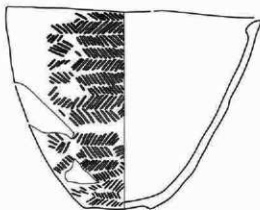
第276図 遺構外土器81（西部捨て場）



第277図 遺構外土器82 (西部捨て場)



2030



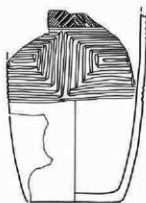
2032



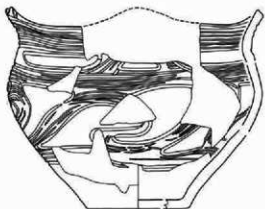
2033



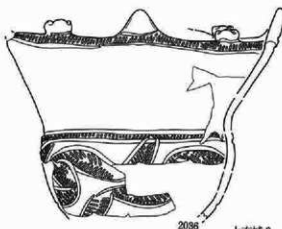
2031



2034



2035

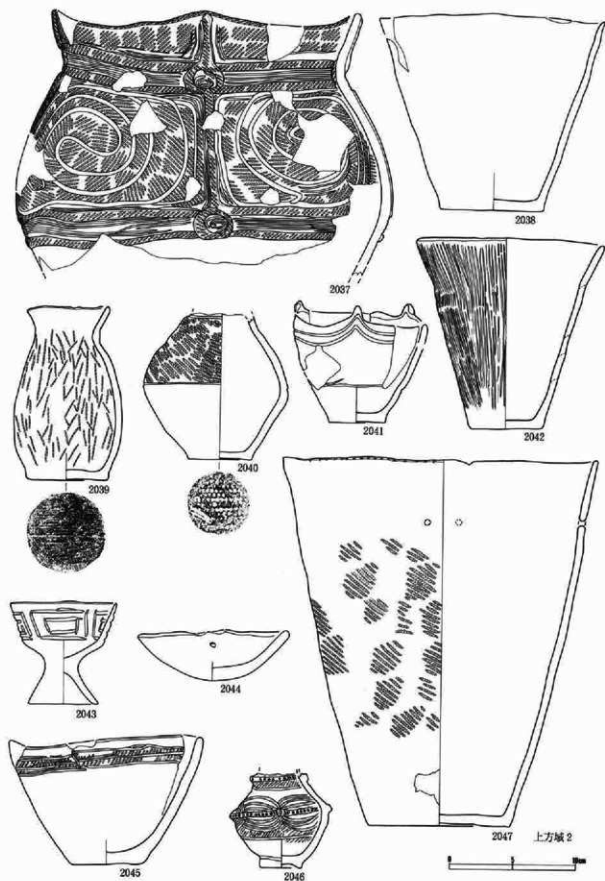


2036

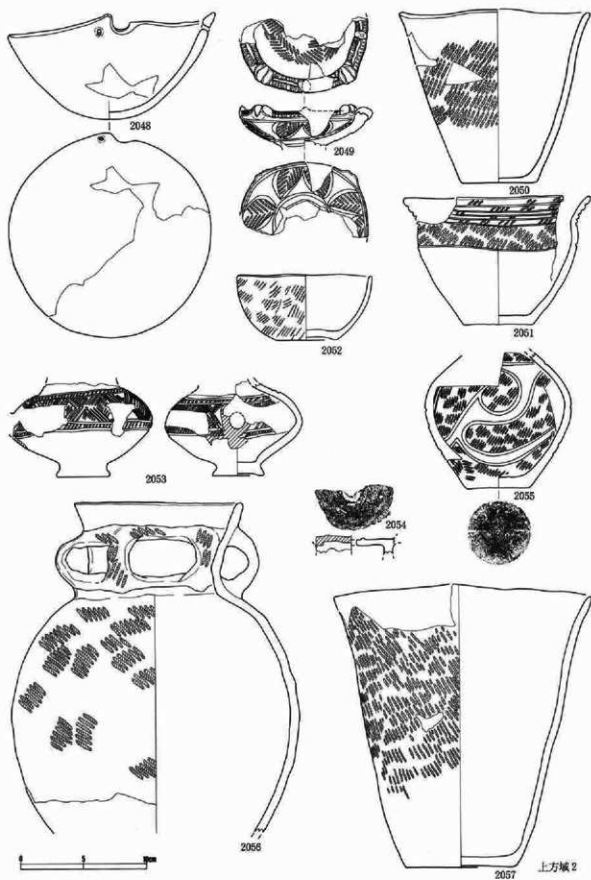
上方城 2



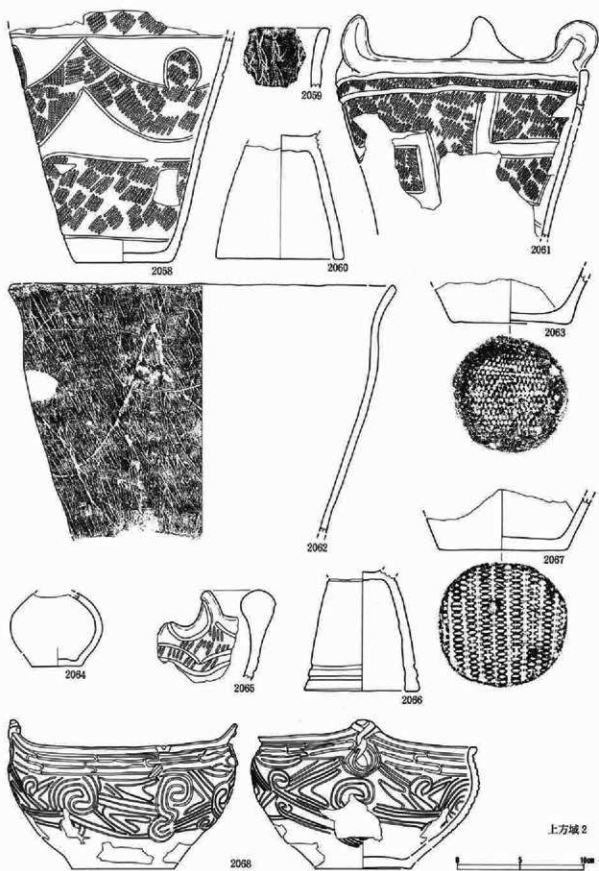
第278図 遺構外土器83 (西部捨て場)



第279図 遺構外土器84 (西部捨て場)



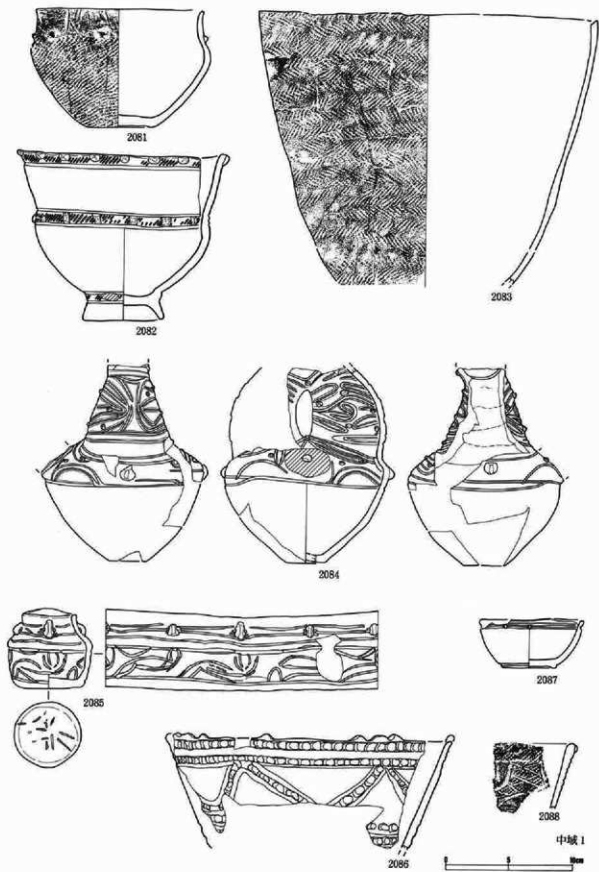
第280図 遺構外土器65 (西邸捨て場)



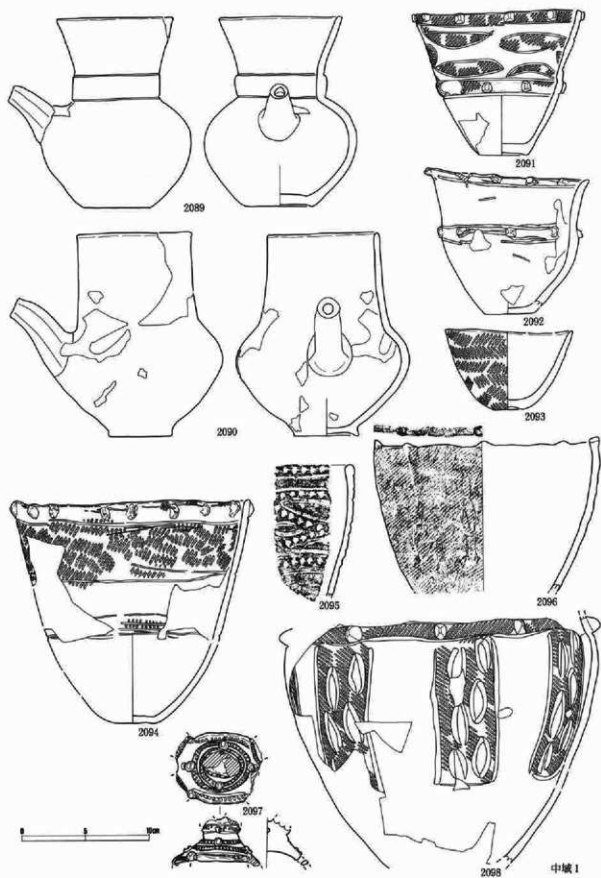
第281図 遺構外土器86 (西部捨て場)



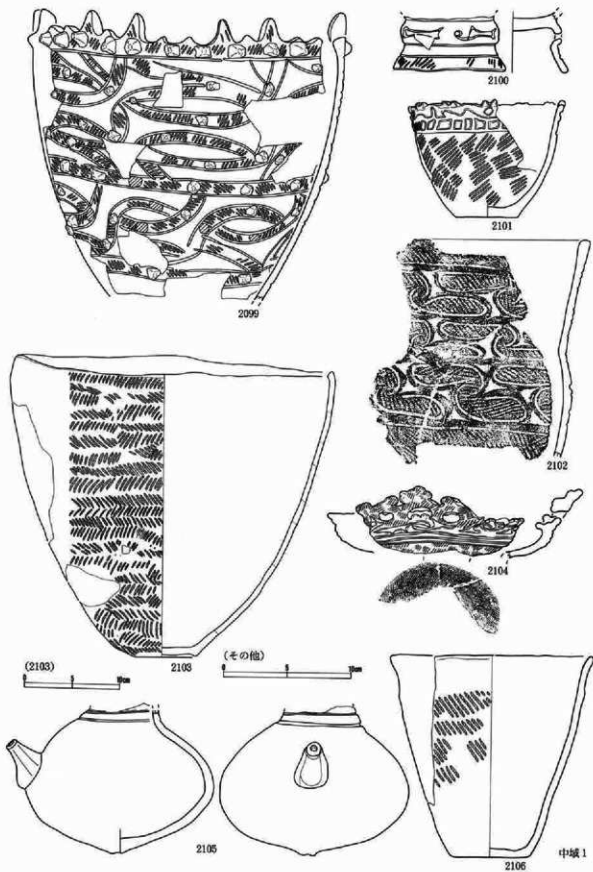
第282図 遺構外土器87 (西部捨て場)



第283図 遺構外土器88（西部捨て場）



第284図 遺構外土器89 (西部捨て場)



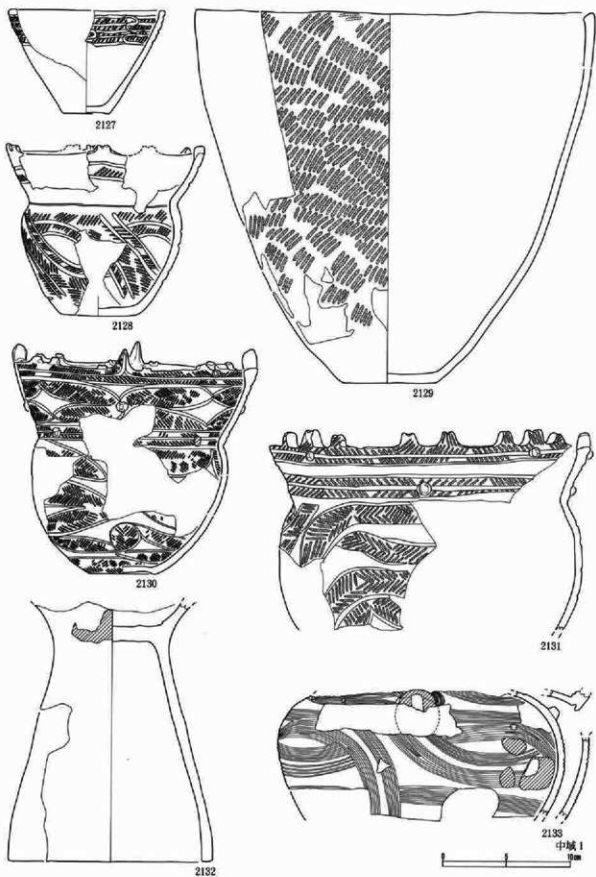
第285図 遺構外土器90 (西部捨て場)



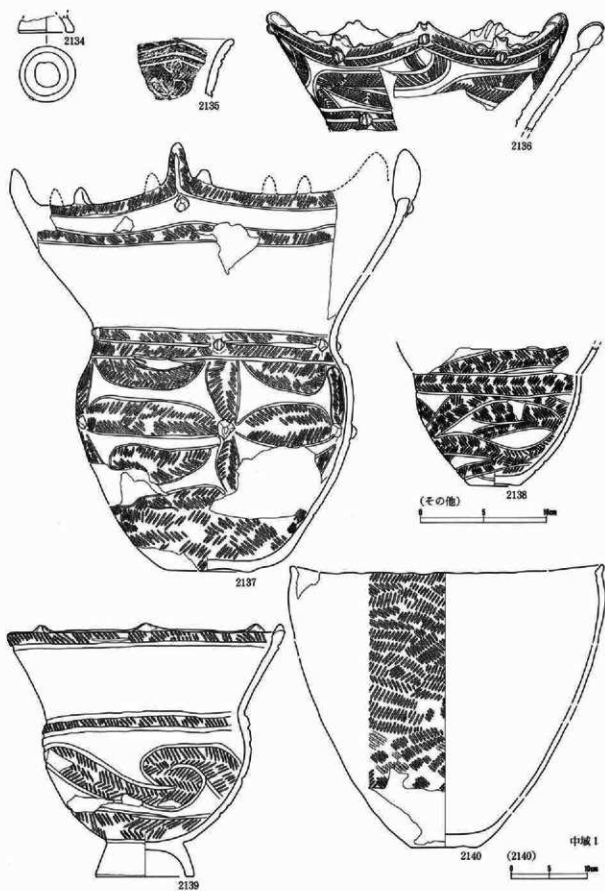
第286図 遺構外土器91 (西部捨て場)



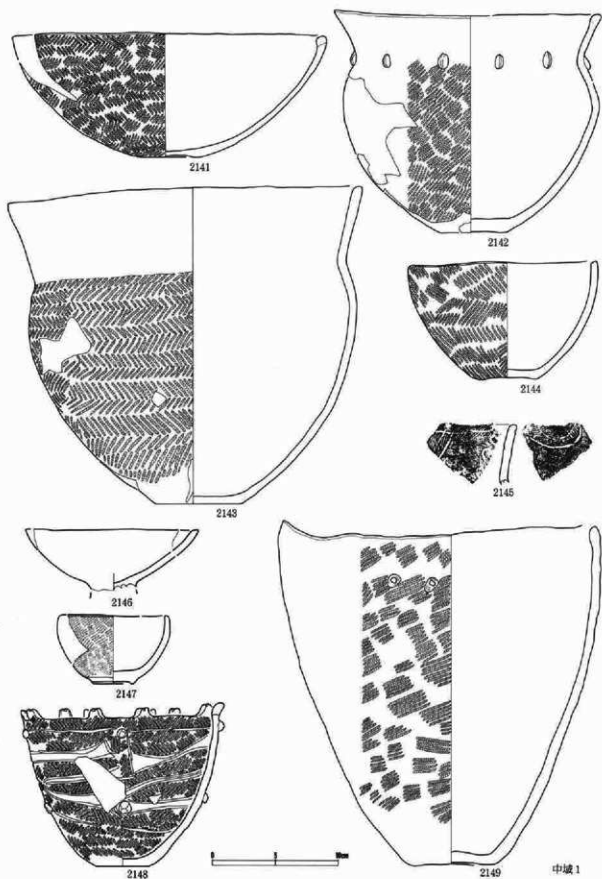
第287図 遺構外土器92 (西部捨て場)



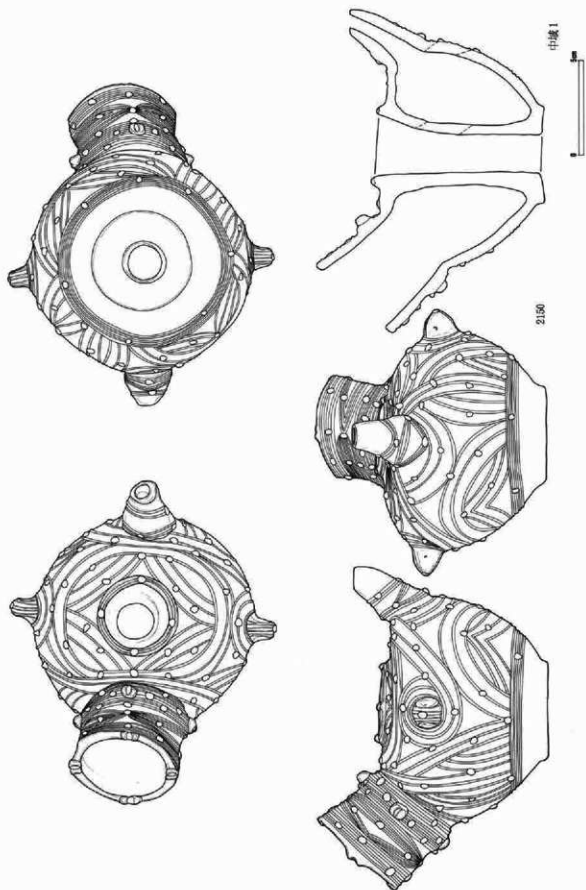
第288図 遺構外土器93 (西部捨て場)



第269図 遺構外土器94 (西部捨て場)



第290図 遺構外土器95 (西部捨て場)



第291図 遺構外土器96 (西部捨て場)



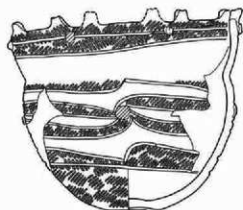
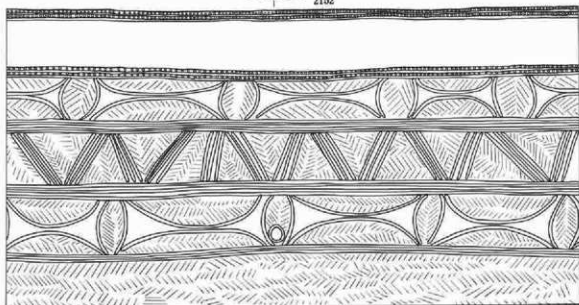
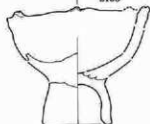
2151



2152



2153



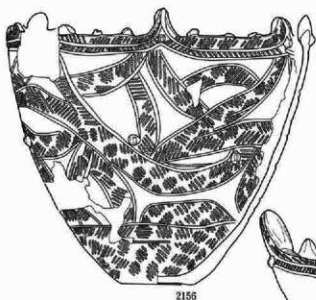
2154



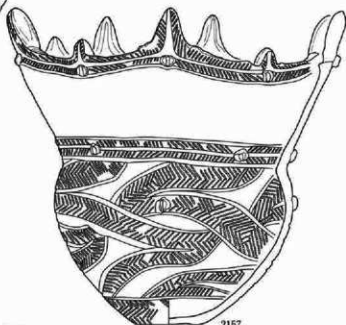
2155

中城 1

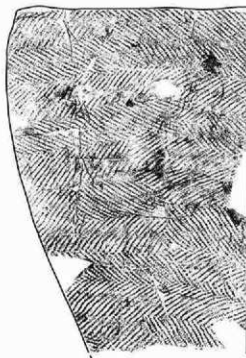
第292図 遺構外土器97 (西部捨て場)



2156



2157

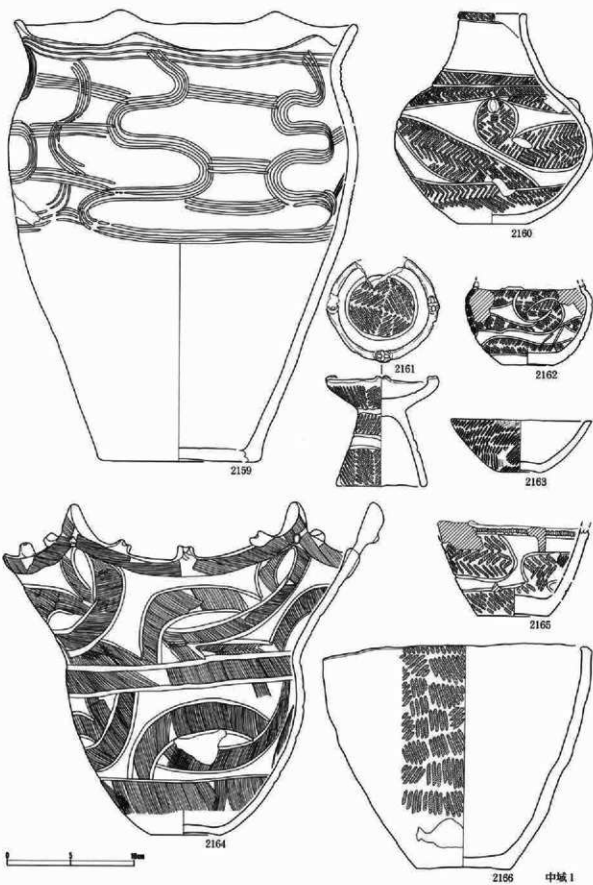


2158

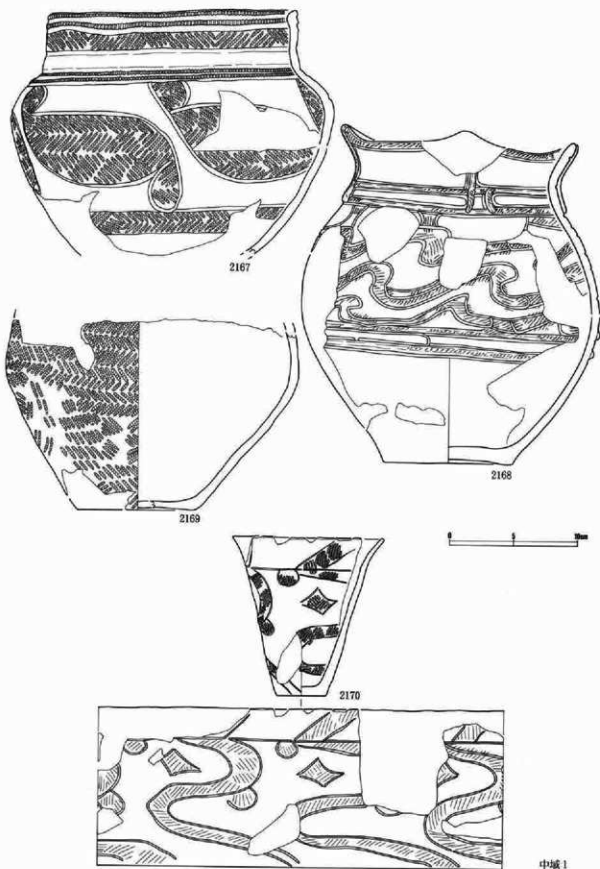


中城 1

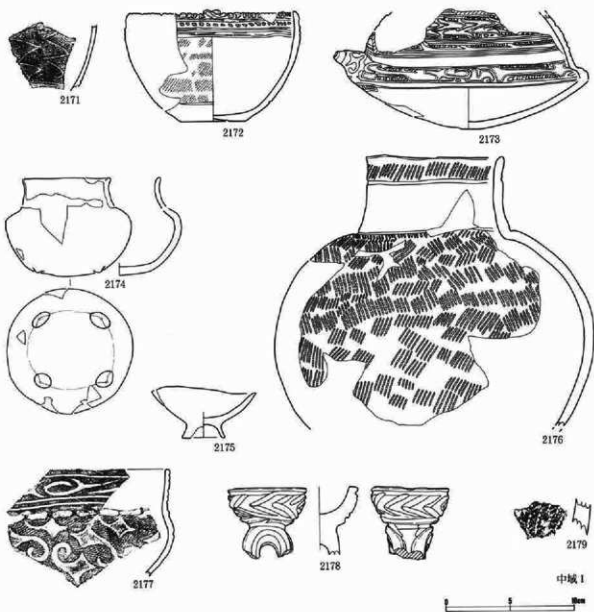
第293図 遺構外土器98 (西部捨て場)



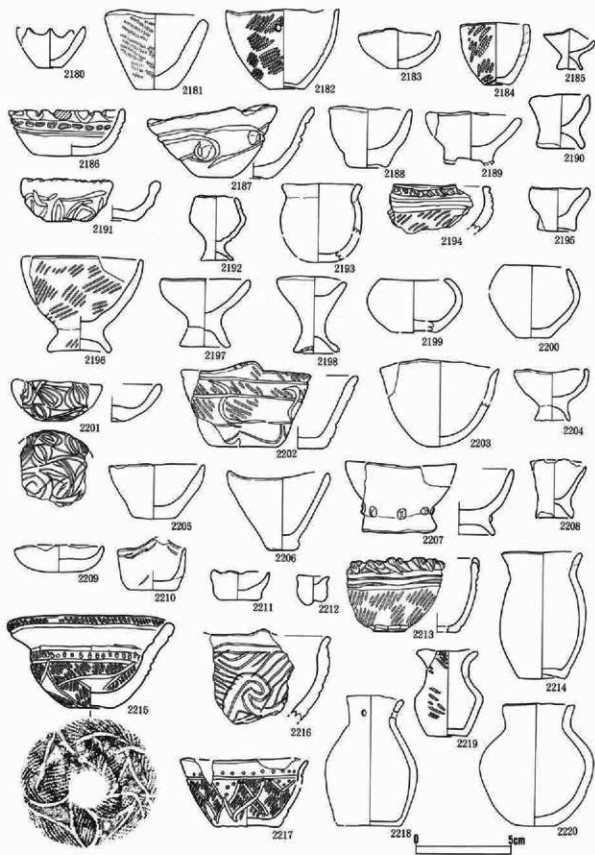
第294図 遺構外土器99 (西部捨て場)



第295図 遠構外土器100 (西部捨て場)



第296図 遺構外土器101 (表探)



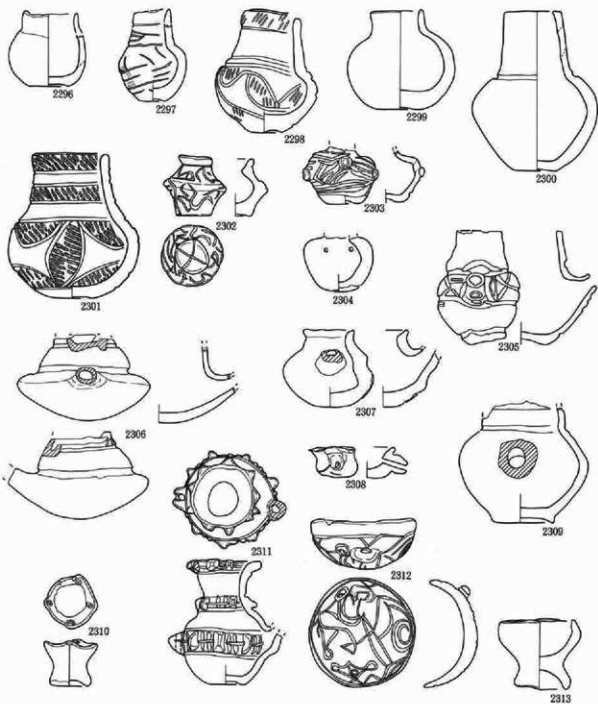
第297図 遺構外土製品1 (東部捨て場) ミニチュア土器



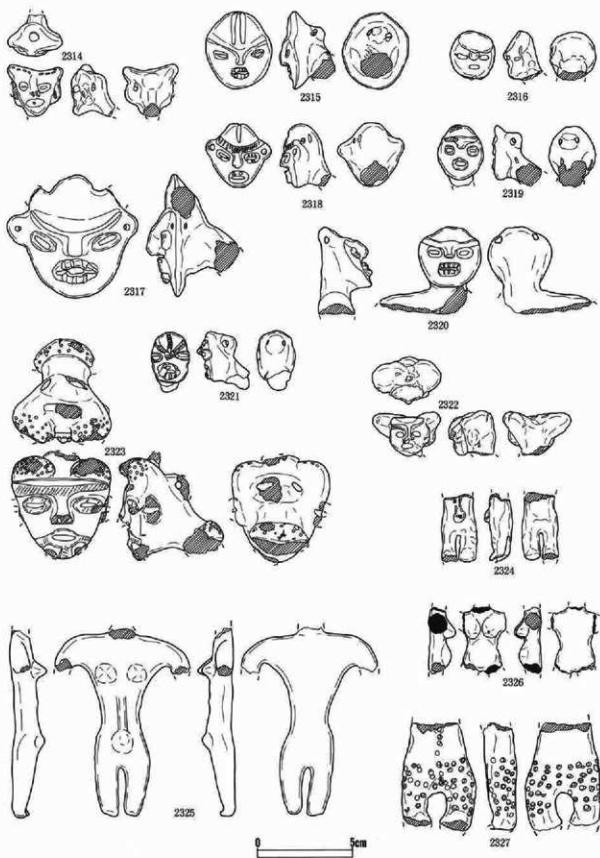
第298図 遺構外土製品2 (東部・西部捨て場) ミニチュア土器



第299図 遺構外土製品3 (西部捨て場) ミニチュア土器



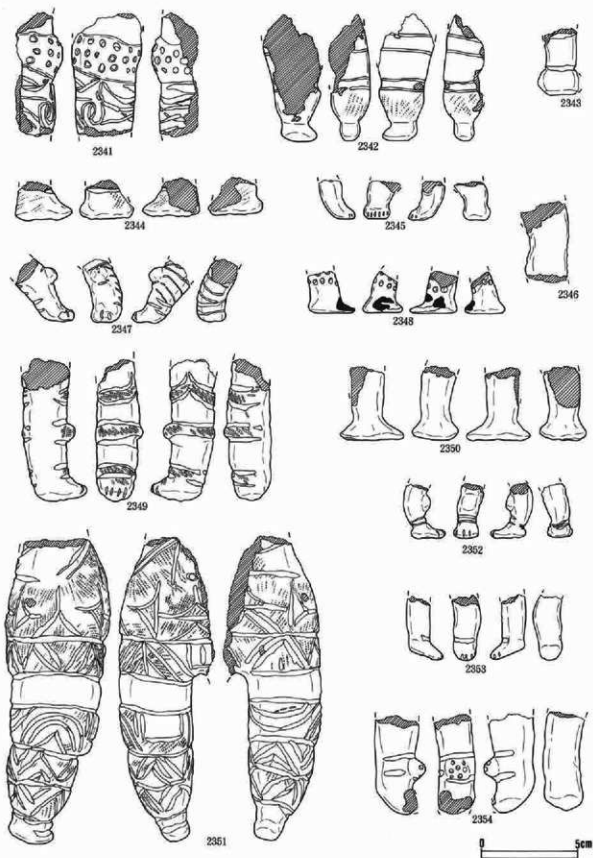
第300図 遺構外土製品4（西部捨て場・表探）ミニチュア土器



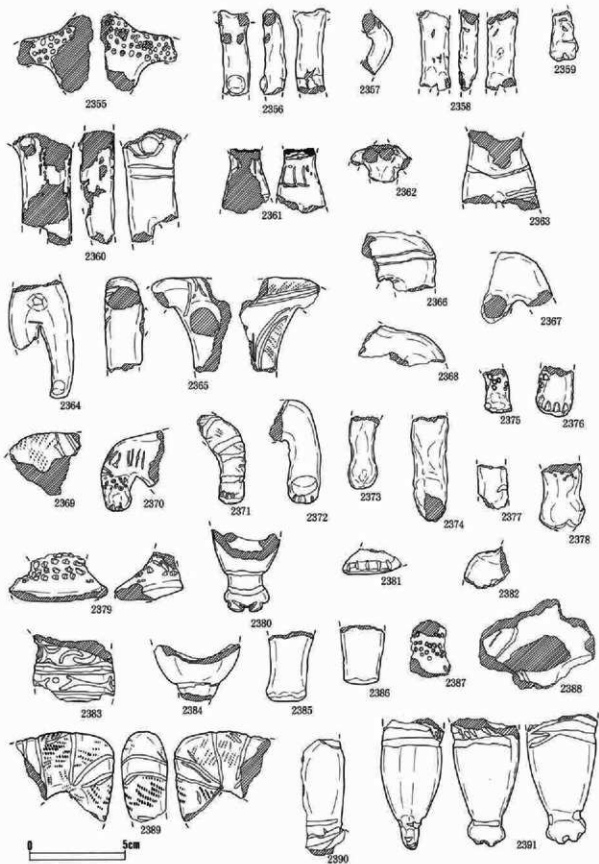
第301図 遺構外土製品 5 (東部捨て場) 土偶



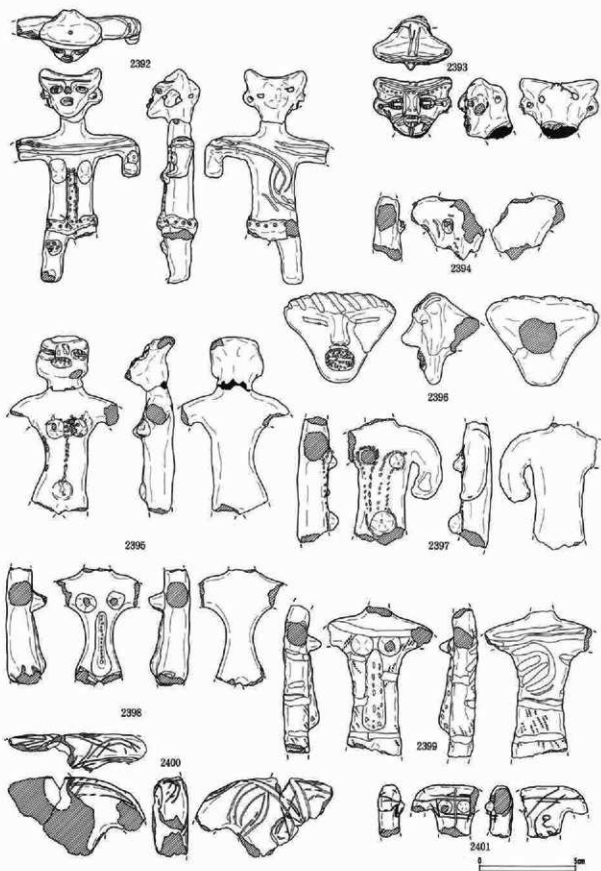
第302図 遺構外土製品6（東部捨て場）土偶



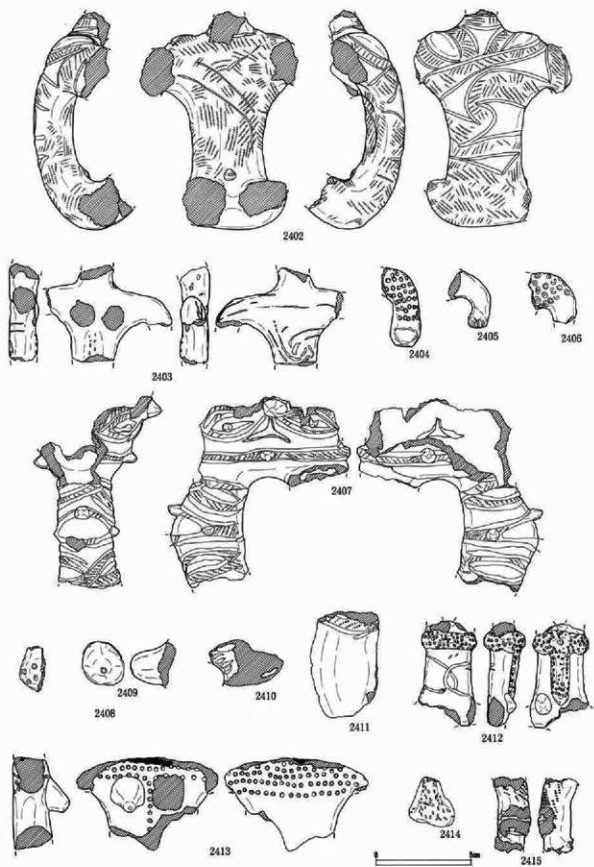
第303図 遺構外土製品7（東部捨て場）土偶



第304図 遺構外土製品8（東部捨て場）土偶



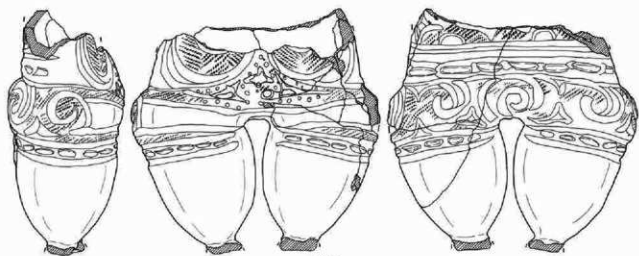
第305図 遺構外土製品9 (東部捨て場) 土偶



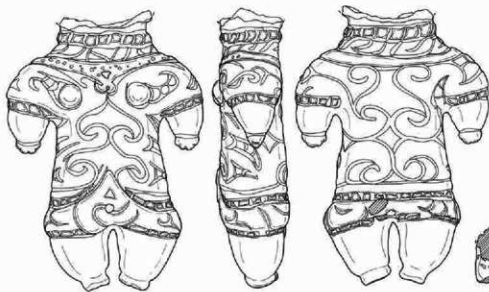
第306図 遺構外土製品10 (東部捨て場) 土偶



第307図 遺構外土製品11（東部捨て場）土偶



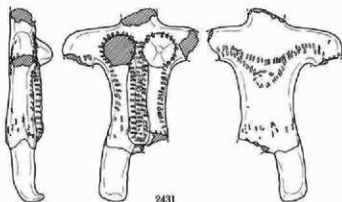
2425



2426



2427



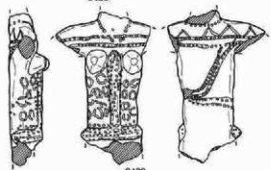
2431



2428

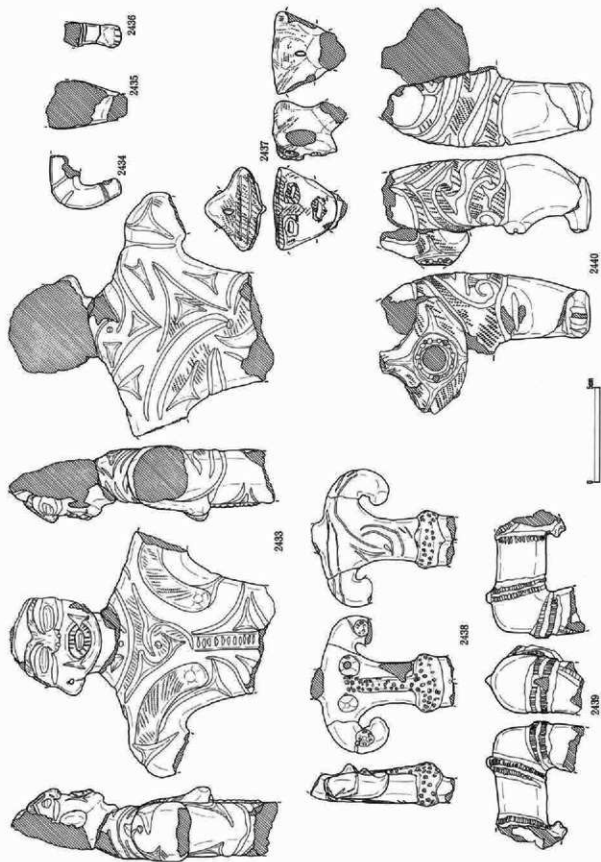
2429

2430

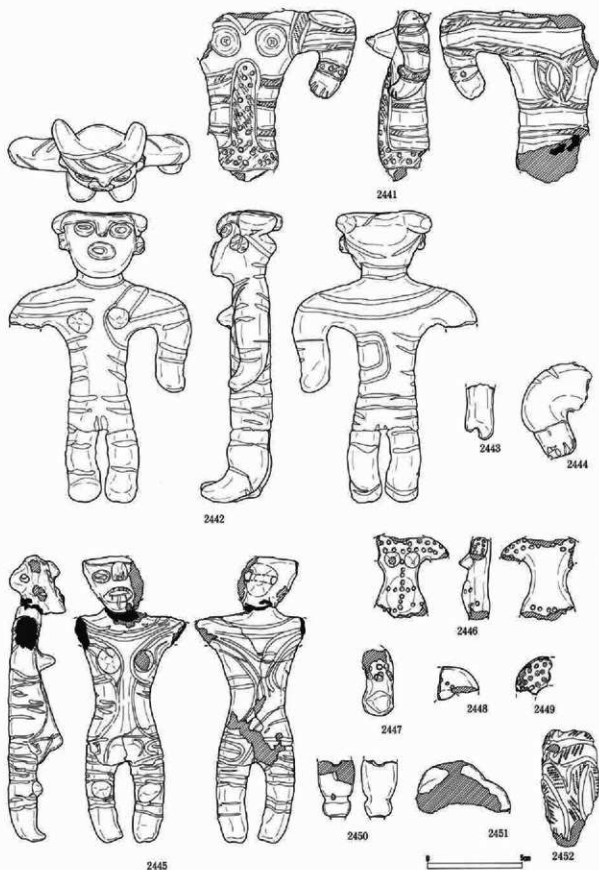


2432

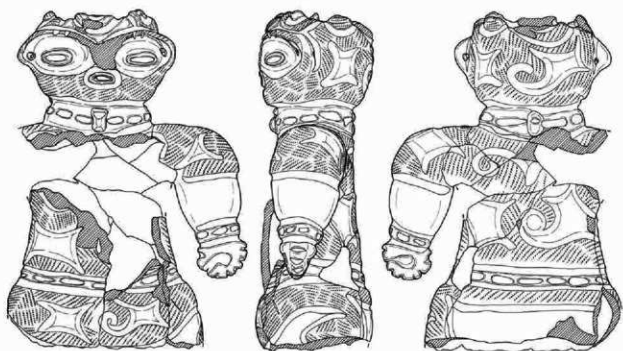
第308図 遺構外土製品12(東部・西部捨て場)土偶



第309図 遺構外土製品13 (西部捨て場) 土偶



第310図 遺構外土製品14 (西部捨て場) 土偶



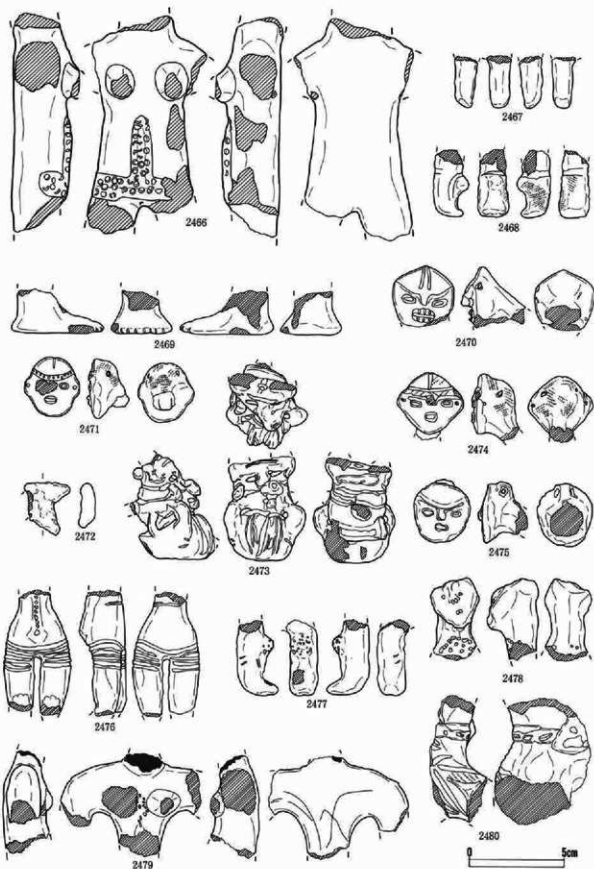
2453



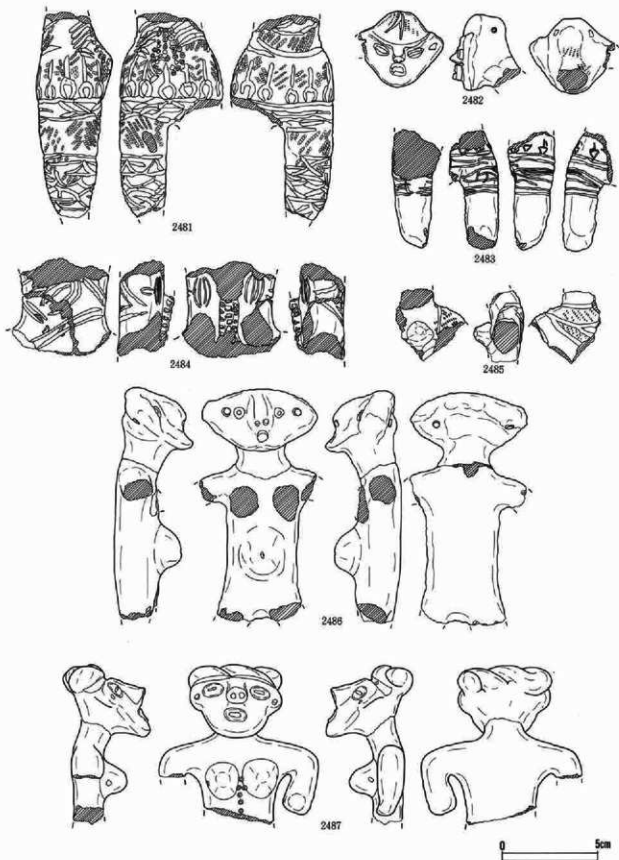
第311図 遺構外土製品15 (西部捨て場) 土偶



第312図 遺構外土製品16 (西部捨て場) 土偶



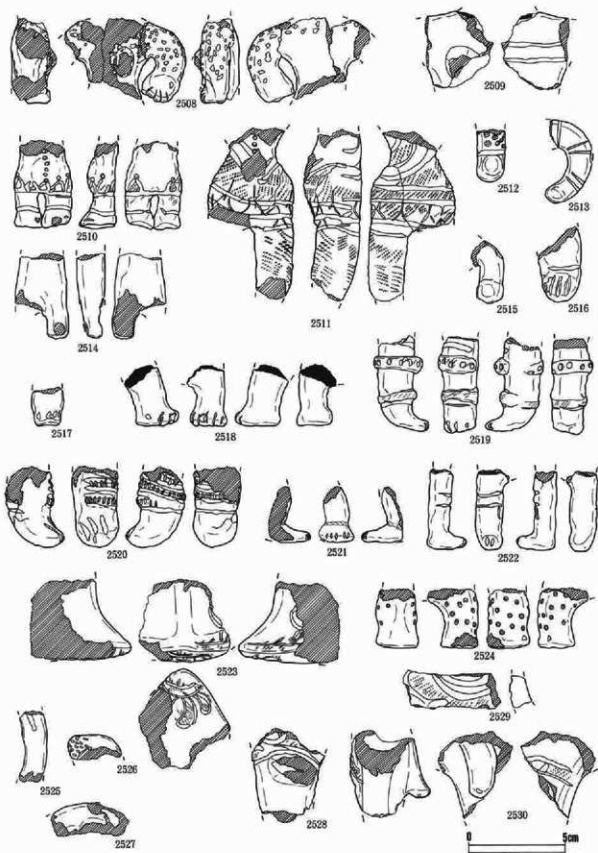
第313図 遺構外土製品17 (西部捨て場) 土偶



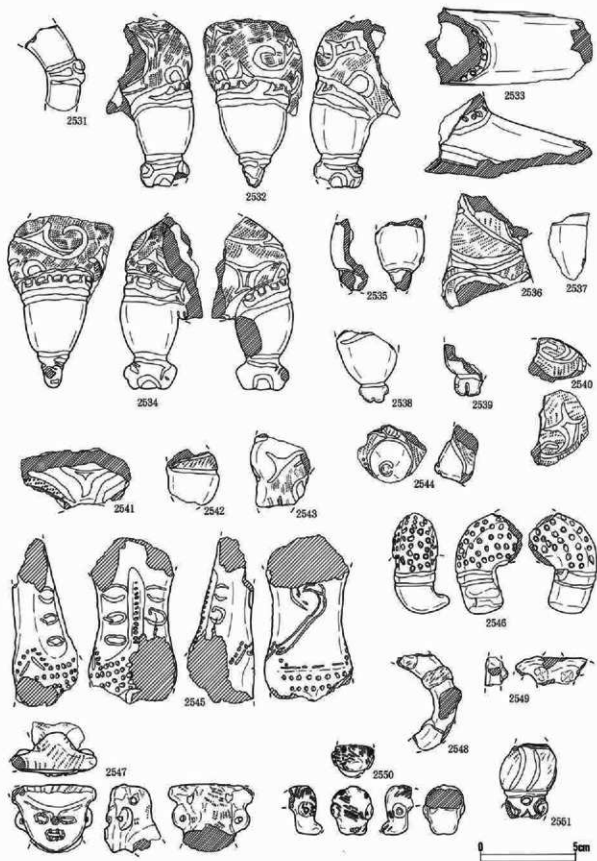
第314図 遺構外土型品18（西部捨て場）土偶



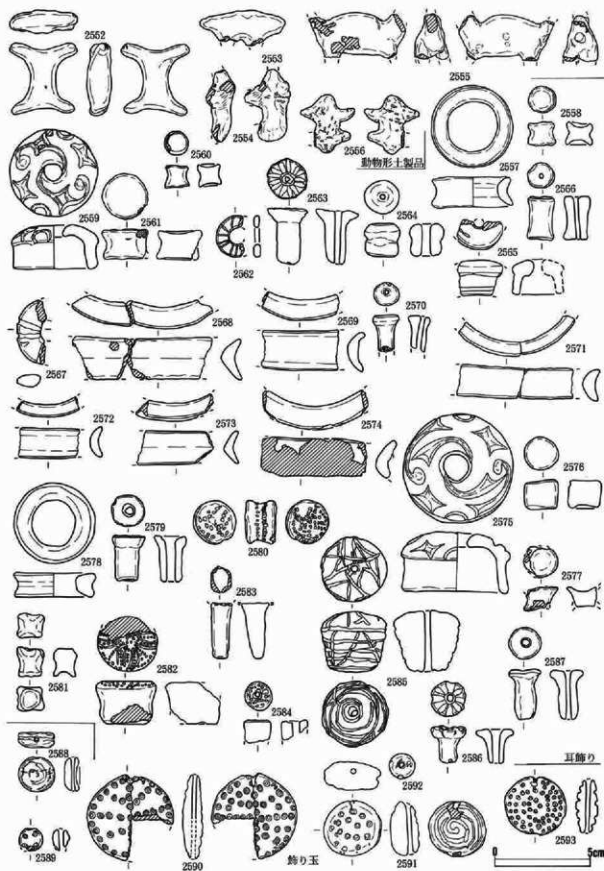
第315図 遺構外土製品19 (西部捨て場) 土偶



第316図 遺構外土製品20 (西部捨て場) 土偶



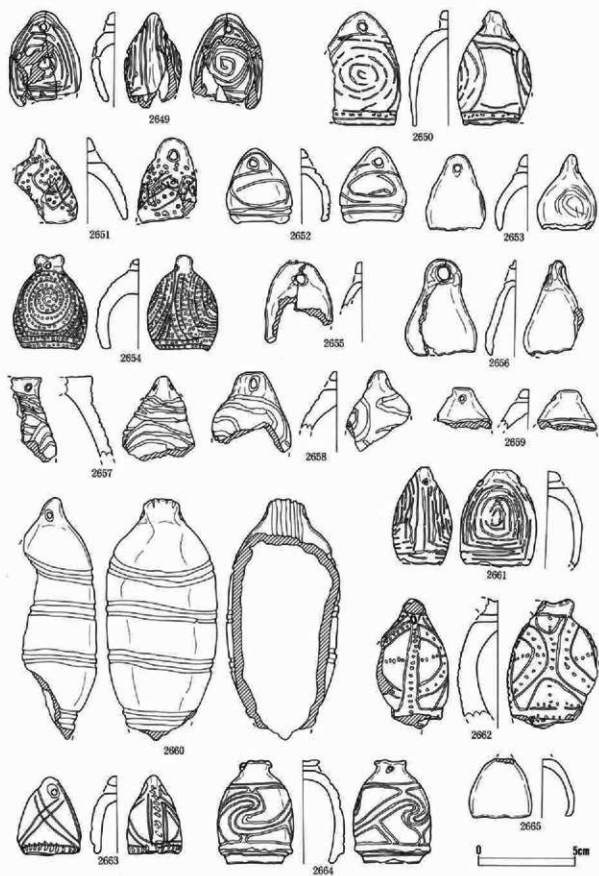
第317図 遺構外土製品21 (西部捨て場・表探) 土偶



第318図 遺構外土製品22 (東部・西部捨て場・表探) 動物形土製品、耳飾り、飾り玉



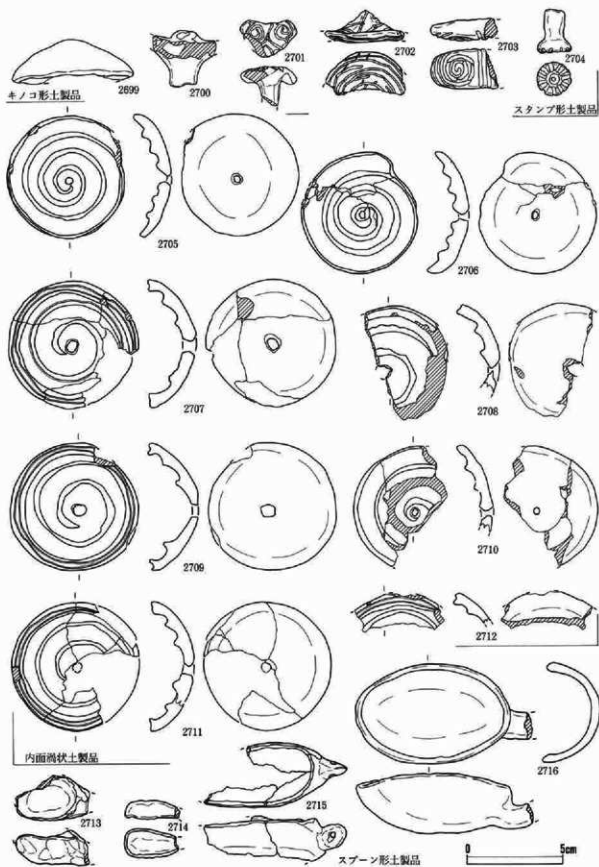
第319図 遺構外土製品23 (東部・西部捨て場・表探) 飾り玉、ペンダント、輝形土製品



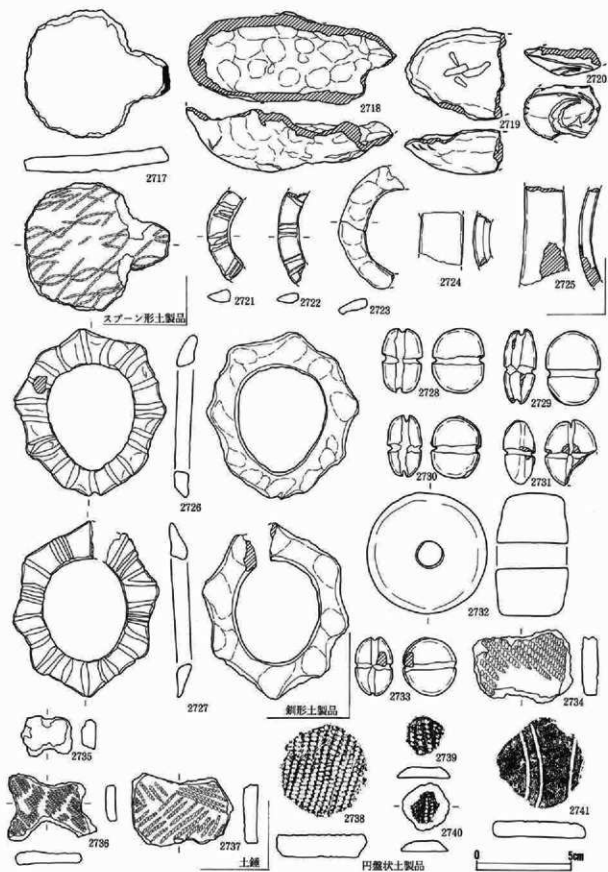
第320図 遺構外土製品24（東部捨て場）鐳形土製品



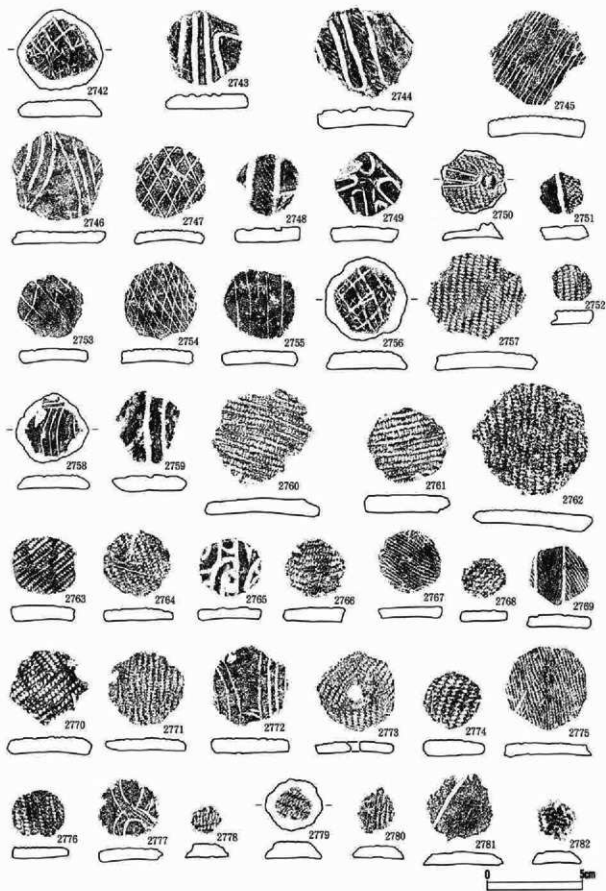
第321図 遺構外土製品25 (東部・西部捨て場) 銅形土製品、分銅形土製品、土鈴、キノコ形土製品



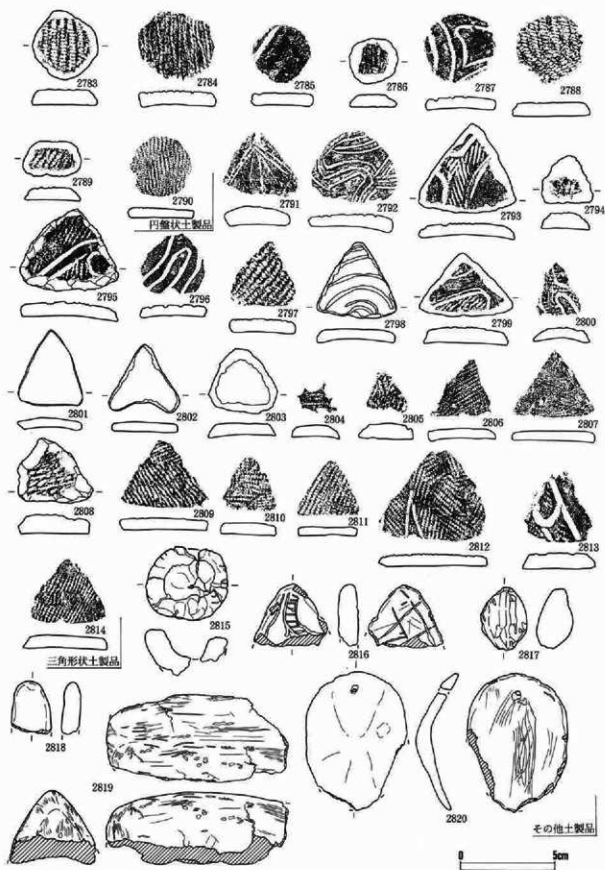
第322図 遺構外土製品26（東部・西部捨て場）キノコ形土製品、スタンプ形土製品、内面渦状土製品、スプーン形土製品



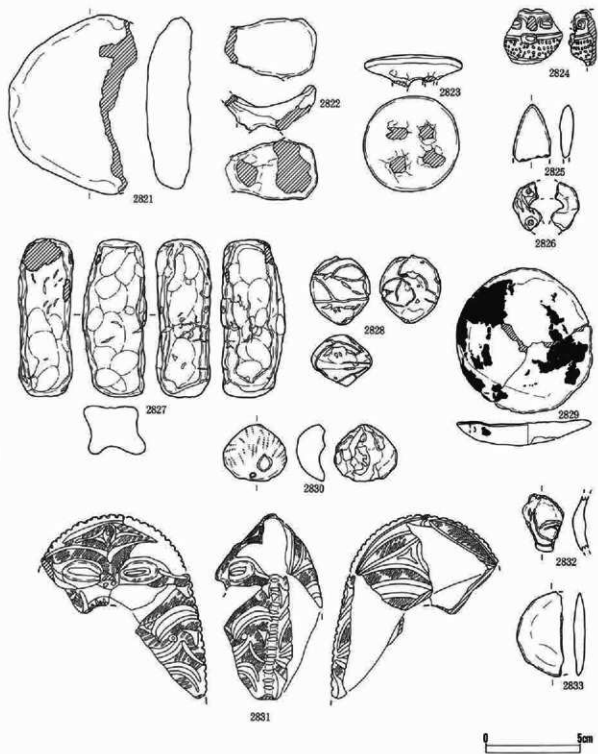
第323図 遺構外土製品27(東部・西部捨て場) スプーン形土製品、銅形土製品、土鏝、円盤状土製品



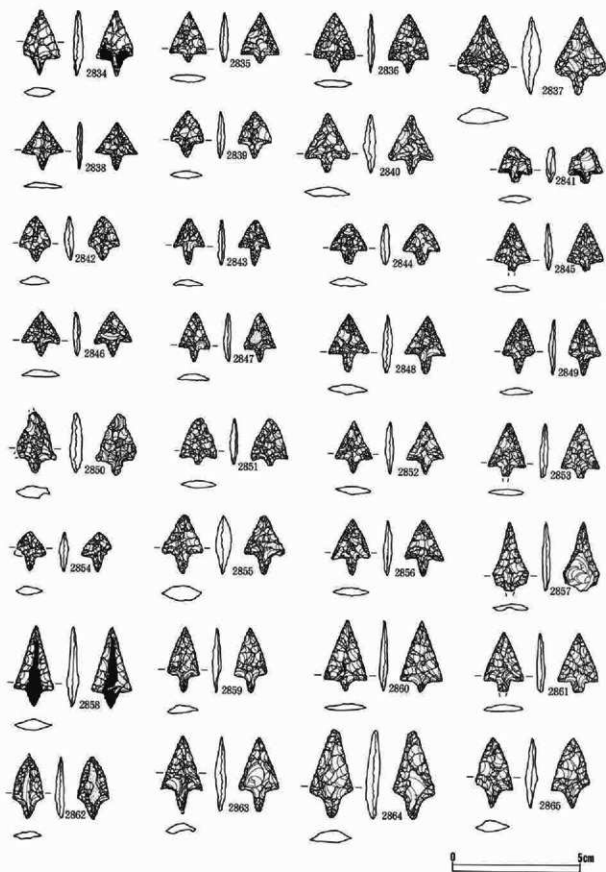
第324図 遺構外土製品28（東部・西部捨て場）円盤状土製品



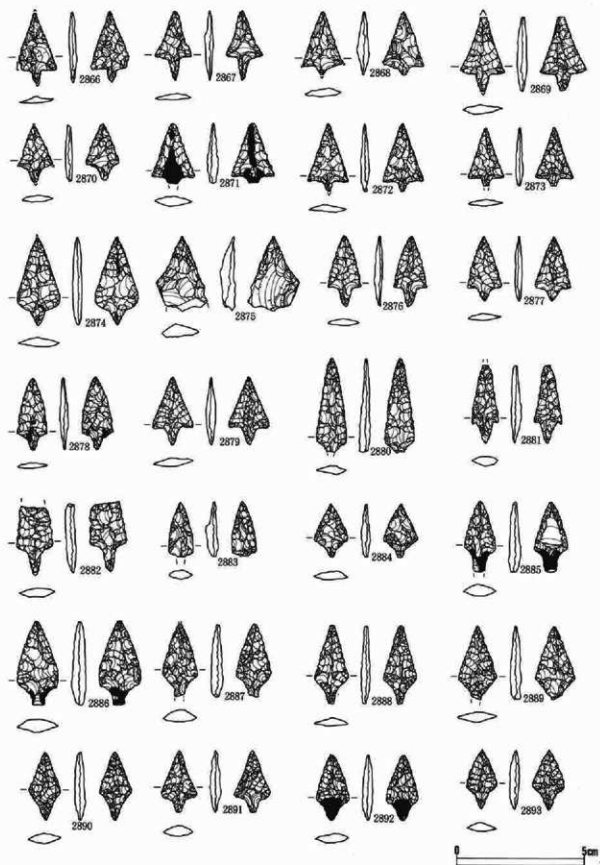
第325図 遺構外土製品29 (東部・西部捨て場・表探) 円盤状土製品、三角形土製品、その他土製品



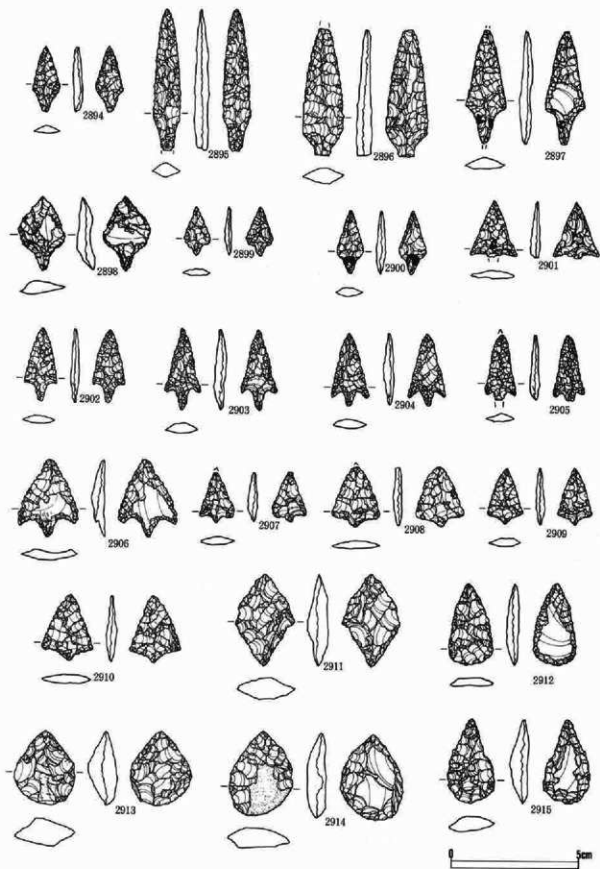
第326図 遺構外土製品30（東部・西部捨て場）その他土製品



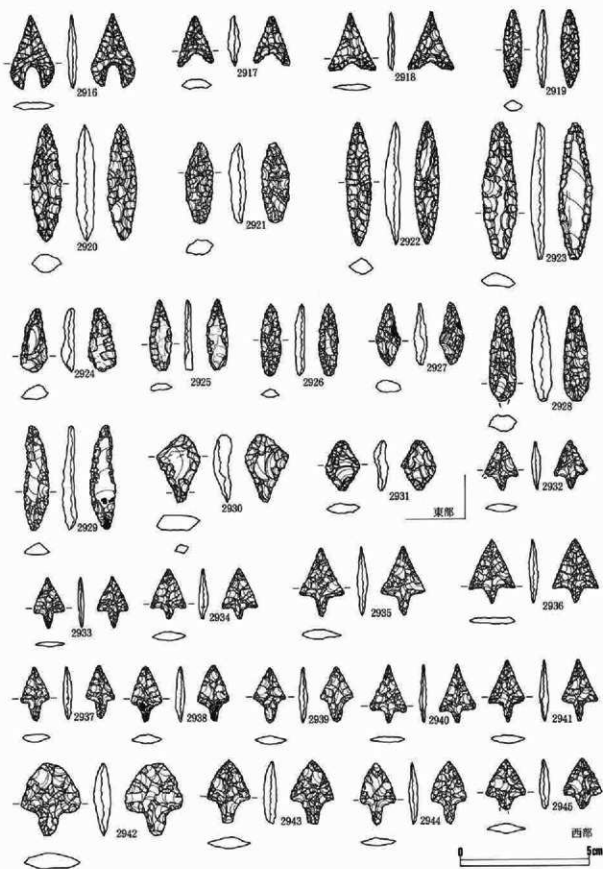
第327図 遺構外石器 1 (東部捨て場) 石鏃



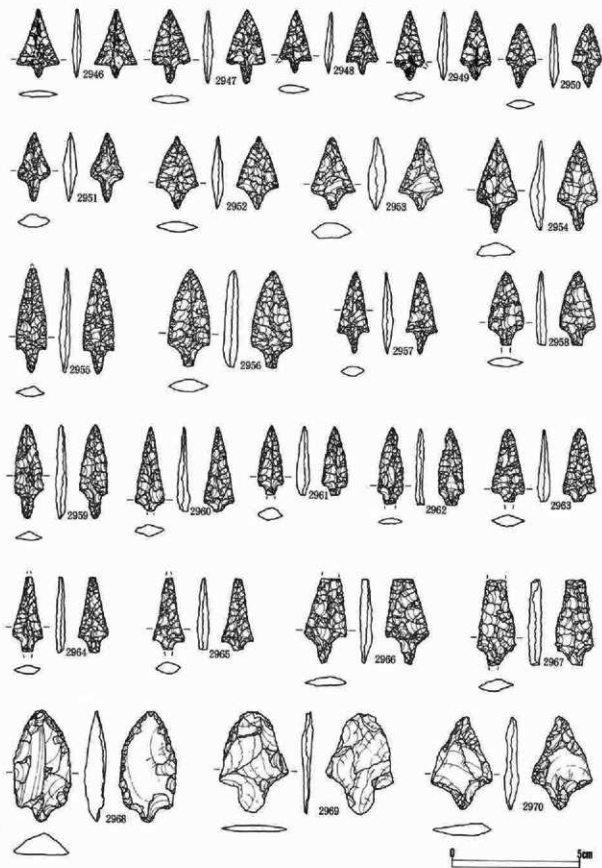
第328図 遺構外石器2（東部捨て場）石鏃



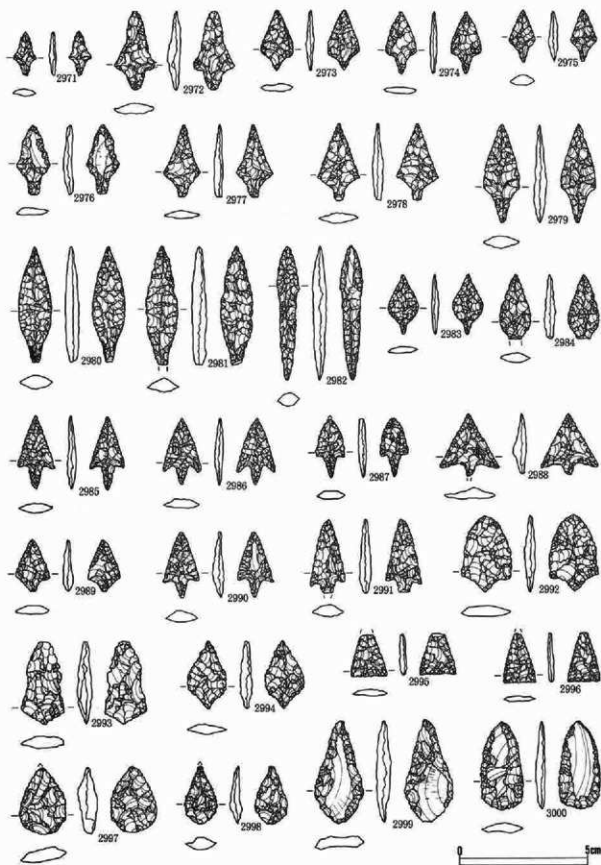
第329図 遺構外石器3 (東部捨て場) 石鉄



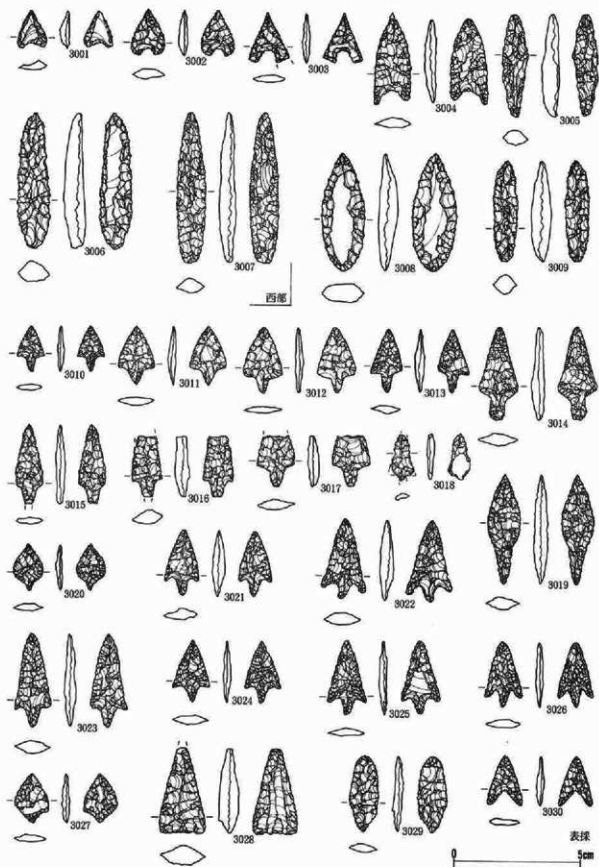
第330図 遺構外石器4（東部・西部捨て場）石鏃



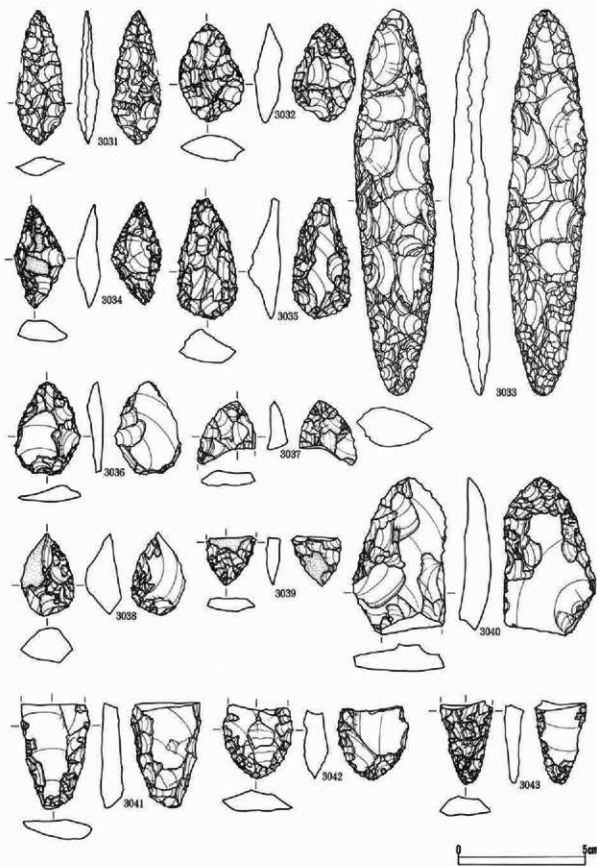
第331図 遺構外石器5 (西部捨て場) 石楯



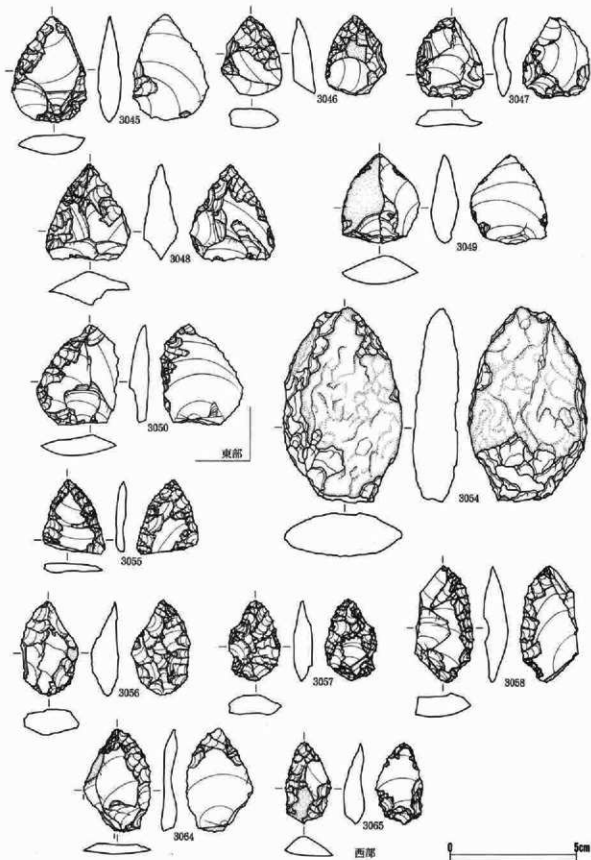
第332図 遺構外石器6 (西部捨て場) 石鏃



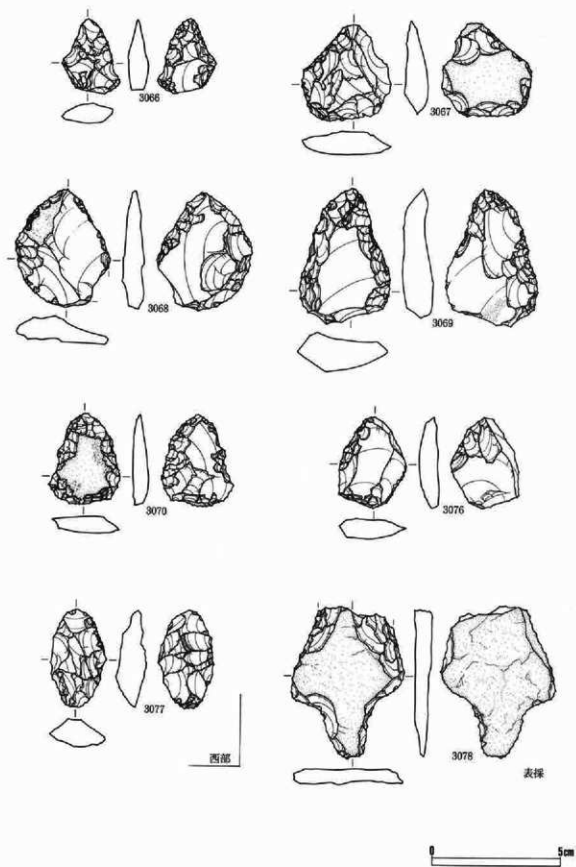
第333図 遺構外石器7（西部捨て場・表採）石炭



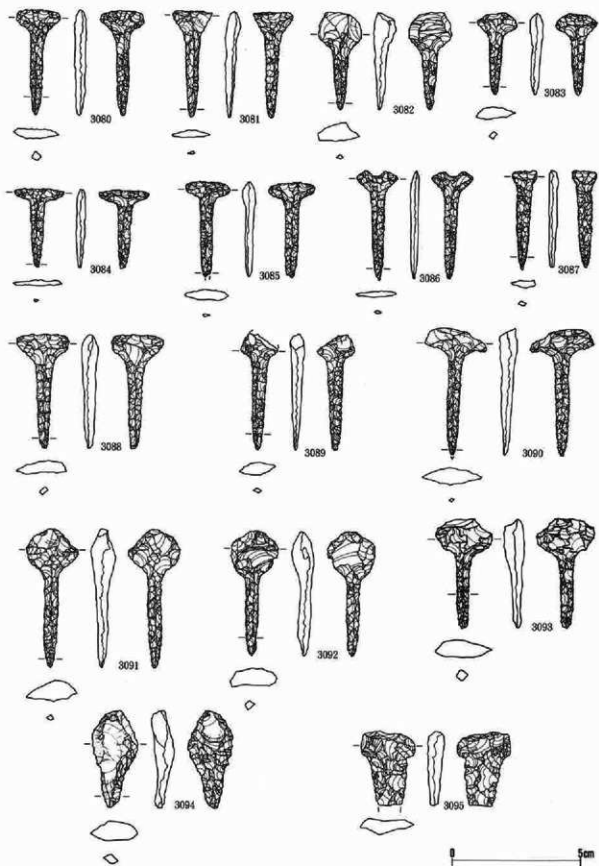
第334図 遺構外石器 8 (東部捨て場) 尖頭器



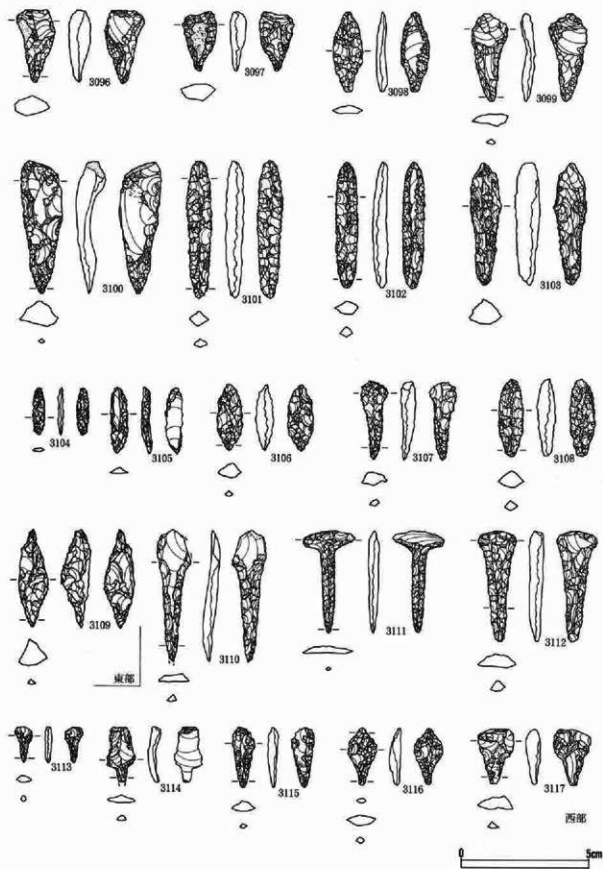
第335図 遺構外石器 9 (東部・西部捨て場) 尖頭器



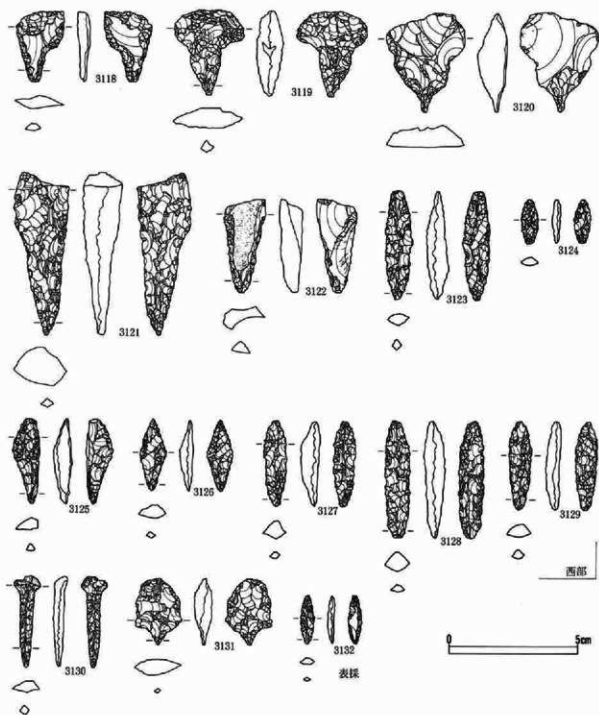
第336図 遺構外石器10 (西部捨て場・表探) 尖頭器



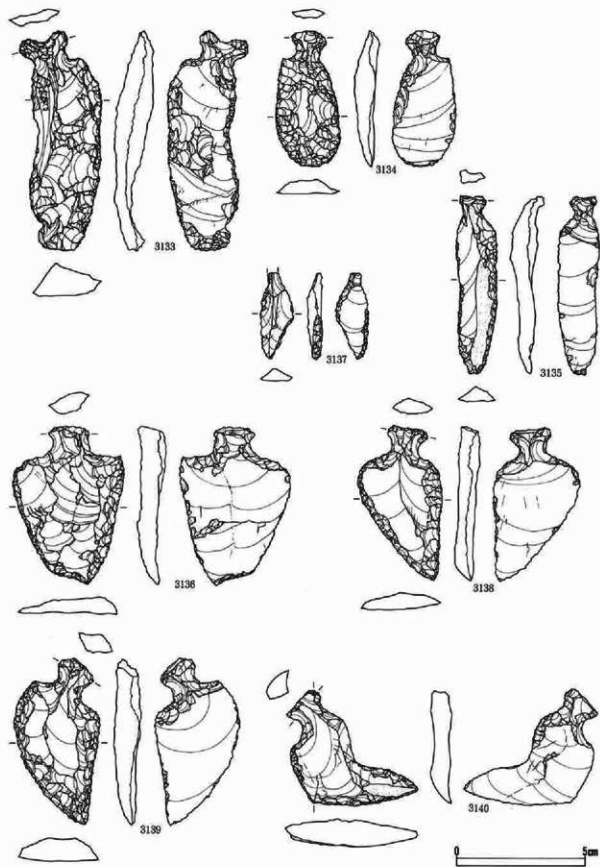
第337図 遺構外石器11 (東部捨て場) 石鏃



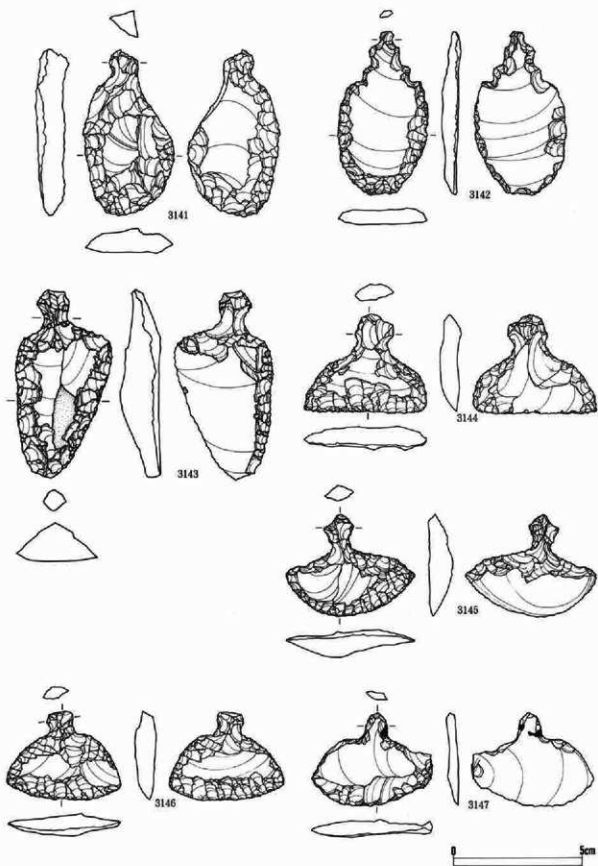
第338図 遺構外石器12 (東部・西部捨て場) 石鏃



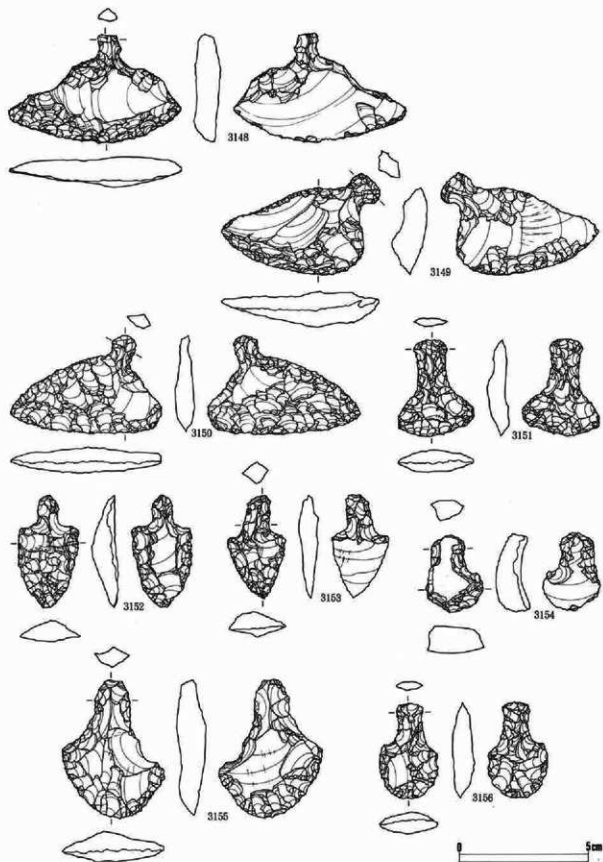
第330図 遺構外石器13 (西部捨て場・表採) 石鏃



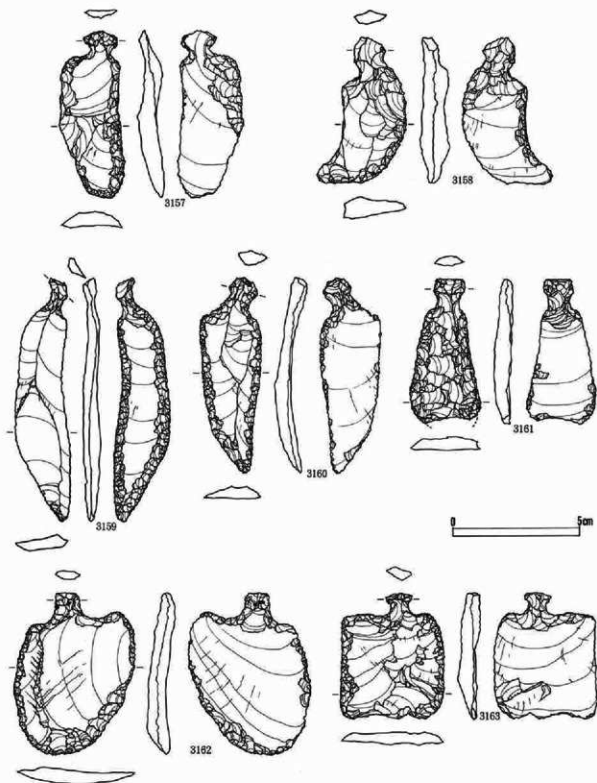
第340図 遺構外石器14 (東部捨て場) 石匙



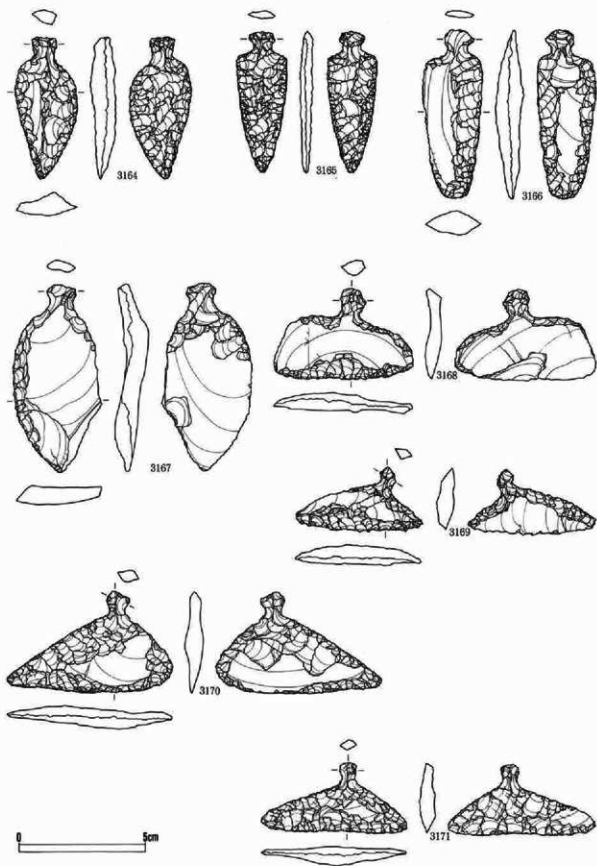
第341図 遺構外石器15（東部捨て場）石匙



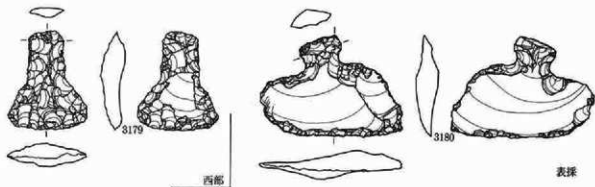
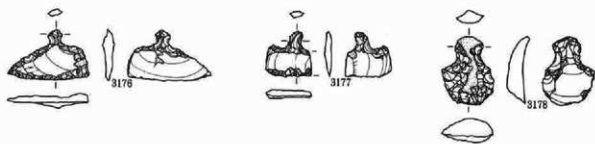
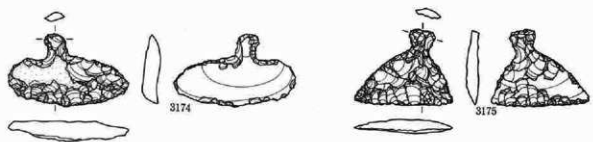
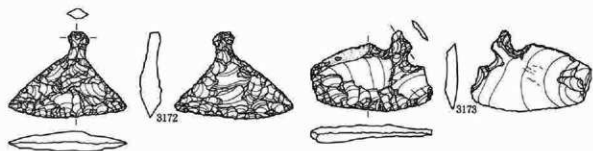
第342図 遺構外石器16 (東部捨て場) 石匙



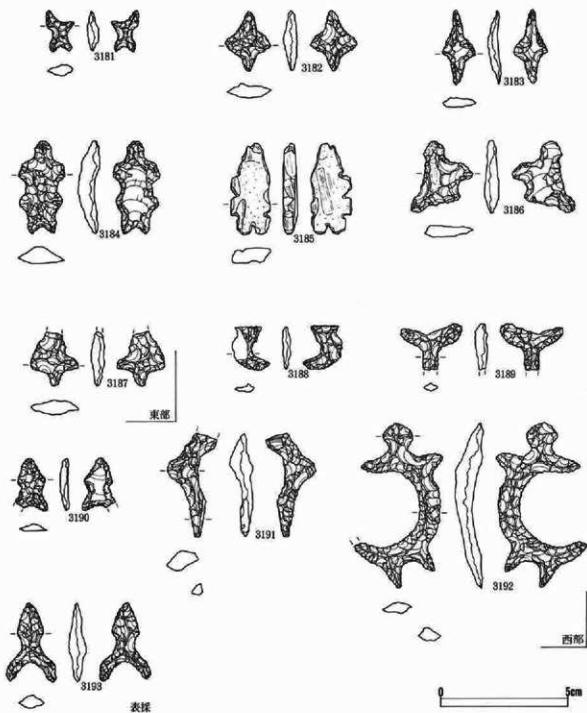
第343図 遺構外石器17 (西部捨て場) 石匙



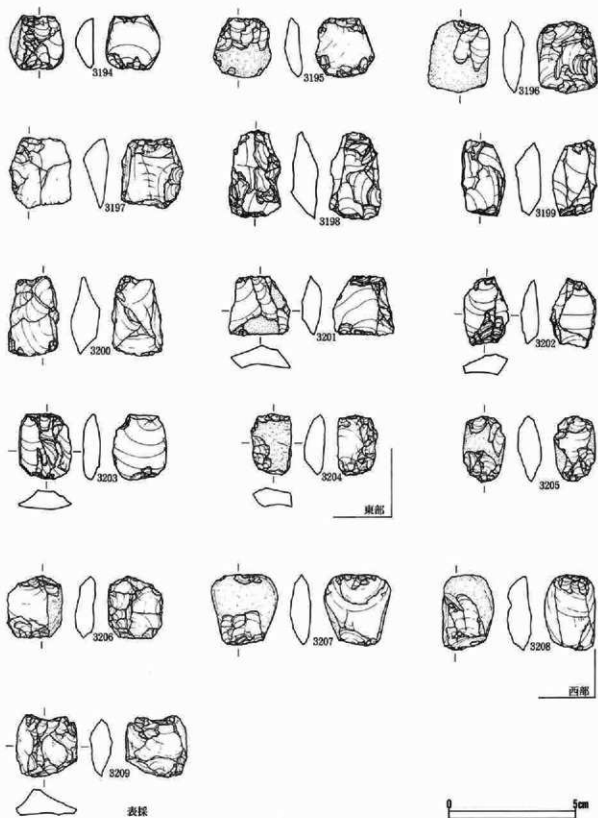
第344図 遺構外石器18 (西部捨て場) 石匙



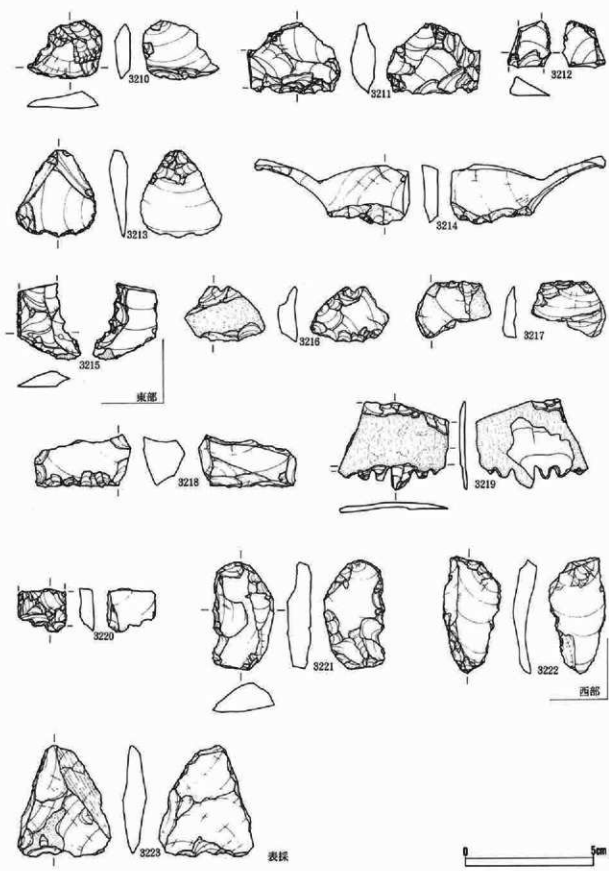
第346図 遺構外石器19（西部捨て場・表採）石匙



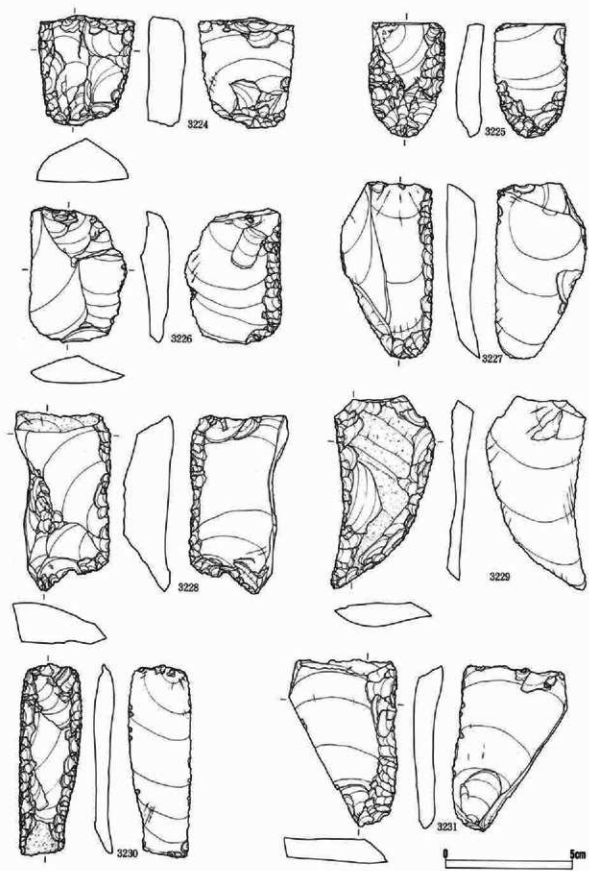
第346図 遺構外石器20（東部・西部捨て場・表探）異形石器



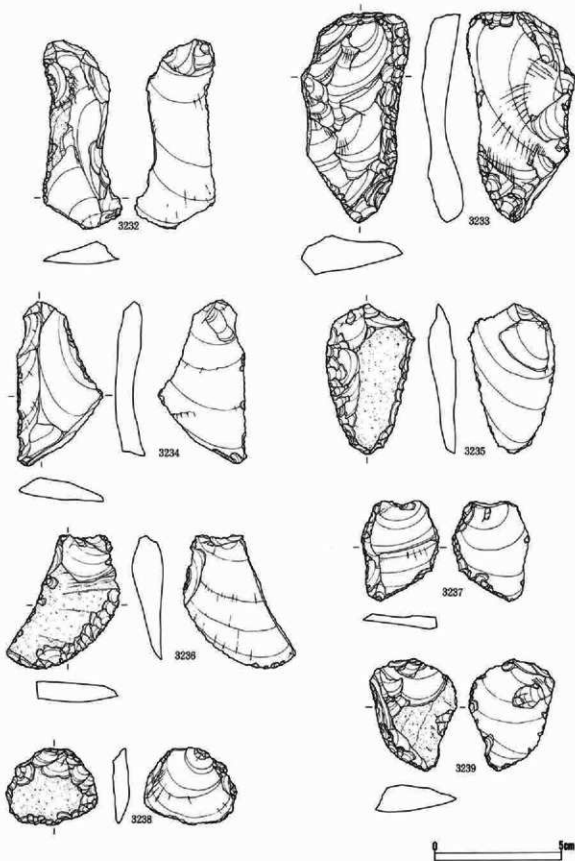
第347図 遺構外石器21 (東部・西部捨て場・表採) 椋形石器



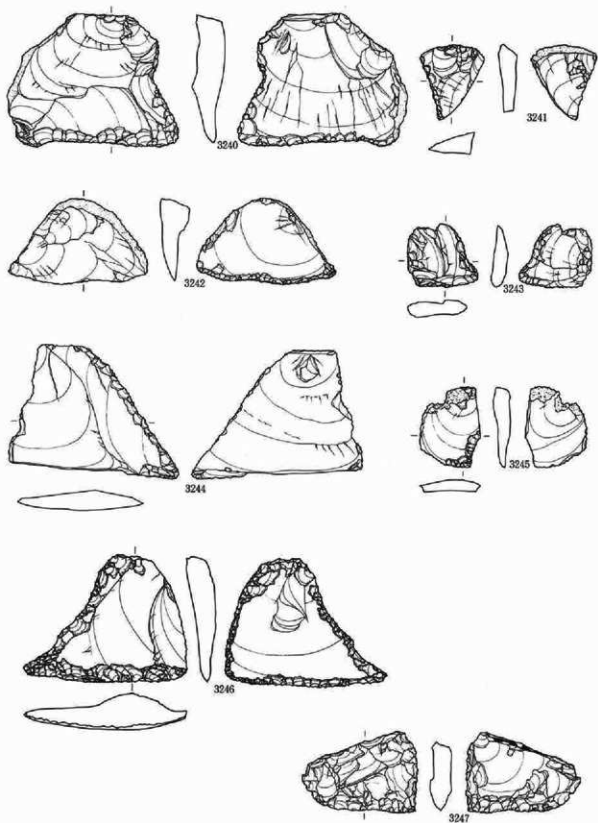
第348図 遺構外石器22 (東部・西部捨て場・表探) 鋸歯状石器



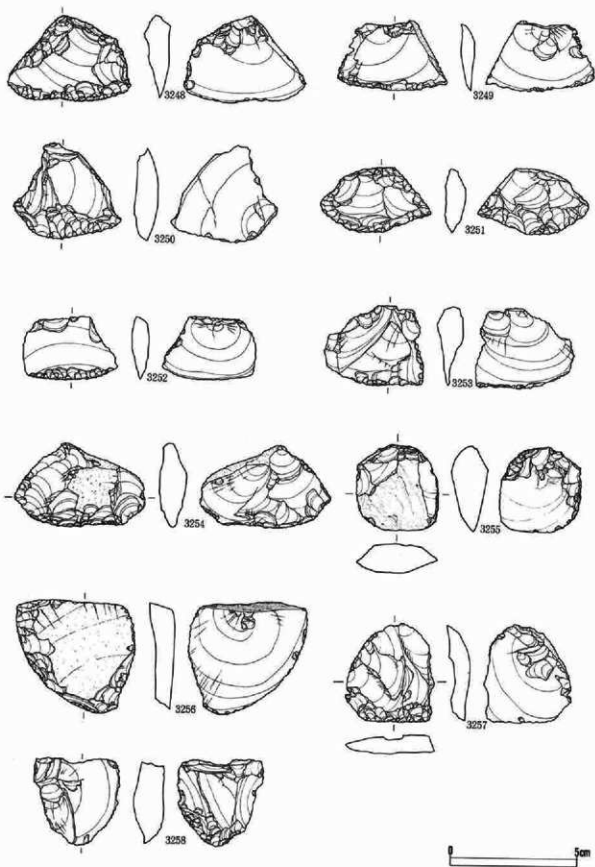
第348図 遺構外石器23 (東部捨て場) 削器



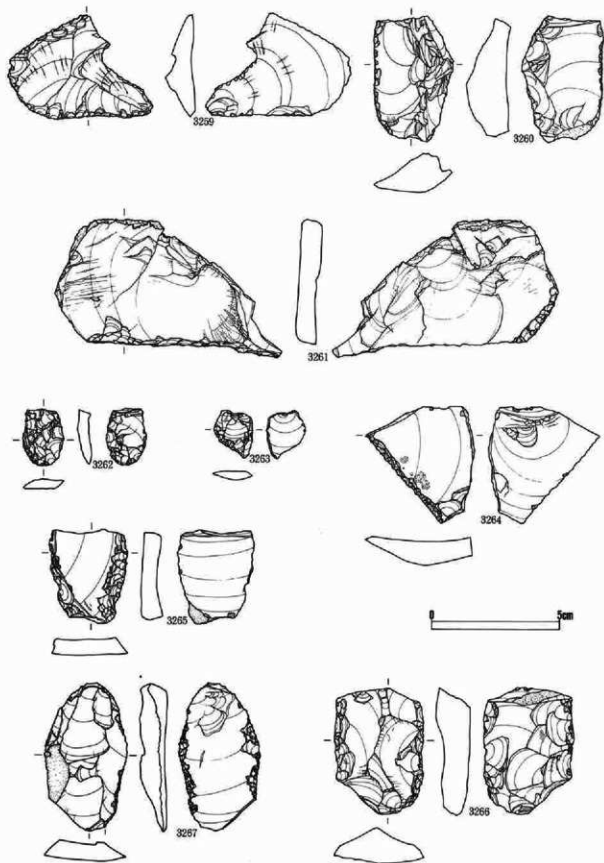
第350図 遺構外石器24（東部捨て場）削器



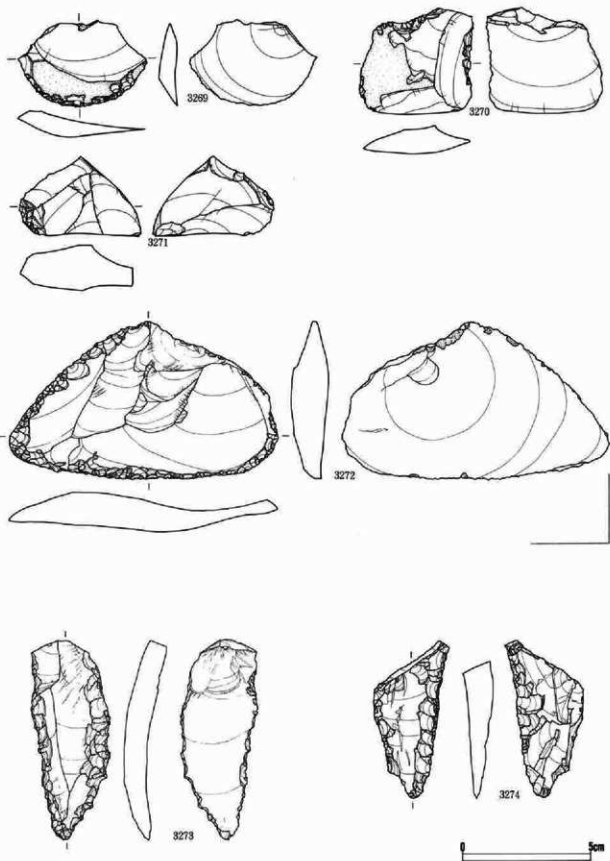
第351図 遠橋外石器25（東部捨て場）削器



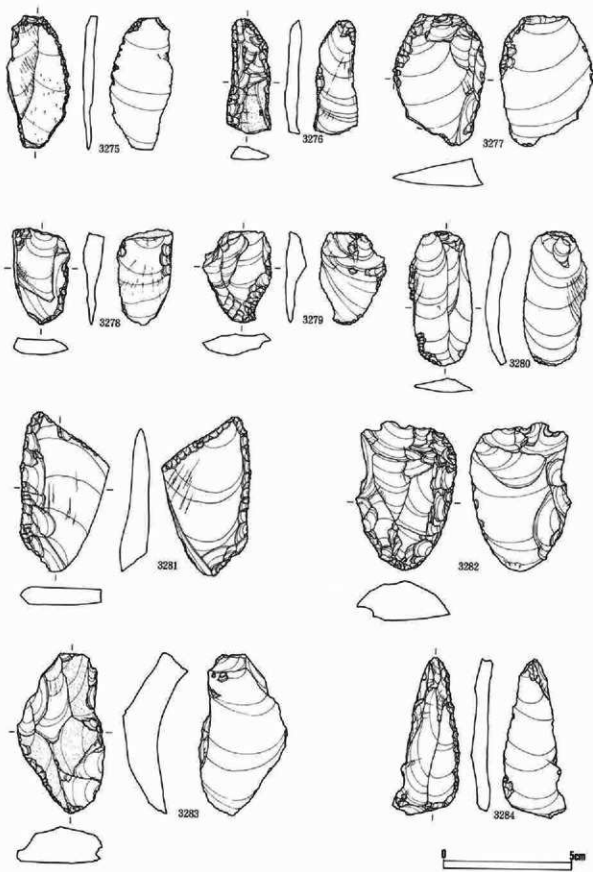
第352図 遺構外石器26（東部捨て場）削器



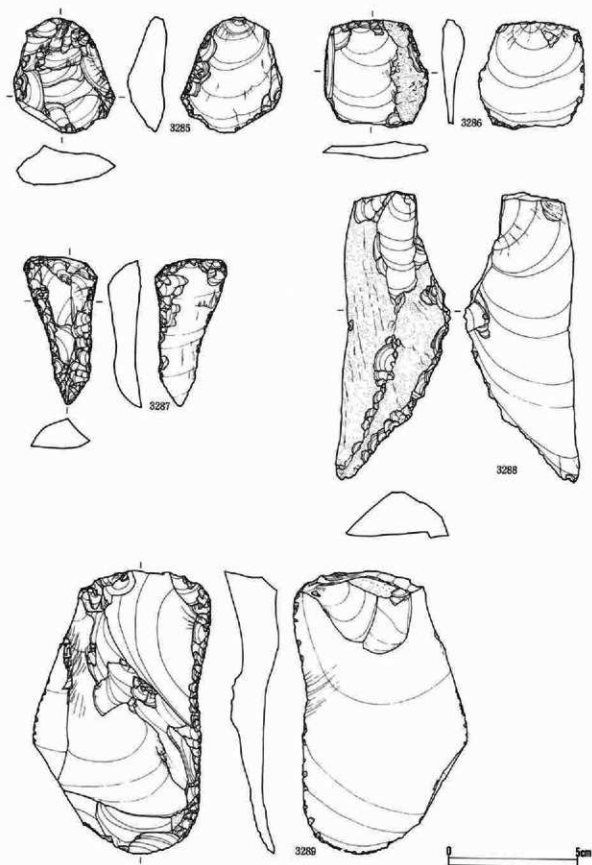
第353図 遺構外石器27（東部捨て場）削器



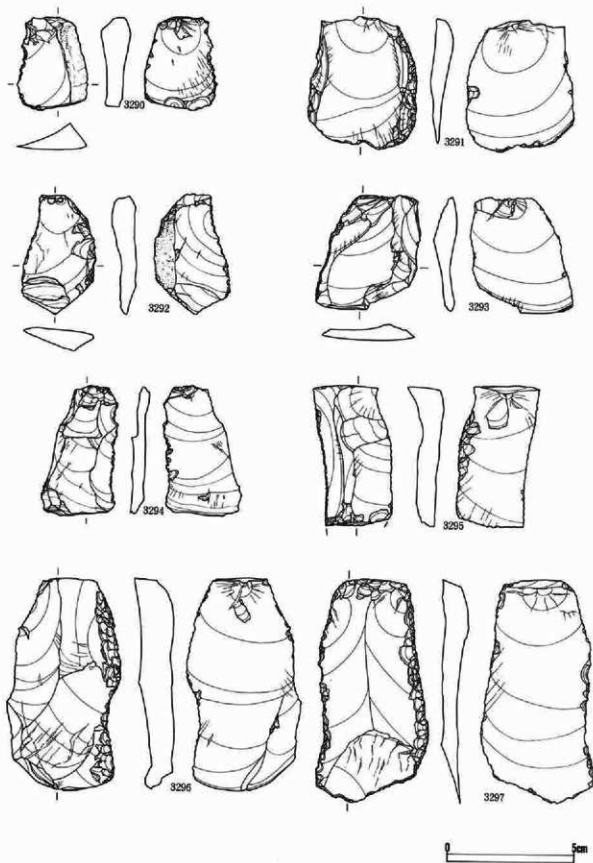
第354図 遺構外石器28 (東部・西部捨て場) 削器



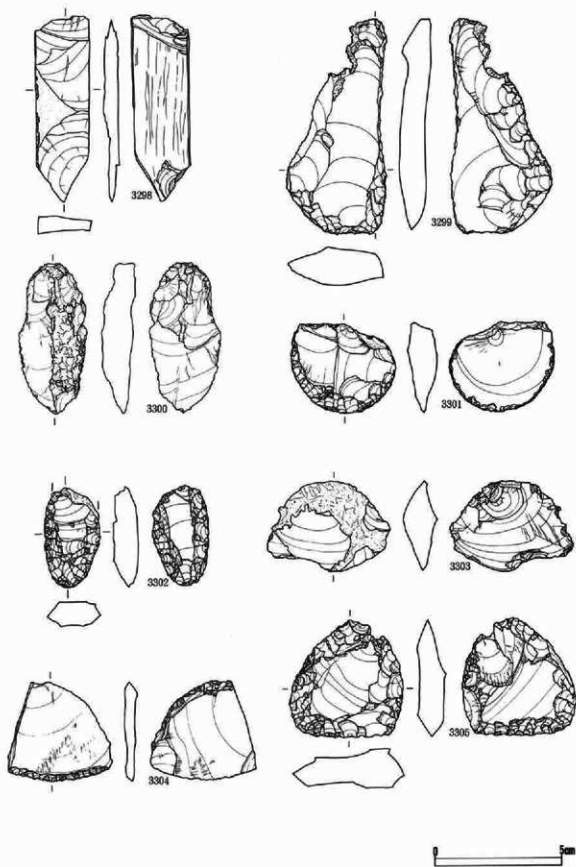
第355図 遺構外石器29 (西郎捨て場) 削器



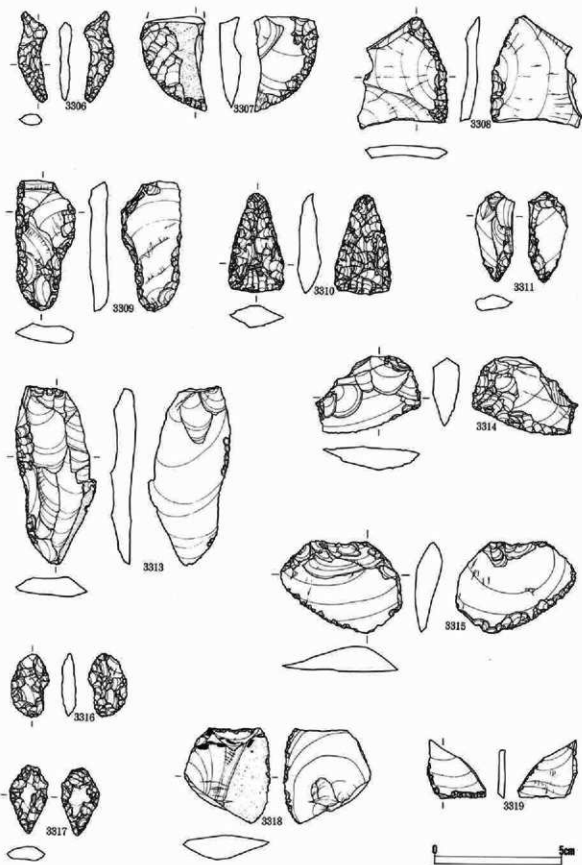
第356図 遺構外石器30（西部捨て場）削器



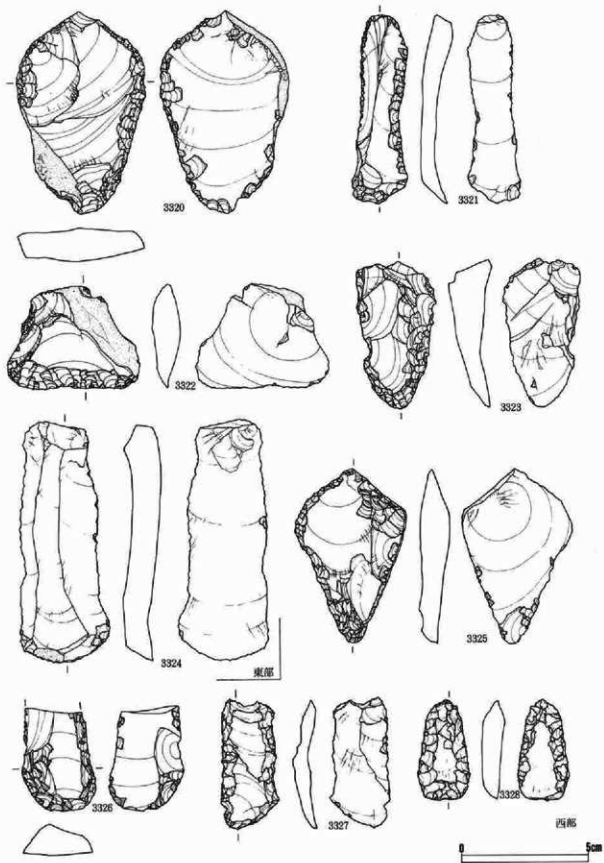
第357図 遺構外石器31（西部捨て場）削器



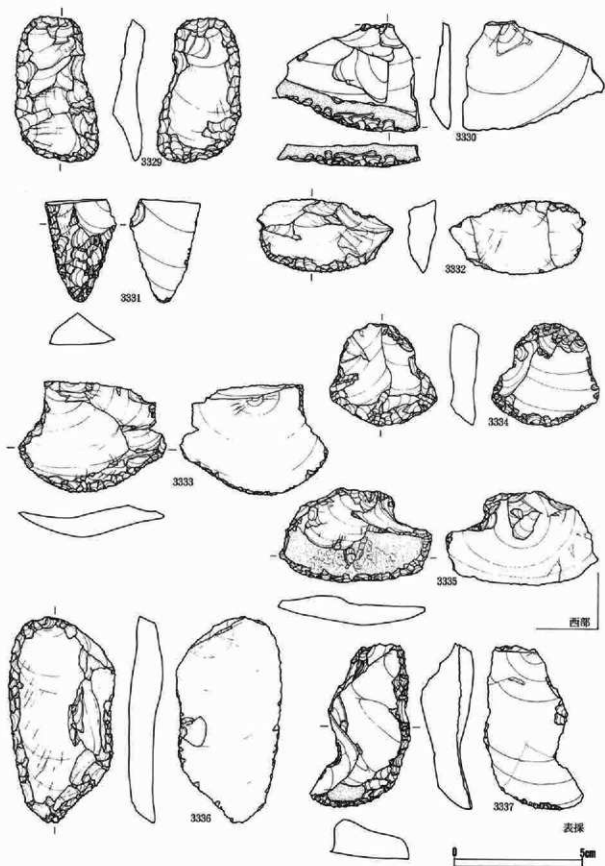
第358図 遺構外石器32（西部捨て場）副器



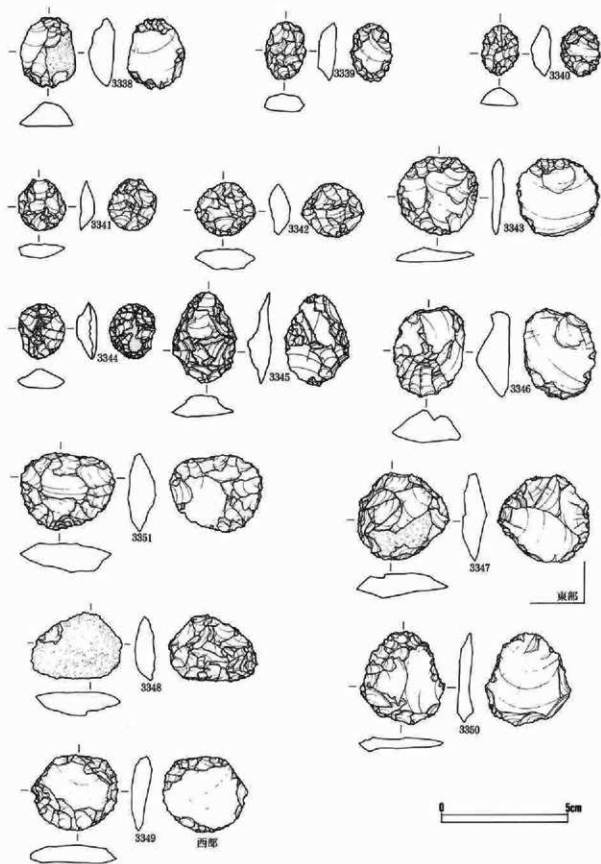
第359図 遺構外石器33 (西部捨て場) 削器



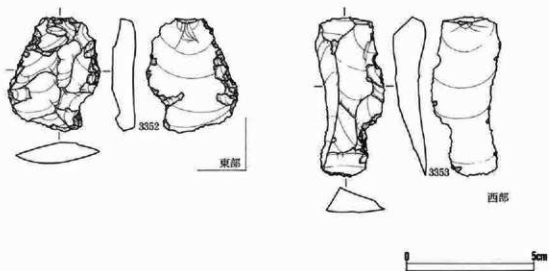
第360図 遺構外石器34 (東部・西部捨て場) 掘器



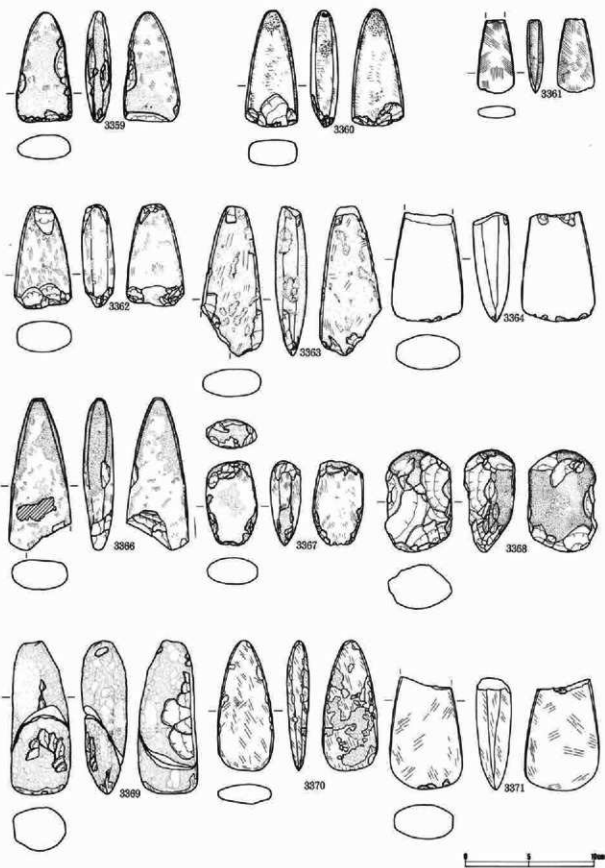
第361図 遠構外石器35 (西部捨て場・表探) 掘器



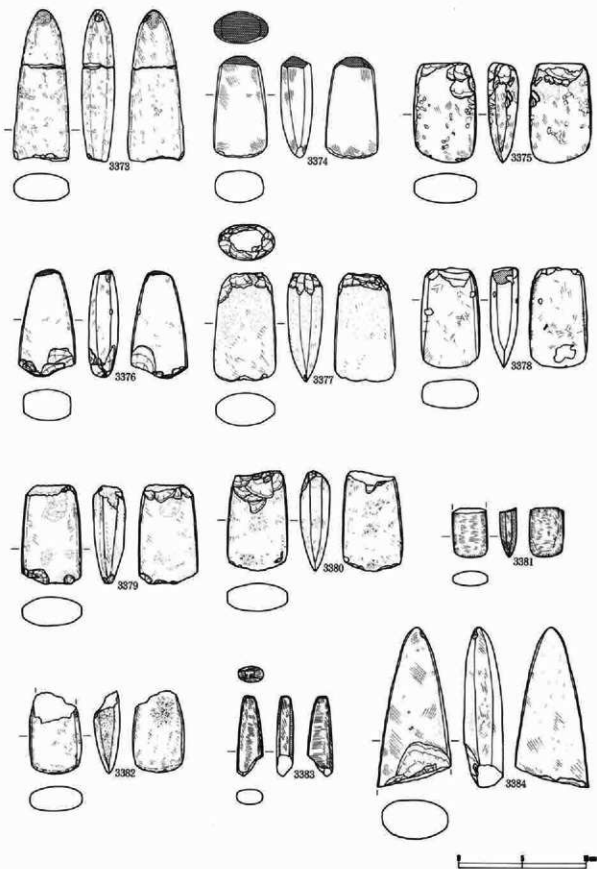
第362図 遺構外石器36 (東部・西部捨て場) 円形石器



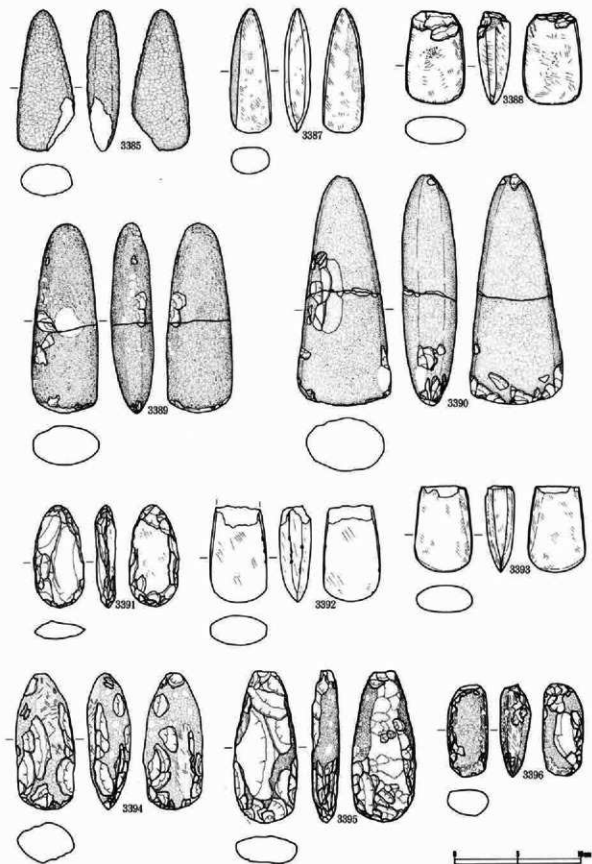
第363図 遺構外石器37（東部・西部捨て場）扶入石器



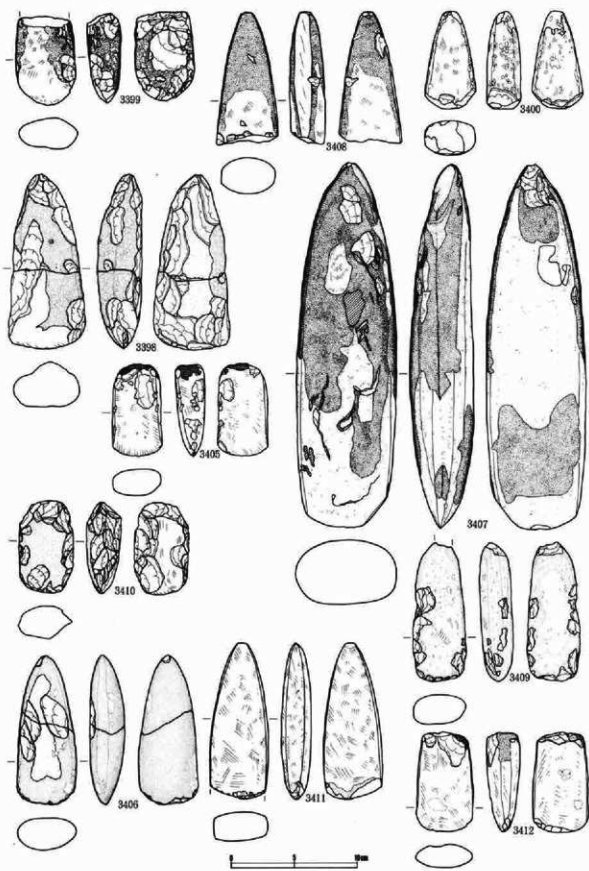
第364図 遺構外石器38 (東部捨て場) 石斧



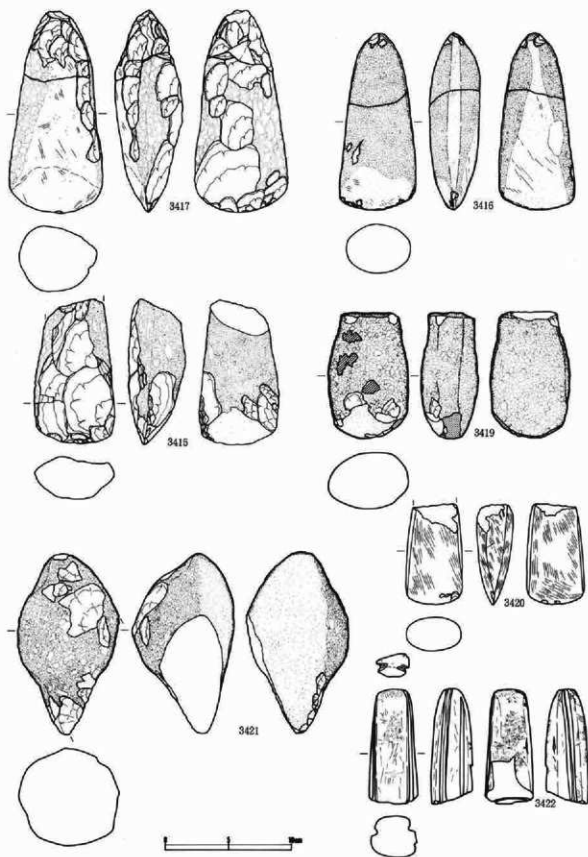
第365図 遺構外石器39 (東部捨て場) 石斧



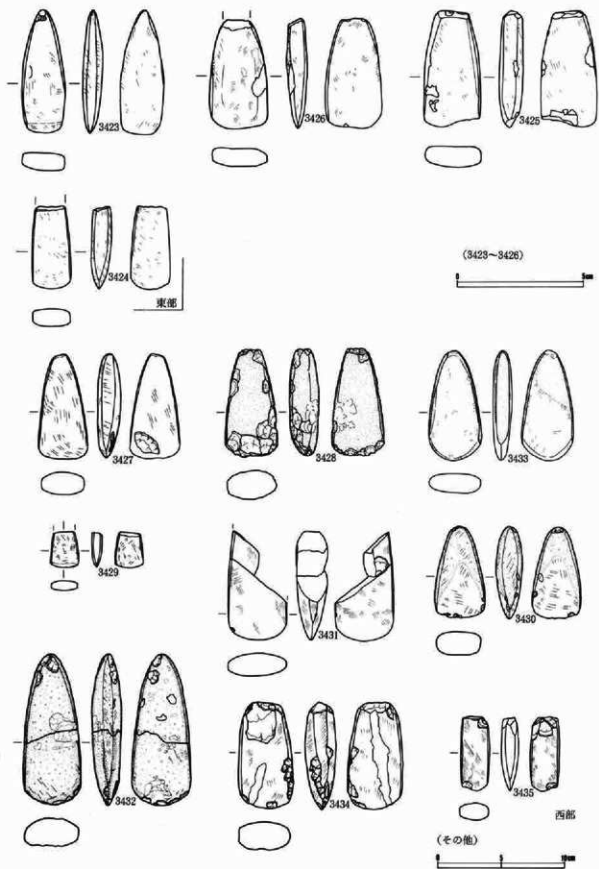
第366図 遺構外石器40（東部捨て場）石斧



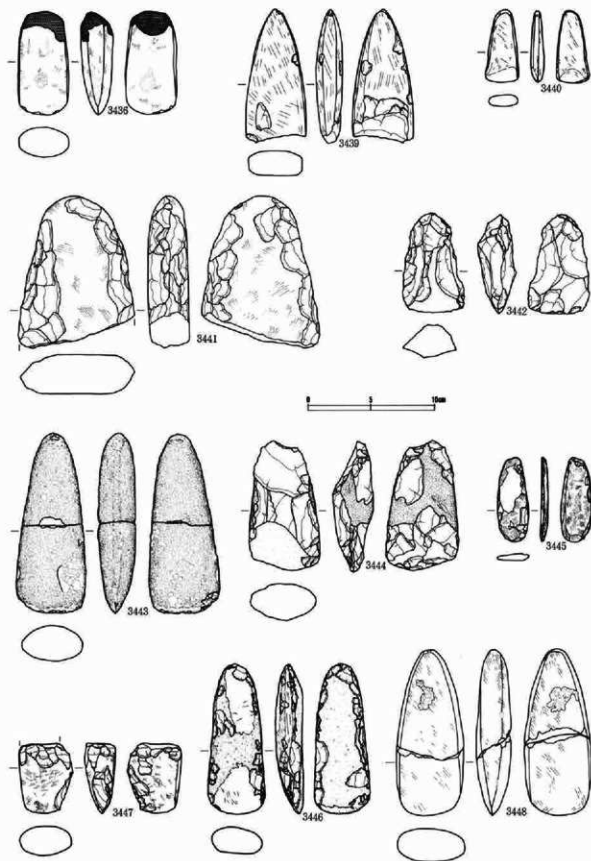
第367図 遺構外石器41（東部捨て場）石斧



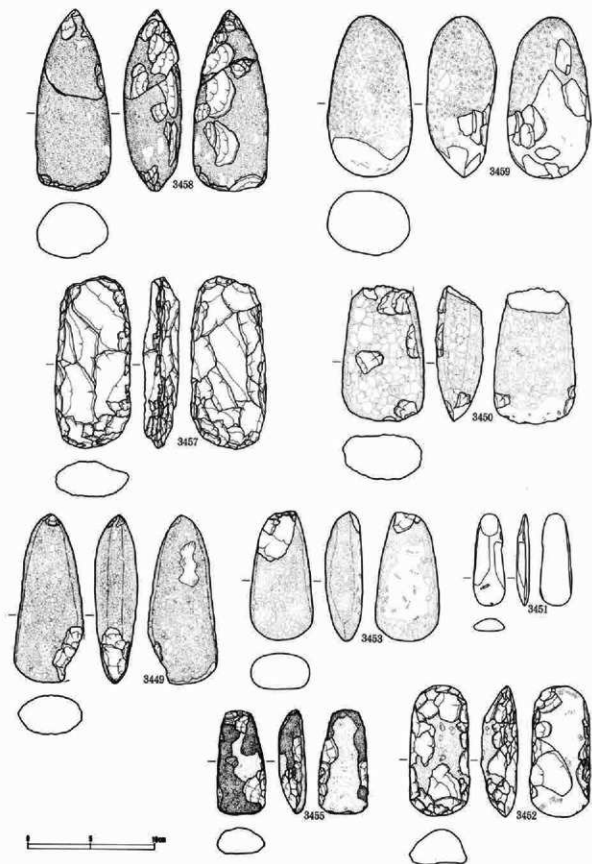
第368図 遺構外石器42 (東部捨て場) 石斧



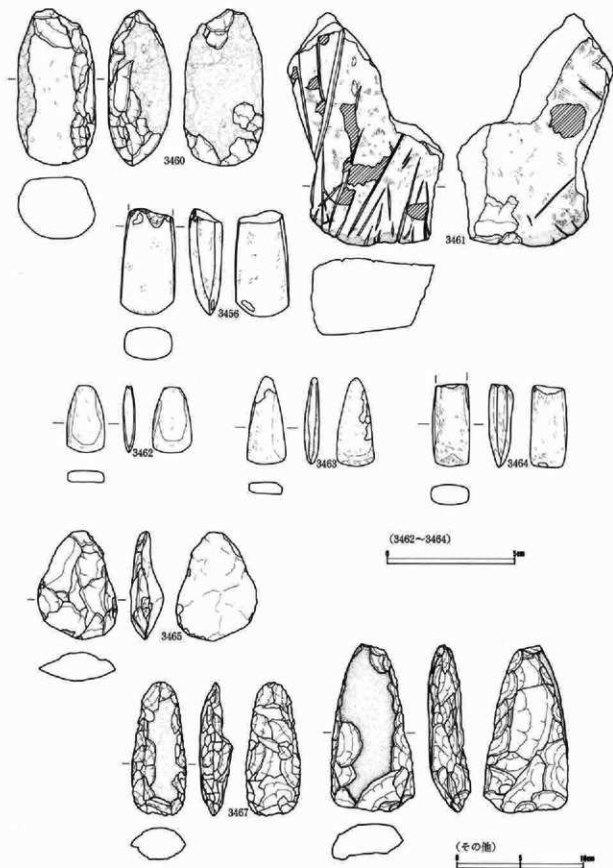
第369図 遺構外石器43 (東部・西部捨て場) 石斧



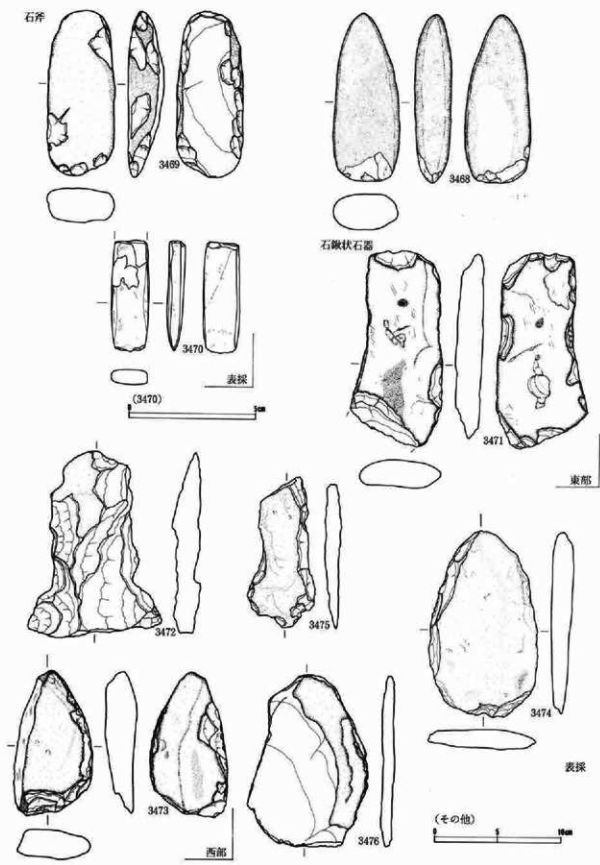
第370図 遺構外石器44（西部捨て場）石斧



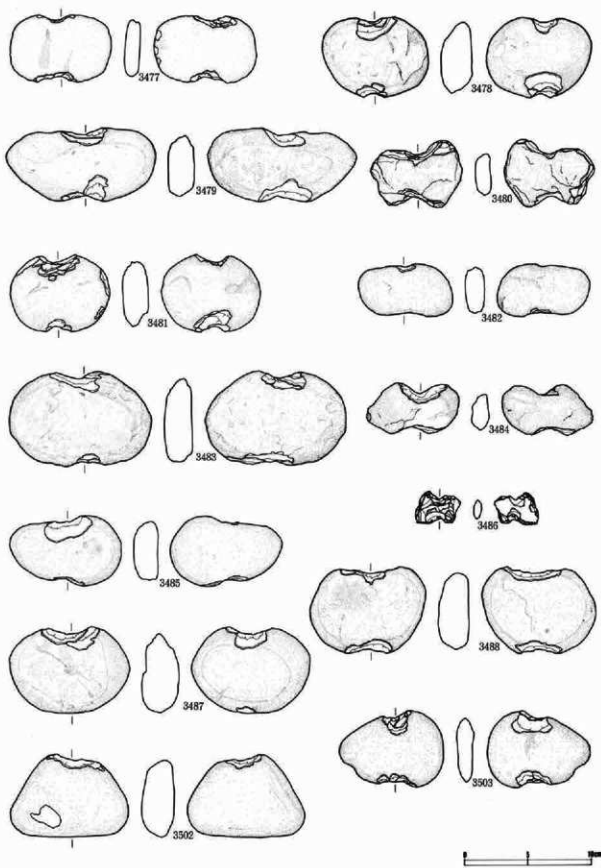
第371図 遺構外石器45（西部捨て場）石斧



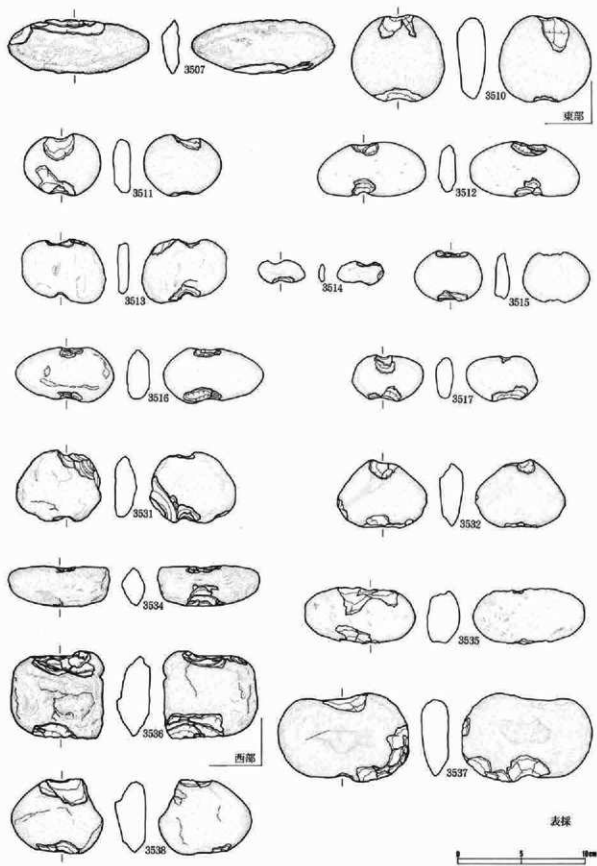
第372図 道標外石器46 (表採) 石斧



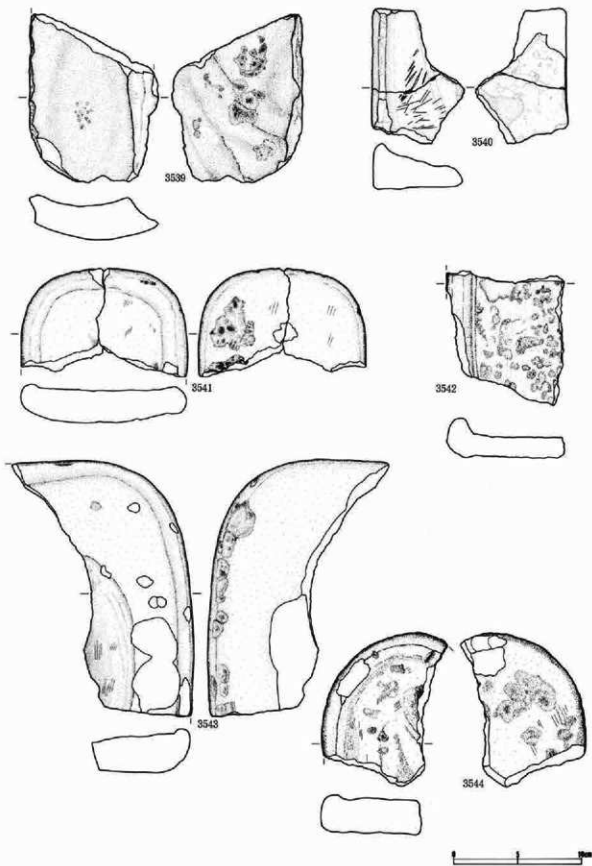
第373図 遺構外石器47 (表採) 石斧
 (東部・西部捨て場・表採) 石鎌状石器



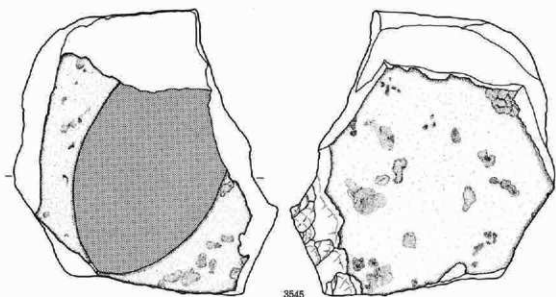
第374図 遺構外石器48（東部捨て場）石錘



第375図 遺構外石器49 (東部・西部捨て場・表様) 石錐



第376図 遺構外石器50（東部捨て場）石皿



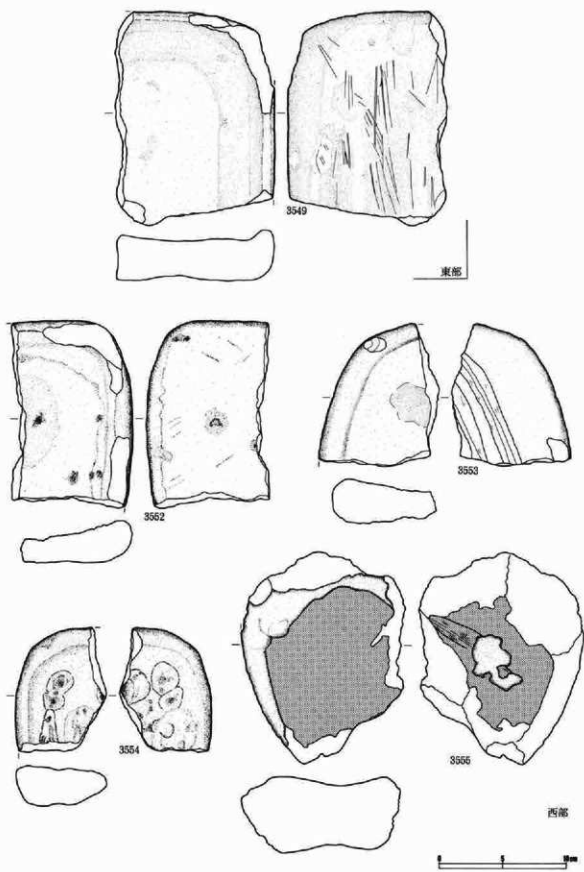
3545

3547

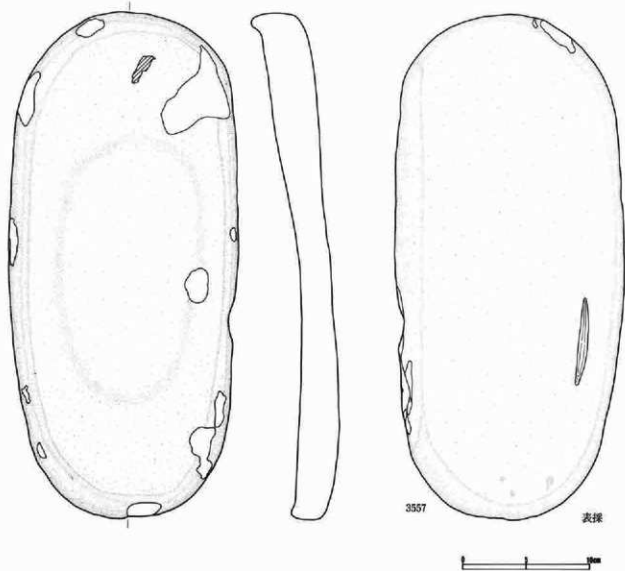
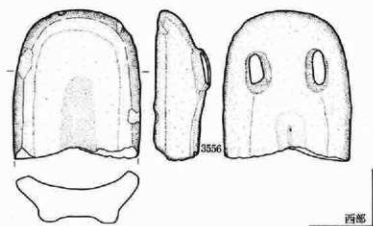
3546



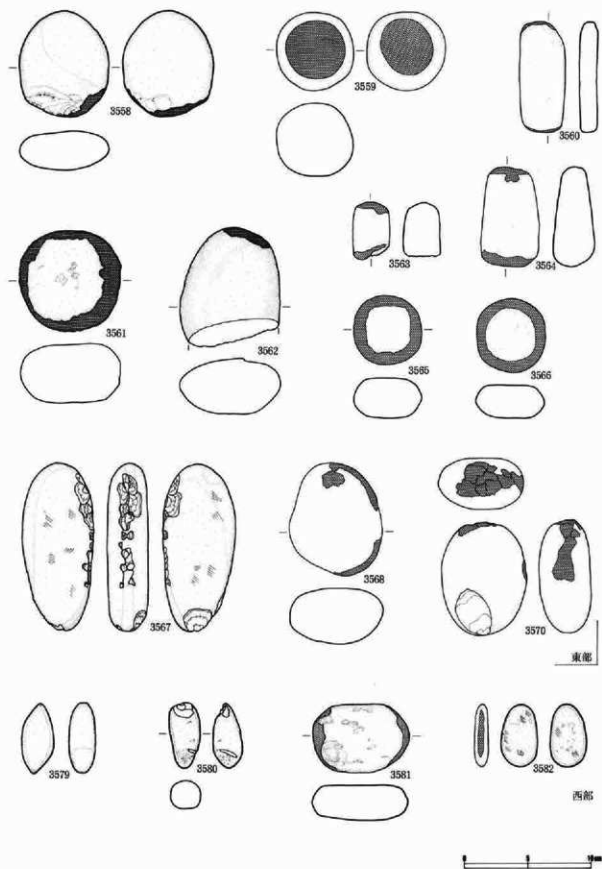
第377図 遺構外石器51(東部捨て場)石皿



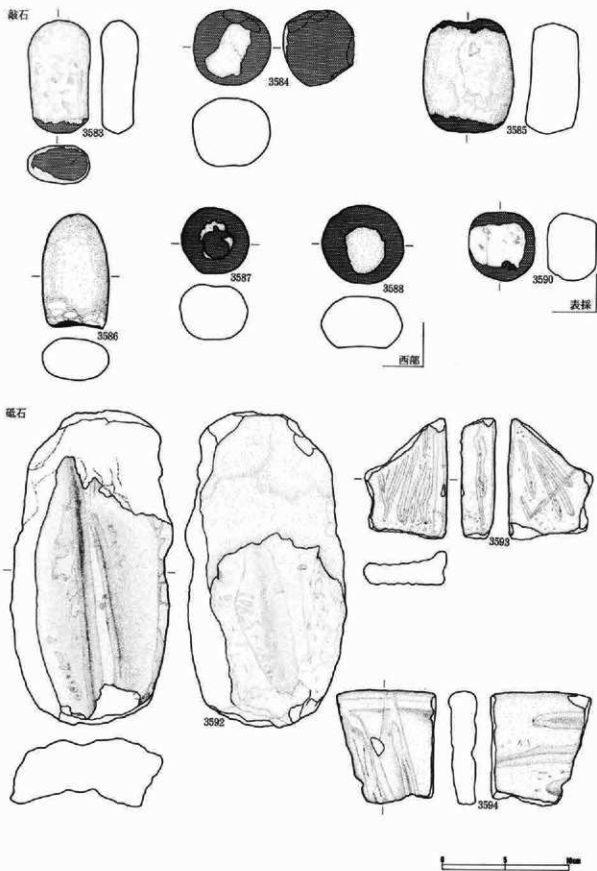
第378図 遺構外石器52 (東部・西部捨て場) 石皿



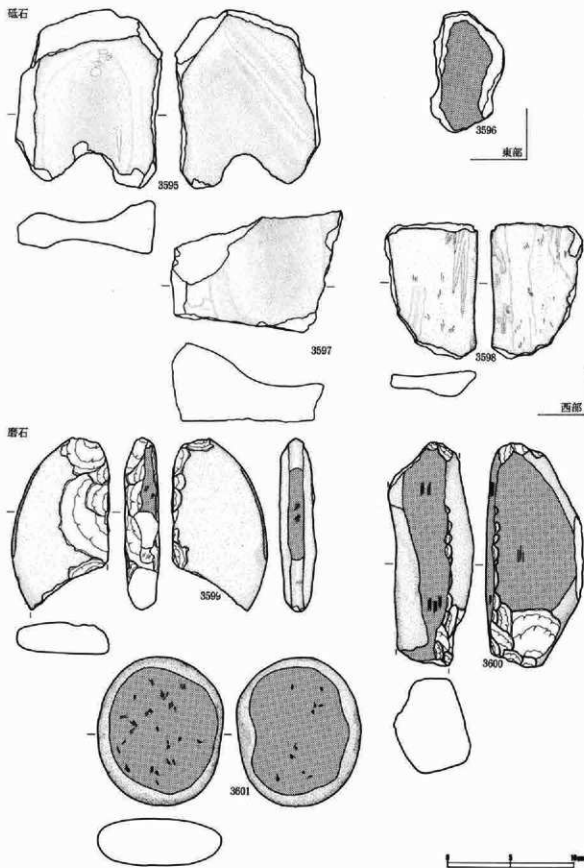
第379図 遺構外石器53 (西部捨て場・表採) 石皿



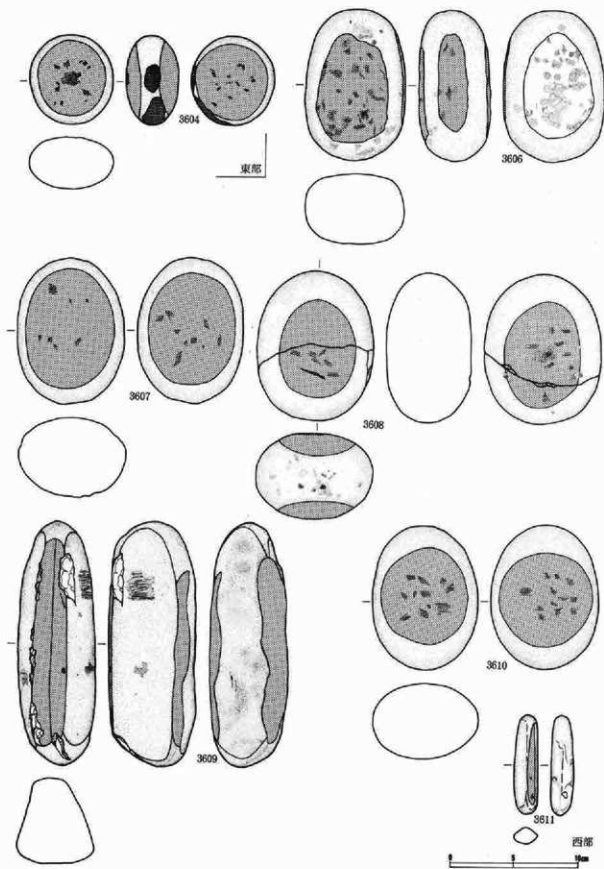
第380図 遺構外石群54（東部・西部捨て場）敲石



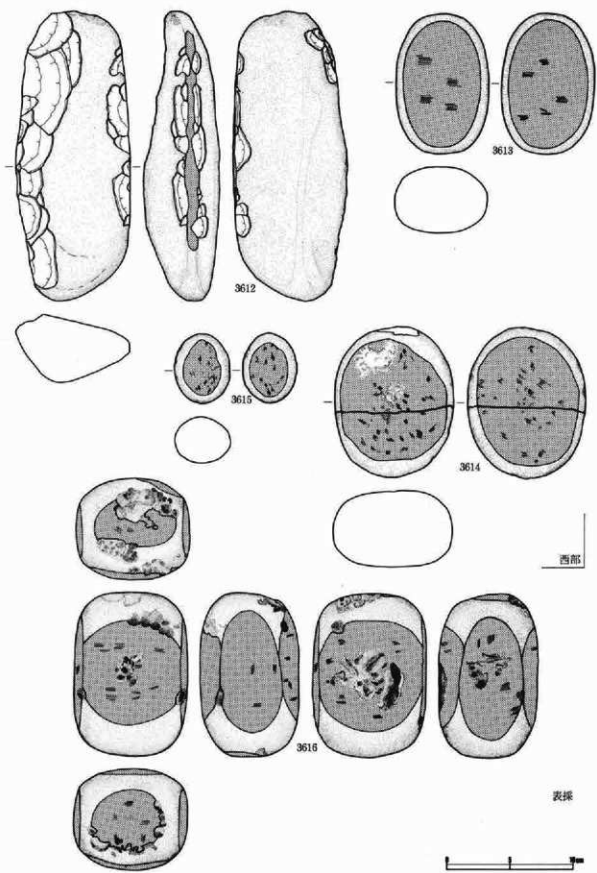
第381図 遺構外石器55（西部捨て場・表採）敲石
（東部捨て場）砥石



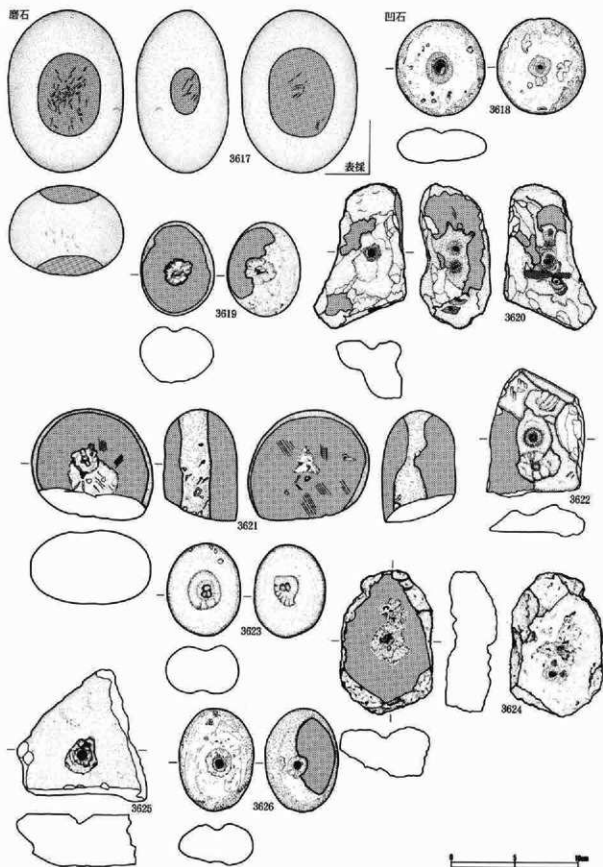
第382図 遺構外石器56 (東部・西部捨て場) 砥石
(東部捨て場) 磨石



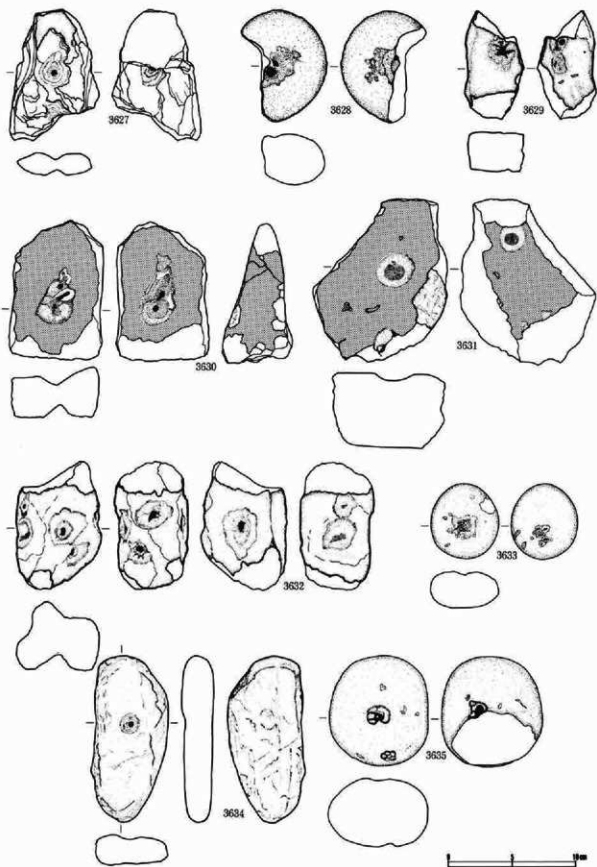
第383図 遺構外石器57(東部・西部捨て場)磨石



第384図 遺構外石器58 (西部捨て場・表採) 磨石

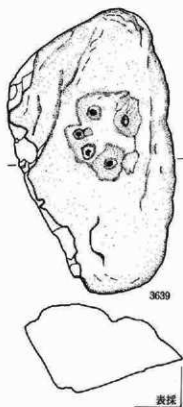
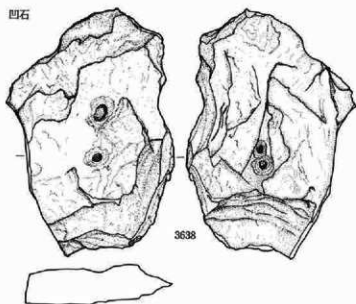


第385図 遺構外石器59 (表採) 磨石
(東部捨て場) 凹石

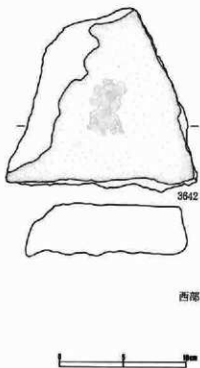
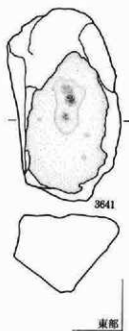
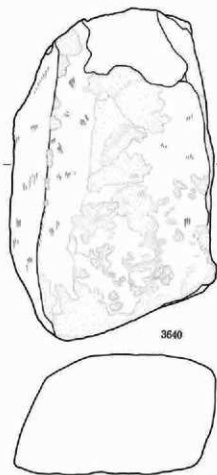


第366図 遺構外石器60 (西部捨て場) 凹石

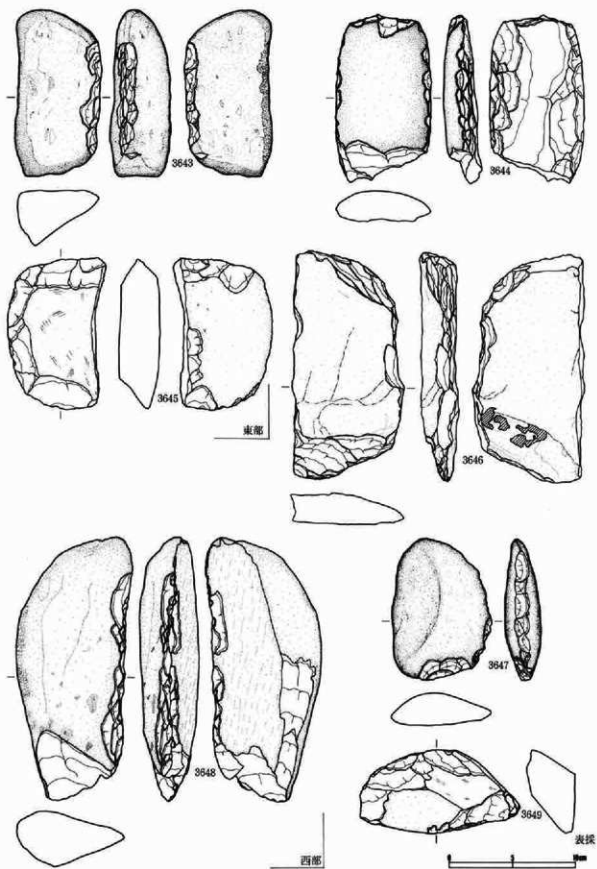
凹石



台石

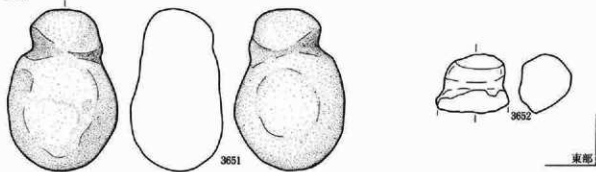


第387図 遺構外石器61 (表採) 凹石
(東部・西部捨て場) 台石

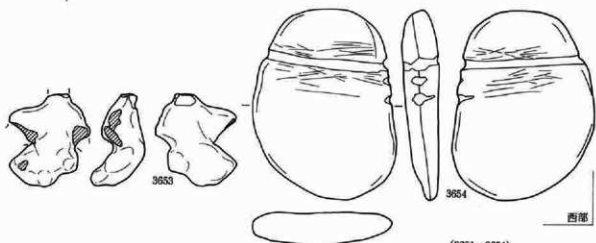


第388図 遺構外石器62 (東部・西部捨て場・表採) 礫器

岩偶



東部

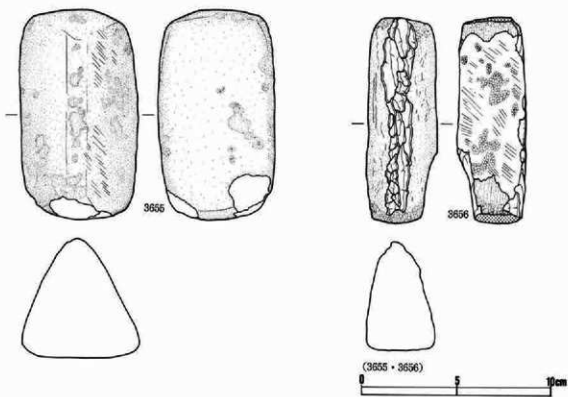


西部

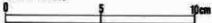
(3651~3654)



三角柱状石製品

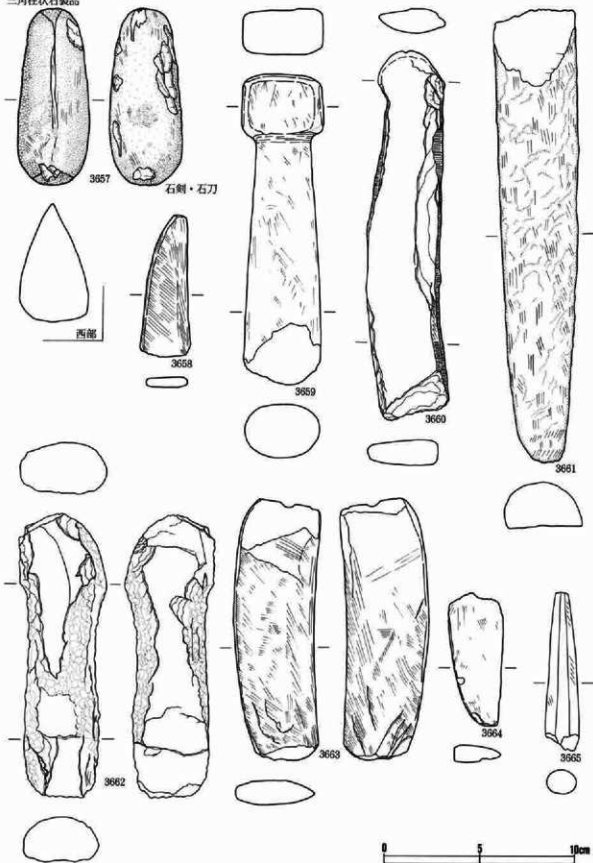


(3655・3656)

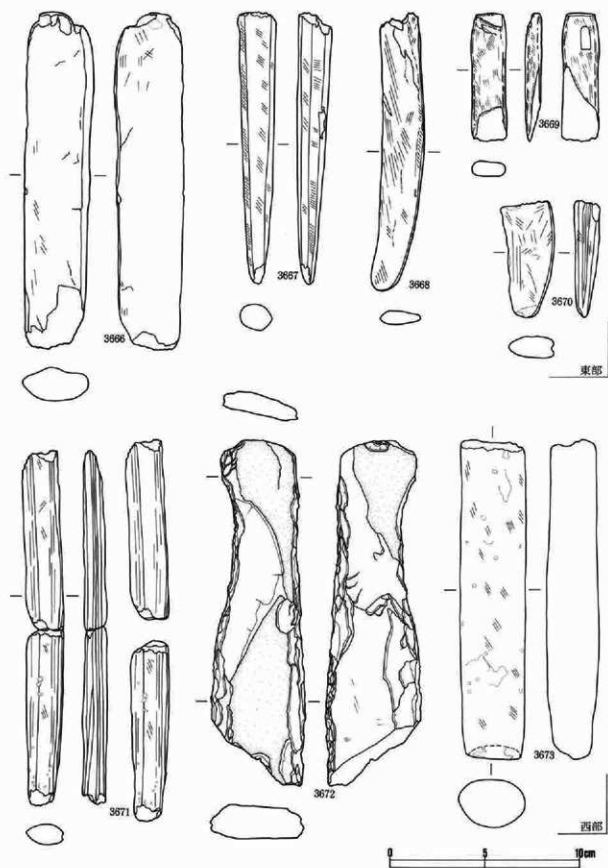


第389図 遺構外石製品1 (東部・西部捨て場) 岩偶
(西部捨て場) 三角柱状石製品

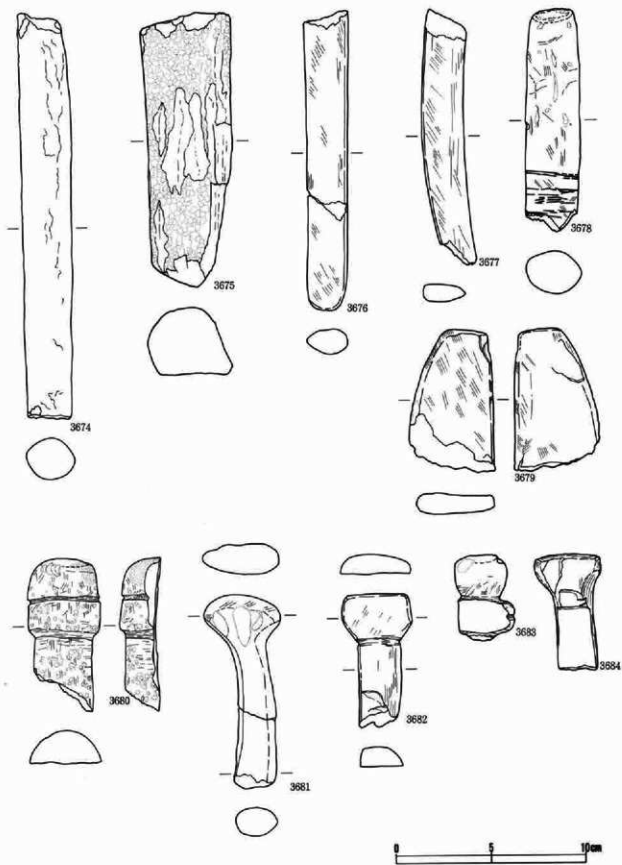
三角柱状石製品



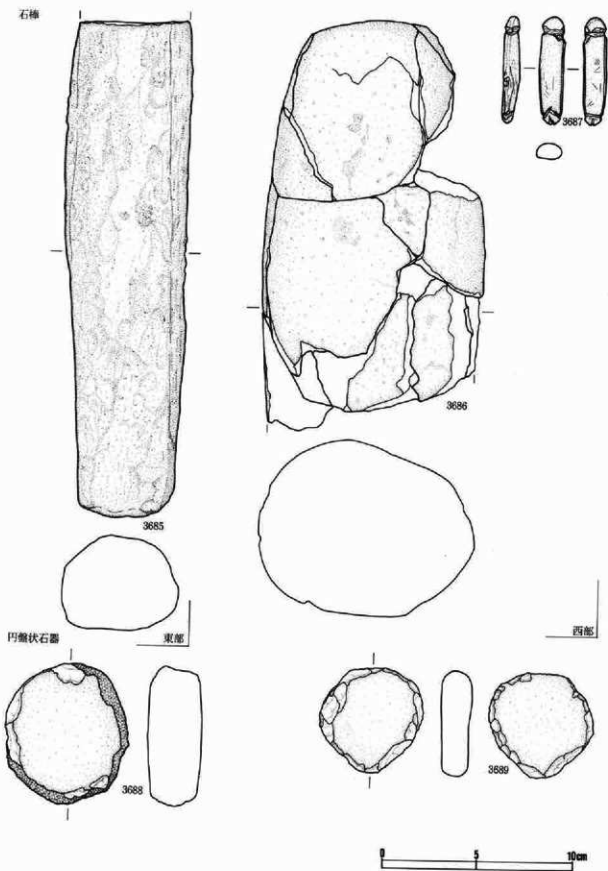
第390図 遺構外石製品2 (西部捨て場) 三角柱状石製品
(東部捨て場) 石剣・石刀



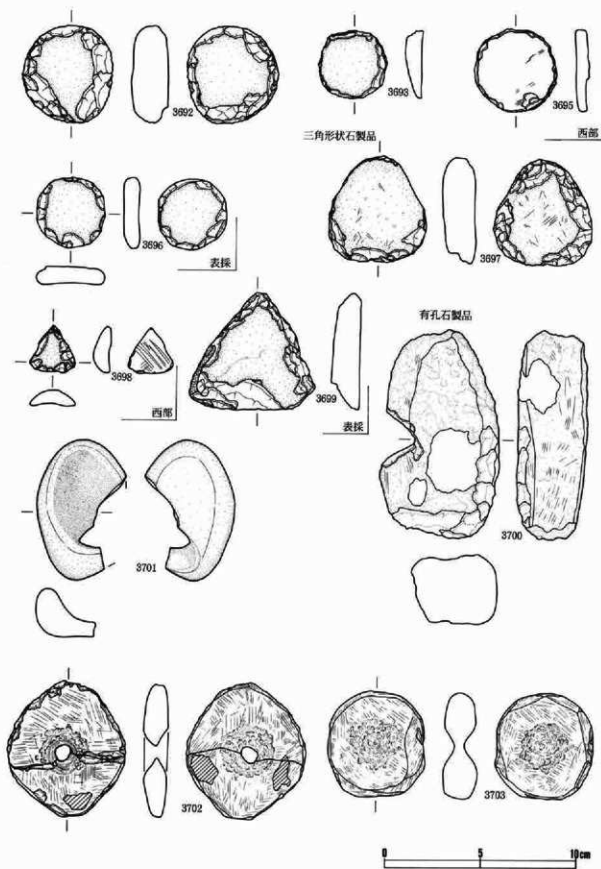
第391図 遺構外石製品3 (東部・西部捨て場) 石剣・石刀



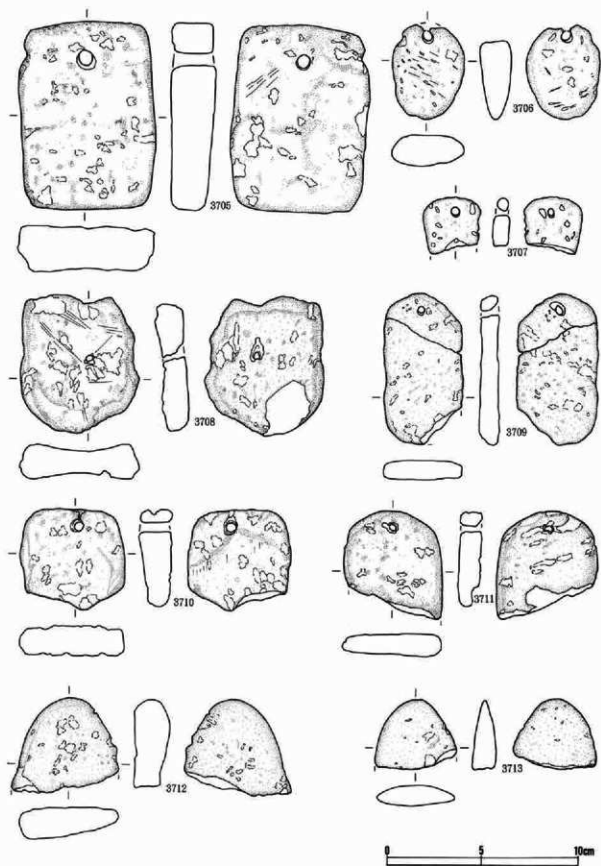
第392図 遺構外石製品4 (西部捨て場) 石剣・石刀



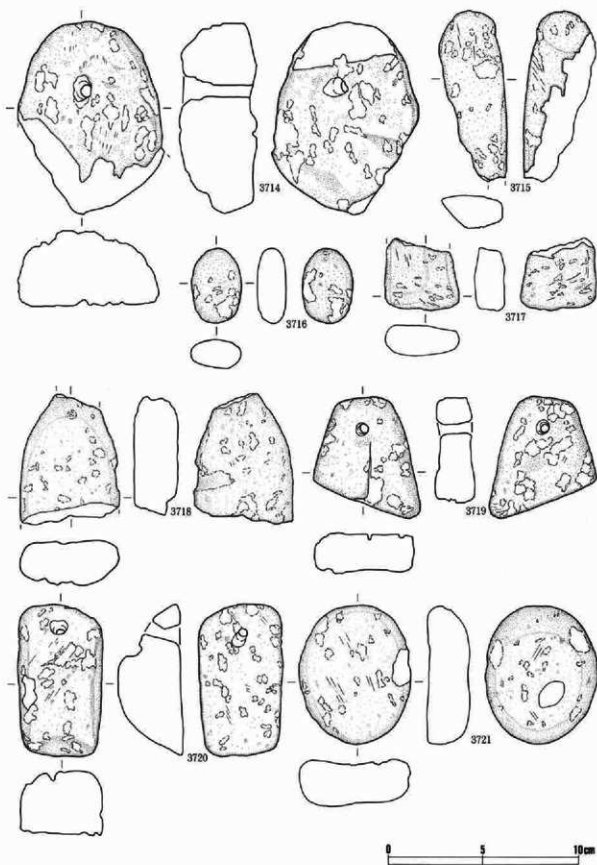
第303図 遺構外石製品5 (東部・西部捨て場) 石棒
(東部捨て場) 円盤状石器



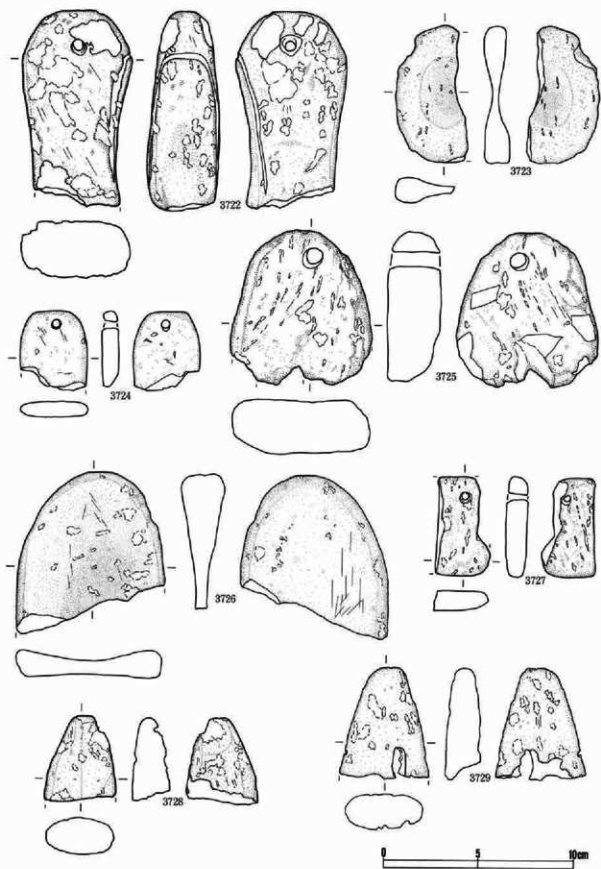
第394図 遺構外石製品 6 (西部捨て場・表探) 円盤状石器
 (西部捨て場・表探) 三角柱状石製品
 (東部捨て場) 有孔石製品



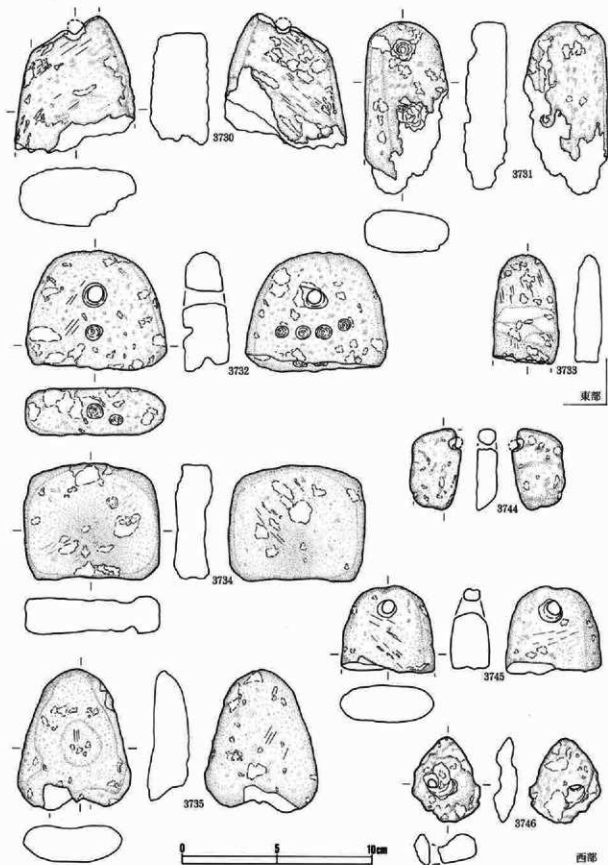
第396図 遺構外石製品7（東部捨て場）經石製品



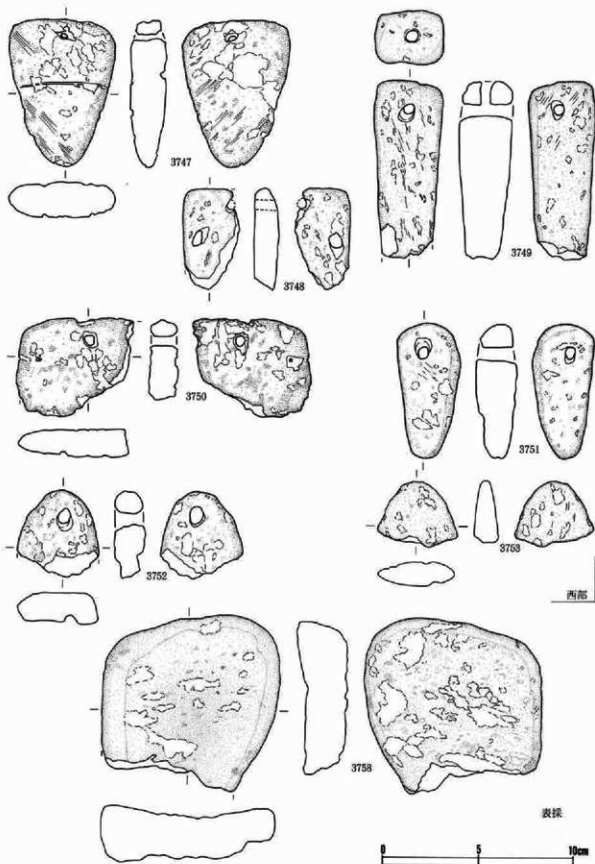
第396図 遺構外石製品 8 (東部捨て場) 軽石製品



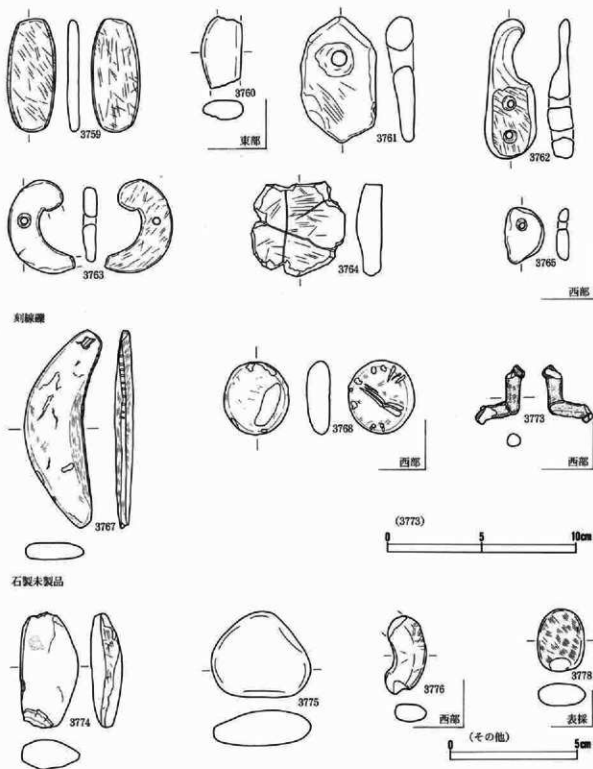
第397図 遺構外石製品9（東部捨て場）軽石製品



第398図 遺構外石製品10 (東部・西部捨て場) 軽石製品



第399図 遺構外石製品11 (西部捨て場・表採) 燧石製品



第400図 遺構外石製品12 (東部・西部捨て場) ペンダント
 (西部捨て場) 刻線礫
 (西部捨て場) フリッジ状石製品
 (西部捨て場・表採) 石製未製品

第VI章 遺物の出土分布と接合関係について (第401~420図)

遺物の出土分布の傾向について、種別毎に出土重量あるいは出土点数をグリッド単位で図示した。併せて一部の遺物を対象として接合関係図を作成した。

対象とした遺物は、土器、ミニチュア土器、土偶、鐙形土製品、耳飾り、銅形土製品、内面渦状土製品(イモ貝形土製品)、円盤状土製品、三角形土製品、石鏃、石匙、石鏃、搔器・削器、フレーク・チップ、磨製石斧、礫石器類、石棒、石剣、石刀、軽石製品である。

詳細な分析は割愛するが、作成した図から読み取れる傾向や特記事項について、概要をまとめ、併せて若干の考察を行った。

先に、作成した図に関わる内容を説明する。

- ① 捨て場の斜面区域区分については、第III章の7及び第IV章の12で上述したとおりである。東部捨て場は「斜面上城」・「斜面変換点」・「斜面中城」・「斜面下城」の4地点に、西部捨て場は「斜面上城1」・「斜面上城2」・「斜面中城」・「斜面中城2」の4地点に区分した。遺物出土地の空間占地を簡略して示すことを目的としたもので、第116図の区分図を参照せよ。
- ② グリッドについては、一辺4×4m、各グリッドの名称は南西を基準として命名する。
- ③ 遺物の接合関係図について、土器、土偶、耳飾り、磨製石斧、敲石、凹石、石皿、環状石器、石棒、石剣、石刀の各遺物において、異なるグリッドから出土した部位同士が接合したものを平面的に示した。よって、同じグリッドから出土したものが接合した場合は割愛している。
- ④ 第401図上段は遺構外出土土器のみの出土量、第402図の後期・晩期毎の出土土器分布図は遺構内外を合わせた出土量で資料を作成している。

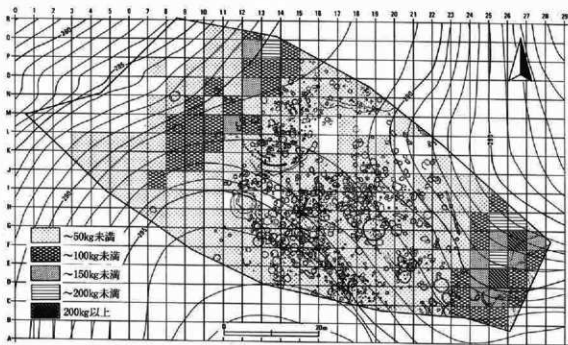
1 土器

(1) 土器の分布状況について

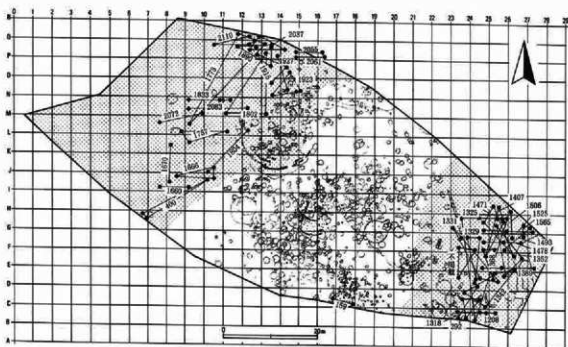
① 全体の概要 土器の出土地点の傾向を探るため、第401図上段にはグリッド毎に遺構外出土土器の出土重量を示した。出土重量は、0~50kg未満、50kg以上~100kg未満、100kg以上~150kg未満、150kg以上~200kg未満、200kg以上の5段階に大別し、スクリーン・トーンでそれぞれ図示した。なお日安として当センターで使用しているコンテナ1箱(T40:42×32×30cm)には、9号のビニール袋で約10袋前後、重量に換算して25~35kgの土器が入ることから、100kgの土器であればコンテナ3~4箱分となる。

第401図上段の図を見ると100kg以上の土器が出土したグリッドは、C24・C25・D24・D25・E24・E25・E26・F25・F26・F27・G25・G26・L11・N12・P12・P13の16ヶ所である。特出して出土量が多かったのは、東部捨て場斜面中城のD25・F26・E25グリッドで、次いで東部捨て場斜面下城のG25・G26グリッド及び西部捨て場斜面上城2のP13グリッドである。D25グリッドは228kg、F26グリッドは257kg、E25グリッドは183kg、G25グリッドは155kg、G26グリッドは192kg、P13グリッドは177kgの出土量である。これらのグリッドは全て主体となるのは後期の土器である。

土器の接合関係について、第401図下段には土器の動きをみるため、異なるグリッドから出土した同士が接合した状況を示す接合関係図を作成した。東部捨て場同士や西部捨て場同士で接合関係を示すものがほと



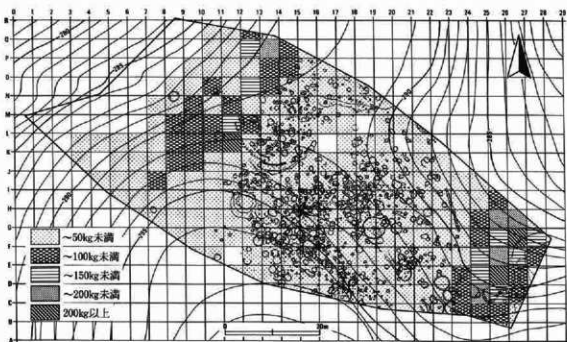
遺構外出土土器分布図



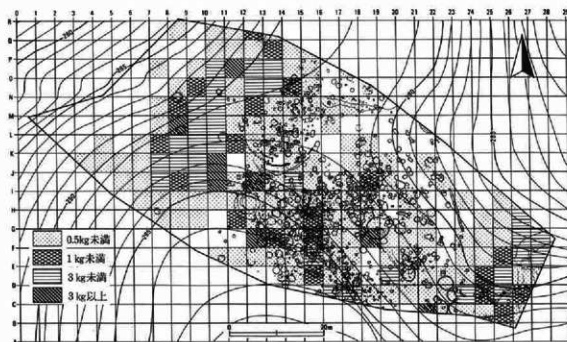
土器検出関係図（遺構内外）

■ トーンは捨て場の範囲

第401図 土器出土分布図 1



後期土器出土分布圖（遺構内外）



晚期土器出土分布圖（遺構内外）

第402圖 土器出土分布圖 2

んどであり、斜面の傾斜に対して上下方向をとるグリッド同士での接合関係が多い。

状況資料から筆者が推定した要因は、下記のa～dである。

a 一団体の遺物を別々の場所に廃棄した行為の可能性（一次廃棄）。

b 木米遺物を廃棄した中心は斜面の上方地域であったものが、自然現象により、土砂流入と共に斜面中位～下方に流され、現在の出土位置となった可能性。

c 縄文人により、土器を包含する土自体が動かされている可能性。第IV章の住居跡の記載で若干触れた縄文人による造成工事的な行為や遺物包含層中に遺構を構築した際の排土中の土器が動かされたなどの要因が考えられる。

d aに多少関連するが、最初にある場所に一次廃棄した後、二次廃棄を行うなどの行為。

筆者の所見（見解）としては、木遺跡においては上記したa～cの要因は全て存在すると思っている。dの要因については、明確には立証できないが、後述する土偶、磨製石斧、石剣・石刀などの出土状況を加味すると可能性が全くないとは言いがたい。

② 東部捨て場における土器 調査区東側斜面地は、ほぼ全域にわたって捨て場として利用された空間であることは、土器の出土量からも窺い知れる。

東部捨て場で最も出土量の多かったD25～E25グリッドは、東側斜面の中腹付近に位置し、斜面傾斜変換点の下方付近に相当する。斜面区域区分では斜面中域とした範囲内にあり、当初は竪穴住居跡と間違えて精査を行った経緯のある地点で、約6m程の凹地状の地形を呈する。十和田b火山灰の分布するII層面から無遺物層までの層厚は250cm以上で、本遺跡中で最も厚く遺物包含層が堆積する。ただし、上層は上位からII層（十和田b火山灰混入層）→III層（後～晩期遺物包含層）→II層→III層→IV（中腹火山灰混入層）→V層（無遺物層）の順で堆積するなど互層が顕著に把握できる部分である。下位の十和田b火山灰の堆積様相は、地形に沿って鏡状を示すことからプライマリーに近い堆積と判断される。上位の堆積は、II層とIII層がセットで流出してきた鼓堆積層と捉えられる。上記のことから、当時の人々がこの付近に集中的に土器を棄てたのではなく、自然地形的要因により斜面上方から土砂（主に黒土）と共に流出してきた土器が溜まり、出土量が特出して多かったと判断される。なお、同付近からは後期前葉～末葉土器が全般に多く、また土偶、彈形土製品、搔器・削器、フレック・チップ、磨製石斧なども多く出土している。

上記に次いで出土量が多かったのがF27・G25・G26グリッドで、東部捨て場斜面下域に相当する地点である。後期前葉及び後期後～末葉の土器が主体であり、特に土偶の出土点数が多かった地点である。ただし、土偶の出土状況としては後期中実土偶と晩期の中空土偶が、ほぼ同一の層（レベル差がない）から出土するなど、層位的には混在が多いと思われる地点であり、精査結果からは特異性を感じなかった。

東部捨て場について簡単にまとめると、斜面上域の北側部分（H22～H24・I23～24グリッド付近）からの出土量が比較的少なかった以外は、ほぼ全域に渡って出土量が多かった。

また土器の動きとして、第401岡下段に図示した土器の接合関係図を見るとおり、斜面上域と斜面中域及び斜面中域と斜面下域同士で接合した土器が頻繁に見られる。ただし、東部捨て場における土器の行為としては、上述したa・dの要因を証明できる出土状況になく、bとcの要因が主なものと考えている。

bの要因については、斜面中域が土器に限らず土製品や石器類についても特出して出土量が多いことから、本来の廃棄地は斜面上域であった可能性は充分考えられると思う。

cの要因については、斜面上域の南部周辺には遺物包含層中に構築されていた晩期の住居跡が多かったことから、その際に生じた排土は普通に考えれば斜面の下方に捨てるのが自然であると推定する。第401岡下

段に接合関係を示した1318と1325は何れも円筒下層式土器であり、cの要因で矛盾はないと考える。

一方、仮にaの要因が東部捨て場に存在するならば、壊れて廃棄したのか、あるいは意図的に壊して廃棄したのかと言った問題が生じよう。結果としては、東部捨て場出土の土器について意図的に別の地点に廃棄した可能性やわざと破壊した行為などは認知できなかった。

③ 西部捨て場における土器 調査区西側斜面地は、捨て場として利用された空間に占地が存在しそうであることが、土器の出土量からも窺い知れる。

西部捨て場で最も出土量の多かったのが、上記したP13・P12・N12の各グリッドで斜面土域2に相当する地点である。この付近は、第401図上段の図などに記した等高線（現地表面の段階で作成）の流れを見るとおり、標高290～291mの間が不自然に広く、遺物の出土も土器だけでなく土製品・石器類全般に多かった。

西部捨て場において、全般に出土量が少なかったのが斜面中域1、皆無に等しい状態であったのが斜面中域2である。第118図の上層断面図⑧を見るとおり、遺物包含層の堆積が薄い地域であり、斜面上方からの十砂流入がこの地域にまで及ぶことが少なかったと捉えられる。

西部捨て場について簡単にまとめると、本来遺物を廃棄した中心地は、標高290mより上位に位置する斜面土域1や斜面土域2に相当する範囲と思われる。斜面土域2の出土量から推定して、調査区外のQ～R12～13グリッドには、相当量の土器が包含されていることは確実であり、更にその北側についてもその可能性が高いと思われる。

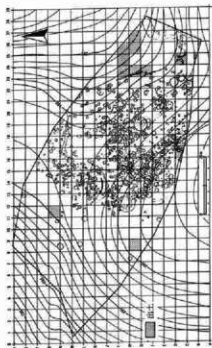
土器の動きについて、第401図下段の接合関係図を見ると、大半は斜面上下方向同士のグリッドで接合している。ただし、400・1660・1666・1804などについては、等高線の流れから考えて斜面上・下方向同士ではないことから、地滑り現象（十砂流入など）などの自然的要因によるとは考え難い。400は、G6土坑の埋土から出土した土器と、同土坑から約15m離れたI15グリッド出土土器が接合したものである。上述したcの要因が考えられよう。

（2）土器の時期毎分布傾向

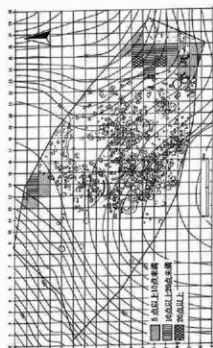
本稿で行った土器分類毎に、時期別の土器出土分布図（第403～405図）を作成した。資料としては、第二次登録段階（第三次登録段階が掲載した七器）の遺構外土器数（文様が明確なもの）を採用して、その点数を図示した。完全な分析資料とは言えないが、傾向を窺うと言う目的であれば、資料としてたえられると判断する。なお、出土数が微量であった早期～前期初頭の土器は割愛し、前期末葉の円筒下層d式についても出土したグリッドの明示のみとした。

① 前期土器 前期の円筒下層d式土器については、5箱分程の出土量である。第403図上段左の図を見るとおり、出土地の主体は東部捨て場の斜面土域と斜面中域で、わずかに西部捨て場の斜面土域1からの出土となる。上記の周辺は、IV層（中環火山灰混入層）の地積が比較的良好な地点である。

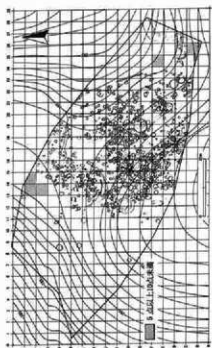
後～晩期の出土量が比較的少なかったF23・G23・H23・H24グリッドからの出土が多いことから、後～晩期の土器とは出土占地が若干相違する傾向が窺え、あるいは廃棄地の旧地形（斜面角度など）が前期の時代と後期の時代では若干違うのかもしれない。また、木遺跡からは円筒式土器に伴い出土すると考えられている半月状偏平打製石器（3643～3648など）と思われる礫石器が数点出土している。ただし、層位的に伴出関係にあったのは、後～晩期の土器である。



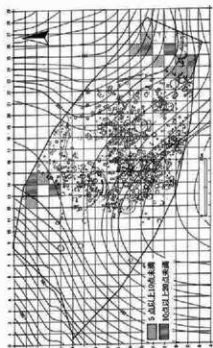
第II群2類土器（内筒下層d式）



第III群1類土器（十段内I）

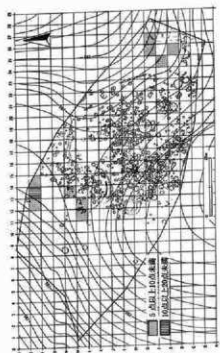


第II群2類-1土器（十段内II）

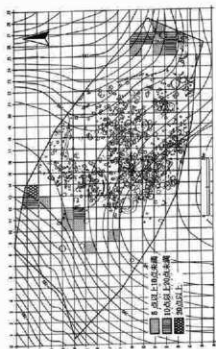


第II群2類-2土器（十段内II-B）

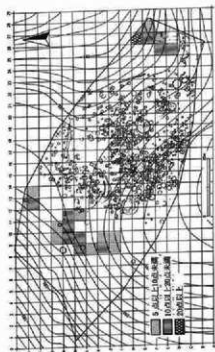
第403图 土器出土分布图 3



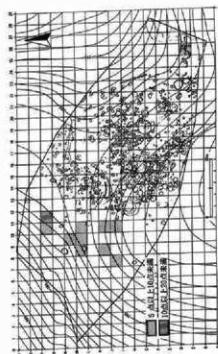
第三群3類土器 (十度内III)



第三群4類土器 (十度内IV)

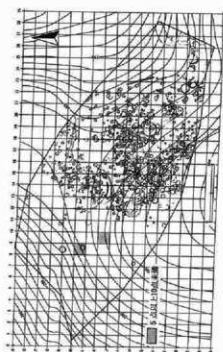


第三群5類土器 (十度内V)



第四群1類土器 (大洲)

第404圖 土器出土分布圖4



第IV群2期土器（大河BC）

第405図 土器出土分布図5

② 後期土器 遺構内外を含めた後期土器の出土分布図が、第402図の上段の図である。基本的には第401図上段の遺構外土器出土分布図と同様の傾向が読み取れる。時期別の出土点数をみると、十腰内Ⅰ式期と十腰内Ⅳ・Ⅴ式期の出土点数が圧倒的に多く、十腰内Ⅱ～Ⅲ式期の出土点数が少ないことがわかる。

分布については、斜面区域区分での出土量の多少が、必ずしも本来の廃棄地とは捉えられない。ただし、大別して東部捨て場内、西部捨て場内として見れば、時期別の廃棄量の傾向は窺えるように思う。

十腰内Ⅰ式期においては、圧倒的に東部捨て場からの出土が多く、特に斜面中域に多い。西部捨て場においては斜面上域2の狭い範囲に分布が集中する傾向である。

十腰内Ⅱ～Ⅲ式期については、土器の時期同定の問題もあり、とりあえず第403図下段と第404図上段左の3つの図を作成した。全般的な傾向としては、十腰内Ⅰ式期と同様の分布地が主体である。

十腰内Ⅳ式期においては、出土量的には西部捨て場が多いが、東部捨て場と西部捨て場の両者に比較的均等に廃棄した様相である。

十腰内Ⅴ式期においては、西部捨て場が廃棄の主体となる。特に斜面上域1の南部に廃棄地が広がる様相である。

③ 晩期土器

後期土器の出土量と比較すると、概算で1/4以下（約100箱分）の出土量である。第402図下段の図は遺構内外合わせた出土重量であり、第404図右下の図と第405図は遺構外のみ出土点数である。

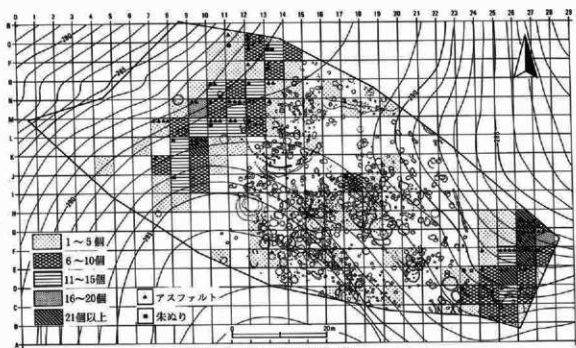
後期の土器に比べると、住居跡などの遺構からの出土量が多いためか、出土分布は後期より広範囲である。捨て場への廃棄については、十腰内Ⅴ式期と同様に西部捨て場の斜面上域1が主体となる。

(3) 注口土器の分布状況について

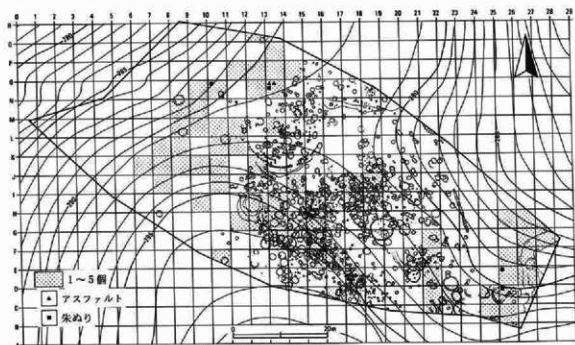
本遺跡から出土している注口土器は、全て後～晩期に属するものである。時期的に出土数が多いのは後期後葉～末葉で、後期中葉以前は極端に少ない。

本遺跡からは、胴部と接合しなかった注口部のみの（大部分は不掲載とした）出土も相当数あることから、それらも点数に加えて作成したのが第406図である。また、それら注口部にはアスファルトの付着が多く、また朱の塗布が確認されるもの見られる。

① 後期の注口土器 上記したとおり後期後～末葉のものが多いことから、第406図上段の図は十腰内Ⅳ・Ⅴ式期土器の分布と同様の分布傾向を示す。

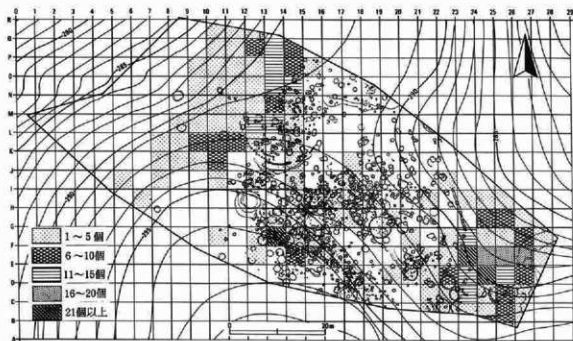


後期注口土器出土分布図（遺構内外）



晩期注口土器出土分布図（遺構内外）

第406図 土器出土分布図 6



朱塗り土器出土分布図（遺構内外）

第407図 土器出土分布図7

② 晩期の注口土器 第402図の晩期土器の分布とほぼ同様のように入る。

（4）朱塗り土器の分布状況について

赤色の顔料を塗布する土器について、時期は後～晩期である。総数は後期の土器が多いが、全体の出土量の割合から考えれば、晩期の土器の割合の方が高いように思う。

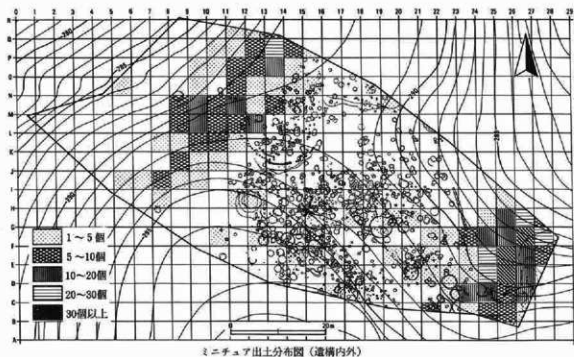
他の土器と同様に東西の捨て場からの出土が主体である。捨て場以外の出土地で目を引くのは、調査区南側の一段高い面に相当する部分で、F13グリッドを中心に周辺のグリッドから相当数の出土がある。この周辺は、遺物包含層の分布がほとんど見られない地点で、表探及びこの付近から検出された土坑の埋土上位置などから出土している。ただし完形品の土器はほとんどなく、小破片のみである。

出土分布に関連した内容ではないが、朱が塗布されている器種としては、深鉢や鉢はほとんどなく、注口土器、壺、台付浅鉢などに多い。また、晩期の土器で内・外面の両面に朱が塗られる壺が数点見られる。

赤色の顔料が塗布されている行為自体が特殊性を予見させるのであるが、出土分布からは特殊性は窺えない。

2 土製品

本遺跡で出土している土製品の時期的な大略は、全て後～晩期に属すると判断される。それらの分布地の



第408図 土製品出土分布図1

傾向から読み取れる属性についてまとめてみたい。また、それら土製品の中には、従来考古学資料などから、土器型式と比定関係がある程度可能なものと比定関係が不明なものがある。先に行った土器の時代的出土占地との比較検討を行い、土製品の所属時期の推定を併せて試みる。

(1) ミニチュア土器

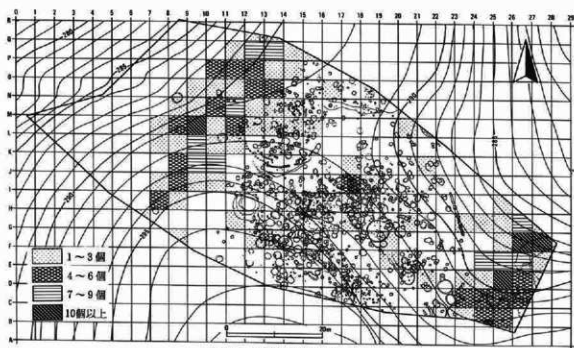
第401図上段の図と第408図を比較すると、ほとんど同様の分布傾向を示す。東部捨て場斜面中城からの出土数が最も多く、次いで西部捨て場斜面上城1である。普通サイズの土器と比べて完形品の割合が高いように思う。全般に後期に所属するものが多く、器種としては鉢と壺が多い。十腰内IV～V式と思われるものの中には、口縁部の突起や瘤の配置といった細部に至るまで、普通サイズの土器を模倣したと捉えられるほど精巧なものもある。

(2) 土偶の分布状況について

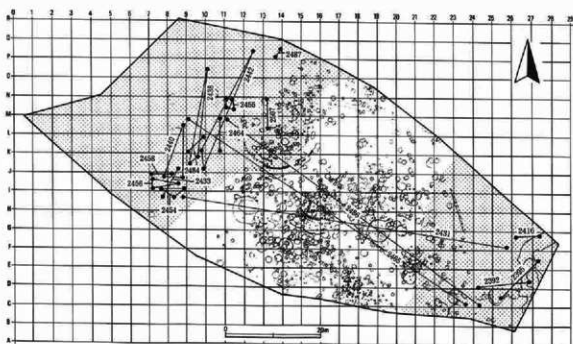
第409図上段の図を見ると、第402図上段の遺構外土器や第408図のミニチュア土器の出土分布と同様の傾向を示す。

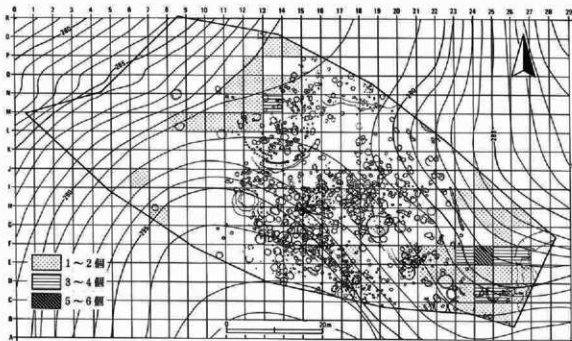
総点数311点中、晩期の土偶は28点（推定を含めて）で、圧倒的に後期の土偶が多い。

後期の土偶の出土地は、東部捨て場と西部捨て場からの出土が大半を占め、両者においては西部捨て場が若干多いものの、ほぼ同等の出土割合と捉えられる。



土偶出土分布図（遺構内外）





群形土製品出土分布図（遺構内外）

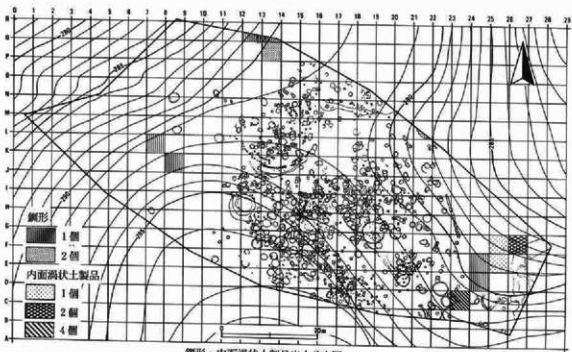
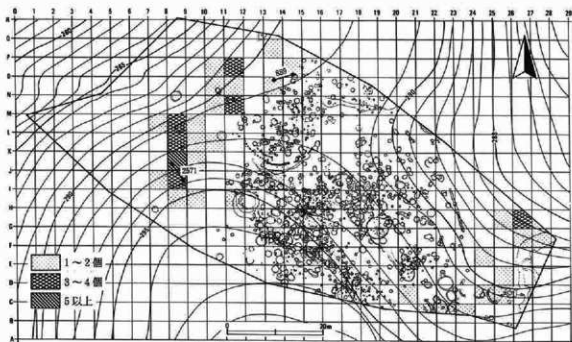
第410図 土製品出土分布図3

晩期の土偶の出土地は、遺構内3点、東部捨て場8点、西部捨て場14点、表探1点である。晩期の土偶は西部捨て場がわずかに多い。

本遺跡で出土した土偶は、時期を問わず全て欠損品であり、同じグリッドから出土した部位同士が接合したものが圧倒的に多い。第409図下段には異なるグリッドから出土した部位同士の接合関係を示した。特記事項としては、2431、2465、2486の3点が東西の捨て場同士で接合した点が挙げられ、3点とも約70mの距離をもって接合した。要因（原因）は不明であるが、上述したaの要因つまり最初から別々の廃棄地に捨てられた可能性が高い（dの要因とは捉え難いと思っている）。なお、3点とも完形品にはなっていないことから、発見されていない部品（部位）は調査区外に存在すると推定される。

捨てられたものなのか置かれたものなのかについて、本来検討すべき内容であると考えられるが、本遺跡の出土状況からは窺い知れなかった。

その他に西部捨て場同士ではあるが、約10～20mの距離をもって接合したものが複数見られる。西部捨て場同士で約20mの距離をもって接合した2442・2488は、3つのグリッドから出土した部位が接合関係を示した。斜面上下方向とは異なるグリッド同士であるため、自然的要因による土砂流入としては捉えられない。同様の様相が土器においても見られることから、そこには東部捨て場で上述したcの要因である遺構構築などに伴い縄文人が土を動かした行為が考えられよう。



第411圖 土製品出土分布図4

(3) 鐔形土製品の分布状況について

出土地の主体は東部捨て場である。本製品は今までの発掘調査成果から後期初頭～前葉の十腰内I式期に伴う出土例が多い。本遺跡においても、第403図右上に示した十腰内I式が最も多く出土したE24グリッドからの出土数が圧倒的に多い。土器との比定関係が従来の指摘通り後期の前半期で間違いのないとすれば、土器と一緒に廃棄した可能性が高いと言える。

(4) 耳飾りの分布状況について

出土地の主体は西部捨て場である。出土分布は、大洞B式の出土地と類似する傾向が窺える。個々の製品を見ても晩期と思われるものは多く、該期に多く製作された可能性はあろう。ただし、後期中葉～後葉の土偶に見られる細かい刺突文を施文するものなども存在することから、タイプにより所属時期が異なる可能性が高い。本来はタイプ分けを行った後に、土器型式との比定を行えばより本来の所属時期の推定資料となり得る可能性が高いと言える。

(5) 銅形土製品の分布状況について

他の土製品と比べても、その出土点数は極端に少ない。西部捨て場が出土地の主体で、大略は十腰内IV～大洞B・C式の出土分布と傾向が類似する。本製品は今までの発掘調査成果から晩期に伴う出土例が多いが、本遺跡においても大洞B式の主要出土地である西部捨て場のJ8・K7グリッドなどから出土しており、晩期前半期が所属時期である可能性が高い。

(6) 内面渦状土製品（イモ貝形土製品）の分布状況について

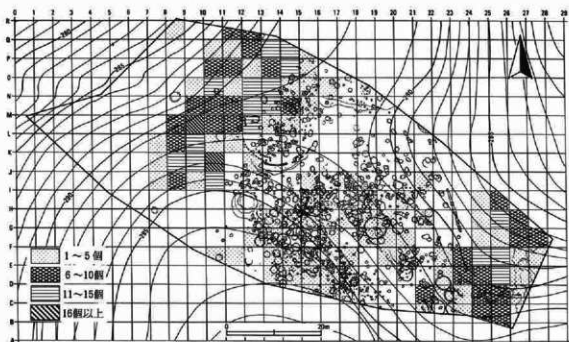
特筆すべき点としては、全て東部捨て場からの出土である。本製品は晩期前半期の可能性が高いと言われている土製品であるが、晩期に属すると思われる銅形土製品や晩期土偶は西部捨て場が主体であり、出土地に相違が見られる。本遺跡の出土状況からは、伴出土器については明確には言及できない。ただし、層位的問題を度外視すれば8点中4点が出土した東部捨て場のC23グリッドは、大洞B式の主要出土地の一つであり、興味ある結果と言えよう。

(7) 円盤状土製品の分布状況について

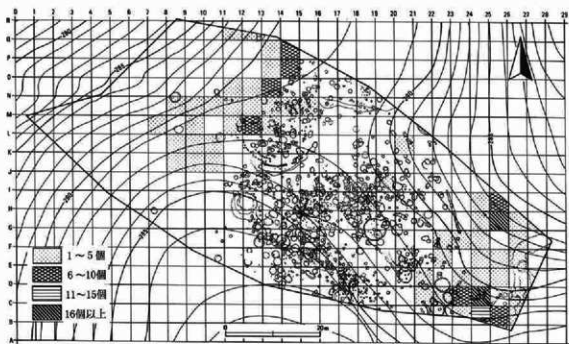
西部捨て場からの出土数が、東部捨て場より若干多い。本遺跡からは、後期に属するものが多い様相である（地文のみで明確な時期判断が困難なものが多いが）。ただし、第412図は第402図下段の晩期土器出土分布図と同様の傾向が窺える。

(8) 三角形土製品の分布状況について

西部捨て場からの出土数が、東部捨て場より若干多い。他遺跡の出土例を見ると、後期前半期に多い土製品のようなものである。本遺跡から出土している中で、文様から土器型式との比定が可能なのは、ほとんどが十腰内I式期であり、それより新しい時期と思われるものはない。ただし出土分布地は、必ずしも十腰内I式期の多いグリッドではない。



扁盤状土製品出土分布図（遺構内外）



三角形土製品出土分布図

第412図 土製品出土分布図 5

3 石器

上器や土製品に比べて、所属時期の不明なものが多い。本遺跡の土器出土量から考えて、石器についても大部分は後～晩期に製作された可能性が高いと思われる。出土分布については、他の遺物同様に捨て場からの出土が主体を占める。

(1) 石鏃

他の遺物同様に東西の捨て場からの出土が大半を占め、若干ではあるが東部捨て場からの出土数が多い。最も多く出土したのは、東部捨て場斜面下城のG25グリッドである。

(2) 石匙

東部捨て場が出土地の主体である。最も多く出土したのは、石鏃同様に東部捨て場斜面下城のG25グリッドからである。

(3) 石錐

東部捨て場斜面下城のF26グリッドと西部捨て場L11グリッドからの出土が多い。両グリッドは、第402図上段の図を見るとおり、後期土器の出土量が多かった地点である。

(4) 掻器・削器

東部捨て場が出土地の主体である。土器の総出土量も多かったD25・E24・E25グリッドからの出土数が圧倒的に多い。

(5) フレーク・チップ

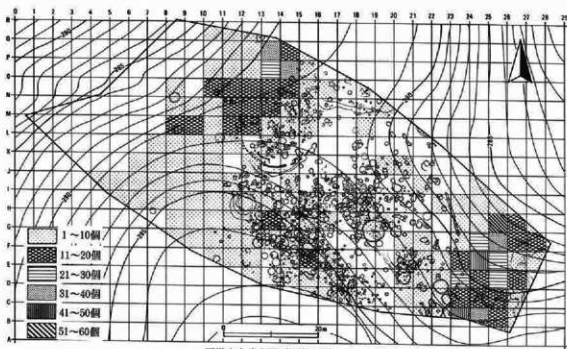
東部捨て場が出土地の主体である。フレーク・チップの出土分布を示した第415図と比較的似通った分布を示すのは、第403図右上の1腰内1式の出土分布である。

(6) 磨製石斧

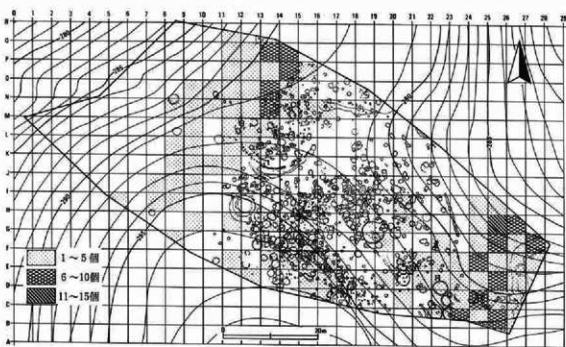
東部捨て場が出土地の主体で、特に斜面中城から多く出土した。西部捨て場においては、石錐が多く出土した斜面上城1のL11グリッドに多く、次いで斜面上城2のP12～13グリッドとなる。特記事項としては、3431は東西の捨て場同士約70mの距離を持って接合した（第417図下段の接合関係図参照。土偶2点や石刀・石剣2点とはほぼ同じ距離である。

磨製石斧は全般的に未製品が多いが、3431自体は刃のあり方から見て完成品である。実測図を見るとおり、接合部位を合わせても胴～基部がなく、欠損品である。使用中に壊れたか意図的に壊したかと言う問題が生じるが、後者的な行為を推定するなら胴部中位付近に見られる剥離痕は非常に怪しく見える。ただし、筆者の観察力でははっきりしなかった。あくまで推測の域を越えるものではないが、意図的に破壊した後別々に廃棄された可能性は考えられると思う。3443、3458についても同様の行為が見える。

996について、約28m離れたD19上坑2号とG26グリッド出土が接合したものである。刃のあり方や全体の研磨の只合から未製品と判断される。意図的に切断した様相ではないことから、製作途中に壊れた可能性

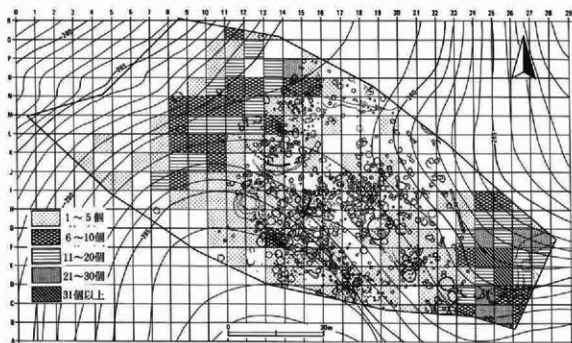
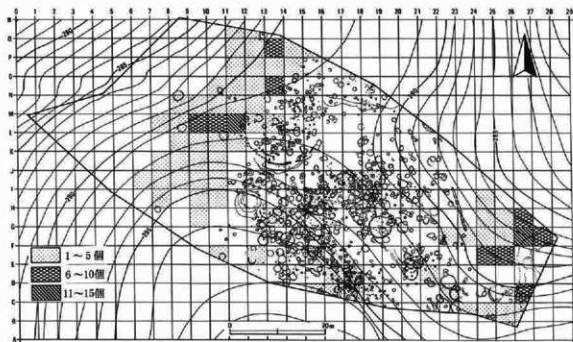


石器出土分布図（遺構内外）

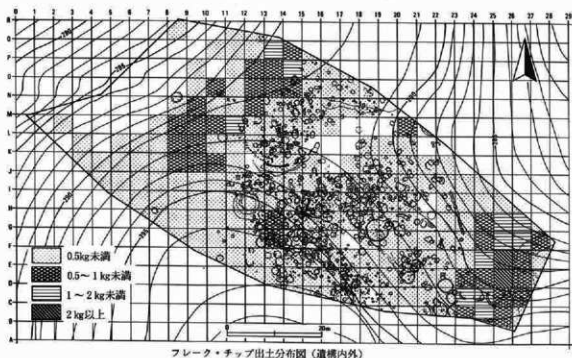


石器出土分布図（遺構内外）

第413図 石器出土分布図 1



第414図 石器出土分布図2



第416図 石器出土分布図3

が考えられる。出土の状況から推定すると、本来土坑に一括廃棄されたものが、その後の行為、例えば縄文人による造成工事などにより土坑上部が破壊を受け、遺物が包含された状態の排土が他の場所に捨てられたことなどが考えられる。

(7) 礫石器類

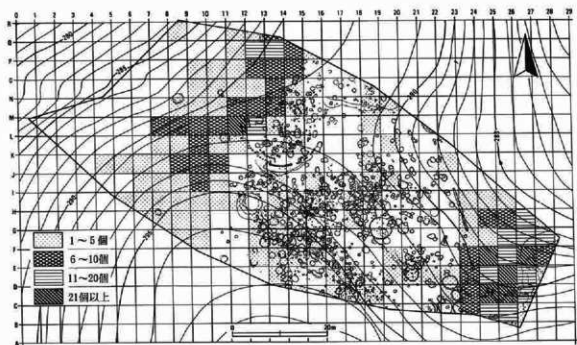
敲石、凹石、石皿、環状石器において、異なるグリッド出土同士が接合したものを図示した。全般に隣接するグリッド同士での接合関係を示す。

4 石製品

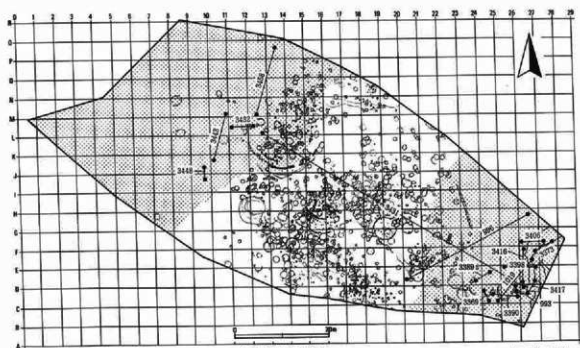
(1) 石棒・石剣・石刀

第420図上段の図は、石棒・石剣・石刀の3者を含めて作成した。石棒は4点（掲載は3点）と出土数が極端に少ない製品のひとつで、東部捨て場斜面中域から1点、西部捨て場斜面上域2から3点出土している。石剣・石刀は、東部捨て場斜面中域と西部捨て場斜面上域1からの出土が主体である。石剣・石刀は完形品がなく、全て欠損品である。

第420図上段の図を見るとおり、3671の石刀は約60m、3681の石剣は約78m離れて接合した。両者とも接合部位同士を合わせても欠損品であり、部品が調査区外に存在する。3671は身部同士で接合したが、その欠



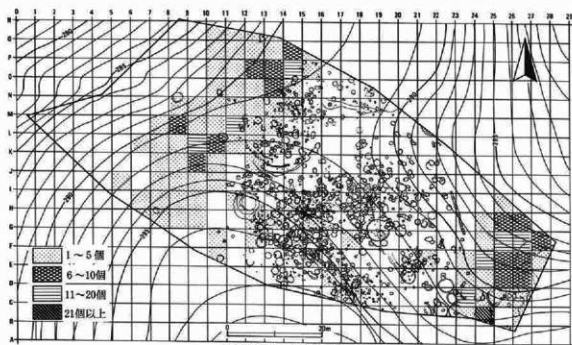
磨製石斧出土分布図（遺構内外）



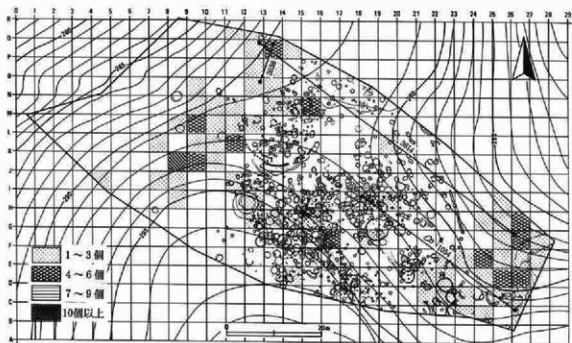
磨製石斧接合関係図

■トーンは検出場の範囲

第416図 石器出土分布図4

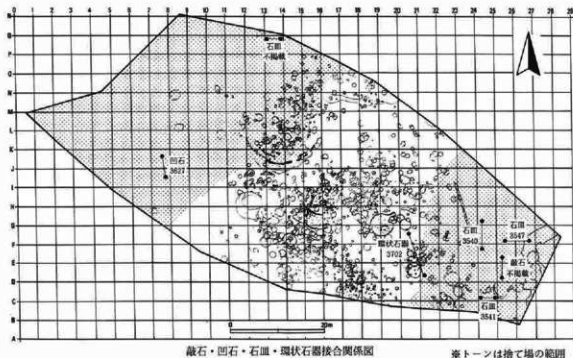


石種出土分布圖 (遺構内外)



磨石出土分布・接合関係図

第417圖 石器出分布圖 5



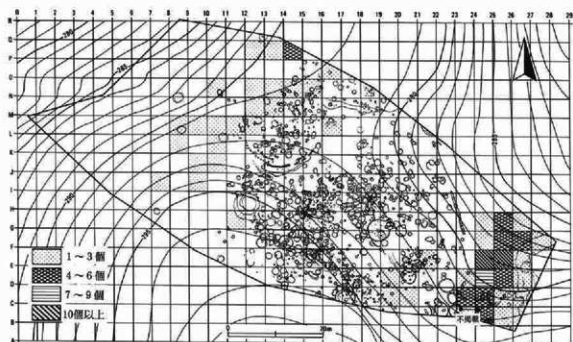
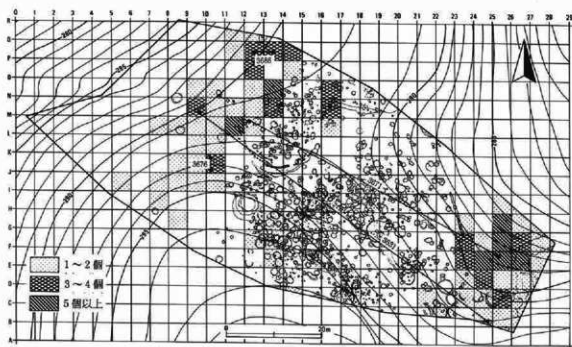
第418図 礮石器接合関係図

損部の状況としては意図的に折られている可能性がある。磨製石斧と同様に意図的な破壊行為の後に、別々の地点に廃棄した可能性が考えられる。3681は、その欠損部自体は不自然な状態ではないが、3671と同様に別々の地点に廃棄した可能性が考えられる。

簡単にまとめると、意図的に破壊した後別々に廃棄したものと、使用中（なにかに使用中に壊れた）に壊れ別々に廃棄したものの2つの行為の存在した可能性が考えられる。

(2) 軽石製品

出土地的には、圧倒的に東部捨て場の斜面中域に多い。所属時期や軽石の産地については不明である。ただし、原産地（火山活動地）と供給地（軽石が降った場所）と産出地（拾える場所）は必ずしも一致しない類いの母岩と考えられる。全体的には沿岸部の遺跡からの報告例が多いように思うが、軽米町内の遺跡からは比較的出土するようである。産出地については、今後検討してみたい内容であるが、佐藤次郎氏の御助言によれば、軽米町周辺では採取できるとのことである。



第419図 石製品出土分布図

第七章 縄文時代後～晩期土器の器形について

本遺跡で出土した縄文時代後～晩期の土器は、時期の大略を掴む目的で、施文される文様や特徴などから十腰内式・大洞諸型式に対比させて時期的な位置付けを行った。第Ⅲ群1～5類、第Ⅳ群1～2類に分類したのがそれである。また、特徴的文様を持たない粗製土器や無文土器については、第Ⅲ群6類及び第Ⅳ群5・6類に区分した。本遺跡における後～晩期土器の器種構成比は、深鉢35%、鉢19%、浅鉢9%、皿3%、壺20%、注口土器9%、香炉形土器3%、その他2%である。上記の数値は、第2次登録段階（掲載土器は第3次登録段階）での割合であり、絶対的な数字とは言えないが、本遺跡の土器群の器種構成の傾向は窺えると思っている。器形や文様・特徴の諸要素の中には、複数型式に跨がって継続する伝統性や、他地域から来る強い要素（十腰内式とは呼ばれないような土器、異系統土器？）と本地域の属性も合わさり、本来その区分（型式区分）は非常に難しい作業であると判断された。分類上の問題と検討も兼ねて、本遺跡から出土した完形土器をモデルとし、それぞれの器種の中で器形分類図を作成した。第V章において、それらモデルとした土器の文様帯の図示を行った。本章では、それらを基に型式学的区分を行い、本稿で行った土器分類の補足を試みる。各土器は、器形の類似性を最優先とし、文様の特徴については文様の類似性より文様帯・無文帯・地文帯の類似性を優先する。なお、完形資料が希少な浅鉢と皿及び特殊な土器と思われる香炉形土器、筒形土器、双口土器、異形土器は除外した。

各器種やタイプの細分基準については第V章を参照載きたい。

1 深鉢

底部～I線部までの器形で深鉢A～Hの8種類に設定・区分した。

(1) 深鉢A

深鉢Aにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の4種である。

深鉢A-I-1-a (1269, 1586, 1605, 1649, 2042, 2047)

深鉢A-I-2-a (1216, 1606, 1920, 2022)

深鉢A-II-1-a (2057, 2106)

深鉢A-III-1-a (1219, 1301, 1383, 1910, 1955)

その他 (206, 589, 1204, 1207, 1226, 1307, 1342, 1401, 1411, 1545.)

<山十数の傾向> 資料数は良好と言える。深鉢A-Iの割合が、深鉢A-IIや深鉢A-IIIより高いことから、器高に最大長を持つタイプが多いと言える。

<精製・粗製> 粗製と精製では、粗製の方が圧倒的に多い。

<口縁部・底部の形態> I線部は、平縁・波状の両者が見られ、底部は平坦のみである。

<文様帯・特徴など> 主体を占める粗製深鉢は、口縁部文様帯が無文で、胴部に地文を施文するものを基調とする。それら粗製深鉢は、口唇部に縄文を施文するものや、頸部に押印縄文を施文するもの、全面に櫛引文を施文するもの、胴部に網目状撫文を施文するものなどバリエーションが豊富である。

精製深鉢としては、1216と1920を深鉢Aとして採用したが、傾向的に地文以外の文様を施文する土器は希少と言える。また、その他の精製土器としては、底部が欠損する1204, 1342, 1411を含めた。

1920は、底部～胴部下半が無文で、胴部下半や上付近に横位に一条の沈線が引かれ、胴部に幅広の磨消縄文帯による曲線的なモチーフが描かれ、口縁部文様帯には地文の上に刺突文が施文される土器で、十腰内Ⅱ式に相当すると思われる土器である。他の深鉢Aの器形と比較して、頸部～口縁部にかけての外反の具合が強いようである。全体の器形は2022の粗製のものに類似する。

文様帯について、本遺跡の資料からはその傾向を窺い知るのが難しいが、Ⅱ帯が主要文様帯のようにとれる。精製の非完形品までを含めると、磨消縄文手法により底部～胴部下半が無文である場合が多く、その部位付近まで文様を施文する土器はない。

その他の特徴としては、深鉢A全般的に羽状縄文を施文する土器が見当たらないことが挙げられる。また、底面に網代・木葉・縄文などの痕跡が確認されるものが見立つ。

〈分類との対比〉 本稿で行った分類との対比として、深鉢Aの中で土器型式との比定が可能なのは1216・1920などの深鉢A-I-2-aとしたもので、十腰内Ⅱ式期に相当する可能性が高い。ただし、1920の精製深鉢の方が、1606や2022の粗製深鉢より全体のプロポーションが若干スマートであり、外反も若干弱いなどのことから、時期的に比定関係が成立するのかが疑問である。また、頸部～口縁部にかけての外反については、大きくは2種類が見られる。①頸部～口縁部下半にかけて一度内湾した後外反するタイプと、②頸部から直に外反するタイプである。両者の中間的なものもある。底部の残存がなくその他とした精製土器と比較すると、①が②より古い時期に多いように思われる。

羽状縄文を施文する土器がほとんどないことについて、羽状縄文は本遺跡の資料で見ると後期中葉～末葉にかけて頻繁に見られる。精製の深鉢に完形個体が少ないため強くは言えないが、深鉢Aとしたものが羽状縄文が隆盛する前段階に多く作られた可能性は高いと思われる。

〈総括〉 本遺跡に十腰内Ⅱ式の資料が少ないことから明言はできないが、十腰内Ⅰ～Ⅱ式期に多く製作された深鉢と思われる。

(2) 深鉢B

深鉢Bにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の5種である。B-Ⅲ-2-aとして採用した土器群は、深鉢Aと深鉢Bの折衷的な器形と言えるが、今回は深鉢Bに含めることとする。

深鉢B-I-1-a (278, 1314, 1406, 1487, 1911)

深鉢B-I-2-a (1319, 1524, 1679, 2159)

深鉢B-II-1-a (1902)

深鉢B-Ⅲ-1-a (1585, 1990)

深鉢B-Ⅲ-2-a (217, 1386, 1402, 1485, 1519)

その他 (173, 207, 213, 313, 1201, 1202, 1260, 1278, 1316, 1382, 1392, 1466, 1473, 1478, 1498, 1646, 1840, 1924, 1963, 2062)

〈出上数の傾向〉 資料数は良好と言える。深鉢B-Iの割合が、深鉢B-Ⅲより高く、また深鉢B-IIは希少と言える。このことから、器高に最大長を持つタイプが多く、口径と器高がほぼ同じ長さのタイプがほとんど存在しない可能性が高い。

〈精製・粗製〉 粗製と精製では、精製の割合が圧倒的に高い。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は平縁・波状の両者が見られるが、波状口縁のものが若干多いようである。底面は深鉢Aと同様に平坦を基調とし、線状の擦過痕が残るものが比較的に見られる。

<文様帯・特徴など> 文様帯としては、Ⅱa帯を主要ステージとする傾向が窺え、胴部下半は無文が多い。口縁部文様帯については、Ⅰ帯が無文のものや口縁端が縄文帯で構成されるものなどがある。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは、以下の2つのグループである。

① 1406、1473、2159

② 1386、1924

<分類との対比> 十腰内Ⅰ式期に多い傾向が窺える。十腰内Ⅰ式の新古で言えば、全般的に新しい段階に多いように思われる。文様モチーフで見れば、①とした土器群が②の土器群よりやや新しい時期と推定される。

<総括> 十腰内Ⅰ式全般に見られる器形と思われる。精製土器で比較すれば、深鉢Aの隆盛する時期より、若干古い時期に流行する器形と思われる。

(3) 深鉢C

深鉢Cにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の6種である。

深鉢C-Ⅰ-1-a (604)

深鉢C-Ⅰ-1-d (1231、1407)

深鉢C-Ⅱ-1-a (1589)

深鉢C-Ⅲ-1-a (1288、1587、1595)

深鉢C-Ⅲ-2-a (1285、1310)

深鉢C-Ⅲ-3-a (588)

その他 (652、1281、1409、1424、1483、1517、1544、1565、1598、1960、2058)

<出土数の傾向> 深鉢A・Bと比較して、資料数はやや少ない。

<精製・粗製> 精製、粗製の割合は、完形土器で比較すれば、ほぼ均等である。欠損品を含めれば、精製が多い。

<口縁部・底部の形態> 平縁が多く、大きめの突起が付く傾向が窺える。底部は平坦を基調に、比較的長めのスマートな台が付くタイプも見られる。

<文様帯・特徴など> 文様はⅡ帯、Ⅱa帯が主体である。磨消縄文が用いられる場合が多い。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは、以下の土器群である。

① 1285、1407、1409、1424

<分類との対比> 精製土器で比較すれば、十腰内Ⅱ式と十腰内Ⅲ式を主体とする。

<総括> 資料が少なく、文様帯の傾向を窺える様相ではない。時間的には、十腰内Ⅱ式に出現する器形と思われる。

(4) 深鉢D

深鉢Dにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の9種である。

深鉢D-Ⅰ-2-b (2137)

深鉢D-Ⅱ-1-d (1341)

深鉢D-Ⅲ-1-a (1312、1812、1997、2128)

深鉢D-Ⅲ-1-b (1362、1503、2111、2130)

深鉢D-Ⅲ-1-d (2139)

深鉢D-Ⅲ-2-a (1437)

深鉢D-Ⅲ-2-b (367, 1818, 2157, 2164)

深鉢D-Ⅲ-3-a (555)

深鉢D-Ⅲ-3-b (1631)

その他 (294, 358, 1429, 1445, 1509, 1562, 1614, 1632, 1790, 1849, 1891, 1982, 2004, 2028, 2029, 2036)

〈出土数の傾向〉 本遺跡に見られる深鉢の中で、最も豊富な資料数である。深鉢D-Ⅲが主体で、深鉢D-Iは希少であることから、口径に最大長を持つものが多いと言える。

〈精製・粗製〉 精製のみで、粗製は見られない。

〈口縁部・底部の形態〉 I口縁部は、平縁、波状、山形状が見られ、波状・山形状を早するものは5単位が多い。底部は平坦、上げ底状、台付きの3種類が見られた。口径に最大長を持つものが多いことを考えると、全般に底部径が小さいことは、直立させるにはバランスが悪いように思われる。

〈文様帯・特徴など〉 文様は、入組み帯状文によりモチーフされ、帯状文はほとんどが羽状縄文により構成される。口縁部文様帯と胴部文様帯が、頸部の帯状文によりそれぞれ独立する様相を感じる。また、IIa帯が無文(磨消縄文)で、I帯に地文を施文するものも目立つ。2137は、IIb帯とII帯にそれぞれ5単位で瘤が付く。2004は、5単位の波状口縁で、II帯の文様モチーフも5単位で描かれる。1818は、充填縄文による入組み文が描かれ、口唇部の突起は5単位で、頸部に付く瘤は4単位である。2157は、口唇部の突起、頸部の貼瘤、胴部の貼瘤が5単位で、入組み状文は充填縄文手法による。1997は、口唇部に円形突起と斜行突起が交互に各4単位で付き、頸部の瘤は4単位、II帯の文様モチーフも4単位で充填縄文手法による。1631は、波状口縁・頸部の貼瘤・胴部の貼瘤・文様モチーフ全てが5単位である。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは、以下の土器群である。

① 1362, 1818, 2111, 2164

② 1997, 2137, 2139, 2157

③ 1631, 2004

〈分類との対比〉 十腰内IV式を主体に十腰内V式が見られる。文様モチーフで見れば、①の土器群は十腰内IV～V式、②の土器群は十腰内IV式、③の土器群は十腰内IV式の古様相に相当すると思われる。精製土器がほとんどである状況を考慮すると、器形や文様モチーフについては、本来細部まで吟味する必要があったかと思う。

〈総括〉 十腰内IV式～十腰内V式に隆盛し、それ以降は若干器形の変容により深鉢Eとしたものが主体となるのであろうか。晩期の大洞B式に衰退をみることは、言えると思う。十腰内Ⅲ式の精製深鉢の資料が希少なことから、この器形の深鉢の出現期ははっきりしない。関東の曾谷式段階では見られる器形であり、十腰内Ⅰ式との併行関係をどこに置かか問題となるのかもしれない。

(5) 深鉢E

深鉢Eにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の7種である。

深鉢E-I-2-a (1776)

深鉢E-II-1-b (304, 1347, 1440, 1787)

深鉢E-II-3-b (1855)

深鉢E-III-1-a (1558)

深鉢E-III-1-b (1264, 1266, 1347, 1833, 1856, 2091, 2092)

深鉢E-III-1-d (1721)

深鉢E-III-3-b (1772)

その他 (351, 520, 1420, 1423, 1506, 1570, 1634, 1660, 1770, 1781, 1828, 1859, 2077)

〈出土数の傾向〉 資料数は良好と言える。深鉢E-IIIが主体である。

〈精製・粗製〉 精製・粗製の割合としては、精製が多い。

〈I縁部・底部の形態〉 I縁部は傾向としては平縁が多い。底部は上げ底状が、平坦より若干多いようである。

〈文様帯・特徴など〉 帯状文上に付加される貼瘤が顕著となる。深鉢Dと比較して、帯状文の幅が狭く、直線的なモチーフが多いようである。2077は、II帯とI帯に突き起こし状の刺突文（突起こした凸で捉えれば瘤であるが、本稿では凹で捉え図示している）が2列で連続施文され、縦長の貼瘤が5単位で付加され、I唇部は小波状気味に刻み加えられている。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは①の土器群である。頸部に貼瘤が帯状に配置される点で類似するのが②の土器群である。

① 304, 1558, 1855, 2091

② 1266, 1440, 1770, 1721, 1787

〈分類との対比〉 十腰内V式期に多い器形であることは言えると思う。

〈総括〉 全般に文様帯の類似性は感じられないが、頸部に帯状文あるいは貼瘤帯を持つことでは類似性がある。I腰内V式に隆盛することはある程度言えると思う。深鉢Dと存立して後期後半期に多い器形なのであろう。1772などは安行式の影響が窺える土器であり、深鉢Eは関東系の土器との関連（祖系？）が考えられるのかもしれない。

(6) 深鉢F

深鉢Fにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

深鉢F-III-1-a (1999, 2143)

深鉢F-III-1-b (1581, 1687, 1795, 2142)

〈出土数の傾向〉 本遺跡の資料では、全てF-IIIであることから、器高より口径に最大長を持つものがほとんどである。

〈精製・粗製〉 精製・粗製の割合としては、均等と言える。

〈I縁部・底部の形態〉 I縁部はほとんどが平縁で、突起が付くものもある。底部は平坦と上げ底状が主体で、台の付くものは見られなかった。

〈文様帯・特徴など〉 文様は、II帯に広く展開する。I唇部文様帯が無文であるものも目立つ。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは①の土器群である。I唇部文様帯が無文と言うことでは②の土器群が類似する。

① 1581, 1687

② 1999, 2142, 2143

<分類との対比> 後期後葉～末葉に多い器形と思われる。①の上器群の文様モチーフは、1腰内Ⅳ式と思われる。②の十器群は明確ではないが、若干①の土器群より新しい時期ではないかと推定される。

<総括> 精製土器と比較すれば、时期的には深鉢Dや深鉢Eと存立するようである。

(7) 深鉢G

深鉢Gにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の4種である。

深鉢G-Ⅱ-1-a (1446, 2149)

深鉢G-Ⅲ-1-a (1271, 1294, 1872, 1898, 1985, 1989, 1991, 2000, 2038, 2094, 2129, 2148, 2156, 2166)

深鉢G-Ⅲ-1-b (1223, 1311, 1332, 2032, 2103)

深鉢G-Ⅲ-1-d (2140)

その他 (1568, 1597, 2014)

<山土数の傾向> 資料数は良好である。深鉢G-Ⅲが主体であることから、口径に最大長を持つタイプが多い。

<精製・粗製> 粗製土器が大半を占める。確認された精製土器の完形品は、2148と2156の2点のみである。

<口縁部・底部の形態> 口縁部は、ほとんどが平縁である。底部は、平坦を主体に上げ底状が見られる。

<文様帯・特徴など> 文様は、2点の精製土器を見れば器面全体に展開する。粗製の場合は、胴部下半～底部にかけてわずかに無文帯が見られる。地文は2種の原体により羽状縄文を構成するものが多い。

<文様帯の類似する十器群> 文様帯の類似性が窺えるのは①の土器群である。

① 2148, 2156

<分類との対比> 粗製が主体を占めることから、詳細は探り得ないが、精製の2点は十腰内Ⅴ式に相当する。

<総括> 後期後半期に製作された深鉢である可能性が高い。時期の下限や上限は不明である。

(8) 深鉢H

深鉢Hにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の11種である。

深鉢H-I-1-a (171, 193, 1350, 1738, 1806, 1975)

深鉢H-I-1-b (157)

深鉢H-I-1-d (364)

深鉢H-I-2-a (1493, 1695, 1762)

深鉢H-II-1-a (2074)

深鉢H-II-1-d (238)

深鉢H-III-1-a (415, 1268, 1661, 1806, 1975, 2094)

深鉢H-III-1-b (554, 1665, 1667, 1674, 1737, 1742)

深鉢H-III-1-d (115, 239, 253, 1743, 1778)

深鉢H-III-2-a (1729)

深鉢H-III-2-b (1620, 1715)

その他 (65, 130, 134, 145, 250, 251, 252, 311, 394, 426, 737, 1339, 1355, 1452, 1666, 2099)

〈出土数の傾向〉 資料数的に見れば完形品が多く得られ、良好と言える。深鉢H-Ⅲが主体で、次いで深鉢H-Iとなる。

〈精製・粗製〉 精製と粗製の割合としては、若干粗製が多い。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は平縁が主体で、若干小波状が見られる。底部は平坦、上げ底状、台付が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 文様はⅡa帯が主体で、Ⅱ帯は地文のみのものが多い傾向である。115は、突き起し状の刺突文が連続施文され、文様の施文単位は不明であるが、文様モチーフの起点に貼瘤が付加される。239は、文様の施文は5単位で割り付けられる。煤の付着状況として、内外面ともほぼ全面に煤の付着が確認されるが、内面の胴部下付近のみ付着が見られない。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 737、1268、1452、1661、1666、1729、2074

② 115、1743

〈分類との対比〉 本遺跡の資料で見れば、後期末葉～晩期前葉にかけて隆盛した器形である。239の土器は後期最終末～晩期最初頃とも言える土器であり、115は同時期もしくは若干古いと思われる南東北的な特徴の土器である。

〈総括〉 本遺跡の資料で見れば、後期末葉～晩期前葉にかけて隆盛した深鉢と捉えられる。

2 鉢

底部～口縁部までの器形の違いで10種類に区分した後、口縁部の形態(1～4)と底部の形態(a～d)を加味して区分した。深鉢に比べ、絶対数が少なく、また出土点数の極端に少ない器形の鉢も多いことから、分類後の所見として分析対象資料には不向きであったように思う。

(1) 鉢A

鉢Aにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

鉢A-1-d (1247)

鉢A-2-a (2030、2035)

鉢A-2-d (1397)

その他(1884)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少であるが、個々の土器の残存率は良好と言える。

〈精製・粗製〉 粗製は見られない。

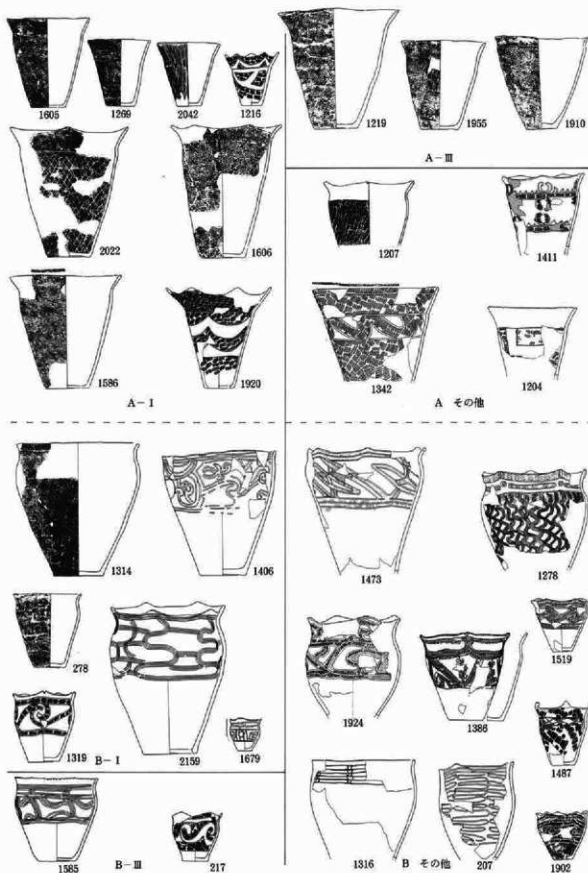
〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は全て波状で、4単位である。底部は平坦と台付が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 文様は、I帯が無文、Ⅱa帯が主要文様帯、底部付近が無文といった構成で、比較的明確に区分される傾向が窺える。1397と2035は多条沈線によりモチーフが描かれる。1884と2030は、地文は何れも無節で、磨消縄文が施される。波状口縁の単位や文様の施文単位は、何れも4単位である。

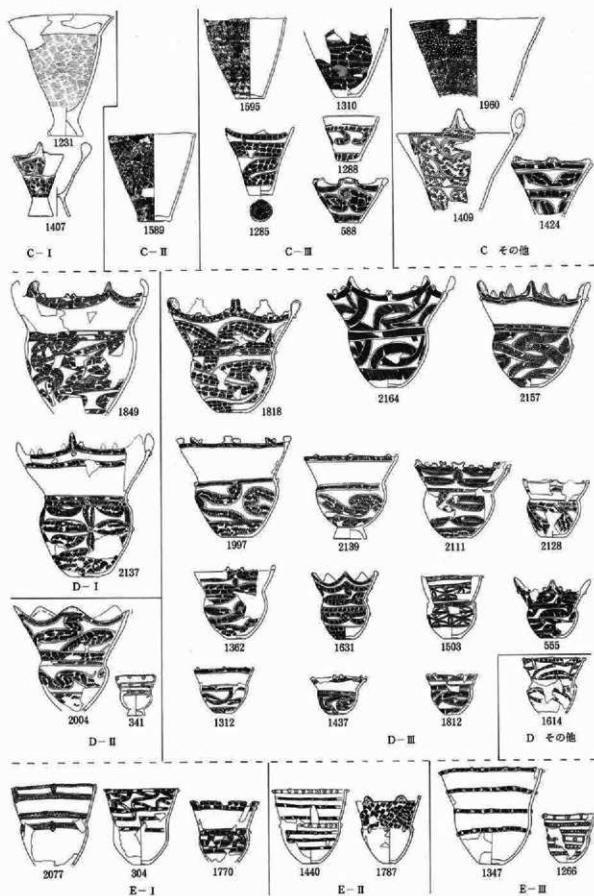
〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1397、2030、2035

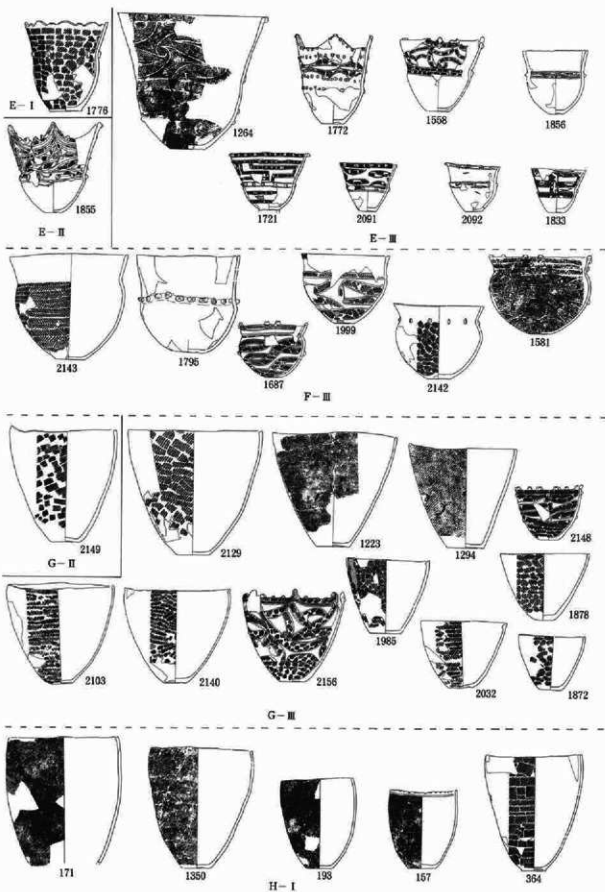
〈分類との対比〉 十腰内I式に見られる器形と言える。



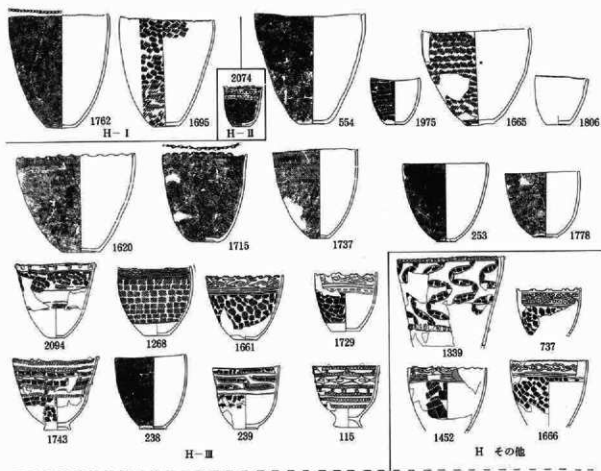
第420図 土器器形分類図 1



第421図 土器器形分類図 2



第422图 土器器形分類图 3



第423図 土器器形分類図 4

〈総括〉 後期前葉期に見られる鉢であることは言えると思う。鉢Bとの類似点が多い。

(2) 鉢B

鉢Bにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

鉢B-1-a (1334, 1969)

鉢B-1-d (342, 1326)

その他 (1468)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少であるが、個々の土器の残存率は良好と言える。

〈精製・粗製〉 精製の鉢が主体と言える。

〈口縁部・底部の形態〉 342の口縁部の突出を突起として捉えれば、口縁部は全て平縁である。底部は平坦と台付で構成される。

〈文様帯・特徴など〉 文様帯は鉢Aと同様の傾向を示すが、鉢B同士では若干の相違がある。地文を施文する土器は1969のみである。

〈分類との対比〉 Ⅰ腰内Ⅰ式に見られる器形と言える。

〈総括〉 後期前葉期に位置付けられるタイプと言えるが、鉢Aとの比較から、鉢Bの方が若干古い時期に位置付けられる可能性がある。文様帯としては、1969と鉢Aの2035に類似性が感じられる。

(3) 鉢C

鉢Cにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

鉢C-1-a (2068)

〈出土数の傾向〉 2068の1点のみである。

〈精製・粗製〉 精製土器である。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は、平縁で貼付けによる突起を持つ。底部は平州である。

〈文様帯・特徴など〉 Ⅱ帯に広く、沈線によるS字状・渦巻き状のモチーフが描かれる。口縁は2単位の波状縁で、頂部下の渦巻き状文は2単位で施文されるが、入組み状文の文様単位に規則性はない。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

鉢Aの1247と文様帯が類似する。

〈分類との対比〉 十腰内Ⅰ式の古い段階の土器であろう。

〈総括〉 文様帯の類似性で捉えれば、鉢Aと同種に属して差し支えない鉢である。本稿で行った器形設定に、不備があったと思う。

(4) 鉢D

鉢Dにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

鉢D-1-a (1306, 1404, 1434, 1464, 1616, 1959, 2051)

鉢D-1-b (2130)

鉢D-1-d (1754)

その他 (1488, 1501)

〈出土数の傾向〉 資料数は普通である。

〈精製・粗製〉 粗製が多い。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は全て平縁である。底部は平坦が多い。

〈文様帯・特徴など〉 口縁部と胴部を分離する行為が感じ取れる。鉢Dとして設定した中でも、頸部～口縁部の外反の具合に相違がある。

〈分類との対比〉 後期前葉～晩期までが混在している。

〈総括〉 器形分類の設定を大きく捉え過ぎたことは否めない。1501、1754を除けば、後期前葉～中葉と思われる、該期に多い器形であろう。1754は、鉢Eの1908と同種と捉えられる。

(5) 鉢E

鉢Eにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の4種である。

鉢E-1-a (1315、1539、1655、1908、2045)

鉢E-1-b (1930)

鉢E-2-a (1470、1529、1918、1921)

鉢E-2-d (1436)

〈出土数の傾向〉 資料数は、良好と言えよう。

〈精製・粗製〉 精製が主体である。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は、平縁と波状がある。底部は1930が上げ底状で、他は平坦と台付である。

〈文様帯・特徴など〉 傾向が窺い知れる資料とは言えない。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1918、1921

〈分類との対比〉 I腰内Ⅲ～Ⅳ式と思われる1436の位置付けが問題となるが、それ以外は後期前葉～中葉と思われる。

〈総括〉 器形分類の設定を大きく捉え過ぎたことは否めない。1918と1921については、本来深鉢Aに含めるべきものであり、1342や1204と文様帯が類似する。

(6) 鉢F

鉢Fにおいて、全体の器形が分かり得る状態の上器は、以下の2種である。

鉢F-1-a (2005)

鉢F-1-d (1936)

その他(1)

〈出土数の傾向〉 非常に希少である。

〈精製・粗製〉 2005は精製、1936は半精製と言える。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は平縁である。底部は平坦と台付である。

〈文様帯・特徴など〉 2005はⅡ帯に磨消縄文による幅広のモチーフが4単位で描かれ、I縁端と頸部に複数段の刻目帯を施文する。

〈分類との対比〉 I腰内Ⅲ式に多い器形と思われる。

〈総括〉 2005は、深鉢Fの1999と文様帯が類似する。

(7) 鉢G

鉢Gにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の4種である。

鉢G-1-a (1542、1979、1981、2081、2120)

鉢G-1-b (2154)

鉢G-1-c (683)

鉢G-1-d (605、1578、1842、2082)

その他 (360、2131)

〈出土数の傾向〉 資料数は良好と言える。

〈精製・粗製〉 精製を主体とする。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁部は平縁である。底部は平坦と台付を主体とする。

〈文様帯・特徴など〉 II帯を主要文様帯とする傾向は窺える。文様のモチーフとしては、1979、2120、2131、2154などは入組み帯状文（2種の原体による羽状縄文）による襷掛け状のモチーフが描かれる。2154は、I唇部の突起が2個一対で7単位で付加される。1578は、II帯に貼瘤が7単位で付加される。ただし、貼瘤同士の間隔は、まちまちである。2154は、口唇部の突起は2個一対で7単位？、I帯の瘤は7単位？、II帯の文様施文単位は4単位である。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 2120、2154

〈分類との対比〉 十腰内IV式及び十腰内V式に多い器形と思われる。

〈総括〉 バリエーションに富んだ構成となったが、時期的には大差ない時期でまとまるようである。1979は、深鉢Fの1581、1687と文様帯が類似する。2082は鉢Hに類似する器形とも取れる。

(8) 鉢H

鉢Hにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

鉢H-1-a (1242、1499)

鉢H-1-d (246、1798)

その他 (416、1505)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少と言える。

〈精製・粗製〉 精製を主体とする。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁を主体とする。平坦と台付がある。

〈文様帯・特徴など〉 II帯を主要文様帯とする。II a帯は入組み状文と無文がある。1798は、口唇部に6単位で突起が付加される。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1499、1798

〈分類との対比〉 十腰内V式に多い器形と思われる。

〈総括〉 資料数は少ないが、後期末葉に見られる鉢と判断される。

(9) 鉢I

鉢Iにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の6種である。

鉢 I-1-a (235、242、326、541、1427、1448、1575、1759、1760、1794、1874、1978、2101、2172)

鉢 I-1-b (450、1359、1751、1834、2093、2144)

鉢 I-1-c (1888)

鉢 I-1-d (1239、1560、1672、1700、1707、1730、1771)

鉢 I-2-a (1212、1456)

鉢 I-2-d (1699)

その他 (143、176、195、197、300、301、1692、1713)

<出土数の傾向> 鉢類の中では最も出土数が多い。

<精製・粗製> 精製が主体である。無文の精製土器も見られる。

<口縁部・底部の形態> 平縁が主体である。底部は平坦を主体として、台付、上げ底状となる。丸底状は1888の1点のみである。

<文様帯・特徴など> 文様帯の主要ステージはⅡa帯で、羊歯状文が見られる。Ⅱ帯に文様帯を持つものは見当たらない。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 450、1456、1760、1874、2101、2172

② 1707、1888

<分類との対比> 大洞BC式に多く見られる。

<総括> 晩期前葉に見られる鉢と判断される。

(10) 鉢 J

鉢 Jにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

鉢 J-1-a (2078)

鉢 J-1-d (156、1267)

その他 (93、174、306、365、565、1654)

<出土数の傾向> 底部が欠損するものが多く、完形品は希少である。

<精製・粗製> 精製が主体である。

<口縁部・底部の形態> 平縁あるいは、小波状(分類上は平縁とした)を呈する。底部は平坦と台付で構成される。

<文様帯・特徴など> Ⅱa帯を主要文様帯とすることで鉢 I と類似する。Ⅱ帯にも文様(人組み三叉文)を施文する土器があることは相違する。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

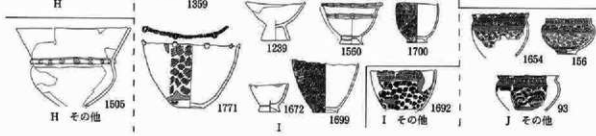
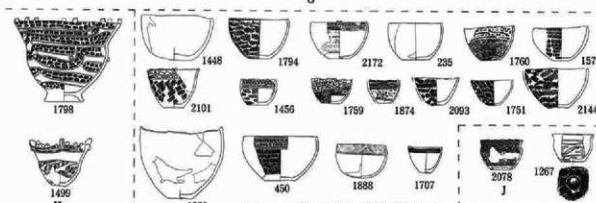
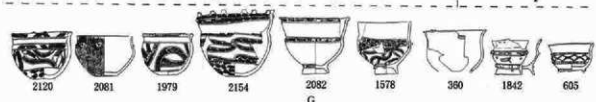
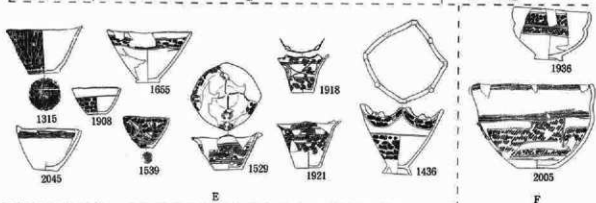
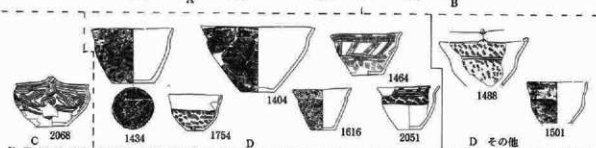
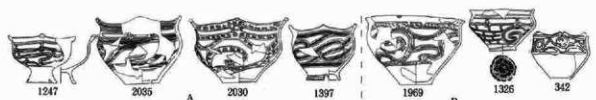
① 93、1654、2078

<分類との対比> 大洞BC式に多く見られる。

<総括> 晩期前葉に見られる鉢と判断される。

3 壺

底部～口縁部までの器形の違いで20種類に区分した後、口径と器高の割合(Ⅰ～Ⅲ)と口縁部の形態(Ⅰ



第424図 土器器形分類図 5

～4)と底部の形態(a～d)を加味して区分した。器種別に見れば、最も完形率が良好なのは壺類と思われる、特に小形の壺は出土時から完全な状態であるものが多く見られた。

(1) 壺A

壺Aにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺A-I-2-a (2168)

その他(1390、2006、2018、2026、2037) ※底部欠損の中で3点はA-I-2。

〈出土数の傾向〉 完形品は1点のみである。残り4点は底部を欠損する資料であるが、A-Iを主体とすると思える。2018は、本遺跡においては上器全体で見ても、大形に属する規模である。

〈精製・粗製〉 確認された資料は、精製のみである。

〈口縁部・底部の形態〉 波状を呈する、広口の壺形土器である。波状の単位は4単位と5単位が見られる。底部が残存するのは2168のみで、平坦である。

〈文様帯・特徴など〉 I縁部は隆帯と沈線による方形・精円形区画文が見られ、接点に円形の刺突文を持つ。II帯を主要文様帯とし、胸部中に区画帯を持ち、胴部下半は無文あるいは地文である。2168は、4単位の波状口縁で、頸部の方形区画文が4単位となる。2006は、口頸部のクラック状文が4単位で、胴部の文様は磨消縄文による「V字」及び「逆V字」がモチーフされ、文様の起点に竹管文を施文する。1390は、他の4つとは明らかに違う特徴を持つ。

〈文様帯の類似する上器群〉 文様帯には類似性が窺える。

① 2006、2018、2026、2168

〈分類との対比〉 2018、2026、2168は十腰内I式の新しい段階に位置付けられると思われる。2006は、頸部～口縁部の長さが上記した3つと比べ短く、胸部中位付近も横幅が広い。文様モチーフから、十腰内I式の中でも若干古い段階に位置付けられると思われる。1390は、十腰内I式の最も古い段階あるいは前段階に相当する土器と思われる。

〈総括〉 壺Aとして一括した5点は十腰内I式期であるが、3段階に時期細分される可能性がある。

(2) 壺B

壺Bにおいて、全体の器形が分かり得る状態の上器は、1種である。壺Aと比較して口径が小さい。

壺B-I-2-a (1408、2024)

その他(1327、1361、1396、1481、2033) ※底部欠損の2点はB-I。

〈出土数の傾向〉 完形品は2024の1点のみである。出現率としては、壺Aと同じ割合と思われる。

〈精製・粗製〉 確認された資料は、精製のみである。

〈I縁部・底部の形態〉 口縁は波状を主体とするが、平縁もある。底部は、平坦とやや上げ底状の2種が確認された。

〈文様帯・特徴など〉 何れもII帯を主要文様帯とし、胸部中に区画帯を持ち、胴部下半は無文である。頸部に円形の凹が見られる。1361は、折り返し口縁で、頸部の方形区画文が4単位、胴部の渦巻き状文が4単位で施文される。2024は、3単位の小波状縁で、頸部の方形区画が3単位である。2033は、頸部の方形区画が4単位、胴部の文様が4単位で割り付けられる。1396は、II帯が横位の帯状文により分裂する。

〈文様帯の類似する上器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1361、2033、2024

<分類との対比>

広義的には十腰内Ⅰ式の範疇で捉えられる。新古に細分するなら、以下の順になるのではないかと筆者は捉えている。

2024・2033（十腰内Ⅰ式古い？）→1361・1396・1481（十腰内Ⅰ式新）→1408（十腰内Ⅰ～Ⅱ式）→1327（十腰内Ⅱ式？）

<総括> 十腰内Ⅰ式～Ⅱ式にかけて、継続的に見られる。

（3）壺C

壺Cにおいて、全体の器形が分かり得る状態の上器は、以下の2種である。

壺C-I-1-a（1389、1471、1869）

壺C-I-2-a（2008）

その他（1398、1410、1419）

<出土数の傾向> 数的には多くない。

<精製・粗製> 精製と地文のみ・無文の粗製がある。

<口縁部・底部の形態> 平縁が主体である。波状は2008のみである。底部は平坦である。

<文様帯・特徴など> Ⅱ帯が主要文様帯である。胴部中位より下半は無文を呈する。1389と1471は磨消縄文手法による入組み状文で、内面はナデ調整が施される。文様が複雑である2008は、口縁部に隆帯による縦位の入組み文と沈線文、頸部に隆帯による区画文3単位、胴部に沈線と多条沈線による「X字状文」・「S字状」文を3単位で施文する。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは①の土器群である。②の土器群は無文で粗面（ミガキなどが施されていない）のままの土器である。

① 1389、1471、2008

② 1398、1410

<分類との対比> 2008が若干古い以外は、全般に「十腰内Ⅰ式の新段階に相当すると思われる。1869は無文の精製壺であるが、他の無文は粗製であり、時期差で捉えられよう。

<総括> 壺Cの中で①としたものは、壺Bの①とした土器群と文様帯が類似する。文様モチーフから見ても、ほぼ同時期的に比定できると思う。

（4）壺D

壺Dにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

壺D-I-1-a（1232、1237、1352、1482、1922、1968、2039）

壺D-I-1-c（1931）

その他（1380）

<出土数の傾向> 完形品が多い。全て壺D-Iに相当することから、器高に最大長を持つ。

<精製・粗製> 精製、粗製の両者が見られ、粗製がやや多い。

<口縁部・底部の形態> 口縁部は平縁で、口唇部の形態が「丸み」のものが主体を占める。1352と1380は口唇部に縄文を施文する。底部は1931の無文土器を除き全て平坦である。底面には網代、笹などの圧痕が

見られる。

〈文様帯・特徴など〉 第V章で説明した分類設定の基準により、選ばれたものであるが、全体の形状にはバラツキが目立つ。1968は、頸部～口縁部が細長く、Ⅱ帯は4単位で文様が割り付けられる。1232は、胴部中位の幅が広い形状である。文様を持つ1232、1482、1968は、文様帯は何れもⅡ帯で、胴部中位が無文あるいは地文のみを施文する。1232は、口縁部と胴部の文様を合わせると、X字状に見える。1237は頸部に、1922は頸部と口縁部に原体押圧文を施文する。

〈文様帯の類似する上器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1232、1482、1968

〈分類との対比〉 全般に十腰内Ⅰ式に相当すると思われるが、無文のものについては、明確には時期同定ができない。

〈総括〉 形状は様々であるが、時期的にはある程度のまとまりが感じられる。

(5) 壺E

壺Eにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

壺E-I-1-a (1222、1248、1300、1469、1647、1701)

壺E-I-1-b (1403)

壺E-I-2-a (1956)

その他 (1211、1504)

〈出土数の傾向〉 完形品が多い。全て壺E-Iに相当することから、器高に最大長を持つ特徴がある。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 1956としたもの以外は、平縁である。1647は原体押圧文を、1403と1647は口唇部に縄文を施文する。底部は、1403が若干上げ底状を呈する以外は全て平坦である。

〈文様帯・特徴など〉 全体的にスマートで、徳利の形に近似したものが多い。1956は稚拙な沈線による特殊な文様を施文する。1300、1647、1469は直線的な磨消縄文帯が横位に巡る。1248は、頸部の円形文が3単位で施文され、口唇部は平坦やや歪気味である。

〈文様帯の類似する上器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1248、1403

② 1300、1469、1647

〈分類との対比〉 1248は十腰内Ⅰ式の新しい段階、1211、1300、1403、1469、1647は十腰内Ⅱ式に相当すると思われる。

〈総括〉 1403の時期的な位置付けが問題となるが、十腰内Ⅰ式～Ⅱにかけて隆盛する壺と思われる。

(6) 壺F

壺Fにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

壺F-I-1-a (1213、1214、1744、1973)

壺F-I-1-b (1453)

壺F-I-1-c (1951)

〈出土数の傾向〉 資料数は少ないが、残存率は良好なものが多い。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈I縁部・底部の形態〉 全て平縁である。底部は、平坦を主体に上げ底状、丸底状が見られる。台付はない。

〈文様帯・特徴など〉 1213と1214は、II帯全面に幅広の帯状文による鍵状のモチーフが3単位で描かれる。無文部分は、磨消縄文手法による。1453は、口唇部に又状貼瘤状の突起が2個一対で3単位で付加され、II帯に磨消縄文手法による入組み状文を施文し、3単位で又状貼瘤が付加される。1213・1214とは胴部下半が無文である点が相違する。また、胴部下半はミガキが粗雑である。1744、1951、1973は無文の精製壺である。主要文様帯はII帯のようである。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1213, 1214

〈分類との対比〉 1213, 1214は十腰内II～III式、1453は十腰内IV～V式、その他は明確ではないが、後期後中期と推定される。

〈総括〉 後期中葉～後葉に見られる器形と判断される。壺Eよりは、新しい時期に相当し、また壺Gとはほぼ同時期に見られる器形と思われる。

(7) 壺G

壺Gにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺G-I-1-c (1233, 1894, 2116)

その他 (1263, 2122)

〈出土数の傾向〉 資料は希少と言える。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈I縁部・底部の形態〉 全て平縁で、底部は全て丸底状である。

〈文様帯・特徴など〉 主要文様帯はII帯と受けとれる。頸～I縁部にかけては、磨消縄文帯を持つものが見られる。1233は、II帯に弧線状入組み文を施文する。2116は、II帯に帯状文による変形鍵状のモチーフが描かれ、帯状文内は羽状縄文を構成する。1894は、II帯に横位に平行する磨消縄文帯を持つ。

〈文様帯の類似する土器群〉 II帯が主要文様帯である点では共通するが、類似性は捉えられない。

〈分類との対比〉 十腰内III～IV式に相当する。2116は両者の過渡期的な土器と思われる。

〈総括〉 後期中葉～後葉にかけて見られる器形と判断される。

(8) 壺H

壺Hにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

壺H-I-1-a (1337, 1428, 1716, 1725, 1749, 1831, 1835, 1993)

壺H-I-1-b (1430, 2174)

壺H-III-1-a (628)

その他 (1447, 1827, 1887)

〈出土数の傾向〉 資料数は良好と言える。壺H-Iが主体である。

〈精製・粗製〉 無文の精製が2点見られる以外は、全て粗製である。

〈I縁部・底部の形態〉 全て平縁である。底部は、平坦と上げ底状の2種がある。2174は4足であったと

思われるが、明瞭ではない。

〈文様帯・特徴など〉 全面地文を施文するのが1337、1430、1725、頸～口縁部を無文とするのが1716、1749、1831である。1447は口縁部に平行沈線、口縁部下半に磨消縄文を伴う。1887は壺Gなどと文様帯が類似する。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1337、1430、1725

② 1716、1749、1831

〈分類との対比〉 628、1887はⅠ腰内Ⅲ式に相当する。2174は、晩期初頭と思われる。その他は明確ではない。

〈総括〉 時期を判断できる文様を施文するものが希少と言える。諸特徴から判断すれば、後期中葉～晩期初頭まで時期幅が広い可能性が窺える。

(9) 壺 I

壺 I において、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の 4 種である。

壺 I - I - 1 - a (1265)

壺 I - I - 1 - b (1892、1939)

壺 I - I - 1 - c (1369)

壺 I - I - 1 - d (1689、1714、1854、2115)

〈出土数の傾向〉 資料数は少ないが、残存率は良好なものが多い。壺 I - I のみであることから、全て器高に最大長を持つ。

〈精製・粗製〉 全て精製である。1265、1892、1714は無文の精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 全て平縁である。底部は、平出、上げ底状、丸底状、台付の 4 種があり、台付が主体である。

〈文様帯・特徴など〉 1369、1689、1854、1939、2115はⅡ帯を主要文様帯とし、Ⅱ b 帯あるいはそれに準ずる文様帯を持つ。Ⅱ帯には入組み帯状文が施文される。また、1265、1369、1854は、器体側面の突起に、縦方向に孔が穿たれているもので、釣り下げ形土器（釣り手土器）と推定される。孔は 4 単位と 5 単位がある。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1369、1689、1854、1939、2115

〈分類との対比〉 1369、1689、1854はⅠ腰内Ⅳ式に、1265、1939、2115はⅠ腰内Ⅴ式に比定されると思われる。無文の精製壺である1714、1892は、後期後～末葉と思われる。

〈総括〉 後期後～末葉に見られる壺と思われる。壺 J や壺 M と時期的には並行関係と思われる。

(10) 壺 J

壺 J において、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の 2 種である。

壺 J - I - 1 - b (1602)

壺 J - I - 1 - d (1252、1572)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少である。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で、上げ底状と台付が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 頸～口縁部を無文とし、Ⅱb帯を持ち、主要文様帯はⅡ帯にある点で類似する。1252は、Ⅱb帯に隆起線文、Ⅱ帯に叉状貼瘤が4単位で付加される。1602は、欠損がほとんどない深形品で、Ⅱ帯の文様は3単位で施文され、正立はしない。

〈文様帯の類似する土器群〉 壺Jとした3点は、文様帯に類似性が窺える。

① 1252、1572、1602

〈分類との対比〉 1252は十腰内Ⅳ式、1572は十腰内Ⅴ式、1602は十腰内Ⅳ式に相当すると思われる。

〈総括〉 壺Jに見られる頸部に段を持つ壺は、後期後半期に見られる器形と判断される。個体数は多くない。

(11) 壺K

壺Kにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺K-I-1-c (223)

〈出土数の傾向〉 確認されたのは1点のみである。

〈精製・粗製〉 精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁を尾し、2個一対で4単位に突起が付加される。底部は丸底気味で、底面には円形気味の凹が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 Ⅰ口部には2個一対の貼瘤が4単位、Ⅱ帯に入組み帯状文による樽掛け状のモチーフが描かれる。Ⅱb帯には横状沈線が引かれ、4単位で瘤が充填される。

〈文様帯の類似する土器群〉 Ⅱb帯に貼瘤が付加されることでは、壺J・壺Lと類似性が強い。

〈分類との対比〉 十腰内Ⅳ式の新しい段階に相当すると思われる。

〈総括〉 後期後半期の希少な壺と言える。

(12) 壺L

壺Lにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

壺L-I-1-a (1349、2160)

壺L-I-1-b (1774)

壺L-I-1-d (531、2079)

その他 (400、1690、1844)

〈出土数の傾向〉 資料数は壺類の中では良好と言える。全て壺L-Iに比定されるものである。

〈精製・粗製〉 精製を主体にする。1774は無文の精製である。1349は、唯一の粗製である。

〈口縁部・底部の形態〉 全て平縁である。底部は、平坦、上げ底状、台付が見られる。壺Kに見られた丸底状を呈するものは確認されていない。

〈文様帯・特徴など〉 主要文様帯はⅡ帯をステージとする。頸～口縁部は、基本的に無文を呈するものが多い。異なるのが、1690と2160である。531は、Ⅰ18上坑4号から一括出土したものの一つで、頸部に貼瘤を持ち、Ⅱ帯に入組み帯状文による樽掛け状の文様モチーフが描かれ、文様の起点に4単位で貼瘤を配置する。胴部下半に焼成後に穿たれたと思われる孔があり単孔壺と捉えていたが、Ⅰ18土坑4号の精査を行った

中川によれば、作業時に誤って、ボーリング棒で穿けられた孔である可能性がある。2079は、Ⅱ帯に入組み帯状文による変形連節木葉文を施文する。1690は釣り下げ形態で、釣り手が2単位で付き、Ⅱ帯に入組み帯状文を4単位で施文する。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 531、2079、2160

〈分類との対比〉 2160は十腰内Ⅲ～Ⅳ式、531、2079は十腰内Ⅳ式、1690は十腰内Ⅴ式に相当すると思われる。

〈総括〉 十腰内式との比定関係で捉えれば、後期中葉～末葉にかけて製作された壺と思われる。

(13) 壺M

壺Mにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

壺M-I-1-b (1764)

壺M-I-1-d (530、1510)

〈出土数の傾向〉 資料数は、希少である。全て、壺M-1である。

〈精製・粗製〉 精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 何れも平縁である。底部は上げ底状と台付がある。

〈文様帯・特徴など〉 何れもⅡb帯を持つ。1764は、Ⅱ帯に縦位の楕円文が4単位で施文される。1510は、先鋭貼瘤が2単位で付加され、瘤には孔が穿たれている。Ⅱ帯の文様は浮き彫り状を呈する。530は、I18上坑4号出土で、壺Lに分類した531と共伴関係にある。Ⅱb帯には瘤が付加される。頸～口縁部の無文帯はミガキが施されているが、胴部は粗面のままである。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯に類似性があるものはない。1510は、胴部に貼瘤帯が巡ることは壺Jの1572と類似する。

〈分類との対比〉 530は十腰内Ⅳ式、1510は十腰内Ⅴ式に相当すると思われる。1764は、その文様モチーフが特殊であり、位置付けが難しい。十腰内Ⅴ式と推定しておく。

〈総括〉 後期後半期に位置付けられる壺と判断される。

(14) 壺N

壺Nにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺N-I-1-b (1782)

その他 (2、1628)

〈出土数の傾向〉 資料数は非常に希少である。胴部上半に最大長を持つ。

〈精製・粗製〉 1782は半粗製、1628は粗製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁である。1782は上げ底状である。

〈文様帯・特徴など〉 1782はⅠ帯に帯状文が巡り先鋭貼瘤が付加される。Ⅱa帯は無文で、Ⅱb帯に縦長の貼瘤を付加し、Ⅱ帯は羽状縄文を施文する。1628は頸～口縁部が無文、Ⅱ帯に羽状縄文を施文する。

〈文様帯の類似する土器群〉 資料数が希少で、文様帯の類似性が窺える土器群ではないが、Ⅱ帯に羽状縄文、Ⅱa帯を無文とすることは類似する。

〈分類との対比〉 1782は貼瘤の様相から十腰内Ⅴ式期と思われる。

〈総括〉 資料は希少である。壺Nと同様に、Ⅱ帯を無文帯とするものが多い壺H・I・Qなどの時代的な位置付けについて検討を要しよう。

(15) 壺O

壺Oにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺O-I-1-a (532)

その他 (236)

〈出土数の傾向〉 資料数は非常に希少である。

〈精製・粗製〉 236、532は半粗製の壺である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で、底部は平坦である。

〈文様帯・特徴など〉 口縁部に2cm程の無文帯を持ち、横位沈線によりⅡb帯が区分され、胴部はLRを施文する。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺える資料ではない。

〈分類との対比〉 B21住居跡3号出土の236は、他の土器との共伴関係から大洞B1式に相当する可能性がある。I18土坑4号出土の532は、他の土器との共伴関係から十腰内Ⅳ式、あるいは十腰内Ⅴ式に相当すると思われる。

〈総括〉 壺Oの2点は、時期を判別する特徴的な文様の施文がないものの、何れも遺構内出土であることから、共伴遺物からある程度の時期推定が可能である。本遺跡の資料においては後期後葉～晩期初頭に出現する壺形土器のようである。

(16) 壺P

壺Pにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺P-I-1-a (194)

その他 (96)

〈出土数の傾向〉 資料は非常に希少である。194の他には、口縁部が欠損する96が類似する資料と思われる。

〈精製・粗製〉 194は精製の壺である。96も精製の壺である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で、底部は平坦である。

〈文様帯・特徴など〉 194は、Ⅰ帯に帯状文、Ⅱa帯が無文、Ⅱb帯に短沈線、Ⅱ帯に地文により構成される。

〈文様帯の類似する土器群〉 壺Rとは類似性が強いと思われる。

〈分類との対比〉 194が出土したD19住居跡出土土器との共伴関係から、大洞B～BC式に比定される土器と思われる。

〈総括〉 晩期初頭～前葉に比定される壺形土器と思われる。

(17) 壺Q

壺Qにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

壺Q-I-1-a (267)

壺Q-I-1-b (763)

その他 (150)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少である。267、763はQ-Iに相当することから、器高に最大長を持つ特徴が窺える。

〈精製・粗製〉 267と763は粗製で、150は外面が丹念に磨かれた無文の精製土器である。

〈I縁部・底部の形態〉 平縁で、底部は平坦と上げ底状が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 II a帯を無文とし、II帯は地文を施文する。大きき的には3点とも相異がある。

〈文様帯の類似する土器群〉 口・頸部と胴部を区分することでは類似性が窺える。

〈分類との対比〉 150が出土したE15住居跡出土土器との共伴関係から、人洞B～BC式に比定される土器と思われる。

〈総括〉 晩期初頭～前葉に比定される壺形土器と思われる。

(18) 壺R

壺Rにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器はなく、分類基準の設定ミス感も否めない。

その他 (286、357)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少である。壺Rとしたものは完形品がなく、壺Qとの類似性から平坦と仮定して概念図を作成した。

〈精製・粗製〉 半精製のと言える。

〈I縁部・底部の形態〉 平縁である。底部は不明である。

〈文様帯・特徴など〉 286は、II a帯に丹念なミガキが施され、胴部に7つ孔が穿たれている。

〈文様帯の類似する土器群〉 資料数が希少であるため、類似性については言及ができない。他の器形の壺と比較すれば、壺Pと類似する。

〈分類との対比〉 晩期と推定されるが、明確ではない。

〈総括〉 壺Pと同種に捉えるべき壺であったかもしれない。

(19) 壺S

壺Sにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

壺S-I-1-a (1296、1663)

壺S-I-1-d (1659)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少である。胴部中位に最大長を持つ。

〈精製・粗製〉 3点共に無文の精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 3点ともに平縁である。底部は、1296と1663は平坦である。1659は4つ足が付く。

〈文様帯・特徴など〉 1659はI縁部に沈線が巡る。1296と1663は、頸～口縁部にかけて外反する。1659は、ほぼ直立気味に立ち上がった後に外反する。

〈文様帯の類似する土器群〉 無文の精製壺と言う点では類似性が強い。

〈分類との対比〉 明確には不明であるが、調整の具合などから晩期に属する壺と思われる。

〈総括〉 壺Sの器形の壺は、無文である場合が多いことは言えると思う。無文の壺が見られるのは壺H、壺I、壺S、壺Tである。参考までに、全体の形状までを加味すれば、注I土器の中にも壺Sの器形は存在

しないようである。部分的に見れば胴部中位の張りが大きいことは、算盤形を呈する注口土器に類似すると思われる。

(20) 壺T

壺Tにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

壺T-Ⅰ-Ⅰ-a (1297)

その他 (1709)

<出土数の傾向> 資料は希少である。

<精製・粗製> 2点ともに無文の精製土器である。

<Ⅰ縁部・底部の形態> 2点ともに平縁である。1297の底部は平出である。

<文様帯・特徴など> 2点とも丹念なミガキが施される。1709は、1帯に帯状文が巡る。

<文様帯の類似する土器群> 無文の精製壺と言う点では類似性が強い。

<分類との対比> 明確には不明であるが、調整の具合などから晩期に属する壺と思われる。

<総括> 壺Tは、器形分類上壺Sと分けて捉えたが、同種として扱って差し支えないものであろう。

4 注口土器

底部～Ⅰ縁部までの器形の違いで7種類に区分した後、口径と器高の割合(Ⅰ～Ⅲ)とⅠ縁部の形態(Ⅰ～4)と底部の形態(a～d)を加味して区分した。注口部は、先が上方向を向くものだけである。

(1) 注口土器A

注口土器Aにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

注口土器A-Ⅲ-Ⅰ-a (1322, 1866, 1876)

注口土器A-Ⅲ-Ⅰ-b (1345)

注口土器A-Ⅲ-Ⅰ-d (348)

その他 (1257)

<出土数の傾向> 資料数は普通である。ほとんどが注口土器A-Ⅲで、口径に最大長を持つことを特徴とする。

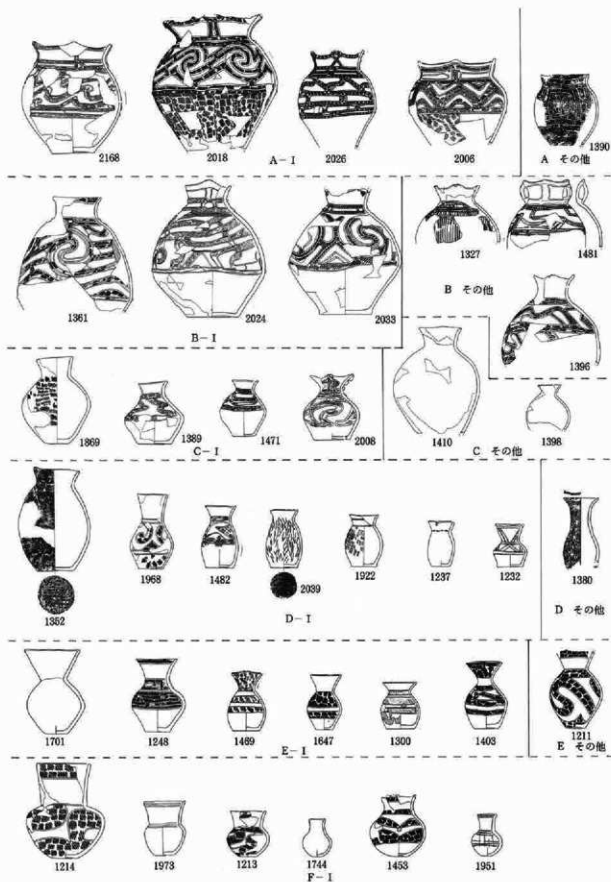
<精製・粗製> 全て精製である。

<Ⅰ縁部・底部の形態> Ⅰ縁部は平縁を主体とし、突起が付加されるものもある。平縁で、底部は平出、上げ底状、台付きである。

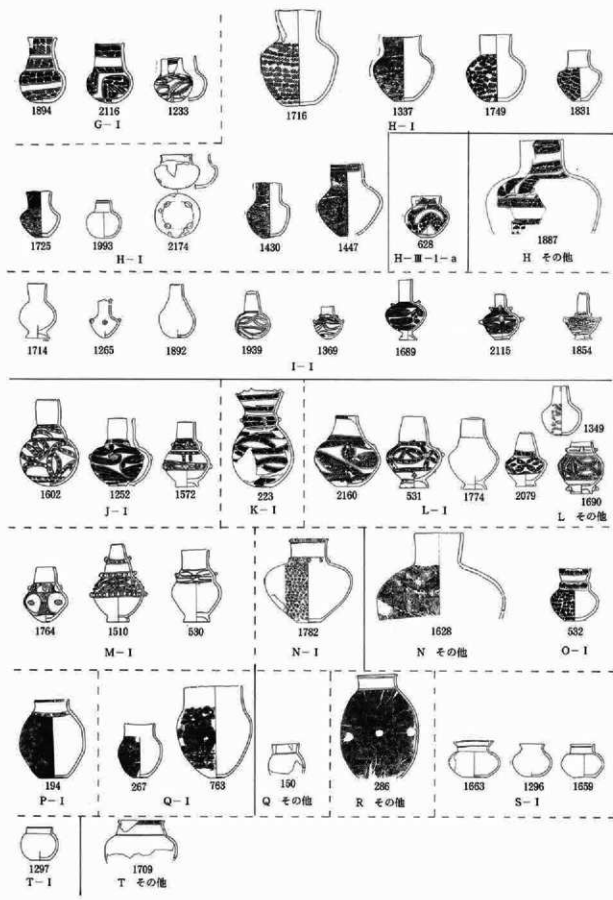
<文様帯・特徴など> 1322, 1345, 1866, 1876は、頸部の括れが強く、口頸部が短い。対して348は頸部の括れが弱く、口頸部が幾分長い。1322, 1345は、Ⅰ縁端と頸部に刻目帯を持つ。1876は頸部にのみ刻目帯を持つ。主要文様帯はⅡ帯で、幅広目の人組み状文によるモチーフが描かれる。文様の施文単位が把握できる1866は、3単位である。1866を除き全て羽状縄文で、1257と1322は異方向縄文である。Ⅱa帯あるいはⅡb帯に無文帯を持つ。

<文様帯の類似する土器群> 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1322, 1876



第425図 土器器形分類図 6



第426図 土器器形分類図 7

② 348、1345、1866

〈分類との対比〉 十腰内Ⅲ式に比定される土器群と思われる。

〈総括〉 時期的には後期中葉に位置付けられると思われる。広口の壺形土器に注口が付けられるもので、壺Fの器形に類似する。

(2) 注口土器B

注口土器Bにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

注口土器B-I-1-a (1338)

注口土器B-I-1-b (1705、1724、1775)

注口土器B-I-2-c (1944)

その他 (1367、2072)

〈出土数の傾向〉 資料数は普通である。注口土器B-Iが主体である。

〈精製・粗製〉 無文の精製が主体となる。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で、底部は平坦、上げ底状、丸底状がある。

〈文様帯・特徴など〉 1944は、Ⅱ帯に入組み状文を施文する。1705は、Ⅱ帯に特殊な文様が施文され、胴部下半は無文となる。1724と1775は、無文で、頸部に段を持つ。

〈文様帯の類似する土器群〉 注口土器Bの中では、文様帯の類似性は窺えない。他の注口土器と比較すれば、1705の文様帯は注口土器Dの1688・1858と類似性がある。1944は、注口土器Aの②の土器群と類似性が窺える。

〈分類との対比〉 施文文様から時期が推定できるのは1944で、十腰内Ⅳ式と思われる。その他は、詳細な時期は不明であるが、概ね後期後半に位置付けられると思われる。

〈総括〉 時期的には、後期後葉～末葉の範疇で捉えられると思われる。文様帯は、注口土器Bや注口土器Dと類似性がある。器形は、壺Hに分類したものに類似する。

(3) 注口土器C

注口土器Cにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の2種である。

注口土器C-I-1-b (1676、1745)

注口土器C-I-1-d (2090)

その他 (497)

〈出土数の傾向〉 資料数は希少である。注口土器C-Iが主体である。

〈精製・粗製〉 無文の精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で、底部は上げ底状と台付がある。

〈文様帯・特徴など〉 497は、Ⅱb帯に微隆線が巡り、縦長貼瘤が付加される。

〈分類との対比〉 497は、縦長貼瘤が付加されることから、後期後～末葉に比定されると思われる。

〈総括〉 497以外は、時期を判別する特徴が弱い。無文の精製帯が多い傾向は、壺Iとの類似性が窺える。

(4) 注口土器D

注口土器Dにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

注I土器D-I-1-a (1688, 1858)

注I土器D-I-1-b (1610, 1796, 1811, 1929, 2124)

注I土器D-I-1-d (1497, 2080)

その他 (1895)

〈出上数の傾向〉 資料数は良好と言える。注I土器D-Iが主体である。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁で突起が付くものが多い。底部は上げ底状を主体に平坦が見られる。

〈文様帯・特徴など〉 II帯を主要文様帯とする。I口縁部に帯状文が巡り、II a帯を無文として、II b帯に帯状文及び貼瘤を付加するものが多い。2080は、II b帯に4単位で瘤が付加され、II帯には3単位で付加されるが注I部を含めると4単位を構成する。II帯の瘤は、文様の起点に付けられていると思われる。1929は、欠損部が全くない完形品で、口唇部に叉状貼瘤が6単位で付加され、II帯には叉状貼瘤が4単位で付加される。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯 (II帯) が胴部下半まで広範囲に展開するものと、胴部中位付近までのものに大別した。

① 1497, 1610, 1796, 1811, 1895, 1929, 2124

② 1688, 1858

〈分類との対比〉 文様モチーフや瘤の様相などで大きくは、十腰内IV式とI腰内V式に大別されると思われ、また両者の過渡期的な位置付けの土器もある。十腰内IV式に比定されると思われる土器群が、1610, 1688, 1796, 1811, 1895である。十腰内V式に比定されると思われる土器群が、1497, 1929, 2080, 2124である。1858は両者の過渡期的な土器と思われる。

〈総括〉 文様帯の類似性で、①と②の土器群に大別したが、十腰内IV式とV式が両者に混在している。

(5) 注I土器E

注I土器Eにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の3種である。

注I土器E-I-1-a (1641, 1755)

注I土器E-I-1-b (1302, 1442, 1555, 1735, 1779, 1836, 2089)

注I土器E-I-1-d (1786)

その他 (395, 1460, 1642, 1703, 1789) 奉底部欠損の1789はE-I。

〈出上数の傾向〉 資料数は良好と言える。全て注I土器E-Iが主体である。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 注I土器Eとしたもので口縁部が残存するものは全て平縁で、口唇部の形状は平坦に面取りを行ったと思われる角状を主体とする。底部は、上げ底状を主体に平坦と台付がある。

〈文様帯・特徴など〉 主要文様帯はII帯となり、胴部中位付近より下は無文となる。II b帯の有無は様々であるが、1302, 1836に見られる上下に先鋭貼瘤帯によって区画され区画内に入り組み状文を施文するのが一般的と思われる。器体全面が無文のものについても、頸部に段が作られていることから、II b帯を意識しているものと思われる。II a帯は、無文あるいは先鋭貼瘤帯が複数巡る。I帯は先鋭貼瘤帯を持つものもあるが、本格的に無文である。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは、①の土器群である。他に無文の器とした②に

ついても類似性が強い。

① 1302、1555、1836

② 1641、1755、1779、1786、2089

〈分類との対比〉 先に第V章で行った分類では十腰内V式に比定させた。全て捨て場出土であることから、他の種類の土器との共伴関係は掴めない。同グリッド・ほぼ同一層から出土したのが、L9グリッドⅢ層下位出土の1779、1786、1789である。その他にも同グリッドであったり、隣接するグリッド同士での出土が多く、出土状況としては比較的多まりが感じとれる。

〈総括〉 後期末葉に製作された壺であることは、ある程度言えると思う。全体の形状は、Ⅱb帯を持つことでは壺J・壺M・壺Oと類似する器形であるが、上記の壺類との相異点として口頸部が外傾気味に立ち上がるものが多い。

(6) 注口土器F

注口土器Fにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

注口土器F-I-1-d (1262)

その他 (221、314、1286、1965、1974、2053)

〈出土数の傾向〉 資料数は良好であるが、個々の残存率が悪く、全体の形状を把握できるものがない。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 口縁が残存する1262は平縁である。底部は台付が主体で、上げ底状、丸底状のものが見られる。

〈文様帯・特徴など〉 主要文様帯はⅡ帯で、胴部中位より下半は無文となる。文様モチーフは加曾利B式の特徴を具備している。全般に胎土が良く光沢が強い。文様の施文単位は、1286は注口部を含めると4単位である。1262は、欄目状沈線による8の字のモチーフが描かれ、口縁部及び胴部中位に刻目帯を持ち、台が付く。時期は加曾利B1式併行期と推定される。2053は、沈線による菱形のモチーフが描かれるが、X字で捉えれば8単位で文様の起点に円形刺突文が見られる。円形刺突文は、文様を割り付けする際の目安的な役割ではないかと推定される。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 221、1262、1286、1965、1974、2053

〈分類との対比〉 十腰内Ⅲ式を主体に、十腰内Ⅱ式と思われるものが含まれる。

〈総括〉 時期的には、全て後期中葉相当の位置付けになると思われる。他地域との関連性を強く感じる土器群が多く、果たして十腰内式と言うべきものか疑問もある。

(7) 注口土器G

注口土器Gにおいて、全体の器形が分かり得る状態の土器は、以下の1種である。

注口土器G-I-1-c (240、1282)

その他 (237、553、1432、1644、1803、1907、2107)

〈出土数の傾向〉 資料数は比較的良好と言えるが、個々の残存率が悪く、全体の形状を把握できるものは希少である。

〈精製・粗製〉 全て精製である。

〈口縁部・底部の形態〉 平縁である。底部は丸底状を主体に台付がある。

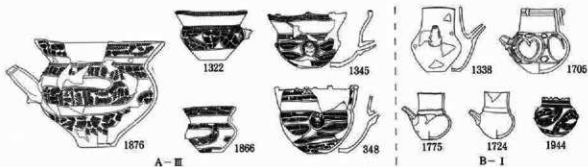
〈文様帯・特徴など〉 II帯を主要文様帯とする。口縁が残存するものが少ないため、II a帯及びII c帯についての傾向は窺い知れない。1282は、口唇部に付加されるB突起が、2個一対のものを2箇所、1個のものを1箇所に見られる。II a帯には4単位で文様がモチーフされる。1432は、器形的に胴部中位が直立気味を呈する器形で、他とは相異なるが文様帯の類似性を優先して注I土器Gに含めた。

〈文様帯の類似する土器群〉 文様帯の類似性が窺えるのは以下の土器群である。

① 1282、1432、2107

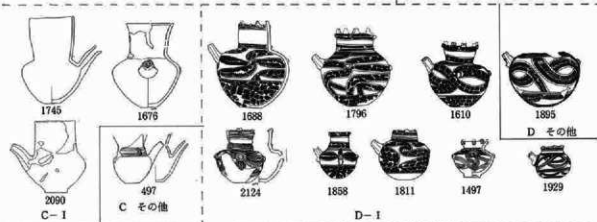
〈分類との対比〉 大洞B～B C式に比定される。

〈総括〉 晩期前葉期に降盛する注I土器と思われる。240の無文の精製注I土器は、頸部に段を持つことでは注I土器Eに見られた無文の精製注I土器である1779、1786、2089との類似性も考えられるが、胴部中位に最大長を持ち、丸底状を呈する点で相異なる。注I土器Gの祖系は、注I土器Eに求められると推定される。



A-III

B-I

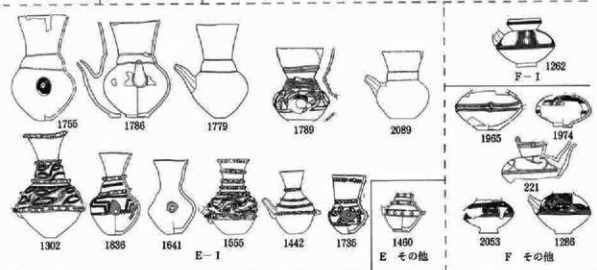


C-I

C その他

D-I

D その他

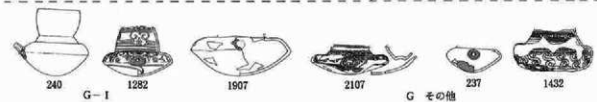


E-I

E その他

F-I

F その他



G-I

G その他

第427図 土器器形分類図 8

5 まとめ

本章では、本遺跡の主体となる後～晩期の土器について、器形と文様帯に視点を置いて該期の土器について若下の分析を行った。後期の土器は、器形的に型式を越えて存続するものと、短期間で消滅する器形があると思われた。ただし、文様帯については、若干の器形変化の後も系統的に受け継がれ、存続する時間幅が文様より幾分長いのではないかと考えられた。文様の諸モチーフの中で、最も変化が著しいと思われるのが後期初頭～前葉期の文様で、同型式内においてもメルクマールが掴みづらい印象を持つ。また、後期中葉期においては関東の加曾利B式の、後期後～末葉においては東北地方北部以外の地域（安行式、新地式など）との関係を匂わす資料が相当数散見されることから、型式学的検討を行うためには改めて本地域以外の土器に対しての見識の必要性を感じた。

本章で行った器形と文様帯を重視した区分は、概ねの時期的な流行を探る目的であれば、ある程度の傾向は掴めると考えられた。ただし、時期細分あるいは型式細分を念頭においた場合、改めて個々の文様に主眼を置いた詳細な分析と属位的上下・共伴関係の追求が重要であろう。問題を棚上げした感が残るが、本章のまとめとして、各時期毎に器形分類の見解を示して終わりとす。

- (1) 後期初頭～前葉に見られる器形 深鉢A、深鉢B、鉢A、鉢B、鉢C、壺A、壺B、壺C、壺D、壺E
- (2) 後期前～中葉に見られる器形 鉢D、鉢E
- (3) 後期中葉に見られる器形 深鉢C、鉢F、注口土器A、注口土器F
- (4) 後期中～後葉に見られる器形 壺F、壺G
- (5) 後期中～末葉に見られる器形 壺L
- (6) 後期中葉～晩期初頭に見られる器形 壺H
- (7) 後期後～末葉に見られる器形 深鉢D、深鉢E、深鉢F、深鉢G、鉢G、鉢H、壺I、壺J、壺K、壺M、壺N、壺O、注口土器B、注口土器C、注口土器D
- (8) 後期末葉に見られる器形 注口土器E
- (9) 後期末葉～晩期初頭に見られる器形 深鉢H
- (10) 晩期初頭～前葉に見られる器形 鉢I、鉢J、壺P、壺Q、壺R、壺S、壺T、注口土器G

第八章 まとめと考察

本章では、本遺跡の主体である縄文時代後期及び晩期の遺構、遺物について、まとめと若干の考察を行う。

1 遺構

本遺跡から検出された遺構は、全て縄文時代後期及び晩期と推定される。各遺構の空間占地を明らかとし、集落の構造や性格付けについて考察してみたい。

(1) 住居跡

住居跡と住居跡状の区分については、第IV章で記述したとおり柱穴や炉の有無で行った。柱穴や炉の無い堅穴を住居と認知できるのかどうかと言った問題があると思う。元々なかったのか、あるいは精査の方法（見つけられなかった）や残存状態（註1）などに起因する可能性も否定はできない。本稿では両者を合わせて居住施設（住居）と仮定して稿を進めることとする。

<時期> 本遺跡で検出されている住居跡は、その所属時期を特定するには状況証拠が弱いと判断される資料であるが、大略は縄文時代後期末葉～晩期前葉と推定されるものが大半を占める。後期前半期の住居跡は、推定されるものを含めて5棟で、殆どが削平を受け完全な形で捉えられるものはない。

住居跡の所属時期については、下記に示したa～fの6つの諸要素を推定材料とした。複数の要素を持つ住居跡も当然のことながら存在する。

a 床面出土土器を伴う住居跡 F18住居跡1号、D19住居跡、B21住居跡状3号の3棟である。床面出土土器を伴う住居跡について、何れも住居廃絶間際まで使用されていた家財道具ではなく、廃絶された後（住居としては使用されなくなった後）に土器が投棄された様相を示す。よって使用されていた時期を推定できる材料ではなく、廃絶後（直後？）の時期推定となろう。例えば、大洞B1式（古）に相当する床面出土土器が得られたB21住居跡状3号の場合は、大洞B1式（古）より古い時期に住居として機能し、その後大洞B1式（古）土器を使う人々が、廃棄場所（捨て場）として土器などを投棄したと捉えられる。ただし、遺構の検出面や状況などから判断して、廃棄された土器と大差ない時期の住居跡と思われる。

b 西部捨て場中に構築されている住居跡 Q12住居跡、K11住居跡の2棟である。Q12住居跡は、掲載した出土土器は後期中葉（I・II期Ⅲ式期）に相当するが、遺物包含層の上位付近から構築されていた可能性が高いことなどから、晩期初頭前後の時期と判断した。

c 東部捨て場中に構築されている住居跡 C22住居跡状1号、C22住居跡状2号、C23住居跡状1号、C23住居跡状2号、B21住居跡状1号、B21住居跡状2号、B21住居跡状3号、B22住居跡1号、B22住居跡2号の9棟である。検出面的に遺物包含層の最上位～上位で検出された住居跡と、中位～下位で検出された住居跡に分かれる。前者が晩期初頭前後の時期、後者は後期前葉前後の時期と推定される。

d 調査区南側に見られる人工的に作り出したと思われる平坦面上（縄文時代晩期の大規模造成？）に立地する住居跡 J12住居跡状、G12住居跡、G14住居跡、E15住居跡状1号・2号の5棟である。この空間からの検出住居は、全般に晩期の土器の出土が圧倒的に多い。人工的に作り出したと思われる平坦面については、(11)の縄文時代の造成工事についての項で説明する。

e 一括性が窺える埋土（覆土）出土土器を伴う住居跡 F12住居跡が挙げられる。同住居跡は、人為堆

積層と判断される埋土で、埋上上位から床面直上まで出土した土器のほとんどが後期末葉の十腰内V式相当である。比較的短時間で埋め戻されたと判断されることから、出土土器に限りなく近い時期に使用された住居跡と推定される。床面山十土器を持つB21住居跡状3号についても同種と判断される。

f 十和田b火山灰が床面直上に堆積していた住居跡 K11住居跡の床面直上からは、十和田b火山灰の堆積が確認された。同住居跡は直径約16mの大形の住居跡で、黒色上中を床面とするため、床面の同定が困難であった。結果的には所々（住居全面ではない）に散在した十和田b火山灰が、床面検出のキーとなった。

十和田b火山灰は、弥生時代後半頃に降下したと捉えられている火山灰であることから、同住居跡は弥生時代後半より古いことはわかる。弥生土器は、同住居跡の床面～埋土では出土しなかったが、同住居跡に伴う可能性のある柱穴から数片出土した。ただし、弥生土器を出土した柱穴は、同住居跡に伴うものか非常に微妙な位置関係にあり、またその柱穴の検出面や覆上からは十和田b火山灰が検出されなかった。更に、木遺跡から出土した弥生土器の総量（10片弱）などを考慮すると、弥生時代の住居跡が存在したとは捉え難い。出土土器の中で主体を占めるのは、大河BC式であることなどから判断して、晩期前葉前後の時期にとりあえず位置付けておくこととする。

g その他 その他として、埋設土器を持つF18住居跡は、炉内に埋設されていた土器が文様のない粗製土器であるため、明確な時期判断材料とはなりえなかった。また、遺構同士の重複関係から概ねの時期を推定した住居跡もあるが、それについての詳細は第IV章の記載を参照いただきたい。

上記の諸要素から時期を推定し、集めたのが第401～405頁である。図の左側に記した時期は、それより古いかあるいは廃絶された直後の時期と捉えて戴きたい。

<規模> 最初に、本篇では住居の開口部における最大長（長軸）の寸法を採用している。本来、どの位の規模の住居跡を大形と定義し、普通規模の住居跡はどのくらいかと言う定義は非常に難しく、安易な基準で結論を出せる問題ではない。

本遺跡で検出された住居跡は、全般的に残存状態が悪いため、床面積などの分析資料には向かない。規模についても厳密には同様であるが、壁の残存部分などから推定される住居跡の大きさと比較検討した結果、8m以上で一線が引けるように思われる。理由として、今回の調査で検出されている住居跡は、6m以上8m以下の規模に該当するものが見当たらず、8m以上の住居跡と6m以下の住居跡によって構成されるからである。

a 大形の住居跡について

8mを超える住居跡としては、推定を含めてK11住居跡、G15住居跡、E19住居跡、C16住居跡2号の4棟である。何れの住居跡にも共通する属性として、平面形は円形もしくは楕円形で、柱穴が多数検出されるなど複数回の立て替えが行われたことが推測される。

また、時期的には後期末葉～晩期前葉に構築されていると推定され、後期前半と思われる住居跡は含まれない。なお、K11住居跡に破壊され一端のみの検出であるJ12住居跡状についても、8m以上の住居跡であった可能性が高い。

b 大形以外（小形と中形）の住居跡について

上記した8mを超える4棟以外は、全て6m以下の住居跡である。大略としては①3m以下、②3～4m、③4～6mの3つのグループに分けられる。①と②は柱穴が未検出のものが多く、地床炉を持つものと持た

ないものの両者がある(割合的には半々)。③は普通小形とは言わない規模である。1例のみで、残存状態が悪いため、傾向を窺い知れる資料と判断できない。

〈**炉の形態**〉 検出された炉の形態は、石囲炉、地床炉、土器埋設炉の3種である。3種とも概ね住居中央付近に位置する。なお今回の調査では、後期前半期の住居跡からは炉が検出されていない。

a **石囲炉** 石囲炉を伴うのは、K11住居跡1棟である。他に単独の炉跡として登録した4基についても、本来は石囲炉を伴う住居跡であった可能性が高い。石囲炉の形状は、円形気味に石を配列する。石囲炉内に見られる焼土は全般に発達が悪い。

b **地床炉** 地床炉を伴う住居跡は9棟である。楕円形気味に広がるものが多い。焼土の発達全般が悪い。焼土の規模については、その住居の規模にも関係すると思うが、24～120cmまでのものが検出されている。詳しくは第4表を参照いただきたい。

c **土器埋設炉** 土器埋設炉を伴う住居跡はF18住居跡1棟である。構築の状況は第IV章を参照いただきたい。

〈**柱穴**〉 柱穴が検出された住居跡と未検出の住居跡がある。傾向としては、晩期初頭に位置付けた小形の住居跡には柱穴がないものが多い。柱穴配列については、本遺跡の資料は全般に良好とはいえない。唯一主柱が推測できるのがK11住居跡(大形の住居)で、4本の柱により正方形に配列される。同住居跡は、柱穴同士の切り合いも確認されることから、柱の建て替えが数回行われていることがわかる。

〈**壁溝・壁柱穴・石列**〉 壁溝を検出した住居跡は3棟であるが、何れも残存状態が悪く不明瞭である。壁溝の一端に小形の柱穴が巡る住居は、8棟検出している。石列が1/4周ほど巡る住居跡は1棟である。

住居跡の規模との関係からみると、3m以下の小形の住居跡には上記の3施設とも見られない。

また、壁溝・壁柱穴・石列とも全周するものはなく、山側(本遺跡では斜面上方は主に南側になる)のみ見られ、谷側(斜面下方は主に北側になる)からは検出されていない。遺構の残存状態の問題もあるが、石列のあり方から、山側のみ構築した可能性は考えられると思う。ただし、壁溝・壁柱穴については、谷側は元々の掘り込み自体が浅く、そのことに起因して検出できなかったかあるいはすでに消失していた可能性も考えられよう。

〈**出入り口施設**〉 出入り口と推定される施設が確認されたのは、K11住居跡、G15住居跡、F18住居跡1号、C16住居跡2号の4棟である。K11住居跡とG15住居跡に見られるタイプは、楕円形基調の土坑状の掘り込みの中に2個一対の柱穴状の掘り込みを伴う。C16住居跡2号は、柱穴状の小土坑2つと楕円形土坑がセットで構成されると考えられるタイプである。F18住居跡1号は、竅穴に張り出し部を持ち、その中に楕円形の掘り込みが2個(両側に並ぶ)見られるタイプである。出入り口施設の方向については、規則性はない。3の総括で後述するが、地形的制約(斜面下方)かあるいは風向きなどの気候環境に関係する可能性が考えられる。

〈**分布状況**〉 先に、竅穴住居跡を居住施設(居住空間)として捉え、稿を進めることをお断りしておく。

後期初頭～前葉期と推定した住居は5棟で、全て東部捨て場中の狭い空間に分布が確認される。

その他25棟は全て後期末葉～晩期前葉期と推定されるが、2つの配列が想定される。

① 北西-南東方向に2列の並列気味な居住空間を構成して分布する。

② 大形住居（K11住居跡）や後述する広場と思われる空間を考慮した場合、大形住居から見て南東側に馬蹄形の配列となる様相。

南側の列は上述してきた人工的に作り出したと思われる平坦面（人規模なテラス）上に立地する。時期特定の根拠の弱さを覆い上げて稿を進めると、大塚としては東側に位置する住居跡群が若干古く、西側に位置する住居跡群が若干新しい様相で捉えられる。また、建て替えが数回行われているK11住居跡、C16住居跡2号、G15住居跡などの大形の住居跡は、その壁穴のスペースが南側かあるいは南西側へ変遷して行く傾向で捉えられる。

上記のことから、居住空間は、大きくは東から西へ移動する様相である。そして比較的規模の大きな住居を建て替える場合は、谷側から山側へ向かって変遷を繰り返す。本遺跡の地形は、南側には山が、東西には斜面地があることで平坦な空間には制約がある。居住空間を西側や山側（南）へ移動することで、希少な平坦な空間を居住とは別の空間として再活用する行為が感じられる。後述する孤立柱建物跡の空間占地と、住居の空間占地が重なることにも何らかの関係があると思われる。

また、風向きや日照条件といった気候環境は、日々の生活に際して、重要な要素となる。高地に所在する本遺跡は、特に冬の風や雪と住居跡の占地は密接な関係があると思われる。

追記として、後期中葉～後葉期と推定される住居跡は、今回の調査では検出されていない。また、土器等の総出土量の割合から考えて、後期の住居の絶対数は非常に少ない。調査区外に存在するのか、あるいは晩期の遺構（土に住居跡や孤立柱建物跡などが該当する）構築時に破壊されたか課題を提供するものである。

＜総括と他遺跡の事例との比較＞ 本遺跡で検出された住居跡についてまとめると、時期は後期末葉～晩期前葉期を主体とする。該期の住居跡は、地床跡が大半を占め、右側は単独で炉跡としたもの4基を含めても5棟と少ない。人形住居跡の定義付けの問題を考える目的で、該期の住居跡の事例を求めて見たが、岩手県内の資料だけでは分析対象となる事例が希少と言える。よって、青森県の代表的な事例を含めて比較検討を試みる。合わせて、本遺跡で主体を占める後期末葉期と晩期初頭～前葉期の住居について、大きく2分してまとめてみたい。

後期末葉期の住居跡について、土器型式で十腰内IV～V式期に比定される時期であるが、十腰内IV式と十腰内V式の捉え方（同定法）によってもその位置付けは変わると思われるので、ここでは後葉（概ね霜が盛行する時期以降）まで時期幅を広げて検索する。晩期の住居跡については、大洞B式～BC式期に比定される住居跡を探索した。厳密に言えば大洞B1式前後の時期（大洞B1式古段階の時期）については、後期・晩期何れに含めるか見解が難しい部分である。今回は晩期の上限を広げて捉えることとする。

①後期後葉～末葉期の住居跡 該期の住居跡を検出した遺跡は、「是川中居遺跡」（青森県八戸市）、「丹後谷地遺跡」（青森県八戸市）、「馬場瀬（1）遺跡」（青森県南郷村）、「大日向Ⅱ遺跡1次調査・2～5次調査」（岩手県軽米町）、「馬場野Ⅱ遺跡」（岩手県軽米町）、「君成田Ⅳ遺跡」（岩手県軽米町）、「小井田Ⅳ遺跡」（岩手県一戸町）などが挙げられよう。

「是川中居遺跡」（1998年）で検出された5号住居跡は、十腰内V式期に捉えられる住居跡である。平面形はほぼ円形、規模は約6mである。住居中央付近に地床跡を伴う。支柱は4本を基本とし、壁際に小形の柱穴が並ぶ。

「馬場瀬(1)遺跡」で検出された住居跡は、平面形は円形で、住居中央に地床炉を持ち、柱穴が未検出のものが多いようである。時期は十腰内Ⅳ式期(本稿では一部十腰内Ⅴ式に比定させた時期)に相当する。

「馬場野Ⅱ遺跡」は、現在の東北縦貫道路の軽米インターの付近に相当する。該期住居跡が多数検出されたが、床面山上上器を伴うLⅣ-05住居址、LⅣ-06住居址、LⅣ-08住居址を取り上げる。この3棟に共通する属性としては、平面形は円形で、住居中央付近に地床炉を持ち、壁際に小形の柱穴が巡る。また出入り口に関連したと思われる2個一対の長楕円形の土坑を伴う。規模は、LⅣ-06住居址が4.2m程、LⅣ-05住居址とLⅣ-08住居址が5.0m程で、若干相違がある。時期は、何れも十腰内Ⅳ～Ⅴ式に比定されると思われる。

「大日向Ⅱ遺跡」は、上記した「馬場野Ⅱ遺跡」から見て東へ500m強に位置する遺跡である。調査報告書は、1次調査・2～5次調査・6～8次調査毎に発行されている。その中で該期の住居跡資料が豊富なものが、1次調査分と2～5次調査分である。検出された住居跡は、平面形は円形で、住居中央付近に炉を持ち、壁際に小形の柱穴を伴うことでは「馬場野Ⅱ遺跡」と共通する属性を示す。炉の形態としては、地床炉を主体とするが、石囲炉を持つものも存在する。石囲炉は1次調査で検出したHⅠ-6住居跡やIⅡ-3住居跡などに見られる。また、IⅡ-3住居跡には「馬場野Ⅱ遺跡」に見られるものと類似する出入り口施設を伴う。

後期後葉～末葉の住居跡の全般的な傾向をまとめると、規模的には3～6mで平均的な大きさとしては3.5～4mに相当するタイプが多いようである。晩期との相違点としては、10mを超える特出して大形な住居跡の事例は見当たらなかった(筆者が探せなかっただけかもしれない)。炉の位置としては、住居ほぼ中央である場合が多い。炉の形態は地床炉を主体とするが、一部石囲炉も散見される。石囲炉は円形気味に石を配列されるタイプが多いようであるが、「君成田Ⅳ遺跡」などに見られるような「C字状」に石を配列する(一端部分に石が配置されない)ものもある。柱穴配列は不明瞭であるものが多く、柱穴数も少ないものが多いように思われた。傾向として、壁際に小形の柱穴が巡るタイプが多いように思われる。残存状態や検出の問題もあると思われるが、上屋構造が不明である以上、柱穴配列の傾向を探るのは、非常に困難と思われた。全資料を扱うより、明確に柱穴を検出できた良好な住居例のみをピックアップするなどの操作が必要なのかもしれない。出入り口施設について、2個一対の長楕円形の土坑を伴う住居跡は相当数見られる。出入り口施設自体は、「田面木平遺跡」(後期前葉期)、「川口Ⅱ遺跡」(後期中葉期)、「神明町遺跡」(後期中葉)、「丹後谷地遺跡」(後期中葉～末葉期)などでも検出されていることから、後期後半期に限った属性ではない。参考までに、本遺跡で出入り口施設を伴う住居跡としては、KⅡ住居跡(晩期前葉期)、G15住居跡(後期末葉～晩期初頭期)、F18住居跡1号(晩期初頭～前葉期)、C16住居跡2号(晩期前葉期)の4棟で、時期幅を広く捉えたG15住居跡(後期末葉～晩期初頭)以外は晩期初頭以降に属し、また規模的に大きめの住居跡に見られる。ただし、上記した後期の遺跡例をみると、3.5m程の住居跡にも出入り口施設は伴う。本遺跡に見られる出入り口施設のタイプは、2個一対の長楕円形の土坑が並ぶタイプではない。タイプの違いは、本遺跡例が晩期であることから、時期による流行の違いや構造上の問題などが考えられると思う。構造上の問題については柱配置や炉の偏在する方向などと関連する可能性があるため、上述したとおり柱穴配列が比較的明瞭な住居跡を取り上げて検討する必要があると思うが、ここでは割愛する。このタイプの出入り口施設の出現期及び存続時期については、今回は検討しなかった。出入り口施設を伴う住居跡資料の増加に期待する。

②晩期初頭～前葉の住居跡 晩期初頭～前葉期の住居跡について、土器型式で大洞B式～大洞BC式に比

定される住居跡を模索してみた。該期の住居跡の事例としては、「曲田Ⅰ遺跡」（岩手県安代町）、「道地Ⅲ遺跡」（岩手県九戸村）、「十腰内（Ⅰ）遺跡」（青森県弘前市1999年）、「大森勝山遺跡」（青森県弘前市）、「源常平遺跡」（青森県浪岡町）、「駒板遺跡」（岩手県軽米町）などで検出されている。岩手県北部の事例で言うと、該期土器を出土した遺跡は相当数散見できるものの、住居跡を検出した遺跡となると希少と言える。

幾つかの事例を取り上げ、住居跡の平面形、規模、炉の形態などをまとめてみたい。

「曲田Ⅰ遺跡」 該期の住居跡は、推定を含めて57棟（住居総数は69棟で、晩期以外には中期や後期が含まれる）が検出されている。晩期前葉期が検出された調査事例（遺跡）としては、最大級の検出数と思われる。平面形は、概ね円形を呈し、規模は推定であるものが多いが、大形（7～13m）・中形（4～6m）・小形（1.9～3.5m）に大別される。中形が多いようである。

炉は住居中央に位置するタイプが多く、地床炉、石囲炉、石囲埋甕炉、土器片囲炉、埋甕炉があり、地床炉が主体のようである。柱穴は全般に検出されているものが多い。

規模13mの人の住居跡であるGⅢ-016住居跡は、住居中央に石囲炉を持ち、主柱は4本で壁際に小柱穴が通る。床の凹凸が激しく、床面の比高が1mほどあるなど傾斜が著しい。時期は立て替えが多く、明確ではないようであるが、上限（古い方）は大洞B式期と推定している。本遺跡で検出されたK11住居跡に類似する資料と言える。集落のほぼ中央に位置することから、居住者全体に関わる施設ではないかと推定されている。

「道地Ⅲ遺跡」からは、晩期の住居跡は7棟（他に中期2棟）検出されており、大洞B式期が5棟、大洞C2式期が2棟である。また、3棟検出されている住居址状遺構の中で、FⅡ-1住居址状遺構についても該期の住居跡の可能性がある。よって、6棟が当該期と思われる。

該期の住居跡と思われる6棟は、平面形は全て円形を呈し、規模は3m程が2棟（1棟は住居址状遺構）、4m±40cmが3棟、6m前後が2棟である。規模から見て、大形住居跡と認知できるものは検出されていない。炉は住居中央部に位置し、石囲炉4、地床炉1、炉を伴わないものが1である。石囲炉は、円形に石を配置され、同遺跡から検出された中期住居跡などと比較すると、顕著にその配列の違いがわかる。柱穴は全般に検出されているが、その柱配置には規則性は感じられない。大洞B式期の住居跡は、出土土器などから見て本遺跡で主体を占める住居跡と同時期に同定できよう。ただし、相違点としては石囲炉を伴う住居跡が多い点が挙げられる。

「十腰内（Ⅰ）遺跡」（1999年）からは、2棟の住居跡が検出されている。大洞B式期1棟、大洞B式期1棟である。平面形は2棟共に円形である。規模は、第1号住居跡（大洞B式期）は約15m、第3号住居跡（大洞B式期）は約13mである（2号住居跡と命名された遺構は掲載されていない）。第3号住居跡については、規模や主柱穴・壁柱穴の配列のあり方などは、本遺跡で検出されたK11住居跡と類似するタイプと言える。報告書のみを限り、集落の一端を調査したに過ぎず、大形住居の性格付けを示唆する資料とは言えない。

晩期初頭～前葉期の住居跡の全般的な傾向をまとめると、規模的には10mを越えるタイプと3m前後の小形のタイプが存立する場合が多いようであり、該期の集落における大形の住居跡の存在理由が明確となろう。ただし、本遺跡に見られた大形住居跡は、その位置関係から推定して、集落の拠点的な性格の住居跡である可能性が高いと思われる。

大形の住居跡について、「十腰内（Ⅰ）遺跡」、「曲田Ⅰ遺跡」、「大森勝山遺跡」、「源常平遺跡」で見つかった住居跡は、その形状、炉の位置、柱穴のあり方など類似する部分が多い。炉の形態は、「十腰内（Ⅰ）

遺跡」、「曲田Ⅰ遺跡」、「大森勝山遺跡」及び本遺跡が石囲炉で、「源常平遺跡」が地床炉である。若干の時期差なども考慮しなければならぬと思うが、該期の大形の住居跡は、基本的に石囲炉を持つようである。

小形の住居跡については、円形を主体とし、基本的に中央に炉が位置する。柱穴については、全般に配列が不明か未検出が多い。本遺跡の住居跡を見ると、竪穴の床面から柱穴が未検出の場合が多い。黒色土中を床面とするため、検出できなかった可能性もある。上層構造が不明であるため明確にはわからないが、屋外柱穴の存在も考慮する必要がある。炉の形態は、石囲炉、地床炉の両者を主体に、石囲埋設土器などが見られる。石囲炉に使用されている個々の炉石は、中期の炉石などと比較して、選ばれたと思われる形の不規則な石が使用される場合が多い。炉の形態について、他遺跡の類別から若干の時期差によって石囲が、地床炉のどちらが多いかの傾向が窺えるように思われた。推測の域を越えるものではないが、土器型式で言えば大洞B1式期は地床炉主体、大洞B2式期は石囲炉主体と思われる。大洞B2式期は両者が共存するようであるが、若し地床炉の方が優勢のように筆者は捉えている。

上述したとおり、大形の住居跡は石囲炉が多い傾向に窺えるが、小形の住居跡の炉においては「まちまち」であるように思われた。また大形住居跡の性格付けについては、個々の事例同士での比較からだけではわからないように思われた。遺跡保存の理念に反するかもしれないが、集落の全貌がある程度明らかとなった事例は「曲田Ⅰ遺跡」などの少数に留まることから、比較検討する資料の増加を待つことになると思われる。

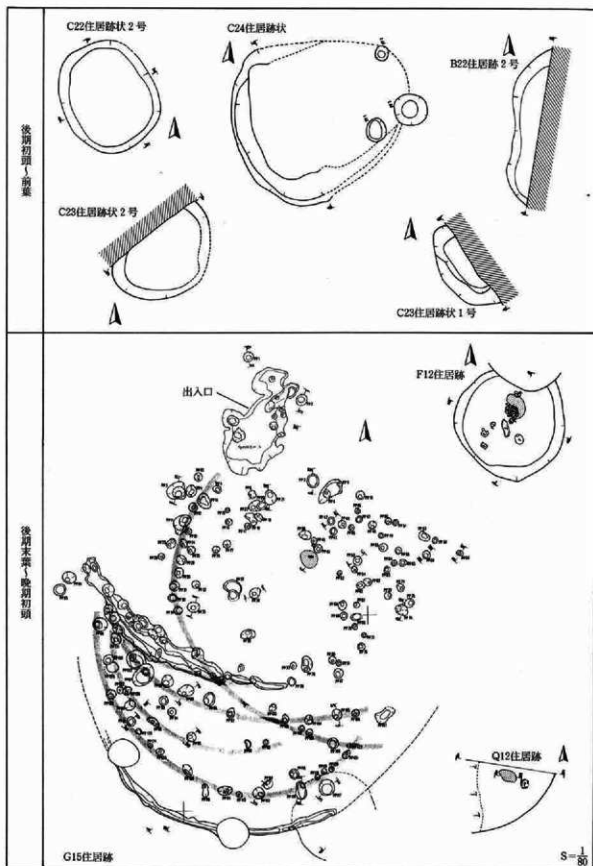
今回取り上げた遺跡は、土器型式的には大洞B式～大洞B2式に比定され、本遺跡と同時期に捉えられる。

地域的には、主要河川を指標とすれば、馬淵川流域遺跡と岩木川流域遺跡に分かれる。若干の地域差を考慮する必要があるが、極端な地域差（色）は存在しないように思われた。若干古資料ではあるが、高橋興右衛門氏が「川向Ⅲ遺跡」の調査報告書の中で「岩手県における縄文時代晩期住居跡の検出遺跡」として集めている。昭和56年段階での資料でまとめたものであるが、それによると岩手県内で晩期の住居跡が検出された遺跡数は17例である。その中で、本稿で取り上げた晩期初頭～前葉に相当する遺跡数は6遺跡ある。それから約20年を経過した現在の遺跡数がどの位あるものか今回は検索できなかった。比較的最近の事例としては、北上～秋田間の高遠道路関連で調査された「本内Ⅱ遺跡」（岩手県涌田町）や「虫内Ⅰ遺跡」（秋田県山内村）などから該期の住居跡が検出されている。該期における北上川流域の遺跡や沿岸部の遺跡との比較を今後の課題としたい。

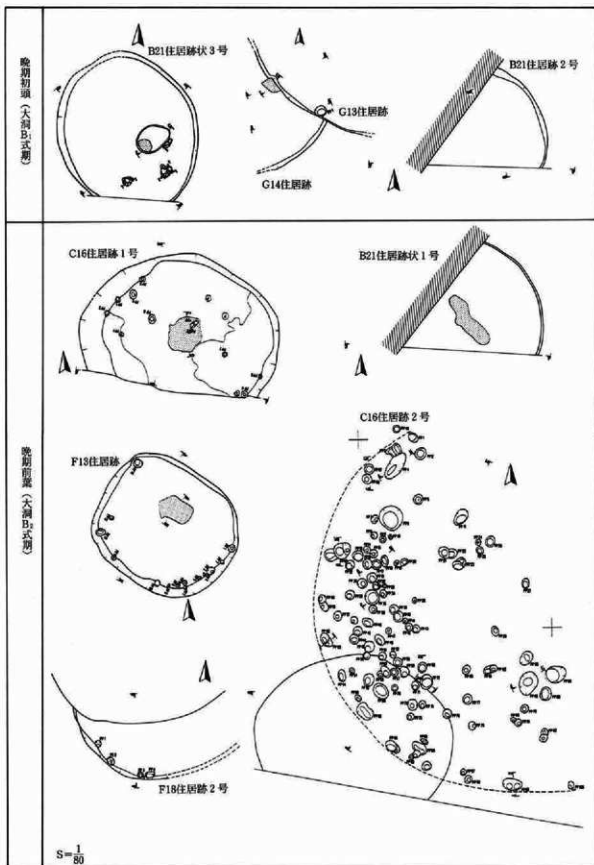
最後に、本稿では主に住居の形、規模、柱、炉の位置などについて検討した。基本的に炉や柱穴が存在しない竪穴を住居跡と認知できるのか疑問点が残った。また、本遺跡においては全般に地床炉と捉えた焼土は発達が悪く、常時使用した炉とは考え難く、定住用の住居ではない可能性を推定する（註2）。また、本遺跡の大形の住居については、幾つかの疑問点が残った。一つには竪穴が存在したかどうか。もう一つは、上層構造の存在である。8mを越える人形の住居跡の上層構造を支えるためには、ある程度しっかりした柱を必要とするはずである。黒色土中のため全般に検出が不明瞭である本遺跡の資料からは、柱穴の場所や規模からのアプローチでは当時の竪穴住居の構造を解明するのに限界があるように思われた。考古学資料を基に、「御所野遺跡」などで取り入れているように建築学などのタイアップから竪穴住居跡の構造復元を行う必要性を感じた。

（2）掘立柱建物跡・柱穴状土坑

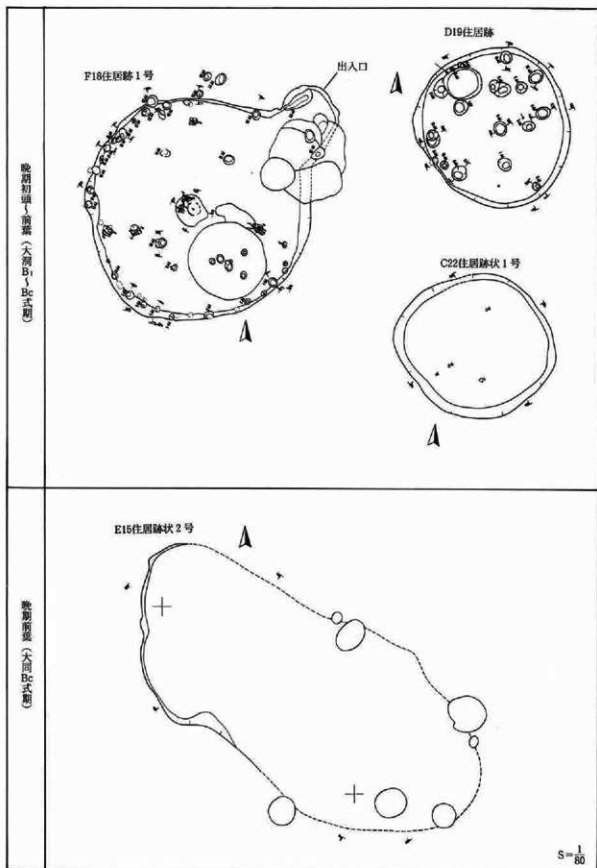
本遺跡で掘立柱建物跡としたものは、柱穴間隔や平面形から判断したもので、検出数は15棟である。住居跡に付随する柱穴と比較して、掘立柱建物跡に採用した柱穴は、開口部径・底部径ともに大きく、柱穴深度



第428図 長倉 I 遺跡住居跡集成図 1

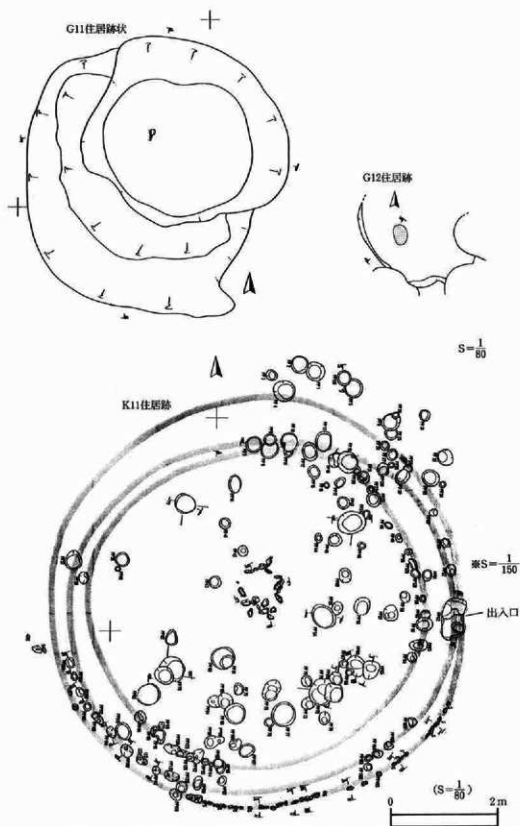


第429図 長倉I遺跡住居跡集成図2

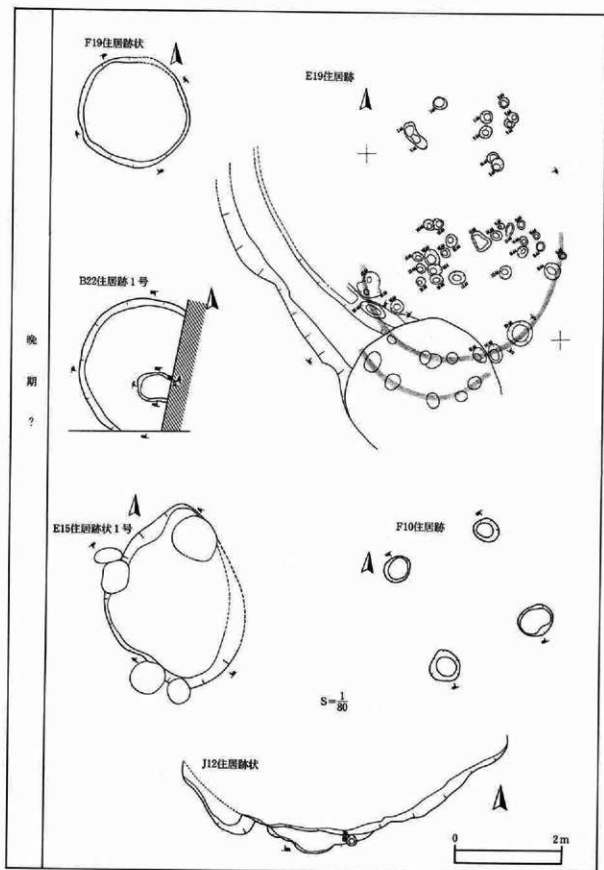


第430図 長倉1遺跡住居跡集成図3

晩期前葉（大洞Bc式期）



第431図 長倉I遺跡住居跡集成図4



第432図 長倉I遺跡住居跡集成図5

も特出して深い。柱材の残存は検出されなかったことから、当時柱が据えられていたことを断言はできない。ただし、アタリのあり方から見て、柱が据えられていた可能性は極めて高いと捉えている。ここでは柱が据えられていたと仮定して稿を進める。

4本柱(14棟)により構成されるものと6本柱(1棟)により構成されるものがある。野外調査時には把握できずに室内整理時に図面上で検討、合成したものも含めている。4本柱や6本柱の組み合わせ以外で構成される掘立柱建物跡について、具体的には5本や環状に配するものなどであるが、その存在については可能性はあると思われるが解明できなかった。

石井寛氏は論文の中で、「掘立柱建物跡とするのは、平地式ないしは高床式の建物を指すが、現実にはそれらの判断は非常に難しく、本来堅穴であったものも相当数含まれている可能性がある。」(石井寛1995年)と述べている。調査所見として、筆者もその記述を今もって痛感している。例えば、K11大形住居跡精査中に検出された4本柱(K12掘立柱建物跡2号としたM12柱穴状土坑1号・M14柱穴状土坑1号・L12柱穴状土坑1号・L14柱穴状土坑1号の4基)は、同住居跡に伴うもの(主柱)か単独の掘立柱建物跡なのか明確には立証できなかった(遺構・図而上は両者二重に登録した)。本稿を執筆している現段階での見解としては、K11住居跡の主柱の可能性が高かったと考えている。

なお、焼土や浅い掘り込み(堅穴)を伴うなどの、居住施設であった可能性を示唆する資料は、今回の調査では検出されていない。

〈柱穴の規模〉 平均すると開口部径で80~100cmが多い。柱穴の深度(深さ)については、検出面の問題もあるが、最大のもので200cm、平均的には80~120cmが多い。

〈柱穴間隔〉 今回の調査からは、2.6~6.5mの柱穴間隔のものが検出されている。縄文尺(35cm)の存在などについても、検討をいじりたい事象ではあるが、今回は割愛する。

〈柱痕跡から推測する柱の規模について〉 当時の柱材の規模は、柱痕跡と思われる土層(アタリ)から推測を試みる。

15棟検出された中で、アタリが確認できる柱穴数は20基である。アタリの太さは、最小のもので約40cm、最大のもので約80cm、平均すると約60cmである。柱穴の底面には、柱の重圧によって土(更新世の火山灰層)が変色したと推定される部分や堅くしまっている部分が見られる。

また、個々のアタリを観察すると、柱が抜き取られた後に据え方部分の土が入り込んだと思われるものや、柱が抜き取られた後にその部分を埋め戻したと思われるものなど、その在り方は様々である。

〈付属施設的土坑について〉 本遺跡で検出された柱穴状土坑には、一方向の開口部付近に浅い楕円形気味の掘り込みを伴う場合が顕著に見られた。推測される事象としては、柱材を抜き取るかあるいは柱材を据える時の痕跡と考えられる。柱穴状土坑との新旧関係は、その土層断面からは判断の難しい場合が多く、一様ではないが、浅い掘り込みの方が新しいと判断した場合が多かった。断言できるものではないが、柱は抜き取られた場合が多いと推定される。柱を抜き取る場合について、その方向は一様ではないが、傾向としては北東側に多い様相である。遺跡の地形的特徴から言って、掘立柱建物跡の検出が多かった調査区中央部は全般的に北東方向の標高が低い場合が多い。よって標高的に、低い方向に抜き取ったことが推定される。

〈その他の柱穴状土坑〉 柱穴状土坑同士の位置関係などから、掘立柱建物跡とは認定できかねる柱穴状土坑は、約400基ある。何れも住居跡や建物跡に関連すると思われる。

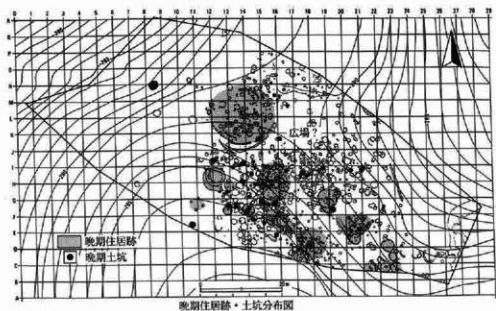
〈時期〉 掘立柱建物跡の所属時期を断定できる出土状態を示した遺物はない。遺構との重複関係としては、後期と推定される十坑群より新しいことは確実である。晩期初頭～前葉（大洞B式～BC式期）の住居跡との関係は、住居跡より新しいことを確認できる場合が多い。ただし、調査区の中央付近に位置する大形住居（K11住居跡）との新旧関係については、重複するK12掘立柱建物跡1号より新しいことがわかる（柱穴の切り合い関係から）。同じく重複関係にあるK12掘立柱建物跡2号と大形住居跡との新旧関係についても、大形住居跡が新しいと思われるが、上述したとおり同掘立柱建物跡は大形住居跡の主柱の可能性が高い。

掘立柱建物跡については、厳密には時期を特定できない。住居跡などとの重複関係や大洞B式以降の土器の出土が皆無（大洞C1式が数点と弥生土器と思われる破片が微量出土したのみである）である状況を考慮すると、縄文時代晩期前葉の大洞BC式期に盛んに構築されたと推定される。

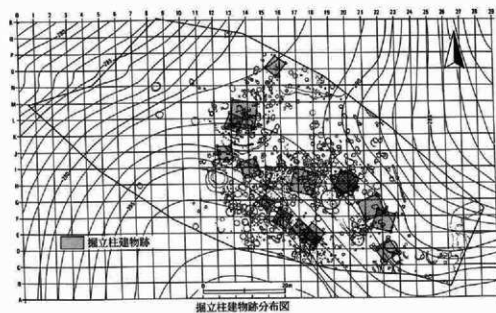
〈分布状況〉 第433図に示した掘立柱建物跡の分布図を見ると、空間占地は環状に点在するなどのなにかしらの規則性を持って分布するようには捉えられない。中央広場的な空間（晩期の遺構が存在しない空間で、K16・K17・L16・L17グリッドを中心とする付近）と思われるK11住居跡（大形住居跡）の東側付近を除き、アトランダムに分布する状況である。細部を考慮して分布を考えれば、「a」調査区中央部に、広場の外（北側）を時計回りに弧状（南東から北へ）に分布するように見える流れと、「b」反時計回りで広場を背にして（広場を北側に見て）半円状（南東から西へ）に分布するように見える流れの2つの分布状況に見えなくもない。調査区東側には東部捨て場のある斜面地が所在する関係で、調査区外北側に「a」の分布の流れが続いた場合、馬蹄形に分布する可能性はあると思うが、環状気味に分布する可能性は考え難い。調査区外北側に延びる可能性を横断する位置にあるのが、K12掘立柱建物跡2号とN15掘立柱建物跡である。K12掘立柱建物跡2号については、復唱となるが大形住居跡の主柱の可能性が高いと判断される。N15掘立柱建物跡については、他の掘立柱建物跡と比較して柱穴の規模、特に深さが極端に浅い。N11掘立柱建物跡は、野外調査時ではなく室内作業時に凶面上から掘立柱建物跡と認定したものである。この2つの掘立柱建物跡を除外し、大形住居と広場を構成要素に加えた場合、以下のことが推測できると思う。

① 始点を最も東側に位置するC21掘立柱建物跡に求め、終点をD16掘立柱建物跡2号にして馬蹄形の分布が考えられる。上述した分布で捉えると、大形住居は馬蹄形の先端に、広場は馬蹄形の北に位置する関係となる。大形住居の出入り口は、住居の東側に構築されていることから、ほぼ馬蹄形の先端と広場の中心付近に位置することとなる。第433図の上段の晩期住居跡分布図を見るとおり、空間占地が重なる傾向が明らかに窺え、偶発的とは思われない分布を示す。住居跡の分布で上述したとおり、住居跡は大きく捉えて東から西に空間占地を変えて行く。掘立柱建物跡を構築するスペースを確保するために、空間が変遷して行くと言う構図が推定される。

② 掘立柱建物跡の時期の細分が不可能なことからあくまで推測の域を越えないが、晩期住居跡の空間の変遷を考慮すると、東側に所在する掘立柱建物跡と西側・南側に所在する掘立柱建物跡では、多少の時期差が存在する可能性が考えられる。掘立柱建物跡を構築するスペースを確保するために、居住空間が変遷して行くと言う構図が推定されなくもない。掘立柱建物跡の用途や性格及び土層構造の存在自体が不明であるため、住居跡との関係をどう捉えたらよいか非常に難しい問題である。仮説として、掘立柱建物跡が居住施設以



晚期住居跡・土坑分布圖



獨立柱建物跡分布圖

第433圖 晚期住居跡・晚期土坑・獨立柱建物跡分布圖

外の用途の遺構であるならば、晩期初頭～前葉期まで居住空間として住居跡が所在していた空間が、突如他の要素の空間（高床の倉庫、祭司場 etc.）に変わった（変えた？）のであろうか。あるいは、掘立柱建物跡が居住施設と仮定するならば、住居施設が竪穴から掘立柱建物に変化したなどの事象も考えられるであろうか。ただし、上述したとおり掘立柱建物跡が生活の場であった可能性を示唆する付属施設（例えば掘立柱建物跡に伴う竪土遺構など）は、一切検出されていない。

③ 本遺跡の住居としたものが、居住施設ではなく、掘立柱建物跡と同様の性格の遺構であるのなら、空間占地が同じであっても不思議ではない。

3つの仮説を上述してきたが、結局結論は導けない。追記として、同じ空間内で軸線を変えて建て替えられている掘立柱建物跡が数カ所見られること、南側のテラス上の掘立柱建物跡の中に6本で構成されるものがあること、そしてテラス上に立地する掘立柱建物跡が若干小形であることも、性格や用途及び集落構造を考える上で考慮すべき要素と取れる。

<他遺跡の事例について> 掘立柱建物跡を検出した遺跡は見られるが、構築時期の特定が難しい遺構であるため、本遺跡と同時期（晩期前葉期と推定）となると捜索が難しい。住居跡の項で記した遺跡の中では、「大日向Ⅱ遺跡2～5次調査」21棟（後期後葉）、「曲田Ⅰ遺跡」3棟、「十腰内（1）遺跡」1棟を検出している。また、後期初頭の「寺久保遺跡」からは、5本で構成されるものも見つかっている。

他の遺構との重複関係から時期の下限や上限がわかる資料や単一に近い時期の遺跡資料などの増加に期待することとなると思う。

（3）炉跡

4基検出される。何れも東部捨て場内の遺物包含層中に構築されている。

状況から判断して、検出面・構築面共に黒色土中であるため検出できなかった竪穴住居跡の可能性が高いと思われる。野外調査時は、壁を検出できなかった竪穴住居跡と想定して、石囲炉周辺で柱穴の検出を試みた。検出されなかったため単独の炉跡とした経緯がある。本遺跡で検出された住居跡・住居跡状を見ると、竪穴内から柱穴が検出されなかったものが相当数散見されることから、竪穴住居跡であった可能性は充分考えられる。

時期について、大略的に捉えれば全て晩期と推定される。炉石を円形気味に配置することからも、晩期に多い形態であり、矛盾はないと思われる。

竪穴住居跡であった可能性を前提に稿を進めれば、本遺跡で検出された住居跡は、石囲炉を持たないため（石囲炉を持つのはK11住居跡1棟のみで、大洞BC式期と推定される大形の住居である）、若干の時期差が存在する可能性が考えられる。炉跡4基の検出面は、全般に遺物包含層上位であるため、時期は晩期の中でも新しい時期の可能性として捉えられる。また炉跡を検出した付近から検出された地床炉を持つ住居跡は、晩期初頭と推定されることから、根拠の弱さを棚上げして言うなら晩期前葉期の竪穴住居跡であった可能性が考えられる。

（4）焼土

東部捨て場で検出された中で、現地性と判断される6基を焼土遺構として認知した。屋外炉的な性格であ

る遺構の可能性と捨て場に伴うなんらかの性格を有する遺構である可能性を示唆する資料である。

第IV章で上述したとおり、東西の捨て場中からは、投げ込みによる焼土が多数検出された。今回の調査では、遺物の取り上げに重点を置いたこともあいまって軽視した経緯があり、検討するに十分な精査記録もない。当センターにおいて、近年の調査事例の中で縄文時代の大規模な捨て場が検出された藤沢町「相の沢遺跡」や一関市「清水遺跡」などの状況を見ると、やはり捨て場内に比較的大規模な焼土が散見されるようである。本遺跡の場合も本来これらの焼土は、捨て場の形成になんらかの関係があった可能性も考えられる。焼土遺構を軽視したのは、本遺跡の調査における反省点として踏まえた。

(5) 土坑

今回の調査からは、452基を検出した。

<検出状況・残存状態> 上部が削平を受けているものが多い。

<平面形> 円形、楕円形に大別され、円形が多い。

<断面形> 断面形は、フラスコ、ピーカー、皿状を呈する土坑に分かれる。ピーカー状を呈する土坑類が主体である。皿状を呈する土坑についても、上部が破壊を受けている状況などから判断して、本来ピーカー状であった可能性があろう。

<規模> 最大で開口部径255cm、底部径220cm、深さ187cmである。最小のものは開口部径20cmほどである。平均的には、開口部径100cm、底部径95cm、深さ60～80cmの大きさのものが多い。柱状土坑などとの重複が激しく、著しく破壊を受けている土坑が多い。

<埋土の様相> 検出されている土坑は、ほとんどが人為堆積と判断され、自然堆積と思われるものは少数である。

<用途(性格)> 明確ではないものがほとんどであるが、墓塚、貯蔵穴、ゴミ捨て穴、土取り穴(粘土採掘穴?)の各用途が推定されよう。

ゴミ捨て穴と思われる土坑は幾つか見られる。遺物の出土状況から判断して、一括投棄された可能性がある土坑もある。列記するとC17土坑(晩期初頭)、E26土坑(後期末葉)、F12土坑1号(晩期初頭～前葉)、L14土坑2号(後期初頭～前葉)、I17土坑8号(後期後葉)、I18土坑4号(後期末葉)、L16土坑1号(晩期前葉)、I12柱状土坑11号(晩期)などが挙げられる。特にI18土坑4号からは、完形の壺が3個体出土しており、あるいは捨てられたものではなく、供えられたものかもしれない(出土状況からは判断できなかったが、墓塚の可能性も考えられよう)。

その他については、推測の域を越えないが、断面形がフラスコを呈するものが貯蔵穴、平面形が楕円形を呈するものが墓塚と推定して置く。

<時期> 全般に遺物の出土が少なく、また使用時期の同定ができ得る遺物出土状況を示す土坑が少ない。他の遺構との重複関係から時期を推定すると、晩期と推定される住居跡・掘立柱建物跡・柱状土坑などに載られている土坑が多いことから、晩期よりは古い時期に構築されている土坑が多いことは明確である。状況(遺跡から出土した土器の量など)から推定して、大部分の土坑は後期に構築したと推定される。後期と推定される土坑は、ほとんどが人為堆積であるため、上記した晩期の遺構構築の際に大規模な造成工事(埋め戻しを行い整地)を行っていると考えられる。つまりは後期において、土坑域としていた空間を住居域や掘立柱建物域あるいは広場?とするため、土坑群を埋め戻したと捉えられる。

なお、晩期と推定される土坑は41基で、後期に比べ極端に少ないが、遺物を伴う場合が多い。これらは、

遺物の投棄後に自然埋没したと思われるものが多い。

〈分布状況〉 全般的傾向としては、調査区中央平坦部から東西の斜面部にかけて住居跡等と共に検出される場合が多い。ただし、細部まで考慮すると、東側斜面部の下方に1基、西側斜面部に5基それぞれ単独で検出される土坑がある。西側にある2基を除き、何れも開口部径・底部径共に大きく、検出面からかなり深いと言う特徴がある。

また、一部分ではあるが、平坦部の中にも土坑が検出されないエリア（広場？）がある。

全般に時期の同定が困難な場合が多いことから、推定の域は越えないが、とりあえず後期と晩期に時期区分を行った上で空間分布を述べることにする。

後期の土坑は、基本的にランダムに分布するが、J15・J16・J17・K15・K16・K17・L15・L16・L17グリッド付近からの検出数が極端に少ない。上記したグリッドの東側に土坑群は密集する傾向が窺える。安易な判断かもしれないが、土坑構築が忌避されている空白域は、広場の空間ではなかったかと推定される。

晩期の土坑は、K16グリッド付近を中心地と仮定して捉えた場合、大形住居跡の北東側～東側には作られていない。この空間は、後期の土坑構築が行われていない空間と一部共有する。推定される事象としては、後期同様広場の空間を構成するため、土坑を作らなかったことなどが考えられる。晩期の土坑の空間分布（土坑域）は、占地が広範囲的な様相であることから、晩期の集落構造を考える上で重要な要素を提供すると思われる。

（6）柱穴列

南東～北西方向に延びる遺構で、性格・用途及び時期についても不明である。第IV章で上記したとおり、遺物包含層中に構築されていることから晩期前葉期あるいはそれ以降の遺構であることはわかる。埋土の様相としては現代の遺構とは捉えられなかった。

用途について、溝の底面から6基の柱穴が検出されていることから推定して、溝内に柱が据えられていた可能性は考えられる。両側共に途切れることも興味深い事象である。斜面を切るような位置に所在することから、平坦部と斜面部を区画する施設であろうか。また、風を回避するような施設であるならば、風が頻繁に吹く方向に相当する西側や南西側に作るのが自然であろう。

（7）集石・立石

集石はE19住居跡のため押し作業時に検出されたことから晩期以前と捉えている。遺構の性格などは不明である。密集する角礫と混在して後期の土器片が出土している状況から推定して、意図的に石を集めた遺構ではなく、なにかしらの事象で生じた礫が不要となったため、一方所にまとめて投棄したものではないかと推定する。

立石は調査区北側において、全長8m程の範囲に、長さ1m、幅60cm、厚さ20～40cmの扁平な粘板岩が7個検出された。これらの石の下位からは、土坑は見つかっていない。配列的には半環状気味に捉えられるが、環状的に調査区外に延びる可能性は充分考えられる。本遺構の調査区外北側付近の等高線の分布を見る限り、平坦地が広がった後に高地になる様相であるため、あるいは大規模な配列をなす配石遺構である可能性も考えられよう。時期は後～晩期の可能性が高いことは言えると思うが、詳細な時期は不明である。

（8）溝状遺構

堅穴状に掘り込まれた平面形が溝状の遺構である。性格・用途は不明である。時期は晩期と推定される。第IV章で上述したとおり、フレーク・チップ類が散在していた状況から考えて、石器工房などに関わる施設ではないかと推定している。ただし、状況証拠が弱く、推測の域は越えない。

(9) 捨て場

東西の斜面部が捨て場として形成されている。遺物の出土量は、東西合わせて500箱分以上となる。野外調査時においては、全般的に特殊性を示唆する遺物廃棄の様相は認められず、土器類、土製品、石器類は混在した状態で出土している。土器などの出土状態や接合具合を見ると、一括廃棄されたと判断されるものが多く、完形品やほぼ完形品の状態にまで復元されたものが多い。時期的な廃棄の傾向について、東西の捨て場を比較した場合、後期前半期は東部捨て場が主体を占めるが、十腰内V式期あたりから西部捨て場が主体となる。十器出土状況を網的に見た場合、時期的なまとまりの関係について概略すれば、東部捨て場より西部捨て場の方が、全般に他時期との混在が少ない様相ではある。斜面の傾斜角度は、西部捨て場（約15度前後）の方が東部捨て場（約25度前後）より幾分穏やかであることに起因して、本来の廃棄単位の破壊が少くないのかもしれない。遺物の接合状況について、整理作業をおこなった結果から、基本的に近隣グリッド出土同士で接合する場面が多い。ただし第VI章で上述したとおり、土偶や磨製石斧、石刀・石剣の中に東西の捨て場同士で接合したものが数例あり、距離にして70m以上となる。これらの遺物の出土地を見ると、西部捨て場側はL12・M9・M11グリッド、東部捨て場側はB24・C23・C24・C26・E25グリッドで、それぞれ若干の違いはあるものの、近接した出土地と言える。これらの遺物は、以下の2つの要因が考えられる。

① 別々に廃棄された可能性。

② 一次廃棄場が存在し、二次廃棄場が東西の斜面地である可能性。

②の要因であるならば、土器などその他の遺物の中にも同様の状況（70m離れて接合）を示すものがあると思われることから、①の要因が有力であると推定しておく。ただし、上記の3種の遺物のみ一次廃棄された後に、二次廃棄された可能性が理論上は考えられることから、あるいは3種の遺物に特別な意味（性格）がある可能性も考えられる。

その他として、遺物包含層中には現地産ではない焼土や灰・獣骨などが散見された。焼土の項で上記したとおり、捨て場の形成になんらかの関係があるのかもしれない。また、出土した獣骨の中で注目すべき点として、イノシシの未成熟個体が多いと言う結果がある。縄文人は一般に子供の獣（イノシシなど）は食べないと言う分析結果を示した事例があることから、そこには特別な意味が隠されているように思う。

(10) 広場について

土坑の項でも触れたJ15・J16・J17・K15・K16・K17・L15・L16・L17グリッド付近の空間が、本遺跡の広場的空間である可能性が考えられる。広場（遺構）は、非常に抽象的な内容であるため、その認知は難しいと言える。安易に結論付けられる内容ではないが、遺構の空間占地から集落構造を考えた時、広場の存在を想像することができる。

広場と想定されるのは、人形住居の東側に位置する空間で、土坑が構築されていないかあるいは希薄なエリアであり、住居跡や孤立建物跡などの構築も見られない。立石遺構は、この広場と思われる空間の北側に位置する。周辺の土坑の密集度を考えたときに、この空間のみ遺構構築が行われていない事実は、特別な場であった可能性が限りなく高いと推定されよう。また、調査所見として、この付近は本遺跡の中でも風当

たりが特に強く、風を遮るような施設を設けない限り、居住空間には向かないと考えられる。

(11) 縄文時代の造成工事について

本遺跡からは縄文人による人工的に作り出したと思われる平坦面や土坑城の整地化など、大規模な土木工事が行われていることを示唆する内容が幾つか見られる。それら十の移動行為について、調査所見から列記し、まとめてみる。

造成工事として捉えられる内容としては、下記の3つの事象が考えられる。

a 人工的に作り出したと思われる平坦面

調査区南側（山側）の斜面地部分において、テラス状に作り出したと想定される平坦面（以後テラスと呼称して記述する）で、住居跡群や掘立柱建物跡群が立地する。

現況地形での標高が295～296m付近に見られた全長約30m、幅4～6m程の空間で、旧地形（自然地形）は山側（南側）から平坦地にかけてスロープ状の斜面であったと想定される。地形的に見てこの付近からは、南部浮石粒層の堆積が確認されるべき地点であるが、表上を除去した段階で八戸火山灰層が直に確認された（住居跡は八戸火山灰層中を掘り込み構築されている）。自然地形的に見て不自然であり、またこのテラスから検出された土坑の状況は、ほとんどが南部浮石粒と八戸火山灰層がブロック的に入る人為堆積層（埋め戻されている）で、全般に上部が破壊されている様相である。

上記のことから推定すると、南部浮石粒層付近までを削平して平坦化した空間を作り出したと思われる、その際に、土坑は削平を受けたと捉えられる。このテラス造成にかかわり、削平時に生じた排土を利用して、斜面部に所在した土坑類や調査区中央部の平坦地に所在した土坑類は埋め戻されたと推定される。地形の様相は写真図版24や174から、土坑類の埋土が人為堆積であることは各土坑の断面写真から、それぞれ読み取れると思うので参照いただきたい。

このテラスの造成された時期については、晩期と推定される。理由として、この空間からの検出住居は、全般に晩期の土器の出土が圧倒的に多い。

b 土坑類の整地化

本遺跡で検出された土坑類は、全般に人為堆積と判断される場合が多く、特にI18グリッド付近を中心に所在する土坑群はその傾向が顕著である。上述したaに関係する内容であるが、土坑を埋め戻した後に住居跡及び掘立柱建物跡が構築されている（註3）。なお、本遺跡で検出された土坑を埋め戻すためには、平均すると1基あたり約0.785㎡の土量が必要となるため、計算上膨大な土量が必要とする。参考までに野外調査時に使用した一輪車1台には、0.08～0.1㎡前後の土量が入ることから、土坑1基を埋めるのに一輪車8台前後の土量が必要となる。

c 平坦地の拡張

本遺跡の立地する地形は、南北側が高く（南側が山の頂部で、北側は先端部付近から高位となる）、東西が斜面地となる南北方向に長い覆せ尾根的である。平坦面的空間には限りがあり、遺構構築に際して地形的に制約を受ける。抽象的な内容となるが、東西の斜面地に形成されている捨て場は、単なるゴミ捨て場としてではなく、平地の拡張を促進することを念頭において、ある程度の計画性のもとに行われている可能性が

考えられる。

第VI章で上述した遺物の分布状況から、東西の斜面地に形成された捨て場への土器の廃棄量は、若干ではあるが時期による違いを確認できる。十腰内I～Ⅲ式の時期は、東部捨て場を廃棄地の主体とし、十腰内IV式の時期は東西捨て場にほぼ均等廃棄、十腰内V式～大洞BC式の時期においては西部捨て場が主体となる。

上記のことから、時期的に東部捨て場が西部捨て場に先行して、埋め立ての目的地となり、廃棄地の主体であったと言う捉え方もできる。住居跡や孤立柱建物跡などの遺構構築時期についても、東部捨て場に所在する遺構が、西部捨て場に立地する大形住居など(註4)より古期であることから、当初東側から集落(遺構構築)が形成されていったという解釈が成り立つと思う。

〈註〉

(註1) 炉については、石囲炉であれば炉石の抜き取り行為が行われた可能性は念頭に入れて、精査時にはその痕跡を探したつもりである。地床があれば、発達の悪い焼土が多かったとは言え、確認できなかったとは思えない。屋外炉の存在については、明確ではないが現地性の焼土遺構にその存在の可能性が示唆される。柱穴について、炉が検出されている壘穴でありながら、柱穴の存在が明らかでないものは、本遺跡に限らず該期の住居、特に2～3mの小形に見られるように思う。屋外に柱穴の存在があったのか、あるいは発掘調査ではなかなか検出できない周壁部分にあったのであろうか。本遺跡は全般に黒色土中での精査であったことから検出が難しい調査であったことは事実である。調査員の力量(主担当の中川の調査途中でのケガによる入院などにより、頻りに調査員の変更があった)やその数の問題も勿論あるものの、作業に従事した作業員はかつて馬場野II遺跡や大日向II遺跡など同行で行われた代表的な発掘調査に参加してきた精鋭ぞろいである。見落としが頻りにあったとは思われない。筆者の見解として、B21住居跡状3号などは炉石の存在した可能性を匂わせるものの、壘穴内には炉も柱穴も実際になかったのではないかと推定する。炉や柱穴の検出できなかった壘穴は、本来別枠で掘え、居住以外の施設・用途を考えるべきなのかもしれない。

(註2) 具体的には、定住するための住居ではなく、季節的な住居ではないだろうか。

(註3) 住居跡と孤立柱建物跡が空間的に重なる場合は、孤立柱建物跡が新しい場合が多い。よって、遺構毎の構築順の傾向としては、古い方から土坑→住居→孤立柱建物となる。但し、住居跡の時期推定となる土器の時間尺を、本書では示したとは言えない。特に、後期終末から晩期初頭の土器は、検討課題を残したと思っている。

(註4) K11住居跡とした約16mの大形の住居跡は、プランの西半分程が遺物包含層中の範囲に構築されている。

〈参考文献〉

石井寛(1995年)「縄文時代孤立柱建物址に関する諸論議」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集』帝京大学山梨文化財研究所

その他参照した遺跡報告書は、後記する。

2 遺物

3年間の調査で出土した遺物の総量は、大コンテナに換算すると約600箱分である。

土器類はコンテナに換算すると約550箱分、土製品は2,320点、石器・石製品は5,380点（フレイク・チップなどは除く）出土している。台帳に登録した遺物総数は11,104点（第一次登録段階の点数）である（掲載遺物はセレクトを行った第三次登録段階となる）。そのほとんどが東西の斜面地に形成された捨て場からの出土である。上述してきたとおり主体となる時期は、縄文時代後期初頭から晩期前葉である。その他の時期としては、縄文時代早期及び弥生時代の土器が微量と縄文時代前期末葉の土器が大コンテナ5箱分ほど出土している。

遺物の種類毎に若干のまとめを行う。

(1) 各群土器の概要

第V章で示した分類に従って各群の土器について概略する。

①第I群土器（早期）

貝殻腹線文を施文する土器で、破片が数点出土している。器種は全て深鉢で、吹切沢式、寺の沢式などに相当するものが出土している。第449図の集成図を参照戴きたい。

②第II群土器（前期） 長七谷地3群に相当する土器が数点と円筒下層d1～2式に相当する土器が5箱分程出土している。第449図の集成図を参照戴きたい。

円筒下層式に先行する土器群で、いわゆる長七谷地3群に相当する土器群は、小片が数点出土した。本遺跡で出土している円筒下層d式と比較すると、胎上中の植物繊維の混入量が多く、特徴の一つと言える。他の遺跡の出土例を見ると、中殿火山灰より古い時期に相当すると捉えられる土器である。今回の調査では後～晩期の遺物包含層（Ⅲ層）やⅢ層とⅣ層の漸移層部分から出土している。

円筒下層d1～d2式に相当する土器群は、主に東部捨て場のⅢ層下位～Ⅳ層上位で出土している。器種は深鉢と鉢の2種類があり、深鉢はさらに大形のもの和小形のものに大別される（小形は希少）。I線部に押圧縄文、胴部に第1種結束による羽状縄文施文を基調とする。最近の当センターの調査事例としては、「大日向Ⅱ遺跡」（軽米町）から円筒下層a～d式期の住居群が、「大鳥Ⅰ遺跡」（軽米町）と「横間Ⅱ遺跡」（安代町）から円筒下層式期の捨て場が検出されている。また、本遺跡から北約1.5kmに位置する「畑内遺跡」（青森県南郷村）からは、円筒下層期の大規模な集落跡が検出されている。

③第III群土器（後期）

本遺跡で主体を成す後期の土器は、そのほとんどが捨て場（遺物包含層）からの出土で、遺構内出土は小片が主体であり割合的には少い。捨て場出土土器は、継続的変遷が辿れる資料と判断されるが、一部関係性を掴める出土状況を示した以外は、層位的上下関係を掴める資料は存在しないと判断される。本遺跡出土土器にある程度の時間尺を設定するため、他遺跡の資料や構築された土器編年を参照して分類を行った。若手県北部地方において、該期の土器が出土した遺跡は相当数あり、資料の増加は著しいが、1遺跡から後期全般を網羅する指標となるような資料、例えば該期の貝塚調査事例（報告書が刊行されているのは「根井貝塚」くらいで極小のようである）や層位的に良好と判断できる事例はほとんど見当たらない。よって、指標的な資料の主体は、青森県の該期の遺跡に求めることとした。最近の土器内式土器編年についての研究動向（註1）を踏まえ、本遺跡出土土器群に見られる特徴をまとめてみたい。土器の時間的な変遷の大勢として、

第V章でおこなった分類毎に集成したのが、第450～479図である。集成図と観察表の時期区分のくい違いがあるものについては、観察表を優先する。比較資料として、馬淵川流域における該期の代表的な遺跡の土器資料を掲載した。中葉期については、良好な資料が少ないことから、北上川流域の遺跡資料も加えた。

第Ⅲ群1類

本遺跡で主体を占める後期土器の中で後～末葉に次いで出土量が多いのが、第Ⅲ群1類とした初頭～前葉の土器群である。本遺跡出土の当該期土器の器種構成は、深鉢、鉢、壺を主体に注口土器、片口鉢、切断蓋付き壺が少数見られる。

第V章で行った分類では、第Ⅲ群1類-1が十腰内I式の古い部分と思われる土器群、第Ⅲ群1類-2が十腰内I式の新しい部分と思われる土器群、第Ⅲ群1類-3が十腰内I式とⅡ式の漸移的部分に位置付けられると思われる土器群とし、3つに大別を行った。上記の分類にあたっては、鈴木克彦氏が行った上尾較2遺跡出土土器による「十腰内I式の細分案」（註2）を参照して、第Ⅲ群1類-1と第Ⅲ群1類-2に区分し、十腰内Ⅱ式により近似する特徴のものを第Ⅲ群1類-3として区分を試みた。おおよそ鈴木編年案1～3段階（十腰内1a式）が第Ⅲ群1類-1、4～5段階（十腰内1b式）が第Ⅲ群1類-2に比定する（註3）。比較資料として当該期の資料が豊富な「駒板遺跡（軽米町）」、「田面木平遺跡（八戸市）」、「赤坂A遺跡（鹿角市）」の出土土器を第434～437図に掲載した。概ね第Ⅲ群1類-1が「駒板遺跡」出土土器、第Ⅲ群1類-2が「田面木平遺跡」出土土器、第Ⅲ群1類-3が「赤坂A遺跡」出土土器との類似を認識し、比較資料とした。ただし、「赤坂A遺跡」出土土器については、本遺跡から50km以上離れた距離に位置し、大湯式との折衷圏と思われる位置に所在することから、単純に比較資料とするのは安易であるかもしれない。

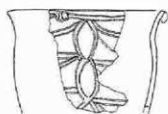
十腰内I式の古い部分として位置付けを行った第Ⅲ群1類-1については、十腰内I式の最も古い部分と古い部分の土器群の2時期を併せて一括した分類結果となったと筆者は判断している。何処で線を引くか基準が曖昧であった（判断できなかった）ことに起因する。当初、本遺跡出土の後期初頭～前葉土器には、十腰内I式に先行する所謂「堂沢遺跡」第Ⅲ群土器相当（堂沢式）が存在しないと捉えていた。第450～451図に掲載した第Ⅲ群1類-1土器群の集成図を作成後、鈴木氏が十腰内I式以前の型式を設定し得る纏まった資料として提示した「馬立I遺跡」（二戸市）第Ⅳ群1～3類土器との比較を行った所見として、本遺跡の土器群の中にも十腰内I式に先行する土器群が存在することに気が付いた（「馬立I遺跡」出土土器が十腰内I式に先行する土器群と捉えた場合）。例えば、626、1202、2012（集成図には掲載していない）などの土器で、三角形の沈線区画文及びモチーフが「コ」の字を向き合わせにしたようなものなどの文様が描かれる。これらの土器は、「馬立I遺跡」出土土器に近い様相であり、近年当センターで発掘調査を行った「上村遺跡」（二戸市）、「秋浦I遺跡」、「秋浦Ⅱ遺跡」（岩手町）からも同様な土器群が出土している。

また、1248などに代表されるように報告書作成の最後まで難渋した土器が多く、集成図と観察表の時期が食い違っている土器が多々ある。筆者の現段階の見解としては、観察表を優先して載きたい。

第Ⅲ群2類

十腰内Ⅱ式に相当すると思われる土器群を第Ⅲ群2類-1に、十腰内Ⅱ式と十腰内Ⅲ式のどちらに含まれるのか判断ができればなるものを第Ⅲ群2類-2とした。全般に関東の加賀利B式の影響が窺える土器群と言える。基本的には曲線的な磨消縄文を主要なモチーフとする。比較資料とした第438図上段の「川口Ⅱ遺跡」（岩手町）出土土器は、第Ⅲ群2類-2～第Ⅲ群3類との比較を意識して掲載している。第Ⅲ群2類-2土器群は、全般に第Ⅲ群2類-1土器群より後出的な要素を持っていると判断した。

本遺跡の後期土器の中では、最も少ない出土量で、この現象は本遺跡に限ったことではなく、馬淵川流域



III E 88-1 住床面



III F 90-2 住床面



III J 90-3 住床面



床面



埋土

III E 90 住

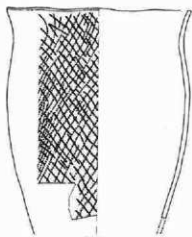


埋土

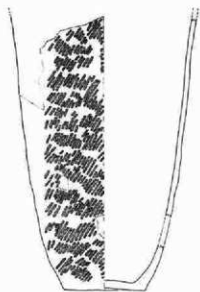


床面

III H 91 住



埋土

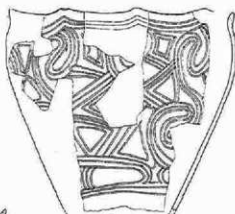


床面



床面

IV A 92 住
駒板遺跡

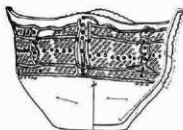
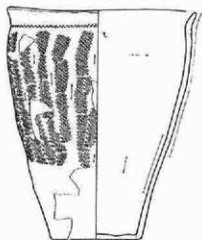
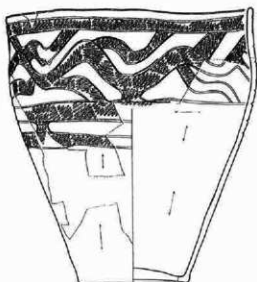
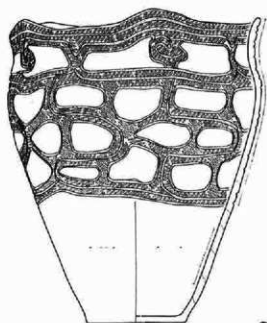


埋土

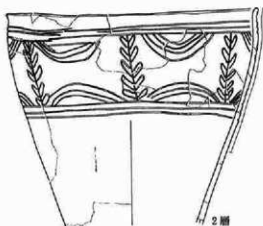


埋土

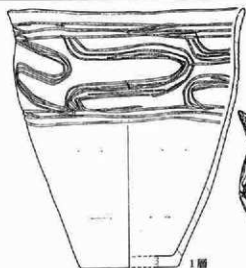
第434圖 駒板遺跡出土土器



4号整穴住厨鉢 (床面)



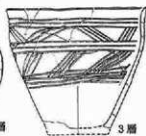
2期



1期



1期



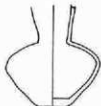
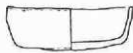
3期



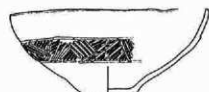
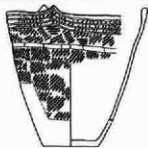
3期

10号整穴住厨鉢

第436图 田面木平遺跡出土土器 1



S113 罍穴住居跡

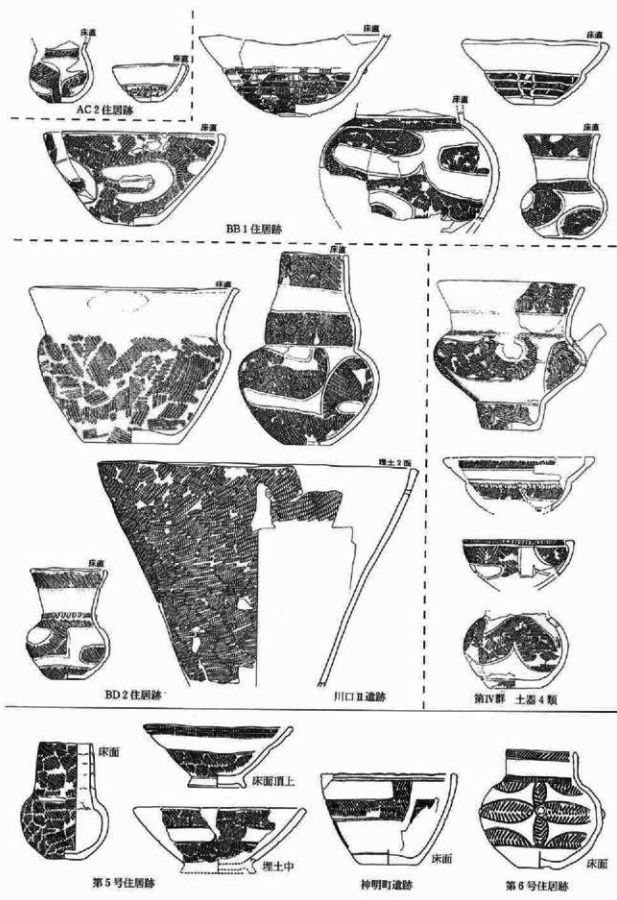


S114 罍穴住居跡

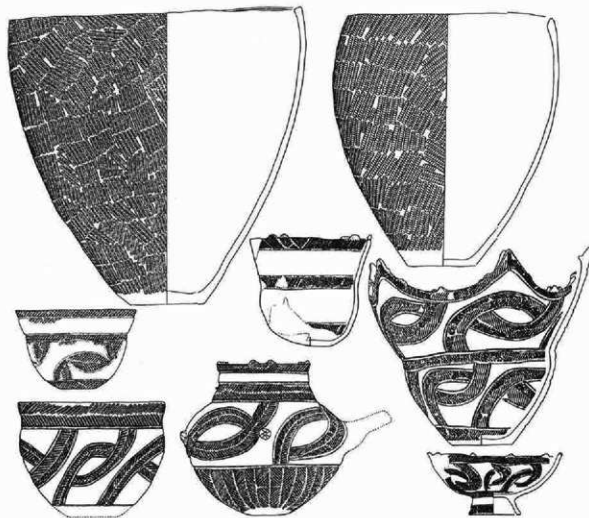
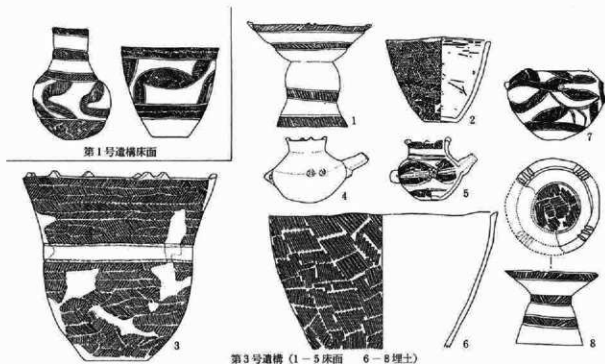
赤坂A遺跡

S117 罍穴住居跡

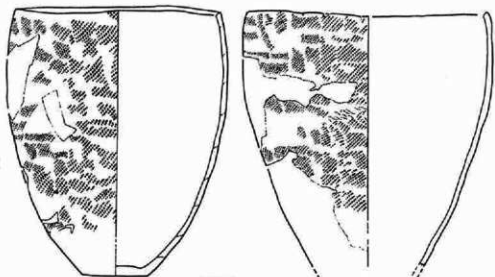
第437圖 赤坂A遺跡出土土器



第438图 川口II・神明町遺跡出土土器



第439图 馬場瀬 (1) 遺跡出土土器

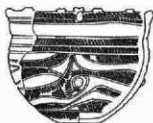


LIV06住

床面



1層



床面

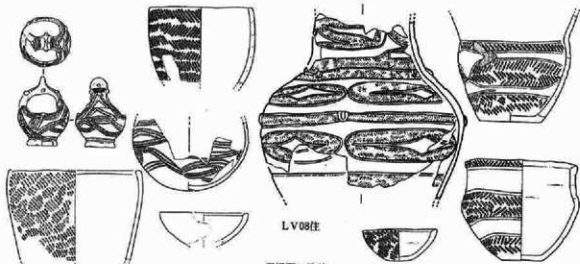


1層



床面

LIV06住

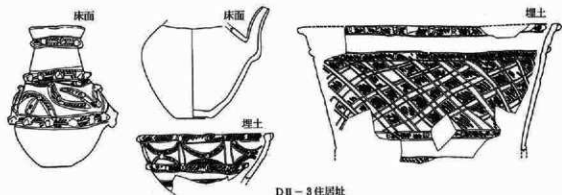


LIV08住

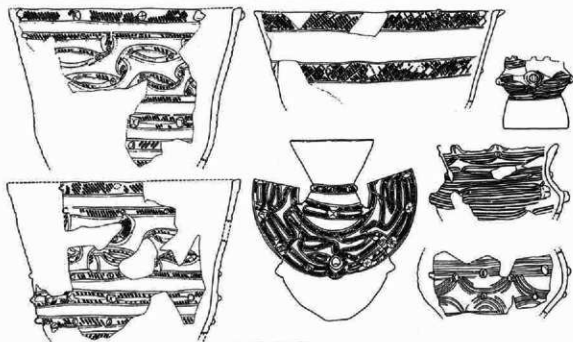
馬場野II遺跡

床面

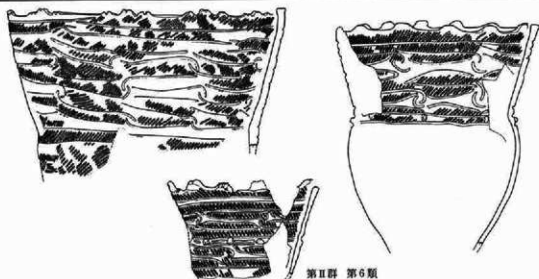
第440図 馬場野II遺跡出土土器



DII-3住居址



第II群 第5類



第II群 第6類

第441圖 小井田IV遺跡出土土器

全体的に言える傾向と捉えられる。

第Ⅲ群 3類

後期中葉の土器群で、加曾利B₂~B₃式の影響が窺える土器群であり、十腰内式に比定させれば十腰内Ⅲ式に相当すると思われる。比較資料として「神明町遺跡」(青森県金木町)出土土器を第438図下段に掲載した。本稿においては、第Ⅲ群 3類土器の大きな特徴として、①「1種の原体による羽状縄文」、②「口縁部上方や頸部に見られる刻日帯」、③「光沢が強く感じる研磨手法が施される」の3点に着眼した。

①について、羽状縄文を施文する土器の中で、1種類の縄文原体を異方向に転がして施文するいわゆる異方向縄文の割合は、約15%である。参考までに十腰内Ⅳ式では約6%、十腰内Ⅴ式では約18%であった。2種類の原体を施文するものよりかなり低い割合を示した。メルクマールとして捉えるのは不適切ではないだろうか。ただし、十腰内Ⅳ式との区分については、ある程度の目安になると思われる。

②について、加曾利B 3式に顕著に見られる特徴で、複数段のものも見られる。十腰内Ⅲ式とⅣ式の過渡期的と思われる1345が、十腰内Ⅲ式に位置付けできるのであれば、十腰内Ⅳ式には通常見られない特徴と判断できないでもないが、結論を安易に出すべきではない事象であろう。最近の資料としては、「市部内遺跡」(葛巻町)から該期資料(十腰内Ⅲ~Ⅳ式)が出土している。

③について、加曾利B式の特徴と類似する。研磨手法の違いだけとは思われない光沢であり、精練されたと思われる粘土を使用して製作されているのではないかと捉えている。この特徴は本遺跡の資料で言及するならば、十腰内Ⅱ~Ⅲ式の特徴として捉えられると思われる。ただし、精練された粘土説については最近の研究では否定的な見方もあるようであり、研磨の手法の違いと取る説が有力のようである。

①~③の要素について、②・③はある程度の指標となるのではないだろうか。問題はむしろ十腰内Ⅳ式とする土器の下限(Ⅳ式の最も古い段階)を、何処(何の要素)で引くかはなかったと思う。本稿で後期中葉に位置付けた第Ⅲ群 2・3類とした土器群については、関東の加曾利B式のみならず北海道のホッケマ式(註4)との並行関係などから検討してみるのも一考であったと思う。

第Ⅲ群 4類と第Ⅲ群 5類 後期後~末葉の土器群で、十腰内Ⅳ・Ⅴ式に相当する土器群である。本稿においては、4類土器と5類土器の区分を貼り瘤先端のとがり具合(先鋭貼瘤と標記した)に求め、先端の丸いものや叉状貼瘤を第Ⅲ群 4類に、先鋭貼瘤を付加するものを第Ⅲ群 5類とした。また、東北地方南部や関東地方からの搬入品あるいは、上記地域が祖系と思われる土器も、該期には相当数散見された。本遺跡出土土器の分類にあたって、施文される文様や磨消縄文帯の幅の違いなどの微細な要素で、第Ⅲ群-4類(十腰内Ⅳ式相当の土器群)と第Ⅲ群-5類(十腰内Ⅴ式相当の土器群)の区分を行うのは、非常に困難を極めた。

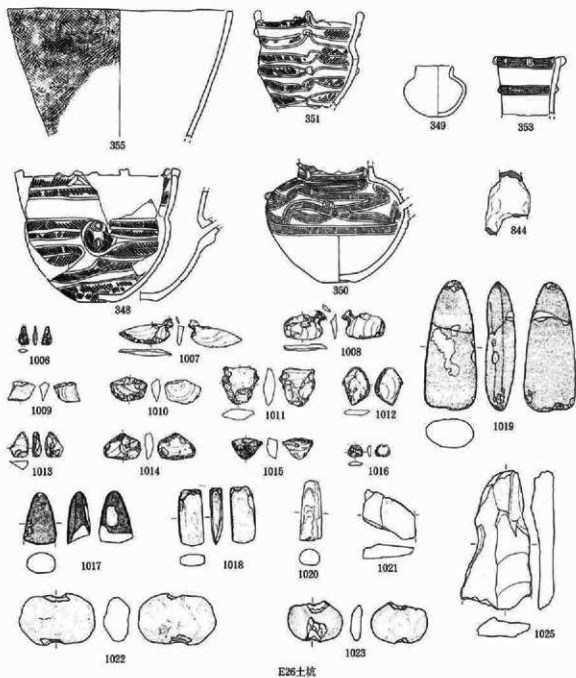
十腰内Ⅳ式相当として扱った土器群は、観察所見として大きくは3時期に細分される可能性を感じたが、その最も古いと思われる十腰内Ⅲ式との過渡期の土器(十腰内Ⅳ式古段階)が、2004などに求められるのではないだろうか。また、本米は西ノ浜式(註5)などとの関係を踏まえ、比較検討を行う必要があったと思われる(東北地方南部との比較検討を行わなかったのは反省点としたい)。

十腰内Ⅳ~Ⅴ式に相当する土器の一括性が窺える出土状況を示した資料としては、I 18土坑4号、E 26土坑、I 17土坑8号、F 12住居跡出土土器が挙げられる。十腰内Ⅳ式の最も新しい段階と十腰内Ⅴ式相当との区分は、混在した可能性が多分にあり、I 18土坑4号出土土器、E 26土坑出土土器がその最たるものである。

両者のどちらに区分されるのか位置付けが難しい土器群の資料は、「馬場瀬(1)遺跡」(第439図の土器群)に豊富である。当該期を扱った論文においても、「馬場瀬(1)遺跡」出土の土器については、岡田氏は十腰内Ⅳ式に、鈴木氏は十腰内Ⅴ式に位置付けているなど見解の分かれる土器も介在する。本遺跡出

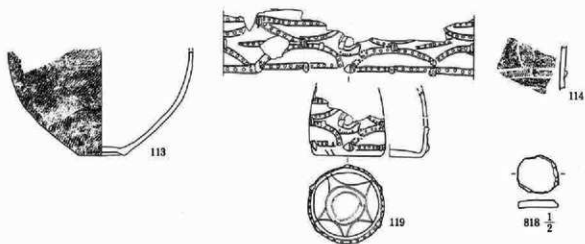
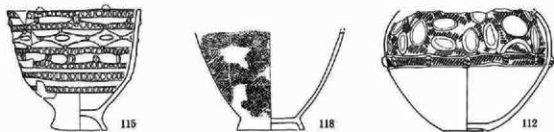
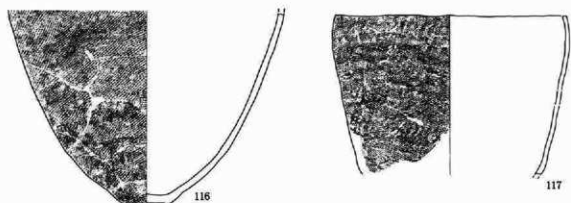
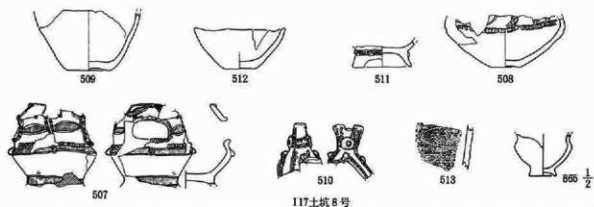


I18土坑4号



E26土坑

第442图 I18土坑4号·E26土坑出土遗物



F12住居跡

第443图 I 17土坑8号·F12住居跡出土遺物

の中にも「馬場瀬(1)遺跡」に見られる土器群と類似する資料が散見される。I18土坑4号の資料は、3個の完形品が一括して出土したもので、530～532は同一時期の可能性を示唆させる。また、十腰内V式の範疇で捉えている第443図に掲載したF12住居跡埋土一括土器の中には、112、115、119などのように文様モチーフの在り方から異系統土器である可能性が高いものが含まれる。

最近の十腰内V式研究の動向に筆者が疎いため、型式判断に妥当性があるかわからないが、本遺跡の土器を観察した所見として、「蛭沢遺跡」12号住居跡・13号住居跡出土土器や「根井貝塚」出土土器などが、十腰内IV式と十腰内V式の漸移的な時期に相当するのではないだろうか。そして、第440図に掲載した「馬場野II遺跡」LIV05住居、LIV06住居、LV08住居床面出土土器の段階は、十腰内V式の一括資料として捉えられるのではないかと考えている。なお、「小井田IV遺跡」第II群第6類は晩期初頭であろう。

本稿において該期の土器分類は、区分材料を見い出せずに難航した。今回は鈴木編年を採用して分類した(註6)が、第III群1類と同様に筆者の力不足を露呈する結果となった。本遺跡には該期の完形資料が豊富で、型式学的には良好な資料であるが、本報告書では示し得なかった。

第III群6類 詳細な時期の位置付けが困難な地文のみを施文する粗製土器を一括した。主に粗製の深鉢や鉢が該当する。文様のある土器との比較や器形、胎土などの特徴から時期推定を試みた。6類-1が初頭～前葉、6類-2が前～中葉、6類-3が中～後葉、6類-4が後～末葉と位置付けした。

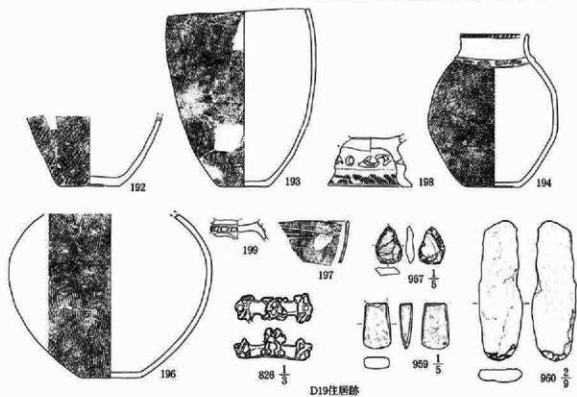
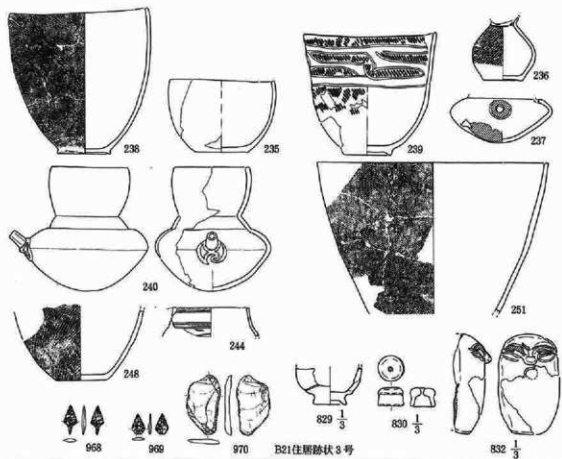
④第IV群土器(晩期)

晩期の土器は、全体的に遺構内出土を主体とし、大洞B～BC式までを網羅する資料と判断される。それらの中で、便宜的に後期(第III群土器)と晩期(第IV群土器)に振り分け、区分した後期最終末～晩期最初頭と言える土器群については、1つの群を設けるべきであったと反省している。若手県北部において、該期の資料は希少で、また東北地方北部を扱った該期の研究も少ないように思われ、東北地方に限れば該期の研究は南高北低の感があるように思う。仙台湾周辺地域を扱った該期の研究としては、後藤勝彦氏の宮戸編年(1960年後藤)や高柳圭一氏(1988年高柳)の金剛寺貝塚の検討、及び「田柄貝塚発掘調査報告書」や「中沢貝塚」が代表的なものとして挙げられる。高柳編年を参照して該期土器の編年を整理すると(註7)、「西ノ浜式」(高柳層付土器第I段階)→「宮戸Ⅲa式」(高柳層付土器第II段階)→「宮戸Ⅲb式」(高柳層付土器第III段階)→高柳層付土器第IV段階(宮戸IV式併行)→「大洞B1(古)式」(宮戸IV式併行)→「大洞B1(新)式」→「大洞B2式」の順を示す。本遺跡で行った分類を比定させれば、第IV群1類-1としたものは、「大洞B1(古)式」及び「大洞B1(新)式」に相当すると思う。そして、高柳層付土器第Ⅲ・Ⅳ段階に相当する土器群は、第III群5類中に含めたものに比定すると思われる。よって、第III群5類を高柳編年に比定させて捉えれば、新古の2細分(高柳層付土器第Ⅲ・Ⅳ段階)ができる可能性がある(627)。

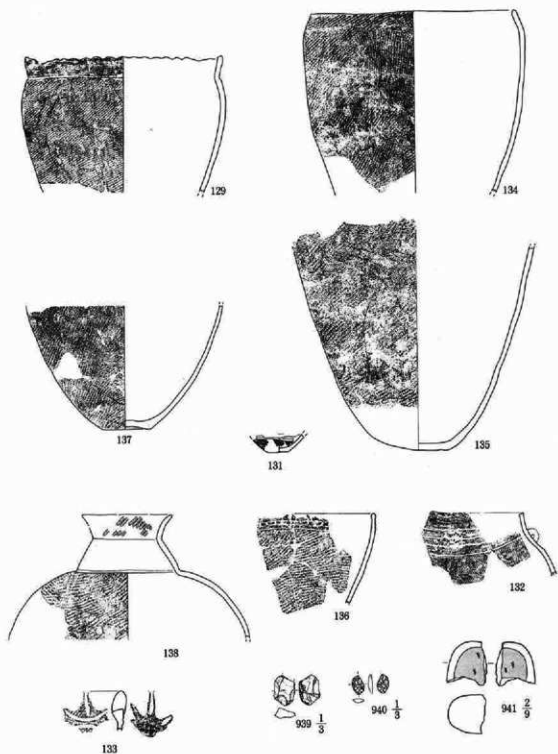
第IV群1類-1 大洞B1式と捉えた晩期初頭の土器群であるが、時期的な位置付けは検討を要するものも含めた。大洞B1式(古)の資料は、B21住居跡状3号から一括出土している。B21住居跡状3号(集成図第444図)から出土した239は、「山井遺跡」下層②(26層)出土に類似する資料であり、「山井遺跡」の報告書を参照すると、大洞B1式に比定される。今回は、宮戸編年や田柄貝塚など仙台湾周辺の資料との比較検討を密に行っていないが、高柳編年では「大洞B1(古)式」(宮戸IV式併行)に比定されると思われる。

地文について、本遺跡の資料をみると、大洞B1式はRL主体(遺構外は全てRL)、大洞B2式はLR主体と言う興味深い結果となった。

第IV群1類-2と第IV群2類 土器の総量は後期に譲るが、検出された住居跡や掘立柱建物跡などが盛んに構築されたのが、当該期土器(大洞B2～BC式)の時期と捉えている。



第444圖 B21住居跡3号・D19住居跡出土遺物



F18住居跡1号

第445图 F18住居跡1号出土遺物

後期の土器との相違点として、晩期の土器は遺構内出土が主体となる。野外調査時において、該期土器の一括気味と判断した資料としては、第445図に掲載したF18住居跡1号出土の土器が挙げられる。文様の施文が確認できる土器で検証すると、133の破片は十腰内V式、132は大洞B1式、136は大洞BC1式に比定されと思われることから、若干の混在は存在する。ただし、F18住居跡1号出土土器は全体的にみれば短い時間幅と判断され、詳細な時期区分ができない129、134、135、137の粗製深鉢と138の壺については、晩期前半期に属する可能性が高いと思われる。その他としては、西部捨て場中にまとまりを感じる地点が局所的に存在する。

第IV群3類と第IV群4類 晩期中葉の土器は皆無に等しい出土点数である。大洞C1式は、第V章で上述したとおり、数点の出土である。大洞C2式については、その存在を認知できなかった。野外調査時から認知したわけではなかったが、大洞BC式が多数出土している状況から考えて、若干量は確認されると想定して分類項目を設定した経緯がある。大洞BC式に後続する該期の土器が皆無である状況を考えると、晩期中葉に集落の移動あるいは衰退（消滅）が起こったと言った事象も考えられる。

第IV群5類 詳細な時期の位置付けが困難な地文のみを施文する土器を一括する。主に粗製の深鉢・鉢が該当する。

第IV群6類 詳細な位置付けが困難な無文土器を一括する。主に無文の精製注口土器が該当する。

⑤第V群土器（弥生）

弥生土器は、弥生時代初頭の砂沢式と弥生時代中頃の天王山式が、両者合わせて数点出土した。何れも小片であり、また該期の遺構は検出されていない。

(2) 長倉I遺跡出土の縄文時代後期土器の特徴について

過去の十腰内式土器を扱った論文で述べられた諸要素などについて、その幾つかの点に着眼して本遺跡出土の後期土器のまとめとする。

①口縁部・口唇部形態

〈折り返し口縁が見られる土器群〉 折り返し口縁が見られる土器は、1247、1260、1278、1361、1392、1524、1566、1911、1984、2024である。後期初頭～前葉に限定されると捉えられる。

〈口縁部が肥厚する土器群について〉 口唇部が肥厚する土器は、第Ⅲ群3類～5類に見られる。出土数の割合からは、第Ⅲ群4類及び5類（十腰内IV・V式相当）に多いことから、後期後葉以降に多い傾向が窺える。

②底部形態

〈底部の形態〉 平坦（平底）、上げ底、台付き、丸底の4形態に大別される。全時期に亘って平坦を基本とする。上げ底や丸底状を呈するものは、後期後半から多くなる傾向が窺える。

〈土器底面に何らかの圧痕跡がある土器群〉 長倉I遺跡において、土器の底面に見られる圧痕の種類は網代痕・木葉痕・笹などが確認された。ほとんどが第Ⅲ群1類と第Ⅲ群2類（十腰内I・II式相当）及び第Ⅲ群6類に見られる。第Ⅲ群3類（十腰内Ⅲ式相当）以降の土器群は、底面にミガキなどが施され、底面に圧痕は、ほとんど見られない。後期前半の段階の土器群と同該期の粗製土器に多い傾向が窺える。

③文様・特徴

〈口唇部に縄文を施文する土器〉 後期初頭～中葉期の深鉢、特に粗製の深鉢に多い傾向が窺える。

〈後期初頭～前葉の土器に見られる沈線による特殊文様について〉 十腰内I式期の土器に伴う特殊（珍）

文様について、沈線によりモチーフされる土器群の中で、その文様に特殊性を感じる土器類がある（集成図第501～502図）。

特殊性を感じる文様とは、球根状や幾何学的な文様を施文するもので、植物や人間など写実的な描写と捉えられる。本遺跡で出土した後期前葉土器には、主に沈線による幾何学的な文様が数多く散見される。類似する文様を持つ土器については、「近野Ⅲ遺跡」（青森県青森市）の報告書中（成田滋彦1976年）で詳細な分類が行われている。

土器の時期については、広義的には十腰内Ⅰ式と言うⅠ型式のみ見られるようであり、「近野Ⅲ遺跡」についても同様である。本遺跡で行った該期の土器分類の信憑性にも関わるが、第Ⅲ群Ⅰ類の集成図においては、第Ⅲ群Ⅰ類-Ⅰと第Ⅲ群Ⅰ類-Ⅱの両者に見られる。筆者の現段階の見解としては、新占で言及するなら十腰内Ⅰ式の新しい段階に多いように捉えている。

〈磨消縄文と充填縄文について〉 後期と思われる土器の中で、磨消縄文の出現率は約26%（第Ⅲ群Ⅵ類を含む）であった。時期毎の出現率は、第Ⅲ群Ⅰ類38%、Ⅱ類46%、Ⅲ類67%、Ⅳ類55%、Ⅴ類23%である。

後期と思われる土器の中で、充填縄文の出現率は約6%である。そのほとんどが第Ⅲ群Ⅳ・Ⅴ類とした十腰内Ⅳ・Ⅴ式に比定する土器群であった。参考までに第Ⅲ群Ⅰ類中での出現率は約2%、第Ⅲ群Ⅱ類中での出現率は約0%、第Ⅲ群Ⅲ類中での出現率は約3%、第Ⅲ群Ⅳ類中での出現率は約25%、第Ⅲ群Ⅴ類中での出現率は約12%であった。

磨り消し縄文と充填縄文の割合について、後期全般を通じては前者が圧倒的に多い。ただし、充填縄文については、筆者の判別できなかったものが存在する可能性があるため、実際の数値はもう少し高いと思われる。

〈羽状縄文を施文する土器群について〉 本遺跡から出土している縄文時代後期中～末葉の上器群は、精製、粗製に関わらず羽状縄文が多々見られる。本遺跡で見られるものは、非結束による羽状縄文である。

羽状縄文を構成する原体については、1種類の原体による異方向縄文と2種の原体により構成されるものが見られる。岡田氏の指摘した（岡田康博1986年）羽状縄文を構成するのが1種の原体（異方向縄文）か2種の原体かの違いで、中葉と後葉の境を区分するひとつのメルクマールとなり得るのかどうかは、非常に興味のある属性である。下記には、第Ⅲ章3で上記した第二次登録した段階での土器2664点の中で、羽状縄文を施文する土器を分析対象とし、本稿で行った分類毎に検索を行った。

後期土器（粗製含む）と思われる中で、羽状縄文を施文する土器の割合は、約11%である。

後期土器と思われる中で、時期別の出現率は、第Ⅲ群Ⅰ類（十腰内Ⅰ式）0%、第Ⅲ群Ⅱ類（Ⅱ式）11%、第Ⅲ群Ⅲ類（Ⅲ式）29%、第Ⅲ群Ⅳ類（Ⅳ式）40%、第Ⅲ群Ⅴ類（Ⅴ式）9%、時期不明（後期と思われる粗製）11%である。

羽状縄文を施文する土器において、異方向縄文の割合は、第Ⅲ群Ⅱ類36%、第Ⅲ群Ⅲ類15%、第Ⅲ群Ⅳ類6%、第Ⅲ群Ⅴ類18%である。結果としては、期待したような数字は示さなかった。

次に0段多条の原体を施文する土器について、後期土器全体での出現率は約5%であった。0段多条の原体を施文する時期については、十腰内Ⅳ式が主体で、次いで十腰内Ⅲ式である。

上記をまとめると、十腰内Ⅱ式期から羽状縄文が出現し、十腰内Ⅲ～Ⅳ式期にかけて盛行し、十腰内Ⅴ式期には衰退気味となる（ただし、後続する晩期においても消滅はしないようである）。異方向縄文の割合については、十腰内Ⅱ式期に幾分高く、十腰内Ⅳ式期に低いと言う結果となった。

また追記として、抽象的な内容ではあるが、原体の観察を行った所見として本遺跡の当該期土器（特に十

腰内Ⅲ～Ⅴ式)の中には、筋の方向だけではL RなのかR Lなのか判別の困難なものが多々見られた。あるいはその事象についても、本遺跡出土当該期土器の特徴の一つと言えるかもしれない。時間の関係で他遺跡資料との比較検討は行っていないが、軽米町だけでも当該期土器が出土した遺跡が多いことから、何れかの機会に比較検討を行ってみたいと考えている。

〈先鋭貼瘤を付加する土器群の位置付けについて〉 後期後～末葉の土器群に顕著な貼り瘤について、観察結果から若干所見を述べると、長倉Ⅰ遺跡出土の当該土器は、先鋭貼瘤が付くほど新しい段階に位置付けられる傾向を感じ、本稿のⅢ群5類土器に含める一つの要素として捉えた。先鋭貼瘤については、第Ⅴ章で説明した通り、貼り瘤の先端がとがるものに対して呼称した。

先鋭貼瘤が確認された110点中(第三次登録段階)、第Ⅲ群5類(十腰内Ⅴ式相当)が98点、第Ⅲ群4類(十腰内Ⅳ式相当)と思われるものが12点である。観察結果から、積極的に言えば十腰内Ⅳ式期の新しい段階から先鋭貼瘤が見られる可能性が示唆される。ただし、先鋭貼瘤の有無によるⅣ式とⅤ式の区分については、本稿で行った分類に恣意的要素が介入した可能性があるため、今後に検討を要しよう。

〈帯状文内にX字状・格子状・網目状の沈線を施する土器群〉 帯状文内にX字状・格子状・網目状の沈線を施する土器群は、本遺跡出土土器において本稿Ⅲ群-5類土器群(十腰内Ⅴ式に相当すると思われる時期)土器にのみに見られた手法である(集成図第503図)。同様の施文法が「小井田Ⅳ遺跡」DⅡ-3住居址及び同遺跡Ⅱ群第5類土器の中に比較的豊富に見られる。土器の時期的な位置付けとしては、「小井田Ⅳ遺跡」出土土器も同時期に比定できると思われることから、該期に流行する手法と判断される。時期的流行か地域色的なものかについては、類例の模索を密に行っていないため厳密ではないが、前者ではないかと思われる。

〈後期後葉～末葉に見られる微隆線を施する土器について〉 福島県を中心とする新地式に類似する土器で、2150、1890、1992の注口土器に代表される。貼瘤は全般に微粒気味なものが多い。主に注口土器に見られる施文手法で、本遺跡で出土しているものには朱の塗布が確認される場合が多い。搬入品の可能性で捉えているが、詳細は不明である。模造品説について、所見的内容となるが、精巧な作りのものであり、粘土自体も在地産とは違うのではないかと思われることから、在地で製作した可能性については否定的に捉えている。北海道千歳市「キウス4遺跡」出土の中にも、非常に類似した注口土器があることを阿部明義氏、末光正卓氏にご教示戴いた。両氏は、在地産ではなく東北地方からの搬入品として捉えているようである。新地式と言われる土器の交易が、想像以上に広範囲である可能性も考えられよう。時期について、併行関係としては十腰内Ⅳ式の新しい段階から十腰内Ⅴ式の範疇で捉えられると思われるが、今後検討を要する。

④その他特殊な土器について

今回の調査では、香炉形土器、釣り下げ形土器、単孔土器、人面付き土器、双口土器、異形土器などの特殊性を感じる土器が相当数得られた。一部集成したが、詳細な検討は時間の都合上行っていない。

香炉形土器は、本遺跡では十腰内Ⅳ式期に出現し、十腰内Ⅴ式期に隆盛する様相であるが、晩期の大洞式に比定されるものの出土はない。香炉形土器については、松浦宥一郎氏の「岩手県軽米町内出土の香炉形土器二例」(1990年松浦 考古学雑誌第76巻第4号)が詳しい。それによると、軽米町内で発掘された晩期の遺跡からは、大洞式に比定される香炉形土器は出土していない。

釣り下げ形土器は、本遺跡の資料では縄文時代後期後葉～末葉期に見られる。器種は、壺、香炉形土器、注口土器に見られる。孔については、2～4単位まで散見される。

単孔土器は、器体側面に孔が穿たれる土器で、後期中葉の十腰内Ⅲ式に比定されるものが主体である。十

器の形式で言えば、十腰内Ⅱ式～十腰内Ⅴ式に見られる。14点（内1点是小破片のため不掲載とした）出土した。出土地点別に見ると、F12住居跡埋土中（8層）から1点、C26沢跡埋土中から1点、東部捨て場から4点、西部捨て場から9点である。また、残存部の関係で穿孔部は確認できなかったが、筒形土器とした5点（内1点是不掲載）と2110の壺状の壺形土器に単孔土器であった可能性が示唆される。存続時期について、晩期に見られないことから、今までの事例と同様の結果を示す。十腰内式で言えば4型式で14点であり、1型式を約2百年と捉えれば、単純に考えて66年に1個の割合となり（調査地外にも存在する可能性があり、割合的にはもう少し高い数値を示す可能性が考えられるが）、特殊性の高い土器と言えると思う。

単孔土器については、熊谷常正氏の行った「単孔土器考」（熊谷1989年）が詳しい。その中で熊谷氏の行った分類の基準は、土器の器種でⅠ～Ⅵ群に区分し、穿孔される部分でa類とb類に区分している。以下のような内容である。

Ⅰ群 香炉形土器に穿孔するもの。胴部は球形を呈する。

Ⅱ群 壺形土器に穿孔するもの。

Ⅲ群 長胴の壺に穿孔するもの。頸部が一旦膨らみ、口縁部が大きく広がる器形が特徴的である。

Ⅳ群 筒形土器に穿孔するもの。単孔土器に特徴的な土器である。下膨れ・胴部中央が萎む例も含めた。

Ⅴ群 壺形の土器に穿孔するもの。球形を呈するものから、筒形に近いものまでを含めた。口縁は内湾し、平縁である。上げ底もあるが、底部は極端に小さく、座りの悪いものが多い。

Ⅵ群 その他の形式に穿孔されるもの。

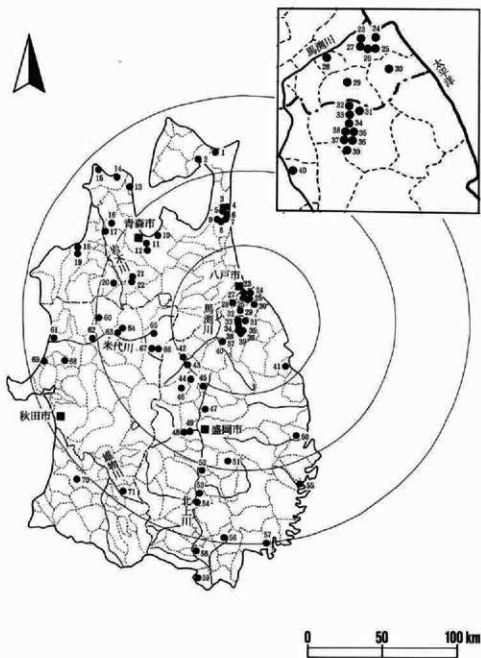
aタイプ 胴部の最下位もしくは底部に近い部分に施されるもの

bタイプ 胴部中央付近にも見られるもの

本遺跡から出土しているものは、孔が胴部の最下位もしくは底部に近い部分に施されるa類のみである。土器の器種としてはⅠ群は出土していない。筆者の調べられる範囲（註8）で単孔土器が出土した岩手県内の遺跡を第447図に示した。単孔土器について、特殊性の強い資料であるが、時間と紙面の都合もあり個々の資料の詳細な観察などは行ってない。今後稿を改めて、資料の再観察を行い、紹介を行いたいと考えている。

人面付き土器について、人面模倣文様の土器・土製品として第497図に集成を行った。土器については、十腰内Ⅴ式期の注口土器と香が形土器に見られた。人面付き土器関連の最近の研究成果としては、波辺誠氏（現名古屋大学教授）の精力的な研究が挙げられる。

双口土器、異形土器については、集成図を作成していない。双口土器は十腰内Ⅲ式期に、双胴土器などの異形土器は十腰内Ⅴ式期に見られた。



第446図 北東北3県に見る縄文時代後期の主な遺跡

縄文後期の主な遺跡

No.	遺跡名	市町村名	備考	No.	遺跡名	市町村名	備考
1	水木沢	東通村	後期末葉主体	37	臥屋敷Ⅱ	軽米町	
2	大塚近川	むつ市		38	臥屋敷Ⅲ	軽米町	
3	大石平①	六ヶ所村	後期初頭～前葉	39	駒板	軽米町	後期初頭～晩期
4	大石平②	六ヶ所村	後期初頭～前葉	40	小井田Ⅳ	一戸町	後後末葉
5	上風林①	六ヶ所村		41	根井貝塚	野田村	後期末葉・晩期
6	上風林②	六ヶ所村		42	上の山Ⅶ	安代町	
7	沖附②	六ヶ所村	後期初頭～前葉	43	赤坂Ⅰ	安代町	後期末葉
8	沖附①	六ヶ所村	後期初頭～前葉	44	上斗内Ⅲ	西根町	後期Ⅱ～後葉
9	跡栄平	六ヶ所村	後期前・末葉	45	川口Ⅱ	西根町	後期中葉
10	堂沢	青森市		46	長者屋敷	松尾村	
11	近野	青森市	後期初頭上体	47	開利Ⅱ	玉山村	後期前葉
12	小牧野	宮森市	後期前葉	48	鶴内	盛岡市	
13	坂高(4)	平館村	後期後葉	49	下釜田Ⅰ	盛岡市	後期中葉
14	山崎	今別町	後期初頭	50	近内中村	宮古市	
15	中の平	三戸町		51	立石	大迫町	
16	神明町	金木町	後期中葉	52	安堵屋敷	石鳥谷町	晩期
17	堀内	五所川原市		53	八六	北上市	
18	藤ノ沢	鯉ヶ沢町		54	磯山	北上市	
19	大曲Ⅰ	鯉ヶ沢町		55	崎山青天	大槌町	
20	上牡丹	大槌		56	穂の平	大槌町	後期～晩期
21	石郷	平賀町		57	門前貝塚	陸前高田市	
22	扇合	平賀町		58	新山権現社	平泉町	
23	丹後谷地	八戸市	後期初頭～後葉	59	貝島貝塚	花巻町	
24	重深	八戸市	後期初頭	60	大谷Ⅲ	田代町	
25	麻蕨	八戸市	後期前～後葉	61	貫地	磐代市	後期初頭～前葉
26	是川	八戸市		62	伊勢堂凸	鷹巣町	
27	田面木平①	八戸市	後期初頭～前葉主体	63	碓ノ台Ⅱ	大槌市	
28	西張	福地村		64	塚の下	大槌市	後期前葉
29	馬場瀬	南郷村	後期後葉主体	65	大槌磯状列石	鷹巣市	
30	野場	陸上町		66	案内Ⅰ	鷹巣市	
31	長倉Ⅰ	軽米町	後期初頭～晩期前葉	67	赤坂Ⅰ	鷹巣市	後期中葉主体
32	大日向Ⅱ	軽米町		68	館平館Ⅰ	山本町	
33	馬場野Ⅱ	軽米町		69	堂刈沢	八幡町	後期前葉
34	若成田Ⅳ	軽米町	後期前葉・後～末葉	70	奥の爪	大内町	
35	臥屋敷Ⅰa	軽米町		71	八木	糠手市	後期初頭～後葉
36	臥屋敷Ⅰb	軽米町					

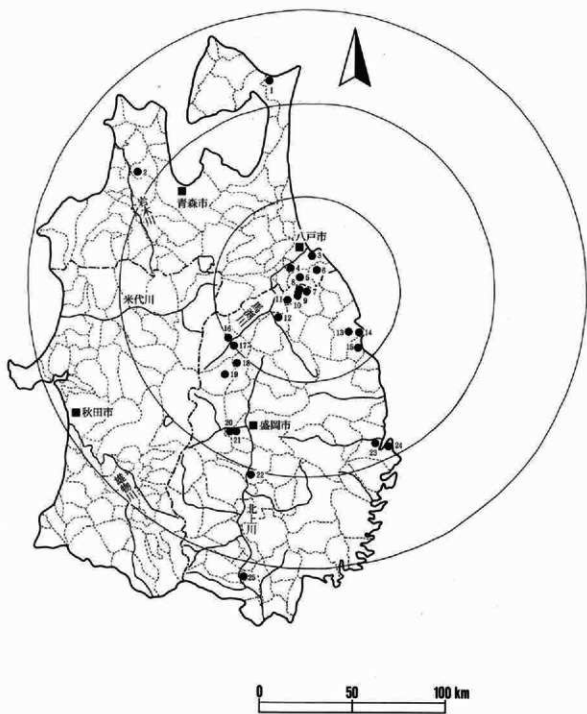
単孔土器出土遺跡

No.	遺跡名	市町村名
1	水木沢	東通村
2	神明町	金木町
3	坂高Ⅰ	八戸市
4	西張	福地村
5	馬場瀬	南郷村
6	野場	陸上町
7	長倉Ⅰ	軽米町
8	大日向Ⅱ	軽米町
9	馬場野Ⅱ	軽米町
10	若成田Ⅳ	軽米町
11	江刺Ⅳ	九戸村
12	小井田Ⅳ	一戸町
13	熊石	久慈市
14	三崎	久慈市
15	根井貝塚	野田村
16	上の山Ⅶ	安代町
17	赤坂Ⅰ	安代町
18	上斗内Ⅲ	西根町
19	長者屋敷	松尾村
20	鶴内	盛岡市
21	下釜田Ⅰ	盛岡市
22	安堵屋敷	石鳥谷町
23	重茂館	宮古市
24	磯嶋	宮古市
25	新山権現社	平泉町

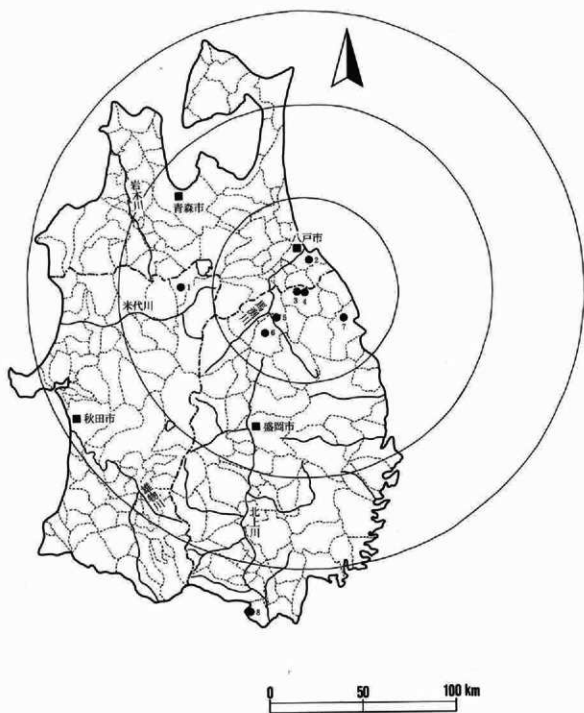
いも貝形土製品出土遺跡

No.	遺跡名	市町村名
1	中の平	大槌町
2	是川	八戸市
3	大日向Ⅱ	軽米町
4	長倉Ⅰ	軽米町
5	野前	一戸町
6	山井	一戸町
7	大戸	久慈市
8	貝島貝塚	花巻町

第3表 縄文後期主要・単孔土器出土・いも貝形土製品出土遺跡



第447図 卑孔土器出土の主な遺跡



第448図 いも貝土製品出土遺跡

〈註〉

(註1) 最近の十腰内式土器編年については、主に堅久住居跡(味田)一括資料などを基に型式学的編年(一部層位的)を試みた金子昭彦氏や鈴木克彦氏の精力的な研究が評価されると思う。金子昭彦氏は、『岩石考古学会』、『縄文時代』、『岩手県歴史文化財センター紀要』に、十腰内式を扱った一連の研究論文を発表されている。筆者は、十腰内1式を扱った「十腰内1式(新)に併行する東北地方中部の土器(3)」、『縄文時代』中での、「間洞遺跡」(同じ組織で調査した遺跡でありながら、筆者はその存在すら眼中になかった。不徳の数すところである。)出土資料に着眼した舞観は高く評価されるべきだと考える。鈴木克彦氏は、「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究」で、十腰内1～5式に亘る編年の指標を示している。本稿においては、従来の十腰内式編年と言うよりも、基本的には鈴木氏の編年案を参照して細分を行った。ただ、何れの型式についても、非常に緻密であり、筆者が参照できていないものか自信がないのも事実である。筆者の感じた所見としては、比較的広域的な資料を網羅する整備に着手しているのが金子編年で、地域色を重視した資料を扱って組み立てを行っているのが鈴木編年のように受け止めている。細部については、両者の見解が分かれる部分もあり、今後議論の余地が介在すると思われるが、東北地方北部の後期土器編年の大望は、2人の研究者によって整備されつたと筆者は捉えている。

(註2) 『縄文時代』に掲載された「東北地方北部における十腰内様式の編年学的研究・4」(1998年)にある十腰内1式の細分案。

(註3) 十腰内1式は、これまで後期初頭～後期前中期の土器を総括して、広義的に扱われてきた経緯があり、従来から指摘されてきたとおり複数型式を保有する可能性が高い。本遺跡の土器分類は、平成9年度整理の段階で中川が手掛けていたものを、平成10年度整理の担当となった星が引き継ぎ、分類作業を進めた経緯がある。引き継ぎの段階で、十腰内式に比定させる分類を行うことでは意見の歩調を合せていたが、数ある十腰内1群の編年研究成果の中で、どの(誰の)編年案を用いるのか基準が曖昧であった。途中から観測者が変わったことから、若干見解が相違する部分が生じる可能性があることを考えて、全て再観察を行い、一部修正を行った。中川が分類した段階では、成田滋彦氏の「入江・十腰内様式」を参照して区分を行っていた経緯がある。本遺跡の該期資料は、「入江・十腰内様式」に比定できれば、そのほとんどが十腰内I A及び十腰内I B式に相当するものと捉えられる(若干数前十腰内式相当がある)。沈隆を主体とした十腰内I A式に対して、沈隆・磨消陶文を主体とする十腰内I B式と言う区分は、傾向的に捉えれば概ね支持できると思う。ただし、整理担当を引き継いだ星は、十腰内II～V式に相当する土器群については鈴木氏の「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究」シリーズを参照した経緯がある。同一の研究者の編年に比定させた位置付けを行った方が、混乱や歪在が少なく判断し、途中からは鈴木氏が『縄文時代研究』NO9に発表した「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4」を基本ベースにして、十腰内I群を捉えた。

問題点は、勿論、本遺跡の資料が層位的上下関係が弱いことに加えて、参考とする編年案の途中変更を行ったことと星が該期資料に明るくないことにある。鈴木氏は十腰内式を語る場合にアラビア数字(十腰内1～5式)を用いているが、本稿でローマ数字(十腰内I～V式)を使用した最大の理由は、上記に関連して星の読解能力や理解力不足から、鈴木編年に比定したつもりで七器分類が、歳功と食い違いが多かった場合を懸念したものである。十腰内1式は、十腰内式土器編年の中で最も細分(分類)が難しいと思われる。当該期の編年研究は、主に葛西助氏、本間宏氏などが取り組んで来た研究史がある。最近の研究動向としては金子昭彦氏と鈴木克彦氏の研究がある。本遺跡の該期資料は、層位的な上下関係を持たないこと、そして当初の観察所見として十腰内1式に先行する土器群(前十腰内相当)が存在しないように思われたことから、詳細な「吟味」が弱いまま分類した経緯がある。復唱となるが、該期土器の分類に際しては、複数回にわたって入れ替えを行ったため、最終的にはかなり錯綜したものを提示する形となってしまった。筆者の不勉強によるところであり、不都合がある場合は訂正願えば幸いである。

(註4) 『器路七場遺跡調査報告書』を参照すると、手種式～ホッケマ式～堂林式までの変遷図(第III～VI期)が掲載されて

いる。後期中～後葉の土器を、9時期に分けられることには疑問があるが、岩手県北部に十腰内Ⅱ・Ⅲ式の区分にあたって良好と判断できる資料がない以上、北海道の前期土器との対比も考慮するべきであろう。

(註5) 西ノ浜式とするものは、十腰内Ⅳ式の中相～新相に併行すると思は提えて記述している。

(註6) 十腰内Ⅰ式期と同様にⅤ式期についても鈴木克彦氏の論文を筆者が理解できたかどうか必ずしも自信がないことを述べておく。

(註7) 後藤藤彦氏の宮戸編年は、変更前のもので捉え引用する。

(註8) 本稿執筆後に「矢神遺跡」(二戸市)からも単孔土器の可能性のある土器が出土していることを知る。十腰内編年に比定させれば十腰内Ⅰ式期と判断される土器で、挽成後に穿たれていることから、本遺跡出土とは穿孔の順が相違する。また、宮古市の2遺跡は、黄金で出土したものではない。

＜参考文献＞

- 成田造彦(1989年)「入江・十腰内式土器様式」『縄文大観4』小学館
- 金子昭彦(1994年)「十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界」『岩手考古学』6
- 金子昭彦(1996年)「十腰内Ⅰ式の3細分についての考え方」『岩手考古学』8
- 金子昭彦(1998年)「十腰内Ⅰ式土器の文様」『岩手考古学』10
- 金子昭彦(1999年)「十腰内Ⅰ式後半期型式の細分の展望」『岩手考古学』11
- 金子昭彦(1998年)「十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(3)」『縄文時代』文化研究会
- 鈴木克彦(1996年)「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究—十腰内Ⅱ式土器の研究—」『考古学雑誌』第81巻第4号 日本考古学会
- 鈴木克彦(1997年)「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究3—十腰内Ⅴ式以降、後期終末型式研究—」『北奥古代文化』第26号 北奥古代文化研究会
- 鈴木克彦(1998年)「東北地方北部における十腰内様式の編年学研究・2(上)」『考古学雑誌』83—2 日本考古学会
- 鈴木克彦(1998年)「東北地方北部における十腰内様式の編年学研究・4」『縄文時代』文化研究会
- 後藤藤彦(1960年)「宮城県黒取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器研究—陸前地方後期縄文式文化の編年的研究」『宮城県史の地理と歴史2』
- 須藤隆(1992年)「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤隆先生還暦記念
- 高柳圭一(1988年)「宮城県金剛寺貝塚の再検討」『村上徹君追悼文集』
- 高柳圭一(1988年)「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初期にかけての編年動向」『古代』85号
- 高田和徳・中村明央・林謙作(1995年)『山井遺跡発掘調査報告書—戸町教育委員会』
- 岡田康博(1986年)「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』3
- 熊谷常正(1989年)「単孔土器考」国学院大学考古学資料館紀要乙益重隆先生古稀記念号
- 渡辺誠(1998年)「人面裝飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』福島県浪江町教育委員会刊
- 吉本洋子・渡辺誠(1999年)「人面・土偶裝飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補)」『日本考古学』第8号 日本考古学協会
- 今井富士雄・磯崎正彦(1963年)『十腰内遺跡発掘調査報告書』十腰内遺跡調査団
- 葛西勲(1979年)「十腰内Ⅰ式土器の編年の細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会
- 関根透人(1993年)「西ノ浜式とその周辺」歴史第81
- 松浦有一郎(1991年)「岩手県軽米町出土の香か形土器二例」『考古学雑誌』第76巻4号 日本考古学会
- 小畑 巖ほか(1993年)「重刈沢Ⅰ遺跡・重刈沢Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第231集 秋田県文化財センター

- 渡辺 雄・松本友之・渡辺誠・馬日順一 (1966年)『守備貝塚』磐城市教育委員会
- 鈴木 啓・日下郎善巳・辻秀人・藤原紀敏・馬場秀之他 (1988年)『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告書第17集 福島県立博物館
- 北林八洲晴・工藤大 (1981年)『馬場瀬遺跡』青森県文化財報告書第70集 青森県教育委員会
- 手塚 均ほか (1986年)『出所貝塚Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第111集 宮城県教育委員会
- 遠藤正夫・一条秀雄他 (1986年)『大石平Ⅲ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集 青森県教育委員会
- 遠藤正夫・白鳥文雄・石戸谷栞 (1987年)『館野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第119集 青森県教育委員会
- 大湯卓二ほか (1976年)『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第34集 青森県教育委員会
- 成田遊彦・杉山 武他 (1978年)『近野Ⅲ・三内丸山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集 青森県教育委員会
- 杉山武ほか (1979年)『神明町遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第58集青森県教育委員会
- 小笠原善範・藤田亮一ほか (1986年)『丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集八戸市教育委員会
- 藤田亮一 (1989年)『風張 (1) 遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集八戸市教育委員会
- 小笠原善範・木村淳 (1989年)『風張 (1) 遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集八戸市教育委員会
- 小笠原善範 (1998年)『是川中居遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第82集 八戸市教育委員会
- 熊谷常正・小田野哲彦・高橋信雄 (1987年)『根井貝塚発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第3集 岩手県立博物館
- 三浦謙一・光井文行 (1980年)『長倉NO14遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第10集
- 国生 尚 (1981年)『長倉遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第25集
- 近藤宗光・佐々木清文 (1983年)『赤坂ⅡⅠ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第58集
- 村上達夫・遠藤勝博・高橋義介 (1983年)『若成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第62集
- 佐々木嘉久 (1983年)『臥屋敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第63集
- 橋沢清郎・小平忠孝 (1983年)『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第69集
- 大原一則・高橋与右衛門 (1983年)『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第71集
- 国生尚・嵐山靖彦 (1983年)『安堵壱敷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第74集
- 高橋与右衛門・玉川英吾 (1984年)『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第84集
- 鈴木忠治他 (1985年)『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集
- 工藤利幸・中川重紀・田村壮一 (1986年)『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集
- 田嶋壽夫・岩淵久 (1986年)『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書第1次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集
- 田嶋壽夫他 (1987年)『馬立Ⅰ・木田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集
- 金子昭彦 (1993年)『新山権現社遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第188集
- 浜田 宏 (1995年)『水吉Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第219集
- 斎藤邦雄 (1995年)『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書第2～5次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集
- 木戸口俊子 (1998年)『閉瀬遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第260集
- 木戸口俊子 (1998年)『人鳥Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第270集

(3) 土製品

土製品として登録した遺物の総点数は2324点である。内訳は、ミニチュア土器673点、土偶313点、動物形土製品5点、鐔形土製品77点、土製装身具134点（耳飾り60点、飾り玉72点、ペンダント2点）、分銅形土製品13点、土鈴1点、銅形7点、キノコ形土製品19点、スプーン形土製品10点、スタンプ形土製品3点、土鍾12点、内面溝状土製品（イモ貝形土製品）8点、土器片再利用土製品835点（円盤状土製品612点、三角形土製品223点）、その他34点である。各土製品の所屬時期について、本遺跡の出土状況からは、同定できない（土器型式との伴関係や上下関係の比定ができない）。よって、他遺跡の事例から推定を試みるが、時間の関係で全製品の検討は行ってないことをお断りしておく。追記としては、本遺跡から出土している土器は、99%が後期初頭～晩期前葉（土器形式で言えば、十腰内I式の古段階～大洞B式）であることから、大略的に捉えれば該期の土製品である可能性は限りなく高いことは言えると思う。

土偶は、313点（343片出土し、接合した部位30点は除いた点数が313点である）として登録した。全て破損品で完形個体はない。中空が27点でその他は全て中実である。アスファルトが付着する土偶は30点、朱が塗布されている土偶が12点確認された。アスファルトは、頸部、腕部、胴部、脚部などの結合部に見られ、傾向としては頭部と頸部の接する部分に多い。またアスファルトが付着するものには、頭部がソケット状にはめ込むタイプも見られる。朱については頭部や腹部に多く見られるが、完形品ではないことからその傾向は窺い知れない。若手県内で出土した土偶については、『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』に掲載する「岩手県の土偶」（稲野裕介、金子昭彦、熊谷常正、中村良幸1992年）が詳細である。それによると、岩手県において土偶が100点以上出土した遺跡は6遺跡で、盛岡市「新内遺跡」（257点）、大迫町「立石遺跡」（297点）、盛岡市（旧都南村）「手代森遺跡」（201点）、石鳥谷町「安堵屋敷」（140点）、大迫町「小田遺跡」（130点）、北上市「九年橋遺跡」（667点）とある。筆者の知り得る範囲において、追加される遺跡として平泉町「新山権現社遺跡」（239点）、軽米町「大日向Ⅱ遺跡2～5次調査」（372点）がある。第486～494図は、本遺跡出土の土偶を時期毎に集成したものである。晩期の土偶は、土器と同じ文様を施文するものが多いため、比較的時期の同定が可能と思われた。対して後期の土偶は、文様を持たないものが多く、文様の施文のあるものでも土器と共通する文様でないものもあり、比定が困難であった。また本遺跡の出土状況からは、伴出土器が必ずしも土偶の編年に結び付け資料とは判断できない。よって、時期区分は「新山権現社遺跡」及び「大日向Ⅱ遺跡2～5次調査」で行った編年を参照として試みたが、中葉～後葉期については混在した可能性があることを追記する。

動物形土製品関係については、最新の研究成果としては、『東北民俗学研究』の誌上で、福田友之氏と日下和寿氏が岩手県と若手県をそれぞれ集成したものが詳しい。鐔形土製品について、分類は「大石平Ⅲ遺跡発掘調査報告書」を参照とした。同製品が出土している事例を見ると、時間的な位置付けとして、後期初頭～前葉の十腰内I式期に見られるようである。キノコ形土製品についても同時期と捉えられると思う。

銅形土製品と内面溝状土製品（イモ貝形土製品）については、晩期初頭～前葉と推定される。

「その他」とした土製品については、人面付き土製品3点、手作り（人為的作用が加えられているもの）1点、長楕円形1点、土版2点、腕飾り1点（826）、角状1点、三角状1点、棒状1点、くり形1点、くるみ形2点、貝形1点、皿状4点、不明器種（見当がつかないもの）4点の12種にとりあえず区別したが、基本的には不明である。D19住居跡出土の腕飾りと考えられる826については、児玉大成氏が『北方の考古学』の中で「玉象嵌土製品」と呼び集成を行った製品と類似する。

(4) 石器

遺構内外合わせて5133点の石器が出土した。内訳は石鏃1148点、石槍・尖頭器53点、石錐300点、石匙248点、異形石器13点、ピース・エスキュー91点、鉤歯状石器14点、削器925点、掻器54点、円形掻器115点、石斧755点、石鏃状7点、石皿135点、敲石244点、磁石41点、磨石146点、凹石117点、台石15点、石鏃396点、挟入石器56点、礫器10点、刺線礫9点、コア247点である。この点数は調査した面積を考えた場合、かなり多い数字と言える。

剥片石器は、石鏃や削器を主体とする。石鏃、石錐、石匙などの定形石器は、様々な形態が見られたことから形態分類を行った。石鏃は、有茎平基2、有茎平基1、有茎尖基1、有茎凹基の順に多い。石錐は、柄み付き1、棒状、刺突状の順に多い。石匙は、横長1、縦長1、太い柄付きの順に多い。上記した出土点数の多かった形態が、本遺跡の主体となる後～晩期に多い形態であろうと推定される。また、剥片石器の中には、両極打法によって剥離されたと捉えられる楔形石器が含まれる。石材はチャートを主体とするが、石材鑑定の結果、折爪岳山塊から原石を採取した可能性が高いことがわかった。

礫石器について、主体を占めるのは磨製石斧である。磨製石斧は完形品は少なく、欠損品や製作途中と思われる未製品が多く、本遺跡で製作行為を行った可能性は高い。上記の内容を裏付けする資料として、捨て場からは磨製石斧製作時に生じたと推定される礫細片や剥片が出土している。未製品や細片の中には製作途中で壊れたと思われるものが含まれ、剥片はベッキングの状態において製作中に生じたと捉えられる。また、敲石などへの転用品と思われるものも相当数散見される。基部にソケットへの装着痕と思われる跡が確認されたものもある。

3407の大形の磨製石斧について、全長28.9cm、幅8cm、厚さ5.1cm、重量1856.2gのものである。当センターで調査した遺跡から出土した中では最大と思われる一品である。当初は呪術具とも考えたが、刃部は再加工されていることから見て、永年使用されたものと思われる。

3461について、攪り切り技法を行う前段階（分離する前）の原石であれば、石斧数個分と思われる。ただし、他の磨製石斧と比べて異質な石材であるため、分離後に製品用として加工されるものかについては多少の疑問が残る。

また、磨製石斧の加工には、敲石とした断面形がサッカーボール状を呈するものをはじめ、礫石器の中に加工に用いた石器が介在することが推定される。

(5) 石製品

本遺跡からは239点の石製品が出土した。内訳は石剣・石刀155点、石棒4点、環状石製品6点、ペンダント8点、岩偶4点、蛭石製品131点、石製未製品63点である。

石製品の中で主体を占めるのが、石剣・石刀である。石剣・石刀は完形品での出土がなく、全て欠損品で、石材は粘板岩を主体とする。なお、製品での出土はないが、東部捨て場からは、琥珀の碎片が少量出土している。

＜参考文献＞

- 稲野裕介、金子昭彦、熊谷常正、中村良幸（1992年）「岩手県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』
福田友之氏（1998年）「青森県出土の先史動植物産物」『東北民俗学研究』東北学院大学民俗学OB会
日下和寿氏（1998年）「岩手県内における動植物土製品の集成」『東北民俗学研究』東北学院大学民俗学OB会

3 総括

最後に3年間の調査成果をもとに、本遺跡の性格付けについて検証して総括とする。

(1) 本遺跡の変遷についての概略

縄文時代早期中葉～前期初頭においては、数片の土器が出土したのみであり、周辺地域に生活の場が存在した可能性を推測するにとどまる。前期末葉の円筒下層d式期においては、小規模な捨て場が検出された。今回の調査では該期の住居や土坑などは検出されていないが、捨て場の規模や円筒下層式土器の総量などから推定して、小規模な集落が調査を行っていない範囲に存在する(註1)可能性がある。縄文時代中期の遺構・遺物が皆無なことから、短期間(円筒下層d1～2式)の人間活動の後、次の後期初頭までは断絶をみる。

本遺跡において、人間活動を再び始めるのが後期初頭で、初頭～末葉まで断絶することなく集落は推移したと捉えられる。後期で確認された遺構は、前葉と推定される住居跡、後期後半期の住居跡、後期全般の土坑、捨て場である。後期の遺構は、後続する晩期の遺構に破壊を受けている場合が多く、全般に残存状態が悪い上に詳細な時期同定ができない。捨て場から出土した土器の量から判断して、後期前葉と後期末葉に本遺跡が隆盛したことは窺える。後期中葉～後葉は、当該期の土器や土偶は出土しているものの、住居跡の検出がなかった。上記したように晩期の遺構構築時に破壊を受けているのか、あるいは居住地が別の場所に存在するのであろうか。

晩期は、土器の出土量などは後期に劣るものの、後期末葉からの流れを継承して前葉まで隆盛が見られる。

住居跡や掘立柱建物跡が増加し、土坑類が極度に少なくなる。後期とは場の利用状況が変化した可能性が窺える。晩期中葉以降について、大洞BC式土器は相当量の出土が得られているのに対して、大洞C1式以降の土器が皆無となる状況(忽然と姿を消す)について、短絡過ぎるかもしれないが集落の移動を行ったことを推定させる。集落の移動については、資源の枯渇や気候変動、社会の変容などの要因が考えられよう。

(2) 地形や気候に見た遺跡の立地環境

等高線の分布や地形の在り方などから推測して、長倉I遺跡の分布範囲は1万～1万5千㎡と推定され、今回調査を行った範囲は遺跡全体の1/3～1/5と推定される。遺跡は、南北方向に延びる痩せ尾根上に立地し、東西にある斜面部分に捨て場が形成されている。この地形を南北方向で見ると、南側に高い面があり、調査地中央部から調査地外北側にかけて平坦面を構成した後、台地の先端部に相当する北端は再び高い面となる。上述した地形を南北方向で切り断面的に見れば、馬の背状を呈する。住居群・掘立柱建物群・土坑群は、馬の背の凹部分に相当する範囲に占地する。今回の調査地は遺跡のほぼ中央部と思われる。

住居跡の項でも上述したとおり人工的な造成が一部確認されたが、あるいはこの台地全てが多少の造成が行われている可能性も考えられる。それらの鍵を握るのが、台地の北端部分(北側調査地外)の高い面にあると推定される。

また、風向きや日照条件といった気候環境は、日々の生活に際して、重要な要素と思われ、高地に所在する本遺跡は特に冬の風や雪とは密接な関係があると思われる。

風向きについて野外調査時(註2)には、西や南西からの風が多かったと記憶している。風向きと密接な関係があると思われる住居跡の出入り口施設を取り上げて考察してみる。

住居跡に見られる出入り口施設は、北側1棟（G15住居跡）、東側1棟（K11住居跡）、北東側1棟（F18住居跡）、北西側1棟（C16住居跡2号）に作られている。出入り口施設の方向に規則性は存在しないようであるが、風を真正面から受ける方向は回避していると思われる（註3）。遺跡の中心を大形住居跡（K11住居跡）付近と仮定すると、南側が高位（山側）であるため、南側に所在する住居は、若干は風を遮れるような地形条件となる。また、隼溝、隼柱穴、石列が山側（南側）からのみ検出されたことについて、地形的な要因も考えられないわけではないが、出入り口同様に風向きに関係する可能性がある。

日照条件について、上記したように東西が斜面地で、南側が山となるため、日の出時は日光のあたりが良好である。午前10時～午後2時位にかけては南側の山の木に遮られ、木陰や木漏れ日が発生する。季節的な生活環境を考えた場合、夏は直射日光を幾分避けられることから良好かもしれないが、秋から冬にかけては良好とは思われない。ただし、当時の環境が現在と同様南側の山に木が分布していたと仮定しての推測である。次に、日の出や日の入りの方向と遺跡の関係を考えてみた場合、思いつく事象として、人形住居跡の出入り口がほぼ日の出方向を向くこと、日の沈む方向が遺跡の西側に眺められる名久井岳の方向とほぼ一致する（秋においては）ことが挙げられる。ただし、夏至や冬至と言った特別な日時に確認したわけではないことを追記しておく。

（3）軽米町内の遺跡との立地の比較

本遺跡に見られる集落構成要因の中で、ある程度の所属時期を推定できるのは、住居群、独立柱建物跡群、土坑群、捨て場などである。1の遺構のまとめで上述したとおり、それらの事象も後期と晩期に大別される。上記した以外で、集落を構成する要因として立石と広場であった可能性が考えられる空間がある。

本遺跡の標高は285～296mで、長倉小学校などが立地する現在の長倉集落とは約50mの比高がある。河川との関係として、本遺跡と最も近い位置関係にある雪谷川とは、水吉橋付近（「水吉遺跡」や「畑内遺跡」の近隣付近に位置する橋で、河床は標高80m前後）で比較すると約210mの比高がある。軽米町における該期の遺跡と比較してみると、「大日向Ⅱ遺跡」が165～170m、「吠屋敷Ⅱ遺跡」が190～200m、「馬場野Ⅱ遺跡」が205～211m、「若成田Ⅳ遺跡」が198～217m、「駒板遺跡」が280～320mである。軽米町内の当該期遺跡と比較して、「駒板遺跡」を除けば通常の集落より高地に本遺跡が所在することがわかる。遺物や遺構の時期が本遺跡に非常に近い状況を示すのが上記した「駒板遺跡」で、本遺跡との立地条件についても高地であると言う点では共通性が窺える。

軽米町の縄文時代の遺跡の立地については、『大日向Ⅱ遺跡2～5次調査発掘調査報告書』中で斎藤邦雄氏がまとめたものが詳しい。それによると、後期前葉の大規模な集落跡は「駒板遺跡」や「若成田Ⅳ遺跡」に見られるように高位に位置し、後期後葉の段階で遺跡の分散化とともに拠点集落的な遺跡が見られ、晩期の段階において遺跡の分散化とともに集落の小規模化の傾向が認められると述べている。上記の内容は、概ね本遺跡にも当てはまる内容と判断できよう（註4）。

（4）遺跡の性格付け

本遺跡のあり方として、後期前葉については検出住居は少ないものの、相当量の上器が出土している状況や軽米町の該期の遺跡が高地に所在する事例が見られることから判断して、高地で営まれた集落として捉えておきたい。ただし、四季に渡って定住した集落とは捉え難く、季節的に生活を営む場ではないかと推定される。後期中葉～晩期前葉について、遺跡の性格が前段階から変容し、精神的な活動を行った特殊な場を兼

ねた集落、例えば祭祀に関連する遺跡ではなかったかと考えている。通例的に祭祀的な遺構としては配石遺構が代表的であるが、本遺跡からは立石遺構としたものを検出している。ただし、北側調査区外に延びるため、その全貌は不明である。

祭祀的な場とした場合、それに関係する遺物の有無が問題となろう。用途不明品、例えば特殊な土器、土製品、石製品にとりあえずそれを求めてみた。上記に該当する可能性がある遺物は、朱が塗布された注口土器、単孔土器、異形土器、香炉形土器、人面付き土器、土偶、動物形土製品、ミニチュア土器、鐔形土製品、分銅形土製品、土鈴、キノコ形土製品、スプーン形土製品、スタンプ形土製品、内面渦状土製品（イモ貝形土製品）、円盤状土製品、三角形土製品、粘土塊、石剣・石刀、石棒、環状石製品、岩偶、石製未製品などである。ただし、上記した遺物全てを、祭祀に関連する遺物として性格付けすることは危険であり、それらの出土状態などを再吟味することを今後の課題としたい。

本遺跡の性格付けについてまとめると、後期前葉を集落遺跡に、それ以降の時期を祭祀場を兼ねた遺跡ではないかと推定する。後期前葉を集落とした理由は、(3)で述べた「駒板遺跡」との類似性にある。同じ後期前葉の隆盛が確認されるだけでなく、出土遺物的にも鐔形土製品やキノコ形土製品など類似点が多く、祭祀の場としての性格付けは難しいと判断したためである。ただし、それでも集落内（居住地）で祭祀が行われた可能性は、捨て切れないと思う。

後期中葉～晩期前葉期を祭祀場を兼ねた集落と推測する材料としては、本章で述べてきた様々な事象をトータル的に考えれば、日々居住したのみの集落と捉えるのは、むしろ不自然ではないかの判断にある。抽象的な結論であり、勿論、遺物の細部やその出土状態などの検討は今後に課題を残すが、調査に携わった者として、あえて言及しておきたいと思う。おそらく、将来的に北側調査区外の部分が調査される機会があれば、祭祀場であることが解明できる手掛かりを得られると確信している。

最後に祭祀場として性格付けた諸要素をまとめて終わりとする。

- ① 住居跡と掘立柱建物跡の空間占地の重複
- ② 長期間に亘って継続的に営まれていた遺跡ではあるが、地床炉に伴う焼土の発達具合の悪さなどから、毎時生活した施設（定住用）であることには否定的にとれる（註5）
- ③ 大形住居、立石、広場の存在
- ④ 人面付土器、単孔土器、土偶、石剣に代表される用途不明遺物の多さ
- ⑤ 土偶、石剣・石刀、磨製石斧に見られた別地点への廃棄
- ⑥ 西部捨て場出土の中に見られたイノシシの未熟個体と思われる獣骨（縄文人は子供の獣は食べないと言われる？）の存在
- ⑦ 地形や気候から見た立地環境

＜註＞

（註1）1980年に行われた「長倉遺跡」の報告書を参照すると、若干層ではあるが円筒土器が出土している。また、本遺跡から北約1.5kmには該期の大規模な集落跡が検出された「畑内遺跡」が、西約3kmには円筒下層期全般にかけての捨て場が検出された「人馬I遺跡」がある。円筒下層期に伴う捨て場が検出された遺跡からは、土器を中心に膨大な遺物が出土量するのが常である。本遺跡の出土量はおよそコンテナ5箱強である現状を考えると、円筒下層期の捨て場にしては遺物量が少ないように思われる。調査地外に集落の本体があるのか、あるいは晩期の遺構造成時に破壊を受けているのであろうか。本遺跡の乗

る瘦せ尾根が、馬背状（馬の鞍状）を呈する地形であることについて、調査の主担当である中川は「晩期の大造成工事で中央を削平して平坦化したのではないかと」との仮説を立てている。将来的に調査地北側が発掘調査されることがあれば、高い面が自然地形なのかあるいは人工的に盛土されたものであるのか、解明される可能性はある。

（註2）筆者が野外調査に携わった時期は、9月中旬～11月初旬である。雪が積もるのもう少し後であるにしても、11月初旬で十分に寒い環境の地であり、長倉小学校などがある現在の集落とも約50mの比高がある場所である。冬季において、雪深いこの高地の遺跡に、人が生活できるのか疑問である。

（註3）出入口施設を始め、壁溝、壁柱穴は、地形的な要因（制約）による可能性も勿論ある。具体的には、出入口施設は斜面上方相当以外の場所に、壁溝、壁柱穴は斜面上方側に構築された可能性である。通例的に捉えれば、上記したような地形的な制約が、気候環境的要因より優先して捉えられべきかもしれないが、筆者はこの遺跡が高地に立地すると言う気候環境は無視できないとの判断に立脚して考察した。

（註4）「晩期集落の小規模化の傾向」という点について、本遺跡を小規模集落と捉えるべきかどうかの判断は、同時期存在の住居数が明確にわからないため難しい。

（註5）②については、季節的に営まれる集落である可能性も否定はできない。

第IX章 長倉 I 遺跡出土動物遺存体

佐々木 務

今回の長倉 I 遺跡の調査で確認されている動物遺存体は、哺乳綱がイノシシ・シカ・ノウサギ・種不明、鳥綱がキジ?・種不明、硬骨魚綱がコイ科、軟骨魚綱がサメ類などである。確認されている動物遺存体の中でイノシシ・シカが量的には主体となっており、さらにこの2者のうちイノシシが多い。臼歯片を取り上げたまとまり毎に一括して数えると、イノシシは79点、シカは43点出土している。その他のものはいずれも2~3点程度でごく少ない。量的に主体を占めるイノシシ・シカは共通して、臼歯の出土が圧倒的に多い。他の部位は指の骨などが少数見られる程度である。表中で「臼歯片」としているものは臼歯であるが部位の特定はできない破片が複数出土しているものである。

長倉 I 遺跡で出土した骨類は変色など熱を受けた痕跡のある破片も多いが、そうした痕跡のない破片も同様に多い。熱を受けた骨類が腐食せずに残存することは多いが、今回はそうではないものも多く、貝塚で貝殻が多いため残存しているのと同様、骨類の量が多いことによって熱を受けていないものも残存したと思われる。

主体を占めているイノシシは前述のとおりほとんどが臼歯だが、これらには熱を受けた痕跡が認められるものがほとんど無い。また、歯根部が確認されないものがほとんどである。このことはシカについても共通する。歯根部が確認されないことについては、未萌出の段階でまだ歯根部が形成されていない、あるいは歯冠部のエナメル質だけが残存し歯根部は腐食したといったことが可能性として考えられる。萌出前のものと咬合面の摩擦が無いはずだが、今回出土したイノシシの臼歯の状況を見ると、咬合面が摩擦しているものとしていないものの両方が認められる。また、歯根部の外れそうになった左下顎M3や萌出前の左上顎M3が確認されている。こうしたことから、歯冠部だけが残った場合が多いと考えられる。ただ、確認されたM3の多くが摩擦のないものであることや、歯以外の部位で骨端部が適合していない部位も出土していることから、今回長倉 I 遺跡で出土しているイノシシのかなりの割合が未成熟な個体であると考えて差し支えないと思われる。

シカの臼歯についてははばらばらになったものが多く必ずしも十分には確認できなかったが、咬合面の摩擦が確認されたものはほとんど無く、基本的に未成熟な個体が多くを占めていると推定される。

種不明で小型のほ乳類としたものは、ノウサギ程度の大きさか、それよりやや小型のほ乳類であるが、比較標本の不足のため同定できなかったものである。多くが熱を受けているが、シカ・イノシシで見られたような未成熟な個体は無い。

コイ科は椎骨の出土で、熱を受けて白く変色している。椎体の径が3~4mmで比較的大型のコイ科魚類の椎骨と考えられる。種までの同定はできないが比較的大きな個体のものと考えられる。サメ類については歯が2点出土している。種名の特定まではできなかったが、2点とも平面形がほぼ正三角形で鉅歯縁をもつ。

イノシシ・シカで未成熟個体が多く歯が主体を占めることが長倉 I 遺跡の特徴と言える。歯自体が残りのよい部位だが、他の部位がこの包含層内に初めからあったのかどうか検証することができないとなぜ臼歯が多く出土しているのか説明できない。今後の課題になる。

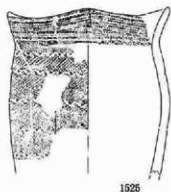
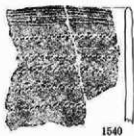
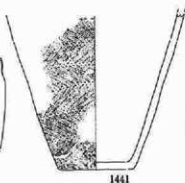
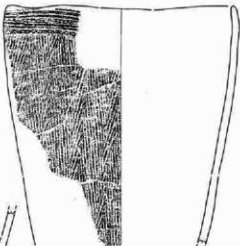
〈参考文献〉

- 杉山壽榮男（1922年）『原始文様集』
- 今井富七雄・磯崎正彦（1963年）『十腰内遺跡発掘調査報告書』十腰内遺跡調査団
- 葛西勲（1979年）「十腰内Ⅰ式土器の編年的組分」『北奥古代文化第11号』北奥古代文化研究会
- 安孫子昭二（1980年）「コブ付き土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記第5号』
- 大塚達朗（1983年）「縄文時代後期加曾Ⅲ式土器の研究（Ⅰ）—最近の成果の検討と新たな分析—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要第2号』東京大学文学部考古学研究室
- 会田啓弘（1997年）「東北地方縄文時代後期後葉から晩期の土器装飾文様に見られる2種のキズミ」『古代第104号』早稲田大学考古学会
- 日下和寿（1998年）「岩手県内の動物形土製品の集成」『東北民族学研究』東北学院大学民族学OB会
- 稲野裕介（1998年）「イモガイ形土製品」の名称はなぜ適切か」『岩手考古学会第10号』岩手考古学会
- 鈴木克彦（1997年）「注Ⅰ土器の研究」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要平成8年度第2号』
- 熊谷常正（1989年）「早川土器考」『国学院大学考古学資料館紀要乙益重隆先生古稀記念号』
- 種野裕介（1982年）「亀ヶ岡文化における内面溝状土（石）製品とその分布」『史学第五二巻2号』
- 宮 宏明（1987年）「スタンプ状土製品に関する若干の問題」『北海道考古学第24巻名取武光先生追悼特集』北海道考古学会
- 児玉大成（1998年）「玉象嵌土製品について」『北方の考古学』野村薫先生遺稿記念論集刊行会
- 鈴木克彦（1996年）「亀ヶ岡式土器分布論序説—圏内における土器分布と地域差—」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要平成7年度第1号』
- 小田野哲彦ほか（1986年）『岩手遺跡』一戸町文化財調査報告書第17集—戸町教育委員会
- 工藤大（1997年）『馬淵川流域の遺跡』『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館
- 鈴木忠治他（1986年）『軽米町史上巻』軽米町史編纂委員会
- 国立歴史民族博物館（1992年）「土偶とその情報」『国立歴史民族博物館研究報告第37集』
- 谷口康浩（1990年）「土偶のこわれ方」『季刊考古学第30号』雄山閣出版
- 植木 弘（1990年）「土偶の大きさ」『季刊考古学第30号』雄山閣出版
- 鈴木克彦（1980年）「土偶の研究序説」『青森県立郷土館調査研究年報第6号』青森県立郷土館
- 相馬生奈子（1989年）「岩手県雨庭遺跡出土の土偶—集落における土偶保有構造の分析のために—」『明治大学考古学博物館館報NO.4』明治大学考古学博物館
- 高柳圭一（1987年）「東北地方に於ける縄文時代後期後半の土偶—所謂増村土器に伴う土偶と透光器土偶の出現について—」『潮航』早稲田大学大学院文研考古談話会編
- 工藤伸一・鈴木克彦（1998年）「キノコ形土製品について」『青森県埋蔵文化財調査センター建久紀要3号』
- 山本正敏（1991年）「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学第35号』雄山閣出版
- 平口哲夫（1991年）「木製品を作り出した石器」『季刊考古学第35号』雄山閣出版
- 岡村道雄（1976年）「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 岡村道雄（1979年）「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要第5巻』東北歴史資料館
- 北越考古学研究会（1997年）『北越考古学第8号』新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究—新潟市中野遺跡の共同資料調査—
- 荒川隆史（1997年）「大型竪穴住居の建設—新潟県中頸城郡中郷村和泉A遺跡の調査を中心に—」『考古学ジャーナル1月号NO412』

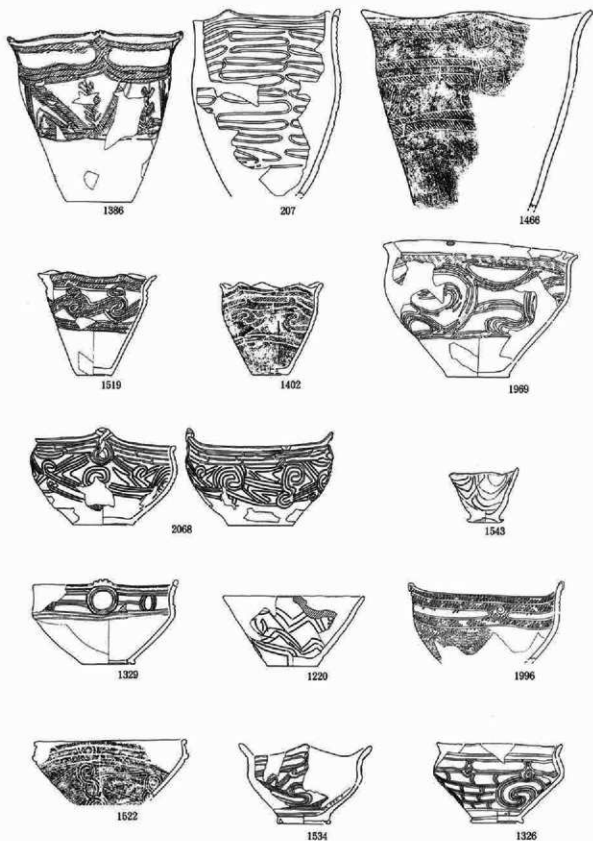
- 武藤康弘 (1995年)「民族史からみた縄文時代の堅穴住居」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集—「縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題」— 帝京大学山梨文化財研究所
- 加藤三千雄・南 久和・山田 治 (1986年)『真贋遺跡発掘調査報告書 能都町教育委員会真贋遺跡発掘調査団
- 西野秀和・岡本恭一 (1989年)『米沢遺跡発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
- 仲田茂司 (1994年)『西方前遺跡の縄文土器』三春考古学研究会 福島県田村郡三春町
- 杉山武ほか (1978年)『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集青森県教育委員会
- 上野隆博・児玉大成ほか (1996年)『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第30集 青森県教育委員会
- 石塚和則 (1986年)『樽屋塚遺跡発掘調査報告書』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 阿部博志・佐藤則之・藤田和明・須田良平・古川一明 (1990年)『榎森遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集 宮城県教育委員会
- 寺崎裕助 (1996年)『清水上遺跡Ⅱ堀之内インタチェンジ関連発掘調査報告書』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集
- 梶生正一・桜井方彦・高橋裕子・菊地利和・高橋義介 (1986年)『湯沢沢遺跡発掘調査報告書』滝沢村文化財調査報告書第2集 滝沢村教育委員会・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤嘉広 (1996年)『発掘された地震痕跡—岩手県編—』埋文関係救護連絡会議埋蔵文化財研究会
- 太田陽子・島崎邦彦 (1995年)『古地震を探る』古今書院
- 久馬一剛・永塚敏男 (1987年)『土壌学と考古学』博友社
- 寒川旭 (1994年)『地震考古学の誕生』『発掘を科学する』岩波新書
- 寒川旭 (1989年)『地震の痕跡を遺跡で探す』『新しい研究法は考古学になにをもたらしただか』第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編

〈岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター関連〉

- 三浦謙一 (1978年)『湯沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第2集
- 高橋与右衛門 (1980年)『川町遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第26集
- 村上達夫 (1983年)『叭屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第47集
- 金子昭彦 (1996年)『寺久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第239集
- 中川重紀 (1996年)『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259集
- 高木 晃 (1999年)『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書第6～8次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集



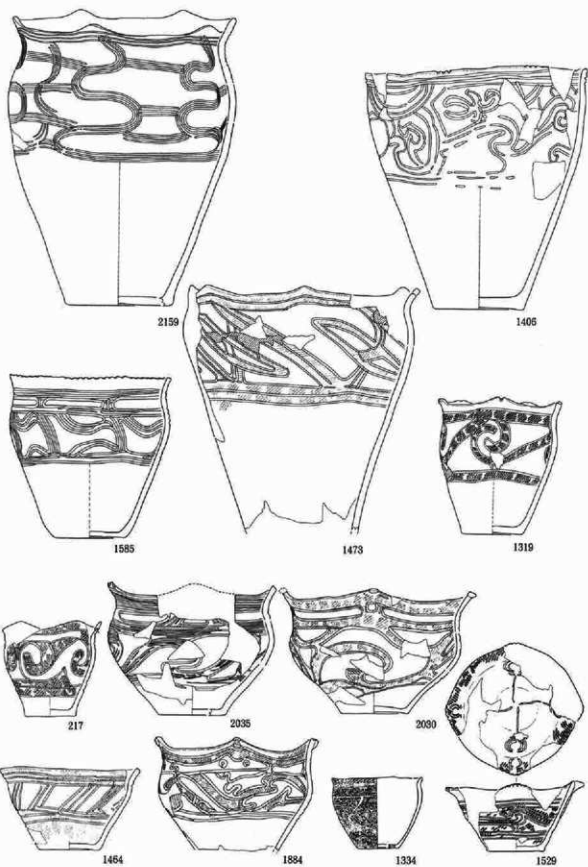
第449圖 第I・II群土器集成圖



第450圖 第三群1類-1土器集成圖



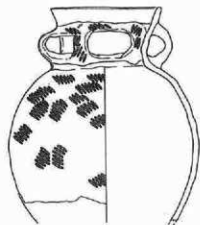
第451图 第三群1類-1・2土器集成图



第452图 第三群1類-2土器集成图



第453图 第Ⅲ群1類-2・3土器集成図



2056



1434



1920



1649



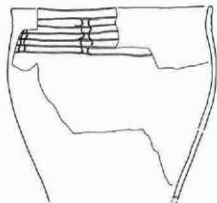
1285



1216



2058



1316



2170

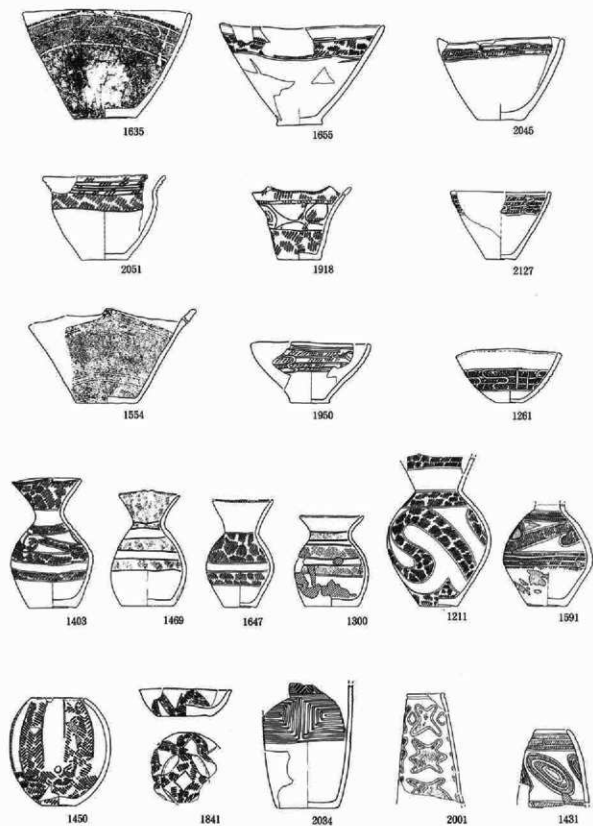


1921



1311

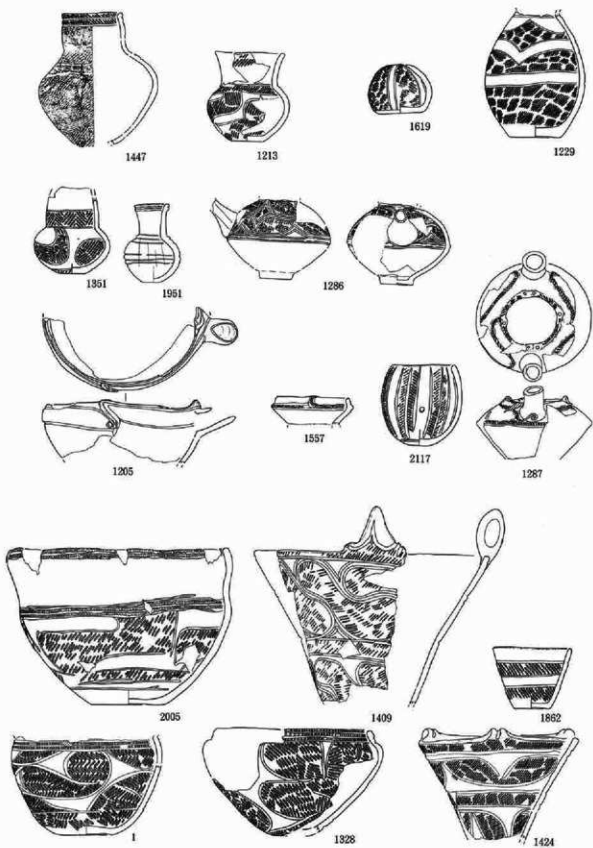
第454图 第Ⅲ群1類・第Ⅲ群2類-1土器集成图



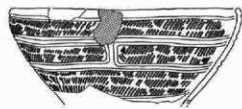
第455圖 第三群2類-1 土器集成圖



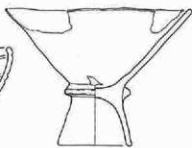
第456图 第Ⅲ群2類-2 土器集成图



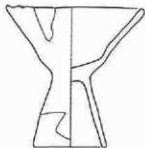
第457图 第三群2類-2・第三群3類土器集成図



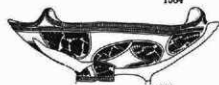
1384



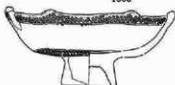
1306



1730



222



1340



633



1214



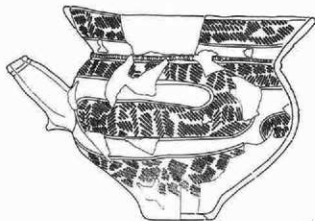
1894



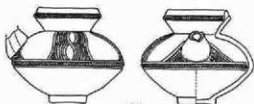
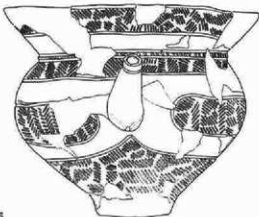
2116



2055



1876



1262

幸加曾利B, 新併行



1322

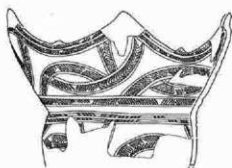
第458图 第三群3類土器集成图



第450图 第Ⅲ群3類土器集成图



2004



1445



1818



2157

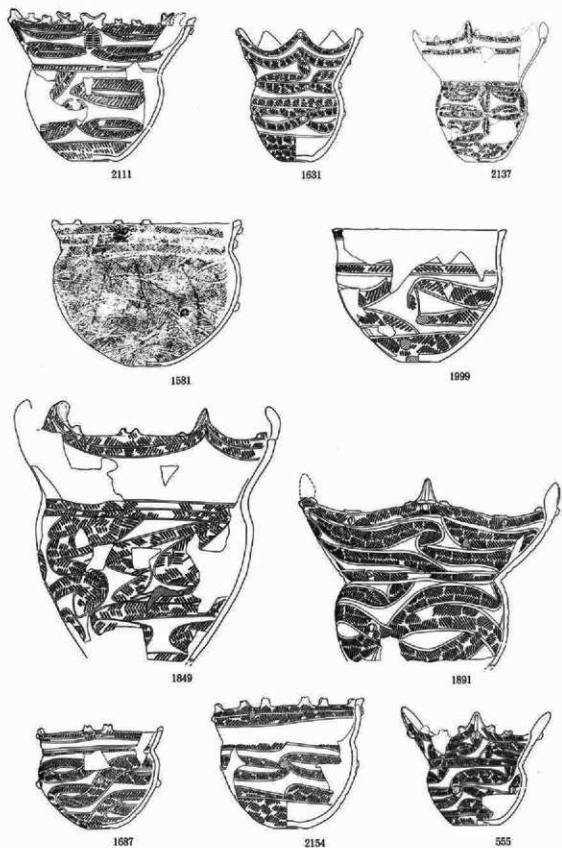


1997



2164

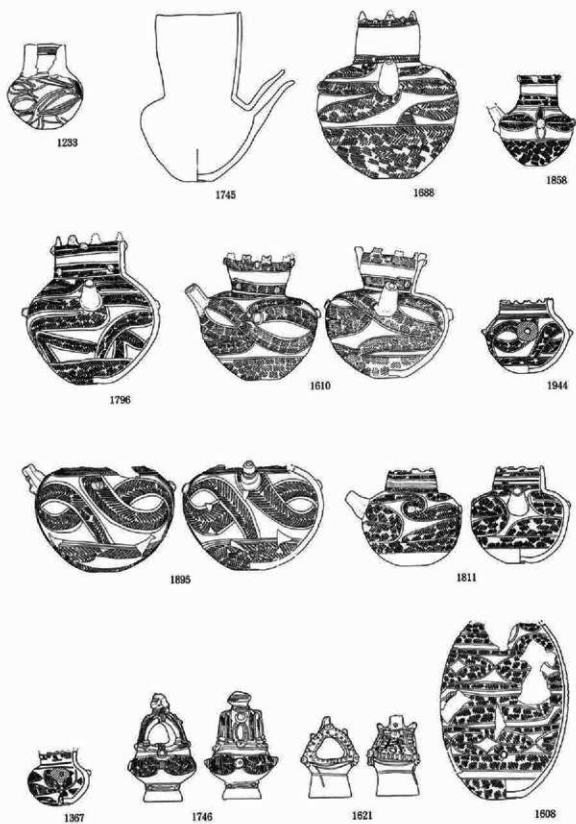
第460图 第Ⅲ群4類土器集成図



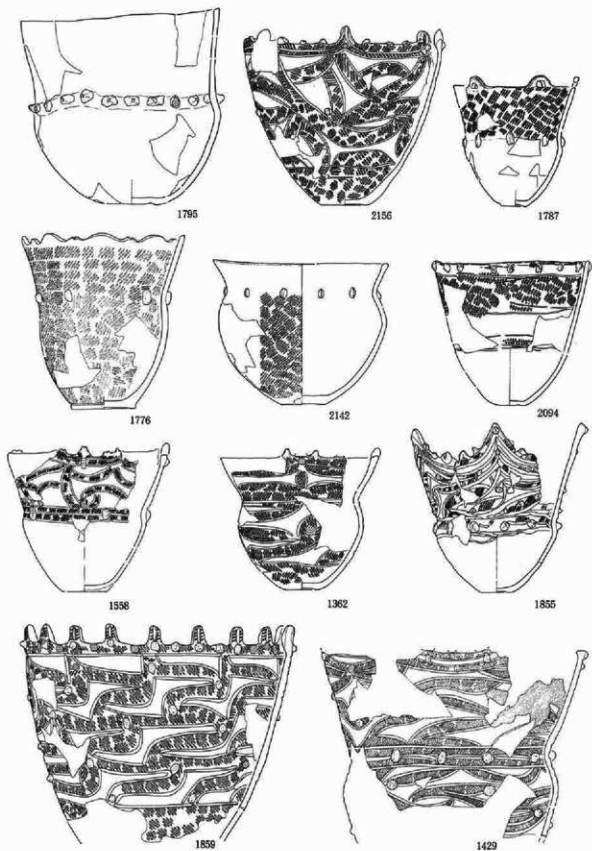
第461图 第三群4类土器集成图



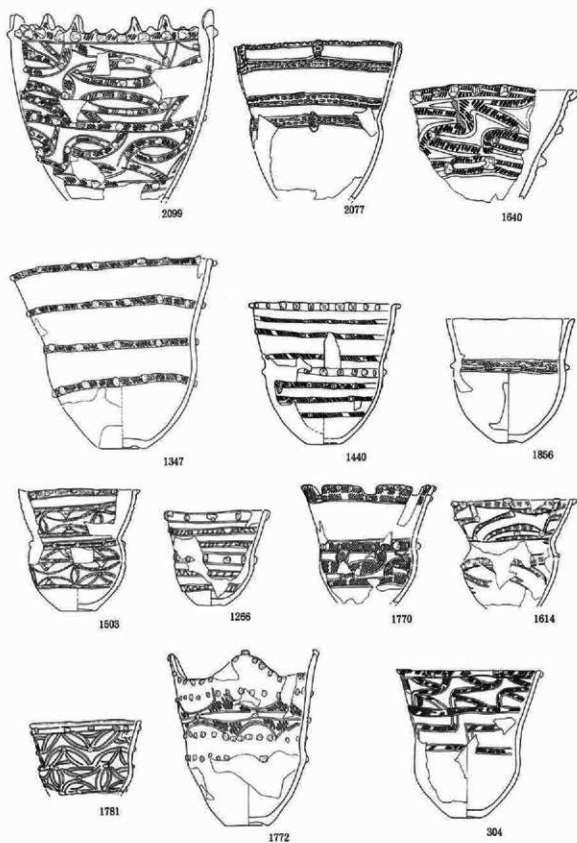
第462图 第三群4類土器集成图



第463圖 第三群4類土器集成圖



第464圖 第三群5類土器集成圖



第465圖 第三群5類土器集成圖



2091



1833



1857



2092



1569



2081



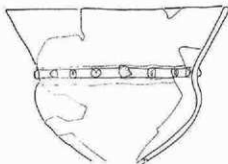
2120



2130



1771



1506



1427



1387



1499



1850



1871

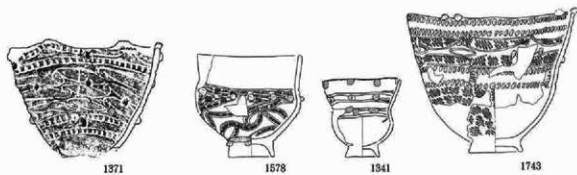
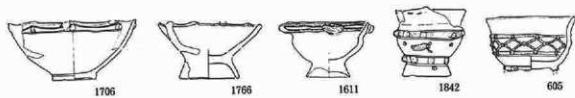
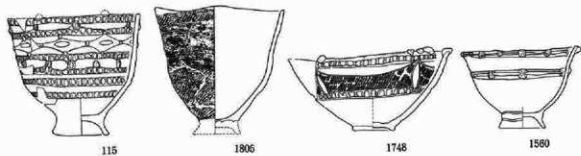


1623

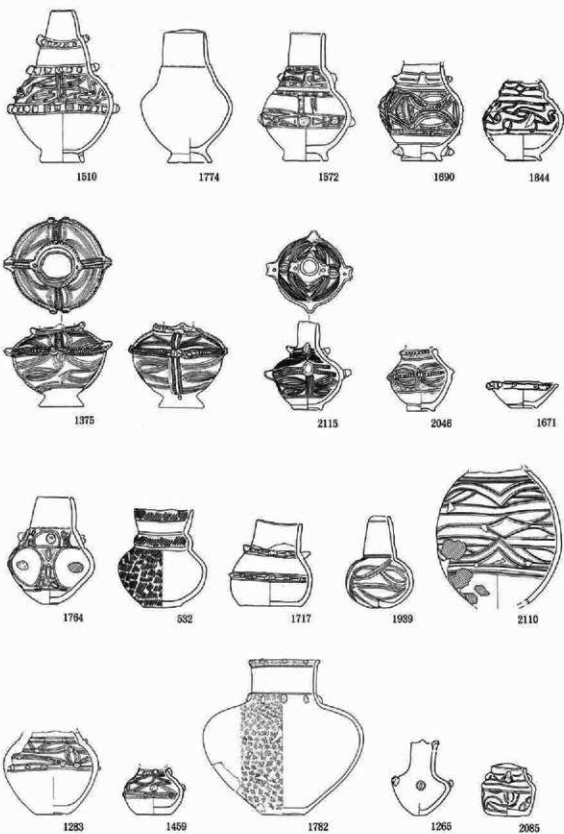


1788

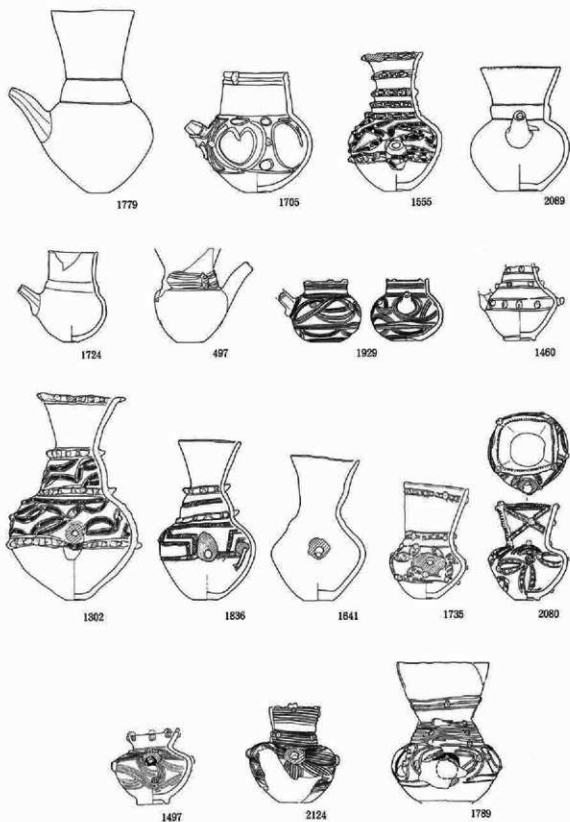
第466图 第三群5 类土器集成图



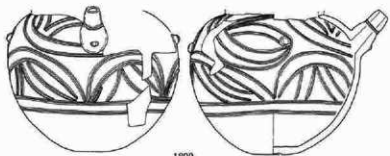
第467图 第Ⅲ群5類土器集成图



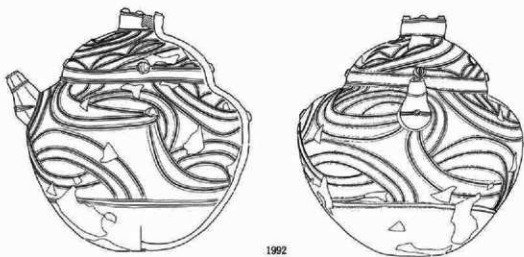
第468图 第三群5类土器集成图



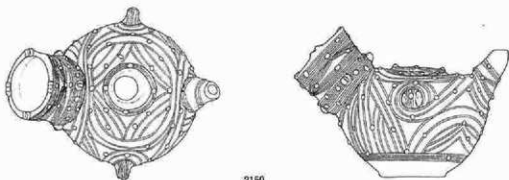
第460图 第Ⅲ群5类土器集成图



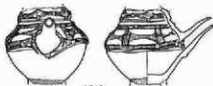
1890



1992

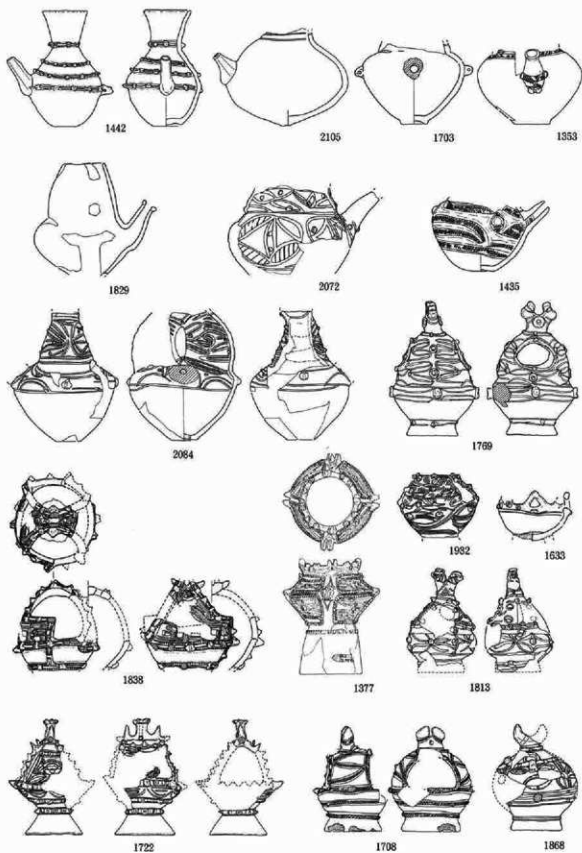


2150



1642

第470圖 第三群5類土器集成圖



第471图 第三群5类土器集成图



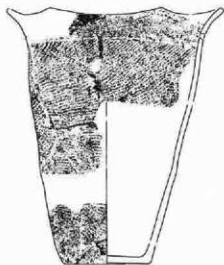
531



1739



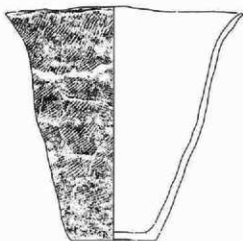
1358



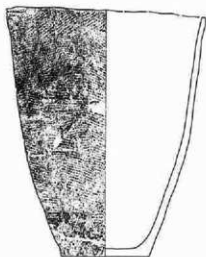
1606



2022

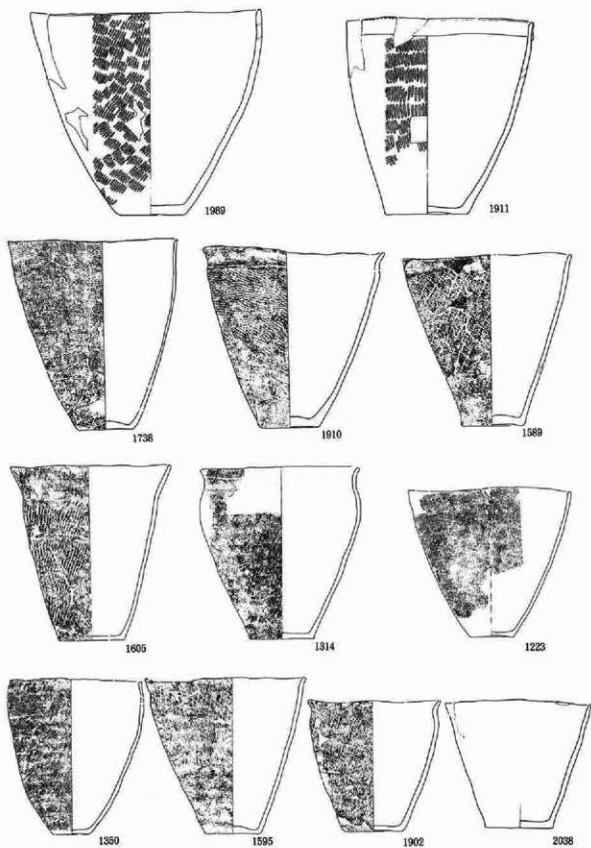


1219

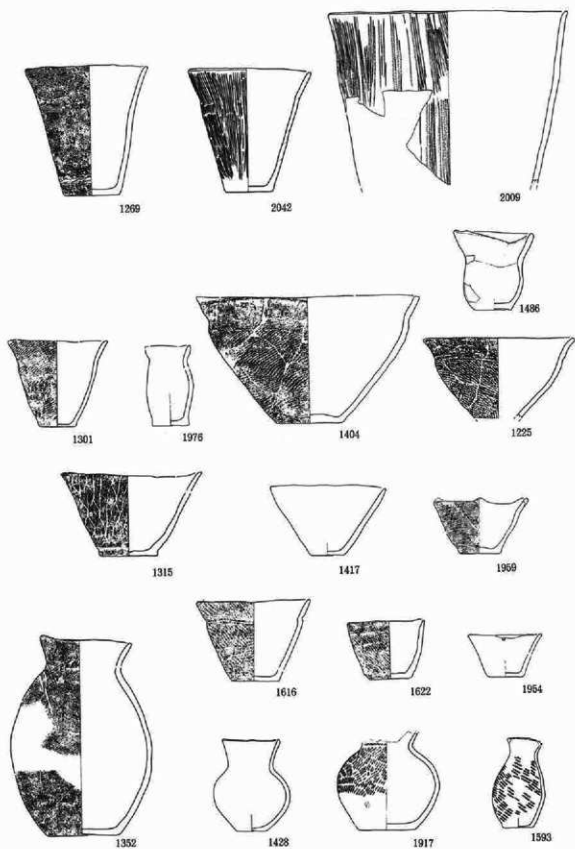


1549

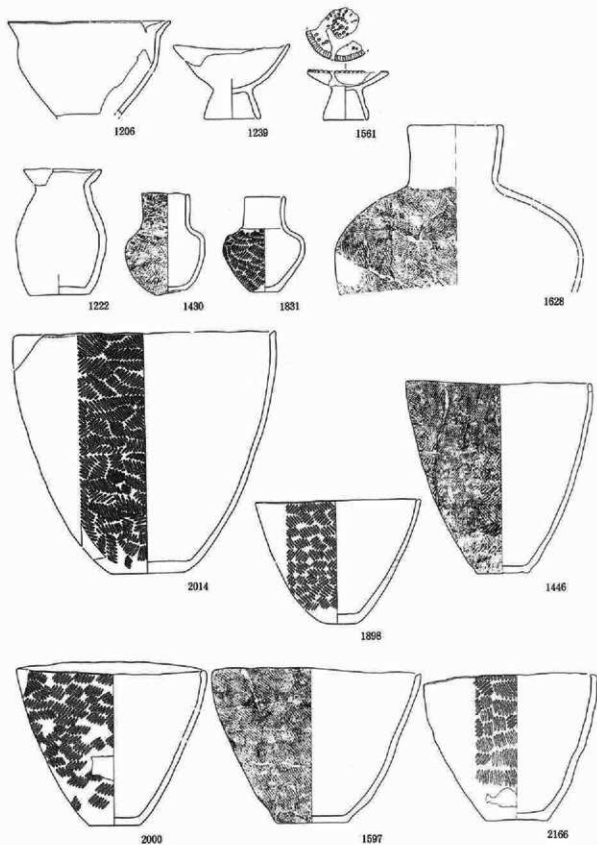
第472図 第三群5類・第三群6類-1土器集成図



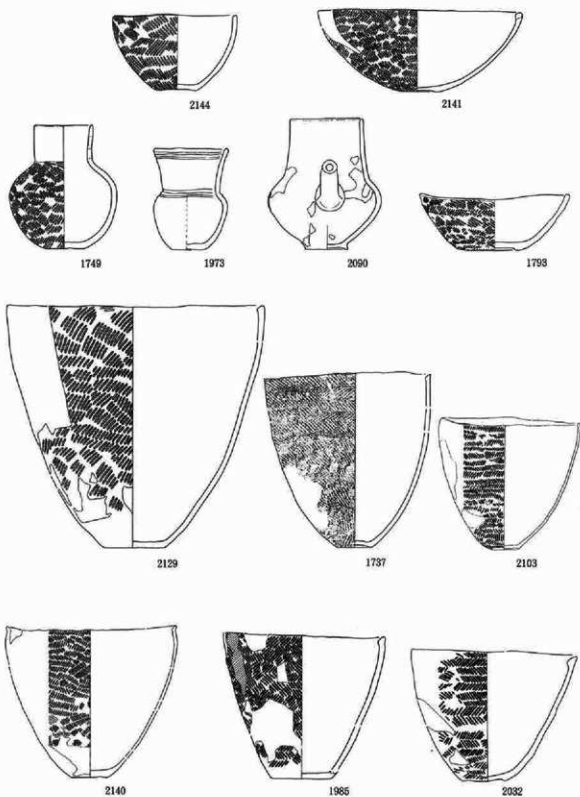
第473圖 第五群6類-1土器集成圖



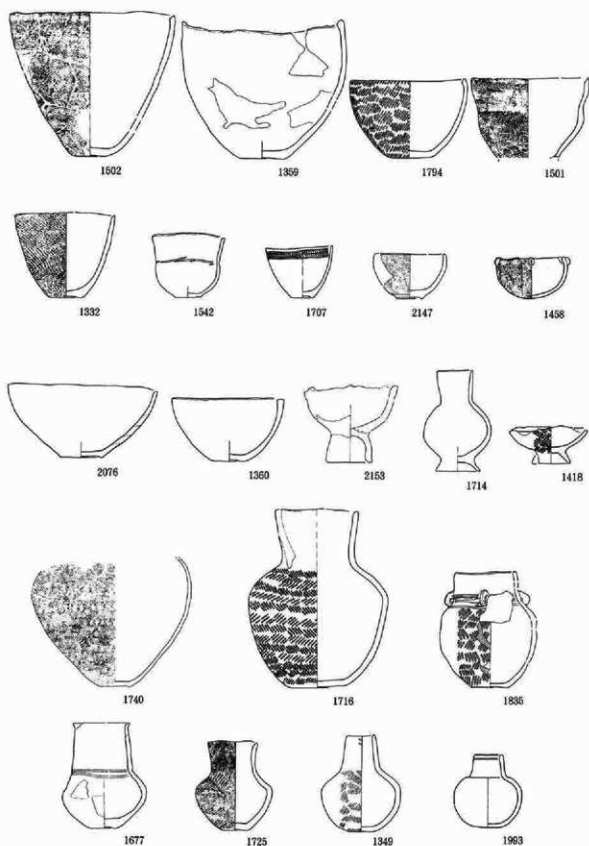
第474图 第三群6類-1土器集成图



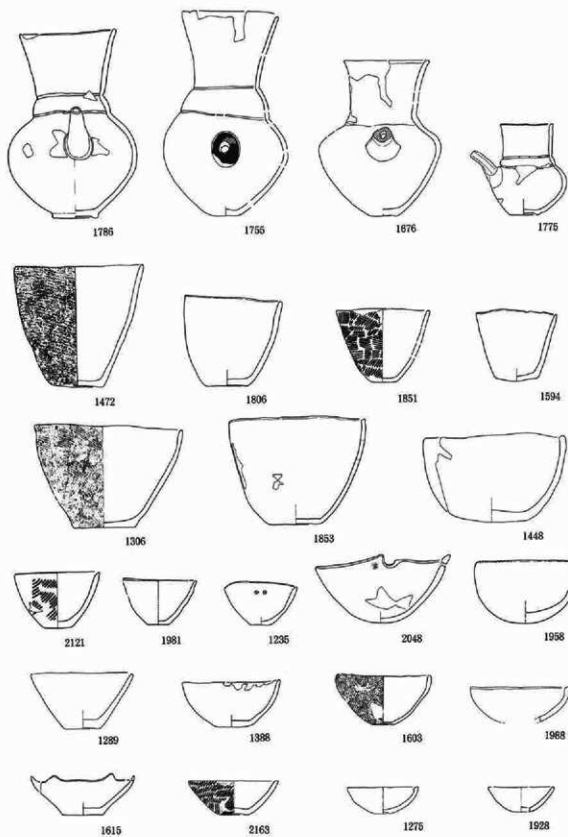
第475图 第三群6類-2・3土器集成图



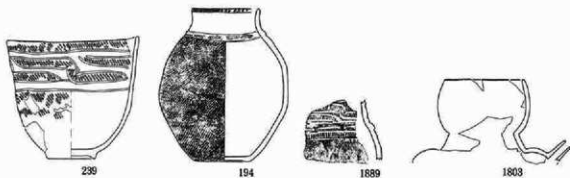
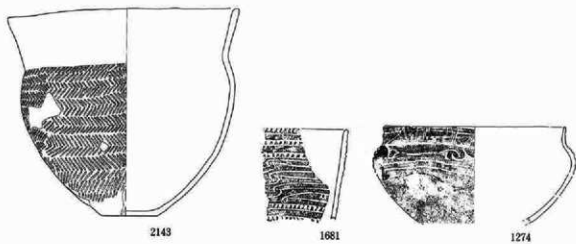
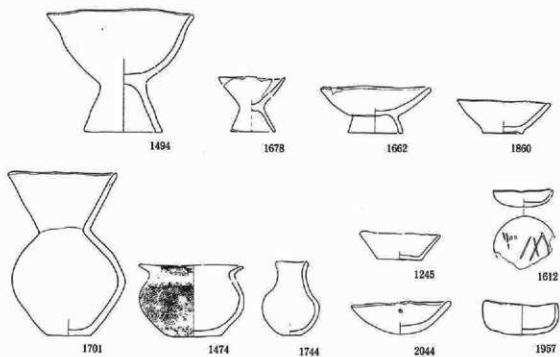
第476图 第Ⅲ群6類-3・4 土器集成图



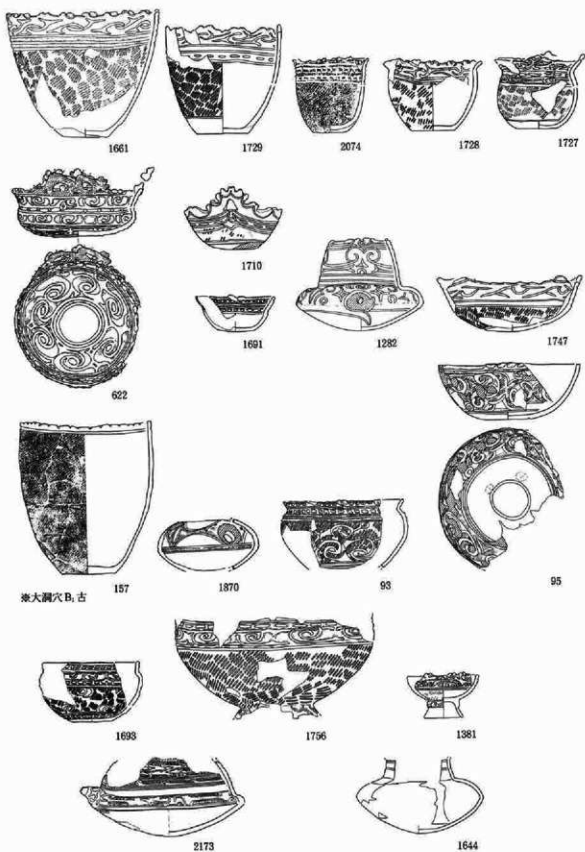
第477图 第三群6類-4 土器集成图



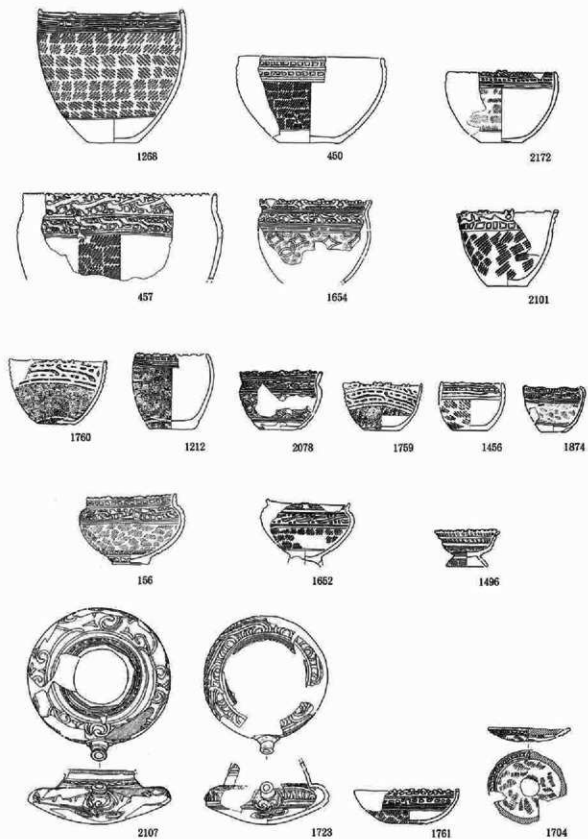
第478图 第Ⅲ群6類-4 土器集成图



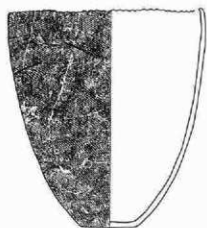
第479图 第三群6類・第IV群1類-1土器集成図



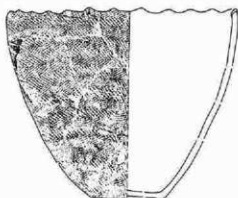
第480图 第IV群1類-2・第IV群2類土器集成图



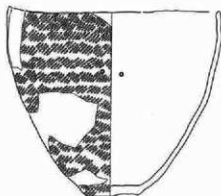
第481图 第IV群2類-2 土器集成图



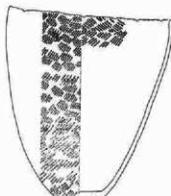
1762



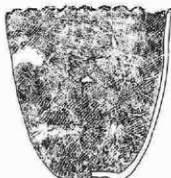
1620



1066



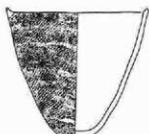
1096



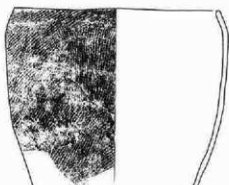
1715



193



1742



134



1575

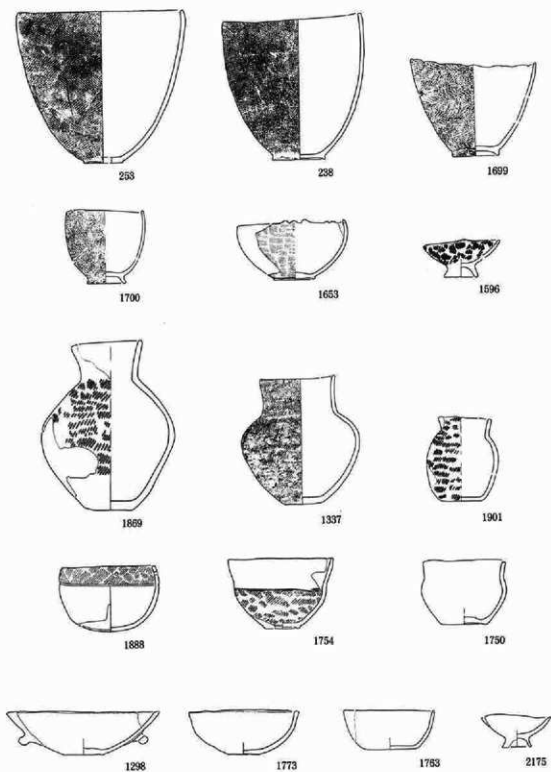


1751

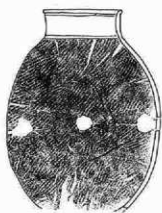


2062

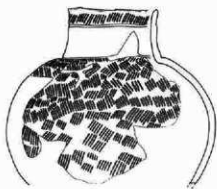
第482图 第IV群5類土器集成图



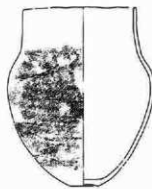
第483圖 第IV群5類・第IV群6類土器集成圖



286



2176



763



1663



1297



1741



1296



240



1933



1892



1506

第484圖 第IV群5類・第IV群6類土器集成圖



1624



502



503

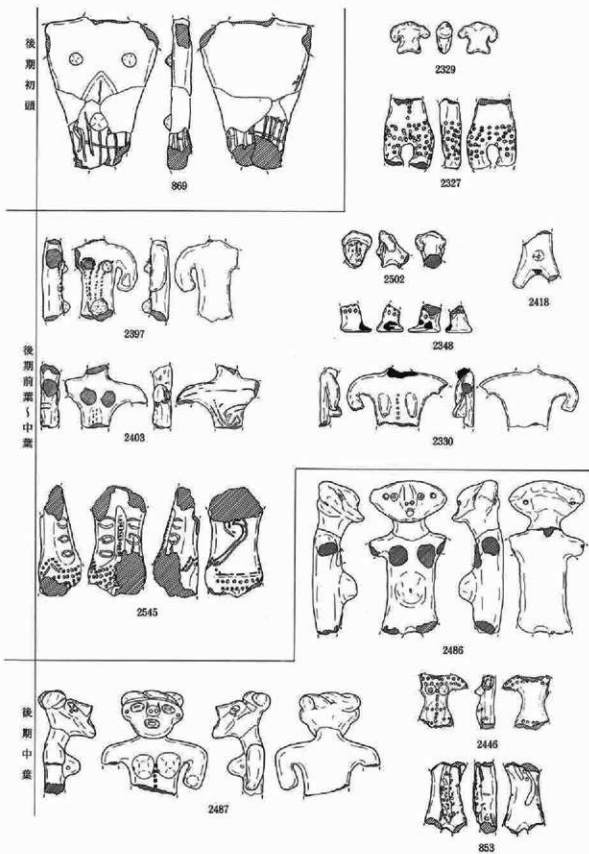


473

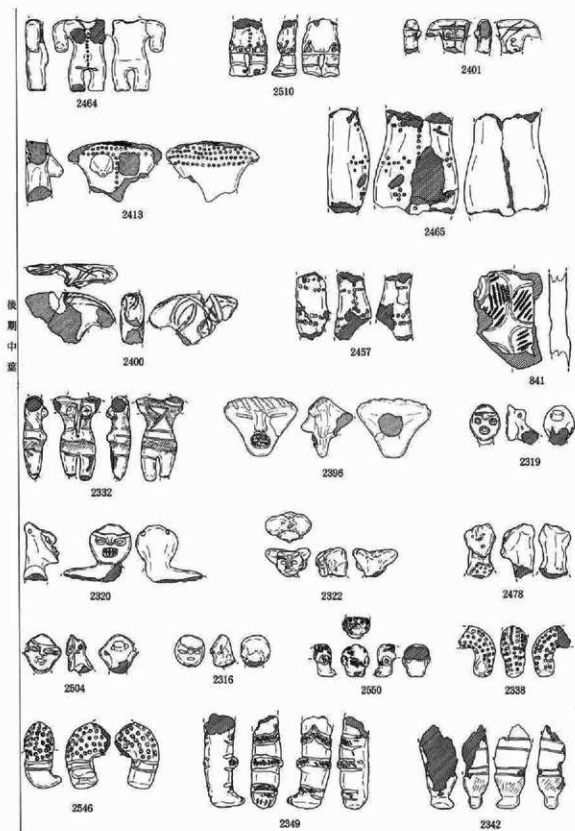


9

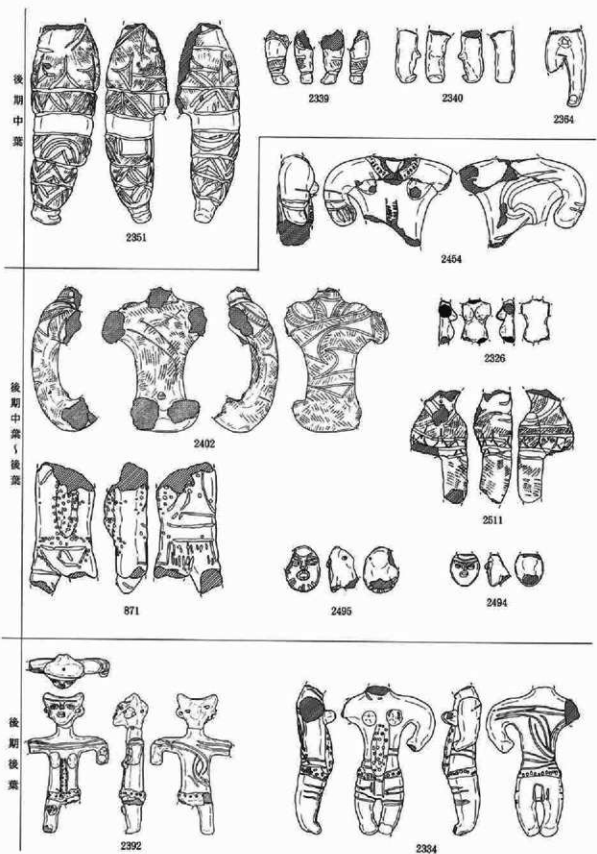
第485圖 第V群土器集成圖



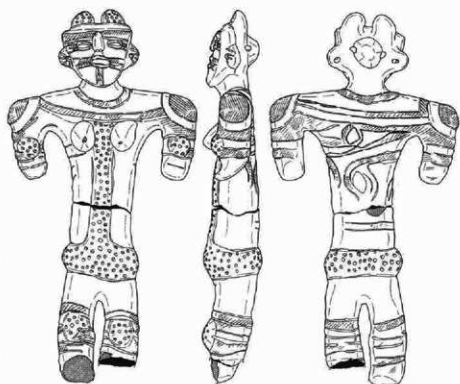
第486圖 土偶集成圖1



第487图 土偶集成图2



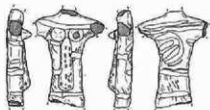
第488圖 土偶集成圖3



2416



2458



2389



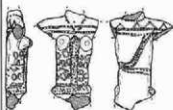
2381



2438



2441



2432

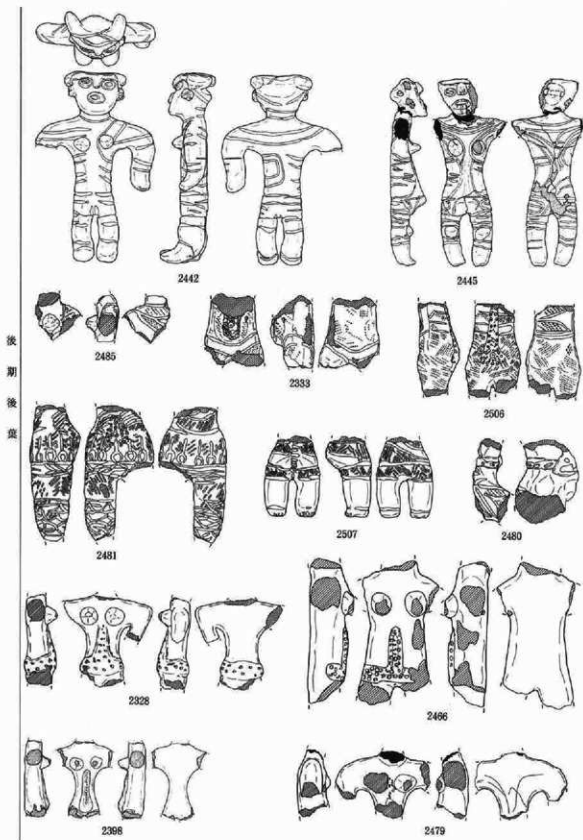


2412

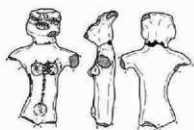


2484

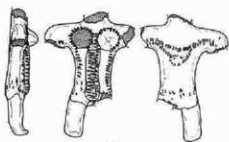
第489圖 土偶集成圖4



第490圖 土偶集成圖 5



2395



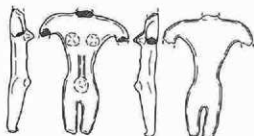
2431



2508



2324



2325



844

2547



2437



2317



2482



2471



2474



2318

2321



2470



2315



2475



2493

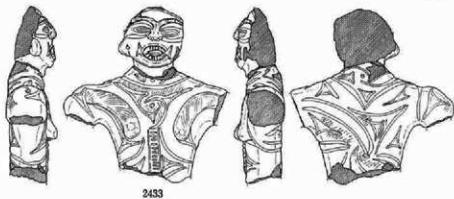
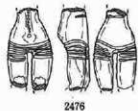
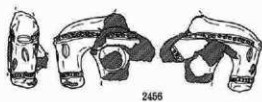


2314



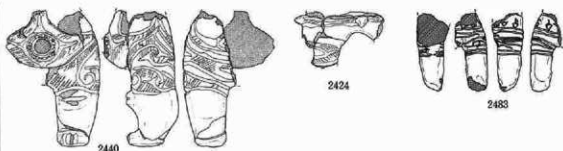
884

第491图 土偶集成图6



第492图 土偶集成图7

後期後葉、末期



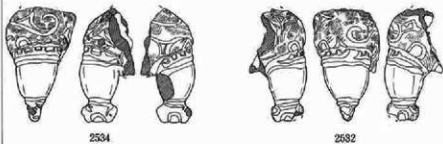
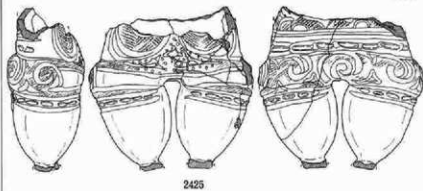
後期天葉、晚期



晚期初期



晚期前葉



第493圖 土偶集成圖 8

晩
期
中
葉



2453

晩
期



2540

2381

2539

2551

2543

2450



2635

2384

2538

2544

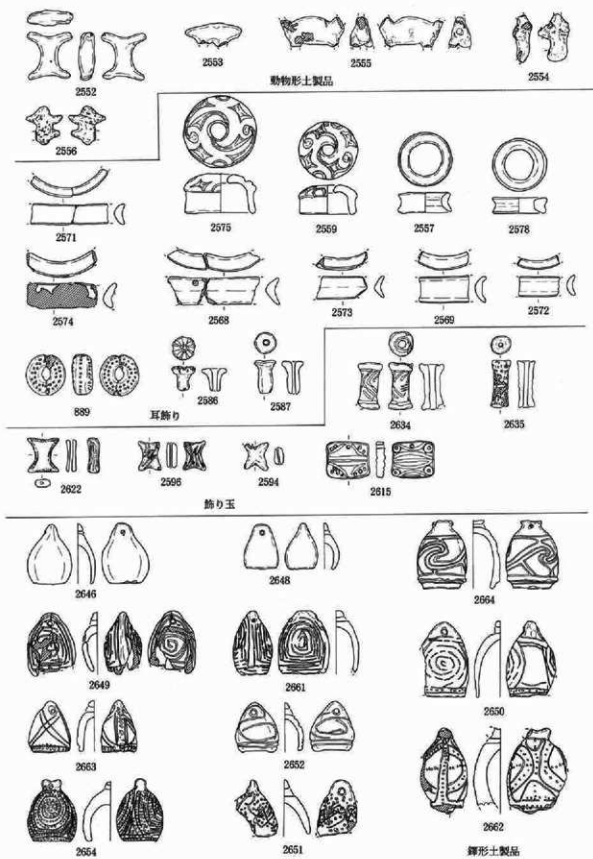
そ
の
他



2503

2473

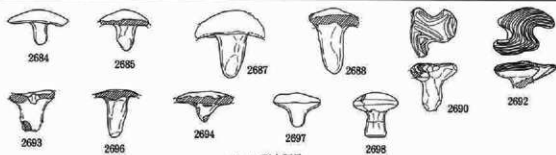
第494図 土偶集成図9



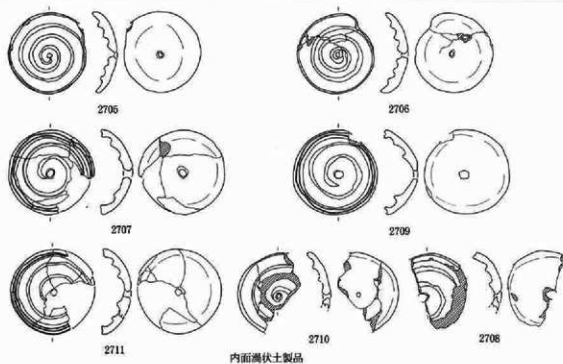
第495図 動物形・耳飾り・飾り玉・鐘形土製品



分銅形土製品

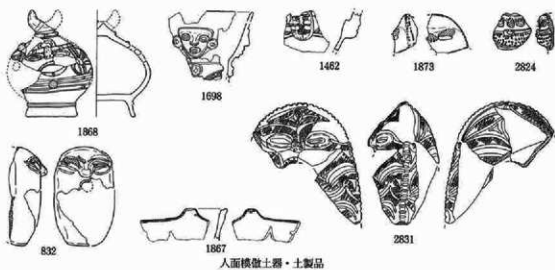
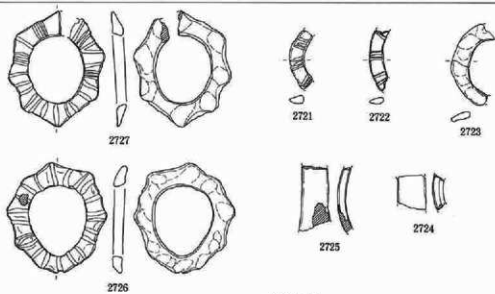
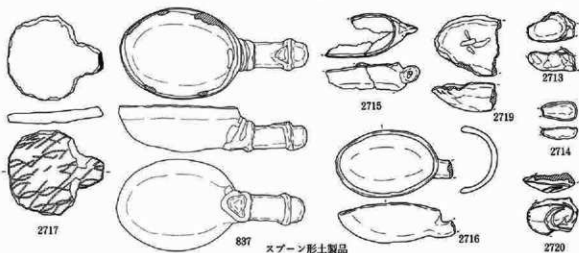


キノコ形土製品

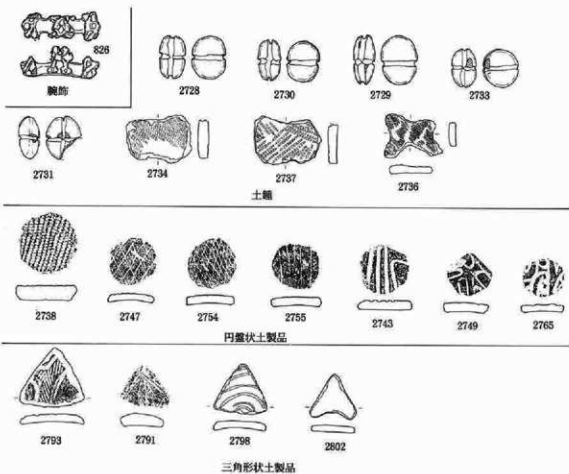


内面渦状土製品

第496図 分銅形・キノコ形・内面渦状土製品



第497図 スプーン形・銅形・人面模倣土製品



第498図 腕飾り・土器・円盤状・三角形状土製品



2123



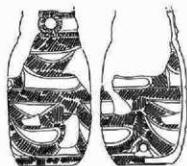
2182



1668



1739



1477



1864



809



119



1680



1450



2117

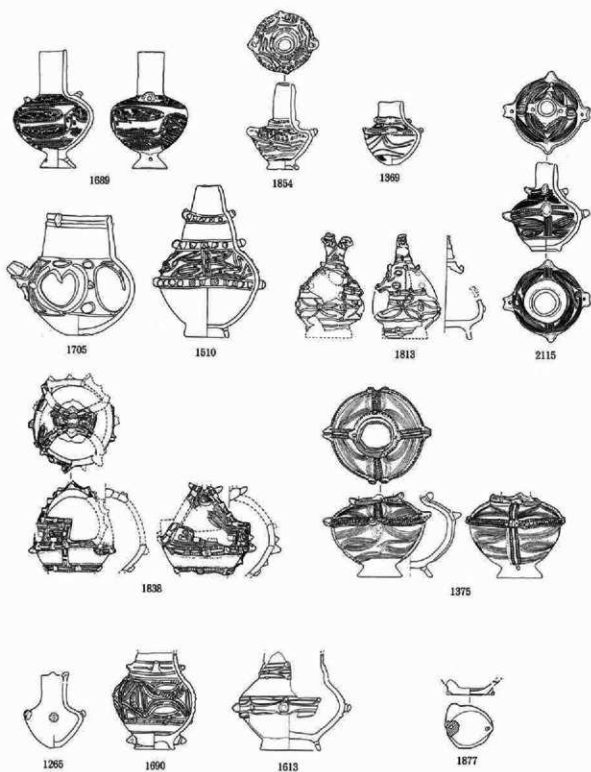


1273

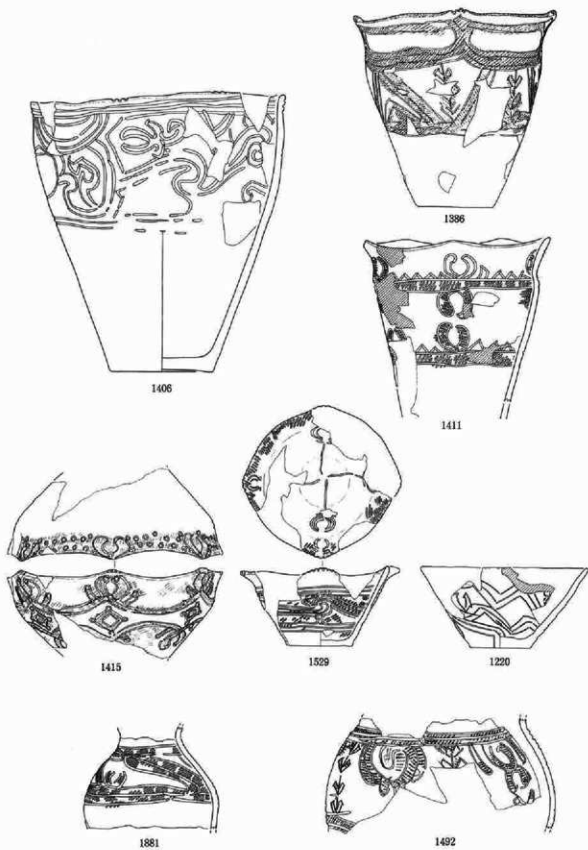


1949

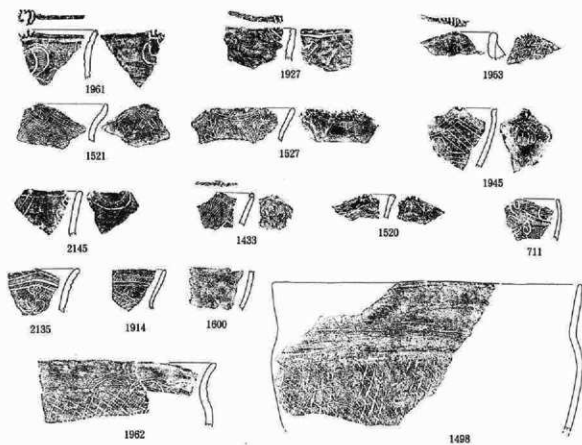
第499图 单孔土器集成图



第500图 釣り下げ形土器集成图



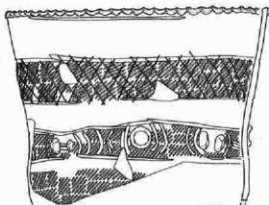
第501图 特殊文様土器集成图1



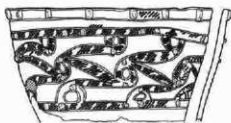
第502图 特殊文様土器集成图2



1828



1660



1845



1847



1618



1625



1846



1630



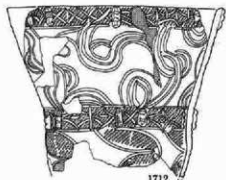
1645



2088



615



1712



1684

第503図 X字状・格子状・網目状の沈線を施文する土器

遺跡名	図版	写真	平面形態	開口幅長 (cm)	底面積	中心位置	井の形状	井の直径	井の位置	柱穴	その他の施設	土質	時期	出土遺物	備考
Q12住跡跡	15	5	不明				地味砂	40×25	中央	なし	石積、出入口	不明	後期	2~8①10~814 907~821	大瓦葺、3回以上の建て替え
K11住跡跡	16	17	6~10 円形	1400~1600		210×170 中央	石積?	不明	不明	なし	不明	不明	不明	89~94	山階は削られている
J11住跡跡	16	11	不明			不明	条状土	不明	不明	なし	不明	不明	不明	65~85①11~922	北階は削られている
G11住跡跡	18	12	円~楕円形	600×530		40×25	地味砂	不明	不明	なし	不明	不明	不明	84~87	北階は不明
G12住跡跡	19	13	円形?	300?		不明	不明	不明	不明	なし	不明	不明	不明	88~91	築3~8×柱 (砂土)
G13住跡跡	19	14	円形?	300?		不明	不明	不明	不明	なし	不明	不明	不明	92	築期後半の半層片あり、窓穴は土質
G14住跡跡	19	14	円形?	300?		不明	不明	不明	不明	なし	不明	不明	不明	92	6面以上の建て替え
C15E住跡跡	20	21	15×16 円形?	900		40×40	地味砂	不明	中央	なし	窓溝3条、出入口	北東~南西	後期	10①106~819①817 925~934	築期後半の半層片あり、窓穴は土質
F16住跡跡	22	17	不明			不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	109~110①526	築期後半の半層片あり、窓穴は土質
F17住跡跡	22	18	円形	238×198		34×24	地味砂	不明	中央	なし	不明	南~北	後期	112~119①18~308	築期後半の半層片あり、窓穴は土質
F18住跡跡	22	19	楕円形	301×250		280×240	地味砂	不明	中央	なし	不明	南東~北西	後期	126~127①19①829	土層・円柱状土層あり
F19住跡跡	23	20	楕円形	605×477		576×453	土層埋没砂	23(13)	中央	29	出入口	北東~南西	後期	128~138 939~941	北階面に遺物あり
F20住跡跡	23	21	不明			不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	139~142①82	北階面に遺物あり
G21住跡跡	24	23	不明			不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	821~822①43~946	本階片の可能性あり
G22住跡跡	24	24	不明			不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	143~155	2面以上の建て替え、円柱状土層出土
G23住跡跡	25	25	不明			不明	なし	不明	不明	39	壁溝	不明	不明	156~823	一部取り戻り
C16住跡跡	26	26	円形	430		75×65	地味砂	不明	中央	9	出入口	南東~北西	後期	157~176①26①455 465~482	2面以上の建て替え、円柱状土層出土
C17住跡跡	27	27	円形?	(800)		不明	なし	不明	不明	100	出入口	南東~北西	後期	176~191	南階の建て替え
D18住跡跡	28	28	円形	342×312		322×296	なし	不明	不明	17	土質	南東~北西	後期	192~199①205~837 ~860	南階は南土層層片あり、かたじけなく
C20住跡跡	28	29	円形	510×284		272×270	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	200~203①81	南階は南土層層片あり、かたじけなく
C21住跡跡	28	29	楕円形	237×198		205×159	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	204~205	南階は南土層層片あり、かたじけなく
C22住跡跡	29	31	不明	250?		145	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	206~210①82	南階は南土層層片あり、かたじけなく
C23住跡跡	29	32	不明	250?		191	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	211~220①83	南階は南土層層片あり、かたじけなく
C24住跡跡	29	33	不明	(400?)×359		262	なし	不明	不明	3?	不明	不明	不明	221~233①87~838	南階は南土層層片あり、かたじけなく
G25住跡跡	30	34	不明	300?		不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	234	南階は南土層層片あり、かたじけなく
G26住跡跡	30	34	不明	300?		不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	235	南階は南土層層片あり、かたじけなく
G27住跡跡	30	35	不明	300		70×50	地味砂?	不明	中央	未検出	不明	不明	不明	235~254①83 862~868①70	南階は南土層層片あり、かたじけなく
G28住跡跡	31	36	不明	300		(85)×60	地味砂?	不明	中央	未検出	不明	不明	不明	255~266	南階は南土層層片あり、かたじけなく
G29住跡跡	31	37	不明	310		不明	なし	不明	不明	なし	不明	不明	不明	971~980	南階は南土層層片あり、かたじけなく

第4章 住跡跡・住跡跡

調査番号	遺構名称	所在位置	平断面図	断面図	開口部	出土遺物	調査	備考	図面	縮尺
1	D10-1土坑1号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
2	D10-2土坑2号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
3	D10-3土坑3号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
4	D10-4土坑4号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
5	D10-5土坑5号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
6	D10-6土坑6号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
7	D10-7土坑7号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
8	D10-8土坑8号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
9	D10-9土坑9号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
10	D10-10土坑10号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
11	D10-11土坑11号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
12	D10-12土坑12号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
13	D10-13土坑13号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
14	D10-14土坑14号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
15	D10-15土坑15号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
16	D10-16土坑16号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
17	D10-17土坑17号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
18	D10-18土坑18号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
19	D10-19土坑19号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
20	D10-20土坑20号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
21	D10-21土坑21号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
22	D10-22土坑22号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
23	D10-23土坑23号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
24	D10-24土坑24号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
25	D10-25土坑25号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
26	D10-26土坑26号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
27	D10-27土坑27号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
28	D10-28土坑28号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
29	D10-29土坑29号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
30	D10-30土坑30号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
31	D10-31土坑31号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
32	D10-32土坑32号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
33	D10-33土坑33号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
34	D10-34土坑34号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
35	D10-35土坑35号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
36	D10-36土坑36号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
37	D10-37土坑37号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
38	D10-38土坑38号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
39	D10-39土坑39号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
40	D10-40土坑40号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
41	D10-41土坑41号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
42	D10-42土坑42号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
43	D10-43土坑43号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
44	D10-44土坑44号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
45	D10-45土坑45号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
46	D10-46土坑46号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
47	D10-47土坑47号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
48	D10-48土坑48号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
49	D10-49土坑49号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
50	D10-50土坑50号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
51	D10-51土坑51号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
52	D10-52土坑52号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
53	D10-53土坑53号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
54	D10-54土坑54号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
55	D10-55土坑55号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
56	D10-56土坑56号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
57	D10-57土坑57号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
58	D10-58土坑58号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
59	D10-59土坑59号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10
60	D10-60土坑60号	南側土坑・多砂層区	西側	西側	100				60	1:10

第5表 土坑・柱穴(1)

題名	著者	編者	原書名	原書年	原書頁	原書種別	原書言語	原書文種	原書形態	原書分類	原書備考
1807	中	1807	1807	中	1807	中	中	中	中	中	中
1808	中	1808	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1809	中	1809	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1810	中	1810	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1811	中	1811	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1812	中	1812	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1813	中	1813	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1814	中	1814	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1815	中	1815	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1816	中	1816	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1817	中	1817	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1818	中	1818	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1819	中	1819	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1820	中	1820	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1821	中	1821	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1822	中	1822	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1823	中	1823	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1824	中	1824	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1825	中	1825	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1826	中	1826	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1827	中	1827	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1828	中	1828	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1829	中	1829	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1830	中	1830	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1831	中	1831	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1832	中	1832	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1833	中	1833	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1834	中	1834	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1835	中	1835	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1836	中	1836	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1837	中	1837	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1838	中	1838	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1839	中	1839	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1840	中	1840	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1841	中	1841	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1842	中	1842	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1843	中	1843	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1844	中	1844	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1845	中	1845	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1846	中	1846	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1847	中	1847	中	中	中	中	中	中	中	中	中
1848	中	1848	中	中	中	中	中	中	中	中	中

第38表 遺構外上巻(5)

種別	品名	規格	位置	用途	材料	形状	寸法	重量	備考
1500	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-1
1501	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-2
1502	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-3
1503	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-4
1504	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-5
1505	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-6
1506	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-7
1507	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-8
1508	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-9
1509	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-10
1510	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-11
1511	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-12
1512	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-13
1513	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-14
1514	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-15
1515	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-16
1516	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-17
1517	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-18
1518	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-19
1519	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-20
1520	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-21
1521	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-22
1522	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-23
1523	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-24
1524	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-25
1525	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-26
1526	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-27
1527	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-28
1528	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-29
1529	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-30
1530	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-31
1531	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-32
1532	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-33
1533	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-34
1534	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-35
1535	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-36
1536	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-37
1537	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-38
1538	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-39
1539	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-40
1540	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-41
1541	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-42
1542	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-43
1543	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-44
1544	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-45
1545	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-46
1546	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-47
1547	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-48
1548	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-49
1549	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-50
1550	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-51
1551	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-52
1552	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-53
1553	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-54
1554	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-55
1555	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-56
1556	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-57
1557	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-58
1558	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-59
1559	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-60
1560	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-61
1561	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-62
1562	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-63
1563	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-64
1564	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-65
1565	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-66
1566	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-67
1567	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-68
1568	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-69
1569	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-70
1570	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-71
1571	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-72
1572	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-73
1573	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-74
1574	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-75
1575	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-76
1576	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-77
1577	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-78
1578	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-79
1579	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-80
1580	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-81
1581	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-82
1582	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-83
1583	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-84
1584	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-85
1585	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-86
1586	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-87
1587	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-88
1588	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-89
1589	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-90
1590	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-91
1591	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-92
1592	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-93
1593	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-94
1594	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-95
1595	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-96
1596	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-97
1597	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-98
1598	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-99
1599	GE	中	GE	中	GE	中	GE	中	1-100

第42表 遺構外土器 (9)

標本番号	土器	出土状況	土器	原 形 式	母体部位	口縁部	口 徑	高	底 径	口 縁 厚	口 縁 内 径	口 縁 外 径	口 縁 厚	口 縁 内 径	口 縁 外 径	備 考
1000	GW	E-1	19	内作内底1114	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1001	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1002	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1003	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1004	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1005	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1006	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1007	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1008	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1009	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1010	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1011	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1012	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1013	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1014	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1015	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1016	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1017	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1018	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1019	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1020	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1021	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1022	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	
1023	GW	E-1	19	口縁部	口縁部	口縁部	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	口縁部に1.5mmの片削りあり	

第46表 遺構外土器 (13)

調査番号	所在地	出土層	出土品	出土品名	出土品番号	出土品説明	出土品材質	出土品形状	出土品寸法	出土品重量	出土品備考
1724	GW	上1	110	土器	110	土器	土器	土器	110	110	土器
1725	GW	上1	111	土器	111	土器	土器	土器	111	111	土器
1726	GW	上1	112	土器	112	土器	土器	土器	112	112	土器
1727	GW	上1	113	土器	113	土器	土器	土器	113	113	土器
1728	GW	上1	114	土器	114	土器	土器	土器	114	114	土器
1729	GW	上1	115	土器	115	土器	土器	土器	115	115	土器
1730	GW	上1	116	土器	116	土器	土器	土器	116	116	土器
1731	GW	上1	117	土器	117	土器	土器	土器	117	117	土器
1732	GW	上1	118	土器	118	土器	土器	土器	118	118	土器
1733	GW	上1	119	土器	119	土器	土器	土器	119	119	土器
1734	GW	上1	120	土器	120	土器	土器	土器	120	120	土器
1735	GW	上1	121	土器	121	土器	土器	土器	121	121	土器
1736	GW	上1	122	土器	122	土器	土器	土器	122	122	土器
1737	GW	上1	123	土器	123	土器	土器	土器	123	123	土器
1738	GW	上1	124	土器	124	土器	土器	土器	124	124	土器
1739	GW	上1	125	土器	125	土器	土器	土器	125	125	土器
1740	GW	上1	126	土器	126	土器	土器	土器	126	126	土器
1741	GW	上1	127	土器	127	土器	土器	土器	127	127	土器
1742	GW	上1	128	土器	128	土器	土器	土器	128	128	土器
1743	GW	上1	129	土器	129	土器	土器	土器	129	129	土器
1744	GW	上1	130	土器	130	土器	土器	土器	130	130	土器
1745	GW	上1	131	土器	131	土器	土器	土器	131	131	土器
1746	GW	上1	132	土器	132	土器	土器	土器	132	132	土器
1747	GW	上1	133	土器	133	土器	土器	土器	133	133	土器
1748	GW	上1	134	土器	134	土器	土器	土器	134	134	土器
1749	GW	上1	135	土器	135	土器	土器	土器	135	135	土器
1750	GW	上1	136	土器	136	土器	土器	土器	136	136	土器
1751	GW	上1	137	土器	137	土器	土器	土器	137	137	土器
1752	GW	上1	138	土器	138	土器	土器	土器	138	138	土器
1753	GW	上1	139	土器	139	土器	土器	土器	139	139	土器
1754	GW	上1	140	土器	140	土器	土器	土器	140	140	土器
1755	GW	上1	141	土器	141	土器	土器	土器	141	141	土器
1756	GW	上1	142	土器	142	土器	土器	土器	142	142	土器
1757	GW	上1	143	土器	143	土器	土器	土器	143	143	土器
1758	GW	上1	144	土器	144	土器	土器	土器	144	144	土器
1759	GW	上1	145	土器	145	土器	土器	土器	145	145	土器
1760	GW	上1	146	土器	146	土器	土器	土器	146	146	土器
1761	GW	上1	147	土器	147	土器	土器	土器	147	147	土器
1762	GW	上1	148	土器	148	土器	土器	土器	148	148	土器
1763	GW	上1	149	土器	149	土器	土器	土器	149	149	土器
1764	GW	上1	150	土器	150	土器	土器	土器	150	150	土器
1765	GW	上1	151	土器	151	土器	土器	土器	151	151	土器
1766	GW	上1	152	土器	152	土器	土器	土器	152	152	土器
1767	GW	上1	153	土器	153	土器	土器	土器	153	153	土器
1768	GW	上1	154	土器	154	土器	土器	土器	154	154	土器
1769	GW	上1	155	土器	155	土器	土器	土器	155	155	土器
1770	GW	上1	156	土器	156	土器	土器	土器	156	156	土器
1771	GW	上1	157	土器	157	土器	土器	土器	157	157	土器
1772	GW	上1	158	土器	158	土器	土器	土器	158	158	土器
1773	GW	上1	159	土器	159	土器	土器	土器	159	159	土器
1774	GW	上1	160	土器	160	土器	土器	土器	160	160	土器
1775	GW	上1	161	土器	161	土器	土器	土器	161	161	土器
1776	GW	上1	162	土器	162	土器	土器	土器	162	162	土器
1777	GW	上1	163	土器	163	土器	土器	土器	163	163	土器
1778	GW	上1	164	土器	164	土器	土器	土器	164	164	土器
1779	GW	上1	165	土器	165	土器	土器	土器	165	165	土器
1780	GW	上1	166	土器	166	土器	土器	土器	166	166	土器
1781	GW	上1	167	土器	167	土器	土器	土器	167	167	土器
1782	GW	上1	168	土器	168	土器	土器	土器	168	168	土器
1783	GW	上1	169	土器	169	土器	土器	土器	169	169	土器
1784	GW	上1	170	土器	170	土器	土器	土器	170	170	土器
1785	GW	上1	171	土器	171	土器	土器	土器	171	171	土器
1786	GW	上1	172	土器	172	土器	土器	土器	172	172	土器
1787	GW	上1	173	土器	173	土器	土器	土器	173	173	土器
1788	GW	上1	174	土器	174	土器	土器	土器	174	174	土器
1789	GW	上1	175	土器	175	土器	土器	土器	175	175	土器
1790	GW	上1	176	土器	176	土器	土器	土器	176	176	土器
1791	GW	上1	177	土器	177	土器	土器	土器	177	177	土器
1792	GW	上1	178	土器	178	土器	土器	土器	178	178	土器
1793	GW	上1	179	土器	179	土器	土器	土器	179	179	土器
1794	GW	上1	180	土器	180	土器	土器	土器	180	180	土器
1795	GW	上1	181	土器	181	土器	土器	土器	181	181	土器
1796	GW	上1	182	土器	182	土器	土器	土器	182	182	土器
1797	GW	上1	183	土器	183	土器	土器	土器	183	183	土器
1798	GW	上1	184	土器	184	土器	土器	土器	184	184	土器
1799	GW	上1	185	土器	185	土器	土器	土器	185	185	土器
1800	GW	上1	186	土器	186	土器	土器	土器	186	186	土器

第47表 遺構外土器 (14)

番号	品名	規格	数量	単位	用途	備考
180	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 180
181	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 181
182	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 182
183	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 183
184	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 184
185	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 185
186	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 186
187	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 187
188	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 188
189	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 189
190	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 190
191	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 191
192	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 192
193	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 193
194	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 194
195	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 195
196	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 196
197	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 197
198	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 198
199	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 199
200	GW	上1	1.10	個	外部配線用	品番 200

第49表 遺構外土器 (16)

種別	品名	規格	単位	数量	用途	備考
201	201 G 中1 L1-M9	中1	個	1	上	上
202	202 G 中1 L1-M9	中1	個	1	上	上
203	203 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
204	204 G 中1 L1	中1	個	1	上	上
205	205 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
206	206 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
207	207 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
208	208 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
209	209 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
210	210 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
211	211 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
212	212 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
213	213 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
214	214 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
215	215 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
216	216 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
217	217 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
218	218 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
219	219 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
220	220 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
221	221 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
222	222 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
223	223 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
224	224 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
225	225 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
226	226 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
227	227 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
228	228 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
229	229 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
230	230 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
231	231 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
232	232 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
233	233 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
234	234 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
235	235 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
236	236 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
237	237 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
238	238 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
239	239 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
240	240 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
241	241 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
242	242 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
243	243 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
244	244 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
245	245 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
246	246 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
247	247 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
248	248 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
249	249 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
250	250 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
251	251 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
252	252 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
253	253 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
254	254 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
255	255 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
256	256 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
257	257 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
258	258 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
259	259 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
260	260 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
261	261 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
262	262 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
263	263 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
264	264 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
265	265 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
266	266 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
267	267 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
268	268 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
269	269 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
270	270 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
271	271 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
272	272 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
273	273 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
274	274 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
275	275 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
276	276 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
277	277 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
278	278 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
279	279 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
280	280 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
281	281 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
282	282 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
283	283 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
284	284 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
285	285 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
286	286 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
287	287 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
288	288 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
289	289 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
290	290 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
291	291 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
292	292 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
293	293 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
294	294 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
295	295 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
296	296 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
297	297 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
298	298 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
299	299 G 中1 M1	中1	個	1	上	上
300	300 G 中1 M1	中1	個	1	上	上

第56表 遺構外土器 (23)

製品番号	品名	製法	出土地	用途	器種	文様特徴	口径	底径	高さ	厚さ	時期	備考
204	K	内	K1口縁部F字状	腹上中	蓋	陶文	2.0	2.0	0.5	0.5	晩期?	
209	N	内	F1口縁部H字状	腹中	付付分鉢	陶文	2.0	2.0	0.5	0.5	晩期?	
211	N	内	F1口縁部H字状	腹中	付付分鉢	陶文	2.0	2.0	0.5	0.5	晩期?	
250	N	内	C口縁部H字状	腹中	鉢	陶文	4.5	2.6	3.0	0.3	晩期	
265	N	内	F1口縁部H字状	腹上中	鉢	陶文	5.1	2.7	3.6	0.4	晩期?	
264	N	内	F1口縁部H字状	腹上中	鉢	陶文	5.6	2.6	3.1	0.4	晩期?	
265	N	内	F1口縁部H字状	腹中	付付分鉢	陶文	2.1	2.1	0.4	0.3	晩期?	
266	N	内	F1口縁部H字状	腹中	鉢	陶文	1.8	1.0	3.2	0.4	晩期?	
267	N	内	F1口縁部H字状	腹上中	鉢	陶文	(2.5)	(1.5)	2.5	0.4	晩期?	
2182	G	上	C25	腹上	鉢	陶文	1.85	1.0	2.5	0.4	晩期?	
2181	G	上	C25-D25	腹上	鉢	陶文	1.4	1.0	2.5	0.4	晩期?	
2183	G	中	D25	腹下	鉢	陶文	4.5	0.9	2.1	0.3-0.5	晩期	
2184	G	上	D25	腹上	鉢	陶文	3.6	1.4	2.3	0.3-0.4	晩期	
2185	G	中	E24	腹中	付付分鉢	陶文	2.7	1.4	2.1	0.2	晩期	
2186	G	中	F24	腹中	付付分鉢	陶文	4.1	2.8	2.4	0.4	晩期	
2187	G	中	F25	腹中	付付分鉢	陶文	6.6	1.7	4.0	0.5	晩期	
2188	G	中	F24	腹中	付付分鉢	陶文	4.4	2.0	2.5	0.5	晩期	
2189	G	中	F27	腹中	鉢(4月)	陶文	(3.0)	(2.0)	(3.0)	0.4	晩期	
2190	G	上	C25	腹上	付付分鉢	陶文	2.2	2.4	2.9	0.4	晩期	
2191	G	上	F25	腹上	鉢	陶文	4.8	2.4	3.2	0.5	晩期	
2192	G	上	F25	腹上	付付分鉢	陶文	2.3	0.8	2.4	0.3	晩期	
2193	G	上	F25	腹上	付付分鉢	陶文	(4.3)	(2.3)	(3.4)	0.4	晩期	
2194	G	上	C25	腹上	鉢	陶文	(2.0)	(2.0)	(2.0)	0.5	晩期	
2195	G	中	C24	腹中	付付分鉢	陶文	(3.2)	(2.1)	(2.4)	(0.5)	晩期	
2196	G	中	C24	腹中	付付分鉢	陶文	(2.2)	(2.2)	(2.2)	0.4	晩期	
2197	G	中	C24	腹中	付付分鉢	陶文	(4.7)	(2.7)	(3.4)	0.4	晩期	
2198	G	中	C24	腹中	付付分鉢	陶文	(3.0)	2.4	2.9	0.3	晩期	
2199	G	中	D24	腹中	鉢	陶文	(3.8)	2.3	2.8	0.4	晩期	
2200	G	中	D25	腹中	鉢	陶文	3.3	1.7	3.6	0.3	晩期	
2201	G	中	D25	腹上	鉢	陶文	4.8	1.8	2.2	0.4-0.5	晩期	
2202	G	中	E24	腹中	鉢	陶文	(3.0)	3.0	3.4	0.5	晩期	
2203	G	中	E25	腹上	鉢	陶文	(3.2)	4.3	4.5	0.4	晩期	
2204	G	中	F25	腹中	付付分鉢	陶文	(4.0)	(1.8)	(2.7)	(0.4)	晩期	
2205	G	中	F25	腹中	鉢	陶文	(3.0)	2.4	2.9	0.5	晩期	
2206	G	中	F25	腹中	鉢	陶文	3.5	1.2	4.2	0.3	晩期	
2207	G	中	F27	腹中	付付分鉢	陶文	(3.0)	2.9	3.8	0.4	晩期	
2208	G	中	G27	腹中	付付分鉢	陶文	3.8	2.9	3.2	0.2	晩期	
2209	G	中	G27	腹上	鉢	陶文	4.4	1.4	1.4	0.7	晩期?	
2210	G	中	G27	腹中	鉢	陶文	3.6	2.6	2.7	0.4	晩期?	
2211	G	中	F27	腹中	鉢	陶文	2.8	2.2	1.6	0.3	晩期	
2212	G	中	F27	腹中	付付分鉢	陶文	3.2	1.7	1.7	0.3	晩期	
2213	G	上	C27	腹上	鉢	陶文	(3.8)	(3.8)	(3.8)	0.3	晩期	
2214	G	上	F25-D25	腹中	鉢	陶文	4.3	2.5	3.7	0.3-0.5	晩期	
2215	G	上	G27	腹中	鉢	陶文	4.8	2.1	4.9	0.5	晩期	
2216	G	中	D24	腹上	鉢	陶文	(2.5)	(2.5)	(2.5)	0.5-0.6	晩期	
2217	G	中	C24	腹中	付付分鉢	陶文	(6.7)	2.5	2.6	0.3	晩期	
2218	G	中	D24	腹中	鉢	陶文	3.0	2.3	4.9	0.4	晩期	
2219	G	上	C25-D25	腹上	鉢	陶文	3.2	2.1	4.8	0.3-0.4	晩期	
2220	G	中	D24	腹上	鉢	陶文	3.8	2.0	4.0	0.4-0.6	晩期	
2221	G	中	E24	腹中	鉢	陶文	3.8	3.4	3.4	0.4	晩期	
2222	G	中	C24	腹中	鉢	陶文	1.9	1.1	4.1	0.3	晩期	
2223	G	中	F27	腹中	鉢	陶文	1.8	1.1	3.8	0.3	晩期	
2224	G	中	F27	腹中	鉢	陶文	2.1	1.7	2.9	0.3	晩期	
2225	G	中	F28	腹中	鉢	陶文	1.2	1.4	2.1	0.3	晩期	
2226	G	中	F27-D27	腹中	鉢	陶文	3.8	1.8	(3.8)	0.6	晩期	
2227	G	中	G28	腹上	鉢	陶文	(3.7)	(1.6)	(3.0)	0.4	晩期	
2228	G	中	F27	腹中	鉢	陶文	(3.8)	2.0	2.6	0.5	晩期?	
2229	G	中	F27-D27	腹中	鉢	陶文	(3.7)	2.0	2.9	0.5	晩期	
2230	G	中	F28	腹中	鉢	陶文	2.8	1.8	3.5	0.5	晩期中葉	
2231	G	中	D24	腹中	鉢	陶文	0.9	(0.3)	0.9-0.5	晩期		
2232	G	中	E25	腹中	鉢	陶文	4.3	4.2	4.2	0.5	晩期	
2233	G	上	C27	腹上	鉢	陶文	1.5	(2.2)	0.5-0.5	晩期		
2234	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	(2.2)	(2.2)	0.2-0.4	晩期		
2235	G	上	D25	腹上	鉢	陶文	1.6	2.5	0.5-0.5	晩期中葉		
2236	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	(2.3)	(2.3)	0.5-0.5	晩期中葉		
2237	G	中	D24	腹上	鉢	陶文	(2.3)	1.4	2.8	0.1	晩期	
2238	G	中	D24	腹上	鉢	陶文	2.6	2.4	6.3	0.4	晩期中葉	
2239	G	中	D24	腹上	鉢	陶文	1.9	1.6	6.3	0.4	晩期中葉	
2240	G	中	E25	腹上	鉢	陶文	1.5	1.3	(3.0)	0.3	晩期中葉	
2241	G	中	F28	腹上	鉢	陶文	2.6	2.3	0.5	0.5	晩期	
2242	G	中	F28	腹上	鉢	陶文	(2.4)	2.4	4.8	0.5	晩期中葉	
2243	G	中	F28	腹上	鉢	陶文	(2.3)	1.6	0.1	0.1	晩期?	
2244	G	中	F28	腹上	鉢	陶文	(2.6)	(2.6)	(2.6)	(2.6)	晩期中葉	
2245	G	中	D25	腹上	鉢	陶文	3.1	1.7	3.0	0.1	晩期	
2246	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	3.6	2.0	2.1	0.4	晩期?	
2247	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	4.9	3.1	0.3	0.3	晩期?	
2248	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	5.4	4.5	0.5	0.5	晩期	
2249	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	5.7	1.9	3.2	0.4	晩期	
2250	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	6.7	2.9	2.6	0.4	晩期	
2251	G	中	F28-M28	腹上	鉢	陶文	6.7	2.6	3.0	0.4	晩期	
2252	G	中	F28	腹上	鉢	陶文	4.9	1.8	2.8	0.3	晩期	
2253	G	中	F28-M28	腹上	鉢	陶文	6.7	2.9	4.8	0.4	晩期	
2254	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	4.7	3.3	4.8	0.4	晩期	
2255	G	上	M28	腹上	鉢	陶文	4.2	1.5	2.2	0.3	晩期?	
2256	G	上	F28-M28	腹上	鉢	陶文	4.1	1.9	1.8	0.4	晩期	
2257	G	上	F28	腹上	鉢	陶文	4.0	1.8	1.8	0.3	晩期	

第59表 土製品(1) ミニチュア土器

展覧番号	品名	時期	出土地点	出土状況	種別	書名	文字の種類	寸法(m)	高さ	重量	厚さ	時期	備考
2252	CW	上1	L 8-M 8之層(最上層)	断片(片断)	鉢	ヘラケツク	無文	5.1	1.4	1.0	0.3	後期	
2259	GW	上1	M10	断片	鉢	沈黙文	無文	6.0	1.9	(1.0)	0.4	後期	後期
2260	GW	上2	N11	断片	鉢	無文	無文	6.0	1.6	1.0	0.5	後期	
2261	GW	上1	M11	断片	付合鉢	無文	無文	5.7	2.3	2.2	0.5	後期	
2262	GW	上1	L10	断片	付合鉢	無文	無文	6.0	4.2	3.0	0.5	後期	
2263	GW	上1	L 9	断片	付合鉢	イロキ	イロキ	5.7	(4.1)	5.0	0.5	後期	後期
2264	GW	上1	K 5	断片	付合鉢	沈黙文, 伊賀文, 越前文	沈黙文	5.7	2.7	(2.5)	0.4-0.8	後期	後期
2265	GW	上2	F13	断片	鉢	無文	無文	5.0	0.8	1.0	0.3	後期	
2266	GW	上2	F13	断片	鉢	沈黙文, 越前文, 越前文, 越前文	越前文	6.0	1.5	4.1	0.4	後期	後期
2267	GW	上2	F13	断片	鉢	沈黙文	越前文	(4.9)	1.4	(3.7)	0.6	後期	後期
2268	GW	上2	F13	断片	鉢	無文	無文	5.0	1.4	1.5	0.4	後期	
2269	GW	上1	L 9	断片	付合鉢	沈黙文	無文	5.0	1.4	1.2	0.3	後期	後期
2270	GW	上2	F13	断片	鉢	無文	無文	5.0	0.8	1.0	0.3	後期	
2271	GW	上2	F13	断片	鉢	無文	無文	5.0	1.0	1.0	0.3	後期	
2272	GW	上2	F14	断片	鉢	無文	無文	6.0	1.9	1.4	0.3	後期	
2273	GW	上2	F13	断片	鉢	沈黙文, 越前文, 越前文	越前文	5.1	1.4	2.4	0.3	後期	後期
2274	GW	中1	M 9	断片, 中	付合鉢	無文	無文	4.4	2.9	2.5	0.3	後期	
2275	GW	上1	K 7	断片	鉢	無文	無文	3.4	1.5	1.8	0.4	後期	後期
2276	GW	上2	F14	断片	付合鉢	越前文	越前文	5.0	1.8	1.2	0.4	後期	後期
2277	GW	中1	F12	断片	付合鉢	沈黙文	越前文	3.0	2.4	5.0	0.4	後期	後期
2278	GW	上1	L 7+J	断片, 中上	鉢	入部江文, L, F, 越前文, 越前文	越前文	(1.3)	2.1	4.0	0.4	後期	大野式
2279	GW	中1	M 0	断片	鉢	伊賀文	伊賀文	6.0	1.3	(2.0)	0.3	後期	後期
2280	GW	上2	F13	断片	鉢	越前文	越前文	6.0	2.5	5.7	0.5	後期	後期
2281	GW	中1	F12	断片	鉢	越前文	越前文	(5.1)	3.0	1.0	0.3	後期	後期
2282	GW	上2	O12	断片	鉢	越前文, 越前文	越前文	6.0	3.0	5.0	0.8	後期	後期
2283	GW	上1	K 8	断片	鉢	沈黙文, 越前文, 越前文	越前文	1.8	(2.0)	0.4	後期	後期	
2284	GW	上2	F14	断片	鉢	越前文	越前文	1.7	(5.1)	0.4	後期	後期	
2285	GW	上2	O12	断片	鉢	無文	無文	(3.5)	2.4	7.1	0.5	後期	後期
2286	GW	上1	L10	断片, 中	鉢	越前文	越前文	2.0	2.0	1.0	0.3	後期	後期
2287	GW	上1	M11	断片	鉢	越前文, 越前文, 越前文	越前文	1.0	1.0	0.4	0.4	後期	後期
2288	GW	上2	O12	断片	高鉢	無文	無文	7.0	2.0	0.6	0.6	後期	越前文
2289	GW	上1	K 8	断片	高鉢	伊賀文	伊賀文	(2.0)	(1.5)	1.0	0.3-0.4	後期	後期
2290	GW	中1	O11	断片	付合鉢	越前文	越前文	4.0	2.2	1.8	0.3	後期	後期
2291	GW	上1	L 7	断片	鉢	越前文	越前文	2.0	2.0	2.0	0.3	後期	後期
2292	GW	中1	M 8	断片	鉢	越前文	越前文	2.0	1.4	0.5	0.4	後期	後期
2293	GW	上1	J 8	断片	鉢	無文	無文	2.0	2.0	4.0	0.1	後期	後期
2294	GW	上1	L11	断片	鉢	越前文	越前文	2.0	2.0	4.0	0.4	後期	後期
2295	GW	上1	N14	断片	鉢	越前文	越前文	1.0	0.8	2.4	0.2	後期	後期
2296	GW	中1	O11	断片	鉢	無文	無文	2.0	1.0	4.0	0.3	後期	後期
2297	GW	上2	O12	断片	鉢	越前文	越前文	1.3	(4.0)	0.5	0.5	後期	後期
2298	GW	上2	F12	断片	鉢	越前文, 越前文, 越前文	越前文	3.0	1.0	0.6	0.5	後期	後期
2299	GW	中1	O11	断片	鉢	無文	無文	1.8	2.4	4.0	0.5	後期	後期
2300	GW	上2	O12	断片	鉢	越前文, 越前文, 越前文	越前文	1.9	2.4	6.5	0.7	後期	後期
2301	GW	上2	F13	断片(断片)	鉢	越前文, 越前文, 越前文, 越前文	越前文	4.1	1.0	1.8	0.6	後期	後期
2302	GW	上2	O14	断片	鉢	越前文	越前文	1.8	1.8	3.0	0.3	後期	後期
2303	GW	上1	J 9	断片	鉢	越前文, 越前文	越前文	1.7	(2.0)	0.3	0.3	後期	後期
2304	GW	上2	O12	断片	鉢	越前文	越前文	1.0	2.0	0.7	0.7	後期	後期
2305	GW	上1	J 7	断片	付合鉢	越前文	越前文	2.1	4.0	0.4	0.4	後期	後期
2306	GW	上1	J 7	断片	付合鉢	越前文, 越前文	越前文	2.0	2.0	0.5	0.5	後期	後期
2307	GW	上2	F13	断片	付合鉢	越前文	越前文	2.0	1.1	0.5	0.5	後期	後期
2308	GW	上1	F12	断片	付合鉢	越前文	越前文	1.8	1.2	0.8	0.4	後期	後期
2309	GW	上2	N12	断片	付合鉢	越前文	越前文	1.0	0.2	0.5	0.1	後期	後期
2310	GW	上1	J 8	断片	付合鉢	越前文	越前文	1.8	2.3	0.4	0.4	後期	後期
2311	GW	上1	L 9	断片	付合鉢	越前文, 越前文	越前文	3.9	1.7	0.6	0.1	後期	後期
2312	GW	上1	K 9	断片	鉢	越前文, 越前文	越前文	1.8	2.7	0.7	0.7	後期	後期
2313	GC	英	F14	断片	付合鉢	越前文	越前文	3.8	2.7	0.7	0.4	後期	後期

第60表 土製品(2) ミニチュア土器

発掘年	所在地	調査	出土品名	層位	用途	備 考	文 庫	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(m)	時期	備 考
897	N	内	G116(足取銅片)	堀上土層(2)	土製	銅板	足上・乳石	(3.6)	(4.6)	(0.3)	後製中世	後製中世
898	N	内	F189(銅板)	堀上土層	土製	銅板	乳石	(5.4)	(5.3)	(0.3)	後製中世	後製中世
899	N	内	G192(銅板)	堀上土層(1)	土製	銅板	乳石	(4.6)	(1.3)	(0.3)	後製中世	後製中世
840	N	内	F17上土層	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.3)	(1.8)	(0.6)	後製中世	後製中世
841	N	内	E18(銅板)	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.3)	(4.7)	(1.6)	後製中世	後製中世
854	N	内	F12土層G2	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.5)	(2.4)	(1.2)	後製中世	後製中世
845	N	内	F12土層1号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(7.1)	(4.0)	(1.8)	後製中世	後製中世
863	N	内	G17土層1号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.8)	(2.2)	(1.2)	後製中世	後製中世
866	N	内	F17土層2号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.6)	(3.6)	(1.3)	後製中世	後製中世
866	K	内	F17土層1号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.8)	(1.3)	(1.3)	後製中世	後製中世
869	N	内	F17土層4号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(8.1)	(4.0)	(1.4)	後製中世	後製中世
871	N	内	F21土層3号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(5.9)	(3.6)	(0.5)	後製中世	後製中世
883	N	内	L1土層土層2号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.8)	(3.5)	(1.2)	後製中世	後製中世
884	N	内	M1土層1号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.8)	(3.2)	(1.5)	後製中世	後製中世
887	N	内	F18土層1号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.3)	(3.1)	(1.5)	後製中世	後製中世
889	N	内	F18土層3号	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.2)	(3.4)	(1.2)	後製中世	後製中世
890	N	内	F18(穴状土器3号)	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.8)	(4.9)	(1.1)	後製中世	後製中世
1916	G	中	F24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.2)	(3.4)	(1.0)	後製中世	後製中世
2014	G	中	F24・E20	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.1)	(3.8)	(1.2)	後製中世	後製中世
2015	G	中	E25	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.0)	(3.5)	(2.6)	後製中世	後製中世
2016	G	中	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.0)	(2.4)	(1.0)	後製中世	後製中世
2117	G	中	E25	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(6.5)	(6.0)	(4.9)	後製中世	後製中世
2118	G	中	E24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.4)	(3.4)	(2.6)	後製中世	後製中世
2020	G	中	F27	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.0)	(4.0)	(2.7)	後製中世	後製中世
2021	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.1)	(2.0)	(2.7)	後製中世	後製中世
2022	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.3)	(3.8)	(2.5)	後製中世	後製中世
2023	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(5.7)	(5.1)	(2.5)	後製中世	後製中世
2024	G	中	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.5)	(1.9)	(1.4)	後製中世	後製中世
2024	G	上	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.0)	(3.2)	(1.0)	後製中世	後製中世
2026	G	上	F29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(3.2)	(1.4)	後製中世	後製中世
2027	G	中	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.2)	(3.3)	(1.4)	後製中世	後製中世
2028	G	上	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(7.4)	(7.0)	(2.6)	後製中世	後製中世
2029	G	中	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	22	22	1.3	後製中世	後製中世
2030	G	中	E24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.0)	(3.0)	(1.4)	後製中世	後製中世
2031	G	中	F24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.6)	(3.6)	(1.4)	後製中世	後製中世
2032	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(6.7)	(4.8)	(1.9)	後製中世	後製中世
2033	G	中	D28-G12土層(銅板)	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.7)	(4.8)	(2.5)	後製中世	後製中世
2034	G	中	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(11.0)	(7.4)	(3.1)	後製中世	後製中世
2035	G	上	E24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.4)	(2.5)	(1.7)	後製中世	後製中世
2036	G	中	E28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.8)	(3.2)	(1.6)	後製中世	後製中世
2037	G	中	F27	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.8)	(2.5)	(1.6)	後製中世	後製中世
2038	G	上	E29-D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.0)	(3.0)	(2.0)	後製中世	後製中世
2039	G	上	E24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.3)	(3.3)	(1.6)	後製中世	後製中世
2040	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.2)	(3.9)	(2.0)	後製中世	後製中世
2042	G	上	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(6.5)	(5.7)	(3.4)	後製中世	後製中世
2043	G	中	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(5.7)	(2.1)	(2.0)	後製中世	後製中世
2044	G	中	E29	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(3.1)	(2.2)	後製中世	後製中世
2045	G	上	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.1)	(3.8)	(2.0)	後製中世	後製中世
2046	G	中	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.9)	(1.8)	(1.8)	後製中世	後製中世
2047	G	中	D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.8)	(3.4)	(2.1)	後製中世	後製中世
2048	G	中	E24	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(1.5)	(1.0)	後製中世	後製中世
2049	G	上	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.1)	(2.1)	(2.4)	後製中世	後製中世
2050	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.5)	(2.5)	(1.4)	後製中世	後製中世
2051	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.8)	(3.4)	(2.3)	後製中世	後製中世
2052	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(6.1)	(5.6)	(2.6)	後製中世	後製中世
2053	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.3)	(3.1)	(2.1)	後製中世	後製中世
2054	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.4)	(2.4)	(1.9)	後製中世	後製中世
2055	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.2)	(2.2)	(2.6)	後製中世	後製中世
2056	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.5)	(3.8)	(2.3)	後製中世	後製中世
2057	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.5)	(5.6)	(2.4)	後製中世	後製中世
2058	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.3)	(1.0)	(1.7)	後製中世	後製中世
2059	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.2)	(3.7)	(1.6)	後製中世	後製中世
2060	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.6)	(1.4)	(1.3)	後製中世	後製中世
2061	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(6.0)	(3.1)	(1.8)	後製中世	後製中世
2061	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.4)	(2.5)	(1.5)	後製中世	後製中世
2062	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.0)	(2.1)	(1.6)	後製中世	後製中世
2063	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.4)	(2.6)	(2.5)	後製中世	後製中世
2064	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(3.0)	(2.0)	後製中世	後製中世
2065	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(5.0)	(4.2)	(2.6)	後製中世	後製中世
2066	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(4.8)	(2.3)	後製中世	後製中世
2067	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.7)	(3.7)	(1.9)	後製中世	後製中世
2068	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(3.7)	(2.0)	後製中世	後製中世
2069	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.2)	(3.4)	(2.3)	後製中世	後製中世
2070	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(4.7)	(3.9)	(2.3)	後製中世	後製中世
2071	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.4)	(2.0)	(1.6)	後製中世	後製中世
2072	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.8)	(1.6)	(1.4)	後製中世	後製中世
2073	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.8)	(1.9)	(1.2)	後製中世	後製中世
2074	G	中	F28-D28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.8)	(2.4)	(1.2)	後製中世	後製中世
2075	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(3.3)	(3.4)	(1.2)	後製中世	後製中世
2076	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.4)	(1.8)	(1.9)	後製中世	後製中世
2077	G	中	F28	堀上土層	土製	堀上土層	後製中世	(2.3)	(1.6)	(1.6)	後製中世	後製中世

第61表 土製品 (3) 土偶

発掘番号	年・地域	国名	出土品名	層位	出土位置	用途	文種	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	時期	備考
2275	G 5	中	D20	地上	土質	陶器土	刺突文	(2.8)	(2.2)	(1.4)	後期	
2276	G 5	中	D20	地上	土質	陶器土	刺突文	(2.8)	(2.2)	(1.4)	後期	アスファルト付着
2280	G 5	中	D21	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.5)	(3.3)	(2.0)	晩古銅器	中世土質
2281	G 5	中	D21	地下	土質	陶器土	刺突文	(1.8)	(1.0)	(1.0)	後期前中世	
2282	G 5	上	C20	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.9)	(2.2)	(1.7)	後期	
2283	G 5	上	C20	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.6)	(2.5)	(2.2)	後期前中世	中世土質
2284	G 5	上	C24	地下	土質	足厚土	刺突文	(3.0)	(1.4)	(1.0)	後期	中世土質
2285	G 5	中	D20	地下	土質	足厚土	刺突文	(2.9)	(1.4)	(1.0)	後期前中世	
2287	G 5	中	D21	地下	土質	足厚土	刺突文	(3.1)	(2.2)	(2.0)	後期前中世	
2288	G 5	中	D21	地下	土質	足厚土	刺突文	(2.0)	(1.1)	(1.0)	後期前中世	
2289	G 5	中	D21	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.8)	(2.0)	(1.2)	後期	陶器土
2290	G 5	中	D21	地下	土質	陶器土	刺突文	(1.4)	(1.0)	(1.7)	後期	中世土質
2291	G 5	中	D22	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.5)	(2.0)	(2.3)	後期	中世土質
2292	G 5	中	D22	地下	土質	陶器土	刺突文	(11.4)	(6.5)	(2.0)	後期	後期前中世
2293	G 5	中	D22	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.9)	(2.1)	(1.6)	後期	アスファルト付着、凸線文
2294	G 5	上	D25	地上	土質	陶器土	刺突文	(2.4)	(2.0)	(1.7)	後期前中世	
2295	G 5	上	D26	地上	土質	陶器土	刺突文	(3.0)	(2.7)	(2.0)	後期前中世	アスファルト付着、凸線文
2296	G 5	上	D26	地上	土質	陶器土	刺突文	(2.7)	(2.0)	(1.3)	後期前中世	
2297	G 5	中	E26	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.0)	(5.1)	(2.0)	後期前中世	乳器土
2298	G 5	中	E26	地下	土質	陶器土	刺突文	(6.1)	(4.4)	(2.0)	後期前中世	へそ乳器
2299	G 5	中	E26	地下	土質	陶器土	刺突文	(7.8)	(6.6)	(2.0)	後期前中世	
2299	G 5	中	E26	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.2)	(3.2)	(1.9)	後期前中世	
2301	G 5	中	G25	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.7)	(3.6)	(1.6)	後期前中世	
2302	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(11.0)	(8.2)	(3.1)	後期前中世	陶器土をふる上層?
2303	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.1)	(1.7)	(1.0)	後期前中世	
2304	G 5	上	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.2)	(3.1)	(1.7)	後期前中世	
2305	G 5	上	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.0)	(2.2)	(1.7)	後期前中世	
2306	G 5	上	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.7)	(2.4)	(1.5)	後期前中世	
2307	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(10.2)	(9.7)	(3.0)	後期前中世	中世土質
2308	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.4)	(1.4)	(1.1)	後期前中世	
2309	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.3)	(2.2)	(2.4)	後期前中世	土質
2310	G 5	中	F26	地下	土質	陶器土	刺突文	(1.8)	(1.8)	(1.8)	後期前中世	陶器土
2311	G 5	中	F27	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.4)	(3.4)	(1.8)	後期	中世土質
2312	G 5	中	F28	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.8)	(3.9)	(2.1)	後期前中世	へそ乳器
2313	G 5	中	F28	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.0)	(2.7)	(2.1)	後期前中世	乳器土、アスファルト付着、凸線文
2314	G 5	中	F28	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.6)	(2.0)	(1.0)	後期前中世	凸線文
2315	G 5	中	F28	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.0)	(2.0)	(1.9)	後期前中世	凸線文
2316	G 5	中	F27	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.0)	(1.8)	(1.7)	後期前中世	後期前中世
2317	G 5	上	B20+B20	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.5)	(3.0)	(1.4)	後期前中世	陶器土
2318	G 5	上	B20+B20	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.0)	(3.0)	(1.8)	後期前中世	へそ乳器
2319	G 5	中	G25	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.1)	(3.4)	(1.0)	後期前中世	凸線文
2320	G 5	中	G25	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.1)	(2.0)	(1.0)	後期前中世	凸線文
2321	G 5	中	G25	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.0)	(1.0)	(1.0)	後期前中世	
2322	G 5	中	F27	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.0)	(1.8)	(1.4)	後期	
2323	G 5	中	F27	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.0)	(1.0)	(1.2)	後期前中世	
2324	G 5	中	D26+B26	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.7)	(3.1)	(1.6)	後期前中世	中世土質
2325	G 5	中	F28	地下	土質	陶器土	刺突文	(12.0)	(13.1)	(6.1)	後期前中世	
2326	G 5	上	C25	地下	土質	陶器土	刺突文	(14.0)	(10.0)	(1.0)	後期前中世	中世土質、下層部は土質、凸線文
2327	G 5	上	G 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.3)	(1.7)	(1.7)	後期前中世	200-240-240-240刺突文が陶器土
2328	G 5	上	G 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.4)	(1.0)	(1.4)	後期前中世	
2329	G 5	上	G 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.0)	(1.0)	(1.6)	後期前中世	
2330	G 5	上	F 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.2)	(1.7)	(1.9)	後期前中世	
2331	G 5	上	F 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(16.0)	(7.1)	(2.0)	後期前中世	
2332	G 5	上	F 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(7.0)	(4.0)	(2.0)	後期前中世	
2333	G 5	上	F 7	地下	土質	陶器土	刺突文	(13.0)	(13.1)	(4.0)	後期前中世	凸線文
2334	G 5	中	F21	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.7)	(2.0)	(1.4)	後期前中世	
2335	G 5	上	D11	地下	土質	陶器土	刺突文	(4.7)	(3.0)	(1.4)	後期前中世	
2336	G 5	上	M10	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.0)	(1.4)	(1.4)	後期前中世	
2337	G 5	上	J 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.0)	(4.4)	(3.1)	後期前中世	後期前中世
2338	G 5	上	J 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(7.0)	(2.0)	(2.2)	後期前中世	
2339	G 5	上	L11	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.0)	(6.6)	(4.7)	後期前中世	中世土質
2340	G 5	上	L11	地下	土質	陶器土	刺突文	(10.0)	(7.0)	(5.0)	後期前中世	
2341	G 5	上	K 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(9.0)	(8.3)	(3.3)	後期前中世	アスファルト付着
2342	G 5	上	J 9	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.8)	(3.0)	(4.4)	後期前中世	アスファルト付着
2343	G 5	上	D25	地下	土質	陶器土	刺突文	(2.9)	(1.0)	(1.0)	後期	
2344	G 5	上	D25	地下	土質	陶器土	刺突文	(3.1)	(3.1)	(2.1)	後期前中世	
2345	G 5	上	M11	地下	土質	陶器土	刺突文	(5.0)	(3.0)	(2.0)	後期前中世	後期前中世

第62表 土製品(4) 土偶

発掘年代	地上地名	調査	出土地名	層位	出土品	位置	出土品	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	用途	備考
2447	G W	上 1	O15	Ⅱ	土塊	横溝、駒一ノ塚、丸尾	刺突文	(42)	(32)	(17)	横溝中層	
2448	G W	上 2	P16	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文	(32)	(18)	(18)	横溝中層	
2449	G W	上 2	O14	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文	(17)	(21)	(23)	横溝中層	
2450	G W	上 1	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文	(28)	(18)	(17)	横溝中層	
2451	G W	上 1	L 9	Ⅱ中	土塊	横溝	刺突文	(18)	(18)	(14)	横溝中層	丸尾
2452	G W	上 1	L 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文	(28)	(18)	(17)	横溝中層	
2453	G W	上 1	J 7	Ⅱ	土塊	足尾	刺突文	(8)	(18)	(11)	横溝中層	丸尾
2454	G W	上 1	J10	Ⅱ上	土塊	横溝、前野中、横野一、横野、横野山	刺突文、上 1	(18)	(18)	(11)	横溝中層	丸ノ尾、横溝中層に於ける、中土土層
2455	G W	上 1	J 8	Ⅱ上	土塊	横溝、横野中、横野一	刺突文	(7)	(18)	(12)	横溝中層	横溝中層
2456	G W	上 1	J 7	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2457	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2458	G W	上 1	J 7 (第11) レンチ	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2459	G W	上 1	J 7 (第11) レンチ	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2460	G W	上 1	J 7 (第11) レンチ	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2461	G W	上 1	J 8	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2462	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2463	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2464	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2465	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2466	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2467	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2468	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2469	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2470	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2471	G W	上 1	J 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2472	G W	上 1	M11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2473	G W	上 2	N11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2474	G W	上 1	L 8	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2475	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2476	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2477	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2478	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2479	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2480	G W	上 1	L 8	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2481	G W	上 2	P13	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2482	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2483	G W	上 2	P12	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2484	G W	上 1	K 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2485	G W	上 1	K 9	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2486	G W	上 1	L11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2487	G W	上 2	P13	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2488	G W	上 1	M 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2489	G W	上 1	L11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2490	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2491	G W	上 2	P12	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2492	G W	上 2	P14	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2493	G W	上 1	L 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2494	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2495	G W	上 2	O12	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2496	G W	上 1	K 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2497	G W	上 1	L11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2498	G W	上 1	M11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2499	G W	上 2	N10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2500	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2501	G W	上 1	O10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2502	G W	上 1	N10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2503	G W	上 1	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2504	G W	上 1	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2505	G W	上 2	N12	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2506	G W	上 1	L12	Ⅱ	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2507	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2508	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2509	G W	上 1	O11	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2510	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2511	G W	上 2	P13	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2512	G W	上 1	M10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2513	G W	上 2	O10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2514	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2515	G W	上 2	P10	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2516	G W	上 1	L 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	
2517	G W	上 1	L 9	Ⅱ上	土塊	横溝	刺突文、上 1	(18)	(18)	(14)	横溝中層	

第63表 土製品 (5) 土偶

編号	品名	規格	出寸	単位	品名	数量	寸法	重量	分組	備考
841	N	内	820仕組線状3号	線状巾	鋼形土製品	70	44	1350	9	改修文、耐震文
842	N	内	820仕組2号	線状巾	鋼形土製品	130	100	1730	9	改修文、耐震文
843	N	内	7号仕組1号	線状巾	鋼形土製品	58	44	1260	9	鋼形土製品改修文、耐震文
859	N	内	820仕組3号	線状巾	鋼形土製品	211	130	1510	A	
876	N	内	L11仕組4号	線状巾	鋼形土製品	230	150	1830	A	上工
877	N	内	L11仕組1号	線状巾	鋼形土製品	121	75	1520	9	耐震文
2647	G	中	C24	巾	鋼形土製品	48	37	1010	A	改修、耐震
2648	G	中	D14	巾	鋼形土製品	34	29	1030	A	改修、耐震
2649	G	中	D14	巾	鋼形土製品	31	27	1030	A	改修、耐震
2649	G	中	D14	巾	鋼形土製品	153	100	1630	A	鋼形土製品改修文
2650	G	中	D14	巾	鋼形土製品	60	45	1310	A	鋼形土製品改修文、耐震文
2651	G	中	G10	巾	鋼形土製品	40	31	1060	A	鋼形土製品改修文、耐震文
2652	G	中	G10	巾	鋼形土製品	48	35	1140	A	改修、鋼形土製品
2653	G	中	F16	巾	鋼形土製品	40	31	1060	A	改修、鋼形土製品改修文
2654	G	中	F16	巾	鋼形土製品	47	37	1010	A	改修、鋼形土製品改修文
2655	G	中	C24	巾	鋼形土製品	148	100	1610	A	鋼形土製品改修文
2656	G	中	E24	巾	鋼形土製品	51	38	1010	A	耐震
2657	G	中	E24	巾	鋼形土製品	143	100	1610	A	鋼形土製品改修文
2658	G	中	G10	巾	鋼形土製品	100	60	1340	A	鋼形土製品改修文
2659	G	中	C24	巾	鋼形土製品	61	24	1760	C	改修、鋼形土製品
2661	G	中	E24	巾	鋼形土製品	54	40	1480	C	改修
2662	G	中	E24	巾	鋼形土製品	111	88	1930	C	鋼形土製品
2663	G	中	C24	巾	鋼形土製品	120	120	1350	C	鋼形土製品
2667	G	中	C24	巾	鋼形土製品	44	40	1160	A	鋼形土製品
2668	G	中	E24	巾	鋼形土製品	120	120	1350	A	鋼形土製品
2669	G	中	F16	巾	鋼形土製品	120	120	1350	A	鋼形土製品
2670	G	中	F16	巾	鋼形土製品	39	38	1040	C	改修
2671	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	C	改修

編号	品名	規格	出寸	単位	品名	数量	寸法	重量	分組	備考
846	N	内	C16仕組1号	線状巾	鋼形土製品	137	130	1240	9	改修文、耐震
2672	G	中	C24	巾	鋼形土製品	37	36	810	3	
2673	G	中	E24	巾	鋼形土製品	120	120	1340	9	改修
2674	G	中	F16	巾	鋼形土製品	132	130	1320	9	改修文
2675	G	中	F16	巾	鋼形土製品	47	42	1140	9	改修文
2676	G	中	F16	巾	鋼形土製品	47	31	1110	9	鋼形土製品改修文、耐震文、鋼形土製品改修文
2677	G	中	F16	巾	鋼形土製品	40	41	1110	9	鋼形土製品改修文、耐震文、鋼形土製品改修文
2678	G	中	F16	巾	鋼形土製品	120	120	1340	9	鋼形土製品改修文、耐震文、鋼形土製品改修文
2679	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文、耐震文
2680	G	中	F16	巾	鋼形土製品	47	47	1110	9	鋼形土製品改修文、耐震文
2681	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文、耐震文
2682	G	中	F16	巾	鋼形土製品	51	51	1110	9	鋼形土製品改修文、耐震文

編号	品名	規格	出寸	単位	品名	数量	寸法	重量	分組	備考
2683	G	中	M9	巾	鋼形土製品	57	57	610	9	鋼形土製品改修文、耐震文、鋼形土製品改修文

編号	品名	規格	出寸	単位	品名	数量	寸法	重量	分組	備考
2684	G	中	C24	巾	鋼形土製品	25	25	480	9	鋼形土製品改修文
2685	G	中	E24	巾	鋼形土製品	35	35	1100	11	鋼形土製品改修文
2686	G	中	E24	巾	鋼形土製品	40	40	1060	9	鋼形土製品改修文
2687	G	中	E24	巾	鋼形土製品	34	34	1060	9	鋼形土製品改修文
2688	G	中	E24	巾	鋼形土製品	40	40	1110	9	鋼形土製品改修文
2689	G	中	F16	巾	鋼形土製品	110	110	1270	15	鋼形土製品改修文
2690	G	中	F16	巾	鋼形土製品	38	38	870	9	鋼形土製品改修文
2691	G	中	C24	巾	鋼形土製品	100	100	1060	9	鋼形土製品改修文
2692	G	中	E24	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文
2693	G	中	E24	巾	鋼形土製品	135	135	1460	9	鋼形土製品改修文
2694	G	中	F16	巾	鋼形土製品	145	145	1560	9	鋼形土製品改修文
2695	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文
2696	G	中	F16	巾	鋼形土製品	39	39	840	9	鋼形土製品改修文
2697	G	中	F16	巾	鋼形土製品	29	29	740	9	鋼形土製品改修文
2698	G	中	F16	巾	鋼形土製品	41	41	960	9	鋼形土製品改修文
2699	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文
2700	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文
2701	G	中	F16	巾	鋼形土製品	130	130	1410	9	鋼形土製品改修文

編号	品名	規格	出寸	単位	品名	数量	寸法	重量	分組	備考
2702	G	中	F16	巾	鋼形土製品	13	13	270	9	鋼形土製品改修文
2703	G	中	F16	巾	鋼形土製品	21	21	450	9	鋼形土製品改修文
2704	G	中	F16	巾	鋼形土製品	17	17	350	9	鋼形土製品改修文

第66表 土製品 (8) 鋼形土製品・分銅形土製品・土鈴・キノコ形土製品・スタンプ形土製品

観音寺	所在地	宗派	坐落地点	階級	石積	高さ(m)	幅	厚さ	重量(t)	材質	時代	地域	アソビメント	分類	備考
307	N	内	K114石積	壇上中	石積	5.0	1.7	3.7	2.7	凝灰質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
313	N	内	K114石積下F10	壇上中	石積	2.8	1.8	3.8	1.8	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
322	N	内	G114石積	壇上中(心)	石積	3.3	1.8	3.6	3.3	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
333	N	内	G114石積下F10	壇上中	石積	(2.8)	1.4	3.2	(3.2)	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
343	N	内	K114石積1号	壇上中	石積	(3.7)	1.5	3.8	(3.7)	凝灰質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
344	N	内	K114石積1号	壇上中	石積	2.2	1.5	3.3	1.5	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
345	N	内	K114石積1号	壇上中	石積	3.0	1.6	3.3	3.0	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
350	N	内	C10石積1号	壇上中	石積	(2.1)	1.5	3.1	(3.1)	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
363	N	内	C10石積2号	壇上中	石積	3.2	1.3	3.6	1.6	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
364	N	内	C10石積3号	壇上中	石積	2.5	1.6	3.8	1.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
365	N	内	C10石積4号	壇上中	石積	2.4	1.3	3.2	1.1	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
366	N	内	K114石積1号	壇上中	石積	3.5	1.5	3.8	1.2	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
369	N	内	K114石積2号	壇上中	石積	(3.1)	1.3	3.4	(1.1)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
381	N	内	B200石	壇上中	石積	2.6	1.2	3.3	3.7	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
382	N	内	B200石	壇上中	石積	(1.8)	1.4	3.2	(3.5)	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
387	N	内	K114石	壇上中	石積	3.3	1.2	3.3	3.4	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
395	N	内	K114石	壇上中	石積	2.8	1.6	3.6	1.2	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
396	N	内	K114石	壇上中	石積	(3.2)	1.3	3.4	(3.1)	凝灰岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
398	N	内	F12石	壇上中	石積	(2.0)	1.6	3.2	(3.0)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
399	N	内	F12石	壇上中	石積	(2.0)	1.6	3.2	(3.0)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
401	N	内	F12石	壇上中	石積	(4.0)	1.3	3.5	(2.8)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
403	N	内	F14石	壇上中	石積	1.4	1.6	3.3	3.5	凝灰質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
404	N	内	G12石	壇上中	石積	(3.1)	1.9	3.4	(3.4)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
407	N	内	H12石	壇上中	石積	2.1	1.9	3.1	3.1	凝灰岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
408	N	内	H12石	壇上中	石積	3.6	(1.7)	3.7	(3.0)	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
409	N	内	H12石	壇上中	石積	1.8	1.4	3.2	3.3	凝灰岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
410	N	内	H12石	壇上中	石積	2.1	1.0	3.3	3.8	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
411	N	内	K10石	壇上中	石積	2.9	1.1	3.5	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
420	N	内	H12石	壇上中	石積	(3.3)	1.0	3.8	(3.0)	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
432	N	内	M12石	壇上中	石積	1.6	1.4	3.3	3.5	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
433	N	内	M12石	壇上中	石積	2.8	1.2	3.3	3.7	粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
434	N	内	M12石	壇上中	石積	(1.5)	1.1	3.4	(3.4)	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
435	N	内	M14石	壇上中	石積	2.3	(1.4)	3.2	(3.8)	粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
436	N	内	M14石	壇上中	石積	(1.8)	1.4	3.2	(3.6)	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
437	N	内	M15石	壇上中	石積	1.7	1.3	3.4	3.3	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
438	N	内	O14石	壇上中	石積	2.4	1.3	3.4	3.3	粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
439	N	内	C200石	壇上中	石積	(1.5)	1.2	3.3	(3.4)	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
443	N	内	C200石	壇上中	石積	(1.8)	1.2	3.3	(3.3)	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
444	N	内	C21	I	石積	3.9	2.1	3.8	4.5	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
3891	G	E	F10(東トロンク)	■	石積	2.9	1.3	3.3	3.3	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
3892	G	E	F10(東トロンク)	■	石積	1.9	1.3	3.3	3.6	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
3893	G	E	F10	■	石積	2.2	1.6	3.3	3.7	チャート質粘板岩	中世	畿東	畿東	石室	石室
3894	G	E	F10	■	石積	3.0	2.0	3.7	3.8	粘板質チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3895	G	E	F10	■	石積	1.8	1.6	3.2	3.3	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3896	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3897	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3898	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3899	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3899	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3900	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3901	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3902	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3903	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3904	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3905	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3906	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3907	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3908	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3909	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室
3910	G	E	F10	■	石積	1.8	1.3	3.2	3.2	チャート	中世	畿東	畿東	石室	石室

第69表 石器 (1) 石畿

調査番号	品名	材質	出土地	種別	縦径φ(mm)	幅	厚さ	重量(g)	石質	時代	地域	メソフエクト	分類	備考
2880	G F 上	B24	Ⅱ	石鏃	27	1.6	0.3	69	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2881	G E 上	D21	Ⅱ	石鏃	13.5	1.3	0.3	67	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2882	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.4	1.5	0.3	67	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2883	G F 上	C24	Ⅱ	石鏃	2.9	1.2	0.4	1.0	凝灰岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2884	G E 上	D23	Ⅱ	石鏃	3.4	1.7	0.3	5.1	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2885	G E 中	E24	Ⅱ	石鏃	2.7	1.5	0.4	1.0	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2886	G E 中	F27	Ⅱ	石鏃	2.7	1.3	0.3	67	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2887	G F 上	B23	Ⅱ	石鏃	2.7	1.4	0.3	66	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2888	G F 上	B23	Ⅱ	石鏃	2.4	1.5	0.5	1.1	凝灰岩質チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2889	G E 中	E20	Ⅱ	石鏃	2.6	1.3	0.4	1.2	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2890	G E 中	G20	Ⅱ	石鏃	2.2	1.3	0.3	66	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2891	G E 下	G25	Ⅱ	石鏃	3.2	1.6	0.4	108	粘板岩	中古新	新大塚山系		有実中Ⅱ	赤中内→北部
2892	G E 中	C25	Ⅱ	石鏃	2.6	1.6	0.3	68	赤褐色粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2893	G F 下	G25	Ⅱ	石鏃	2.3	1.4	0.3	65	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2894	G E 中	G25	Ⅱ	石鏃	3.4	1.7	0.3	1.6	凝灰岩質チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	黒しがれくっついている
2895	G F 中	D25	Ⅱ	石鏃	2.9	1.2	0.5	2.5	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	表面に穴が開いている
2896	G E 上	C25	Ⅱ	石鏃	2.7	1.3	0.3	68	赤褐色粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2897	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.5	1.4	0.3	67	粘板岩	中古新	新大塚山系		有実中Ⅱ	
2898	G E 上	B25(高塚山系トレンチ)	Ⅱ	石鏃	2.3	1.3	0.3	67	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	高塚付近
2899	G E 中	F24	Ⅱ	石鏃	2.6	1.6	0.4	0.9	粘板岩質チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2900	G E 中	F25	Ⅱ	石鏃	2.6	1.3	0.4	1.3	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2901	G E 中	D26	Ⅱ	石鏃	3.2	1.4	0.4	1.6	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2902	G F 下	F22	Ⅱ	石鏃	2.7	1.4	0.4	1.2	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2903	G E 中	F27	Ⅱ	石鏃	2.1	1.2	0.4	67	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2904	G E 中	C23	Ⅱ	石鏃	2.2	1.3	0.3	66	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2905	G F 上	D27	Ⅱ	石鏃	2.7	1.2	0.4	1.1	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2906	G F 上	C24	Ⅱ	石鏃	2.2	1.6	0.4	1.5	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2907	G E 中	E26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.3	0.5	1.4	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2908	G E 中	F27	Ⅱ	石鏃	2.3	1.3	0.3	68	凝灰岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2909	G F 中	E27	Ⅱ	石鏃	2.9	1.5	0.4	1.4	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2910	G E 下	G26	Ⅱ	石鏃	2.7	1.2	0.4	1.0	粘板岩質チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2911	G E 上	E23	Ⅱ	石鏃	2.4	1.4	0.4	0.9	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2912	G E 中	B26	Ⅱ	石鏃	2.5	1.2	0.4	1.0	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2913	G E 中	E26	Ⅱ	石鏃	2.3	1.2	0.4	1.0	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2914	G E 中	E26	Ⅱ	石鏃	2.3	1.2	0.3	67	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2915	G E 上	B27	Ⅱ	石鏃	2.3	1.1	0.5	67	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2916	G E 上	B27	Ⅱ	石鏃	2.5	1.1	0.5	67	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2917	G E 下	G26	Ⅱ	石鏃	4.9	1.7	0.6	1.6	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2918	G E 上	D21	Ⅱ	石鏃	6.1	1.6	0.5	2.2	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2919	G E 中	F23	Ⅱ	石鏃	2.9	1.6	0.7	2.3	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2920	G F 中	D22	Ⅱ	石鏃	1.9	1.0	0.3	0.4	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2921	G E 中	G26	Ⅱ	石鏃	2.4	1.0	0.3	66	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2922	G E 中	E24	Ⅱ	石鏃	2.1	1.6	0.4	1.0	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2923	G E 上	C24	Ⅱ	石鏃	2.8	1.3	0.5	0.8	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2924	G E 中	F23	Ⅱ	石鏃	2.1	1.4	0.4	1.2	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2925	G E 中	D26	Ⅱ	石鏃	2.8	1.4	0.4	1.2	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2926	G E 中	C24	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2927	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2928	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2929	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2930	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2931	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2932	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.2	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2933	G E 中	E25	Ⅱ	石鏃	2.3	1.4	1.2	62	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2934	G E 中	D26	Ⅱ	石鏃	2.3	1.4	0.7	70	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2935	G E 下	D25	Ⅱ	石鏃	2.2	1.3	0.7	3.4	チャート質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2936	G E 中	F25	Ⅱ	石鏃	2.8	1.7	0.5	1.0	チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2937	G E 中	F26	Ⅱ	石鏃	1.9	1.4	0.5	0.7	凝灰岩質チャート	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2938	G E 中	C26	Ⅱ	石鏃	2.2	1.8	0.2	0.6	凝灰岩質粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	
2939	G E 中	F24	Ⅱ	石鏃	2.0	0.7	0.4	0.8	粘板岩	中古新	熊本		有実中Ⅱ	

第70表 石器(2) 石鏃

調査番号	出土地域	時期	出土地点	器名	口径(φ)	高さ	底径(φ)	口径	時代	地域	アスファルト	分類	備考
2001	G E	中	F24	皿(中一)	口径 45	14	67	56	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	雑炊	
2002	G E	中	G28	I	口径 32	11	67	43	チャーム製粉	中古層	熊本	雑炊	
2025	G E	中	C28	皿(下)	口径 47	69	68	28	チャーム	中古層	熊本	雑炊	
2026	G E	中	D29	皿(中心)	口径(15)	13	65	(36)	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	雑炊	
2084	G E	上	B28	I	口径 25	11	65	12	瀬灰質	中古層	熊本	雑炊	瀬の可燃性層
2027	G F	中	G30	皿	口径 27	58	63	63	チャーム	中古層	熊本	雑炊	
2028	G E	上	C29	皿	口径 28	58	64	64	瀬灰質	中古層	熊本	雑炊	
2027	G E	中	E30	皿	口径 24	63	65	69	瀬灰質チャーム	中古層	熊本	雑炊	
2029	G E	中	D26	皿(上)	口径 37	69	68	29	チャーム	中古層	熊本	雑炊	瀬の可燃性層
2029	G E	下	G29	皿(中)	口径 41	10	65	18	チャーム製粉	中古層	熊本	雑炊	
2080	G E	上	D31	I	口径 31	11	64	13	チャーム製粉	中古層	熊本	雑炊	
2001	G E	中	D25	I→皿	口径 19	13	65	11	赤褐色瀬灰質	中古層	高尾山山麓	雑炊	
2027	G W	中	F13	皿(上)	口径 19	(13)	63	(93)	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2027	G W	中	F14	皿(上)	口径 25	12	65	63	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2084	G W	上	G13	皿(上中)	口径 19	14	64	65	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2028	G W	上	K8	皿(上)	口径 27	17	64	64	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2028	G W	上	H15	皿(上)	口径 25	18	63	63	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2027	G W	上	F16	皿(上)	口径 20	11	65	65	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2028	G W	上	G16	皿(上)	口径 24	12	63	63	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2079	G E	上	B28(瀬9トランス)	皿(下)	口径 21	12	63	63	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2040	G W	上	K8	皿(上)	口径 23	15	65	65	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2041	G W	上	L11	皿(上)	口径 21	14	64	67	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2042	G W	上	G13	皿(上)	口径 23	23	57	24	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2043	G W	中	G11	皿(上)	口径(26)	17	35	(13)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2044	G W	上	F13	皿(上)	口径 24	14	64	64	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第1	
2045	G W	上	K10	皿(上)	口径 (19)	15	34	(67)	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	赤部・高尾山山麓
2046	G W	上	K15	皿(上)	口径 25	17	53	54	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第2	赤部・高尾山山麓
2047	G W	中	G11	皿(上)	口径 29	18	63	17	チャーム	中古層	熊本	有草層第2	
2048	G W	上	M10	皿(上)	口径 24	12	63	65	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第2	
2079	G W	上	F14	皿(上)	口径 27	12	63	38	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	有草層第2	
2028	G W	上	J8	皿	口径 25	10	63	57	チャーム	中古層	熊本	有草層第2	
2041	G W	上	G19	皿(上)	口径 28	13	65	14	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第2	
2052	G W	上	L12	皿(上)	口径 28	16	64	12	チャーム	中古層	熊本	有草層第2	
2025	G W	上	L13	皿(上)	口径 18	17	66	23	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第2	
2054	G W	上	M13	I	口径 32	16	64	18	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第2	
2055	G W	中	G11	皿(上)	口径 40	12	64	15	瀬灰質チャーム	中古層	熊本	有草層第3	
2026	G W	上	J8	I	口径(38)	17	65	(36)	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	有草層第3	大形、石焼炊
2027	G W	上	L11	皿(上)	口径 31	12	64	16	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2048	G W	上	L9	皿(上)	口径(19)	14	64	(19)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2029	G W	中	G10	皿(上)	口径 36	11	64	28	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2060	G W	上	M13	皿(上)	口径(33)	12	65	(7)	チャーム	中古層	熊本	有草層第3	
2061	G W	中	K8	皿	口径(27)	69	68	(50)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2025	G W	中	N13	皿(上)	口径(26)	10	68	(50)	チャーム	中古層	熊本	有草層第3	
2062	G W	上	M13	皿(上)	口径(26)	13	65	(11)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	身が浅い
2064	G W	上	L11	皿(上)	口径(19)	12	64	(18)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2065	G W	F2	F16	皿(上)	口径(27)	12	68	(12)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第3	
2066	G W	中	N10	皿(上)	口径(33)	13	68	(31)	瀬灰質	中古層	高尾山山麓	有草層第3	
2067	G W	中	K10	皿(上)	口径(32)	15	65	(24)	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第3	
2068	G W	上	J8	皿(上)	口径 43	22	68	72	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第4	大形、石焼炊
2069	G W	F3	L11	皿(上)	口径 39	27	64	25	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第4	瀬川七加工、石焼炊
2070	G W	F1	L10	皿(上)	口径 36	24	68	33	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第4	大形、石焼炊
2071	G W	中	M9	I	口径 18	69	63	62	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	有草層第5	
2072	G W	中	N10	皿(上)	口径(40)	16	66	(14)	チャーム	中古層	熊本	有草層第5	十字割
2073	G W	F1	K10	皿(上)	口径 23	12	63	66	チャーム	中古層	熊本	有草層第1	
2074	G W	上	G13	皿	口径 24	12	63	65	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2075	G W	上	L8	皿(上)	口径 10	16	64	55	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2077	G W	中	F13	皿(上)	口径 27	13	63	59	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	有草層第1	
2078	G W	F2	M10	皿(上)	口径(33)	14	62	(69)	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第1	
2079	G W	上	L7	I	口径(36)	18	64	(13)	瀬灰質	中古層	熊本	有草層第1	
2079	G W	上	J9	I	口径 38	15	65	18	瀬灰質灰土層	中古層	熊本	有草層第2	
2080	G W	F3	L7	I	口径 45	13	65	24	チャーム製粉	中古層	熊本	有草層第2	

第71表 石器(3) 石鉢

国名番号	地区	品名	出土地点	層位	器種(寸法)	容積	重量(g)	石質	時代	地層	アスファルト	分析	備考
2981	G W	上 1	K 9	I	石鏃 (47)	12	68	(3.0)	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 2	
2982	G W	上 1	N 14	層上	石鏃 32	1.0	63	21	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 2	室部の長い石鏃
2983	G W	上 2	O 14	層中～下	石鏃 23	1.0	63	85	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質	
2984	G W	上 2	F 18	層上	石鏃 (23)	1.2	64	(1.0)	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質	
2985	G W	中 1	F 12	層上	石鏃 28	1.6	65	67	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2986	G W	上 2	O 13	層上	石鏃 26	1.3	65	63	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2987	G W	上 1	L 10	層上	石鏃 23	1.0	63	56	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2988	G W	上 2	O 14	層上	石鏃 24	2.3	55	13	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質	行基館蔵
2989	G W	上 1	M 11	層上	石鏃 29	1.6	64	21	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2990	G W	上 2	O 13	層上	石鏃 25	1.4	64	69	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質	
2991	G W	上 2	N 13	層上	石鏃 (30)	1.4	65	(1.4)	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質	
2992	G W	上 1	L 9	層上～下	石鏃 30	1.9	64	24	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2993	G W	上 1	I 9	層上	石鏃 33	1.6	65	28	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2994	G W	中 1	F 12	層上	石鏃 26	1.5	64	13	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質	
2995	G W	上 1	M 11	層上～中	石鏃 (16)	1.1	63	(0.5)	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
2996	G W	上 1	K 9	層上	石鏃 (19)	1.3	63	(0.5)	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
2997	G W	上 1	H 8	層上	石鏃 23	1.8	67	30	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
2998	G W	上 2	O 12	層上	石鏃 22	1.2	64	68	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
2999	G W	上 1	J 8	層上	石鏃 33	1.9	65	34	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3000	G W	上 2	N 11	層上	石鏃 24	1.6	63	21	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3001	G W	上 2	O 14	層上	石鏃 14	1.7	63	61	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3002	G W	上 2	N 12	層上	石鏃 17	1.3	63	55	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3003	G W	上 2	N 13	層上	石鏃 20	1.6	53	58	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3004	G W	中 1	O 10	I	石鏃 (32)	1.4	54	(1.9)	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3005	G W	上 1	N 11	層上	石鏃 (40)	1.0	57	(3.0)	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3006	G W	上 1	N 12	I (粘土層)	石鏃 (32)	1.0	68	(0.2)	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3007	G W	上 2	N 13	層上	石鏃 20	1.1	67	43	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3008	G W	上 1	J 8	I	石鏃 45	1.7	67	56	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3009	G W	不明	不明	I	石鏃 (30)	1.0	66	(3.0)	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3010	G C	Ⅱ	G 13	J	石鏃 17	1.1	65	33	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3011	G C	Ⅱ	G 12	J	石鏃 22	1.4	65	58	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3012	G C	Ⅱ	H 9	I	石鏃 28	1.5	52	39	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3013	G C	Ⅱ	D 16	I	石鏃 24	1.2	62	56	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3014	G C	Ⅱ	H 18	層上	石鏃 36	1.5	55	(2.0)	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	有本実質 3
3015	G C	Ⅱ	H 13	I	石鏃 (33)	1.1	54	(0.5)	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	有本実質 3
3016	G C	Ⅱ	G 9	I	石鏃 (24)	1.1	52	(1.4)	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3017	G C	Ⅱ	H 12	層上	石鏃 (40)	1.5	64	(1.3)	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3018	G C	Ⅱ	G 10	I	石鏃 (18)	(0.6)	62	(0.5)	粘板岩質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3019	G C	Ⅱ	G 13	I 下	石鏃 42	1.2	65	21	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3020	G C	Ⅱ	G 10	I	石鏃 17	1.1	63	64	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3021	G C	Ⅱ	C 17	I	石鏃 35	1.4	65	12	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3022	G C	Ⅱ	K 18	I	石鏃 21	1.1	65	18	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3023	G C	Ⅱ	F 15	I	石鏃 38	1.5	65	15	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3024	G C	Ⅱ	F 12	Ⅱ	石鏃 24	1.5	63	36	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3025	G C	Ⅱ	G 12	Ⅱ	石鏃 23	1.2	53	16	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3026	G C	Ⅱ	H 11	I	石鏃 (25)	1.0	63	(0.6)	チャート質粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3027	G C	Ⅱ	C 15	I	石鏃 19	1.3	63	55	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3028	G C	Ⅱ	F 13	Ⅱ	石鏃 (32)	1.0	66	(3.6)	粘板岩質チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3029	G C	Ⅱ	D 15	I	石鏃 29	1.2	65	11	チャート	中世前期	粘板岩	有本実質 3	
3030	G C	Ⅱ	F 13	I	石鏃 19	1.4	63	20	粘板岩	中世前期	粘板岩	有本実質 3	

第72表 石器 (4) 石鏃

調査年度	調査地域	調査地	出土品名	部位	数量	身長(cm)	幅	厚さ	重量(g)	最大径	最大径比	最大径比	石質	時代	地域	分類	備考
201	N	内	C16位跡1号	掘土下位	石匙	5.8	4.7	0.6	5.4	0.8	1.4	0.5	チャート	中世	中世	横長3	
291	N	内	C15上段1号	掘土中	石匙	2.9	1.3	0.3	1.8	0.8	0.8	0.6	水原	中世	中世	横長2	小形、石質
1007	N	内	北西角	掘土中	石匙	3.1	0.6	0.7	1.3	1.1	0.4	0.4	粘板岩	中世	中世	横長2	
1008	N	内	北西角	掘土中	石匙	3.1	0.6	0.7	1.3	1.1	0.4	0.4	粘板岩	中世	中世	横長2	
1009	N	内	17上段9号	掘土中	石匙	3.9	2.7	1.1	4.0	0.8	1.0	0.4	チャート	中世	中世	横長3	横長(折込山溝)
1033	G	E	D20	掘土	石匙	3.7	2.7	1.3	2.7	1.2	1.9	1.0	チャート	中世	中世	横長1	
1034	G	E	F20	掘土	石匙	5.3	3.6	0.8	10.3	1.1	1.2	0.6	チャート	中世	中世	横長1	
1035	G	E	F27	掘土	石匙	1.1	1.0	1.0	0.6	0.6	1.0	0.5	チャート	中世	中世	横長1	横長
1036	G	E	F29	掘土	石匙	4.2	4.3	0.9	21.4	1.2	1.2	0.6	チャート	中世	中世	横長2	
1037	G	E	F29	掘土(角)	石匙	3.4	1.3	0.6	3.3	0.4	0.4	0.2	チャート	中世	中世	横長3	小形
1038	G	E	F29	掘土	石匙	6.5	3.2	0.8	15.6	1.4	1.5	0.7	チャート	中世	中世	横長4	
1039	G	E	F29	掘土	石匙	6.6	3.3	1.0	22.1	1.6	1.1	0.8	粘板岩	中世	中世	横長5	
1040	G	E	F29	掘土	石匙	6.8	3.8	1.1	20.1	1.2	1.4	1.1	チャート	中世	中世	横長5	
1042	G	E	F29	掘土	石匙	6.8	3.9	0.9	13.8	1.0	1.8	0.4	チャート	中世	中世	横長4	横長が長いもの
1043	G	E	F29	掘土	石匙	7.0	3.9	1.6	(32.4)	1.8	1.2	0.7	チャート	中世	中世	横長1	横長が長いもの
1044	G	E	F29	掘土	石匙	3.9	4.8	0.8	10.9	1.3	1.5	0.8	チャート	中世	中世	横長1	
1045	G	E	F29	掘土	石匙	3.9	4.0	0.9	11.0	1.4	1.2	0.7	チャート	中世	中世	横長1	
1046	G	E	F29	掘土	石匙	3.1	4.1	0.8	9.8	0.8	1.1	0.8	チャート	中世	中世	横長1	横長が長いもの
1047	G	E	F29	掘土	石匙	3.8	4.6	0.6	7.8	1.0	0.8	0.3	チャート	中世	中世	横長1	横長が長いもの
1048	G	E	F29	掘土	石匙	4.2	6.9	1.0	20.4	1.4	0.9	0.7	粘板岩	中世	中世	横長1	横長が長いもの
1049	G	E	F29	掘土	石匙	4.3	5.9	1.2	23.7	1.1	1.3	0.8	チャート	中世	中世	横長2	
1050	G	E	F29	掘土	石匙	3.9	6.0	1.0	18.9	1.3	1.0	0.5	粘板岩	中世	中世	横長2	
1051	G	E	F29	掘土	石匙	3.8	5.0	0.6	7.7	1.3	1.3	0.6	チャート	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1052	G	E	F29	掘土	石匙	4.3	5.4	0.9	7.8	1.1	0.8	0.5	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1053	G	E	F29	掘土	石匙	3.9	2.2	0.9	5.8	1.4	1.0	0.6	チャート	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1054	G	E	F29	掘土	石匙	3.1	2.2	1.2	5.9	1.3	1.0	0.9	チャート	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1055	G	E	F29	掘土	石匙	3.4	4.1	1.2	18.1	1.1	1.4	0.9	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1056	G	E	F29	掘土	石匙	5.6	2.2	0.8	8.8	1.3	1.0	0.6	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1057	G	E	F29	掘土	石匙	6.0	2.5	0.8	7.1	1.3	1.2	0.4	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1058	G	E	F29	掘土	石匙	6.2	1.1	1.4	1.8	1.3	0.8	0.8	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1059	G	E	F29	掘土	石匙	(9.0)	2.0	0.6	(10.6)	(1.3)	0.7	0.5	チャート	中世	中世	横長2	
1060	G	E	F29	掘土	石匙	7.8	2.3	0.7	22.1	1.3	1.1	0.6	チャート	中世	中世	横長2	
1061	G	E	F29	掘土	石匙	(1.7)	2.7	0.7	(10.9)	(1.3)	1.1	0.8	チャート	中世	中世	横長2	
1062	G	E	F29	掘土	石匙	6.5	4.0	0.8	25.6	1.8	0.9	0.6	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1063	G	E	F29	掘土	石匙	5.0	5.0	0.7	11.6	0.9	1.0	0.5	チャート	中世	中世	横長2	
1064	G	E	F29	掘土	石匙	6.8	2.9	0.8	10.8	1.0	0.9	0.6	粘板岩	中世	中世	横長2	
1065	G	E	F29	掘土	石匙	5.8	1.9	0.4	4.7	0.8	0.9	0.3	チャート	中世	中世	横長2	
1066	G	E	F29	掘土	石匙	6.7	2.2	1.0	13.9	1.0	1.1	0.4	粘板岩	中世	中世	横長2	
1067	G	E	F29	掘土	石匙	7.3	3.1	1.0	24.5	1.0	1.2	0.5	粘板岩	中世	中世	横長2	人字彫込
1068	G	E	F29	掘土	石匙	5.5	5.5	0.6	9.5	1.1	1.0	0.6	チャート	中世	中世	横長2	
1069	G	E	F29	掘土	石匙	5.8	5.0	0.7	8.8	1.8	0.7	0.4	チャート	中世	中世	横長2	
1070	G	E	F29	掘土	石匙	6.9	6.3	0.7	13.3	0.8	0.9	0.5	チャート	中世	中世	横長2	
1071	G	E	F29	掘土	石匙	2.7	3.8	0.7	6.4	0.8	0.7	0.4	チャート	中世	中世	横長2	
1072	G	E	F29	掘土	石匙	3.4	4.7	0.7	7.1	0.8	0.8	0.4	チャート	中世	中世	横長2	
1073	G	E	F29	掘土	石匙	2.2	4.8	0.4	6.0	1.1	0.8	0.3	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1074	G	E	F29	掘土	石匙	4.8	4.0	0.7	7.2	0.9	0.8	0.3	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1075	G	E	F29	掘土	石匙	4.1	3.9	0.6	4.9	0.8	1.0	0.5	粘板岩	中世	中世	横長2	
1076	G	E	F29	掘土	石匙	1.0	3.2	0.4	1.8	0.5	0.3	0.4	粘板岩	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1077	G	E	F29	掘土	石匙	1.7	(1.8)	0.3	(1.1)	1.2	0.5	0.2	チャート	中世	中世	横長2	横長が長いもの
1079	G	E	F29	掘土	石匙	2.6	1.9	0.8	2.9	0.8	1.0	0.3	チャート	中世	中世	横長2	横長が長いもの

第75表 石器(7) 石匙

標識番号	地上地号	地種	出土地点	層位	器名	形状	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	素材	心腔	時代	地域	学名	備考	
3179	G-W	上 2	N19	墓上	石匙	匙	8.1	0.9	0.9	5.0	2.2	1.3	0.9	中庄	新庄	新庄	鎌倉小形土人形貯蔵
3180	G-C	外	伝 9	1	石匙	匙	5.0	0.8	1.0	1.4	1.8	0.7	中庄	新庄	新庄	鎌倉小形土人形貯蔵	

標識番号	地上地号	地種	出土地点	層位	器名	形状	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	素材	心腔	時代	地域	学名	備考
3181	G-E	上	C20	墓	異形石器	尖形	4.0	1.6	0.4	0.1		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3182	G-E	中	E21	墓上	異形石器	尖形	5.3	1.9	0.6	1.5		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3183	G-E	中	D28	墓	異形石器	尖形	1.4	0.5	0.9	0.9		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	
3184	G-E	中	E24	墓	異形石器	尖形	1.0	0.4	0.8	0.9		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	
3185	G-E	中	C20	1	異形石器	尖形	3.5	1.6	0.5	3.2		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	
3186	G-E	中	C20	1	異形石器	尖形	1.8	0.7	0.8	0.8		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3187	G-E	中	F20	1	異形石器	尖形	1.7	0.7	0.5	1.3		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3188	G-W	上 7	F14	墓上	異形石器	尖形	1.7	0.6	0.3	0.3		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3189	G-W	上 7	O13	墓上	異形石器	尖形	1.7	0.4	0.3	0.3		チャーム	中庄	新庄	新庄	
3190	G-W	中 1	中 9	墓下	異形石器	尖形	2.0	1.3	0.3	0.8		銅製	中庄	新庄	新庄	
3191	G-W	上 1	I 8	1	異形石器	尖形	4.5	1.5	0.7	5.0		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	
3192	G-W	上 1	J 13 + J 13 + J 13	墓上	異形石器	尖形	8.5	3.6	0.9	8.0		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	
3193	G-C	外	D28	1	異形石器	尖形	3.1	1.9	0.6	1.7		チャーム	中庄	新庄	新庄	

標識番号	地上地号	地種	出土地点	層位	器名	形状	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	素材	心腔	時代	地域	学名	備考	
3194	N	内	G110	埋立	異形石器	短棒状	3.0	1.3	0.7	2.2		チャーム	中庄	新庄	新庄	両側打込、機軸	
3195	N	内	G110	埋立	異形石器	短棒状	0.7	0.3	0.6	0.7		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3196	N	内	J 17上視4号	埋立	異形石器	短棒状	2.0	1.0	0.6	0.1		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3197	G-E	中	F24	墓上	異形石器	短棒状	1.1	0.7	0.7	0.8			中庄	新庄	新庄	新庄	
3198	G-E	中	F27	1	異形石器	短棒状	2.3	1.3	0.7	4.8		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3199	G-E	上	C24	墓上	異形石器	短棒状	2.8	2.4	0.6	2.0		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3200	G-E	中	E25	墓中	異形石器	短棒状	2.7	2.4	0.6	0.9		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3201	G-E	中	F25	墓中	異形石器	短棒状	3.5	2.2	1.0	8.1			中庄	新庄	新庄	新庄	
3202	G-E	中	E26	墓中	異形石器	短棒状	3.0	1.8	1.2	6.1			中庄	新庄	新庄	新庄	
3203	G-E	上	C24	墓上	異形石器	短棒状	3.1	2.0	1.1	7.8		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3204	G-E	中	E25	墓中	異形石器	短棒状	3.3	2.4	0.8	4.9			中庄	新庄	新庄	新庄	
3205	G-E	中	E25	墓中	異形石器	短棒状	2.7	1.8	0.8	4.1			中庄	新庄	新庄	新庄	
3206	G-E	上	C28	墓上	異形石器	方形状	1.5	1.1	0.7	4.1		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3207	G-E	中	F27	墓上	異形石器	方形状	1.6	2.4	0.8	4.0		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3208	G-W	上 1	K10	1	異形石器	短棒状	2.6	1.7	0.9	4.8		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3209	G-W	上 7	N11	墓上	異形石器	方形状	2.4	2.2	0.6	5.0		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3210	G-W	上 7	O14	墓上	異形石器	方形状	2.3	2.6	0.9	5.8		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3211	G-W	上 7	P13	墓上	異形石器	短棒状	2.9	2.0	1.0	8.1		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3212	G-C	外	K18	1	異形石器	方形状	2.4	2.3	1.0	4.8		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	

標識番号	地上地号	地種	出土地点	層位	器名	形状	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	素材	心腔	時代	地域	学名	備考	
3213	G-E	上	C28	墓上	異形石器	短棒状	3.4	3.3	0.7	5.0		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3214	G-E	中	G24	1	異形石器	打面	2.6	6.1	0.6	8.1		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3215	G-E	上	C23	墓上	異形石器	打面	3.0	2.3	0.6	3.8		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3216	G-W	中 1	L 7	墓上	異形石器	尖形	2.2	6.7	0.8	4.7		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3217	G-W	中 1	Q12	墓上	異形石器	尖形	3.2	3.9	0.3	4.8		赤銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3218	G-W	上 2	N12	1	異形石器	打面	2.1	5.8	1.6	12.8		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3219	G-W	上 1	L 14	墓上	異形石器	尖形	2.8	4.4	0.2	0.6		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3220	G-W	上 1	N12	墓上	異形石器	尖形	1.7	1.9	0.6	3.4		チャーム	中庄	新庄	新庄	新庄	
3221	G-W	上 1	L14+M14	墓上	異形石器	尖形	3.4	4.5	1.3	12.9		銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3222	G-W	上 2	P13	墓上	異形石器	尖形	4.5	2.2	2.9	1.5		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	
3223	G-C	外	K17	墓上	異形石器	尖形	4.4	3.7	0.9	13.7		縄文青銅製	中庄	新庄	新庄	新庄	

第76表 石器(8) 石匙・異形石器・楔形石器・鋸歯状石器

編號	出土層	品名	出土地点	時代	器種	形状	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	材質	時代	場所	備考	
3026	G E	中	F 25	I	削器	発射	方形	34	33	14	15.7	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	一層位に付遺品の 多数が出土 している
3026	G E	上	F 25	I	削器	発射	二角形状	45	48	10	22.8	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3027	G E	中	F 25	II	削器	発射	二角形状	39	32	0.9	32.0	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3028	G E	中	F 25	II	削器	発射	二角形状	35	34	1.2	10.9	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3029	G E	底	C 25	III	削器	発射	不定形	41	5.8	1.1	16.8	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3030	G E	上	B 25	I	削器	発射	不定形	43	32	1.7	24.9	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3031	G E	上	F 25	III	削器	発射	不定形	34	6.9	3.0	34.9	灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3032	G E	中	F 25	III	削器	発射	不定形	22	1.8	0.6	1.7	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3033	G F	底	D 24	I	削器	発射		3.9	1.6	3.1	0.9	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3034	C E	中	G 24	III	削器	発射		4.6	4.4	1.1	18.7	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3035	G F	中	B 24	III	削器	発射		3.7	2.1	3.9	13.8	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3036	G E	中	B 24	I	削器	発射		5.0	3.6	1.4	26.9	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3037	G E	底	C 25	III	削器	発射		4.9	3.2	3.1	18.3				
3038	G E	中	F 25	III	削器	発射					43.9				
3039	G E	中	F 25	III	削器	発射		3.4	3.1	0.8	13.2				
3040	G E	中	F 25	III	削器	発射		4.0	4.3	1.1	18.6				
3041	G E	中	F 25	III	削器	発射		3.2	3.6	1.8	26.0				
3042	C E	底	D 24	III	削器	発射		4.3	4.0	1.8	31.4	焼灰質	中世序	新山岳山塊	
3043	G F	上	F 25	III	削器	発射		7.7	5.1	1.7	27.0	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品 九丁 台裏
3044	G E	上	F 25	III	削器	発射		4.3	3.0	1.2	16.0	F ¹ - 1	中世序	新山岳山塊	
3045	G E	上	F 25	III	削器	発射		3.2	2.3	0.5	3.5	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	新山岳山塊
3046	G E	上	F 9	III	削器	発射		4.5	1.7	0.6	4.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	新山岳山塊
3047	G E	上	F 9	III	削器	発射		3.2	3.7	1.1	22.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	新山岳山塊
3048	G E	中	F 9	III	削器	発射		3.8	2.5	0.6	6.4	焼灰質	中世序	新山岳山塊	生地の付遺品 下ツケ
3049	G E	上	F 14	I	削器	発射		2.6	2.7	0.9	4.8	焼灰質	中世序	新山岳山塊	方角の一角が 欠けていた 遺品に 似ている
3050	G E	上	F 14	I	削器	発射		5.3	2.5	1.0	7.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	焼灰質の遺品に 似ている
3051	G E	上	F 10	I	削器	発射		6.2	5.6	1.1	21.4	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3052	G E	上	F 10	III	削器	発射		5.9	4.9	1.6	38.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3053	G E	上	F 11	III	削器	発射		4.3	3.5	2.5	31.6	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3054	G E	上	F 10	III	削器	発射		6.2	2.5	0.8	10.0	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	F ¹ - 1 質焼 灰土の遺品に 似ている
3055	G E	上	F 25	III	削器	発射		4.5	4.0	1.8	26.5	焼灰質	中世序	新山岳山塊	
3056	G E	中	F 10	III	削器	発射		5.0	4.3	0.8	20.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3057	G E	上	F 10	III	削器	発射		5.8	5.9	1.8	34.4	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3058	G E	上	F 10	III	削器	発射		1.5	4.5	1.8	76.8	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3059	G E	上	F 10	III	削器	発射		11.1	7.0	2.1	116.4	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3060	G E	中	F 10	III	削器	発射		2.7	2.9	1.1	11.6	焼灰質	中世序	新山岳山塊	
3061	G E	上	F 10	III	削器	発射		5.0	4.3	0.8	20.3	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3062	G E	中	F 9	III	削器	発射		4.7	5.0	1.8	33.0	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	
3063	G E	中	F 11	III	削器	発射		6.6	4.1	0.8	19.8	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3064	G E	中	F 10	III	削器	発射		5.1	5.1	0.7	9.1	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3065	G E	上	F 7	III	削器	発射		5.0	3.2	1.4	15.1	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3066	G E	上	F 10	III	削器	発射		3.2	4.8	1.3	18.7	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3067	G E	上	F 11	III	削器	発射		3.8	4.4	1.0	48.4	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3068	G E	上	F 10	III	削器	発射		7.2	2.2	0.6	14.4	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3069	G E	上	F 10	III	削器	発射		8.2	4.8	1.5	48.2	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3070	G E	上	F 7	III	削器	発射		5.5	2.8	1.4	23.8	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3071	G E	上	F 12	III	削器	発射		3.6	4.2	1.2	14.3	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3072	G E	上	F 12	III	削器	発射		4.0	3.2	1.0	9.9	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3073	G E	中	F 10	III	削器	発射		3.5	4.9	1.3	26.3	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3074	G E	上	F 13	III	削器	発射		3.9	4.2	0.5	6.9	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3075	G E	上	F 13	III	削器	発射		4.5	4.8	1.6	30.1	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3076	G E	上	F 11	III	削器	発射		3.5	4.2	0.5	1.6	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3077	G E	上	F 13	III	削器	発射		3.7	2.6	0.8	8.7	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3078	G E	上	F 13	III	削器	発射		4.4	3.6	0.8	8.1	焼灰質	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3079	G E	上	F 13	III	削器	発射		5.1	2.4	0.9	11.1	焼灰質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3080	G E	中	F 9	III	削器	発射		3.9	3.2	0.3	6.3	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3081	G E	中	F 9	III	削器	発射		3.9	3.2	0.3	6.3	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる
3082	G E	中	F 10	III	削器	発射		3.9	3.2	0.3	6.3	F ¹ - 1 質焼 灰土	中世序	新山岳山塊	遺品の形、 材質、 重量が 異なる

第79表 石器 (11) 削器・掘器

編號	出土地域	経緯	出土地点	層位	器種名	穴層位置	形制	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	石質	時代	地域	備考
3312	G-W	E	B13	Ⅱ	削器	尖形	線形	7.5	3.3	0.9	11.6	チャート質燧石	中世前期	新井赤山山塊	溝平の緒付、丸磨突る
3313	G-C	E	B14	Ⅱ	削器	尖形	線形	7.5	3.3	0.9	11.6	チャート質燧石	中世前期	新井赤山山塊	溝平の緒付、丸磨突る
3314	G-C	E	C10	Ⅱ	削器	尖形	線形	3.5	1.1	1.1	10.0	燧石質燧石	中世前期	溝平-丸戸-岩倉	
3315	G-C	E	D17	Ⅱ	削器	尖形	線形	3.5	0.8	1.1	14.3	チャート質燧石	中世前期	溝平-丸戸-岩倉	
3316	G-C	E	E17	Ⅱ	削器	尖形	不定形	2.6	1.5	0.6	1.8	チャート	中世前期	新井赤山山塊	
3317	G-C	E	G13	Ⅱ	削器	尖形	線形	2.7	1.6	0.5	2.2	燧石質燧石	中世前期	新井赤山山塊	
3318	G-C	E	F19	Ⅱ	削器	尖形	方形状	3.7	2.4	1.0	10.7	燧石質燧石	中世前期	新井赤山山塊	
3319	G-C	E	F16	Ⅱ	削器	尖形	線形	3.3	2.2	0.3	1.3	チャート質燧石	中世前期	新井赤山山塊	
3320	G-E	E	B25	Ⅱ	磨器	尖形	楕圓	3.0	3.2	1.3	63.8	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3321	G-E	E	B23	Ⅱ	磨器	尖形	線形	7.5	2.2	1.3	11.9	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3322	G-E	E	C4	Ⅱ-HV	磨器	尖形	線形	4.1	5.3	1.1	36.8	チャート質燧石	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	方磨・磨草具として使用
3323	G-E	E	第9トレンチ	Ⅱ上	磨器	尖形	線形	5.8	3.1	1.7	24.8	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	高橋は未定である
3324	G-E	E	C22	Ⅱ下	磨器	尖形	楕圓	3.4	3.6	1.0	52.9	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3325	G-W	E	M1	Ⅱ上	磨器	尖形	楕圓	5.9	4.4	1.3	30.8	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3326	G-W	E	L13	Ⅱ	磨器	打点磨器	楕圓	6.1	3.9	1.2	16.8	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	対岸一帯穴付、耳季の緒付
3327	G-W	E	L12	Ⅱ上	磨器	打点磨器	楕圓	5.1	2.8	1.0	9.3	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	石造の磨み器か?
3328	G-W	E	O12	Ⅱ上	磨器	尖形	線形	3.9	1.0	0.9	7.9	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	高橋は
3329	G-W	E	N12	Ⅱ上	磨器	尖形	線形	5.3	3.3	1.3	20.4	粘板岩質チャート	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	石質は
3330	G-W	E	N10	Ⅱ上	磨器	尖形	楕圓	4.2	5.6	1.0	18.0	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3331	G-W	E	L10	Ⅱ上	磨器	打点磨器	楕圓?	4.1	2.8	1.0	15.3	チャート質燧石	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3332	G-W	E	F14	Ⅱ上	磨器	尖形	楕圓	5.2	2.9	1.2	16.8	粘板岩	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	溝越状断面を利している
3333	G-W	E	F11	Ⅱ上	磨器	尖形	楕圓	4.3	5.6	1.2	27.3	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	溝越状断面を利している
3334	G-W	E	G7	F-H層	磨器	尖形	楕圓	4.9	4.3	1.1	18.0	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3335	G-W	E	M4	Ⅱ上	磨器	尖形	楕圓	5.7	6.0	1.1	24.2	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	高橋に近い
3336	G-C	E	B15	Ⅱ上	磨器	尖形	線形	5.0	4.2	1.3	66.3	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3337	G-C	E	C19	Ⅱ上	磨器	尖形	線形	6.4	3.9	2.0	39.0	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3338	G-E	E	B24	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	2.8	2.2	1.0	6.2	赤褐色燧石	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3339	G-E	E	G26	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	2.3	1.6	0.7	2.7	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3340	G-E	E	B25	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	1.5	1.5	0.7	1.9	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3341	G-E	E	E17	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	2.0	1.9	0.6	2.1	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3342	G-E	E	F24	Ⅱ上	円形磨器	尖形	円形状	2.1	1.4	0.5	3.9	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3343	G-E	E	F11	Ⅱ上	円形磨器	尖形	円形状	3.0	2.2	0.6	5.0	粘板岩	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3344	G-E	E	F25	Ⅱ上	円形磨器	尖形	円形状	2.2	1.8	0.6	4.8	チャート中世前期	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3345	G-E	E	F23	Ⅱ上	円形磨器	尖形	円形状	3.6	2.5	0.5	6.8	チャート	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	
3346	G-E	E	F27-岩倉	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	3.6	2.6	1.3	71.3	チャート質燧石	中世前期	溝越(高橋の二)	
3347	G-E	E	C26	Ⅱ中	円形磨器	尖形	円形状	3.4	3.6	1.0	12.8	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3348	G-W	E	G12	Ⅱ上(高橋層)	円形磨器	尖形	円形状	2.0	2.5	0.9	6.9	粘板岩質燧石	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	円形磨器の本型か?
3349	G-W	E	M12	Ⅱ上	円形磨器	尖形	円形状	2.5	2.3	0.9	8.7	粘板岩質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3350	G-W	E	J19	Ⅱ	円形磨器	尖形	円形状	3.8	3.4	0.6	7.9	燧石質燧石	中世前期	堀元-丸戸-岩倉	
3351	G-E	E	B25-岩倉	Ⅱ中	円形磨器	尖形	円形状	5.1	3.7	1.1	13.9	チャート質燧石	中世前期	堀元(新井赤山山塊)	

編號	出土地域	経緯	出土地点	層位	器種名	穴層位置	形制	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	石質	時代	地域	備考
3352	K	E	岩倉沖	Ⅱ中	心臓状石器		心臓状	16.7	8.6	2.7	373.2	赤褐色燧石	中世前期	新井赤山山塊	
3353	G-E	E	D11	Ⅱ中	心臓状石器	(18.0)	心臓状	7.2	2.1	1.0	104.0	粘板岩	中世前期	新井赤山山塊	
3354	G-W	E	F19	Ⅱ中	心臓状石器	(14.0)	心臓状	3.4	2.1	1.0	121.0	粘板岩	中世前期	溝平-丸戸-岩倉	
3355	G-W	E	L7	Ⅱ上	心臓状石器	11.2	心臓状	6.0	2.4	2.0	229.7	砂質燧石	中世前期	新井赤山山塊	
3356	G-W	E	L9	Ⅱ上	心臓状石器	1.6	心臓状	6.6	1.7	0.7	27.0	粘板岩	中世前期	新井赤山山塊	
3357	G-W	E	L1	Ⅱ上	心臓状石器	11.4	心臓状	5.3	1.3	1.0	79.0	粘板岩	中世前期	新井赤山山塊	
3358	G-C	E	F15	Ⅱ下	心臓状石器	13.7	心臓状	9.1	3.9	1.0	185.4	粘板岩	中世前期	新井赤山山塊	

第80表 石器 (12) 削器・磨器・円形磨器・石楕

発掘番号	出土地域	経緯	出土地	位置	発掘者	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	材質	時代	地域	備考	
918	N	西	K11住居跡P下段	礎土中	扶入石器	6.0	2.8	1.0	2.9	0.1	200	赤褐色燧石	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている
967	N	西	G14住居跡状	礎土中	扶入石器					2.70	チャート質物	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
954	N	西	F19中庭5号	礎土中	扶入石器	3.3	3.3	0.8	1.5	0.0	95	チャート質物	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている
1120	N	西	D17住居穴状+竈1号	礎土中	扶入石器					62	赤褐色燧石	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
1002	G	R	C29	礎土上	扶入石器	4.8	3.8	2.0	1.3	6.1	143	チャート質物	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている
1042	G	W	E1	K10	礎土上	扶入石器	6.3	3.7	1.3	1.7	54	チャート質物	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている
1064	G	W	G11		礎土上	扶入石器				200	粘板岩	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
1083	G	W	F1	L8	礎土上	扶入石器				142	粘板岩質チャート	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
1006	G	W	E1	E5	礎土上	扶入石器				2016	粘板岩	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
1027	G	W	E1	K8	礎土上	扶入石器				618	粘板岩	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	
1224	G	W	E1	N12	礎土上	扶入石器				682	粘板岩	中生界	北山山塊(南河津層)の下部に埋まっている	

発掘番号	出土地域	経緯	出土地	位置	形状	欠損程度	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	材質	時代	地域	分類	備考	
992	N	西	D19住居跡	礎土中	石皿	全備	8.1	11.0	4.0	487.5	輝石燧石	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
997	N	西	F15住居跡	礎土中	石皿	2方向	6.40	7.11	2.4	217.1	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
983	N	西	B24住居跡1号	礎土中	石皿	3方向	11.11	13.80	7.8	1361.3	灰刀岩(燧岩)	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
994	N	西	B24住居跡1号	礎土中	石皿	2方向	11.11	13.71	7.8	1338.5	輝石燧石	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1011	N	西	B20中庭	礎土上	石皿	全備	6.60	14.31	1.9	1210	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1044	N	西	G18中庭3号	礎土上	石皿	2方向	11.17	11.17	12.9	2012.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1042	N	西	G18中庭3号	礎土上	石皿	全備	6.60	14.71	1.8	1010.0	安山岩(燧岩)	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1064	N	西	F19中庭1号	礎土上	石皿	3方向	7.2	10.50	3.2	3009.9	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1074	N	西	F21中庭2号	礎土上	石皿	3方向	10.80	10.62	3.2	3009.0	安山岩(燧岩)	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1029	G	北	G24	礎土中	石皿	2方向	11.32	11.50	3.0	1661.0	輝石燧石	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1049	G	北	G24	礎土中	石皿	3方向	11.80	17.30	3.0	1817.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1041	G	北	G24	礎土中	石皿	2方向	8.7	3.1	3.1	301.4	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1042	G	北	B20-D19中庭	礎土上	石皿	3方向	10.7	9.3	3.2	229.1	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1043	G	北	G25	礎土上	石皿	2方向	10.31	11.42	3.0	1011.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1044	G	北	G25	礎土上	石皿	1方向	11.22	10.91	3.1	1313.0	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1045	G	北	F20	礎土上	石皿	3方向	10.80	10.80	3.0	1000.0	輝石燧石	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1046	G	北	G26	礎土上	石皿	2方向	20.7	22.3	2.1	3980.0	輝石燧石	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1047	G	北	F21	礎土中	石皿	3方向	11.0	11.1	4.0	498.7	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1048	G	北	F20	礎土上	石皿	全備	7.10	14.1	1.30	1017.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1049	G	北	G24	礎土中	石皿	2方向	11.70	12.41	4.1	1967.0	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1020	G	北	F20	礎土上	石皿	3方向	14.4	12.0	3.0	501.4	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1061	G	北	E20	礎土中	石皿	全備	12.9	9.7	5.5	178.3	両ソイ岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1062	G	北	F13	礎土上	石皿	2方向	11.80	10.0	5.1	1002.0	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1066	G	北	F1	F9	礎土上	石皿	2方向	11.40	5.4	5.5	1405.0	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明	
1064	G	北	G14	礎土上	石皿	3方向	11.80	12.21	3.2	1214.0	流紋岩質粘板岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1065	G	北	F1	F11	礎土上	石皿	11.60	11.30	5.1	1199.0	チャイタ	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1068	G	北	F1	F6	礎土上	石皿	11.50	11.00	4.1	1307.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		
1072	G	北	F10	礎土上	石皿	2方向	6.2	10.1	7.2	2008.0	砂岩	中生界	北山山塊(南河津層)	不明		

第84表 石器(16) 扶入石器・石皿

編號番号	地上地号	面積	中心地点	用途	用途	延長(m)	幅	厚さ	重量(k)	材質	時代	地層	備考
1112	N	内	M11土坑7号	埋立中	凹石	7.7	7.2	30	285g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に溝内行状の窪み
1113	N	内	M10土坑十区1号	埋立中	凹石	11.4	5.4	43	615g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
1105	N	内	G17土坑上段1号	埋立中	凹石	3.5	4.5	1.40	131g	ファイヤイト	中世新	二戸	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
1108	N	内	I10土坑上段2号	埋立中	凹石	17.7	6.7	33	354g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
1106	N	内	M10土坑十区1号	埋立中	凹石	11.3	5.4	43	615g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3016	G	中	F25	埋立	凹石	1.6	1.6	2.8	265g	チャート	中世新	関東(新井山山脈)	
3019	G	中	F26	埋立	凹石	5.5	5.6	4.4	264g	ファイヤイト	中世新	久保(菅代-田原野)	磨り石の転用品
3020	G	中	F24	埋立	凹石	16.4	6.6	3.6	405g	アモルニス砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3021	G	中	F26	埋立	凹石	1.6	1.6	2.8	265g	チャート	中世新	関東(新井山山脈)	磨り石の転用品
3022	G	中	C26	埋立	凹石	1.6	1.6	2.8	265g	チャート	中世新	関東(新井山山脈)	
3023	G	中	C26	埋立	凹石	7.2	5.7	3.8	225g	安山岩	中世新	久保(菅代-田原野)	磨り石の転用品
3024	G	中	F26	埋立	凹石	11.5	7.4	3.9	382g	アモルニス砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3025	G	中	F25	埋立	凹石	5.6	4.1	4.1	490g	安山岩	中世新	久保(菅代-田原野)	
3026	G	中	C25	埋立	凹石	6.2	5.8	3.3	214g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3027	G	中	F17	埋立	凹石	5.9	6.7	1.7	119g	チャート	中世新	関東(新井山山脈)	磨り石
3028	G	中	F10	埋立	凹石	6.9	5.0	4.0	297g	安山岩	中世新	久保(菅代-田原野)	磨り石の転用品
3029	G	中	F19	埋立	凹石	4.2	4.4	3.2	186g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3030	G	中	F18	埋立	凹石	7.1	7.4	4.1	395g	アモルニス砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	右面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3031	G	中	F12	埋立	凹石	12.3	10.9	5.8	1210g	あり	中世新	関東(新井山山脈)	右面の転用品
3032	G	中	F14	埋立	凹石	6.9	6.7	4.6	682g	アモルニス砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3033	G	中	F17	埋立	凹石	5.6	5.3	2.9	166g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3034	G	中	F12	埋立	凹石	13.2	6.2	2.4	216g	片麻岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3035	G	中	F13	埋立	凹石	8.7	7.8	3.4	492g	安山岩	中世新	久保(菅代-田原野)	磨り石の転用品
3036	G	中	F12	埋立	凹石	7.8	5.5	4.2	382g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3037	G	中	F12	埋立	凹石	2.8	5.4	4.6	311g	凝灰質硬砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3038	G	中	F15	埋立	凹石	3.6	3.8	2.9	294g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	
3039	G	中	F15	埋立	凹石	20.5	12.6	7.1	3645g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	磨り石とするものと思われる
3040	G	中	F24	埋立	凹石	26.0	16.9	9.0	1900g	凝灰質砂岩	中世新	山形(菅代)	磨り石と推定される
3041	G	中	F26	埋立	凹石	17.0	16.2	16.1	3825g	凝灰質砂岩	中世新	山形(菅代)	磨り石の転用品
3044	G	中	F11	埋立	凹石	11.0	11.5	4.1	1200g	ファイヤイト	中世新	二戸	

編號番号	地上地号	面積	中心地点	用途	用途	延長(m)	幅	厚さ	重量(k)	材質	時代	地層	備考
309	N	内	X11住居跡	埋立中	凹石	5.3	3.0	2.2	260g	安山岩(菅代)	新石器	菅代(菅代)	菅代人用
1142	N	内	M10土坑十区1号	埋立中	凹石	11.4	5.4	4.0	610g	凝灰質砂岩	中世新	関東(新井山山脈)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3022	G	中	D25	埋立	凹石	12.5	5.1	2.6	244g	凝灰質硬砂岩	中世新	久保(菅代)	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3029	G	中	F26	埋立	凹石	6.6	1.7	1.2	141g	ファイヤイト	新石器	二戸	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3034	G	中	F26	埋立	凹石	1.9	2.2	1.2	180g	ファイヤイト	新石器	二戸	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3040	G	中	F24	埋立	凹石	1.6	1.6	2.8	265g	チャート	新石器	二戸	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3041	G	中	F26	埋立	凹石	17.0	16.2	16.1	3825g	凝灰質砂岩	新石器	二戸	両面に窪みがあることから新井山の凝灰質砂岩と推定
3044	G	中	F11	埋立	凹石	11.0	11.5	4.1	1200g	ファイヤイト	新石器	二戸	

第85表 石器 (17) 凹石・砥石

調査番号	地方自治体	調査地	出土地点	器名	器種	高(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	工痕	時代	地域	分類	備考
312	N	西	K14B 内線跡	硬土中	磁石	54.7	132	13	176.9	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
313	N	西	K1111 埋藏跡(4)	硬土中	磁石	66.5			66.5	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
381	N	西	G117 埋藏跡(4) E	硬土中	磁石	59	58	3.2	502.8	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
382	N	西	子口跡(埋)	硬土中	磁石	60	51	1.7	68.9	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
390	N	西	D24 内線跡	硬土中	磁石	27.9	5.3	1.9	536.8	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
385	N	西	G123埋藏跡(4)	硬土中	磁石	106	6.5	2.9	211.7	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
1079	N	西	J117 坑土(4) 埋	硬土中	磁石	69	69	6.2	534.4	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
1085	N	西	K14 坑土(4) 埋	硬土中	磁石	69	68	5.3	396.2	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
1081	N	西	L11 坑土(4) 埋	硬土中	磁石	5.3	5.6	2.6	149.6	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
1095	N	西	L11 坑土(4) 埋	硬土中	磁石	178	5.9	3.2	641.6	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
1124	N	西	K14E 坑土(4) 埋(土層)	硬土中	磁石	54	51	2.1	111.1	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
1144	N	西	K14E 坑土(4) 埋	硬土中	磁石	80	4.0	2.8	76.8	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
1152	N	西	M1埋藏跡	硬土中	磁石	5.6	6.1	3.9	175.5	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
1159	N	西	K14埋藏跡	硬土中	磁石	102	6.9	2.6	292.9	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
1164	N	西	K14埋藏跡	硬土中	磁石	64	6.0	4.8	732.5	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、埋り石版瓦
1150	N	西	K14埋藏跡	硬土中	磁石				79.1	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3548	G 北	上	古55-D23(4) 埋	硬土中	磁石	85	7.2	3.1	338.1	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3209	G 北	上	C16	硬土中	磁石	62	6.2	5.8	406.6	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3096	G 北	上	C15	硬土中	磁石	48	3.7	1.4	86.1	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3261	G 北	上	D11	硬土中	磁石	80	8.1	4.7	547.9	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3262	G 北	上	D13	硬土中	磁石	9.3	6.8	1.4	616.8	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
3098	G 北	上	F13	硬土中	磁石	47	3.0	2.9	82.3	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3094	G 北	上	E17	硬土中	磁石	19	4.7	3.3	108.8	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3095	G 北	上	E18	硬土中	磁石	36	3.4	3.2	38.3	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3268	G 北	上	E17	硬土中	磁石	5.8	5.3	2.6	174.6	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3061	G 北	上	F19	硬土中	磁石	13.2	6.7	3.2	67.6	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、山(欠損)
3548	G 北	上	F19	硬土中	磁石	10.8	1.5	4.9	550.6	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3269	G 北	上	C16	硬土中	磁石				338.2	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3070	G 北	上	G18	硬土中	磁石	80	6.8	4.1	687.7	土器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、埋り石版瓦
3271	G 北	上	D12	硬土中	磁石				381.8	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3072	G 北	上	D13	硬土中	磁石				88.1	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用	
3073	G 北	上	D19	硬土中	磁石				548.5	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3074	G 北	上	E14	硬土中	磁石				392.2	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3075	G 北	上	F14	硬土中	磁石				351.7	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用、1/2欠損
3076	G 北	上	E17	硬土中	磁石				118.9	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3077	G 北	上	F19	硬土中	磁石				30.5	陶器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3078	G 北	上	F17-D17(4) 埋	硬土中	磁石				307.9	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3079	G 北	上	J16	硬土中	磁石	6.5	2.9	2.9	47.8	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3080	G 北	上	F12	硬土中	磁石	3.3	2.4	2.2	46.3	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3081	G 北	上	H18	硬土中	磁石	7.8	3.5	2.7	257.9	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3082	G 北	上	H11	硬土中	磁石	3.8	2.9	1.1	27.8	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3083	G 北	上	I19	硬土中	磁石	3.0	4.9	3.9	274.4	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3084	G 北	上	G12	硬土中	磁石	6.0	6.2	5.4	347.6	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3085	G 北	上	G11	硬土中	磁石	6.0	7.2	4.0	585.4	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3086	G 北	上	H16	硬土中	磁石	6.0	6.8	5.3	389.4	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3087	G 北	上	I18	硬土中	磁石	5.3	5.3	4.4	252.9	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3088	G 北	上	F13	硬土中	磁石	6.3	6.5	6.0	393.7	瓦器製造山形	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3089	G 北	上	F12	硬土中	磁石				84.7	アール	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3090	G 北	上	H16	硬土中	磁石	3.3	5.5	3.2	27.1	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用
3091	G 北	上	H16	硬土中	磁石				467.8	粘板	中古層	久保(東井)	樽形形状	全線3枚用

第86表 石器(18) 磁石

調査番号	出土地域	調査地	出土品名	器種	器種名	火焼層	用途	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	石質	時代	地域	備考	
961	N	内	F18(付録1号F17)	埴土中	磨石	3/4火焼	磨石体	(53)	(47)	67	(156)	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡の南西側	
962	N	内	C22(加藤1号)	埴土中	磨石	焼石	磨石体	8.7	7.1	5.0	441.8	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡の南西側 高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
1000	N	内	G12(土蔵7号)	埴土中	磨石	高麗城跡	磨石?	5.4	5.3	4.9	225.2	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	瓦化のため高麗 城跡	
1041	N	内	G13土蔵1号	埴土中	磨石	高麗城跡	磨石体?	8.2	5.5	4.0	288.1	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	瓦化が激しいため 調査中	
1064	N	内	具土蔵12号	埴土中	磨石	半火	磨石体	(3.1)	8.9	5.6	105.6	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
1136	N	内	M15(庫裏)	埴土中	磨石	元火	磨石体	7.5	6.3	4.3	294.7	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
1137	N	内	M16(庫裏)	埴土中	磨石	元火(1/3 火焼)	磨石体	5.8	5.9	3.1	183.3	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
1139	N	内	M15(庫裏)	埴土中	磨石	元火	磨石体	5.7	6.9	3.5	106.5	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3009	G	E	C23	埴土中	磨石	1/3火焼	磨石体	13.7	1.8	2.8	399.2	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3000	G	E	F27	埴土中	磨石	1/3火焼	磨石体	(16.0)	(7.2)	7.8	(110)	硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3001	G	E	D28	埴土中	磨石	元火	磨石体	11.7	8.9	3.7	896.2	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3002	G	E	G24	埴土中	磨石	元火	磨石体	1.2	6.1	4.1	238.4	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3003	G	E	F29	埴土中	磨石	元火	磨石体	6.5	6.0	4.2	207.7	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3004	G	E	F30	埴土中	磨石	元火	磨石体	7.1	5.6	4.1	274.4	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3005	G	E	F31	埴土中	磨石	元火	磨石体	8.5	7.2	3.9	258.8	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3006	G	W	F1	J	磨石	元火	磨石体	3.5	8.9	3.8	343.8	凝砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3007	G	W	上1	J	磨石	元火	磨石体	11.5	6.8	6.3	894.4	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3008	G	W	上1	L19-Q18・N12	埴土中	磨石	半火	磨石体?	11.0	5.2	6.8	1161.5	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中
3009	G	W	上1	M14	埴土中	磨石	磨石体	10.5	6.2	5.8	1284.4	凝砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3010	G	W	上1	J	磨石	元火	磨石体	11.4	8.3	6.0	161.9	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3011	G	W	上1	F14	埴土中	磨石	磨石体	5.9	1.5	1.3	31.1	磨砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3012	G	W	上1	M14	埴土中	磨石	磨石体	10.1	9.1	5.5	1071.2	凝砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3013	G	W	上1	K7	埴土中	磨石	磨石体	11.2	7.9	5.3	727.8	花崗閃緑岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3014	G	W	中1	F12	埴土中	磨石	半火	磨石体?	12.0	5.5	5.0	1071.8	安山岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中
3015	G	C	南	F16	埴土中	磨石	磨石体	5.6	4.4	3.7	24.1	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3016	G	C	南	F18	埴土中	磨石	磨石体	13.1	9.0	8.1	1421.1	凝灰質硬砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	
3017	G	C	南	M19	埴土中	磨石	磨石体	13.0	9.2	7.2	1296.7	凝砂岩	中世末	久慈(夏井)	高麗城跡から、扉部 若干残っている、 調査中	

調査番号	出土地域	調査地	出土品名	器種	器種名	長さ(m)	幅	厚さ	重量(g)	石質	時代	地域	備考
300	N	内	G11(加藤跡G1)	埴土中(2)	円盤状石製品	3.1	2.1	0.5	8.2	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
306	N	内	F12(加藤跡Q)	埴土上(2)	円盤状石製品	2.3	3.0	0.6	7.8	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
3080	N	内	F15(加藤跡)	埴土中	円盤状石製品	4.2	4.7	0.8	18.8	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
3086	G	E	上	F21	円盤状石製品	7.5	6.5	2.3	238.4	砂岩	中世末	新井(角山)	
3090	G	E	上	C26	円盤状石製品	3.6	5.5	1.3	76.7	砂岩	中世末	新井(角山)	
3090	G	E	中	F27	円盤状石製品	4.5	4.2	0.8	18.8	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
3091	G	E	中	C24	円盤状石製品	7			48.7	砂岩	中世末	新井(角山)	
3092	G	W	上1	J19	円盤状石製品	5.2	4.8	2.2	75.3	砂岩	中世末	新井(角山)	
3093	G	W	上1	J10	円盤状石製品	3.6	3.6	1.3	55.4	砂岩	中世末	新井(角山)	
3094	G	W	上1	J18	円盤状石製品	4.5	4.5	1.3	66.5	砂岩	中世末	新井(角山)	
3095	G	W	上1	M13	円盤状石製品	4.5	4.2	0.8	18.8	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
3096	G	C	南	F18	円盤状石製品	2.7	3.6	1.3	29.2	砂岩	中世末	新井(角山)	
3097	G	W	上1	J9	円盤状石製品	5.6	6.2	1.9	85.0	砂岩	中世末	新井(角山)	
3098	G	W	上1	M13	円盤状石製品	3.5	2.4	1.0	4.0	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	
3099	G	C	南	M19	円盤状石製品	6.2	6.6	1.5	80.8	凝灰質硬砂岩	中世末	新井(角山)	

第87表 石器 (19) 磨石・円盤状石製品

路線番号	区間	経路	沿ヶ地点	駅名	路線	種別	長さ(m)	幅	車高	車数(台)	石質	時代	地域	分類	備 考
811	N	内	石川河原	橋上中	石鐘				617		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
812	N	内	河川沿線下り	橋上中	石鐘			564			凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
869	N	西	石川河原	橋上中	石鐘		37	54	136	464	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線中央部を行き交っている
893	N	内	河川沿線下り	橋上中	石鐘		48	73	13	361	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
909	N	西	C区	橋上中	石鐘				1343		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
909	N	西	石川河原	橋上中	石鐘		37	119	23	3076	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
909	N	内	石川河原	橋上中	石鐘				355		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1024	N	西	河川沿線	橋上中	石鐘		61	93	29	2766	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1033	N	内	河川沿線	橋上中	石鐘		51	67	12	762	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1022	N	内	河川沿線	橋上中	石鐘				853		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1072	N	内	河川沿線	橋上中	石鐘				263		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1999	N	西	石川河原1号	橋上中	石鐘		44	75	15	769	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1982	N	西	石川河原1号	橋上中	石鐘				949		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
2088	N	西	石川河原1号	橋上中	石鐘		51	73	17	1023	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1987	N	西	石川河原1号	橋上中	石鐘		42	67	14	764	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
1095	N	西	石川河原2号	橋上中	石鐘		59	87	21	1920	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
8477	G	E	G区	橋上	石鐘		38	61	18	875	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3478	G	E	C区	橋上	石鐘		63	83	25	1770	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3479	G	E	C区	橋上	石鐘		118	88	21	2289	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3480	G	E	C区	橋上	石鐘		53	73	12	692	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3481	G	E	C区	橋上	石鐘		61	79	20	1383	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3482	G	E	C区	橋上	石鐘		41	29	15	769	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3483	G	E	C区	橋上	石鐘		72	118	32	2033	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3484	G	E	C区	橋上	石鐘		69	70	14	820	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3485	G	E	C区	橋上	石鐘		58	89	19	1351	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3486	G	E	C区	橋上	石鐘		38	33	08	73	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3487	G	E	C区	橋上	石鐘		87	36	24	2813	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3488	G	E	C区	橋上	石鐘		85	89	24	2465	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3489	G	E	C区	橋上	石鐘				1344		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3490	G	E	C区	橋上	石鐘				684		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3491	G	E	C区	橋上	石鐘				750		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3492	G	E	C区	橋上	石鐘				782		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3493	G	E	C区	橋上	石鐘				785		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3494	G	E	C区	橋上	石鐘				743		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3495	G	E	C区	橋上	石鐘				743		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3496	G	E	C区	橋上	石鐘				581		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3497	G	E	C区	橋上	石鐘				424		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3498	G	E	C区	橋上	石鐘				752		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3499	G	E	C区	橋上	石鐘				822		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3500	G	E	C区	橋上	石鐘				359		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3501	G	E	C区	橋上	石鐘				2813		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3502	G	E	C区	橋上	石鐘		51	94	25	2281	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3503	G	E	C区	橋上	石鐘		58	82	14	2163	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3504	G	E	C区	橋上	石鐘				783		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3505	G	E	C区	橋上	石鐘				783		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3506	G	E	C区	橋上	石鐘				823		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3507	G	E	C区	橋上	石鐘		113	42	13	967	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3508	G	E	C区	橋上	石鐘				743		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3509	G	E	C区	橋上	石鐘				1543		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3510	G	E	C区	橋上	石鐘		69	72	23	874	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3511	G	E	C区	橋上	石鐘				49		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3512	G	E	C区	橋上	石鐘		43	46	13	769	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3513	G	E	C区	橋上	石鐘				82		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3514	G	E	C区	橋上	石鐘				37		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3515	G	E	C区	橋上	石鐘		41	54	11	362	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3516	G	E	C区	橋上	石鐘		43	74	17	364	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3517	G	E	C区	橋上	石鐘		88	87	19	366	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3518	G	E	C区	橋上	石鐘				138		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3519	G	E	C区	橋上	石鐘				827		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3520	G	E	C区	橋上	石鐘				1118		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3521	G	E	C区	橋上	石鐘				278		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3522	G	E	C区	橋上	石鐘				682		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3523	G	E	C区	橋上	石鐘				2866		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3524	G	E	C区	橋上	石鐘				1283		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3525	G	E	C区	橋上	石鐘				817		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3526	G	E	C区	橋上	石鐘				618		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3527	G	E	C区	橋上	石鐘				715		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3528	G	E	C区	橋上	石鐘				13		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3529	G	E	C区	橋上	石鐘				619		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3530	G	E	C区	橋上	石鐘				891		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3531	G	E	C区	橋上	石鐘		57	68	17	893	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3532	G	E	C区	橋上	石鐘		53	73	18	848	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3533	G	E	C区	橋上	石鐘				327		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3534	G	E	C区	橋上	石鐘		81	81	18	886	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3535	G	E	C区	橋上	石鐘		43	63	25	1435	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3536	G	E	C区	橋上	石鐘		69	73	26	1910	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3537	G	E	C区	橋上	石鐘				2487		凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている
3538	G	E	C区	橋上	石鐘		63	73	24	1455	凝灰砂	山生形	新浜山系	分譲型	尾崎線の両端中央部を行き交っている

第88表 石巻(20) 石鐘

品名等	出土地	所属	出土地名	種別	品名	h (mm)	幅	厚さ	重量(g)	材質	時代	地域	備考
1660	N	内	C 507付録	環状中	ペンダント	41	57	28	114	磁砂岩	中世序	大野 種市 久藤 (海鳥集)	
1718	GE	上	D20	首上	ペンダント	43	19	62	61	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1760	GE	中	L7B	首上	ペンダント	29	17	6R	5R	磁砂岩	小中世	大野 種市 久藤 (海鳥集)	
1761	GW	F.1	M11	首上	ペンダント	50	31	11	183	流紋岩製磁砂岩付録	新羅三系	二戸	
1762	GW	上	I 4	首上	ペンダント	53	31	12	119	流紋岩製磁砂岩付録	新羅三系	二戸	
1763	GW	F.1	L 4	首上	ペンダント	37	27	6.6	2.6	流紋岩製磁砂岩付録	新羅三系	二戸	
1764	GW	上	K 9	首上	ペンダント	37	33	1.0	103	流紋岩製磁砂岩付録	新羅三系	二戸	
1765	GW	上	F 14	首上	ペンダント	22	15	6.5	1.7	流紋岩製磁砂岩付録	新羅三系	二戸	
1771	GW	F.1	K 9	首上	石製未製品	4.6	23	12	105	輝石	新羅三系序	大野	
1775	GW	上	L10-013・014	首上	石製未製品	3.4	4.0	4.8	267	輝石	新羅三系序	大野	
1776	GW	F.1	K 9	首上	石製未製品	3.1	1.4	0.7	50	輝石	新羅三系序	大野	
1777	GW	F.1	O 11	首上	石製未製品				1.5	輝石	新羅三系序	大野	
1778	GC	内	第17号墳北側	I F	石製未製品	3.3	1.9	0.9	63	輝石製成色	中世序前期(長谷寺遺跡一石共)	新米	

品名等	出土地	所属	出土地名	種別	品名	h (mm)	幅	厚さ	重量(g)	材質	時代	地域	備考	
902	N	内	C 507付録	環状中	石製	身一先端	283	43	1.7	1032	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1100	N	内	B 30土坑	環状中	石製	身一先端	725	56	2.6	1267	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1151	N	内	M10跡	環状中	石製	柄一先端	1843	52	5.3	12042	流紋岩製磁砂岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1620	GE	中	F 23	首上	石刀	身一先端	733	32	6.6	1148	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1628	GE	中	D 27	首上	石刀	身一先端	1663	43	2.9	1163.5	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1690	GE	中	F 21	首上	石刀	身一先端	1240	58	1.1	1195.1	磁砂岩製	中世序	新米(新沢忠高)	
1661	GE	中	F 20	首上	石刀	柄一先端	2743	43	13.3	684.3	キルトンファルス	中世序	新米 大野	
1662	GE	中	F 20	首上	石刀	柄一先端	1533	47	5.8	282.0	キルトンファルス	中世序	新米 大野	
1663	GE	中	C 21	首上	石刀	柄一先端	1339	43	2.5	1263.0	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1661	GE	下	G20-11跡	首上	石製	身一柄	657	29	6.0	324.1	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1662	GE	中	C 20	首上	石製	身一柄	853	18	1.3	327.7	砂質粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1666	GE	中	F 23	首上	石製	身一先端	1820	54	5.7	1166.0	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1667	GE	下	H 10	首上	石製	身一柄	1443	23	5.4	621.7	磁砂岩製	中世序	新米(新沢忠高)	丸籠山系
1696	GE	中	E 22	首上	石刀	身一柄	1449	22	8.1	422.7	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1668	GE	中	E 20	首上	石刀	身一先端	1567	19	6.9	1183	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1670	GE	上	C 10	首上	石製	身一柄	682	28	1.2	106.0	片状磁砂岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1671	GW	上	L 12	首上	石刀	柄一先端	1885	24	1.1	719.0	粘板岩	中世序	新沢忠高	新羅文太(住上付)1 墓の成層が定まる
1672	GW	上	L10-013-014-015	首上	石製	身一先端	1139	52	1.3	321.0	粘板岩	中世序	新沢忠高	
1673	GW	上	K 10	I	石製	身一先端	1730	53	2.6	2291.1	流紋岩製粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1674	GW	上	L 10	首上	石製	柄一先端	2320	25	2.1	1463.7	キルトンファルス	中世序	新米 大野	
1675	GW	上	P 12	首上	石製	身一先端, 柄	1347	54	3.5	1257.7	磁砂岩	中世序	新沢忠高	
1676	GW	F.1	J 10	首上	石製	身一先端	1639	54	1.8	894.0	流紋岩製粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	新羅文太(住上付)1 墓の成層が定まる
1677	GW	F.1	L 9	首上	石刀	柄一先端	1281	53	6.9	608	砂質粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1678	GW	F.1	L 8	首上	石製	身一先端	1169	29	2.5	141.3	磁砂岩	中世序	新沢忠高	2 墓の成層が定まる
1679	GW	上	J 10	首上	石刀	身一先端	733	49	11.3	104.3	砂質粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	
1680	GW	上	N 10	首上	石製	柄一先端, 柄	833	38	11.8	724.2	粘板岩	中世序	新沢忠高	新羅文太(住上付)1 墓の成層が定まる
1681	GW	F.1	M 9	I	石製	柄一先端	1033	41	5.6	724.0	粘板岩	中世序	新沢忠高	新羅文太(住上付)1 墓の成層が定まる
1682	GW	F.1	L 9	I F	石刀	身一先端, 柄	731	32	11.0	110	砂質粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	成層が定まる
1683	GW	F.1	K 10	首上	石刀	身一先端, 柄	645	33.0	12.0	126	粘板岩	中世序	新沢忠高	成層が定まる
1684	GW	上	N 13	I	石刀	身一先端, 柄	621	39	13.0	336	砂質粘板岩	中世序	新米(新沢忠高)	成層が定まる

第89表 石器(21) ペンダント・石製未製品・石刀・石剣

編號	出土層	剖面	出土地点	用途	器種	形制	口径(m)	高	厚さ	重量(g)	材質	時代	地域	備考
3605	G 区	中	F25~F26	裏	石棒	棒状	36.3	6.3	5.0	13427	灰山岩	中生界	磐前-久保	
3606	G 区	上・下	F 15	裏上	石棒	棒状	(21.1)	11.7	9.2	23804	流紋岩	中生界	大野・磐前-久保	鎌倉層位代
3607	G 区	上・下	O14	裏上	石棒	棒状	3.7	1.2	0.8	84	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	1-4-17

編號	出土層	剖面	出土地点	用途	器種	形制	口径(m)	高	厚さ	重量(g)	材質	時代	地域	備考
3603	G 区	下	F25	裏中・下	棒状	棒状	15.3	2.6	4.4	2262	砂岩	中生界		
3604	G 区	中	F25	裏	棒状	棒状				3284	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3605	G 区	中	F25	裏下	棒状	棒状				486	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3608	G 区	上・下	H13	裏上	棒状	棒状	18.7	8.9	2.9	6160	砂岩粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3607	G 区	上・下	H17	裏上	棒状	棒状	11.2	7.7	1.6	2804	流紋岩	中生界	大野・磐前-久保	
3608	G 区	中・下	R15	裏上	棒状	棒状	(20.0)	9.3	1.6	19605	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3609	G 区	中・下	F15	裏	棒状	棒状	6.7	3.0	3.8	3623	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3620	G 区	中・下	F15	裏	棒状	棒状				4121	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3628	G 区	上・下	K11	裏上	二角状石製品	二角状石製品	11.1	5.1	6.3	1883	アルノース岩	中生界	新瓦岳山塊	
3628	G 区	上・下	K18	裏上	二角状石製品	二角状石製品	10.9	2.7	6.8	2718	凝灰岩	中生界	新瓦岳山塊	
3627	G 区	上・下	K18	裏上	二角状石製品	二角状石製品	9.1	2.8	6.2	2623	凝灰岩粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	

編號	出土層	剖面	出土地点	用途	器種	形制	口径(m)	高	厚さ	重量(g)	材質	時代	地域	備考
3610	K 区	内	K11(中村跡人)(土坑)	裏上中	高梨区(ツブ)	高梨区(ツブ)	8.0	8.3	3.2	3625	硬砂岩	中生界	大野・磐前-久保 (高梨区)	
3198	K 区	内	L11(中村4号)	裏上中	刺線礫	刺線礫				328	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3111	K 区	内	M11(東1号)	裏上中	刺線礫	刺線礫				2004	灰山岩	中生界	新瓦岳山塊 2号	
3199	N 区	内	L7(中村6号)	裏上中	大形石片	大形石片	14.2	8.2	1.3	1962	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3651	G 区	中	F25	裏	石片	石片	6.4	4.4	3.6	1314	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3652	G 区	上	裏上	裏	石片	石片	2.8	2.9	2.5	133	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3653	G 区	上	裏上	裏上	石片	石片	2.7	2.1	1.5	183	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3651	G 区	上・下	O12	裏上	石片	石片	5.8	8.5	1.4	681	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3760	G 区	中	B7b	裏上	有孔石製品	有孔石製品	15.1	4.3	3.7	2153	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3761	G 区	下	G29	I 下	有孔石製品	有孔石製品	7.9	1.7	2.6	693	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3762	G 区	上	D21	裏上	有孔石製品	有孔石製品	7.2	4.8	1.3	736	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	鎌倉層位代
3762	G 区	中	E2a	裏上	有孔石製品	有孔石製品	8.7	5.6	1.8	861	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3764	G 区	中	E2a	裏中～下	有孔石製品	有孔石製品				1180	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3766	G 区	中	E2a	裏	刺線礫	刺線礫				419	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3767	G 区	上・下	O15	裏上	刺線礫	刺線礫	10.9	4.1	9.5	416	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3768	G 区	上・下	B14(北ノ口)	裏上	刺線礫	刺線礫	2.9	6.4	1.2	111	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3769	G 区	上・下	B14(北ノ口)	裏上	刺線礫	刺線礫				202	砂岩	中生界	新瓦岳山塊	
3770	G 区	上・下	F7	I 中	刺線礫	刺線礫				119	灰山岩	中生界	新瓦岳山塊	
3771	G 区	上・下	I 8	裏上	刺線礫	刺線礫				567	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3772	G 区	上・下	C 6	I 上	刺線礫	刺線礫				3913	粘板岩	中生界	新瓦岳山塊	
3773	G 区	上・下	O12	裏上	アノツバ状石製品	アノツバ状石製品	8.5	(2.6)	6.0	3.8				

第90表 石器 (22) 石棒・礫器・三角状石製品・刺線礫・岩偶・有孔石製品

編年番号	出土環境	時期	出土地名	出土	器名	文様部位	h(Pcm)	径	厚さ	重量(g)	状態	備考
1948	N	内	E110地層跡1号	層上中	有孔磨石	底部	(17)	21	0.8	(37)	四角形状	
1949	N	内	E110地層跡1号	層上中	有孔磨石	底部	(17)	40	1.3	31	方形柱	より磨石に磨けられていて、破損
1950	N	内	C10層	層上中	磨石	底部	66	37	2.2	117	磨石形状	
1109	N	内	M11土坑	層上中	有孔磨石	右側縁	(5.0)	(5.0)	1.0	(11)	方形柱	破損
1120	N	内	E110地層跡1号	層上中	有孔磨石	溝底と下縁	(4.7)	(3.7)	1.4	(8.0)	溝内形状	溝の中に孔が欠けられたようである、破損
1129	N	内	E110地層跡1号	層上中	有孔磨石	底部	(5.0)	42	2.7	(17)	溝内形状	破損で表面が欠けたと認められる
1203	G	上	赤土トレンチ	層上	有孔磨石	底部	2.6	7.9	1.9	6.1	正方形	正方形
1204	G	中	F25	層中	磨石	下縁	(5.0)	38	1.7	(4.0)	磨石形状	破損
1207	G	下	F26	層下	有孔磨石	下縁	3.7	8.7	0.9	2.3	長方形板	溝い形状
1208	G	中	E24	層上	有孔磨石	底部	7.4	6.3	1.9	20.1	方形	中央部がぼんぼんしている、破損
1209	G	中	F25	層上	有孔磨石	底部	8.0	42	1.1	7.0	溝内形状	破損
1210	G	中	F26	層中	有孔磨石	底部	9.4	3.5	1.0	14.8	方形	破損
1211	G	下	F25	層上	有孔磨石	底部	(5.7)	5.3	1.2	(6.0)	磨石形状	破損
1212	G	中	F24	層中	磨石	下縁	(6.2)	5.6	1.8	(11.0)	溝内形状	すみがあり隅が欠けてきている
1213	G	中	F27	層上	磨石	下縁	(3.5)	4.4	1.3	(2.0)	溝内形状	溝い形状
1214	G	中	D10	層下	有孔磨石	底部	(2.0)	7.7	4.2	(7.0)	かまぼこ状	平円状
1215	G	中	E24	層中	磨石	右側縁	(5.1)	(3.7)	1.8	(14.4)	溝内形状	表面がぼんぼんしている
1216	G	中	C20～D10	層中	磨石	底部	4.2	2.7	1.0	4.8	磨石形状	丸型か?
1217	G	中	C24	層下	磨石	底部	(3.0)	5.0	1.8	(6.0)	磨石形状	
1218	G	上	D10～F20	層上	磨石	下縁	(7.0)	5.7	2.4	(21.0)	溝内形状	
1219	G	中	E24	層中	有孔磨石	底部	6.5	5.8	2.1	11.8	磨石形状	溝のある破損、表面がぼんぼんしている
1220	G	中	F25	層上	有孔磨石	底部	8.0	4.0	2.0	20.0	かまぼこ状	平円状
1221	G	下	F20～F25	層上	磨石	底部	7.4	5.4	2.0	23.0	磨石形状	表面がぼんぼんしている
1222	G	中	F24	層中	有孔磨石	下縁	(1.0)	5.8	5.9	(63.0)	磨石形状	溝みのある破損
1223	G	中	F25	層中	磨石	中央部	7.9	3.8	1.4	8.4	溝内形状	破損、表面がぼんぼんしている
1224	G	中	C20～D10	層(3)中	有孔磨石	下縁	(4.2)	3.6	0.9	(3.7)	溝内形状	破損
1225	G	中	D24	層下	有孔磨石	底部	8.2	7.5	2.9	31.4	二角形状	溝みのある破損、下縁中央部に切り込みがあり、上縁のように見える
1226	G	中	C24	層中	磨石	中央	(8.7)	7.9	2.3	(20.4)	溝内形状	破損、表面がぼんぼんしている
1227	G	中	G25	層上	有孔磨石	右側縁と右側縁	6.3	2.9	1.1	9.3	磨石形状	破損
1228	G	中	F25	層(3)中	磨石	下縁	(4.2)	3.8	2.0	(7.0)	溝内形状	表面がぼんぼんしている
1229	G	中	C20	層中	磨石	下縁	(5.0)	4.7	1.9	(3.0)	溝内形状	表面がぼんぼんしている
1230	G	上	E24	層中	有孔磨石	底部、下縁	(7.0)	6.4	3.1	(28.0)	溝内形状	破損で表面が欠けたと認められる
1231	G	下	G20	層中	有孔磨石	下縁	(9.2)	4.8	1.7	(26.0)	溝内形状	丸が縁まで広がってない、右側に磨石形状
1232	G	中	C20	層下	有孔磨石	底部	6.3	1.2	2.3	29.6	平円状	溝みのある破損
1233	G	中	E25	層上	磨石	底部	(3.0)	2.4	1.4			
1234	G	中	E25	層上	磨石	底部	6.2	7.2	2.9	30.5	方形柱	破損、表面がぼんぼんしている
1235	G	中	E25	層下	磨石	下縁	7.0	5.9	2.3	24.9	一角形状	溝の磨石で、残り残っている
1236	G	中	C21	層下	有孔磨石	右側縁	4.9	(3.1)	0.7	(1.0)	溝内形状	溝い形状
1237	G	中	C24	層下	有孔磨石	右側縁と右側縁	(5.2)	(3.7)	1.4	(4.0)	溝内形状	製作中に壊れたものと認められる
1238	G	中	E24	層中	有孔磨石	底部	(8.0)	4.7	1.8	(5.1)	溝内形状	すみが磨石まで広がってない、右側に磨石形状
1239	G	中	C24	層上	磨石	下縁	(5.0)	6.0	2.1	(13.0)	磨石形状	溝みのある破損
1240	G	中	E25	層上	磨石	下縁	8.3	5.8	1.8	11.8	長方形板	表面がぼんぼんしている
1241	G	中	C21	層下	磨石	下縁	(5.5)	5.9	2.0	(3.0)	溝内形状	表面がぼんぼんしている
1242	G	中	E24	層中	磨石	下縁	(4.2)	5.7	1.1	(11.4)	一角形状	表面がぼんぼんしている
1243	G	中	F25	層上	磨石	底部	5.9	4.3	2.7	8.3		
1244	G	中	K10	層上	有孔磨石	右側縁	4.3	2.8	1.1	4.4	方形柱	製作中に壊れたものと認められる、破損
1245	G	上	E11	層上	有孔磨石	下縁	(4.7)	5.0	2.1	(7.0)	溝内形状	溝みのある破損
1246	G	中	E11	層上	有孔磨石	底部	4.9	3.6	1.7	11.2	溝内形状	溝内形状に孔を磨けたもの
1247	G	中	F22	層上	有孔磨石	底部	7.9	6.8	1.9	23.0	三角形状	すみのある破損、表面がぼんぼんしている
1248	G	上	J10	層上	有孔磨石	中央部	(4.0)	(3.0)	1.9	(7.0)	正方形	破損
1249	G	中	F11	K10	層上	有孔磨石	(9.0)	3.8	2.9	(26.0)	一角形状	一角形状
1250	G	上	F13	層上	有孔磨石	中央部	(5.5)	(5.2)	1.8	(3.0)	長方形板	破損
1251	G	中	F11	F7	層中	有孔磨石	7.2	5.2	2.2	18.8	五角形状	五角形状
1252	G	上	N11	層中	有孔磨石	下縁	(4.0)	4.4	1.7	(3.1)	溝内形状	溝みのある破損
1253	G	中	F11	J10	層上	磨石	(3.0)	4.3	1.3	(3.2)	磨石形状	溝い形状
1254	G	上	F7	層上	磨石	下縁	(6.0)	4.3	2.0	(22.0)	溝内形状	片側がぼんぼんしている
1255	G	中	E11	J10	層上	磨石	(8.1)	(6.0)	2.7	(28.2)	溝内形状	片側がぼんぼんしている
1256	G	中	Q11	層上	磨石	下縁	(4.0)	4.7	1.2	(4.4)	溝内形状	表面がぼんぼん、表面が凹みがある
1257	G	中	F11	P13	層上	磨石	(5.0)	(5.0)	1.6	(10.0)	磨石形状	表面がぼんぼん、表面が凹みがある
1258	G	C	C20～F20	層上	磨石	底部	8.4	9.4	3.0	72.2	方形柱	破損、表面がぼんぼんしている

第91表 石器 (23) 磨石製品

報告書抄録

ふりがな	ながくらいらいせきほくつちょうきほうこくしょ							
書名	長倉 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	広域農道整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第336集							
編著者名	星 雅之、中川 重紀							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001・9002							
発行年月日	西暦2000年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながくらいらいせき 長倉 I 遺跡	いたてせきくわへん 岩手県九戸郡 軽米町大字 ながくらいらいせき 長倉字一本木 10-1	03501	IF 63- 2309	40° 21' 28"	141° 29' 33"	19940701~ 19941110 19950411~ 19950831 19960416~ 19961108	1000㎡ 1004㎡ 1342㎡	広域農道整備に伴う緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
長倉 I 遺跡	集落	縄文時代	住居跡・住居跡状 掘立柱建物跡 炉跡 焼土 土坑 柱穴状土坑 柱穴列 集石 立石 溝状遺構 占地炭跡 捨て場 2カ所	30棟 15棟 4基 6基 452基 436基 1条 1基 1基 1基 1基 1カ所	縄文時代早・前・後 晩期土器 550箱 (後期初頭~晩期前 葉主体) 弥生土器 土製品 2324点(十 偶、イモ貝、飾り玉 など) 石器・石製品 5330 点	・後~晩期の大規模 な捨て場が2カ所 ・晩期人形住居跡 ・晩期掘立柱建物跡 群		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤基				
副所長	伊藤直司				
(管理課)					
課長	川浪清徳		嘱託	藤島志子	
主任査事	立花多加		"	新田トヨ	
	日影夫		"	佐々木光重	
(調査第一課)			(調査第二課)		
課長	小田野哲憲		課長	高橋與右衛門	
課長補佐	佐々木清文		課長補佐	中川重紀	
主任文化財専門調査員	酒井宗孝		主任文化財専門調査員	高橋義介	
"	小山内透		文化財専門調査員	古館貞身	
文化財専門調査員	中田迪		"	阿部眞澄	
"	吉田充勉		"	小尾原芳真	
"	小笠原健一郎		"	小工藤一徹	
"	鳥居達人		"	前田知子	
"	濱田宏悦		"	金子岩板	
"	佐々木進由紀夫		"	早佐々木	
"	安藤俊子		"	晴山雅	
"	戸口正之		"	星々木	
"	小野部正彦		"	杉沢昭太郎	
"	阿部柴直人		"	溜北村昭彦	
"	高木一男		"	金子木	
"	佐藤洋靖		期 限 付 員	鈴木	
"	菅原武雄		"	平布山	
"	朝倉貴		"	澤谷口	
"	菊池上		"	熊谷田	
"	村本直		"	古原	
"	丸山美治		"	吉	
期 限 付 員	佐藤子				
"	平めぐみ				
"	北田勲				
"	江藤敦				
"	小原弘卓				
"	小原幸				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集

長倉 I 遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

第 1 分冊

印刷 平成12年 3 月 3 日

発行 平成12年 3 月10日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020-0066 盛岡市上田一丁目 6-49

TEL (019) 653-4151

